

リボン・オブ・ザ・デプス

アザトリデ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

”あんたのような人間達はどんなに忠告されようと、そうする他なかった”

”蛾のように集まり、そして炎に包まれる。何度も、何度も”

”だがこの地は既に滅び、英雄やドラゴンは居なければ、伝説も生まれない”  
やがて彼女は窓の外、遙か遠くに聳える尖塔を眺める。

”もしもそれを確かめたいのなら、王城の玉座を目指せ”

或いは、青ざめた血を探し求め、その不死は彷徨うだろう。

今や王は不要であり、怪異ばかりが溢れる地で

尽きぬ呪いと、新たなる時代の兆しに見える。

# 目次

第1章	壁外	1		1
第1章	壁外	2		9
第1章	壁外	3		16
第2章	中央広場	1		25
第3章	周壁内部	1		34
第3章	周壁内部	2		40
第3章	周壁内部	3		46
第3章	周壁内部	4		52
第4章	溝の溜まり池	1		60
第4章	溝の溜まり池	2		66
第4章	溝の溜まり池	3		71
第4章	溝の溜まり池	4		77

第4章	溝の溜まり池	5		83
第5章	アリーナ	1		89
第5章	アリーナ	2		96
第5章	アリーナ	3		103
第5章	アリーナ	4		110
第5章	アリーナ	5		116
第5章	アリーナ	6		124
第5章	アリーナ	7		130
第6章	貴族街	1		136
第6章	貴族街	2		143
第6章	貴族街	3		150
第6章	貴族街	4		157
第6章	貴族街	5		164

第7章	第7章	第7章	第7章	第7章	第7章	第7章	第7章	第6章	第6章	第6章	第6章	第6章
王城	王城	王城	王城	王城	王城	王城	王城	貴族街	貴族街	貴族街	貴族街	貴族街
8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6
254	247	240	232	225	218	211	204	199	191	185	178	171

第10章	第10章	第10章	第9章	第9章	第9章	第9章	第9章	第9章	第9章	第9章	第8章	第7章
3	2	1	8	7	6	5	4	3	2	1	1	王城
335	328	321	315	308	302	294	289	284	278	272	263	260

第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章	第 1 0 章
4	3	2	1	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4
423	416	409	404	398	391	384	377	369	362	356	349	342

第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章	第 1 1 章
6	5	4	3	2	1	1 1	1 0	9	8	7	6	5
510	503	496	488	482	475	471	464	457	450	443	436	430

第 1 4 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 3 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章	第 1 2 章
1	7	6	5	4	3	2	1	1 1	1 0	9	8	7
597	592	585	578	571	565	557	550	546	539	532	524	517

第 1 6 章	第 1 6 章	第 1 6 章	第 1 6 章	第 1 6 章	第 1 6 章	第 1 5 章	第 1 5 章	第 1 5 章	第 1 5 章	第 1 5 章	第 1 5 章	第 1 5 章
6	5	4	3	2	1	7	6	5	4	3	2	1
679	673	666	660	655	648	643	636	630	623	615	608	601

第 1 章  
第 1 章  
第 1 章

3 2 1



697 691 684





# 第1章 壁外 1

霧に濡れた身体で歩いていく。

薄暗く、悄然として葉の垂れ下った木々ばかりの森を行くのは、どこからかやってきた不死人であった。既に途方も無い旅をしており、だが目指した地はこの森を抜けた先にあると知っている。

その土地の名はリングレイ。亡者達で溢れ、滅び、それきりになった場所。

踏む度に悉く粘着質の音を出す枯葉は、下に潤沢な泥濘を隠しており、油断すれば足を揃めるか、滑らせるかのどちらかであったため、頭は自然と俯きがちになる。故に森の中に素朴な佇まいの小屋が現れたことに気付いたのは、そこにまでかなり近付いてからのことであつた。

不死人はこれまでの旅で常にそうしてきたように、屋内に何か使えるものは無いか物色をしようと、正面の扉を開くべくそこへ近付いていく。

「うがあつー！」

瞬きの間の出来事であつた。こちら側から開こうとした扉はそうなる直前に向こうから強引に開け放たれ、咆哮と共に現れた騎士が剣を振りかぶる。唐突な出来事に対応

が遅れるばかりか尻餅を着き、最早どうにもならなくなったことを悟ると同時、衝撃を覚悟して目を固く閉じる。

頭蓋を割られるか、肩口から胴を両断されるか。

だが斬撃は一向に訪れず、両者の間でしばらく降りた沈黙の中、どこか森の奥で小鳥がか細く鳴き声を上げる。

「ガ、ガハハハハハハ、すまない。手違いだったようだ」

その男性、丸みを帯びた甲冑を着込んだ騎士は、倒れ込んだままの不死人に手を差し伸べ、そして恥ずかしげに笑い声を上げていた。手を取り合い、不死人を助け起こしたあと騎士は小屋の中に戻り、不死人もまたその後ろに続いて小屋の扉を潜る。

「ああ、丁度食事を用意していたのだ。多めに作って正解だったな。いや、味には期待しないでくれ」

騎士は丸い椅子に腰掛け、目の前の鍋からスープを掬って器に入れる動作を二度行い、そのの片方を適当な場所に座り込んだ不死人に手渡す。

「ところで貴公は、やはり、なんというか。この地を目指し、外からやってきたのだな？ うむ、そうか。どこからやってきたか、覚えているか？ うむ、まあこのような時代ではそれも仕方あるまい。さて、勿体付けずに喋るとしよう」

騎士は食べ終えたスープの器を置き、窓の外を見やる。

「私もあの地へ入り、それなりに調べてきたよ。だが、何も無かった。私の求めるものは何も。引き返せ、とまでは言わないが、期待のし過ぎは良くないだろう」

不死人の方へ向き直り、その全身を騎士は隈なく眺める。

「武器はあるのだな？ その腰に下げているものは使えるのだろうか？」

不死人は自分の腰に下がっていた剣を鞘から抜き、騎士に見せる。ブロードソードは刃がやや厚め、そして広めの直剣であり、突く様な真似は不得意であるものの、力を込めて斬り付けるような攻撃であれば頼りになる一品である。

「ふむ、得物はそれで良いだろう。これは持っているか？」

騎士が腰の袋から取り出して見せたのは、いくつもの灰かに発光する石であった。

「知らんのか？ これは隼石と言い、中に身体の傷を癒す力を蓄えているのだ。使い方は自分の胸元で砕くだけでいい。持っていないのなら別けよう」

不死人は貰った隼石を自分の懐に仕舞い、それが終わると騎士は立ち上がり、小屋の外へと歩いていく。

「私はもう行く。貴公の旅の幸運を祈る」

森へと消えて行く騎士を見送った後、不死人もまた立ち上がる。そして小屋の外へと出ると、騎士が去って行った向きとは逆の方角に身体を向け、足を踏み出した。

霧の湿気と、曇り空と、影落す枝葉が陰鬱な森を作り、だがしばらく歩くと徐々に森

は開け、空もまた雲の切れ間が見え始めた。そこから更に歩いて海の見渡せる丘にまで上ると、ついに霧と森は終わり、不死人はそこで一度立ち止まる。

霧の残り香を漂わせる、湿った冷たい空気の中に優しい光りが注ぐ。そこから覗く青空もまた美しく、深々とした青さはどこまでも透き通り、空の限りの無さを想わせ、そしてその中を通ってきた橙の光は、浮ぶ雲に黄金の縁取りを与えていた。

もしもあの空の中を泳ぎ、或いは溶け込めたのなら、どれほど気持ちの良いことか。不死の身では決して叶わぬ願いが胸に寂寞を喚び、だがそうして心動かされることが未だ人らしさを残す証でもあった。

美しい景色をしばらく眺めたあと、不死人は暗い森を背に、丘を降り、海岸とその傍にある城下街を目指して歩く。

リングレイという地は高い周壁と、その後ろに広がる海と、周囲の険しい森によって守られており、容易には攻め落とせない場所であると窺い知れる。もしもそうするため軍勢が集結したなら、攻撃前に彼らが息をつける場所は、不死人が今居るこの広大な農村地帯くらいのものでらう。

背の高い黄金の草が遠く茂る、長閑であるようにも見える農村の風景。だがそれはあくまでそこかしこに居る亡者達にとっての平穏であり、正気を残す者にとってはそうではない。

不死人は道の左右に広がる草の影に隠れ、亡者達の目から逃れながら直進し続ける  
と、やがて道の横に篝火を見付ける。

その篝火には先客らしき者の姿があった。痩せた甲冑を着たその騎士の兜はフェイ  
スガードが開いたままになっており、そこから線の細い横顔を覗かせている。

その顔が不死人の方へ向く。一目見て亡者ではないと理解したのか、痩せた甲冑の騎  
士は不死人を見付けると軽く頭を下げ、会釈を試みさせた。

「こんにちは、あなたも旅の方ですか」

細い、というよりも女性そのものの声であった。女性騎士は爽やかな笑みを見せ、一  
先ず敵意が無い事を示している。それを見た不死人は篝火の前に腰を降ろし、身体を休  
めることにした。

「私も遠くからこの地へとやってきました。ですがどうしても、周壁を越える方法が  
見付からず、ここで立ち往生してしまっています。ここまで来るだけでそれなりに大変  
だったのですが」

女性の細い身体で剣を振ったとして、いくら亡者でも容易く倒せないことは明らかで  
ある。女性騎士がこれまで辿ってきた道のりが如何に険しいものであったか。

「それに、出入り口を探そうと周壁に近付くと、上から降ってくるんです。とても大き  
な矢が」

この篝火は既に周壁に近い。即ち女性騎士がこの場所に留まっているのであれば、遠からず実際にその矢が降る所を見ることになるのだろう。

話しの折りも良く、不死人は十分に身体を休めたため、腰を上げて周壁に向かって歩き出す。

「行くのですね。貴方に炎の導きのあらんことを」

歩きながら片腕を上げ、その身振りのみで背後の女性騎士に応えた。

篝火から少し歩くと、いよいよ周壁は眼前に高く聳え立ち、白い威容を見せ付ける。その位置から観察する限りでは、入り口らしきものは正面の門一つしか存在せず、しかしそれは巨大であり、人力で動かせる類のものではない。勿論レバーなどの開閉装置が付近に在る様子も見受けられず、周壁の向こうへ入るにはどこか別の出入り口を探さなければならなかった。

どうしたものかとそこで立ち尽くしていると、近くで不揃いに高く伸びた黄金の草が揺れ動く。直後、草の側から道に転がり出てきた人影は、しかし何かする前にその首根を不死人は左手で掴み上げ、右手のブロードソードで斬り落とす。

亡者。彼等もまた不死であり、そして永く不死であり続けてしまった為に心を失い、人を襲う者達である。動きは緩慢な者が多く、だが臂力は人よりも優れている場合もあり、また剣技などを揮う事もある為、油断ならない相手である。

首から流れる血は黒ずんでほぼ枯れており、そして断末魔を上げることも無い。だがその亡者が首を斬り落とされたことで何かを感じ取ったのか、野草の奥から他の亡者達が三匹。順に這い出て自らの敵を見やる。

おそらく元は農民達であったのだろう。痩せて干乾びた身体の彼らはそれぞれが鉞や鎌、長い鋤などを手にこちらに近寄ろうとしているが、幸いにも彼等の挙動はまるで芯が無く、弱々しいものであった。

三匹のうち、先頭で近寄ってきた亡者が振り下ろした鉞を不死人は右に回避し、それと同時にブロードソードで敵の脇腹を両断、間髪入れずに鋭く横から突き出された別の亡者の鋤の一撃を、直撃の寸前で身を翻して躲すと、攻撃が空振りになったため隙を晒したその亡者に踏み込みつつ、上に掲げたブロードソードを振り下ろして斬り伏せる。

ほんの数手のやり取りで三匹中二匹を斃し、次の相手に向き直るが、そのタイミングに襲い掛かって来る筈の残り一匹の亡者は居ない。その姿を探し、もう少し遠くまで視線を巡らせると、どうやら最後の亡者は不死人に手向かおうとせず、走ってどこかへ逃げ出していくようであった。

いくら理性が失われつつあるとは言え、形勢があまりに明確であったために亡者はそのような選択をしたのだろう。敵が知る由もない事ではあるが、不死人は弓や魔法を使うことが出来ないため、逃げる背に追撃を行う術は無く、その点で言えば亡者の逃走は

正解であつたのかもしれない。ただ、逃げる方向さえ間違えていなければ。



## 第1章 壁外 2

轟音が鳴って地が揺れ、どこかで起こった強い衝撃が空気を通して身体に伝わり、砂塵が舞い上がることで視界が塞がれる。やがて通り抜ける柔らかな風が空中の砂を連れ去ると、そこに亡者の姿はあった。

周壁の方角へと逃走した亡者は、どこかから降って来た大きな矢によって射抜かれ、串刺しの刑に遭って果てていた。

痩せた甲冑を着た女性騎士が話していた、周壁から降る矢とはまさにこれのことだろう。今的一幕を見るに狙いは正確であり、また威力が高い。

不用意に周壁に近付こうものなら串刺しになった亡者の二の舞になるが、この場所を突破するにあたり周壁からの視線の妨げとなるような遮蔽物は付近に無く、隠れる場所は道の左右に広がる野草くらしいものだが、これとて上から見下ろせば草が動く様子は一目瞭然だろう。

つまりこの場合、考えることは全く無駄であり、肝要なのは振り返らない勇氣である。不死人はまずゆるゆると助走をつけ、次第に加速し、そして今ある体力の全てを注ぎ込んで一直線に周壁へ走る。

串刺しの亡者の横を駆け抜け、すると唐突に風切り音が鳴り、その直後不死人の後方で衝撃のみによって地面が軽く爆発する。

万が一にも当たればどうなるか。想像せずにはいられないが、しかしそれは今の段になって考えるべきことではなく、不死人は尚も周壁へ向かって走り続ける。

だが警戒していた二の矢は中々訪れず、走り出した場所から周壁との中間地点程に及んでからようやく再び風切り音が鳴り、駆ける不死人の背後で地面が抉れて吹き飛ぶ。

その後も走り続けた不死人は最終的に無傷のまま周壁の元にまで辿り着き、そしてそれ以降上から矢が降ってくることは無かった。角度の問題で周壁の真下に矢を放つことは出来ないのだろう。

近付いた所で、不死人は改めて周壁を眺める。この高い壁の根の部分には堀が巡らされており、通常この場所が人に管理されているのであれば水で満たされ、より敵の侵入を困難にするのだろうが、今は既に人の手を離れて久しいのか、堀は完全に乾き、底は空になっていた。

不死人はこの枯れた堀に沿って左に歩き、特に当ても無く探索をしていくと、木製の粗野な作りの梯子が架かっているのを見付ける。これは堀の底へ向かって伸びているものであり、不死人は軋むそれに足をかけると、ゆっくりと降りて堀の底に足を踏み入れる。

堀は大ききの均一でない岩が敷き詰められることよつて形を成しており、そして当然何の道標も無いが、歩きださなければ何も始まらない。ひとまず、不死人は堀を降りてから右に向かつて歩き出す。

時折風が通り抜け、それが岩の隙間から生えた雑草を揺らし、また狭い場所だからか、足音が少し響く。そのまま不死人はずっと歩き続け、しかし堀の先の岩の一部が崩れ落ち、それ以上進むことが出来なくなつていた。

止むを得ず踵を返し、だがそれを待つていたかのように長軀の影が堀の中へと舞い込み、不死人の行く手を阻む。

「うゝつ、うおあゝっ！ ああゝっ！」

その呻き声の主もまた農民の亡者であつたが、先に遭遇したものよりも遥かに背が高く、手にした鍬も巨大であつた。そもそもその亡者が飛び降りてきた場所は高く、尋常な人間であれば、あの高低差を着地してはこの敵のように平然とはしていられないだらう。

「ぶあゝっ！」

逃げ道を塞がれた状態で叫びと共に巨大な鍬の一撃は下され、だが到底受け止める気にはならず、不死人はそれを後ろに下がつて躲し、その回避行動自体は問題なく成功したものの、直後、背に崩れた岩が着いていた。

横方向への回避が難しい細い空間で、袋小路を背にしては次に来る亡者の攻撃を凌ぐ術は無い。であれば不死人は大柄の農民亡者が次の一撃を繰り出す前に、駆け出して彼の距離を一息で詰め、脇をすり抜けながら両手で握ったブロードソードで浅く斬り付ける。

そのまま敵の背へ回り込み、まだ脇を攻撃された際の衝撃が抜け切らない内に亡者の背を押し込むようにして蹴ると、大柄の農民亡者の体勢はさらに崩れ、その隙に不死人は敵の背を剣で大きく斬り付ける。

しかし亡者はまだ倒れず、反撃として振り向き様に横薙ぎに敵の一撃が放たれるが、だがそこはやはり理性を失った者だったか、狭い所で横に得物を振るえはどうなるかまでは考えられなかったらしい。巨大な鍬は対敵を打つ前に岩の肌に強く弾かれ、それを見た不死人はすぐさま半端な姿勢を晒した大柄の農民亡者との距離を詰め、そして止めを呉れるべくブロードソードで敵の胸を深く斬り裂いた。

大柄の農民亡者は斃れた。不死人はその亡者の所持品を漁ると、懐から硬貨が大量に見付かったため、それを自分の皮袋の中へと仕舞っていく。この亡者が理性を失う前は、とても働き者だったのだろうか。それとも、どこかから盗んだものだったのだろうか。

ともあれ、障害は無くなったため、不死人は来た道を歩いて戻っていく。堀に降りて

来る際に使用した木製の梯子のある場所まで至り、そこを通り過ぎ、尚も直進し、だがまるで堀の中の様子に変化は無い。

しばらく同じような岩肌のみ景色が続き、しかしやがて右側、つまり周壁の側の岩肌の上に向かう梯子と、それが伸びた先にぽっかりと開いた穴が見付かる。

この穴はレンガで整えられたものであり、先程のように岩や壁の崩落によつて出来た物ではない。まさに望んでいた秘密の入り口であり、不死人は梯子を登った末、その穴の中へと入つていった。

穴の中は横幅が広いとは言えず、そして堀と違い、少し湿つているようであつた。だがそれは単なる水気というより、油や腐れのぬめりであり、穴の中を進んでいくと、やはり何かの動物の骨が散乱し、さらに奥からは微かに物音が聞こえていた。

不死人は一度歩みを止め、周囲を見回す。穴の先に異変は無く、天井にも何も居ない。そもそも何かか隠れ潜むような場所が無く、だが変わらず物音は耳に届き続けている。

結局視覚だけでは音の正体を確かめることは叶わず、だがいつまでもその場に留まつてはいられないため、不死人はゆつくり歩みを再開し、穴の奥へ向かつて進んでいく。

すると異変は現れる。先程の場所からは見えなかつた部分の、壁の低い位置に開いた横穴から、人の腰ほどの体高の鼠達が一匹、二、三匹と溢れ出る。言わずもがなそれは通常のものよりも遙かに大きく、数も相まって大きな脅威と言える。

これを前に不死人は、とるものもとりあえず駆け出した。後方ではなく、前に向かって。

現在不死人の後方には穴の出口と梯子があり、もし鼠達の群れに囲まれて後退し、穴から突き落とされれば落下によって大きく負傷する可能性が高い。一方で鼠達が出現している横穴は一匹分の大きさしかなく、今はまだ数が出揃っていないと見える。然るに、一匹ずつ横穴から出現している直後の無防備な瞬間を襲う他、不死人の側の攻撃の機は無い。

牙を剥いて飛び掛る最初の鼠をブロードソードで打ち落とし、足に噛みつこうとする二匹目の鼠を蹴り飛ばし、そこから更に強引に踏み込んで穴から出てきたばかりの三匹目と四匹目を纏めて切り裂こうとブロードソードを地面に沿って走らせ、二匹分の死体が増えた後に五匹目が穴から頭を出した瞬間下から上へ剣を切り上げてそれを斃し、直後蹴られた事で吹き飛ばされた場所から戻ってきた二匹目の鼠を返す剣で斬り伏せ、息つく暇も無く新たに出現した六匹目の鼠を斬り裂き、その際剣の先が地面に擦れ、暗がりには火花が散る。

それが最後であった。合計六匹の化け物のような鼠を斃しきり、通路に響いていた音が完全に絶えると、不死人は荒げた息を整えていく。

敵のいなくなったレンガ造りの穴を更に奥へ行くべく再び歩き出し、間も無く不死人

は真上に向かつて伸びる鉄製の梯子を発見する。梯子の出口から覗くのは空であり、そこを登りきった不死人は日のよく当たる屋外へと出る。

その場所は念願の、周壁の内側であつた。

梯子を登つた場所から周囲を観察すると、すぐ後ろには周壁正面の巨大な門があり、さらにその横には人が一人通れる程度の大きさの赤茶けた鉄格子の扉が一つあつた。これは周壁の内部へと繋がっているように見受けられ、不死人は試しにその扉に触れ、しかし開くような様子は無かつた。

鉄格子の扉に鍵穴のようなものは無く、どうやら向こうから開かないようにしてあるか、それとも固く閉ざしてあるかのどちらかだろう。今すぐどうにか出来る物ではないため、不死人はその扉から離れ、そこから真つ直ぐの方角にある、大きな広場の方へ向かつて石畳の上を歩き出した。





拳の槌が直撃する寸前、不死人は横に飛び出してそれを回避することに成功し、だが何かの衝撃によって脇腹を強く殴打し、よろける。

拳そのものを避けていたとして、しかし巨人の筋力は凄まじく、拳を叩き付けた際石畳が炸裂し、数十もの石塊となって飛ぶことで周囲に襲い掛かり、その一つが不死人を捉えたようだ。

脇腹に負った傷は身体全体の動きに支障が出る程大きいものであり、しかし真つ青な肌の巨人は容赦なく再び両腕を振り上げ、不死人に追い討ちを仕掛けようとしていた。

気力で耐えて姿勢を平静に保ち、不死人は攻撃から逃れるべく敵に背を向けて駆け出すが、直後にすぐ後ろで巨人の拳が落され、その直撃まではないものの、またしても大きな石塊が不死人の背を強く打つ。

背に突き抜ける衝撃を、しかし何とか堪え、一定距離を走り抜けた不死人は懐からいくつも雫石を取り出し、順に碎いて身体の治癒を始める。瀕死同然の身体に徐に活力が戻り始め、同時にこの僅かな時間に不死人は方策を思案する。

相手の攻撃は厄介極まりないものであった。まず飛び散る石塊の数があまりに多いため、攻撃が繰り出されてから石塊を完全に回避するのは現実的ではなく、防ごうにも手にしているのは剣一本のみであり、よしんば盾があったとて敵うかどうかは怪しいものだ。

故にそもそもあの攻撃をさせてはならず、そのように立ち回る必要があった。

不死人は身体の傷がある程度回復したことを確認すると、駆け出して巨人の足元に近づき、さらにその周囲を走り回って相手の背後を取ろうと試みる。

すると狙い通り、真つ青な肌の巨人は自身の周りを走る不死人を捕捉するため旋回に忙しくなり、攻撃のための構えを取れず、しかし急に立ち止まるとこちらを蹴り飛ばすつもりか、勢い良く踵を振り抜く。

それは巨人にしても背後への動作であるが故にやりにくさがあるのか、踵での攻撃は精度に欠いていたため回避は容易であり、だがその際に巻き起こった風圧はやはり凄まじく、直撃した場合の被害は計り知れない。

思わず真つ青な肌の巨人から距離を取り、するとすぐに向き直った巨人は右の拳で不死人の居る辺りを殴りつける。

後ろに飛ぶ事でその直撃だけは避け、しかし多少距離を取ったところで飛び散る石塊からは逃れられず、飛来したその一つが不死人の胸を強打する。

だがそれなりの負傷も、事前に覚悟していたのであれば少なくとも姿勢を崩さずに済むこともある。不死人は石塊に打たれた衝撃を堪え、無理にでも走り出して真つ青な肌の巨人と大きく距離を取る。

踵の蹴りを意識し、中途半端に敵との距離を取ってしまったことが負傷の原因か。威

力があるうが踵の蹴りなら当たる気配は乏しく、なによりその攻撃であれば石畳が粉碎されず、石塊が飛んで来ない。であれば先程のような至近の距離を常に維持し、敵の足元への攻撃を行うべきである。

不死人は雫石で胴の傷を癒すともう一度駆け出し、一旦は真つ青な肌の巨人の脇を通り抜け、以降相手の背後を取るように走り続ける。

「るう」お、うっ！

真つ青な肌の巨人はやはり先程と同じようにこちらを蹴りあげようと何度も足を前後に振り抜き、だがそれは繰り返す内に苛立ちが混ざり、いい加減なものとなり、そしてこちらにもまた目が慣れていくというもの。やがて不死人は振り抜いたばかりの巨人の足に向かって踏み込みつつ、ブロードソードでその腱を斬り付ける。

厚めの刃は敵の肉に深く食い込み、そしてそこに重要な血管があったのか、傷口から夥しい血が吹き零れ、石畳を赤く染める。

すると傷を負った真つ青な肌の巨人は即座、反撃とばかりに不死人の方へもう一度蹴りの一撃を振り抜き、しかしやはりその回避は慣れたもので、むしろそうして蹴りを放った直後に無防備になった足に取り付き、腱を深く切り裂く。

そういつた攻撃を何度か成功させ続けていると、やがて足に力が入らなくなったのか、真つ青な肌の巨人は姿勢を崩し、石畳みの上に転倒する。

だが、もしも仰向けに倒れていたなら、真っ青な肌の巨人は無防備を晒していたかもしれないが、現実の敵はうつ伏せに倒れた直後に足の膝と腕とで四つん這いになり、未だ戦鬪力を有したまま不死人の方を向いていた。

しかし能力を大きく削いだ筈ではある。不死人は相手の背後を取ろうと走り出し、だが横に長く伸びた腕によって危うく掴まれそうになり、行く手を阻まれる。何度か試すものの、その度真っ青な肌の巨人は地面と並行に腕を長く伸ばし、不死人を捕らえようとしていた。

であれば今度は腕の届く範囲外を走って相手の背後を取ろうとし、しかしその場合先程よりも走る距離が長くなってしまい、流石に相手が旋回する方が早く、背後は取りようも無い。

そうして巨人の正面に追い立てられ、だがそれまでのような石畳を砕く拳の攻撃は訪れなかった。

おそらくそれは無意識下での選択なのだろう。真っ青な肌の巨人はその姿勢の関係上、今は自分の顔が地面に至近であり、目の前で石塊が飛べばその被害に己の顔面も晒されることになる。

故にこれまでのように敵の背後や側面を取るような戦い方は出来ないが、反面相手の正面に居ても回避不可能な攻撃に晒され続けることは無くなる。だが単純にこちらが

有利になったという話ではなく、攻撃方法に変化があったと見るべきだろう。

不死人はしばらく様子を眺め、真つ青な肌の巨人が機動力を失い、自分から攻撃してこないことを知ると、試しにこちらから正面に近付いていく。

敵の腕が届く範囲にまで踏み込み、すればその直後、真つ青な肌の巨人は不死人に向かって腕の薙ぎ払いを見舞おうとする。

巨大な右腕で右から左に振りぬかれた攻撃を、不死人は直前に下がることで回避し、そして攻撃した直後の隙に付け込むため、巨人の頭部まで走り、一気に詰め寄る。

「ぎょっぽっ」

不気味な音であった。骨と粘膜という、外部に露出している部位としては人体では考えられない組み合わせの部位が擦れ合つて音を出し、そしてその瞬きの内に巨人の口は上下左右、そして奥から手前へと長く伸び、不死人に喰らいつこうとしていた。

流星にこのような手が相手にあるとまでは考えていなかったものの、事前に何らかの反撃があると踏んでいたため、不死人は音が出た瞬間すぐに飛び退いて喰らいつき攻撃を避けることに成功し、だがその敵の一手で腕の薙ぎ払いの後の隙を埋められ、やがて戻ってきた巨人の右腕は不死人を掴むつもりか、広げた掌をまっすぐこちらに向かつて伸ばす。

この掴み攻撃を右に飛んで避け、直後に不死人は再度真つ青な肌の巨人の正面に近付

き、だがやはり敵の口が長く伸び、標的に喰らいつこうとする。

剥き出しの歯を後ろに飛んで躲し、しかしそうすると先程と全く同じように相手の腕が引き戻ってきてしまうためこちらから攻撃する機が無くなり、つまりこれを繰り返したところで無意味であったため、不死人は一度走って敵との距離を十分に取り、となれば両者すぐには動き出さず、睨み合いの形になる。

如何にしてこちらの攻撃を届かせるか。

この敵とは正面から戦う以外に無く、だが腕の攻撃はともかく伸びる口の喰らいつき攻撃は素早く、あまりに近付き過ぎると避けられない見込みが高いため、このままでは正面からの突破は出来ない。つまり真つ青な肌の巨人の、喰らいつき攻撃を無力化することが重要であった。

不死人は真つ青な肌の巨人の正面に立ち、ゆっくりと歩み寄って相手の攻撃を誘い出そうとし、すると急に振るわれた右腕の薙ぎ払い攻撃を後ろに下がって回避し、すぐさま走り出して巨人の顔に近付いていく。

「ぎゃっぽっ」

不快な音を立て、やはり巨人の口は迂闊に近付いてきた餌に向かつて長く伸び、だがそれもこちらが誘いだしたが故の流れ、不死人は真つ青な肌の巨人の喰らいつき攻撃を一分分だけ下がって避けると、両手で握ったブロードソードを高く掲げ、直後踏み込ん

で唇が無く剥き出しの柔らかな歯茎に向かつて深く斬り込む。

「げおっつー！」

口を折り畳む前であつた巨人が短く鳴き、口内が出血し、そして怯んだのか、そのまま少し後ろへ下がっていく。

その姿に強気になつた訳でも無いが、不死人はすぐにまた巨人を追つて距離を詰め、すると苦し紛れに敵が腕の薙ぎ払い攻撃を繰り出してきたためそれを後ろに回避。間髪入れずに踏み込むとやはり伸縮する口の攻撃がやってきたのでそれも躲し、踏み込んで巨人の歯茎にブロードソードで切り込みを入れる。

また巨人は怯み、だが直後に今度は不死人を掴もうと広げた掌を寄越してきたのでそれを横に躲し、同時に前に出て巨人の顔に近付き口での喰らいつき攻撃を引き出すと、それを避けてから再び歯茎を深く斬りつけ、段々と真つ青な肌の巨人の口内は出血が増えていく。

「ぎっつ、イッッ！」

真つ青な肌の巨人は唐突に歯を食い縛る。何かあるだろうと不死人は身構え、だがそれはやや遅く、真つ青な肌の巨人は今までの攻撃の呼吸を崩し、渾身の力を込めて自身の額で地面を打つと、拳でそうした際の比ではない大量の石塊が周囲に飛び散る。

当然後退はしたものの、石塊は一つ二つと不死人に直撃し、それは大きな負傷となつ

たため態勢を立て直そうと走って後ろに下がるが、しかし真つ青な肌の巨人はこちらに止めを刺す絶好の機会を見送っていた。

直立していたときならいざ知らず、四足で這う今は走る不死人に追い縋る術が無く、また衝動的な行動であったのか、口を折り畳む前に加減せずに顔面を地に打ち付けたため、真つ青な肌の巨人の口は半ばから折れ曲がり、痛みに悶えるような仕草を見せていた。

一方、不死人は真つ青な肌の巨人との距離を維持したまま雫石を取り出し、それを胸元で砕いて治癒を始め、石塊が当たった際の負傷は徐々に元通りとなっていく。

ここに勝敗は決した。

不死人は剣の柄を両手でしっかりと握りながら巨人の元へと駆けていき、向こうから伸びてきた掴みの攻撃を横に避け、直後に今まで訪れていた口による喰らいつき攻撃は無く、そのまま走って敵の顎の真下に滑り込むと、ブロードソードを振り上げ、真つ青な肌の巨人の首を斬り裂いていく。

「びゅっ」

血が喉に詰って出る音を耳に残し、不死人は巨人の首の下を離れると、足と口内と首とで血を失い続けた真つ青な肌の巨人は石畳の上に沈み、そしてそれきり動かなくなつた。



## 第2章 中央広場 1

真つ青な肌の巨人の死体の横を抜け、不死人は広場の奥に篝火を見つけると、そこで身体を休めてから改めて周囲の探索を開始する。

あの巨人の仕業か、周囲の建物は殆どが倒壊し、人が住む事はおろか、雨露を凌ぐことすらままならない有様の家屋ばかりであった。無事に形を残しており、且つ中へ入れそうなものとなると数える程しか無く、それらに視線を巡らせていくと、不死人のすぐ近くにある青い屋根の民家の扉が半ばまで開いているのを見付ける。

何とはなしにその建物へ足を向けると、扉の奥に小さな白い影が翻る。威嚇や警告の類ではないようだが、念のため不死人はなるべく足音を消し、静かに扉の奥へと入っていった。

「おや、おやおや」

妙齢の女性のような声であった。しかしその声の主が居るとすれば、方向的に目の前のテーブルの上で寛ぐ小さな猫なのだろうが、そうと決めつけるには聊か常識の縛りが強い。

「また一人、勘違いした不死が来たようだ」

やはりその猫が声を出しているかのようであった。嘲笑のような言葉と仕草が一致しており、よしんば詐術であったとて、仕掛ける側はそのような印象を抱くように見せかけている。

「もう随分と永い事在るんだらう？　多くの過去を失い、業を失い、目的を失い、そして心を失う。憐れだねえ」

小さな白い猫は横になりながら、尻尾を気紛れに左右に揺らし、喉の奥だけで囁う。「忠告はされなかつたのかい？　いや、関係無いか。あんたみたいな不死は、誰に何を言われようと言われまいと、そうする他無かつたんだらうさ。そして蛾のように集まり、火に包まれる。何度も、何度も」

小さな白い猫は大きく背伸びをし、やはり時折含み笑いを込めつつ話を続ける。

「だがこの地はもう滅びたのさ。ここには何も無い。英雄様も居なければ、ドラゴンだつて居ない。まして伝説なんて生まれつこないんだよ」

彼女はブルーの瞳を一瞬不死人に向け、しかし次には窓の外、広場の遥か遠くに聳える城の尖塔を眺める。

「もしもそれを確かめたいのなら、王城の玉座に向かうといい」

話は終わり、とばかりに、喋り終えたあとの猫は尾を伏せ、寝息を立て始める。

その姿はあまりに余裕に満ちており、仮に不死人が強引に出たところで彼女はそれを

軽々といなすことを思わせた。これ以上は何も聞き出せる様子ではないため、止むを得ず、不死人は扉を出て、他の場所へ移動する。

次の無事な家屋の中では、出入り口に背を向けたまま椅子に座った男性が、その前の机の上で何かを書き綴っているようであった。不死人は扉をノックし、男性の注意を向けてみるも、その人物は振り返ろうとしない。

「ああ、君だろうか？ 入るといい」

男性は背中越しに応える以上の動きは見せず、不死人がその背のすぐ後ろまで歩み寄ってから彼は振り返り、そこで始めて互いの顔を合わせる。

青の生地に黄色い刺繍の入った、明らかに質の良いコートを纏っており、顔つきにも理性の色が濃く、全体的に知性の高さを窺わせる雰囲気があった。

「あの巨人なのかゴレムなのか分からない化け物のせいで難儀していたんだ。君がやつつけてくれて助かったよ」

つまりこの男性は、先程の戦いを見ていたということらしい。しかし、折角彼は少なくとも表面上は友好的な対応をしているのだ、何故加勢しなかったのか、などと問い詰めるような真似はするべきではない。

「私の名前は、コネリー。魔術師だ。君は、いや君も、王城を目指しているのか。君に  
なら協力しよう。そう、魔術を教えよう。この地では出来るだけ魔術を習得する事を勧

めたい」

彼はそこで一度黙り、思案するような、言葉を選ぶような様子を見せてから再び口を開く。

「この地は、なんというか、変なんだ。魔術の扱いが軽々しいというか。いや、敬意がどののという話ではなく、魔術の道具や知識は手に入れるのが難しいと私は思うのだが、この地では扱える連中が多くいるようだし、それに魔法の技術の頂点が見えてこないんだ」

眉根を寄せていたのはだがそこまでで、コネリーは顔を上げると、何故か笑顔を不死人に向ける。

「だからきつと、珍しい魔術書もある。出来れば君にそれを持ってきて欲しい。勿論、内容は教える」

笑顔に合点はいったものの、リスクを冒すのがこちらだけ、という点において納得し難い部分があり、しかしどちらにせよこの先へ進んで行くならこのついでというもの。不死人は彼の言葉に頷いてみせた。

「よろしく。では早速、何か魔法を覚えていくかい？ あ、いや、どうやら君は」  
言い淀み、コネリーは曖昧な表情を浮かべる。

「すまない、どうやら君にはあまり魔術の素養が無い。今教えても扱う事は難しいだ

ろう。いや、才能の有無の問題とは言え、その内に使えるようになるかもしれない。私と私の依頼のことは忘れないでおいでくれよ」

それきり会話は終わり、彼は不死人に構わず再び机に向かう。コネリーにとつての他者とはそのように扱うものであるらしい。不死人としても今のところ彼に用は無く、その場を去る事に決める。

次に訪れたのは広場の一番北、大きな石造のアーチの下である。このアーチの向こう側には水の満たされた堀が巡っており、反対側の岸には跳ね橋が上がったままになっていた。こちら側の岸には跳ね橋のスイッチらしきものは無く、だが城の防御を目的として稼動する橋を設置している以上、それは当然の設計だと言えるだろう。

代わりに、騎士らしき風貌の男がアーチ付近の壁に寄り掛かり、不死人を眺めていた。目が合うと彼は軽く手で合図したので、話をするべく近くまで寄る。

「貴公も、追いつめられた口か。だがあの戦いぶりを見るに、諦観には至っていないようだな。良いぞ」

低く笑いを込めながら、だが決して嘲笑うようなものではなく、皮肉も漂わせず、その男性は不死人を賞賛した。

彼の銀の甲冑は輝きを失っていた。また兜はしておらず、ガントレットと、革のブーツ、それと黒ずんだマントを身に着けていた。騎士、であるかどうかは装備として変則

的であり、より実戦的に、そして自身の特性を生かしたスタイルなのだろう。己の実力に自信と実績が無ければこうはならない筈である。

「ああ、俺も同じさ。最早行く場所も無い。袋小路だ。だが、貴公のような勇士がいるなら、まだ希望は捨てるべきじゃないのかもな。ところで貴公もやはり、玉座を目指すのだろうか？」

不死人は頷く、と、彼は懐から袋を取り出し、それを投げて寄越す。中身を検めると、そこにはいくつもの雫石が入っていた。

「俺の方が先にこの地へ来ていたからな。だからそれは、後輩である貴公への饒別だ。それと、王城への行き方を教えておいてやる。はじめに、この中央広場を西に行くところへ降りる細い道が見付かる。そこを進むと溝の溜まり池とかいう名前の、毒池がある。それを端まで進み、アリーナへ上れ。アリーナに入ったら客席の一部に貴族街と直接繋がっている通路があるからそれを通して貴族街へ抜けろ。そして貴族街を通り抜けられさえすればそこは王城だ。しかし」

彼は首を巡らせ、上の石造のアーチ、それから向こう岸にある上がったままの跳ね橋を見やる。

「ここが開いていれば、直接王城に繋がっているのだがな。詮無い事だが。行き方については以上だ。分からなくなったらまた聞きにすればいい」

不死人は彼の言葉に首肯した後、そろそろ他の場所も探索する旨を伝える。

「健闘を祈る。ああ、それと青ざめた血を見つけたら教えてくれ。どういふものかは見れば分かるだろう」

その言葉に了解の意を示し、次の場所へ向かう。

実は先程からずっと気になっていたことがあった。それはいつからか耳に入ってくるようになっていた、一定のリズムで繰り返される、鉄と鉄を叩くような音であり、またどこか心地よく、人の手を感じさせるものであった。

不死人は音のしている建物を覗き、だが中に人の姿は皆無。そもそもその家屋の屋根は崩れ、家具はひっくり返され、人が居座る事が出来る状態では無い。しかし瓦礫の中を歩くうち、地下へ向かう階段を見付け、不死人はそれを降りて行く。

階段の下は明るく、だが灯りというよりも剥き出しの赤熱した光源が部屋中を照らしており、また熱気も充満しているようであった。

「仕事か？　なんだ、初めて見る顔だな」

音の正体は金槌であった。その持ち主はやや小柄で、しかし精悍な身体つきであり、頭を丸めた男性だった。

「ふむ、一応名乗ろうか。まだ俺は自分の名を忘れていないんでな。マサイアス、見ての通り鍛冶屋だ。ああ、少しなら武器や防具、その他の道具なんかも売ってやれるぞ」

彼の言った通り鍛冶仕事の道具の奥には、雫石、丸葉、装備品の類や刀剣が置かれており、中でも特に不死人の目を惹いたのは黒く、そして塔の紋章が描かれたカイトシールドであつた。

丈夫な作りの割に、重さもあまり無く、不死人はこれの購入の意をマサイアスに伝え、亡者達から奪い取つた硬貨を見せる。

「バカにしているのか？ それは硬貨だぞ？ そんなもので売つてやれるものかよ。この滅んだ土地で、貨幣に価値などある訳が無いのだから」

彼は顔を膨れさせ、だが段々とそれが収まると今度は考え込み、少し間を開けてから質問を投げる。

「上の、なんだ、巨人？ 化け物？ か？ あれはお前が始末したんだな？」

これに不死人が頷くとマサイアスはまた考え込み、そのまましばらくが経過すると、やがて一つ溜息を吐いた。

「仕方ない。売つてやれる品や数には限りを付けるが、今は硬貨で取引してやろう」

彼の気が変わらないうちに、と不死人は硬貨を差し出し、塔のカイトシールドを受け取り、すると金の硬貨を手にしたマサイアスは何故かそれを指で摘み、じつと眺めていた。

「それなりに価値の高い硬貨だったが、今は屑も同然か」



まるで目に哀愁が映っているかのようには、マサイアスはどこか遠くを見詰めている。「昔、この土地は豊かだった。産業も、資源も、そうしたものに支えられた経済も、なにもかもが豊かで、人々は貧困とは無縁で、だからこそ心も豊かだった。楽園だったさ、だがな」

マサイアスは硬貨をその辺りに置き、金槌を手にし、また仕事に取り掛かる。

「どこにでもある、下らない話だ。我々は争いで全てを台無しにしてしまったんだ」  
掛ける言葉は見付からなかった。不死人は階段を登り、そこを立ち去ろうとするが、その途中、背中に声が掛かる。

「つまらない話をして悪かった。また来い」

## 第3章 周壁内部 1

中央広場周辺の探索を終えた後に不死人が向かった先は、王城へ至る道順である溝の溜まり池ではなく、東にある住居が立ち並ぶ区画であった。

中央広場と似たような趣のあるその場所になら、まだ他に正気を残す者が居る可能性が期待出来たため、本腰を入れて王城に向かう前にその区画を調べるべきであると考えた末の決断であった。

中央広場と東の居住区には明確な境は無く、それらしい方角へ向けて不死人は歩き続け、やがてどこことなく広めの通りに入ると、直後物陰から亡者と化した農民達が三匹飛び出す。

だが彼らは優れた戦士ではなく、あくまで正気を失い人を襲うようになっただけの元は普通の人間であり、三匹程度が揃っただけでは深刻な脅威とはならない。

向かってきた亡者の首を薙ぎ、横合いからの鎌の攻撃が届く前に二匹目のその亡者の胴に蹴りを入れ、攻撃を潰してから上に押し掛かって腹を裂き、そこへ飛んできた三匹目の亡者の大振りの鋤の一撃を躲した後、その背後に回り込み敵の背を貫く。

取り立てて苦勞はしないまま、その場の亡者は全滅する。不死人は亡者達の所持品を漁つたのち、その場を後にして先へ進むと、居住区の中央を走るこの通りは進むにつれ段々とやせ細り、程無くして行き止まりとなつていた。

そうなつては引き返す他無く、だが行き止まりの先に居た四匹の亡者達は、踵を返そうとした不死人を見咎め、逃すまいと攻撃の意志を見せ始めていた。

前面の二匹はそれぞれが農作業用の鉈を手に、その少し後ろの大柄の一匹は大きな鍬を得物とし、さらにその後ろの亡者は頭に兜、胴や手足には軽量なアーマーを着けた、いわゆる下級の兵士の風体をしていた。

不死人の佇まい、即ち応戦の用意を認めた亡者達は、だが勢い任せに飛び出そうとはせず、じりじりと間合いを詰めようとゆっくり動き出し、そして不死人に対しても四対一の数の差を考えれば、一の側から相手に仕掛ける事も出来ず、結果、しばらくの膠着に入る。

「おっ、おうっ」

睨み合いを打ち破つたのは敵集団の最奥に居た下級兵士の亡者の呻きと、その声の直後に下級兵士の持つ剣の先から放たれた、青い魔法の矢であった。

一直線に標的へ飛ぶその魔法、ソウルの矢の軌道は高速ではあったが回避不可能とまではならず、不死人はそれを横に躲して事なきを得るが、その隙を突いてこちらに迫る

二つの影があつた。

いつの間にか近付いていた亡者の片割れはソウルの矢を回避した直後の身体を狙つて鉞を振り上げ、その攻撃を咄嗟に塔のカイトシールドで防ぎ、その次にもう一方の農民亡者が横に薙ぎ払つた鉞をも後ろに飛び退いて躲し、そしていざ反撃に移ろうと剣を構え、だが離れた場所で再び撃ちだされたソウルの矢の音を聞きつけた不死人は、直撃を受ける前に身を屈めてそれを避ける。

「あゝおつ」

唐突に長い距離を跳躍一つで詰めてきた長軀の農民亡者は、それと同時に手にした鉞をこちらの頭部目掛けて振り降ろし、しかし不死人が身を振る事で鉞の先が頭の側面に掠れる程の寸前で回避に成功するも、休む間も無く遠距離からソウルの矢が飛来する。

不死人はその青い光を塔のカイトシールドで受け止め、そして次には眼前の敵を相手にすることなく、それらに背を向け走り出した。

形勢不利、どころではなく、対処不可能な状況であつた。そのため不死人は逃走し、だがそれもまたあまり良い選択とは言い難い。何故なら下級兵士のソウルの矢は遠距離を攻撃することが可能であるため、このように走る背を撃ち抜くことにも適しており、そして当然ながら敵に背を向けたまま走る姿勢では相手の様子を視る事が出来ず、いつその瞬間が訪れるか不明であつた。

故に不死人は走りながら、耳の神経に意識を集める。

「おっ、おっ、うッ！」

下級兵士の亡者の声にやや遅れて前転し、すると身体の上を青い線が通り過ぎていく。賭けに勝利した不死人は走る速度を落さず、敵との距離を大きく離しつつあった。

そしてある程度走りきれば、それぞれの亡者達の足の早さの違いが如実に現れる。まず一番小柄で俊敏な鉈を持つ二匹の農民亡者が先頭でこちらに迫り、その後ろに大柄の農民亡者、遠く離れた最後尾には当然重いアーマーを来た下級兵士の亡者の姿があり、時間と距離を稼いだ今であれば魔法さえ届かない距離が下級兵士と不死人との間に存在していた。

好機である。不死人は立ち止まって振り返り、一方の農民亡者の鉈の一振りを塔の力イトシールドで弾き、もう一方の農民亡者は攻撃を繰り出す前にその胴に蹴りを入れ、鉈を弾かれた方の亡者に向き直ってブロードソードで胸元を深く斬り付けて斃すと、その返す剣で蹴りを入れられ姿勢を崩した亡者の首を両断する。

「うっ、あ、い、ッ！」

鉈の農民亡者二匹が地面に倒れ伏せるのを見届けるよりも前に、大柄の亡者は跳躍し不死人に迫りつつ、鉈の一撃を振るう。

だがその攻撃方法は威力こそあるもののあまりに大振りである上、挙動が先ほどの物

と全く同じであったため回避は容易。だけでなく、不死人は回避の際に鍬の攻撃範囲から横に逸れながら、大柄の農民亡者の足を引っ掛け、石畳の上に転ばせる。

「ぱおっ」

地面に鼻を強かに打ち付け、その後大柄の農民亡者はもぞもぞと起き上がろうとし、だがそれを不死人は既に遠く置き去りにしていた。

大柄の亡者を転ばせた後に不死人はすぐに走り出していたため、今や目の前には守りの無くなった下級兵士の亡者がおり、そのアーマーの継ぎ目である首と鎖骨の間を狙い、ブロードソードは翻り、陽光を反射する。

首の辺りを深く突き刺された下級兵士の亡者は音も無く倒れ、その直後に背後から迫る大柄の亡者の攻撃の気配を察した不死人は、上から下に叩き落された鍬の一撃を横に躲し、同時にすれ違いざまの敵の勢いを殺さず利用し、横に振り抜いたブロードソードの一閃の威力を高める。

その結果、大柄の農民亡者は背骨ごと胴を両断され、地面に落ちたその身体は上下ともすぐに動きを止め、黒ずんだ血が石畳を汚していた。

一息つき、斃れた四匹の亡者の懐や腰の入れ物を探り、そこから硬貨や雫石を抜き取った後、不死人は行き止まりの路地を調べる。

石畳が途切れ、土の地面が見え始めていたその場所は壁ではなく、木製の両側に開く

形の扉であり、その扉の向こうの遠景はどうやら漁港らしき用地であった。だが扉は大きな木箱や樽、または網の類で埋まっており、それによつて通行が不可能になつてしまつてゐる。

もしも無理にでもそこを通るのであればその荷物を動かす手間が必須であり、しかしそうするには多大な労力が必要とされ、止むを得ず不死人はそれ以上先へ行く事を断念する。

来た道に戻るべく、中央広場へと向かつて歩き、だがしばらく歩くと最初に通つた時には角度の問題で視界に入らなかつた陰、道の左に並ぶ家屋と家屋の間に暗く細い路地が通つてゐるのを見付ける。

## 第3章 周壁内部 2

不死人は暗がり気味に気を払いつつ、その路地へと足を踏み入れ奥へと進み、だがそれほど長くは無くすぐに路地は行き止まる。ただし行く道を失った訳ではなく、路地の横に家屋の中に入る為の扉が見付かり、試しにそれをゆっくり押し込むと、軋む音を部屋の中に響かせながら扉は開いていく。

埃だらけのその部屋に不死人は踏み込む。

周囲をよく見渡すも、亡者がどこかに潜んでいる気配は無く、また特に目を引くものも無い。使われなくなって久しい家財道具が点々としているのみであり、だが調理道具が並ぶ一角の奥に、上へ続く階段らしきものを発見する。

これに近付き、上の階まで見通すが、見える限りでは亡者の気配は無く、不死人はその階段を登って上の階に至り、寝室のような部屋を目の当たりにする。

これもまた何の変哲も無い部屋であった。寝具の一式が置かれ、その他の家具は見受けられない。家捜ししようにもその対象となる物や場所が無いが、一つ閉まったままの窓が目に入り、不死人はそれを開け放つ。

あまり光は入らなかつた。それは今の空模様は漠たるものであつたことも影響して



いるが、それよりも周壁が近く、この家屋そのものが日陰になり易い位置である事の方が要因としては大きいようであった。

不死人は窓の外に頭を出して周囲を見回し、すると家屋の壁に深めに作られた縁があり、これは人の足が乗るための十分に取られているらしいように見受けられ、また縁が続く先には梯子が掛けられており、それはこの家屋の屋根の上にまで続いているようであった。

不死人は一応周辺に亡者が居ないかを一度確認してから窓から乗り出すと、縁を伝って梯子まで移動し、その梯子を登りきって屋根の上に出る。

柔らかに風が通る屋根の上は傾斜もあまり無く、足を滑らせて落ちる心配などは必要なかったが、問題は屋根の上を進んだ先で待つ、三匹の亡者達である。

亡者達はいずれもまだ侵入者の存在を感知しておらず、この家屋の屋根と隣の家屋の屋根を繋げる通路を挟み、一匹はこちらの家屋で不死人の側に背を向けて立っており、残り二匹は向こうの家屋の上で不死人の側に正面を向けている。

二と一とに別れてお互いを視界に入れている状態であり、そして三匹全てが下級兵士の亡者であった。

どのような突破するか、一度想像しなければならなかった。

仮に不死人の現在地の側に背を向けている一匹の亡者に忍び寄り、襲い掛かろうとす

れば、十中八九、向こうの家屋の上に居る二匹の亡者がそれに気付き、奇襲を行う前にソウルの矢を浴びせてくるだろう。そうなれば三匹の亡者が一斉に不死人に魔法を撃ち始め、その先どうなるかは敢えて考えるまでもない。

故に不死人は奇襲ではなく、別の手段にて突破を試みる。

手に取ったのは、屋根の瓦を砕いた破片である。不死人はこれを握ると少し身を屈め、こちらに背を向けている一匹の亡者の背に山形に投げると同時、相手の視界に入らないよう屋根の起伏に身を隠す。

すると視認こそ出来ないものの、瓦を踏む足音から判別するに背に破片を当てられた亡者は動き出し、不死人が隠れている場所の至近にまで異変を探りに来ているようであった。

そのまま亡者はふらふらと彷徨うかのように辺りを移動し、そして孤立したそれが向こう側の家屋の上に居る二匹の亡者の視界から完全に外れた場所、屋根の高低差に覆われた地点にまで来た瞬間、不死人は飛び出して下級兵士の亡者の背を蹴り飛ばし、屋根の上から落とした。

残る障害は二匹。不死人を発見こそしていないものの、それらの顔は方角的にはこちらを向いており、不用意に近付けばすぐに魔法を撃ち始めるだろう。屋根の上を繋げる通路も狭く、強引に渡ろうとしたところで回避も防御も難しく、一方的にソウルの矢の

的になる公算が強い。

だが別段頭を捻る必要も無い。不死人は瓦の破片をもう一度拾って握ると、身を屈め、先程よりも少し遠くに狙いを付け、それを投擲する。破片は宙を行き、並んだ二匹の亡者の頭上を飛び越し、その後ろの瓦の上に落ちて音を発した。

その音に注意が向き、二匹の亡者は身体の向きを変え、つまり不死人の居る家屋の側に背を向ける。

どれだけの時間亡者達がそうしているかは不明であり、速やかに行動する必要があるため、不死人は急ぎ剣を鞘に仕舞うと、両手で塔のカイトシールドを構えた状態で走り出す。

足音が響くのも構わず、最大の速度を出して屋根を跨ぐ通路を走破し、背を向けた亡者達に近付くと、やがて敵の存在に気付いた亡者らは振り返ろうとするが時既に遅く、不死人は盾を前面にした身体を勢い良く二匹に衝突させる。

その衝撃にて一匹の亡者は屋根の下へと落下。もう一匹は瓦の上に転倒し、そして不死人はそれに飛びつくと、膝で亡者の身体を抑え込み、鞘から引き抜いたブロードソードの剣先を干乾びた首に深く沈め込ませる。

三匹の下級兵士の亡者全てを排除し、激しく上下に揺れていた肩の動きに段々と落ち着きが戻ってくると、不死人は周囲を見渡し、観察する。

その家屋の屋根の上には室内に入れるような梯子や窓は見当たらず、代わりに長い手製の梯子が一つ、周壁に開いた窓らしき場所に向かって伸びていた。

他に行く道も無く、不死人はその梯子に手を掛け、揺らしてみると少し大げさにしなる。やや安全性に難があり、だが進むべきではない、という程危険でもない。不死人は風に揺れ、歩みに上下する梯子を伝って薄暗い周壁の内部へと入っていく。

厚い壁の中は外から見た印象よりも広く通路の幅が取られており、そして中には灯りが無く、それどころか、灯りを設置する灯台らしきものさえ見当たらなかった。壁に同じ間隔で開けられた窓から光が差し込むため、ある程度は明るさがあるものの、だが夜間は移動すらままならないだろう。

そうして不死人はある程度その場から中の様子を観察し、それに一区切りを付ける。その後実際に探索するべく、周壁の中を歩き始める。まずは梯子のあった窓から見て通路を右へ。

すると歩き始めて間も無く、通路の隅に丸められた藁の塊のようなものが大量に積まれているのを発見する。何かが中に詰っていたり隠れていたりするようには見えず、そして特に道を塞いでいるでもない。気にしなければそれまでだが、その藁の塊はあまりに大量にあり、また用途が今ひとつ不明であったので妙に不死人の目を引いた。

「いえッ、ツ！」

唐突に物陰から飛び出した下級兵士の亡者の剣を受け止める。

塔のカイトシールドと手入れのされていない直剣が打ち合い、その後不死人はすぐさま盾で敵を押し込み、体勢が崩れたところへブロードソードで首を薙いでその亡者を斃し、その次には通路の奥で青い光が迸るのを視界の端にて認めると、即座に斃したばかりの下級兵士の亡者が潜んでいた場所に飛び込み、ソウルの矢を物陰の壁に当てさせて凌ぐ。

一つ息をついてからその場で音に耳を澄ませ、おそらく自分以外に動いているものがソウルの矢を撃ってきた通路の奥の下級兵士の亡者しか居ないことを探ると、物陰から飛び出して走り、不死人はその敵との距離を詰めていく。

## 第3章 周壁内部 3

しかしそれが叶うより前、走っている最中に通路横の暗がりには隠れ潜むもう一匹の下級兵士の亡者を見付け、一瞬の逡巡の末、だが不死人はその潜む亡者の脇を走り抜けることを選ぶ。

前と後ろを挟まれる形となり、そしてその状況を打開すべく、不死人は走ってきた勢い全てを左手の盾に乗せ、それを前方に居た下級兵士の亡者に打ち当てて撥ね飛ばすと、その次の瞬間には振り返り、背後から迫っていたもう一匹の亡者の直剣を塔のカイトシールドで打ち返し、その際の衝撃により無防備となった亡者の身体をアーマーの上から袈裟斬りにして大きく怯ませる。

目前の亡者を尻目に不死人はまた振り返り、先程吹き飛ばした下級兵士の亡者に向かつて塔のカイトシールドを投げ付け、暗がりで見認には至らないものの響いた鈍い音を信頼するならそれは直撃し、相手を転ばせることに成功した筈である。

また向き直り、致命傷には至らないまでも斬撃により怯んでいた亡者の首元にブロードソードを当て、一息に刃を引き抜いて止めを刺すと、すぐさま走り出し、塔のカイトシールドで牽制された亡者に接近する。

その亡者はこの時点で起き上がり、直剣を構えてソウルの矢を放とうとしていたが、それより前に不死人は亡者の懐に潜り込み、腹と首に一度ずつ斬撃を入れ、斃した敵の返り血を浴びる。

一先ずその亡者がここでの戦闘では最後の相手であった。不死人は息を整えると、周囲の気配を探つて他に敵が居ないことを確認し、投げ付けた塔のカイトシールドを拾い上げ、その表面に付着した埃を手で払つてから、周壁内部の探索を再開する。

三匹の下級兵士の亡者と連続して戦つた地点より更に奥へ進み、しばらく変化の無い通路を歩くが、不意に不死人の耳に亡者の呻きらしきものが届いていたため足を止める。

それは上に続いている階段の方から聞こえているようであった。だがしばらく待っても向こうからやつて来る事は無く、一向に状況が変化しない。

通常、亡者の声というものは理性を残す人間とはまるで違い、苦痛を感じているのか、もがいているだけか、単に声を垂れ流しているだけか、その声の調子からの判別が難しい。よつてこの場合も進んで直接確かめる以外、真実を知る術は無く、不死人は意を決し、階段を静かに、一段ずつ登っていく。

結局、階段の半ばで呻き声の主と目を合わせることになる。そしてその瞬間、くたびれた布切れだけを身体に巻きつけた亡者は、不意に腹の辺りで何かガラスのようなもの





い。

周壁内部に灯台が無い理由もこれに付随する。つまり火気があることは好ましく無く、夜間ここを移動する際は特別に丈夫な処理が施されたランタンを持ち込む、等の工夫が実施されていたと思しい。

であればそれを手に入れたいと副次的な目的が一つ生まれ、不死人は暗がりによく目を凝らしながら通路を進んでいくものの、それらしいものは見当たらず、やがてさらに上の階に至る階段を発見し、今度は亡者の呻きも聞こえなかつたため、それを普通に登っていく。

だがもう少し慎重になるべきであつたか。

「うゝおゝいゝッー」

短く発せられた声と共に奥から走ってきた青い閃光に肩の辺りを撃たれ、ダメージを負う。闇で視線が通らないため分からないが、その先には下級兵士の亡者が居るのだから。

敵は続けてもう一度ソウルの矢を詠唱、だが不死人は撃ち出されたそれを横に避け、すると青い魔法は標的を通り過ぎ、その背後にあつた大きな樽に命中して中から黒い砂が零れる。

どうやらその下級兵士の亡者は窓から差し込む光を避けて立っており、姿が暗がりの

中にあるため敵の詳しい状況を知ることが出来ず、それに通路の奥がどのような構造になつてゐるのか、他に伏兵はいないのか、ということについても見当が付かなかつた。

とは言へこの距離を維持したままでは、一方的にソウルの矢に撃たれ続けることになる。覚悟を決めた不死人は走り出し、ソウルの矢を避けながら下級兵士の亡者が居るであらう暗がり近付いていき、だが例の如く横合いの物陰から布切れだけを身に着けた亡者が一匹飛び出し、武器も持たずに掴みかかろうとする。

亡者に肩を掴まれ、だがその顔を肘で殴打、不死人は最小限の時間で布切れを巻き付けた亡者を振り払うと、向き直つて走り正面の下級兵士の亡者に肉薄。剣を横に振り抜いて敵の首を刎ねると、直ちに振り返つて肘打ちでよろけさせておいた亡者に詰め寄り、これもブロードソードで斬り捨てる。

胸を深く斬られたその亡者は床の上には倒れず、布切れだけを巻いた身体で大きな樽に寄り掛かり、そしてそのまま動かなくなる。よく見ればこの辺りの通路にはいくつもの樽が並び、そのせいで通路の幅が狭くなつてゐるようであつた。

雫石でソウルの矢で負つた傷を癒した後、動かなくなつた亡者の身体を避け、不死人は再び奥へ歩き始める。

暗がりには続き、しかし窓から差し込む光が室内で舞い踊る小さな埃を照らす。少し幻想的に見えるのは、貧しい者の発想だろうか。

歩き続けてしばらく経ち、これまで通りであればそろそろ階段か何かが見えてくるだろうという矢先、窓の無い奥まった場所で何か動く気配があった。

不死人はゆっくりとその暗い場所に近付くと、気配、というよりもっと具体的に、何かの些細な音が耳に届く。

確認が出来ないためそれ以上先に行く事を躊躇っていると、すぐ足元に木箱が置かれているのを不死人は見付ける。その蓋を開いてみると、中にはまず如何にも頑丈な作りのランタンが一つと、小さな蠟燭が数本、そして火の蝶と呼ばれる赤い蝶が詰った瓶の着火道具が見付かる。

これらはまさに不死人が今必要としていたものであり、早速手に取り、ろうそくに火を着け、それをランタンに収める。

少し重さがあり、左手にこれを持っている間は盾を構えることは出来ないだろうが、得られた灯りが部屋を照らす範囲は広く、上手く活用すれば防御出来ないリスクを補って余りある。

だが注意すべきは他の事項であったようだ。闇で光りを灯す、ということとは、暗がりから一方的に観察されることを意味している。それはリスクの度合いで言うなら、盾の有無と同列に語る次元に無い。

## 第3章 周壁内部 4

「ぶおこ」

「ぶおこ」

「ぶおこ」

「ぶおこ」「ぶおい」「ぶおい」「ぶおい」「ぶおい」「ぶおこ」

部屋の奥に居た特攻亡者らが不死人の持つ灯りに反応して向き直る。やがて各々藁の塊を火の蝶で燃やし始めると、十を越える頭数を揃える彼等はいよいよ走り出そうとし、それを見た不死人も当然踵を返して走り、その場から逃げ出した。

周壁の中を不死人は駆け抜け、その後ろを大勢が追い、通路はそれまでと打つて変わって明るく、そして賑やかなものになった。走ったところで助かる目処は立たず、かと言って走っていないければ彼等に追いつかれてしまい、だが足を動かす一方で唐突に閃きが訪れる。

不死人は走りつつ通路の端に置かれている樽の側面を剣で砕き、その横を通り抜けて一定の距離を稼ぐと、己の勘で機を見計って足を止めて振り返り、こちらに向かつて走る特攻亡者達の先頭の一匹にランタンを投げ付ける。

飛んできた重いそれは相手の顔面を打ち、するとその亡者は火の塊を抱えたまま転倒し、不死人は一瞬だけ走馬灯のように視界に時間の遅延を覚えながらも身を屈め、直後周壁内部の通路に凄まじい爆発が起こる。

転倒した亡者の火が樽から零れた火薬に引火し、通路の脇にあった全ての樽が連鎖的に爆発したために起こった、否、そうして不死人が引き起こした窮地を脱する一手であつた。

それぞれの位置関係が良かったのか、亡者達は全て爆発に巻き込まれたらしく、吹き飛んで粉々になり、或いは壁に叩き付けられて潰れた彼らは一匹たりとも動かなかつた。

不死人は全身に着いた煤をはたきながら身体を起こし、様変わりした周囲の様子を眺める。

通路は大きく変化していた。特に一部の壁は、流石にあの爆発には耐えかねたのか破れてしまつており、そこから周壁の外に広がる森の景色が覗いている。

ふとその破れた穴の下の方を見ると、外壁に人が通れるくらいの縁が道のようどこかに続いているようであつた。不死人はその縁の上に乗し、慎重にそこを伝つて行く。縁で出来た道の先には周壁に外から取り付けられた見張り小屋のようなものがあり、中に入ると白骨化した男性の遺体が一つと、篝火があつた。

不死人は篝火で身体を休めたあと、男性の遺体を調べ、その懐に入っていた隼石や火薬を使った道具などを貰い受けると、その後周囲をよく見回し、小屋より上に向かって伸びる梯子を発見したため、それに手足を乗せ登っていく。

梯子を登った先は、周壁の屋上であった。

その場所には風の妨げになるような物が無く、どこからかやってきた強い風は不死人の身体を通り抜け、またどこか彼方へと消えていく。

そしてその風に撫でられているのは、不死人だけではなかった。

周壁の屋上にはもう一人、巨大な弓を握った騎士が佇み、またその武器は、敵対者の証でもあった。

背丈は一般的な人間よりも頭二つ分ほど高く、応じて腕や胴周りも太く精強。しかし全身を覆う彼のプレートアーマーは錆びや欠けが目立っており、それはこの騎士がずっとこの場所で周壁に近づく侵入者を待ち、風化していくのも構わず風雨に晒され続けた結果なのだろう。

青地に麦と魚がそれぞれ黄と白で描かれたリングレイのシンボル。そのたなびく大きな旗の下、風化していく騎士は敵に狙いを定め、大弓の弦を引こうとしていた。

不死人は迷わず走り出し、風化していく騎士との距離を詰める。距離が離れたままでは大弓の独壇場であり、それをさせないためには近づく以外に無い。

だがその考え一つだけで接近を試みるのは備えが不足していたか。風化していく騎士は不死人が近付くと、大弓から番えた矢を外し、それを握り締めて勢い良く突き出す。ランスさながらの一撃は、鋭く、そして強烈であり、危うく頭部を砕かれるところを不死人はその寸前で盾を用いて防ぎ、間髪入れずに迫る敵の二発目の突きは後ろに下がる事で躲し、だが三回目には繰り返し出された矢の刺突は風化していく騎士自身が踏み込んだ事により長く伸びた為回避出来ず、無論防ぐことも失敗して胴に大きな傷を負う。

それを受けてさらに後方へ引き、風化していく騎士の近接攻撃の範囲から逃れつつ雫石を砕いて傷の治癒を始め、だが間合いが開き過ぎたために騎士の持つ大弓の弦がしなり、不死人は回復を終えぬまま再度相手への接近を余儀なくされる。

風化していく騎士は、また孤独な戦士でもあった。何もかも滅びる中、だが故郷に良からぬものが入り込むのを唯一人で妨げ、故に心折れることはなく、まして遠近どちらかに隙があるような事など有り得ない。誰も彼を助けないのなら、そうなるしかない。

不死人は突き出された矢をカイトシールドで凌ぎ、自分からも剣を刺し込もうと構えだけは取るものの、しかし実際にブロードソードを振る前に相手の次の攻撃が迫る。

例え得物があくまで矢であり、本来この攻撃方法で用いられる槍の類と比較すれば遙かに全長が不足しているものの、それを持つ風化していく騎士と不死人とは体格の差が大きく攻撃の伸びがあまりに違い、また周壁の屋上故に横の空間が無いため回避が困

難極まりなく、つまり攻防が一方的であった。

息を大きく吸い込んでから風化していく騎士に近寄り、一撃目の矢の突きを後ろに躲し、踏み込んで二撃目の攻撃を塔のカイトシールドで防ぎ、だが三撃目の刺突は敵がより大振りに力を込めて繰り出し、それによって盾を押し込まれて隙を見せた不死人は四撃目にて胸元を突かれる。

回復のためその突きを受けた直後に後退し、雫石を胸元で砕き、だが歪む弦の音が不死人を否応無く急かすと、ただ一方的に傷を負うために風化していく騎士の前に出る。まさに辛酸を舐める状況に陥っており、また風化していく騎士が如何にも騎士然としているのも余計に嫌味である。

というのも、大弓を番えるのを阻止しなければならぬ以上、剣と槍との交わりはあくまでこちらが仕掛ける側であり、風化していく騎士は不死人の攻撃の意に対応する形で迎え撃ち、制している。

どのタイミングに剣を振ろうとするのか、それを観察してから対応する余裕が存在し、また不死人と違って自分からあまり前後に動かず、同じ場所に留まっているため、動かなければならない側は体力を奪われる。

それらの要素を卑怯とまでは言わないかもしれないが、騎士らしい平等な戦いとも言い難い。





ペースを崩された相手はそのたった一撃で怯んで身体が硬直し、続けざまにブロードソードが風化していく騎士を打つものの、しかし胆力は敵も然るもの、剣の攻撃を受けながらも、左足を地に張り、右足を踏み込み、不死人に向かって右手の矢を突き出す。

その一撃を、不死人は塔のカイトシールドで受け流す。完璧にタイミングが合い、意表を突かれた騎士は、致命的な距離で敵に身体を無防備に晒し、よって不死人は最早思考すらせず、半ば吸い込まれるかのように剣を突き出す。

ブロードソードは敵の鎧の継ぎ目に柄の部分まで入り込み、一拍置いてからそれを一気に引き抜く。傷から淀み、黒くなつた血が噴出し、風化していく騎士はその場に崩れ落ち、しかしその寸前で持ち直した。

風化していく騎士は膝をつき血を滴らせ、だが矢を乱雑に振り回して不死人を引き下からせると、身体を起こし、体勢を立て直す。そして二度とは同じ手は食らわない、とばかりに旗のすぐ下に陣取って大弓を構え、だがこちらはまだ本命を残していた。

その道具を取り出し、投げると同時、不死人は風化していく騎士に向かって走り出す。道具は弧を描くような軌道で飛び、リングレイの旗に命中すると、青地の布は燃え上がる。

火炎壺。火薬を詰めた攻撃用の道具であり、篝火のあつた小屋の中の遺体が所持していたものである。大方、周壁防衛に備えて置かれていた物の一つなのだろう。

風化していく騎士は燃えていく自身の誇りに完全に気を取られ、そしてその無防備に晒した背に駆け寄り、不死人はブロードソードを突き出し、刃は鎧と骨を分け入って肉の深い部分にまで達する。

二度も深々と身体を貫かれ、一切の力を失い、やがて風化していく騎士は今度こそ崩れ落ち、だがその眼は最後まで燃えていく旗に向けられたままであった。

風化していく騎士は、リングレイに溢れる他の者達と同様、正気を失った亡者の一人であった。だが、だからこそ自身の誇りの象徴に、何かを見出し、預け、そして守ろうとしたのだろうか。

## 第4章 溝の溜まり池 1

強敵との戦いで傷付いた身体を篝火で癒し、落ち着いたところで周囲を見渡す。

風化していく騎士が斃れた場所のすぐ近くには大きなレバーが備え付けられており、これを見た不死人は予感するものがあつたため、その取っ手に触れた後、正しい方向へ力を込める。

鉄と鉄とが噛み合う音が小気味良く鳴り、間も無く周壁全体が揺れ始めると、徐に周壁正面に位置する門が開きつつあつた。

他には特に仕掛けの類は無く、その場から不死人の目に入るものと言えば動かなくなつた風化していく騎士の身体と三つの梯子くらいのものであつた。

一つはここに至る為に先程登つた梯子であるため無用であり、二つ目の梯子の先を覗いてみると、下は特攻亡者が数十体固まって待ち伏せていた場所であつたためここを降りる意味も無く、不死人は三つ目の梯子の前に立つ。

未踏の場所へ続く梯子を伝つて降りた先は暗く、だが亡者達の気配も無い通路であつた。これを真つ直ぐ進み、通路の先に更に下の階へと続く階段を見付けると、亡者の奇襲を警戒しつつこれを降りて周りを観察する。

今降りたばかりの階段より後方の通路の先には鉄の扉があり、不死人はこれに近付き引いて押すものの全く動く気配は無かった。

引き返し、階段の正面の方角に向けて通路を歩んで行くと、牢屋のような鉄格子が視界に入る。

この牢の中には人の姿があつた。鉄格子越しとは言え念の為突発的な事態を警戒しつつ牢に近付いていくと、中に一人で居た男は不死人に気付き、その顔を上げる。そのまま少しの時を送り、やがて互いが正気を残した者であると分かると、その男性は不精な髭に覆われた口を開く。

「どうかね？　愚か者の姿は。君自身がそうならない為にも、よく見て行くといい」  
髪も髭も伸び、手入れの一切はしておらず、また元が何であつたか判然としないほど破けた布きれを着た男は、まるで自分を嗤っているような様子であつた。

付近には他に牢も囚人も無く、この場所がやや不自然に見えたため、不死人は鉄格子の扉を確かめるも、やはりそれは閉ざされたまま、開くことはなかつた。

「ああ、愚か者と言つても、私は罪人ではない。ここも牢ではなく、貴重な物を仕舞う場所であつたに過ぎない。そして鍵は今私がつ持っている。閉じ込められているのではなく、閉じ籠っているだけだ」

牢の中の男は一度不死人から目を逸らし、少し躊躇うかのように一拍置き、それから

もう一度目を合わせるが、その目元は細められ、少し引き攣っているような印象があった。

「かつて神に仕えていたのだ。だが居ないことを知ってしまったのだな。己の愚かさ  
と、その契機を悔やんでいるのだ。いや、どうでもいい話だな」

男は自嘲する。

「私にはもう何も出来ないし、責任も負えないが、それでも良いのなら、ここで会った  
のも何かの縁だ。君にとって有益となりそうな話をしよう。いや、神は無関係だ。単な  
る善意とを考えてくれ」

牢の中の男はやおら身を起こし、不死人が来た通路の奥を指す。

「確かめたかもしれないが、向こうにある鉄の扉は開かん。あれの奥には漁港の倉庫か  
ら物資を運搬するリフトがあるが、今は漁港に至る道も全て途絶えていると聞く。使う  
ことはまず無いだろう」

男は次に、牢から見て左側を指した。

「その扉の向こうには周壁の下に続くリフトがある。これは今も使える筈だ」  
さらに男は漁港側リフトの反対側の方に続く通路の方を指す。

「向こうには礼拝堂と隣り合って作られた病院へ行くリフトがある。これは動かず、  
使えるようになるとすれば、一度下でリフトを作動させた後になるだろう。そしてリン

グレイの本当の秘密を封じた者は、礼拝堂に居る筈だ」

男はその時にだけ、自らを嘲笑うものではなく、どこか暗い笑みを湛える。件の礼拝堂にせよ、今の彼自身にせよ、迂闊に近付くべきではないと思わせるものであった。

「ああ、それと神の奇跡が必要であれば言うといい。私は正直馬鹿らしいと思つてゐるがな。ふつ、ふふふつ」

引き攣つた笑みだけでは堪え切れなかつたのか、牢の中の男はどうとう声に出して笑ひ出し、居所の悪くなつた不死人は彼に背を向け、そこから立ち去つた。

牢の前からほんの少し歩いた先には、男の話にあつた通り扉が一つあり、容易に開いたそれを通ると奥にはリフトが吊り下げられており、可動部分に乗りスイッチを押せばすぐにそれは動き出し、不死人と共に下へ向かつて降り始める。

僅かな時間の内にリフトは一番下まで降りて止まり、目の前に人が一人通れる程度の大きな赤茶けた鉄格子の扉が現れ、内鍵を解錠して外に出ると、そこは中央広場の手前であつた。

この扉は周壁の下の秘密の通路から上がつてきた直後、真つ青な肌の巨人と対峙する前にも目にしたものであり、つまり不死人は東の居住区を始点としてそれなりの距離を歩いたが、同じ場所にまで戻つてきてしまつたようだ。

だがそれが全く無意味な探索であつたかと言えばそう単純でもなく、不死人は中央広

場に入つてすぐ、先ほどまで見えなかつた姿を見付け、声を掛ける。

「ああ、あなたでしたか」

周壁の外側で立ち往生していた女性騎士は、篝火近くの瓦礫の上に腰掛けていた。

「あ、もしかして、ですが。もしかしてあなたが門を開いてくれたのでしょうか？ あと、矢が降つてこなくなったのも関係が？」

不死人は彼女の質問に対して頷いてみせる。

「そうでしたか、随分お強いのですね。あなたのお陰で私もこちら側に来る事が出来ました、ありがとうございます。あ、すみません、お礼になりそうなものが何も。せいぜいこれくらいですが、是非受け取つて下さい」

女性騎士は自分の懐から茶色い袋を取り出すと、不死人の手の上に乗せる。どうやら中には雫石が入っているようであった。

「それに、名前すらまだ名乗っていませんでしたよね。私はアトラングのルシンダ。お察しの通り、記憶はもう曖昧で、齢だとかはあまり思い出せません。それをどうにかしたくて旅に出ました。ただ、田舎者なせいとか、剣の腕前も何もかも半端で、あまり上手くないかなくて」

彼女は苦笑いを見せ、だが次には真つ直ぐな語り口になる。

「目標はちゃんとあるんです。それは自分のお墓を作つてちゃんと死ぬことです。」



あ、変なものでしょうか？ でも私にとつてこれは大事なことです。心を失つてずつと世界を彷徨い続けたくはありませんから」

その部分について、おそらくあの牢の中の男も同調するのだろう。閉じ籠もり、鍵を掛けてしまえば、徘徊はしなくなる。

「私はこれから王城へ向かいます。あなたもそうなんですよね？ もしお互いを見掛けたら、協力し合えるといいですね。あ、一方的に助けられるだけにならないよう頑張ります。あ、えっと、まず、道が分からなかったり迷ったりしてしまいそうですか」

不死人は道について騎士らしき風貌の男から聞いた内容を伝え、それを全て聞き終えると彼女はまた頭を下げる。

「それにしても、周壁の上から矢を放っていた敵はなんだったんでしょう。正直、この地を守る物なんてもう無いと思いますか」

その質問に対しての明確な答えを持ち合わせておらず、不死人が黙つたまましていると会話は途切れ、やがて別れを告げて女性騎士の元を去つた。

## 第4章 溝の溜まり池 2

次に目指すのは溝の溜まり池と呼ばれる場所である。

中央広場の西に行き、その端に舗装の無い、下へ降りる細い坂道を見付ける。湿った土で足を滑らせないよう気を払いながら坂を降り、すると道の横に土の壁を掘ったような空間があり、そこに灰色の頭巾を被った老婆が鎮座していた。

「おや、お客さんか。久しぶりだねえ」

見れば老婆の足元には布が広げて敷かれており、その上に香草と思しき草の束や、雫石、少数ながら武具の類と、他にもおそろく子供が遊ぶための虹に光る石ころや、石畳に落書きが出来る蠟石が陳列していた。

「この先に行くなら香草を買っていきな。橙の香りがするこれは毒消しの効き目があるんだよ」

老婆の指したそれを手に取り、試しに匂いを嗅ぐが橙とやらの香りはせず、偽物を掴まされる可能性が脳裏に浮ぶ。

「溝の溜まり池なんて、誰が言ったか知らないけど、本当はこの場所に名前なんて無いんだよ。昔からあった所じゃなくて、道として無理矢理に作られたからさ」

その語りは商いの一環としての老婆の無償の待遇なのだろう。有益となり得る情報に、黙って耳を傾ける。

「溜まった水はどこへも流れ出さず、淀んでいく一方き。底は浅く、僅かに足を取られるくらいだけど、どこからか漏れた毒が水に混ざり、ずっと居れば身体を悪くするよ」騎士らしき風貌の男もまた、溝の溜まり池のことを毒池と言いつつ表していたため、香草が効くかどうかは別としても、ここを通る際に毒への備えが必要であるのは真実なのだろう。不死人は香草を購入する意志を伝え、老婆に硬貨を差し出す。

「舐めてるのかい？ そんなものと引き換えに、売り物をくれてやるわけがないだろう」

老婆が悪態を見せ、だがその反応は鍛冶屋のマサイアスに覚えがあり、予想出来た事であったが、予想したとして他に渡す物も無い。

こちらとしては香草だけでも手に入れておきたいが、硬貨の他に価値がありそうなものと言えば暴力くらいしか持ち合わせが無い。だが滅びた世で倫理と向き合うような白けた真似はさて置くとして、鍛冶屋などの協力者が居る事を考えれば、暴力の行使は短絡的な行動だろう。その行使の用意があることを匂わせるのも同じ、得策とは言い難い。

そうして不死人が考え込んでいると、老婆は大きく溜息を吐いた。

「仕方の無い子だね。香草だけは硬貨で売ってやる。他はダメだよ」

それが単純な善意なのかどうかは分からないが、ともあれ何かするより先に状況が好転し、不死人は老婆に硬貨を渡すと、代わりに手に入れた毒消しの香草を懐に仕舞う。

用は済んだため老婆の前から去り、坂道を下っていくと段々と木々が広がると、これによつて周囲に影が多く生まれ、失ったランタンを惜しむほどには視界が悪くなった頃、剥き出しの土の先に紫の水が広がる。広大な水溜りの中では土くれが所々盛り上がつていくつもの小さな島を作り、まさにこの毒々しさを見れば毒に対する備えが必要であることは疑うべくもなかった。

この溝の溜まり池は川のように、あるいは道のようにある程度の幅を保つたまま南東から北西にかけて伸びており、しかし北西の方面はすぐに先が途切れている。池自体は続いているものの、何故か檻の付いた馬車のようなものが大量に水の中に沈み、堆く積まれてそれが北西へ向けての道を塞いでおり、またそれ以外にもこの檻は溝の溜まり池の所々に転がっているのを遠目から見ることが出来た。

当然これを動かすことは叶わず、ただどの道不死人が目指すのは溝の溜まり池を南東に向かった先、つまり王城が座する方角である。

黒と紫が混ざつて渦巻く水に一步、二歩と足を着け、その感触を確かめながら不死人は進んで行く。

見た目の割にあまり泥が体積していないのか、今のところ足を取られるような感覚は無く、だが淀んだ水の底は起伏があり、唐突に水深が増す箇所もあるため、自然と歩みが遅くなる。

のた打ち回って飛び出したような木の根を避けながら水の中を進み、それと進行方向である南西への警戒も怠らず、ふと振り返って北西の行き止まりを見た時、遠くでそれは動いていた。

道を塞ぐ檻の馬車が大量に積まれたその遥か向こう側に、ぼやける巨大な姿の輪郭があった。

距離が遠く、不死人の位置からでは詳細な姿を捉えることは出来ないが、巨体の規模が中央広場で出会った真つ青な肌の巨人と同じくらいのものであることと、長い首を巡らせ、こちらを観察しているらしいことは窺い知れた。

その怪物は大きな胴体を道の脇に押し込むように隠し、異様に長い首を垂れさせ、ぐりぐりと動かしではいるがそれ以外には特に何もしようせず、近付いてこようとすらしなままに、まるで柱の影で大人の様子を盗み見る幼子の如く、ずっと不死人に視線を注いでいた。

そのような怪奇に取り付かれては身動きが取れず、不死人は一先ず土くれで出来た島の一つに上がり、巨大な影に注視し、相手の出方を待ち続ける。

大きな実を付けた植物が茎を曲げ、風に揺れているような刑貌の怪物は、おそらくずっと不死人を見詰め、不死人もまた怪物を見詰め続け、遠い距離を挟んだ両者は動き出さず、そうしてしばらくの時が経つと、一方が片膝を突きそうになる。

鳩尾に強い痛みが走り、不死人は身体を折る。

腹部の他にも身体全体が満遍なく熱を持ち、つまり不死人は毒に当てられ、体調を崩し始めていた。睨み合いを始める前、土くれの島に上がってはいたが、その程度では毒の水と近過ぎたと見るべきか。

直ちに懐から毒消しの香草をひと房取り出し、そのまま飲み込むと、驚くべき速さで体調が回復し、それ自体は喜ばしいことだが、香草はあと数回分しか残っていない。溝の溜まり池を渡りたいのなら素早い移動が肝要であり、即ちずっとあの怪物にかかざらなくては行かない、ということだ。

## 第4章 溝の溜まり池 3

不死人は怪物の影に背を向け、毒の池を歩き始める。

可能な限り迅速に、出来るだけ待ち伏せなどを警戒しつつ、そして定期的に背後の怪物の影に変化が無いかも確認しながら両足を動かす。また、膝より下までの浅さしかないとは言え移動の際は毒水に浸かる必要があり、体調の悪化も懸念事項だが単純に歩く速度が落ちてしまうため、水に入っている時間を極力減らすべく、土くれで出来た島と島とを繋ぐ経路を計算して行かなくてはならなかった。

目立った敵が居ないにも関わらず、意識しなければならぬことが複数あったため、既に精神的な疲労を覚えはじめていたが、現実には容赦なくこの上新たな問題を不死人に突き付ける。

毒の水という、生物に対して好ましくない環境の中で、だが自生する鮮やかな黄色の植物がそこかしこに伸びていた。葉にあたる部分は無く、枯れたような茎は人間の腕に浮ぶ血管のようであり、そして触れるとそれは丈夫且つ適度な柔性があるため、剣を用いなければ除することは難しい。

踏み倒して進むとすれば根が足に絡み、転倒でもして全身が水に浸かれば目も当て

られないため、不死人は道を妨げる黄色い植物を斬りながら、同時に待ち伏せと背後の怪物を警戒しつつ先へ進み、しかし体調が悪化したために一度足を止めて毒消しの香草を口に含む。

それを飲み込み、再び歩き始めて数歩、右手に過ぎていった転がる檻の馬車の陰から唸り声上がる。亡者のものだ。

それは一匹しかおらず、武器の類も持っていないようであった。不死人は剣を構え、余裕を持つて迎え撃とうとし、いざ亡者がこちらに向かつて走り出すと、右足に違和感を覚える。

飛沫が大きく上がり、水面が至近となる。

亡者が走り寄るよりも早く、不死人は毒の水の中に落ち、だが何かに足を絡められている、という程度ではなく、何かに足を強く引つ張りこまれていると認識を改める。

体勢を戻すこともままならず、またすぐには右足に取り付いた何かを振り払うことも出来ずに、不死人は半ば転げた格好で亡者との距離を間近にすることになり、だがブロードソードを両手で強く握り締めると、それを腰の右に落とし、そして敵が迫ると同時に身体の上半身を右から左へ勢い良く回しながら、腕も右下から左上へ全力で振り抜く。

上半身のみの方を用いた急場凌ぎの技法は功を奏し、胸元を斜めに深く切り裂かれた亡者は力を失い水の中に斃れ、それを見届けた不死人は右足以外の四肢で身体を固定す



ると、剣で右足の付近を斬り払う。

剣の先に感触があり、間も無く右足を引き込む力は消え、不気味な死骸が浮き上がる。それは紫の水によく映える、青白い生物らしき何かであった。成人男性の膝から下と同じくらい大きさであり、ごく柔らかな胴に口や目は無く、脚と呼んでいいのかさえ分からないような本体から分化した細い器官が、左右非対称の長さで数本伸びていた。

分類としてはナメクジなどの軟体動物のように見受けられるが、その身体はやはり理解し難い形状であり、生態についてまで想像を及ぼせるとなると如何ほどの知見が必要になるのか。果たして淘汰の末に自然に生まれた生物かどうか、やや疑問が残った。

結局何も分からなかったが、検分し終えたその生物の不気味な死体を押し退け、不意に気になったために後ろを振り返り怪物の影を見ると、それはまだ遠くから不死人を見詰め、首を揺らしていた。

それを確認してから再び歩き出そうと身体の向きを変え、だが不死人は立ち止まる。目の前の水面が僅かに震え、小さな水面がいくつか生まれていた。目を凝らしたところ、紫の水は下の方で秘かにうねり、青白い内臓のような滑らかな身体を孕んでいるようであった。

勘が告げ、不死人は顔を上げてもう少し広い範囲を観察すると、他に何箇所か同じように水面に波紋を作りだしている場所があり、そこではいずれも青白い軟体動物が待ち

構えているのだろう。

あまり慎重を重ねて時間を掛け過ぎれば、香草が不足するような事態になりかねず、だからと言つて無視出来るようなものでもない。障害があまりに多く、あるいは自ら死地へ赴いているだけかもしれない、という疑いがあることを認めがならも、不死人は水紋が生まれている箇所の水を避け、木の根を取り除き、土くれの島を渡り、溝の溜まり池を進んで行く。

時折振り返つては背後の怪物がそこに居ることを確認し、また踏み出そうとした際、ふと目に入った檻付きの馬車の一つの中で、泥に塗れた人骨が何人分も重なり合つていた。腐り落ちた皮膚や肉は、この不潔な水に溶けてしまったか。

その馬車へ近付き遺体を調べると、彼らが身に着けていたであろう服の懐などには香草や硝石が入つており、それは有り難く貰い受けてさらに奥へ進み、すぐにまた檻付きの馬車が不死人の行く手に現れる。

数は三つ。いずれも半壊しており、檻の扉は開いたまま、だが毒の水には浸かり切つていない状態で放置されている。そしてそれら檻の中には先程のように人骨が入つておらず、だが人骨が動き出しているかと思紛うような枯れた亡者達がそれぞれ二匹ずつ座り込んでおり、つまり合計六匹がこちらに気付き、徐に動き始める。

「ギィひいおーっー！」

唾液を散らしながら、叫びとも雄たけびとも知れぬ声を上げて亡者達は駆け出し、それを見た不死人は懐から最後の一つであった火炎壺を取り出すと、惜しまず亡者達に向かつて投擲する。

山なりに飛んだ火炎壺は先頭の一匹に直撃し炸裂、その隣に居たもう一匹の亡者を巻きこみ計二匹を大きく怯ませ、次に不死人は懐を探り、だが適切な道具が無かったため止むを得ず雫石を数個手にとって亡者達に投げつけ、それぞれが顔面に命中し、僅かだが足止めとなった。

言ってしまうえば手当たり次第乱暴に物を投げ付けただけだが、戦いにおける美意識について語る口はこの場に無く、ともあれ亡者達の氣勢を削ぎ、次こそ剣技の出番となる。両腕を広げて襲い掛かろうとする一匹目の亡者を肩から腰へ斜めに斬り、それによって力を失った敵の身体をすぐに脚で退けると、その後ろに続いていた次の亡者に狙いを定め、胸の辺りを右から左へ真一文字にブロードソードが斬り裂く。

三匹目の亡者は足が早く、こちらが予想していたよりも近い位置にまで来ていたため、不死人は二匹目を斃した際に振り抜いた直後の剣を翻し、今度は左から右へ剣が走ると相手の首が宙を舞う。

休む間も無く首を失くした亡者の後ろから伸びた四匹目の敵の腕に不死人は右腕を掴まれ、だがこれに対して引かず、むしろ相手の力に乗るようにして前に出て押し込み、

敵の力が緩んだ拍子に腕を捻り上げる。

あつけなく自由になつた右腕は高く上がり、剣を握つた腕をそのまま亡者の脳天に振り落とすと、頭蓋を叩き割られた亡者は脳漿を撒き散らして水中に没する。

更なる後続の敵に対して構えを取り、だが慌しく水が掻き回される様な音が届くばかりで、少なくとも攻撃は訪れなかつた。

見れば残り二匹の亡者は足に黄色の植物が絡まつたのか、身動きが取れなくなつて居る様子であつた。不死人は彼らと同じ失敗をしないよう気を付けながら近付くと、必死で木の根が絡んだ足を掻き抜いている亡者の首を刎ね、似たような状態の亡者を背から斬つて毒水に沈める。

## 第4章 溝の溜まり池 4

静けさが戻った。

一息つき、だが内臓が痛み出したために不死人はまた香草を口にし、体調を回復させてから亡者達が有用な道具を所持していないか検め、だが芳しくなく、今度はつい投げてしまった雫石を拾いに向かう。

紫の毒水の中にあつて尚、雫石は幽かに光を見せ、それ以上水深があればどうかは分からないが、不死人が今居る場所なら探すのに然程苦勞はしないようであつた。一つずつ拾い上げ、そして壊れた檻の傍、投げた雫石の中で一番遠くに落ちた物に手を伸ばす。毒の水がうねる。水面から伸びた細長い触手を目にし、だが手を引き戻すよりも早く胸の辺りに強い衝撃が走り、何が起こつたのか判然としないまま水中に倒れ込んで思わず毒を飲み、慌てて顔を上げるとそれは高く跳ねた為理解に至る。

青白い軟体動物の仕業であつた。常識的でない形をしたその生物は、身体の小ささからは考えつかないほど盛んに飛び跳ね、紫の飛沫を上げていた。

先程の衝撃はこれによるものなのだろう。それが狙つてやったことなのかどうかは分からないが、油断していたとは言えこちらの体勢が崩れるほどの勢いは脅威であり、

不死人は飛び跳ねる軟体動物が着水する瞬間を狙い、ブロードソードで両断した。

幸いその一匹の対処はそれで済み、だがこれ以降溝の溜まり池を移動する際、同じような挙動をする個体が居る可能性を考慮しなければならなくなってしまった。

不死人は一度後ろを振り返り、異様に首の長い巨大な怪物が遠くに居ることを確認し、正面へ視線を戻して水面などに変化が無いかをよく見ながら、溝の溜まり池の南東に向かつて歩き出す。

毒消しの香草の残りは少ない。気は逸り、だが窮地の呼び水となりかねないそれを押えながら前へ歩き続けると、ようやく終点らしきものが見えるようになる。

溝の溜まり池の南東の方角に、見るからに頑丈な横に長い鉄の門が出現していた。それは洞窟の入り口の蓋でもあり、もう少し近付いて観察したいものだが、その前にまたしても障害があった。

黒と赤茶が混ざったような色をした、馬車の車輪ほどの大きさの円盤状の何かが大挙して水面に並んで浮び、鉄の門までの道を完全に塞いでしまっているのだ。

植物なのか動物なのかすら判別が出来ず、正体を捉えられなかったが、その中心部分には一つ、生物の目玉のような物と、それを上下で覆う二枚の瞼のようなものがあった。

目玉そのものは色が濁っており、ものによつては瞼が開ききつて天を見上げたままに

なっていたり、反対に閉じていたり、或いは微睡みの中にあるかのように半分だけ開いた状態になっているものもあつた。

そういった物体が何百とこの一帯に集い、水の上にひしめいており、誰が言わずとも不気味な眺めであつた。勿論警戒すべきだが、引く道は無く、長考もまた禁物。不死人はその円盤状の何かをいくつか剣で突き、動かないことを確かめてからそれを押しやり、水面に道を作つて進んでいく。

動かせば時折臉の薄皮を揺らし、おぞましさが増すその間をやつと十歩分程進み、だが気を抜いた一瞬に、眼前の円盤状の何かの目玉が自力で開く。

それは明らかに不死人を見詰めており、明らかな異変であつたためすぐに飛び退こうとするが、しかしそれは遅かつたのか、動かそうとした膝が言う事を聞かなかつた。

円盤状の何かは、細長く、節を持った硬い脚を身体の縁一周からクラゲのように何十本も広げており、そのうちの一本が不死人の膝に深々と突き刺さっている。

「ぎゅあうっつー！」

急ぎ振りかざした剣によつて目玉を突き刺された大クラゲは叫び声を上げ、それが断末魔であつたらしく、細長い脚は段々と降りていく。膝から大クラゲの脚を引き抜き、念の為本体を引き離すと、そのクラゲがそれ以上動き出すことはなかつた。

どうやら大クラゲの耐久力は低く、だが動き出すものとそうでないものの判別が出来

ず、この群れの中を通り抜ける際は一層の注意が必要であり、更に移動速度が損なわれるだろう。

不死人はもう一度背後の怪物の影を見据える。怪物は最初からずっと変わらず、身体を隅に寄せ、首だけを動かしてこちらを観察している。それを確認してから、また大クラゲの群れの中へと入っていく。

いくつかの大クラゲが動かないことを剣で確認しながら進み、しかし三つめで早速当たりを引いてしまい、こちらに襲い掛かろうとする大クラゲの足を数本切り落とし、悲鳴を上げたところで目玉を貫く。

それが動かなくなったのを見届けてから、次の大クラゲの身体を突き、動き出さないことを確認して一步を踏み出した瞬間、大クラゲ達の下水面から割って飛び出したそれに不死人は顔面を打たれ、仰向けに転倒してしまう。

毒水が口と鼻から入り込み、だが咽つつも起き上がり、再びこちらに襲おうと飛び掛る青白い軟体動物を、不死人はそれが宙にある瞬間にブロードソードの一閃を放ち、斬り落とした。

迅速に対応できた部類ではあるが、しかし体調の悪化は免れず、毒消しの香草を使うと、残ったのはひと房のみとなり、速やかに溝の溜まり池を脱出しなければ、やがて行き倒れるだろう。



仲間の死骸に紛れ潜む大クラゲを暴き、その目玉を突き刺して前へ。

飛び掛る青白い軟体動物を黒いカイトシールドで受け止め、足元に落としてから切断し前へ。

焦らなくては時間切れになり、しかし焦れば焦るほど敵に対する対処の確実性を失い、危険は増す。相反する危惧を抱え、それ以外のことは思考から排し、ひたすらに前へ進む。

そうしてやつとのことで溝の溜まり池の端となる、鉄の門の前に到着した。

まだ辺りは毒の水に浸かっているため、そこへ至ったからと言って安息がある訳でもなく、不死人は急いで鉄の門を調べ始める。

だが、そもそも人が動かせるような大きさの門ではなく、更には施錠されているらしいため、正面から門を開けて中に入ることは不可能な様相であった。

しかし諦め悪く門を隈なく調べ、すると脇に馬車ではなく人が通行する為の、小さな門が備え付けてあるのを見付ける。

粗い鉄を材質としたその門には鍵が掛かっておらず、しかし扉の隙間に何か棒状の物が刺し込まれ、それによって開閉が阻害されていた。当然それを引き抜こうとするものの、鉄の棒は余りに深く入り込んでおり、僅かに隙間から飛び出た棒の頭を指で掴んで力を込めても、指は滑るばかりであった。

何度か試したところで結果は変わらず、手持ちの知恵と物ではどうあつてもその棒を引き抜き、扉を開くことは出来ないようだ。ただ、棒の頭には螺旋状の溝が掘り込まれており、ねじの構造となつているため、これの形に合うものを嵌め込んだ状態で引けば、その際の力は十全に伝わり、棒を取り除く事が出来るのかもしれない。

ただそれも、合うものを見付けられればの話である。その粗い鉄の扉を含む、鉄の門を開くのは一度諦め、不死人は踵を返し他にどこか行く道が無いか探すべく周囲を見回すと、目に映った風景に不足を覚えた。



はだかり、さらにこの場に至って尚、時間を稼いで相手に毒が回るのを待っていると見える。

しかし毒消しの香草の残りが心許ない今、これ以上の時間が経過すれば不死人は間違いない毒に溺れるが、背を見せて逃げようものなら後ろから食い千切られるのが目に見える。

であれば立ち向かうしかないのだ。ブロードソードを握り、塔のカイトシールドを前にして真つ青な肌の怪物に切り込み、しかし相手が鼻の辺りを僅かに動かし、息を吸い込むような動作を見て直感が働く。

即座、横に飛び、するとほぼ同時に風圧で吹き飛ばされる。急いで起き上がり見てみると、真つ青な肌の怪物の首が不死人の横を通り過ぎ、土くれの壁に突き刺さっていた。動きを視認することは叶わなかった。あの怪物は凄まじい速度で頭部を突き出すことが可能であり、今の攻撃を避けられたのは勘の助けがあった上での、奇跡だったとか言いようが無い。予備動作が判明しており、だが次は対処出来ると断言は出来ず、あまりの攻撃速度のため回避の成否は運に恃むところが大きい。

真つ青な肌の怪物は土くれから頭を引き抜くと、再び首を下げ、高さをこちらに合わせ構えを取る。

向こうにあの攻撃方法がある以上、これですますます背は見せられなくなり、そして時

間の猶予も無い。不死人は体力が尽きてしまわぬ内にこの怪物を打倒することを改めて覚悟し、無謀を理解しながらも、もう一度武器を構え、真つ青な肌の怪物に向かって走り出す。

すると先程と同じくらしいの距離で再び怪物の鼻らしき部分がひくつき、不死人は横合いに転がり、その直後、すぐ側を真つ青な肌の怪物の首が通過し、だが瞬間的に荒ぶ風に堪え、敵の首が引き戻らぬ内に再び駆ける。

目指すは胴。或いは脚。長過ぎる首が攻撃するにあたり不得手としそうな場所へ潜り込もうと近付き、しかし粘膜が擦れるような音がしたため急ぎ退る。

胴体のどこに隠れていたのか、二本の長く平たい腕のようなものが飛び出し、不死人が居る場所の近くを掴もうとしていた。その挙動は瞬間的な早さが尋常ではなく、例えるなら蠅螂の捕食のようであった。

空振りに終わった敵の掴みだが、真つ青な肌の怪物はその腕を仕舞わず、無闇矢鱈に振り回したため、そこは到底近付ける空間ではなくなり、不死人は腕の振り回しに当たらないよう大きく距離を取ろうとするが、しかし落ちてきた怪物の首に当たり、横に大きく弾かれる。

甚大なダメージであった。慌てて懐からいくつもの雫石を取り出し治療を始めるが、同時に胃の中に不吉な先触れを感じ、最後の香草を口にす。

いよいよ差し迫った状況に陥り、だからこそ不死人はすぐさま攻撃態勢を整えると、再び真つ青な肌の怪物に向かつて走り出し、当然繰り出される、伸ばした首による強烈な突きを紙一重で躲すと、そして今度は胴に向かわず、不死人はその場で剣を振り上げる。

全力を込めて打ち降ろし、ブロードソードは怪物の青白い首に叩き込まれ、しかし斬り傷を殆ど与えることなく刃は止まっていた。

斬撃の効果は認められず、やがて真つ青な肌の怪物は頭を引き戻し、次に低く下げ、こちらに高さを合わせて次の迎撃準備を完了させる。

首への攻撃は通らず、そして胴には近付けない。であれば首の先の頭部への攻撃を試すべきだが、真つ青な肌の怪物がこちらに反応して迎撃を行う距離と、攻撃が繰り出されたあとの頭部の先と不死人との位置の関係上、相手が首を引き戻すまでに走って頭に辿り着くには時間が不足していた。

だが、検討するべきは時間や距離の事項なのだろうか。あの敵、真つ青な肌の怪物が、身体の一部を用いて突きを繰り出すという攻撃方法を選択出来るのには理由があり、それを崩すことが突破口となる。

不死人は立ち位置を変え、前後に動いて近づく振りをし、真つ青な肌の怪物の攻撃を引き出そうと試み、すると誘いに乗った怪物は鼻から一つ息を吸い、敵に向かつて突き

を放った。

不死人は上手くそれを回避し、すると今までにない鈍い音が周囲に響き渡る。まるで鉄と肉が衝突した音のようであった。

つまり鉄の門に頭を突っ込ませてしまった真つ青な肌の怪物は、痛みのあまり後ずさりながらよろけ、その隙に不死人は怪物の頭に取り付くと、上に跨って黒い突起の一つを左手でしっかりと掴み、右手の剣でそれを斬り落としていく。

「おうつ、ひおおおおおつ、イおおおおおつ、ひいおおおおおつー!」  
痛ましい叫びであった。

真つ青な肌の怪物は暴れ、赤い血を流すが、不死人は頭部に跨ったまま決して離れず、さらに黒い突起を斬り落としていく。そして最後となった五本目のそれに深い切り込みを入れ、引き千切ると、流石に体力の限界が来てしまい、地面に転がり落ちる。

真つ青な肌の怪物は未だ叫び、暴れ続けていた。やがて逃げ出そうと走り出し、だが斬り落とした黒い突起はやはり怪物の目玉であったのか、走って行く方向の先に待っているものは大クラゲの群れであった。

群れを侵した真つ青な肌の怪物は何匹もの大クラゲに脚を刺され、更なる悲鳴を上げながら毒の水に倒れる。そしてそのままのた打ち回り、それが却って大クラゲ達を刺激したのか、悲鳴はずっと続き、だがしばらくするとそれも徐々に弱り、いつしか途絶え

て  
い  
た。



## 第5章 アリーナ 1

真つ青な肌の怪物に勝利したのち、巨大な鉄の門の横に坂になっている細い脇道を見付けた不死人は、そこを上がり、やつとのことで溝の溜まり池と、その毒水から抜け出すことに成功する。

付近にあつた篝火で身体を休め、特に毒が完全に抜けたのを確かめると、それから周囲の景色をよく観察する。

この周辺は溝の溜まり池と違い、髓が腐っているかのような陰鬱な木々が無く、空を遮るものがないため、存分に太陽の光が降り注いでいた。そしてやや空気が乾燥している気配があり、風が舞うとそこへ砂が混ざっていた。

並ぶ家屋はどれも低く、おそらく材質は安価な土を固めたものであり、中央広場に見られたような住居よりも質が悪い。

しかしその黄土色の屋舎が並ぶ一角の反対側には、それらとは全く雰囲気異なる大きな木造の家屋があつた。柵の遙か向こうでそれはどこか厳かな風情を以て佇み、ただし騎士らしき風貌の男の話によれば、王城へ行くにあたり向かうべきは低い屋舎の奥に見えるアリーナであり、その木造の何かではない。

それはともかくとして、別の場所にも目を引く物があつた。現在地のすぐ近く、道の端に上がったままの跳ね橋と、その根元にレバーを見付ける。

不死人はそのレバーの元へ行き、これを握つて力を込めると、どこからか重い音が響き、土埃が舞つて徐に跳ね橋は下がり始め、程無くしてそれは溝の溜まり池を大きく跨ぐ。

あまり丈夫なものには見え、しかし人が通る程度であれば問題なく使用出来るだろう。これで中央広場と、このアリーナ周辺との往来が直接出来るようになった。

この近くにそれ以上見るべきものは特に無く、いよいよ不死人はアリーナ方面への探索を開始する。

まずは背の低い土壁の屋舎の並びに沿つて歩き、だがそれほど経たずして直進を断念せざるを得なくなる。石畳のその道は真つ直ぐ行くと大きく隆起して崩れており、近付いて調べるも、それ以上進むのはどうあつても無理な様相であつた。

だが幸いにも、道の倒壊は隣り合う屋舎の一部にまで及んでおり、そこで生まれた穴は大きく、身体を滑りこませることが出来る。不死人は薄暗くなつた屋内の先を警戒しながら、その土壁の穴の中に足を踏み入れる。

内部の壁は外のそれと同じ黄土色をしており、そして塵が多く舞つていた。どうやら屋内には藁が多数積まれて山となつており、それが塵を生み出しているらしい。家畜の

飼育に使われでもしていたのか、見れば藁の側には鎖や首輪が放置されたままになっている。

一通り観察を終え、敵の気配が無いことを見るや、まるで牛舎のように縦に長いこの建物の奥へと不死人は歩き始める。

この土壁の屋舎は、アリーナで戦いに駆り出される動物達が、傷付き疲れた身体を休めていた場所であつたのだろうか。歩きながらそのような想像が浮び、しかし少し進むとそれが根拠の無い憶測に過ぎなかつたと知ることになる。

地面に肉厚で短めの剣グラディウスや、殴打用の武器であるメイスなど、剣闘士が使うような武器がそこかしこに落ち、さらにその奥にはツヴァイヘンダーやシミターやショーテルなども点在していた。

つまりここは動物だけではなく、剣闘士達が休息に使用した場所であつた可能性があり、或いはあの鎖や首輪も、動物はおろか人間にも繋げ、それを誰かが好き勝手に振り回していたのだろうか。

居たかどうかも分からない隷属の被害者に思いを馳せ、しかし屋舎の奥の暗がりから短く繰り返す空気の音が耳に届き、それどころではないのだと意識を切り替える。まるで呼吸音のようであつた。

「ぼっっー！」

吼えながら大型の獣はしなやかに飛び掛り、危うく首に噛み付かれるところを不死人は塔のカイトシールドで防ぎ、しかし圧しかかる重さは相当のものであったため、転びこせないものの反撃する余地など無い。

そのままでいると獣は一瞬だけ身体を引き、次には大きく開いた顎で盾の端を噛む。そして猛烈な力で下方向へ引つ張りはじめ、或いは左右に激しく頭を振るい、しかしそこへ静かに狙い定めた剣を振るう。

切っ先は丁度獣の眉間の辺りに入り、灰色の身体は一度痙攣すると、それきり動かなくなつた。

斃れた貌を見ると、それは毛並みが所々剥げた、灰に汚れた犬であつた。首輪が付いており、昔か今か、人に従っていたのだろう。

念の為首輪に文字の一つでも刻まれていないか確認し、だがそれらしいものは見付からず、不死人は犬の死体を跨いで奥へと進む。

土壁に開いた窓から日が差し込み、しかしよく見ればそれは格子が嵌っていることに気が付き、地面に散らばつた拘束具といい、この屋舎はアリーナで戦う者達を押し込める場所でもあつたのだろう。

しかし牢獄という程嚴重な造りではなく、また別の用途の跡も見られることから、この建物を分類するのであれば仮に牢舎といったところであろうか。

不死人はこの牢舎を歩き続け、先程斃した犬の死体を跨いで三つめの窓格子を通り過ぎた頃、天井からばらばらと塵が落ちるといふ現象に遭遇する。それは奥から手前へ順に舞い落ち、そして丁度真上に至るとその現状は止まり、一拍置いて室内の奥に明瞭にない者の気配を認める。

「うゝつ、ぐつ、えゝつ、えゝえゝえゝー」

正気を失つた亡者の呻き声に間違いなかつた。構えを取り、声の主を待ち受ける。

「ふっぎゃあおゝうゝッ!!」

気迫の込められた一撃は、しかし直上から齎された。

天井を砕きながら出現した亡者は手にしたグラディウスを振り下ろし、だがこの敵が移動する際に落下した塵を目撃していたため、奇襲に驚くところはなく、不死人は余裕を持つて回避する。

容赦の無い、良い一撃であつたからこそ、それが空振りとなれば大きな隙を晒す。グラディウスを地面に突き立てた亡者を、不死人は斬り捨てた。

斃れた亡者には目も呉れず、次の敵に対する構えを取り、すると予期していた通り室内の奥から新たな亡者が現れ、こちらに向かつて走り出す。その数は二。いずれも肩と頭部に独特の形状をした防具を身に着けており、それは彼らがかつて剣闘士であつた証なのだろう。

二匹の亡者の内、奥の一匹はグラデイウスを持ち、その手前を走る一匹は大きな楯圓の盾を構えており、これが見た目の素朴さに反し、大きな脅威であった。

即ち、横幅が少ない牢舎内では盾の突進は避けようがなく、或いは単純な力に優れる亡者とかち合っても押し負ける可能性があり、回避も防御も得策ではないが、かと言ってあれが盾である以上、牽制の攻撃程度では防がれるため突進は止められない。加えて言えば、そもそも遠距離攻撃の手段が無い。

他にやりようも無く、不死人は楯圓の大盾の突撃を塔のカイトシールドで迎え撃ち、そして成す術もなく力負けして吹き飛ばされる。

だが、もしも背中を見せてから吹き飛ばされていれば、不死人の身体は壁に打ち付けられ、趨勢は極まるが、実際には正面衝突し、その上むしろ出来るだけ前に踏み込んでから激突の瞬間を迎えていたため、後方の空間を確保することに成功していた。

想定通りに吹き飛ばされ、地を転がり、直ちに前転してからの起き上がりざまに剣を構えると、グラデイウスを持って迫っていた剣闘士の亡者の腹にブロードソードの一撃を浴びせ、その敵を斃す。

残ったのは、走るための空間を失い、すぐそこで大盾を構えるに留まる元剣闘士であった。不死人は大盾を掴んで手前に引き倒し、その向こう側に居た亡者を肩口から斬り裂く。

周辺が安全になったことを確認した後、剣闘士の亡者の懐を探るが、何も所持していなかったためそれを放り、それから室内の奥へ向かって歩き出すと、間も無く行き止まりの壁に当たった。

その場所には上に行く梯子と、左手に牢舎の外へ出る鉄格子の扉があり、まずは鉄格子の扉を調べてはみるが、向こう側から鍵が掛けられているらしく、閉まったまま動くことはなかった。

どうやらその扉は、隣に並んで作られた牢舎との間にある路地へ出るためのものであり、これを開きたいのならその路地へ回り込む必要がある。

一方、梯子の方は特に遮る物が無く、これに手を掛けると、牢舎自体が低いのですぐに登り終えることになり、不死人は屋根の上に這い出る。

## 第5章 アリーナ 2

壁が質素であれば、屋根もまた安普請であり、木で出来た屋根の上には土が盛りられ、そこに雑草が生い茂ってしまっていた。また、所々崩れて大小様々な穴が開き、中には先程亡者が落下してきたものもあるだろう。

歩き出そうかという時、思いがけずそこからすぐ近くの左の隅に梯子の先を見付け、しかし外から牢舎のこの面を見た時には梯子の類を見た覚えは無く、近付いて見てみると、それは折り畳むことが可能な形状であったことが判明する。

先を収納している部分を蹴落とし、梯子を伸ばすことで、アリーナ近辺に到着してすぐに休んだ篝火と、現在地である牢舎屋上とがすぐに移動出来るようにしておく。

それから不死人は牢舎の屋根上を探索すべく、盛り土と雑草の上を歩き始めた。

上から見ると改めて分かることだが、この牢舎にはほぼ同じ作りの牢舎がもう一つと隣に並んでおり、双方の屋根は少し離れているため、そちらに飛び移るのは難しいようであった。

だが屋根の上を進んだ先に、牢舎の屋根同士を繋ぐ木の板で出来た橋があり、これを渡ることで向こうの牢舎に行くことが出来るだろう。目指す場所が決まり、そこへ向



かつて屋根の上を歩く。

屋根の上は平坦で見通しが良く、それ故に亡者の潜む箇所も無いようにも見えた。

「うっ、うっ、うっ」

しかし呻き声と共に影が二つ、茂る雑草の合間から起き上がる。どうやらそこに身を隠していたらしい。剣闘士の亡者達は順に武器を構え、やがて駆け出す。

「ぐお、うっ！」

まだ闘志は健在なのか、怒声を上げながら迫る一匹は足が早く、グラディウスを振り上げたまま急接近し、しかし不死人はその間合いを潰す形に踏み込むと、急激に縮まり過ぎた距離で無理に剣は振らず、塔のカイトシールドでその亡者を押し返す。

仰向けに転倒する一匹目の亡者を尻目に、もう一方の敵が両手で掻き払うメイスを不死人は盾で受け止め、武器を弾き返してその持ち手に隙を生ませ、これを逃さずブロードソードで胸元を袈裟斬りにする。

そして今更起き上がろうとした亡者の胸に剣の切っ先を落とす、両手で深々と食い込ませたあと抉りつつ引き抜いた。

「ほう。う、うううううう」

その声は、倒れた亡者からではなく、少し離れた場所から発せられたものであった。そちらに目を向けると、どうやら今のやり取りを観察していたらしい者の姿を見付け

る。

他よりも一回り体格が大きいその剣闘士の亡者は、隣の牢舎に移るための橋のすぐ側で、虚ろな目で以て不死人を見据え、道具を構えていた。

道具である。一見して武器には見えないだろう。布か縄の束のようにも見えるが、より注視するとそれは網であり、亡者はこれを畳んだ状態で持ち、構えているようであった。背には三叉の槍を背負い、また自分からは動こうとしない。見るからに癖のある手合いである。

仮にこの亡者に迂闊に近寄れば、投げた網に捕らわれ、そこを槍で突かれるだろう。よつてこの敵に対しては投げられた網にどう対処するのかが最も重要だが、足場は不安定な上、狭く、走りまわろうものなら足を踏み外すのは目に見えており、もしも屋根に開いた穴に脚を引っ掛ければ、網すら使わずに槍で貫かれる。

しかし防御しようにも言うまでも無く網に対しての盾は無意味であり、だが遠距離の攻撃手段を持っていない以上、牽制も出来ない。

回避、防御、牽制が使えず、しかしそのどれかの内再考する価値があるとすれば回避だろうか、何度見ても屋根の上には網から逃れるだけの空間が無い。

何かこの睨み合いの状況を変えられる要素は無いか、周囲に首を巡らし、ふとそれが目に入ると思考の糸が解れていく。

唐突な気付きは牢舎の下、少し影になった場所を眺めていたときに訪れた。不死人は武器を構え、網闘士ににじり寄り、相手もそれに合わせて網を構え、互いに自分の目的に適った距離を測りながら敵対者の出方を窺う。

一步、二歩と動いた程度では亡者は動かさず、五歩目くらいで見えるからに網を持った手に力が籠り、覚悟を決めてそこから三步を一気に踏み出す。

すると対敵を絡め取るべく網は大きく舞い上がって不死人の視界を埋め尽くし、例えば今から後ろに下がったとて回避は間に合わず、よって屋根を外れて右横に飛び、牢舎から落ちる。

横幅が無いのならいつそ落ちれば良いだけのことであった。牢舎は低く、落下による怪我は負いようもない。そして亡者から投げられた網は落下する身体を追いかけてはいたものの、前後左右の距離のみならず、屋根とその下の高低差の關係上、網は上下の長さまでも必要とされてしまい、それでは標的を捉えようにも流石に全長が不足していた。

牢舎の間の路地に着地する頃には網は勢いを失い、力なく垂れ下ったそれを不死人はすかさず掴み上げると、牢舎の土壁に片足を掛け、力一杯引つ張る。

予想になかったためか、網闘士の亡者をつんのめり、そのまま屋根を転がって頭から路地に落下する。

その隙は逃せない。不死人は倒れたばかりの亡者の元に駆け寄ると、剣を大きく振りかぶり、そのまま綱闘士の頭部を砕いた。

頭をほぼ失った亡者は動かなくなり、不死人はその懐を調べ、何も入っていないことを確認してからざっと周囲を見渡す。

上から見た時には陰になっている部分があったため、万が一路地に潜む者が居ないかとも留意していたが、実際に降りてみるといくら暗かろうが路地は直線一つであり、身を隠す場所はない。何かあるとすれば道の奥、手製の橋の真下に遺体の一つあるきりであつた。

この遺体の傍に寄り、荷物やらを探ると雫石がいくつか出てきたためそれを貰い受ける。それから引き返し、路地を戻ってから真つ直ぐ歩くと、左右それぞれに鉄格子の扉を見付ける。

左の扉は閉ざされており、だが右側の扉はこちら側から鍵が掛けられていたため、それを解除すると開くようになった。おそらく左の鉄格子の扉も同じような仕組みになつており、違いは牢舎の内側から鍵が掛かっている点だろう。

不死人は右の扉の向こう、牢舎の中に入ると、近くには上に登る梯子があり、そこはやはり先程一度通つた場所であつた。少し前に調べた際に開かなかつた扉を、回り込んで外から開けたことになる。

梯子を登り、網闘士と睨み合つた場所まで復歸。そこから牢舎と牢舎の間に掛かる、隼石を持つていた遺体の真上を通る橋を渡ると、隣の牢舎の屋根の上に到達する。

同じような見てくれの屋根の上を歩き、だがしばらくも経たない内に目の前の屋根は大きく崩れ、屋根の板が下へ向かつて斜めに下がり、坂となつて牢舎の中へと続いた。

「ぼうっ！」「があっ！」

二匹の咆哮が坂の下より響く。

不死人は直ちに構えを取り、しかし犬達がやつて来ることは無く、吼え続けるのみであつた。坂の先の牢舎の中をよく見ると、二匹の犬は並んで威嚇し、その首からは鎖のようなものが伸びている。

「うへ、へ」

嘲笑か呻きか、曖昧な声を発したのは、犬達から伸びた鎖を手にしたまま呆然と立っている亡者であつた。剣闘士の装いとはやや違いがあり、全身を革の鎧で包んだ上、赤茶けたマントを羽織り、フェイスガードが無く頭頂部に赤い飾りをした兜を被つている。

亡者はまだ犬の鎖を握つてはいるが、犬らは既に興奮状態に達しており、彼等との戦鬪を覚悟するべきである。

だが獣と人とが戦ったとき、勝つのは獣である。犬の襲い掛かる速度は人間では反応が難しく、四肢を噛まれて地面に引き倒されるか、或いは直接首などに飛び付くか、どちらにせよ最終的に急所を食い破る。

先ほど一匹の犬に勝てたのは運の要素が強く、相手が上手く盾に噛み付いたからこそ攻撃を加えられたのであって、向こうがもう一度同じ事をする保障は全く無い上、今度の相手は二匹である。

勝機は無く、不死人は犬と亡者に背を向け、全力で走る。

「う、えあうっ」

しかし亡者は合図の掛け声と共に、容赦なく二匹の犬を放った。

来た道を駆け抜け、その背中を二匹の犬が追う。橋を飛ぶように渡って隣の牢舎に移り、投網の剣闘士と戦った場所を越え、二匹の亡者が起き上がった辺りを通り越し、しかしついに犬らは不死人の背に届きつつあり、それぞれが脚や腕に食らい付こうと、顎を開ききつたまま飛び掛る。

## 第5章 アリーナ 3

「ひんっ！」

犬の情けない悲鳴が二つ重なる。

それらの姿は無く、不死人は屋根の上に開いた穴を覗くと、二匹は恨めしそうに上を眺めていた。そして散々に吼え猛り、だが犬の身体では上に登ることが叶わず、自分達が落下した天井の穴の下で時折吼えてはぐるぐると歩き回っていた。

企図は成就し、だが存外に上手く事が運んだため、ここは驚くところだろうか。なにせよ二匹は捨て置き、隣の牢舎の坂道のある地点まで戻ると、不死人は犬をけしかけてきた亡者の前に入る。

獣を従えていた猛獣使いの亡者は逃げもせず、まるで昂然と不死人を待ち構え、そして戻ってきたところを見るや、腰の辺りから黒い縄の束を取り出す。それを片手で振ると、鋭い風切り音が鳴り、縄の束は外れてしなり、びっしりと棘の付いた長い鞭と化する。それを見た不死人は、だが相手の悠々とした態度ごと踏み潰すつもりで前が出る。

鞭を使った戦い方では、その最適な距離を維持する為に足を常に動かすのが定石だが、戦闘は室内であり閉所で行われるため、接近して先に逃げ場を潰せば不死人が有利

になる。また、中途半端な距離でいけば、鞭は盾を潜るようにしてこちらに傷を与え、それに怯みまた前に出るのを躊躇っていると一方的に負傷を重ねる。あのように出血を伴うような形状をしているのなら尚更、この敵に対しては一度の致命傷よりも数回の裂傷を恐れるべきである。

猛獣使いの亡者は強気に詰め寄る不死人に対して鞭を振り抜き、だが縦にしなるそれを右斜め前に踏み込んで躲すと、そこから一気に駆け、猛獣使いの腹に目掛けてブロードソードを走らせる。

強い衝撃が顔面を襲った。猛獣使いの左拳による払いが直撃し、だが不死人はよろけつつもすぐに構えを直すと、その間に敵は鞭を捨て、背の辺りから曲剣、ファルシオンを引き抜いて構える。

そこからの攻勢にあったのは猛獣使いであった。上から下へと繰り出されたファルシオンの斬撃を盾で受け止め、しかしそれを弾き返すには至らず、猛獣使いは同じ方向からの攻撃を二度、三度と繰り返す。

狙いは盾ごと防御を崩すことか。不死人はファルシオンによる四度目の打撃を下がって避け、だがこちらが呼吸を整える間も無く猛獣使いの亡者は空振りに終わったこととで地面まで下がった剣先を、踏み込みつつ強烈な勢いで切り上げる。

思わず大きく後ろに飛び退きそうになるも、だがそれを堪えて不死人はその場にて留



まりつつ塔のカイトシールドで曲剣を受け止める。

後退を是としなかったのは理由があり、それは先ほどまで猛獣使いが鞭を持っていた時と今の状況はそれほど変わっていないと判断したためであった。今この時も相手の攻撃は苛烈さを増しつつあり、だが猛獣使いは盾を持っておらず、また板金鎧も身に着けていない。同じだけの威力で打ち合い、血塗れの削り合いを演じれば、有利なのは不死人である見込みが高い。

そこまでしなくとも、攻勢の裏を返せば、攻撃することで自身の隙を無くそうと躍起になっているということでもある。飲まれてはならない。ファルシオンにこちらの塔のカイトシールドを存分に打たせ、或いは避けながら凌ぐ。

果たして正気を失った者が苛立ちを覚えるようなことはあるのか。それは不明だが、事実として猛獣使いの攻撃は徐々に大雑把になり、そして今度こそは盾ごと地面に押し倒そうと、全力を込めたファルシオンの攻撃はしかし空振りに終わり、その一撃を避けていた不死人は既に猛獣使いの脇腹を深く斬り裂いていた。

亡者の血は黒く乾いてばかりであり、しかし致命傷であり、不死人はたたたらを踏んだ猛獣使いの後ろに回り込むと、その背をブロードソードで貫き止めを刺した。

獣らを含めるとかなりの難敵であった。不死人は動かなくなつた猛獣使いの亡者の懐を漁り、そこから大量の硬貨が収まった革袋を見付ける。まだ正気を保っていた頃、

彼は剣闘士ではなくまともな地位を持った人物であつたのだろうか。

硬貨を奪い、先へ進む。

屋根が崩れて出来た坂は長く、しかしそこを降りて牢舎の中に入るとその先はすぐに突き当たりになっており、その左右には鉄格子の扉があつた。

右の鉄格子の扉はこちら側から鍵が掛かつていたため、念の為解錠しておくが、その向こう側は牢舎の間の路地があり、そのすぐ近くには隣の牢舎に入るための扉が見え、更にその向こう側には天井から落下した二匹の犬が居るため、決して迂闊に近付くべきではない。

振り返り、反対側の扉を調べると、そこには特に鍵が掛かつておらず、問題なく開く。扉の奥には階段があり、踊り場も無く真つ直ぐ下へ続くそれを、緩やかに十段ほど降りると地下の十字路に出た。

地下、と言つても暗闇ではない。そこから左右にずっと伸びている通路の各所には、壁の上の方に開いた窓からの光が差し込んでおり、石を敷き詰めて出来た空間を照らしている。

なにより、階段を降りてすぐの正面には大きな鉄格子の門があり、その向こう側に屋外の円形闘技場を見る事が出来たため、少なくとも現在地の周囲にはよく日が当たる。夜間ならいざ知らず、日中であればこれで闇が生まれる道理が無い。

その場から一通り地下道の構造を観察した後、不死人はまず円形闘技場に繋がる大きな鉄格子の門を調べるも、そこは閉ざされていたままであった。鍵穴が付いているため、開ける事は不可能ではないだろうが、そうしたいのならまず鍵を見付ける必要がある。

次にこの地下道で進むことが出来そうな場所は、右か左の通路であった。見たところ牢舎よりも全長はあるが、同じように藁や拘束具の類が散見されるため、同様の用途の区画であったと思しく、印象もまた似通っている。

左右どちらを先に調べるか、根拠らしきものを持たず、どちらでも構わないだろう、まずは右から調べる事に決める。

通路は人が並んで四人分程の幅があるため、普通に歩く分には余裕がある造りの筈が、そこかしこに藁や大きな木箱が並んでいるため、実際に通行する際の幅は本来の半分にも満たない箇所が殆どであった。それら障害物の陰に亡者などが隠れていないか用心しながら、不死人は通路を直進していく。

仮にも地下だからか、風の通り抜ける音は不気味なものに変化し、そして自身の足音が嫌に響く。なるべく音を出さないよう心掛けながら歩き、そうすれば自然と聴覚に意識が集まり、物陰の向こう、通路の右にある壁を区切っただけの部屋の方から何かの音がしているのに気付く。

「いあ、あ、っお、う、っー」

唸りつつ、妨げとなる木箱を破壊して出現したのは剣闘士の亡者であった。手にしたグラディウスを振り上げ、歩いて不死人に接近し始めるが、この一連の音に反応してか、この亡者が出てきた場所よりも更に奥の部屋から剣闘士の亡者が二匹現れ、そしてもう一つ、今度は後方にて何かを壊すような音が耳に届く。

惑いは刹那、開幕に近付いてきた亡者は駆けつつグラディウスを突き出し、だが不死人はそれを左に躲しながら、右手の剣を振り抜いてこの敵の腹を斬って破る。

深手に至ったか、すぐにその亡者はグラディウスを落とし、やがて崩れようと身体を倒し始めたところで不死人はこれの首を掴み、一度引き起こしてから次に蹴り飛ばすことで奥から並んで走ってきていた二匹の亡者にぶつける。

三つの痩せ枯れた身体が絡み、その内二つはそのまま地面に倒れ込むが、残り一匹は肩同士が打ち合う程度に留まり、すぐに減じた速度を取り戻して不死人の目の前に迫る。

だが構えるだけの猶予は十分にあつた。眼前の亡者がグラディウスを振るうより先にブロードソードがその胸に届いて刺さり、そしてそのまま斬り飛ばそうと力を込めた。だがそうする前に足音が背後にまで来ていた。

己の剣を目の前の亡者の胸に刺したままに振り返り、それと同時に横薙ぎに繰り出さ

れたメイスの一撃を、間一髪で塔のカイトシールドが遮る。

攻撃を弾かれたためメイスを手にした亡者は隙を生み、その直後不死人は盾で相手の鼻の辺りを殴打、これにより大きく怯ませてから半身に構えると、一方の亡者の胸元から剣を引き抜く勢いのままもう一方の亡者を斬り付ける。

得物をメイスとする亡者は胸元を横一文字に斬られて大きく怯み、その間に不死人は反対側を向いて胸から黒ずんだ血を流すグラディウス持ちの亡者に直り、これを右肩から左脇へ斜めに斬り捨て、もう一度身体の向きを反転させて崩れ落ちかかっていた敵の脳天に剣を叩き込んで割る。

そして最後に、起き上がって走り寄る最後の一匹となった亡者が振るうグラディウスを、タイミングを合わせた塔のカイトシールドが打ち払い、棒立ちになった敵の首をブロードソードが刎ね飛ばした。

## 第5章 アリーナ 4

乱れた息を整える。

順序良く敵を殲滅し、だが思い返すに今の戦いでは危うく袋叩きに遭うところであった。待ち伏せしている場に迂闊に踏み込んだことが原因であり、とは言えこれ以上は慎重に歩きようもない。

今後もあるような場面に遭遇することを懸念するならば、携行する武器を増やすか、魔法を覚えるか、手札を増やさなければならぬ。しかしいずれにせよ、それはこの場で解決できる類の話ではなく、不死人は止む無く問題を保留にしたまま、通路の奥を目標として歩みを再開する。

ただでさえ足音が反響し易い地下の通路である上、積まれた荷物や、如何にも高い音を出しそうな鉄の器具の傍を通れば身体が触れそうになり、だが注意を向けるべきは足元のみではない。通路を進む度、壁で区切った部屋の前を通らなければならないが、そこは敵が潜むには絶好の空間であり、こちらへの警戒も怠らずに足を動かす。

やがて不死人は通路の最奥、行き止まりとそこに隣り合う部屋を調べに向かう。

亡者や獣の気配が無いが、流れる空気に意識を集中しながら部屋の近くまで歩き、す

ると案の定、細い吐息がそこから漏れ出るように聞こえている。

ゆつくりと顔だけを出して部屋の方の様子を窺うと、そこにあったもので最初に目に入ったのは、部屋の前面に設置されていた鉄格子であった。

堅牢な造りのそれは、だが閉ざされてはおらず、扉は半ば開いた状態のままになっている。そして扉の向こうには、縄で胴や四肢を縛られ、まるで磔にされている一人の剣闘士の姿があった。

亡者かと身構え、しかしよく見てみれば亡者のように皮膚は枯れておらず、繰り返す呼吸にも落ち着きがある。不死人は敢えて物音を出し、するとその男は顔を上げ、互いの視線が合う。

「あ、ああ。頼む。解いてくれ」

弱りきった身体を見れば、この男に襲われる可能性はあまり高いようには思えず、仮にそうなったとしても大した脅威ではないと断じる。

男に近寄り、その身体を拘束する縄を全て切ると、彼は地面に座り込みながら壁に寄り掛かり、しかし最低限の礼儀だと思つたのか、こちらに顔を向ける。

「助かった、礼を言う。これで仲間を助けに行ける」

剣闘士の男は、凝り固まった身体を動かす度に苦痛に顔を歪めていた。

「この恩は返したいが、貴公、この先に行くのだろうか？」

顔を擧める彼は、不死人が通つてきた通路の方に顔を向ける。おそらくこの男の言う先とは、円形闘技場のことではないだろうか。

「彼はアリーナの王であり、そして我々の王でもあつた。故郷など、既に黒い炎に焼かれて久しいが、介錯出来る訳でもないなら、彼に刃を向けることは出来ない。申し訳ないが、その戦いには手を貸せない」

どのような事情があるのか、剣闘士の男性の話には明瞭でない部分があるものの、あまり深く聞く事はせずに、不死人は彼の言葉に頷くに留める。

「すまない。貴公に月の導きがあらんことを」

話を終え、不死人はこの周囲に他に行く道が無いことを確認してから踵を返し、地下通路を戻つて行く。

しばらくそのまま歩き、やがて階段下の十字路に差し掛かったところで一度足を止める。そこからはまだ足を踏み入れている側側の通路である。一つ息を大きく吐き、気を仕切り直してから踏み出す。

同じ造りの通路の道を進み始めると、すぐ手前に並んだ木箱が少し荒れている箇所を見付け、つまりそれが先ほど背後から襲つてきた亡者が出てきた場所であつたのだろう。

音を出さないよう散らばつた木片を跨ぎ、通路左の部屋に異常が無いか確かめながら



通り過ぎていく。一つ目、二つ目の部屋の中には特に目を引く物は無く、三つ目の部屋にて調べる対象となり得るものを発見する。

どうやらそれは剣闘士の遺体のようであった。身体の表面は干乾び、うつ伏せになって倒れている。通常であれば懐を調べるべきだが、しかし予感するものがあつて遺体の上に飛び乗ると、首の裏を踏みつける。

「ぐえう」

呻き声が出る。畏のつもりなのか、それとも単に倒れていただけなのかは分からないが、ともあれ相手は亡者である。

優位のこの状態で攻撃しない理由は無く、不死人はしやがみこみ、足と左手で剣闘士の亡者の身体を抑え付けながら、右手の剣で背中を斬り付け、鋸でそうするように前後に押し引いて致命傷を与える。

「れうっ！」

威勢の良いその声は、当然ながら不死人が組み敷いている亡者のものではない。低い姿勢を取っているこちらの頭部に向けて振り下ろされたグラディウスの一撃を、寸前に盾で防御する。

それまで姿の見えなかったこのもう一匹の亡者は、まだ調べていない奥の部屋より出現したと思われる。踏みつけられた亡者が呻いた際に出た声に反応して、この部屋に

やって来たのだろうか。

こちらの盾の上から両手で握ったグラディウスで押し込もうとする剣闘士の亡者に  
対し、不死人はしやがみ込んだ姿勢のまま堪え、そのまま何度も盾を打たれるが、少し  
経って亡者の力が緩んだと見るや、立ち上がりながら敵の剣を塔のカイトシールドで弾  
き返し、怯ませる。

そしてすかさず相手の腹を浅めに斬り付け、その衝撃で亡者が後ずさるところにもう  
一度、今度は踏み込みながら剣を振るう。

不死人の腕に衝撃が伝わると黒い血が銀色の刀身を汚し、胸元に大きな裂傷が生まれ  
た亡者は崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

ひとまずの安全を確保し、滾る身体を落ち着かせてから二匹の亡者の懐を漁る、が、や  
はり何も持つてはいなかった。今まで出会った剣闘士達も全て、硬貨を持つておらず、  
それは奴隷のような身分の者達にとって、不必要であったが故なのだろうか。  
亡者達の身体を放り、石造りの地下通路の探索を再開する。

通路の上の方に開いた窓から光と、乾いた風と、土埃とが零れる場所をいくつか通り  
過ぎ、敵も無く歩き続け、だがやがてはそれも終わろうとしていた。

間も無く通路の行き止まりであり、その突き当たりの壁の下には木で作られた安い机  
が置かれ、また机の上には鍵の束が乗っていた。

しかしあからさまなそれに飛びつけるほどこれまでの旅路は楽ではなかったため、不死人は机に近付く前にその場にて耳を澄ませると、やはり微かな空気の流れがあった。

それは部屋を区切る壁の向こう、こちら側から見て死角となる位置に何ものかが張りついている可能性の示唆であった。

罫を解除するには、仕掛けを見抜いて作動出来ないようにするという方法が理性的だが、それは見抜ければ、或いは細工が出来れば、の話である。これが不可能であれば、次には粗野な手段が候補に挙がる。

不死人は来た道を引き返し、先ほど斃した亡者の身体がある場所にまで戻る。

乾いた身体とはいえ、力の入っていない身体はそれなりに重く、また手に武器を持っている関係上抱えることが出来ないため、不死人は亡者の手首を掴む。

枯れ果て、虚ろな形相の亡者は、それを引き摺る不死人によつて地下通路の奥へと連れて行かれる。

この姿を目にして、声を掛ける者は皆無であろう。正気を残しているつもりのもりの不死人ではあったが、リングレイの薄暗さに浸るうち、そこに受け容れられつつあるのかも知れない。

程無くして件の壁の側にまで来ると、不死人は引き摺っていた動かない亡者の身体を起こす。そしてこれの胴を支えようと、亡者の頭の先を壁の端から出してみせる。

## 第5章 アリーナ 5

粉碎、であった。

全く躊躇無く、壁の向こうから繰り出された重い何かの一撃により、亡者の頭は砕け散り、頭蓋骨やその中身は周囲に撒かれる。

不死人はすぐに頭の無くなった亡者から手を離し、後ろへ下がって塔のカイトシールドを構え、するとそれを追うように壁の向こうから出てきた巨体は大振りの攻撃を繰り出す。

咄嗟のことでそれが何による攻撃であるかの判別は出来なかったが、ともあれ不死人はその攻撃に反応して更に後ろへ下がると、至近距離にあつた壁に重い何か打付けられる。

攻撃が当たった壁は、殆ど崩れかかっていた。土埃が舞い上がり、そしてそれが落ちていくと、敵の正体が現れる。

普通の人間の三倍以上はありそうな体重、横幅の男であった。

下半身はみずぼらしい革のズボンを穿き、上半身はベルトを肩から脇に通す以外に何も身に付けていない。そして頭の全てを覆うだけに留まらず、乳首の辺りにまで及ぶ長

い鉄の兜が特徴的であつた。

「うえっひひ」

嘲るような声音の下劣さや、姿から滲む雰囲気から察する。これは獄吏、それも性質の悪いものである。

獄吏は巨大な木の棍棒を両手で高く掲げると、その姿勢のまま不死人に迫り、やがて自分の攻撃範囲内に相手が入れれば即座に振り下ろそうとした。

定石で言えば、縦に振るわれた攻撃をこちらが横に避ければ敵は側面を晒すことになり、だが獄吏が持つ棍棒は太く、狭い通路では横への回避が難しい。従つて不死人は踏み込みを躊躇い、獄吏が振り下ろした棍棒の一撃を下がつて回避する。

敵から十分な距離を取り、その一方、振り下ろされた棍棒は勢い余つて石の床を叩き、大きな破壊音を地下通路に轟かせる筈であつた。

しかしそのような音は実際には生まれず、代わりに耳に届くのはどこかで鳴った小さな鈴の音一つであり、獄吏とは言えば棍棒を床に届かせることなく途中で止め、その先を不死人の方へ向けている。

何の脈絡もなく、不死人の全身に重さが掛かる。まるで深い海の底へ、いくつも錘を付けたまま沈められているようであり、歩くどころか身を振る程にしか身体を動かさず、そして棒立ちのままであると再び鈴の音が鳴る。

固く閉じた唇から無理矢理息を吹き出た際に出る音を、さらに増幅させたような音が響くと、それと共に獄吏の持つ木の棍棒の先から黒い何かが飛び出し、不死人に直撃する。

碌に動けぬまま辛うじて盾を前面にしたものの、敵の攻撃はそれごと不死人を吹き飛ばし、床を転がり、壁に頭を打ち付けて止まる。

あの不快な音と共に棍棒から飛び出したのは、長く尾を引いた黒い影のようなものであった。魔法の類と思しく、発射された後の軌道は高速のため回避が難しい上、恐ろしく重く、威力がある。

不死人は傷を癒さぬまま起き上がり、無理を承知で相手の懐目掛けて駆け出す。

棍棒の物理攻撃は威力が高いが、拘束の効果を持つ魔法と、遠距離攻撃の魔法の組み合わせは凶悪である上、敵のリスクがあまりに少ない。二度とはさせてはならず、その為には常に距離を至近にしておく必要があった。

獄吏は木の棍棒、否、それに見せかけた触媒を再度振りかざし、だが不死人はそれより先に獄吏の左脇を駆け抜け、腹を狙ってブロードソードを振る。

こちらの攻撃が命中することによって触媒に付いた鈴の音は乱れ、魔法は発動しなかったようだが、腹を舐めた剣の感触があまりに鈍い。

どうやら敵の厚い脂肪が斬撃の威力を減じており、であるならそのまま獄吏の側面は

後背に回り込んで攻撃を重ねたいところであるが、流石に敵の旋回の方が早い。獄吏は振り向き様に、触媒棍棒を横に振り抜く。

頭部を狙ったそれを不死人は屈んで避け、同時に敵の腹に向けて剣の一撃を軽く入れながら横を通り抜けると、獄吏との立ち位置が入れ替わる。

攻撃を軽くした理由は、急場であつたことと、どの道剣が深く刺さらないこともあるが、中途半端に突き刺さり、脂肪のせいで抜けなくなることを恐れたためでもある。加えて、この敵との戦い方を既に決めていたことも関係していた。

次の攻撃に備え、しかし不死人が構えを整える前に、獄吏は横に振り抜いた触媒棍棒を引き戻さないまま柄の部分をこちらに向け、鋭く突き出した。

それまでの獄吏と違い、器用で素早く幻感染みたその術に、しかし躊躇いは一瞬に終わり、不死人はその攻撃を塔のカイトシールドで確実に防ぐことに成功、直後敵のほぼ真後ろに回り込むと、背中をブロードソードで上から斬り付け、そして斬り上げる。

「ぐううっ」

同じ箇所を一呼吸の内に二度となれば効き目があつたのか、獄吏は呻いて足元が揺らぎ、不死人はさらにそこへもう一度、踏み込んで若干威力を高めた剣の一振りを呉れる。

「げひえっ、おあゝいゝっ!!」

獄吏はこちらの斬撃によつてまた痛がる素振りを見せるも、次にはその体格に見合つ

た胆力で堪えてみせ、両手で持った触媒棍棒を横に振り抜く。

急であつたために回避は難しく、咄嗟に塔のカイトシールドにて獄吏の一撃を受け止めるが、半ば吹き飛ばされるような形で通路横の部屋の奥へと押し込まれ、双方に距離が生じる。

そして休む間も無く、次の相手の挙動には見覚えがあつた。距離が開いたままであるにも関わらず、獄吏は触媒棍棒を振り上げ、おそらく拘束魔法を使う気であるのだろう。他の何を差し置いてもそれだけは絶対にさせてはならなかつた。不死人は五歩ほどの距離を一気に駆け抜け、しかし振り下ろされる重い触媒棍棒を受け止める術はない。故に上から下へ目の前を通り過ぎる触媒棍棒に合わせ、不死人は上から塔のカイトシールドを叩き込み、無理矢理に地面まで振り抜かせる。

触媒棍棒は眼前の石の床を陥没させ、構わずその横を走り抜けると、獄吏の側面を取つて剣を構える。

致命傷を与えるのではなく、鬪り殺しにするつもりで獄吏の脂肪を浅く斬り付け、剣を返して更なる裂傷を負わせると、蓄積した負傷で血を失い過ぎたのか、獄吏は触媒棍棒を取り落した。

決着の予感が脳裏を掠めるも、獄吏は闘志を失わずに両腕で不死人に掴みかかり、だがそれを下へ潜り抜けると振り向き、無防備な背にブロードソードが大振りな一撃を与



える。

獄吏は全身から血を滴らせながら数歩ふらつき、壁に右手をつけて身体を支えようとするが、それまでであった。右手は血油で壁の上を滑り、獄吏は頭から勢い良く倒れ、地下通路に静寂が戻る。

獄吏が動かなくなったことを確認し、不死人は傷を癒すべく懐から雫石を取り出し、それを胸元で砕く。

強敵であったことは疑いなく、それにしても奇怪な者であった。

長く尾を引く影の塊を飛ばす業と拘束する業は魔法のようではあるが、だが下級兵士が行使していたものとは特性を異にし、第一あの獄吏が果たして亡者なのかどうか、という部分を含め、総じて得体の知れなさがあった。

自身の傷が塞がったのを見届けた不死人は、歩き出し、すぐ側にあった机の上の鍵の束を手取る。同時に、通路の行き止まりの左右に目をやると、右に異質なものがあつた。

扉の無いただの鉄の柵があるため、そこから先に進む事は出来ないが、柵の合間から奥を観察するに、その向こうにはリフトのような、鎖を使った仕掛けの置かれた部屋があつた。

異質さはその大きさにあり、リフトを吊る鎖は人間の胴より太く、リフト自体に至つ

ては家屋が一棟建つて余りあるほどの空間を有している。

単に物を運ぶだけなら小分けにすれば良い。そうすることが出来ない物で、あの巨大さが必要なものとは、一体何があるのだろうか。

不穩を感じ取り、しかしそこから見える限りではそれ以上得られる情報も無い。不死人通路を引き返すべく、鉄の柵の前を去る。

程無くして階段下の十字路まで戻り、円形闘技場へ続く門に鍵の束を使用する。

束になった鍵をいくつか試すと、その内の一つに鍵穴に合致したものが見付かり、潮風で痛んだのか、鉄の擦れ合う甲高い音を発しながら、門は開いていく。

地下から抜け出し、太陽の下、観客席の前、円形闘技場の中央に向かって不死人は歩く。

空になつてゐる観客席は広く、円形闘技場そのものよりも遥かにスペースがあり、もし隙間無く人が入れば、数千では足りず、万単位の人数が収まるだろう。

そして円形闘技場の中央には、巨大な紺碧の岩が鎮座していた。

それに向かつて歩きながら、救い出した剣闘士の男の言葉が蘇り、故に避けられぬ戦いの予感があつた。

近付くにつれ、それは岩ではなく甲殻の肌であること分かり、数十と打ち込まれた杭の根元から溢れる赤黒い血が、生物の生々しさを醸していた。

やがてそれは動き出し、鉄を掻くような異音を出しながら起き上がると、二本の足で直立して円形闘技場に巨大な人影を落す。紺碧の甲殻の巨人、アリーナの王である。

目はただ黒く、輝きも無く、瞳や瞼は存在しなかった。口は耳元まで裂け、鋭い牙は出鱈目に生え、自ら口の中を傷付けんばかりである。骨格そのものは人間と似通っており、しかし右手だけ手首より先が人のそれではなく、鋏のような形状をしている。

そして如何なる刑罰か、全身に打ち込まれた太い杭が、自身の甲殻と干渉し合い、少しでも身動きする度に不快な音が鳴り響いた。



全身を縮まり込むようにしならせ、次の瞬間には伸びきって跳躍する。

遠近の距離感が狂う一瞬の光景の最中で、しかし危うく折れかかった心を繋ぎ、回避を試みるべく横合いへ身を投げ出す。

一拍遅れ、不死人は砂塵に揉まれる。敵の跳躍の直撃を回避することに成功し、だがアリーナの王がもたらす暴威は余波ですら尋常ではなく、風と砂に吹き飛ばされた身体は円形闘技場の地面を転がり続ける。

「があゝぶっ！」

短い叫び共に下された拳は碌に狙いが付けられておらず、だが一度地面を叩いただけでは気が済まなかったのか、アリーナの王は先程と同じように何度もその場を叩き続け、この間に不死人は走って相手から距離を取る。

反撃など、試みる余裕は無い。隙が多い敵ではあるが、それは問題ではなく、襲い掛かる暴力の質が原因である。

繰り返される攻撃は精度こそ欠いているものの、威力はこれまで出会った者達と比べくも無い。太陽を陰らせるほど高く跳ねる土を見れば、アリーナの王の攻撃はもはや自然災害の域にすら達していると言えるだろう。

畏れを抱くのは当然であり、またそれを差し置き、策を弄したとして所詮は人の身。立ち向かうことは間違いかも知れない。



地点を迂回。途中で走る方向を変え、遂に紺碧の甲殻に向かう。

荒れる砂塵の中、しやがみ込んで地面を叩き続けるアリーナの王の足元に後ろから近づき、足首の腱の辺りに狙いを定め、ブロードソードを振り抜く。

岩と剣とが衝突し、甲高い音が響く。

否、岩のような甲殻であった。その時手に返ってきた感覚は予想と違わず、まず硬く、そして弾力性が無いため、剣とそれを持つ手首が痛む恐れがあった。

その直後、アリーナの王は首を捻ってこちらの姿を見付けると、片足を持ち上げて踏み付けようとし、だが不死人は踵が振り落とされる前に走って敵から距離を取り、砂に捲かれるだけで難を逃れる。

不死人からの攻撃は一度きりであったが、明快な答えが出た。あの甲殻の前に、通常の攻撃は無意味である。剣で削ろうが鈍器で叩こうが、紺碧の甲殻は殆ど無傷のままだろう。如何なる武器を以てしても、使い手が人間では到底破壊には至らない。

「ぐがあああ あああっ！」

叫びと共にこちらに目掛けて落されるアリーナの王の拳を避け、砂から逃れながら不死人は周囲を見る。探すのはバリスタの類だ。

アリーナの王の身体には多数の杭が打ち込まれており、それらは甲殻を貫き、出血を強いている。人間の力を越えた攻撃力を有した何かによって打ち出されたことは明確

であり、その道具を使用出来れば状況が変わる可能性が高い。

しかしアリーナの王の続けざまの叩きつけ攻撃が終わる瞬間まで周囲に視線を巡らせたものの、それらしいものが見付かることは無かった。時間切れであり、アリーナの王は再び不死人に向かって拳を振り上げる。

アリーナの王の狙いは良くも悪くも大雑把であり、回避した先に偶然拳が落ちてくるという状況は充分あり得る。だがそういった想像に飲まれて足腰に力が入らなければ、それこそ逃れることは叶わない。舞い上がる砂埃を背にして駆ける。

巨大な拳を避けた後、もう一度円形闘技場そのものだけではなく、その上の観客席にまで目を凝らし、バリスタを探すものの、それらしい物は見当たらない。そもそも観客席には物が無く、探す場所自体が少ない。

その場の土埃を何度も叩くアリーナの王の姿を視界の端に入れながら、不死人は観客席の上の方をずっと眺め、目的のものを探して後ろ歩きをしていると、不意に背に当たるものがあつた。円形闘技場の壁である。

迂闊と気付いた時には手遅れであり、そのタイミングでアリーナの王はこちらを見付け、右の鍬を大きく横に振りかぶり、勢い良く突きを放つた。

対して不死人はこれまで同様横に飛んで回避し、しかし鍬が直撃したのは土の地面ではなく硬い石で出来た壁であり、衝突した際に吹き飛ばされてきた瓦礫に襲われる。



広範囲且つ高威力の攻撃は盾程度で防げるようなものではなく、瓦礫に全身を打ちのめされ、まるで何故か嵐の日に開花してしまった草木の花弁のように、不死人は成す術なく吹き飛ばされる。

被害は大きく、不自由になって地面の上に転がり落ちた身体を、しかしそのままにしておくことは出来ない。不死人は碎けた関節にすら無理矢理力を込めて跳ね起き、即座に走り出すと目前にまで迫っていたアリーナの拳から逃れる。

「げえうっ！　ぐがああ　あ　あ　っ！」

今の一撃で止めを刺すつもりだったのだろうか。一層勢力を増し、苛立ったように見える叫びを背に、不死人は駆けながらも雫石を使い、身体の治癒を始める。

そうして失ってしまういくつかの貴重な雫石は、立ち回りを疎かにした代償であった。そして得られた物もない。大きな傷を負ってまで捜し求めたバリスタは、円形闘技場の何処にも無く、あの杭はここではないどこか別の場所で打ち込まれた可能性がある。

ただ負傷し、アリーナの王への畏れが増し、そして斃す手段が無いと知る。ここで全が終わるのだろうか。

## 第5章 アリーナ 7

「ぎえあ つ！ ぐつがあ あ あ あ あ つ！」

人以上の角度で限界まで顎を開き、アリーナの王は吼えながら不死人に向かって拳を叩き付け、それを寸前で躲すと砂塵に煽られ、危うく浮きそうになる心と身体を何とか地に着け、走って逃げる。

逃げる以外に何があると言うのか。どう足掻いても、人間の力では紺碧の甲殻は破れないだろう。まるで学習せず砂埃を叩き続けるアリーナの王の背を眺め、そこに刺さった杭が目に留まる。同じように出来ればと考えずにはいられない。

だがそこに閃きがあった。

不死人はまず剣を仕舞い、塔のカイトシールドを両手でしっかりと持つと、アリーナの王がこちらを向くのを待つ。

そしてこれまでであったように、土埃を好き放題叩いた後のアリーナの王は、砂塵から顔を出し、不死人の姿を見付け、腕を振り上げ拳を突き出す。

それを今までのように弱腰の回避ではなく、横よりも前方に寄り気味で巨大な拳を躲すと、同時にすぐさま駆け出してアリーナの王の側面へと回り込み、曇り空を背にする



さつている甲殻の部分に、新たに大きな亀裂が生まれていた。

紺碧の甲殻は硬く、それ故に一度割れてしまえば脆い面もあるようだ。尤も、温度や部位の形状、甲殻の疲労度合いなど、数多くの理由が複雑に絡んだ結果、運良くそうなたただけかもしれないが。

やがて痛みを振り払えたか、アリーナの王は掲げた両腕を自らの敵に向けて落そうとし、だがそれは以前とは見る影もなく弱り、跳ねる土砂も大した量ではないが、それでも直撃すれば人体は潰れる程度の威力があり、この攻撃を不死人は余裕を持って回避すると、再び足首に取り付く。

先程亀裂を生み出した甲殻を狙い、その部分の近くに刺さる杭を塔のカイトシールドで殴打し、すると高く短い音を発しながら、亀裂が一瞬にして繋がり、一部が割れて落下する。

その中から現れたのは、青く、そして粘膜のような滑りのある肌であった。そこを攻撃することが出来れば、この敵は更なる出血に至るだろう。

自身の防御能力に重大な問題が発生したことを知ってか知らずか、アリーナの王は反撃の態勢に移りつつあった。片腕を高々と掲げ、それを避けるべく不死人はこの時点で走り出し、するとその時、耳に届いた音があった。

不潔な液体が詰った腫瘍を無理に潰したような、生理的な嫌悪を催す音。それは先程

落ちたばかりの甲殻から生じた音であり、見れば紺碧のその裏側にびっしりと敷き詰った黒い球体の数々が、それぞれ内側から破れて黒く細長い芋虫のような生物を吐き出していた。

一先ずアリーナの王が振り落とした拳の叩き付けを避け、直後不死人に黒い虫達が殺到する。一つ一つが人の腕と同じくらいの大さであり、全長が大剣ほどはあろうか。それが二十ほど、跳ね回りながら襲い掛かろうとしている。

それら虫達を退治するための道具も策も欠いており、不死人には後退の選択しか無く、黒い虫の集団から目を離さないよう気を付けながら、走って距離を開けようと試みる。

だがその隙を逃さんとばかりに、アリーナの王は腕を振り上げて構え、こちらに向かつて拳を叩き落とそうとしていた。窮地。

否や、好機である。

不死人は足を使って自身と、虫達、それからアリーナの王の三者の位置関係を調整すると、いざ巨体から拳が放たれた際にはその場から転がって逃げ出し、そうして振り返れば敵の拳は見事、全ての黒い虫達の上に落され、哀れにも叩き潰された彼らは黄色い体液を土に吸わせていた。

それを横目で見ながら間を置かずに走り出し、アリーナの王の足元にまでやって来る

と、甲殻が落ち肌を晒している部分目掛けてブロードソードの斬撃を見舞う。

青い肌が大きな裂傷を負い、真っ赤な鮮血が噴出し、そしてアリーナの王は姿勢を崩すと、膝立ちの低い姿勢となって身体の動きを止め、すると不死人はすかさずアリーナの王の首に近付き、そこに刺さっていた杭を塔のカイトシールドで打ち込む。

「ぐびっー」

碌に声も出せずにアリーナの王は悶え、そして反射的に首元を押さえると、だがそれが却って良くなかったのか、抑えた手が杭に触れ、その付近の甲殻が割れて落下する。

またしても甲殻の裏側に付着した卵が孵り、黒い虫達が生まれ出ようとしていた。だが不死人は敢えてその場に留まり、アリーナの王の攻撃を誘ってみると、彼はまた考え無しに腕を振り上げ、地面の敵を殴り付けようとする。

その攻撃を下がって避け、しかしそう出来たのは不死人のみであり、その場に取り残された虫達は巨大な拳の下敷きとなったため、生まれたばかりであった彼等は潰れてしまっていた。

運良く逃れたものが一匹でも居ないか、一応確認した後不死人は駆け出し、巨体の足首にある甲殻で守られていない肌に近付くと、上段に構えたブロードソードを踏み込みながら打ち降ろして深く斬り込む。

それによりアリーナの王は再び姿勢を崩し、屈むような姿勢になった瞬間、不死人は

敵の首に近寄ると、甲殻の守りを失い、無防備になったそれを剣で斬り破る。

「きゃい」

紺碧の巨人は小さく呻きを上げるも、これまでに無い大量の血を首から溢れさせ、やがて徐々に身体のを失い、幼子のように蹲っていく。

もはや立ち上がる力は残されておらず、地面に横たわった紺碧の身体からは血がゆっくり流れ出し、広い血溜まりがそこに生まれつつあった。

## 第6章 貴族街 1

アリーナの王の骸、その影に篝火があり、不死人はそこに座り込んで身体を休めていた。揺れる火をしばらく見詰め続け、やがて身を起こし、立ち上がって周囲を観察する。現在地である円形闘技場の出入り口は三つ。一つ目はアリーナの王と戦う前に通った、地下通路へ至る大きな鉄格子の門であり、ここは既に無用であるだろう。

二つ目は鉄格子の門から見て左手にある、巨人すら出入りが可能であるような巨大な門扉。不死人はまずここへ向かうことにした。

位置から推察するにこの扉の先は、獄吏を斃したあと柵越しに見た巨大なリフトが収まっている場所なのだろう。

だがこの巨大な門に近付いて調べるも、あまりの大きき故に動く気配はなく、下の方に見付けた人間が出入りする為に備え付けられたと思いき門においても、鍵が掛かっているためか開くことはなかった。

この人間規模の門に空いた鍵穴の上には、小さな紋章が掘り込まれており、うねる水流を表現したかのような、しかし神秘を通り越して怪しげな印象の模様であった。

円形闘技場に通じる大きな鉄格子の門を開けた際に用いた鍵の束を試すが、それでも



開くことはなかったため、不死人は門の前から立ち去り、三つの出入り口のうち、最後に残った一つへ向かう。

そこは大きな鉄格子の門と正対に位置する、厚い木で頑丈に造られた、しかし他に比べれば小さめの門であった。

開いたままの状態にて放置されているこの門を潜ると、地面が土から敷き詰められた石に変わり、そして入ってすぐの通路の左右両方には鉄の扉のようなものが存在したが、どちらも内側から半ば食い破られるように破壊されていたため、そこを通り抜けるのは不可能であるようだ。

壊れた扉は奇怪な様相を帯びてはいたが、意味するところは不明であり、不死人はそれを捨て置いて正面に向き直ると、直進して奥へと進み、行き止まりの壁に立てかけられた上へ向かって伸びる梯子を見付ける。

梯子に手を掛け、登ろうとした時、上の方から亡者の呼吸音らしきものが耳に届く。

ゆつくりと首を上に向け、梯子の先にある天井に空いた穴の向こうの様子を探るが、こちらに反応して何か仕掛けようとするような気配は感じ取れず、しばらくそのままの姿勢で時を過ごすのが何も起こらなかつたため、不死人はそのまま軋む梯子を登りきる。

穴から出た際に目に飛び込んできたその場所は、観客席ではあつたが、しかし普通のそれではない、明らかに待遇の良い者達が座する特別な席であるようだ。

他の観客席との違い背もたれが付き、或いはごく丁重に裝飾の施された椅子が並んでおり、その内の一つに亡者が一匹座り込み、どこか遠くを眺めているようであった。

亡者は、今までのそれには見られないような身なりで整っていた。黒地の服に、金の刺繍が這い、意匠の良し悪しまで語らずとも、素材や製作のための手間からしてそれが高級なものであると理解出来た。

こちらは特に気配を潜めているつもりは無く、にも関わらずその亡者は無関心のままであつたため、不死人はその背に近付くと、首を目掛けてブロードソードを振り抜く。

一撃で首と胴は分かたれ、あつけなく亡者は崩れ落ちる。横たわつた身体の懐を漁ると手に金物の感触が当たり、取り出してそれを見たところ、掌の上に金色の鍵があつた。

他に硬貨などもその亡者から手に入れ、他に何も所持していない事を確認すると、次に観客席の奥にある通路へと向かう。

円形闘技場とは真逆の方向へとその通路は伸びており、不死人はこれを真つ直ぐ歩き出し、だがそれも束の間、すぐに足を止め、手近な壁に身を隠す。

通路の更に奥には、馬車が一台通ることが出来る程度の大きさの門があり、そしてその門の左右それぞれには、一体ずつ騎士らしき恰好をした者達の姿があつた。

左の騎士は壁に寄りかかるように倒れ、天を仰ぎ見ているが、右の騎士は門を警護するかの如く直立し、健在な様子である。

そして騎士らしい、と曖昧な印象を受けたのには理由があり、騎士の甲冑自体は普通のプレートアーマーのようではあるが、それを着込む騎士自身の身体が妙であった。

背丈は普通の人間よりも一回り大きく、だが身体全体が大きいのではなく、他の部位に比べ腕と足が長くなっていた。どうやらそのせいで関節部分を覆う鎧を装着出来ず、所々剥き出しの肌を晒したままである。

黒いマントを背中から流し、フェイスガードの開いた兜から覗く眼は他の亡者と同じく虚ろだが、少し赤味を帯びており、身体つきの歪さも相まって忌まわしい者の気配を纏っていた。

目下のところ、不死人がこの先へ行くためには騎士の亡者が守っている扉を調べなければならず、即ち騎士には何らかの対処をしなくてはならない。戦うべきか、搦め手を講じるか。

後者であれば妙案があり、上手く事が運ぶか定かでないが、先程首を刎ねた亡者の服を拝借し、それで目を欺くという方法である。

あの騎士は正気を失って尚、扉に寄り添って立ち、その姿には風化していく騎士に通じるものがあつた。故に貴賓として来場する者の恰好をしてしまえば、自身の矜持とまではいかなくとも、職務に懸けて、攻撃はして来ないかもしれない。

しばらく悩み、だが結局、戦闘は避けずに行うこととした。その理由は、この先で同

じような敵と遭遇する場合を考慮し、一対一で戦えるこの状況にて、少しでも敵の手札を探るべきであると判断したためであった。

紅の双眸の前に不死人は姿を晒し、ゆつくりと歩み寄る。対して騎士は、こちらの姿を認めるや、右手で腰の鞘から直剣を抜き、左手の盾を構え、臨戦体勢となる。

「お、おお、おう」

他の亡者と変わりない呻き声を発しながら、騎士は異様に長い腕で剣を流すように上から下へ、構えを動かし、おそらくはいつでも迎え撃つことが出来るのだろう。敵を知ること重要な目的でもあるため、敢えて誘いに乗るのも悪くは無いが、そうするより早く、相手に動きが見られる。

その音には聞き覚えがあった。騎士は虚空を斬るようにして直剣を振ると、そこから硬く閉じた唇から漏れるような破裂音が一瞬響き、即座に不死人は身構えるも、だが何も起こらずに時が過ぎる。

変化があったのは騎士の亡者自身であった。剣から生まれた大量の影は持ち主の全身を覆い尽くし、やがて靄のような状態となったそれを騎士は纏う。自らに特殊な効果を付与する魔法だろうか。

こちらから攻撃を仕掛けることは出来なくなった。黒い靄が双方にどのような効果を齎すのが不明であったため、不死人は様子を見るべく、その場で塔のカイトシール

ドを構える。

そうして動かずにいると、騎士は直剣の先をこちらに向け、するとすぐにまた破裂音が短く断続的に鳴り響く。そのロングソードの向け方と、そして騎士の目が狙い定めるそれであつたため直感が働き、不死人は横合いに飛ぶ。

身体の側を黒い塊が通過していった。言わずもがな攻撃の魔法であるそれは、標的を捉られぬまま石の壁に直撃し、大袈裟な現象こそ見せなかつたものの、壁を無理矢理押し込み歪ませていた。驚異的な威力である。

この一幕にて騎士の得意とする領分の凡その見当がつきはじめ、だが反撃の機会はまだ訪れず、不死人は不意に距離を詰めてきた騎士の亡者の直剣を塔のカイトシールドで受け止める。

ロングソードの一撃は重く、しかし騎士は自らの斬撃が盾に阻まれるとそれ以上押し込もうとせず、引き戻して別の角度から直剣を振るうつもりのもりであった。

剣戟が始まった。繰り出された亡者の直剣の突きを、不死人は身体の芯をずらすようにして躲し、直後右手に握った剣を敵の胴目掛けて走らせ、その行く先には敵の盾が現れるが、防御は事前の予測にあつた。

不死人はブロードソードを相手の盾を打つ前に手元に戻し、代わりにそこへ身体全体の体重を乗せた蹴りを入れる。

すると上手い具合に敵の体勢が崩れ、騎士の亡者は大いに隙を晒し、間髪入れずに劍の煌きが相手の腹に届いた。

「ぐうっ」

騎士は呻き、その腹部には裂傷が生まれる。だが、踏み込み、深く斬り付けた際の手応えとは裏腹に、そこに出来た傷は明らかに小さなものであった。つまりそれが、騎士が纏っている黒い靄の作用であるということだ。

騎士の亡者は一撃を加えられた後、すぐに姿勢を取り直すと、直劍を横に払って距離を取ろうとし、そうさせるかどうかの主導権はまだこちらが有していたが、黒い靄がある以上深追いは禁物か。不死人もまた下がる。

## 第6章 貴族街 2

間合いが開いてからの騎士の亡者は、最初に剣を上段に構え、そこから徐々にこちらに切つ先を向けるような構えに移行し、その度右方向へ悠々と身体を流している。

攻撃を誘っているつもりなのだろうか。その動作は正気を失った亡者とは思えないほど洗練されており、手足が異様に長いことに目を瞑れば、優雅とさえ見えたかもしれない。

そうして騎士の舞踏を眺めながら、しかし眺めるだけに留める。理由は明白、時間が味方しているのは不死人の側であり、そのまましばらくが経つと、騎士が纏っていた黒い靄はやがて霧散する。

それを見届け、不死人は踏み込むと、騎士との距離を詰め気味にしてから剣を振るう。金輪際、魔法を使わせるつもりは無かった。

これに対応して騎士はこちらの攻撃を盾で防ぎ、同時にその盾の側面の縁を滑らせるようにして繰り出された直剣の突きを、不死人は軽く身体を捻って躲し、そしてもう一度防御を崩すべく、敵の盾目掛けて蹴りを放とうと予備動作を作る。この瞬間、相手の直剣は事前の攻撃の面影を残し、盾の横に触れたままであった。

破裂音が鳴る。しかし不死人の重心は既に蹴りの動きに乗って身体中を駆けており、今からではどうあってもこれを止める術はない。騎士の直剣は黒い影を生み出し、それは瞬く間に剣先が触れていた盾を飲み込み、するとそこに半球体が生まれ、この上に蹴りが触れる。触れてしまう。

途端、不死人の身体は吹き飛んでいた。蹴りを放った足が付け根から千切れるかという程、凄まじい反発力が盾に備わっていたが故の現象であり、宙を飛んだ身体は通路の壁に打ち付けられ、それでも止まらず観客席の方にまで転がる。

その魔法の作用は、単に強い、或いは激しい、などという言葉では表せず、まるでこの世界の基本的なルールを侵してさえいるかのような、奇怪な性質を孕んでいるものであった。

木製の座席をいくつか砕き、それによって衝撃を吸収された不死人の身体は漸く止まり、うつ伏せになって倒れるが、顔を上げると、こちらに向かって走り出した騎士の亡者の姿を見付けたため、負傷した身体に喝を入れ飛び起きる。

出血は無く、盾を蹴った右足も支障なく動かせるようだが、首や背に違和感があった。壁や椅子に打ち付けた部位のダメージが大きいということとは、盾に反発力を付与する魔法そのものには攻撃力のようなものは無いと見える。

ブロードソードと塔のカイトシールドを構え、騎士の挙動に注視する。敵は走る勢い



そのままに、直剣による刺突攻撃を行うつもりであったようだが、それなりに重いその一撃を盾でしっかり受け止めると、即座、反撃として剣を振り抜く。

脇腹目掛けて一直線に銀の光は走り、しかし騎士の亡者は腰を引いてこれを躲すと、すぐに軸足で床を踏み締め、反対側の足で長く踏み込み、不死人に向かって縦に直剣を振る。

足運びの距離が追加されたことで自然それは他の一撃よりも重く、だがそれ故に遅かった。身体を半身にし、上から下へ振り抜かれた騎士のロングソードを空振りに終わらせる。

直剣は床に当たってけたたましい音を発し、一方で隙を見せている騎士の胴に、不死人は剣による斬撃を与える。先の魔法の効果が切れたためか、今度の負傷は小さくないものであった。

畳み掛けようとブロードソードを振りかぶり、しかし騎士の亡者が取り直すのが早く、連撃の二発目は盾によって阻まれていた。

ふと騎士が構えた盾に添えられた直剣の先が目に入る。見逃すことなく、盾の横を滑らせるようにして鋭く突き出された騎士のロングソードを躲し、次に反撃の素振りを見せるべく、不死人は少し大袈裟な動きを取る。

するとやはり、破裂音が鳴っていた。騎士の亡者は魔法を施した盾で迎え撃つつもり

であつたようだが、生憎と乗つてはやれず、劍と盾とを合わせたまま隙を晒している敵の後ろに回り込み、腰より少し上の辺りにブロードソードを突き刺す。

「はい」

不死人は呼気を漏らすきりで成す術の無い騎士の体を、宙に持ち上がるくらいに柄に力を込めて貫き、やがて黄土色の肌に沈み込んだ劍を引き抜くと、石畳の上に転がるそれを蹴り、最早動き出さないことを確認する。

異質な業を用いる敵であつた。だが獄吏が使つたものとも似ており、この地域ではそう珍しいものではない可能性もある。

隼石を胸元で碎き、身体を治癒しながら騎士の亡者の懐を漁ると、そこから出た幾ばくかの硬貨や隼石を奪う。念の為もう一方の、最初から動かなかつた壁にもたれて倒れる騎士の懐も探るが、こちらは何も持つていなかつたようだ。

それを終えると、不死人は通路奥の扉の方に向いてこれを調べる。扉には鍵が掛かつており、そのままでは押しても引いても開くことはなかつたが、これに描かれた絵柄と、先程貴賓席の亡者から手に入れた金色の鍵に相似した趣があつた。

懐から取り出した鍵を鍵穴に差し込み、回したところ、扉は無事に開いたため、その奥へと足を踏み入れる。

格調高い外観の建造物が所狭しと並ぶその場所は、おそらく貴族街と呼ぶべき地区で

ある。

ステンドグラスが嵌る窓や、壁や石柱などの至るところに掘り込まれた精巧な模様だが、ここに住まう者達の富を表しているようだが、それらが最も美しかった時代からはあまりに時が経ってしまったのだろう。全ては欠け、砕け、朽ち果てようとしていた。

「お？ おおう」

その声は不死人が開いたばかりの扉からすぐ近く、建物の玄関前にある低い階段に腰掛けている男性から掛けられたものであった。

「そんな場所から人が来るなんてなあ、はじめてのことだ。いや、多分はじめてだ。きつとな」

男性の顔にはまだ生気が宿っており、亡者ではないようだが、年若い、痩せさらばえているため、あまり大差ない見てくれであった。

「旅の方か、この滅びた地に何を求めているのか分からないが、良かったら話でもしていかないかね」

話、というのがまるで区分無く、特に何について語るのかは不明であったが、集められる情報は何でも集めるべきである。不死人は男性の言葉に頷いた。

「うむ、この国はな、それは豊かだったさ。周壁の外には広大な農地があり、海がその恵みを絶やすことは無く、貧困に喘ぐような者は居なかつたよ。それに海と周壁と森が

この地を守り、故に攻め落とすのは非常に難しかった」

男性は唾を飲み込み、膝の上に置いていた手を少し握る。話の内容と態度から察するに、彼は誰かに話を聞かせたいようだ。余計な口は挟まず、男性が続きを話すのを待つ。

「それが慢心を呼んでしまった。結果、この国は二度の戦いで狂い、そして立ち直る力も無く、そのまま滅んでいった」

掌を開き、彼は自分の髭を触りながら、向かいにある建物を眺める。そこは他と同様朽ちており、人が生活出来るような彩度を失っていたが、彼には別の物が見えるのだろうか。

「想像したまえ。己の命より遥かに大事な者達に囲まれ、毎日を送り、幸福に溺れ続け、しかしある時、愛する者達は全て連れ去られ、そして、二度と戻っては来なかった。私にも当時まだ小さかった娘達が居てな。奪っていった者達への憎しみに耐える為に、あらゆるものに縋り付いたよ。だから、私には彼等の気持ちがよく分かる」

彼等、とは誰のことなのか。不意に滑ったような怪しげな風が通り抜け、二人ともそれが向かう先、街の方へと視線を向ける。

「リングレイの貴族達は特に、一人残らず若者が連れ去られた。街に取り残された老人達は、だが誇りは失わず、以降それまでに無い業の数々を手に入れ、そして今では怪しげな儀式に耽っていると聞く」

そこで一度話を切り替える為か、男性は手で膝を叩き、不死人の顔を見る。

「さて、話が長くなってすまないな。ともあれ、この先に向かうのなら何か入用になるだろう？ あまり多くは持つていないが、売つてやれるぞ。ああ、硬貨か。勿論良いとも。この国の人間として、それを拒んだりはいしないさ」

男性は脇に置いてあつた大きな木箱の中からいくつももの鞆を取り出し、これの中身を広げると、そこから投げナイフや火炎壺、何かの丸薬と樹脂、そして馴染み深い大小様々な隼石が出る。

必要な物をいくつか取引し、それらをすぐに取り出せる場所に仕舞い込むと、不死人はいよいよ貴族街に踏み込むことを男性に告げ、その場を去る。

「奴らに目玉を取られないよう気を付けて行け」

背に掛けられた言葉の意味は不明瞭であつたが、しかし実際に見てみれば分かることなのだろう。貴族街に向かつて歩いて行く。

## 第6章 貴族街 3

地面の石畳は、その一つ一つが中央広場や居住区画よりも綺麗に並べられていた。感心しながら、しかし地面にばかり目を向けたままではある訳にもいかず、顔を上げて進んで行くと、程無くして到着したのは貴族達の館と思しき建物を両側に並ばせる、大きな通りの入り口であった。

この大通りの南西の方角には壊れた馬車が数十と詰って通行が出来なくなっており、それは溝の溜まり池で目にしたものと酷似した光景であった。偶然ではないのだろうか。方角から推察するに、大通りの南西の先はアリーナを迂回して溝の溜まり池付近に繋がっている風ではある。

その一方、馬車の積まれた地点の反対側、大通り北東方向が王城への道となるが、途中、道を跨ぐ巨大なアーチがあり、この下では門が閉ざされ、潜ることを拒否していた。何かの模様が描かれた門は大きく、単なる手動では開かない類のものである。近付いて仕掛けの詳細を調べる必要があるが、迂闊にそうすることは躊躇われた。

その近辺には身を隠せるような物が無く、逆に大通りの両側に建つ数階建ての館からは一方的にこちらを見る事が出来る。魔法どころか、投石さえ大きな脅威となる地形

であつた。

不死人はなるべく通りの端に寄りながら門へと歩み寄つていく。並ぶ館の窓の奥の暗闇が何を隠しているのか、考え始めればきりが無いが、想像上のそれを実際に目にすることはなく、不死人は無事に門の前に辿り着く。

門に施された装飾は、花の形をしていた。幾重にもなる花弁と、棘の付いた茎が描かれており、ということはずまり、その花は薔薇であるのだろう。門の構造としては、上下に可動することで開閉する様式であり、動作にはレバーのようなものが必要になると思われる。

ざつと周囲を見回したものの、それらしいものは見当たらず、だがそもそもここは王城へ至る道の途中であり、もしもアーチと門が敵の侵攻を遅らせる目的で設置されているのであれば、門のこちら側に開閉装置はあるべきではない。

通行を断念するか、それでなければ薔薇模様の門を作動させる以外の方法で向こう側に行かなければならなかつた。

不死人は手近な館のいくつかに目を向け、殆どが出入り口の閉ざされたそれらの中に、大通りの左に建つ一つがその玄関の扉を開いたままにしているのを見付ける。

窓は締め切つているのか、館の中は薄暗く、如何にも怪異を飼つていそうではあつたが、しかしリングレイの地でそれは今更というもの。覚悟を決め、館の中に足を踏み入

れる。

板張りの床の上には、濃厚な赤色をした絨毯が敷かれていた。それは柔らかかなため、上を歩けば易々と足音は出ないようだが、条件は敵も同じだろう。どの道慎重に進まざるを得なかった。

壁にはしつかりと壁紙が張られ、或いは額に入った絵画や、また家具一つとつても上質なものであり、そういった部分において中央広場付近で見た庶民の家とは違いがあり、暮らし振りの差が出ていた。

「う、むっ、うむう」

廊下の奥からの声であった。顎や舌の筋肉が弱いのか、他の亡者に比べて覇気の無い調子で呻くそれは、間も無く影から姿を現し、不死人に武器を向ける。

背は低く、子供と見紛うほどであるが、単に身長が低いのではなく、背骨を曲げて立っているが故にそう見えるようだ。黒ずんだ、しかし元はおそらく煌びやかであった衣装を纏い、手にした武器は刺剣、レイピアの一種だろうか。

貴族街入り口で出会った男性の話にあった、貴族の老人であるのだろうか。そして正気を失った亡者でもあり、こちらを見付けて警戒をしている様子であった。

「いはんっ、むむむむっ」

早速仕掛けるつもりようだ。敵は不気味に唸りながらレイピアの先をこちらに向



け、逆の手は空けたまま宙に浮かせると念じるように力を込め、だが破裂音が響く直前、不死人の投げたナイフが老人貴族の亡者の顔に刺さり、魔法の詠唱は中断される。

廊下のような狭い場所で魔法を撃たれば、まさか、曲芸のようにそれを飛び越える訳にもいかず、防御しか選択肢が無い。

ならば、撃たせてはならない。顔に裂傷を負ったことで怯み、僅かに後ろへたたらを踏む老人貴族との距離を一気に詰め、不死人はブロードソードを振りかぶるも、その一振りに割り込むように差し出されたレイピアの突きに浅く胸を切られ、それ以上進めずに一步分下がる。

しかし引いた身体を、老人貴族の亡者は逃さなかった。驚くべき踏み込みの長さで相手は迫り、こちらに追撃を仕掛けようとレイピアで突き込む。

危うく串刺しになるところを塔のカイトシールドで防ぎ、次にこちらからも反撃を試みようと剣を握るものの、その攻撃の意が現れ、一瞬間の防御が疎かになったところを再び付け込まれる形で敵の鋭い突きが喉仏に迫る。

咄嗟に不死人は上半身を逸らし気味にしながら後方へ飛び退き、亡者の攻撃から逃れ、そのまま敵から少し距離を取る。

優勢は対敵に傾いていた。今までこちらに出来たことと言えば逃げる事と防ぐ事、それから投げナイフを一度当てたことだけであり、いずれも相手の戦闘力を殺ぐような結

果には繋がっていない。

その理由は剣技の差にあり、武器の特性と併せて敵の攻撃の方が遥かに素早く、そして届く範囲が長い。こちらが攻撃を繰り出そうとしても、その後から行動し始めた老人貴族に先を制される。

よって剣の刺し合いは不利であり、まして技を比べるような真似など論外だろう。であれば、他の手段を用いるべきである。

不死人はブロードソードを一度鞘に納め、両手で塔のカイトシールドを持つと、盾を前面にして頭を下げた体勢で走り出し、レイピアで迎撃の構えを見せる老人貴族に対して全力の突撃を行う。

そして繰り出されるレイピアの突きを盾で弾きながら、質量と速度の乗算により一つの威力と化した不死人の身体は老人貴族の亡者に激突し、そのまま吹き飛ばした。いくらか鋭かるうが、重さのまるで無いレイピアでこの攻撃を止めることは叶わなかったのだ。

「いっしょ」

呻きながら老人貴族は床に倒れ込み、すかさず不死人はその上に馬乗りになると、両手で持った塔のカイトシールドを持ち上げ、その縁を蹴だらけの頭に叩き付ける。

返り血に塗れ、砕けた頭蓋の欠片が顔に付着して尚、何度も敵の頭を叩き、そして完

全に潰れて無くなるまで続けると、ようやく手を止め、立ち上がった。周囲を見る。

塔のカイトシールドで老人貴族を吹き飛ばした際、存外飛び過ぎたのか、不死人が今居る場所は廊下の奥の方であり、身体に付着した血はその殆どが、締め切った窓の生んだ暗がりによって覆われているようであった。

周囲に他の敵が居ないことを確認し、一息ついたあと、不死人は室内の探索を再開する。

廊下の各所にある扉を一通り調べるも、どれも全て閉ざされており、それは施錠してそうなっているものもあれば、板を打ち込んで嚴重に封じられている箇所もあった。

いずれも破壊して進むには手間が掛かり、そうせずに進める場所があるとすれば、それは上に続く階段のみであった。不死人は草の蔓のような模様の描かれた手摺に捕まりながら、これを登っていく。

「うえええう」

階段が終わり手摺から手を離れた頃、再び別の老人貴族の亡者が出現する。相変わらず狭い廊下で、その条件に適した武器であるレイピアを持ってこちらに迫り来ようとしていた。

走りながら突きを繰り出すのかと思えば、老人貴族はこちらの少し手前で急に止まり、そして破裂音が響く。不死人は単純にレイピアの攻撃を警戒していたため、反応が

遅れてしまい、今からでは魔法の発動は防ぎようもなく、止むを得ずその場で身構え異変に備える。

## 第6章 貴族街 4

だが詠唱後、それらしい魔法が飛んでくるというようなことは無く、数瞬そのままの姿勢でいると、唐突に廊下に突き出した手摺の先が弾け飛ぶ。それを見て急ぎ後退すると、不可視の破壊は手摺の先の方から順に食い潰すかのように広がり、階段の半ばにまで及んだ後にやっと止まる。

運行情の魔法だが、範囲が広く、威力の作用の仕方が異様であった。周辺に残る破壊の痕は大したものではないが、人間がそれを受けた場合、おそらく防御が出来ず、盾や鎧の内側を壊すのだろう。

一度目の今は運良く躲すことが出来たが、狭い室内では立ち回り次第で逃げられなくなることも十分に考えられる。二度目をやらせてはならなかった。

不死人は荒れた階段を登りながら塔のカイトシールドを両手に持ち替え、そして登りきって老人貴族の亡者の姿を見付けると、一も二も無く駆け出し、身体の前面に盾を構えての突撃を行う。

腕に衝撃が伝わった直後、小さく軽い身体はよく吹き飛んだ。そうしてそれが壁に打ち付けられたところを見るや、不死人は老人貴族の身体が床に落ちる前にその頭を左手

で抑え、今度は手際良く、右手で握ったブロードソードを首に刺し込み、縦に押し広げてこの部分の肉を分割する。

「おおおうう」

別の者の声であった。廊下の奥に目を向けると、そこに居たもう一匹の老人貴族の亡者は既にレイピアを翳しており、短く破裂音が響くと同時、その足元から黒い波紋が広がっていく。

身構えるが遅く、次の瞬間理解しかねる方向からの衝撃が起こる。勢い良く浮き上がった身体はそのまま垂直方向へ吹き飛ばされ、不死人は天井へ強かに背を打ち付けていた。

その威力も然ることながら、何がどうなつてその方角から攻撃されたのか不明であり、だが明らかにする時間は無く、悠々と近付いてくる老人貴族の足音を聞きつける。

起き上がるも負傷は甚大、既に死に体であり、だが、或いはだからこそ、亡者から繰り出されたレイピアの突きは、不死人の左手の盾が正確なタイミングで弾き返していた。

そうなれば敵は隙を晒し、間髪入れず不死人はブロードソードを上段に構え、老人貴族を斬り伏せる。

絨毯に倒れたまま喀血し、それきり老人貴族は動かなくなる。

窮地ではあつたが、それ故に刺激されたものがあつたか。それは良いとして、そもそもこちらを窮地に追いやった魔法の事が未だ理解の外にあつた。

床から上へ突き抜ける力は、どのような規則の元で発動されたのだろうか。考えたところで分かることではなく、その件を保留にし、不死人は雫石で傷を癒したあと、斃した老人貴族達の懐を漁ろうとする。

しかし付近にて見付かつたのは、一匹分の老人貴族の軀のみであつた。首を切り取つた筈のもう一匹の姿はどこにも無く、その状態で動き回る筈も無からうが、しかしそれらしい衣装とレイピアの目が抜け殻のように絨毯の上に転がつている。上に突き抜ける魔法でどこかに吹き飛ばされたにしては、不自然極まりない。

その一方で、斬り伏せられた老人貴族の亡者の懐からは、いくつかの雫石と小さな何かの器具が転がり出る。器具は先が丸くなったものであり、まさかこれで目玉でも刳り貫くつもりであつたのだろうか。貴族街入り口に居た男性の忠告が蘇る。

亡者か狂人でもなければ使い道の無いその器具を捨て、不死人は探索を再開する。

暗い廊下を進み、閉ざされた扉や窓を一つ一つ確かめるも、いずれも固く閉ざされておき、闇を生み出す助けとなつている。彼らは光を嫌つたのだろうか、それとも闇を好んだのだろうか。

またしても進める場所は上の階段しかなくなり、先に登つたものと同じ、草の蔓の模

様が描かれた手摺の上で掌を滑らせ、館の三階へと至る。

その階は特段変わったものは無く、だが少しだけ明るいような気配があった。どうやら廊下の一番奥の窓が開いている様子で、そして見た限りでは光の届く範囲に亡者達の姿は無い。

とは言え、待ち伏せや騙しは彼らの得意とするところ。壁の死角に気を払い、閉ざされた扉の奥に耳を澄ませながら、不死人は窓に近寄る。

室内に向かつて白いカーテンが緩く揺れていた。この向こうに顔を突き出すと、そこには瓦で出来た屋根が広がっており、少し斜めにはなっているが足場として進めないこともない。

窓と屋根の境を跨ぎ、瓦の上に足を乗せる。あまり踏み締めれば瓦が抜け落ち、そのまま足を滑らせて屋根の下にまで落下する恐れがあるため、不死人はなるべく手も瓦に着け、伏せるようにして屋根の上に出る。

「うおおおおう」

突然にして偶然の出会いにより、両者は半端な距離で目を合わせてしまっていた。否、待ち伏せであったのか、屋根の起伏の影に居た老人貴族の亡者は、不死人を見付けるとレイピアを持ち、魔法を詠唱する素振りを見せる。

それを中断させるには駆け寄って攻撃を加えるか、もしくはその場から遠距離の攻撃



にて牽制しなければならぬが、足場が不安定であるので前者は選べず、かと言ってこのように傾斜があり、しかも屋外で投げナイフを飛ばせば確実に回収不可能になる。

逡巡が僅かな時間の空白を生み出していた。一瞬遅れで不死人は投げナイフを投擲し、それは老人貴族の顔に当たったものの、既に魔法は発動していた。

黒い霧のようなものが敵のレイピアを薄く覆い、破裂音を小さくしたものを絶えず響かせ、老人貴族はこの状態のレイピアを構えると、やがて不死人に向かって走り出した。

回避か防御をしなければならぬが、明らかに禍々しい有り様のレイピアを防ぐのは得策ではないだろう。回避するべく不死人は腰を屈め、いつでも動けるような姿勢を取る。

そのまま敵の攻撃を待ち、だが急に身体の向きが崩れる。どうやらその時に踏んでいた瓦が抜け落ちたらしく、屋根の上で転げてしまい、落下しないよう他の瓦を掴むのが精一杯であった。

すぐには起き上がれる状態ではなくなったが、敵はその事情を汲まずに既に至近にまで迫っていた。やがて虫の羽音のような響きを聞かせるレイピアの突きが繰り返され、だが諦めずに屋根の上を転がり、上手く老人貴族の攻撃を回避する。

そして背筋の凍るような光景を目にすることとなった。レイピアは的を外れ、屋根の上に突き刺さるが、その部分の周囲は円を描くようにうずまきながら中心に向かって引

き込まれていき、屋根と瓦を滅茶苦茶に破壊してしまっていた。

現象として階段の手摺を喰い潰した魔法と似通ったものがあるが、あれよりも渦巻く際の力の加わり方が段違いに強く、もしも人体に使ったのであれば、肉も骨も内側に巻き込まれて裏返し、訳の分からぬまま肉塊と化していただろう。

レイピアに何か適当な物を喰わせて封じることが出来るだろうが、そもそも詠唱させること自体が間違いである。不死人は飛び起きると、即座に老人貴族に投げナイフを浴びせ、怯んだ隙に塔のカイトシールドにて屋根の上から叩き落した。

脅威を排除し、気を静めてから周囲の景色を眺める。

現在地は大通りの左に並ぶ館の屋根の上であり、西には海が見え、北の方には王城の姿がある。もう少し付近に目を向けると、屋根の端の方には手作りの短い橋が架かっており、それは隣の館の屋根の上に繋がっているようであった。

何の目的で作られた橋なのかは分からないが、それが進むべき道なのだろう。安全に渡ることが出来るか、少し揺らして確かめた後、不死人は軋む木の橋を渡って隣の建物の屋根に移動する。

遠くからでは分からなかったが、近付けば瓦の色や、屋根の形そのものに違いがあることが見て取れた。ここは先程まで居た館のおおよそ北の方角に隣接している建物であり、やはりこれも貴族達の住まいであったのだろう。

屋根の上を探索すると、すぐに開いたままになっている窓が一つ見付かる。人が通れるだけの十分な大きさがあつたため、不死人は耳を澄ませながら、その中へと侵入する。暗闇に浸かる瞬間は、そうするのが常であつた。

「おおおううううう」

室内に入つて間も無く、部屋の奥から亡者の呻きのようなものが響く。こちらに向かつて来ているような気配はせず、不死人はしばらくの間そのまま敵の攻撃に備えるが、何事も起こらぬまま主張の曖昧な音声がずっと続いていた。

そのまま時が過ぎるのに任せていると、しかし状況に変化は無い。埒が明かず、だが目に入つた光景に僅かに違和感を覚えたため、前進を躊躇い、その場から室内をよく観察する。

まず床には、向こうの館にはあつた絨毯が敷かれておらず、剥き出しの木の板が並んでいる。それは最初から無かつただけかと思えば、しかし剥がすだけの理由があつたらしい現場がそこにあつた。

## 第6章 貴族街 5

乾いて尚、生々しさを残す血の跡が、床の至る所に広がっていた。リングレイは亡者に溢れ、故に暴力の坩堝と化しているが、この血塗れの床は単なる鬭争の名残と違い、惨たらしさや穢らわしさを想起させるものであった。

飛び散った血の跡を観察していると、隅の方に血の汚れが床の一部を直角に避けている部分を見付け、つまり一度絨毯を敷いている状態で血が流され、それでは満ち足りずに絨毯を退かした後でもまた血が流されたのだろう。

更に室内の奥には、先の丸まった小さな器具がいくつも床に散らばり、それを見れば最早大体の見当は付くというもの。不死人はずっと耳に届いている呻きのする方へと向かう。

声は部屋の一つ、僅かに開いた扉の隙間から漏れ出ていた。通常であれば最大に警戒して扉を開けるものだが、今回その必要はあまりないだろう。扉を開き、中を確かめる。部屋の中に居たのは、顔の一部以外の全てを黄色い布で巻き、そのまま横に倒して捨て置かれた亡者であった。それも一匹だけではなく、数匹、動く者、動かぬ者が混在している。

このような状態で目の周りの布だけを開き、彼らの瞳に光を与えて何になるのかと言えば、真実はその逆、光を完全に奪うべく、彼らの眼球は一様に抜き取られてしまっていた。

目玉を欲する、目を刳り貫くという行為にどのような意味があるのか分からないが、どうやら老人貴族達の目玉への執着は、尋常な人間では計り得ないものがあるらしい。貴族街入口に居た男性曰く、老人貴族達は怪しげな儀式に耽っているそうだが、それに目玉が関係しているのだろうか。

痛ましい呻きはまだ絶えず、放っておけばそれはずっと続くだろうが、彼らは不死故に亡者。苦痛に苛まれているとは言え、斬ったところで一時的な解放にしかならず、あまり意味は無いだろう。放置することに決め、その場から去る。

その階にはそれ以上調べるものが無くなり、不死人は階段を探し出すとそれを降り、下の階へと向かった。

血の跡は階段にまで及んでいた。壁紙も汚れが目立ち、だが破れているような部分は見られない。争ったような痕跡は無く、一方的な処理の現場であったのだろう。

「うむっ、うむむむんっ」

階段を降りた瞬間、上の階に居る被害者達とは別の呻き声が耳に届く。暗闇ではあつたが、詠唱の際に振ったのだろう、微かに銀色の刀身が翻った際の光が目に入り、不死

人は咄嗟にその光りを頼りに投げナイフを放つ。

「れうっ」

牽制が命中したのか、それらしい亡者の声を聞き付けたため、間髪入れずに暗がりをも駆け出し、剣ではなく盾を前に出して身体ごと相手にぶつかる。

敵の身体は吹き飛んで床に落ち、不死人はすぐにその肩を後ろから捕まえると、背中からブロードソードで突き刺す。鎧も何も身に着けていないためか、刃は抵抗無くその身体を貫き、間も無く老人貴族は動かなくなった。

不死人はすぐにその軽い身体を打ち捨て、周囲を警戒するも、こちらに手向かおうとする者が他に居るような気配はなかったため、一息つく。彼らは闇に慣れ親しんでいるのだろうか、今的一幕の始まりでは、向こうがこちらを発見する方がその逆よりも早かった。

老人貴族の懐を漁り、雫石のみの戦利品を仕舞う。その後立ち止まったまま周囲をざっと見回すと、廊下の奥にある部屋の入りに目を引く物があった。

それは高く積まれた数十にも及ぶ数の、長い麻袋であった。丁度人間の身長と同じくらい的全長の袋は、そのうちの一つが破れ、やはり被害者が頭部を覗かせていた。勿論、目玉は取られているようである。

廊下の一角がその状態であったため、この近辺では進める場所が少ない。不死人はこ

の階の探索に早々に見切りを付け、下の階に向かう階段を見付けると、それを降りていくことにした。

降りた先は地上と同じ高さにある階の筈だが、階段の下にまで詰め込まれた麻袋を見るに、外へと通じる出入り口を発見することが出来るかどうか、聊か怪しいものであった。

足の踏み場も無く、廊下の床や絨毯を見ることが出来ないほどに麻袋は多いため、止むを得ず不死人は麻袋の上を歩き、出口への扉を探し回る。

足の裏に触る骨ばった出っ張りは、露骨に被害者達の身体の部位を想像させた。小心な者がこの上を歩いたなら、己の足を遺体に掴まれる妄想でもしてしまいかもしれないが、ただし遺体の中に亡者が混じっている可能性も十分に考えられるため、妄想では済まないことも在り得るだろう。

積まれた麻袋に妨げられ、調べるところか進むことすら困難な場所が多く、だが大通りに面している方角を予想しながらそれを室内の間取りと照らし合わせ、目処を立てた方向へ進んで行くと、それらしい扉が見付かる。

どうやらそれが当たりの扉であったようだ。不死人は鍵の掛かっていなかったその扉に手を当て、ゆっくりと外に向かって開き、屋外に出る。

日の光を浴びて眩さに瞼を閉じ、徐々に慣らしてから不死人が見たものは、薔薇模様

の門より北側の大通りであった。二つの館を巡った結果、王城へ少し近付くことが叶ったようだ。

だが大通りの先にはもう一つのアーチと門が道を閉ざしたまま立ち塞がっており、こちらにも迂回しなければ王城へ辿り着くことは出来ないだろう。

そして今更無用ではあるかもしれないが、薔薇模様の門の足元に大きなレバーを見付ける。不死人はこれに近付き、握って力を込めると、歯車が噛み合ったような軽快な音が鳴り、次に重厚な音と振動を出しながら薔薇模様の門はアーチの中に収まるように上昇し、その通行が可能になる。

大きな音が出てしまったが、大通りに並ぶ建物の窓に人影が現れる、というようなこととは無い様子であった。この付近について他に目を引く部分は無く、不死人はもう一つのアーチと薔薇模様の門を迂回するため、どこかの館の扉が開いていないか、注意深く観察する。

だが殆どの扉は木の板で塞がれているか、或いは玄関の内側から麻袋に入った遺体が溢れ、とても通り抜けることは出来ない状態であった。結果、無事な扉はその近くに二つのみ残されている。

一つは大通りの西にある建物への扉。これに近付いて調べたところ、扉自体に損傷等は見受けられず、内側から無理な重さが掛かっているような気配も無かったため、扉の



すぐ側まで麻袋が来てはいないようだが、肝心の鍵は掛かったままであり、開くことは出来なかった。

もう一つは、大通りの東にある建物。こちらを調べてみたところ、扉は普通に開き、室内に上がることが出来るようであった。

相変わらず締め切り、暗く、そして淀んだ空気の館の中へ、不死人は足を踏み入れ、進んで行く。

その館の中は、先ほどのそれと違い、麻袋が一つたりとも見当たらなかった。しかし綺麗に片付いているのかと言えば、全くそうではない。

室内の絨毯を汚していたのは、乾いた泥や土の塊であった。そこはまるで土木作業の後のように乱雑になっており、絨毯を含む美しい調度品との対比で、部屋としての観点が捉えられない、奇妙な空間を作り出していた。

「うおおう」

亡者の呻き声が聞こえ、不死人は即座に身構える。

声の主がどのような者なのか、現時点では判然としないが、その出所は暗い廊下の奥であった。左の手に持った塔のカイトシールドをそちらに向けて構え、右手はまだブロードソードを握まず、その代わりに、今のところ老人貴族に対し高い牽制の効果が認められる投げナイフを持つ。

その姿勢のまま時を送り、だが相手からこちらに向かつてくることは無かった。老人貴族の亡者ではなく、目玉を抜かれた者が居るのだろうか。確かめなければならず、不死人は盾を構えたまま、ゆっくりと部屋の内奥へ移動する。

唐突に、陶器類が割れたような甲高い音が室内に反響した。その発生源はこちらの足元であり、つま先に何かを小突いてしまったかのような感触を残していた。

## 第6章 貴族街 6

「うえあああああああつ！」

「るあああつ！ ああああああつ！」

二匹分の叫びが廊下中に木霊する。

不死人はすぐに身体の向きを反転させ、声のした方角に背を向け出口へと走り出すが、凄まじい速度で背後に迫る何者かの足音が既に近い。故に外へ通じる扉に辿り着いた瞬間、振り返り様に塔のカイトシールドで薙ぎ、その二匹を吹き飛ばした。

気の触れたような声を上げるような性質を今まで見せてこなかったため、姿を見るまでは別の敵の可能性が想像の内にあつたが、実際に床に転がっていたのは二匹の老人貴族の亡者であつた。確かに、彼等ほど軽い身体でなければ、盾との正面衝突の際、二体纏めての体重には勝ちようも無い。

老人貴族達が叫んだ理由はさて置き、不死人は無防備を晒す手前の一匹に急いで取り付き、その敵の頭をブロードソードで叩き割ると、次の相手に向き直るが、もう一匹の老人貴族は既に起き上がり、こちらにレイピアの先を向けていた。

短い破裂音が響く。牽制は間に合いそうに無く、狭い廊下では回避のための空間が無

い。あまり良い選択とは言い難いが、他にやりようもないため、不死人は盾を構えつつ、相手から少しでも距離を取ろうとそこから飛び退く。

だが詠唱の後に現れたのは、標的に向かって一直線に飛ぶような攻撃魔法ではなく、使い手の足元から広がる黒い波紋のみであった。一瞬間の間が空き、波紋の先が床に転がる老人貴族の身体に触れると、一瞬でそれを深く飲み込み、そして次の瞬間には炸裂していた。

レイピアや衣装が宙を舞う。

彼らが扱う術の中で、一度目にしたにも関わらず発動時の効果が不明な物の正体がそれであった。仲間の身体を、或いは斃れた亡者の身体を爆発させる魔法であり、威力こそ高いが種が分かってしまえばそれほど脅威ということでもないだろう。

直前にそこから身を引き、結果としてその魔法はこちらには当たらなかったため、不死人は詠唱したばかりの亡者に投げナイフを投げ付け、相手が怯んだ隙に一息で距離を詰め、もう一度塔のカイトシールドで殴り、廊下の奥へと吹き飛ばした。

弧を描くように飛んで行く老人貴族は暗がりの奥へと転がり、するとその身体が奥にあつたいくつもの陶器類を一齐に割った為か、甲高い音が何重にもなり、大音力が響く。館の外へすら響くような音は、それを聞きつけた良からぬものをこの場に引き寄せかねないが、まず優先すべきは目の前の敵である。不死人は吹き飛ばした老人貴族を捜

し、廊下の奥へと踏み込むと、だが待っていたのは大量の土埃であった。

先程の大音量と無関係ではないのだろう、ただでさえ暗闇の中で土が室内に舞い上がることにより、こちらの視界は塞がれ、であれば敵の姿が目で見付かる筈は無い。

視覚が働かず、だとすれば次に恃みにするのは聴覚である。不死人は僅か身動きするような音を耳にし、位置の見当を付けてから、そこへ向かつて駆け出し、すると起き上がる最中にあつた老人貴族を見付ける。

このような世情でなければ保護の対象になり得るような、弱々しい身体に蹴りを入れ、蹲った背を膝で抑え込み、首を掻き切る。

そうして敵は動かなくなり、他にこちらに迫る危機が無いか、耳を澄ませて気配を探り、しかし何も起こらないことを確認してから剣を納める。

今の戦いにおいて、謎が二つあつた。一つ目は、何故老人貴族は狂態を見せたか。二つ目は、何故土埃が出てきたのか。それらの答えを得るのなら、足元に転がるそれが何であるのかを知るべきであろう。

花瓶のように見えて、しかしそれよりは厚みがある、おそらく壺の類であつた。中には骨のような物が入っているらしく、取り出して見てみると、それは人間のものであるように見受けられる。

他にはさらさらとした砂のようなものが壺の中に収まっているが、一緒に人骨が入つ

ていたことを考えれば、これは遺灰なのだろう。言うまでも無く人間の埋葬方法は地域や文化によって異なるものだが、この地方ではこのように弔うのが一般的なのだろうか。

それならばこの館では葬儀かそれに類するものを取り扱っているのかという話になるが、にしては生活に使う家具はその辺に置かれており、つまりその答えでは納得し難い。

老人貴族が怒りを見せたことに關しては、遺灰や人骨が彼等に所縁がある者達のものであり、それを収めていた壺が割られたが故にああいった反応を取った、という線が考えられるかもしれないが、仮にその事項を併せても、何故この場にあつたのか、という問いの回答には成り得そうも無い。

壺の模様なども見はしたものの、それで得られる情報は特に無く、思案はそれまでとし、館内の探索を再開することにした。

灰まみれになつた一階の廊下を奥へ進む。床の上には他の壺も置いてあるため、先ほどのように誤つてそれを割らないよう気に留めながら歩き、周囲を調べていくと、どうやら少なくとも同じ階には敵の気配は無い様子であつた。

それについては当然と言える。あれだけ大きな音を出した後なら、亡者達はすぐに気が付き、ましてそれが老人貴族であれば尚の事、敏感に反応するものだろう。

奥へ進む度に見付かる扉のノブを回し、しかしそのいずれもが開かず、閉ざされたままであつた。そして一階廊下の最奥に至ると、その右手に上の階に登る為の階段が見付かり、そこへ進もうかと手摺に手を掛け、だが思い留まつて引き返す。階段のすぐ側の部屋の扉が一つ開きかかっているのを見付けたためである。

部屋からは一切の音がしなかつた。不死人は扉に触れ、それをゆつくり押していくと、そこに一家の者達が団欒をするような、リビングルームのような広めの部屋が現れる。

その部屋は、これまで貴族街で見してきた場所の中でも、一際奇妙なものであつた。

室内に置かれた食器類、机、椅子、調度品の数々は全て磨き上げられ、埃を被つていくような部分はどこにも見当たらず、その徹底振りは、目の前の光景が夢幻の類であるのかと錯覚してしまう程である。

だが貴族街入り口の男性の言葉が正しいのなら、この街にはもう家族が食卓を囲むような機会は消え失せた筈であり、即ちこういういたた用意をしたところで無意味である。

しかし、これが残された老人達にとつての人間性のよすがであるのなら、彼らが誰かを迎える用意をしていることは、きつと何かの意味があるのだろう。確かめる術も無いが、貴族街の閉ざされた館、そしてその部屋の中には、こうした場所が多く存在しているのかもしれない。

その部屋には武器や道具は無く、この先の道程で役立ちそうなものは見付からなかったため、無意味に散らかすような真似はせずに立ち去ることにした。先程の階段まで戻り、そこを登っていく。

階段を登り終えたそこは一階の廊下とは違い、土汚れなども無く、特におかしな様子は無かった。内部の雰囲気は貴族街で最初に入った館のものに近い。すぐに次の階段を見付け、不死人は最上階となる三階へと向かう。

最上階にも老人貴族の姿は無く、部屋の中には光が差し込んでいた。流行りの色であつたのか、開いた窓から風が入り込み、白いカーテンを揺らしている。

不死人は窓の周囲に敵が潜んで居ないか、一度確認してからそれを跨ぎ、屋根の上に出る。カーテンもそうであつたが、瓦もまた他と同じような色合いをしていた。景観を統一するような意識が住民全体に働いたのか、或いは単にそういつたものは伝播し易いだけなのか。

瓦を踏みながら屋根を登り、周囲を見回して屋根同士で渡れるような場所が無いか探すも、それらしいものは見付からなかった。跳躍で移れるほど屋根の間隔は狭くはなく、そして橋も架かっていない。

進むべき道が途絶えかけ、しかし改めてもう一度周囲を観察したところ、一つの案が浮ぶ。



今いる館の屋根の上には、同じ高さで隣り合うものが一つあった。それは薔薇模様の門の上にある、石で造られたアーチである。アーチは大通りを南西に跨いで構えており、これを渡ることが出来てしまえば、大通りの西に並ぶ建物の屋根の上に移れる可能性がある。

アーチは幅が広く無いため、落下のリスクは呑まなければならぬこと、渡った先の建物も、薔薇模様の門の手前に位置しているので、その建物から確実に門の向こう側に行けるわけでは無いこと、以上の二点に留意すべきである。

懸念事項を想定してから、不死人はまず片足をアーチの上に降ろす。そこは幅が狭いとは言え、石で出来ている甲斐あつて足場の安定性では瓦とは比べ物にならないほど確かであった。

もう片方の足も降ろし、前進を試みる。

## 第6章 貴族街 7

「うおっう」

アーチの先に、好ましくないタイミングで老人貴族が出現する。ここでの戦いに時間を掛けることは即ち落下の危険を高める意味を持ち、従つてこの敵は安全性を重視しながらも、手早く片付けなければならなかつた。

不死人は今や手堅く効果を發揮する投げナイフを敵に向かつて素早く投擲し、しかし響いたのはナイフに刺されて怯む亡者の呻きではなく、まるで乾いた音であつた。革張りの軽量な盾、レーザーシールドを老人貴族は構え、これの仕業によつて投げナイフを弾いたようだ。

土壇場でそれまでのやり方を潰され、急ぎ判断を要求される状況だが、目前の老人貴族はそれを待つこと無くレイピアを構え、その途端に短く断続的に鳴る破裂音が響く。止める術は無かつた。レイピアはその切っ先を不死人に向けると、そこから黒い塊が一直線に飛び出し、だが避ける場所は無く、否応無しにそれを塔のカイトシールドで受け止める。

まるで重さで以て蝕むかのような奇怪な力を受け止めようと、盾を持った手に力に込

め、危うく取り落としそうになるところを何とか堪え凌ぎ、黒い塊の魔法をやり過ぎす。しかし、体中の力を一度に出し切ったこちらとは対照的に、老人貴族は涼しい顔をしていた。

今の魔法を何度も受け止めるような真似は避けなければならなかった。それは足場の狭さ故に、衝撃の伴う攻撃を防ごうとするのはあまりに危険である、という理由もあるが、受け止め続けていけば前進の機会が得られない、という点も忘れてはならない。

だが回避の為の足場は無く、今までのやり方では投げナイフが通じない。よって、戦い方を工夫するべきである。

不死人は所持している投げナイフの数を確かめると、残り五本の内、一本を握り締め、再び魔法を詠唱しようとしている老人貴族の亡者に向かって数歩踏み込み、それと同時にナイフを投げる。

すると当然の成り行きとして、乾いた音が鳴り、投げナイフは老人貴族の盾に簡単に弾かれ、アーチの下へ落ちていった。その後敵は再度レイピアを構えて魔法を詠唱し始め、だが不死人は同じように何歩か踏み出しつつ、投げナイフを放った。

それを老人貴族の亡者がレザーシールドで防ぎ、魔法の詠唱を再開し、その一瞬の隙を突いて不死人はまた前進し、この流れを繰り返し、徐々に互いの距離が詰っていく。

老人貴族の場合、魔法を詠唱する際は一度足を止めなくてはならないため、接近され

ていくことに慄き、後退し始めれば無防備になり、そこに追い縋って攻撃を加えられる可能性が高い。

それこそが本命の狙いであり、こちらとしては敵がいつ背を見せるか、期待しながら少しずつ前進し、しかし老人貴族はナイフの防御と魔法の詠唱を反復し、その場から動こうという気配を見せなかった。

正気を失った亡者というものは戦略を用いず、闇雲に襲い掛かるばかりで、今も不死人の企図するところを察しているとは考えにくい。だが反面恐れを知らず、それ故に亡者は今の攻防で自信が距離を詰められつつあるにも関わらず、そこから引き下がろうとしなかった。

元からナイフの本数は心許なく、そして最後の一本を投げてしまったとき、それを盾で弾いてから老人貴族は詠唱を再開するが、それを走って止めるには未だ距離を残し、間に合いそうにもなかった。

それを厭うのは、それがあまり頭の良い人間のする行動ではないように思えるという考えが無意識にあつたのかもしれない。それはともかく、不死人は大きめの雫石を懐から鷲掴みにし、取り出したそれを老人貴族に向かって全力で投げる。

砕け、内側から溢れ出した光は老人貴族の身体に癒しの効果を齎すが、無論そのようなことに意味は無く、敵が投げつけられた雫石を反射的に防ぎ、その際詠唱を中断して

いたことが重要である。

不死人は遂に駆け出し、老人貴族の眼前にまで迫る。

敵も流星にこの近さでは魔法による迎撃は間に合わないと判断したのか、詠唱の素振りを見せずにそのままレイピアで構えを取り、そして両者の距離が詰った瞬間、老人貴族の亡者は渾身の突きを放つが、走る勢いをそのまま乗せた塔のカイトシールドによる衝突により、細身の剣では力が足りず、刺剣の一撃は防がれると共に、老人貴族の亡者は弾き飛ばされ、アーチの下へと落ちていった。

その高さは建築物三階分に相当する為、まず助かる見込みは無いと思つて間違いないだろう。ましてあの小さな身体である。一先ずの安全を確保しようだ。

投げナイフは全てアーチの下へ落ちてしまったようであった。現時点では回収出来ず、しかし後からそれが叶う可能性も考慮し、そこから地面を見下ろすと、異様な光景を目にすることとなった。

薔薇模様の門の北側に居たのは、老人貴族の群集であった。それだけでも不吉そのものだが、そこに居る全ての者達は等しく頭を垂れ、手を胸の前で重ね、まるで何かを唱えているかのような、不気味な振る舞いをしている。

彼等は全員が同じ方角、薔薇模様の門の方を向いていた。しかし、不死人の居る場所から見る限りでは、薔薇模様の門の元にあるのは黒い布切れの塊と、逆に白い半透明な

糸のようなもの、それから大量の何かの骨、おそらくは人骨、それだけであり、祭壇のようなものは無い。

そのまましばらく観察を続けるが、それ以上のことはアーチの上からでは知ることが出来なかつたため、不死人は早めにそこを渡ることに決める。

大通りの西にある館の屋根の上に辿り着く。

瓦の上を歩き、その周辺を調べると、屋根の上には隣の館への橋等はないようだが、代わりに窓が一つ開いたままになっており、そこから室内に入ることが出来るようであった。

中を覗き込み、窓の周囲に亡者などが潜んで居ないことを確かめ、足を踏み入れる。格式ばった家具や、壁紙とその上に掛けられた肖像画など、いずれも貴族の館にあつて違和感の無い品々に出迎えられるが、床に敷かれた絨毯の上に並ぶのは、果たしてそれらに属するものか。

銀で出来た、底の深い皿であつた。数十にも及ぶ数が床一面に並べられており、まるで雨漏りでもして、水滴を受けるために置かれていたかのようであつたが、貴族達が庶民染みた知恵を發揮する必要などあるだろうか。

なににせよ、急な動き方をしてこれに足が当たりでもすれば、大きな音が出て亡者達の注意を引くことになりかねない。あまり近付かないようにしながら、廊下の奥へと進

んでいく。

「うへいつ、ひひひひ」

明らかに嘲笑であつた。声のする方に振り向くが遅く、不死人は何者かに身体を掴まれ、床に押し倒される。

一体どこに潜んでいたのか、老人貴族が一匹、こちらの身体の上に乗し、手にした小さな器具を顔に差し向けていた。転倒の衝撃で反応が一拍遅れ、だがすぐに姿勢を取り直し、老人貴族の顔を塔のカイトシールドで殴り付ける。

痛みに顔を顰めながら老人貴族は上体を反らし、不死人は続けざまに盾で敵の顔を何度も殴ると、いつの間にか身体的位置は入れ替わり、馬乗りになつていたのはこちらであつた。

やがて顔面を叩き潰された老人貴族は動かなくなり、こちらの盾や身体から鮮やかな返り血が滴り落ちる。

あの笑い声を思い返すに、ともすればこの老人貴族は、亡者ではなく理性を残し、その下に行動していた者であつた疑いがあり、だが話の通じる相手ではなかつただろう。

立ち上がり、周囲を見回してその老人貴族が潜んでいた場所を探してみるも、それらしい物陰は無く、あるとすれば天井に張りついていていた可能性くらいのものであつた。

あまり現実的な想定ではないが、今後は上にも注意しつつ、室内を進むべきなのだろ

う。気を取り直して廊下の奥へと、探索を再開する。

上に気を払いつつ、というよりも結果として全方位に注意を向けながら進めば歩みは一層遅くなり、その結果短い距離ではあるが、その階段を見付けるのにそれまでの倍近くの時間を要することとなった。

この階段をひとつひとつ、慎重に降り、そうしながらも階段の先の暗闇に目を向け、するとそこにいくつもの僅かに光る何かを見付ける。大量の眼差しにも似たそれは、しかし襲ってくることはない。そのまま不死人は階段を全て降りる。



## 第6章 貴族街 8

その鈍い光たちの正体は、床に置かれた大量の皿であつた。上の階にあつたものと同じく、底の深い銀の皿ではあるが、先の物とはまるで状態が異なり、同時に、やはり雨漏りの雫を受け止めるために置かれた訳ではないことを知る。

床の上に並べられている銀の皿は全て、乾いた血を乗せていた。一見するとまるで医療行為の痕跡だが、あのように凄惨な器具を扱う者達が、治療などと生温いことをするだろうか。なにより、ここは病院ではない。

そして上の階に置かれた皿は、おそらく血の汚れを水で落した後、風通しの良い場所で手早く乾かす意味で窓の付近に並べられていたのだろう。

探索をするのなら銀の皿を踏まないように移動する必要がある、しかしそれを実行するととなると、完璧にそうすることは不可能であつた。

細心の注意を払いながら足を動かし、だがそうする度、どこかしらが皿に触れる。金属と金属が当たって小さな音が鳴り、廊下の暗闇の奥にまで響くと、それが亡者達にとつての呼び水にはならないかと身構える。

それでも先へ進まなければならず、些細な物音にすら敏感になりながら廊下を歩いて

いくと、時折、乾いた血のこびり付いた、先の丸まった小さな器具を乗せた銀の皿が目に入る。組み合わせて使っていたのだろうか。

「ひえっ、いひひひ」

嗤い声。そして足を掴まれる。

廊下に置かれたクローゼットの横を通った瞬間、その中から伸びた腕は不死人の足を掴み、そしてそのまま引き倒そうと、体重を掛けてくる。こちらを転倒させ、あの器具で目玉を抉り取るつもりなのだろう。そうなる前にブロードソードを抜き、クローゼットの板に向かって突き出した。

「ぎゃひっ」

手応えがあり、クローゼットが短く悲鳴を上げながら血を漏らし、不死人はそこから剣を引き抜くと、間も無く老人貴族が力なく崩れ落ちた。

彼もまた、理性を残す者であったと思しく、しかし亡者ではなくとも、それに近い存在であった。何を以て正気とするべきか。

その身体を放って先へ進むと、やがて乾いた軽い木が打ち合つて鳴るような音が耳に届き始める。どうやら下の階から響いているその音は、絶えず続いており、またその音を他の場所で聞く事があれば、どことなく懐かしい風情があったかもしれない。そのような雰囲気を持っていた。

二階には他に調べる場所も無くなり、不死人は下の階へ続く階段を見付け、それを降りて音のする方へと向かう。階段をひとつ降りる度、音は少しずつ近付き、そして全ての段を降りると、その音の正体を確かめるのなら、この階の廊下の一歩奥へ行く必要があるらしいと知る。

絶対に見なければならぬことではないかもしれないが、そこに何らかの脅威があった場合、放置すれば後々後悔することも考えられる。寄せ餌であることも有り得るが。

木の鳴る音のする方へ身体を向け、絨毯の上を歩いていく。廊下の奥まったその場所はどうやら窓辺であるらしく、貴族街では稀な事に窓は開いており、室内にか細い光が差し込んでいた。

その光は長く届き、不死人の足元までを照らしていた。足の周りに銀の皿は無く、だが今度はその代わりとばかりに、大量の白い糸、それから黒い布がこちらを囲むように積まれているのが目に入る。おぞましさを覚えるようなものではないが、量が多いため異様ではあった。

「瞳は捧げたのかい？」

声の主は、窓辺の椅子に腰掛け、糸車に触れる老婆であった。樂しげにこちらに笑いかけ、だがその目には、血が乾き、黒ずんだ包帯が巻き付けられている。

「それがこの決まりだからね。それに、この先では必要無くなるさ。」

老婆は自らの目玉を取り除き、何かに捧げたのだろうか。彼女は話をしながら糸車を回し続け、そこで乾いた木が触れ合い、音を発していた。

「惜しむのなら、せめてもつといいものを持つて生まれてくるべきだったんじゃないのかい？ ふははははっ、いっ、ははははははっ」

昏い情念を込めた笑い声を上げ、老婆は白い糸を紡ぎ続ける。放っておけば、その糸車はずっと回り続けるのだろうか。

不死人は剣を抜き、一撃にて老婆を斬り伏せる。悲鳴すら上げずに彼女は椅子に倒れ込み、返り血を浴びた糸車は程無くして回転を止めていた。

これに関しての言い分はあり、老婆はこちらに害意を持った者達と同類であったため、放置するには危険であったが故の凶行だった。今やこの老人は血溜まりに沈み、だが、だとしても、悪夢からの解放には至らなかつただろう。それが不死の呪いというものである。

不死人はその老婆の懐を漁り、するとそこから二冊の本が出る。中のページを何枚かめくるが、辛うじて魔法の事が書かれているらしいこと以外、内容の殆どは理解出来なかつた。

これが魔術書なのだろうか。中央広場に居るであろう魔術師コネリーに渡すため、これらの本を大事に仕舞う。

それにしても、この老婆の様子なども含め、貴族街は常軌を逸した人や物ばかりである。壺に納められた人骨、目玉を取り出す器具とその受け皿や、丁寧に掃除されたリビングルームなどがそれに当たるが、中でも特に不可解であったのは目玉の無い被害者達である。

あのように大勢の人間を、一体どこから調達したのか。仮に社会的地位の低い者達がそのような目に遭うとして、だがこの土地柄とは合致せず、大通りの南西方向の道を塞いでいる、放棄された大量の馬車こそ関係していると見るべきだろう。

しかしながら現時点では得られている情報も乏しく、考えを巡らせたところで明確になるものがある訳でもないため、立ち止まっている意味は無いだろう。不死人は別の場所の探索を行うべく、老婆の軀の側を後にする。

その階には特に目を引く物はないが、一階である為階段は無く、他に行く事が出来る場所を探してみると、木の板で塞がれていない、通行可能と思しい扉が二つのみ見付かる。

まず正面の扉を開こうとすると、それは施錠されていたため開かず、だが幸いにもドアノブの上には小さい金属の出っ張りが付いており、これを回すと鍵の外れる音が鳴る。

扉を押し、屋外に出ると、そこは薔薇模様の門の付近の、しかし一度外側から調べた

扉であつたようだ。そこからでは王城方面に行く事が出来ないため、不死人は室内に戻り、もう一方の扉を調べることにする。

これも今調べたばかりのものと同様、内側から鍵が掛かつており、解除して扉を開くと、隣の館との間にある細い路地に出る。それを道なりに進むと柵の扉に突き当たるが、それは手で押すと簡単に開き、そこより先は今度こそ、薔薇模様の門の向こう側の大通りであつた。

遂に二つの門を迂回し、王城方面へ出ることに成功したのだつた。

「ああああう、う」

その呻き声はまだ遠く、早急な対応を求められている訳ではない様子であつた。

薔薇模様の門のすぐ側で、老人貴族の亡者達が膝を折り、白黒の何かの塊に向かつて頭を垂れ、まるで祈りを捧げているかのようであつた。その頭数は十を越えており、まともに相手をして助かる見込みは万に一つも無い。

不死人は彼らに気配を気取られないよう、音を殺して王城方面に向かつて歩き出そうとし、しかし何の合図も無く老人貴族達は一齐にこちらを見詰める。如何なる理由でそうなつたのか、思い当たるものは皆無であり、しかし異常はそれだけに留まらなかつた。

## 第6章 貴族街 9

薔薇模様の門の下にある、白黒の何かがさざめく。

まるで毛を立たせるかのように、そこから細い骨が起き上がり、次第に太く長いものも続き、それらが徐々に全体が上へと向かいながら、人骨が音も無く組み合わさり、また内側に巻きこんだ黒い布切れをも肉とし、人の背丈を遥かに越す巨体を作り上げていく。

そして変化が続く最中、大小様々な骨の中から頭蓋骨だけは一箇所に集い、上の方へ嵌り込んで巨体の顔と化し、さらに身体から腕らしきものが一對突き出すと、手のひらを上にして雨粒でも受け取ろうとしているかのように身体の前に翳していた。

最後に、半透明の薄く白い糸が大量に上から被さり、それが巨体の身体全体を覆うことによって、蜘蛛の巣にくるまれたような、白いベールが降りたような風体になって変貌は落ち着く。

その巨体が自ら名乗らず、そしてこの場に命名する者がなく、こちらで呼び名を付けるのであれば、さしずめ遺骨のゴレムといったところだろうか。

それについては分かっていることは、この街の狂気の落とし子であるということだけ

であった。どのような攻撃を行うのか見当も付かず、不死人は様子見を決め、遺骨のゴーレムや老人貴族達との現在の距離を維持するべく、摺り足に近い足運びで静かに移動し始める。

そのような状態のこちらを、遺骨のゴーレムは空洞の目で観察しているようではあるが、それとは対照的に老人貴族達は闖入者に見向きもせず、彼らの儀式の成果たる巨体に向かって祈りを再開し始める。

不意に人のものではない、それより低く、聞き取れないような声での小さな呟きが耳に届く。その直後、遺骨のゴーレムは身体を少し反らしながら震え、かざした両手を腹の前あたりに持つてくるような動作を見せる。

淀んだ怨嗟は、その部分を溜まり場としていたのだろう、遺骨のゴーレムが甲高く哭くと、瞬間間に瘴気が溢れる。地面を這うように伝いながら周囲に広がり、これによって飲み込まれた老人貴族達は途端に力尽き、一人残らずその場に倒れ伏した。

魔法のような詠唱も無く、そして老人貴族達は苦痛にもがきもしない。敵から齎された正体不明のその攻撃は、死の瘴気としか呼ぶ他無かった。

瘴気が及ぶ範囲は、大の男が大腿で歩いておよそ十歩分程であろうか。かなり広範囲にまでそれは届き、今は距離の問題で不死人の居る場所は効果範囲内に入らなかつたものの、仮にその中に居たとすれば、死の瘴気が迫る速度よりも逃げる足の早さが勝る、と



は言い切れない。よって、常にそれが来ることを想定して距離を測らねばならなかった。

遺骨のゴーレムは自身の足元に転がる生みの親達を捨て置き、悠然と、一步踏み出す度普通の人間の三倍ほどの時間を要し、不死人に向かって歩き出す。

対してこちらでもブロードソードを握り締め、だが攻撃の機会を窺うよりも、まずは敵の見極めに意識を傾ける。人骨の巨体はずっと同じ速度で歩いており、今のところ能動的にこちらを追い詰める積もりは無いように見受けられた。

唐突に、しかしそれは何ということもなく、ごく瑣末な動作であった。遺骨のゴーレムは脈絡無く宙に翳した手のひらを返し、それを見て直感が働いたため不死人は石畳の上を横方向へ転がると、その身体が直前までであった場所に黒い塊が飛来し、地面を打つ。そのまま放たれるいくつかの黒い塊を飛ばす魔法を不死人は躲し続け、だが決して難度の高い行為ではなく、むしろここが反撃の機会であると踏み、回避行動を取りながらも前進する。

そうして遺骨のゴーレムとの距離が至近となり、不死人はブロードソードを敵の足元目掛けて振り抜く。

その一撃は何者にも妨げられずに命中し、遺骨のゴーレムの身体から骨の碎ける音を発すると同時、人骨が地面に落ちていく。巨躯そのものと比較すれば大量という程では

ないが、人間一人分くらいはあるだろうか。だがダメージを与えたと解釈できるのかは怪しく、あまり手応えらしきものはなかった。

一方、攻撃された遺骨のゴーレムの方は特に声を上げたりはせず、その場で片腕を大きく振り上げてはこちら目掛けて打ち下そうとするが、その挙動にはあまり勢いが無く、回避は容易であった。

とは言え瘴気のこともある。不死人は大事を取って敵の腕を後ろに下がることで回避し、そのまま大きく後退することにした。

遺骨のゴーレムは、やはり悠長な動きしか見せなかった。こちらが相手の攻撃を回避してから背を向けて走り、距離を取ってから振り返って尚、敵は先程振り切った片腕を地面に着けたままにしていた。攻撃を躲した後、反撃を試みるべきであったか。

「きゅあああうううううっ!!」

女の悲鳴のような叫びだった。劈くそれは遺骨のゴーレムから出たものであるらしく、これを聞きつけた不死人は即座に身構え、敵がどのような行動に出るか目を凝らして待つが、気が付けば身体が空中へ飛び上がっていた。

それは地面から強く突き上げるような衝撃によつて起こった現象であり、下から上へ強く打ち付けられた身体は、次に地面に向かって急速に落下し、そこでもまた石畳に全身を強打される。

這々の体で起き上がり、敵が次の行動を起こす前に雫石を取り出し、それを胸元で碎きながら事前の出来事を反芻する。

今の攻撃は速度以前に視認が不可能であったため、離れた地面に発動できる魔法のよなものと考えるべきではないだろうか。遺骨のゴーレムは今になってようやく片腕を地面に着いた姿勢から起き上がって戻り、そこから推察するにあの屈んだような格好も、下から突き上げる攻撃魔法に関係あるのだろう。

やがて敵は手のひらを不死人に向け、魔法を詠唱する構えを見せる。治癒がまだ終わらず、軋む身体に鞭を打ち、飛んでくる黒い塊を回避するべく、地面を蹴って走り出した。

突き上げの魔法は不可視であるため攻撃を躲すタイミングが判然とせず、よつてあまり使わせるべきではない。不死人は先程同様、黒い塊を飛ばす魔法を避けながら、遺骨のゴーレムに向かって接近し始める。

すると小さな眩きが耳に入る。見れば遺骨のゴーレムは既に上体を反らし始めており、それは死の瘴気を放出する直前の姿勢であったため、急ぎその場から退避するべく、敵に背を向けて走り出した。

その背に衝撃が突き抜け、不死人は受身も取れないまま吹き飛ばされると、大通りに並ぶ館に頭から突つ込み、勢い良く壁に打ち付けて意識を飛ばしかける。

今の衝撃は黒い塊を飛ばす魔法の直撃によるものと思しく、しかしこちらが背を向ける直前、相手は瘴気を放つための予備動作を取っており、前後の因果が一致しない。そこで振り返り、遺骨のゴーレムを見てみると、敵は屈み、片腕を地面に着けていた。

「きゅああううううううっ!!」

甲高い声が辺りに響く。避けようとした時には既に遅く、不死人は宙を高々と舞っていた。そして直ちに落下し、全身を打撲する。

二度続けての直撃は、不死人に致命傷一步手前の深手を負わせ、しかし石畳に寝そべっていても、敵が止めを刺すのを待つばかりである。常人であればそれもまた一つの運命かもしれないが、不死の呪いを受けた者は死ねず、故に必ず立ち上がらなければならない。

辛うじて残った気力を振り絞り、不死人は起き上がって懐から雫石を取り出すと、それをいくつも砕いて体の治癒を試みる。

それについて確かめる術はないが、遺骨のゴーレムは単純な詐術を用いている。敵は己が見られているかどうかを見極め、そして見られていない瞬間に素早い動きを行い、これによって直前の行動との齟齬が出る。特に、瘴気を噴出す姿勢などは陽動には便利であるのだろう。

牽制のつもりか、並行に移動しながら距離を取る不死人に対し、遺骨のゴーレムは一

定間隔で黒い塊の魔法を撃ち出し続ける。その姿には所々隙があり、容易いとまでは言わずとも、接近は可能であった。

不死人は黒い塊の魔法を左右に避けながら再度遺骨のゴーレムへ近付き、その際決して巨体から目を逸らさずにおく。おそらく、それがこの敵との戦いにおいて最も重要なことである。

程無くしてその足元に辿り着くと、骨ばかりの巨体を睨み上げながら、両手で握ったブロードソードで深く斬り付け、そこから人骨がこぼれ落ちる。

それらが周囲に散乱するも、攻撃の手は休めず、続けざまに何度か剣で斬撃を見舞い、やがて遺骨のゴーレムに姿勢の変化が見られてから、忘れずに視線は敵に向けたまま不死人は後退していく。

遺骨のゴーレムは聞き取れない言語を呟きながら上体を反らして手を腹の上で重ね、つまり瘴気を放つための動作を取ったため、こちらから何をするとすることもなく、十分な距離を取って待つ。

そして瘴気が広がると、それが収まるまで時間を流れるに任せ、安全を確認してからも不死人はすぐには駆け出さず、少しの間敵がどのような行動を取るのか観察を行った。

存外、遠距離攻撃の種類は少ないのか、相変わらず遺骨のゴーレムは手のひらをこち

らに向けると黒い塊を飛ばす魔法を撃ち始め、それを見るや不死人は駆け出し、相手に接近、骨ばかりの凶体にブロードソードを叩き込む。

碎け、周囲に撒き散らされる人骨が次第に増えている気配があった。それが効果的にダメージを与えていることの証左になるかどうかは不確かだが、次に遺骨のゴーレムは大きく腕を振りかぶったため、不死人はこれを回避するべく敵との距離を大きく空ける。

人骨の織り成す巨体は勢い良く腕を打ち下し、だが唐突にその動きを止めていた。腕は空中にて静止しており、しかし何が起こったのか知る前に、不死人は横合いから顔を殴られる。遺骨のゴーレムのような巨大な者ではなく、人間くらいの大きさの者の手によるものであった。

## 第6章 貴族街 10

怯んだ身体を取り直してから殴られた方に目を向けると、そこには人と同じ程の背丈の、動く骸骨がおり、不死人に対し構えた両拳を見せていた。しかもそれは一体のみならず、その後背にもう二体、いずれも攻撃の用意があると見える。

骸骨達は素手であるため、一対一で相手をするならばあまり脅威度は高くないだろうが、しかし遺骨のゴーレムから目を離さずに三体の面倒を見るのは難しく、しかも彼等は散らばった人骨から起き上がった者達であり、皮膚も筋肉も無く動き回るといふ常識的には有り得ない性質を持つているため、小突いてばらばらにしたところでまた起き上がってくると予想される。

不死人は三体の骸骨達と遺骨のゴーレム全てを視界に入れながら相手の出方を窺い、しばらくこう着状態に入るが、もし今のまま一斉に攻撃されれば対応は極めて難しい。また、先程遺骨のゴーレムは自身の攻撃が骸骨達に当たらないようそれを中止したため、アリーナの王と戦った際のように同士打ちをさせるやり方は通じないと考えるべきである。

切り札は無いでも無いが、今はそれを持ち出すタイミングではなく、しかしこれと

いつて策は浮ばず、天啓の如き閃きの訪れも今回に限っては無い。

時間切れが迫りつつあった。骸骨達は今にも不死人に飛び掛らんと構えを取り、その後ろの遺骨のゴーレムも不気味に沈黙を守ってはいるが、己の手勢に隙を生ませ、そこを突く魂胆であるのは目に見えている。

元より、手管を弄してばかりいれば、先々でもこのような場面で困窮するのだろう。であれば策を持ち込まず、偶には地力での突破を試みるべきか。それすら出来なければ、玉座など。

眼前に飛び込んできた骸骨の一体を塔のカイトシールドで打ち付けて崩し、その際に遺骨のゴーレムから飛び出した黒い塊の魔法を避けるため、身体を横に捻りながらブロードソードを握り締める。

そして捻った勢いのまま身体を一回転させると、渾身の力を込めた剣で近付いてきた二体目の骸骨の胴を薙ぎ払って崩し、再び飛来する黒い塊の魔法を前転して避け、膝立ちで起き上がった直後に三体目の骸骨の腹にブロードソードを突き込み、次に両足で立ち、突き刺した剣を両手で握って上方へ力一杯振り抜き、骸骨の身体を吹き飛ばす。

不意に頭上に影が落ち、遺骨のゴーレムがこちら目掛けて腕を叩きつけようとするも、それを躲して逆に相手の胴に滑り込むと、そこを剣で刺してから袂を開けるようにぐるりと一回転させ、引き抜いてからすぐに後退して三步ほどの距離を取り、懐からそ



れを取り出して生まれたばかりの穴に投げ込む。

投げ入れたのは火炎壺。貴族街入り口の男性から一つだけ購入したそれは穴に入り込んだ途端に砕け、内側から燃え上がり、遺骨のゴーレムの黒い布の部分と白いベールに火が着く。やってみるまでは効果があるかどうかは分からなかったが、やってみれば上手く切り札として働いたらしく、火に包まれた敵はそれを消すため、自分の身体を叩き始める。

それを尻目に、不死人は振り返って骸骨達に意識を向けると、たった今遺骨のゴーレムに攻撃を加えた影響か、骸骨の数は四体にまで増えてしまい、それぞれが既に起き上がり始め、だが完全にはこちらを迎え撃つ準備が出来ていない様子であった。

手近な一体に近付き、足で蹴り込んでその骸骨の姿勢を崩した上、頭部目掛けてブロードソードを振り抜く。

そして間髪入れず、二体目の骸骨の前に踏み込むと、まだ無防備なままであった相手の胸に剣を突き刺し、横に振り抜いて身体を形作る骨を周囲に散らす。

三体目は流石に攻撃の態勢が整っていたらしく、こちらに向かつて走り、拳を振り上げたため、不死人は骸骨から繰り出される拳打を塔のカイトシールドで弾き返し、相手の胸を袈裟斬りにする。

三体目の骸骨は崩れ落ち、その影に上手く隠れていた最後の一体は不死人の右側面に



ぐに身体中の骨が崩れ始め、やがて灰を撒き散らしながら地面へ倒れていった。

## 第7章 王城 1

遺骨のゴーレムは斃れた。貴族街の中央を走る大通り、その終点たる場所には人骨と灰、或いは黒と白の布切れが散乱し、しかし動く者は不死人一人の他には何も無かった。この遺骨のゴーレムという敵は、果たして老人達の願いを叶えた存在であったのだろうか。それにしてもどこか不遜な印象があるため、やや疑わしく、だがどちらにせよ、風がこの亡骸をどこかに連れ去ってしまうのだろう。

付近にあった篝火で身体を休めた後、不死人は大通りの終わり、貴族街の館の並びが途切れている方へ向けて歩き出す。

幅が広めに取られている平坦な石畳の道は右方向、王城の敷地との境目となる壁に沿うようにして東へ向けて曲がっており、これを道なりに進むと右手に大きな門が現れた。

それは王城へ至る門である。門扉は開いたままとなっており、横幅が長く、おそらく馬車や兵の一団などが通る場合を想定して造られたものであった。

門を通り抜けると、そこに整えられた緑が広がる。中庭は今なお手入れがあるらしく、植え込みなどは丁寧に整えられているようであったが、言わずもがな、滅んでいく

土地においてそれは不自然極まりない。

見るべき点は他にいくつかあり、だが中庭は端から端まで探索すればどれだけ時間が掛かるか見当が付かない程広大なため、的を絞るべきである。

まず門の入り口右手には小ぶりではあるが兵舎が建ち、その反対の左手の方角には馬小屋のようなものが建てられ、他にも納屋のような家屋が点在している。

そしてそれら全てを収めるべく中庭の左右両側をレンガ造りの二階建て通路が走り、それはまた王城の敷地と外を隔てる壁としての役目も担っていた。通路の一階部分は渡り廊下のように中庭側の壁が取り払っているため、基本的には中庭のどこからでも通路へ入ることが可能であり、通常であればこの通路を進んで正面にある王城の内部へと向かうのだろう。

であればそれに倣うべきかもしれないが、中庭には中央を通る石畳の道があり、不死人はそちらを進むことに決める。要は正面にある王城に入ることが出来ればどの選択肢でも良く、進むのは中庭両端の通路でも、中央の石畳の道のどちらでも構わなかったが、しかし現在位置から渡り廊下へ入ろうとすれば、大きく迂回しない限り納屋や兵舎の横を通ることになる。その辺りは亡者達が潜むにはうってつけの場所であったため、避ける方が良いだろう。

石畳の通路を真っ直ぐに歩き始める。道の左右に広がる緑はきつちりと刈り入れら

れており、しかし緑一色のみであったため、あまり人の目を楽しませるようなものとしては作られていないようであった。

程無くして階段に着き、浅くなだらかな十段ほどを登ると、庭園に出る。

庭園は色合いで言えば階段下の中庭と変わらないが、こちらはより植木が繊細であり、長椅子なども置かれていたため、憩いの場として利用されたと思しく、また庭園中央には誰の目でも引くような横に大きな像があつた。

その像は単一として大きいものではなく、人間の等身大くらいのものが十数個程密集して形を成しているものであつた。別段、造型におかしなところはなく、だがモチーフは風変わりである。

人型の像はそれぞれ、頭巾や手ぬぐいを纏い、鋤や鍬、金槌や漁の網を手にしていた。どうから見てもそれは幻獣や騎士の像ではなく、泥臭い市井の者達の姿であり、王城の像としては珍しい部類であると言えるだろう。

風変わりな題材ではあるものの、他におかしな点は見られなかったため、不死人はその像をある程度眺めた後、横を通り過ぎて先へ進む。

未だ亡者の姿は無く、そのまま庭園中央の石畳の道を進んで行くと、やがて王城の壁に突き当たり、そこに大きめに作られた扉を一つ見付ける。

王城の内部へと入ることが可能である筈のそれは、しかし鎖で固く閉ざされており、

扉に鍵穴はあれど、鍵を用いたとして開くかどうかは疑わしい。他の出入り口を探すべきである。

王城の外壁に沿ってしばらく歩き、西の渡り廊下へと辿り着くと、予想通りそこには王城の中へ入ることが出来そうな扉が見付かり、不死人は早速ドアノブに手をかけて軽く力を込めてみるも、だが開くような様子は無かった。

扉に鍵穴は見当たらず、内側から門でもされている可能性があるが、なんにせよこの場どうにかすることは出来ないため、不死人は来た道に戻るべく王城の壁沿いに歩いて中庭を横断する。

鎖で閉ざされた大きめの扉の辺りを通り越し、今度は東の渡り廊下へと至る。するとそこには西の渡り廊下にあったものと同じような扉が付いており、これを押してみると抵抗無く開き、不死人の前で王城の内部が露になる。

扉の向こうは長い廊下となっていた。至る所に火の灯った蠟燭が並べられているため、室内は明るく、また大理石の床はよく磨かれているのか、うっすらと不死人の姿を映していた。

壁などにも汚れは無く、誰がそのような王城の世話をしているのかという点は気になるところではあるが、王城の中にはそれよりも異質な部分がある。ずっと歌が聞こえているのだ。

楽器の音ではなく、人の肉声、女性の声が、廊下中はずっと響いており、その音量は割と大きいものでありながら、声の主の姿は無い。

絶えず続く歌は昏く、陰鬱な調子ではあるが、それは悲しみや苦しみを喚起するものではなく、既にその只中に居る者達に寄り添うために、自らもその場所へ降りていつているようであった。慰めなのだろうか。

不死人は扉を開けてから立ち止まったまま、床、壁、天井その他にも視線を巡らせた。が声の主は見付からず、仕方なくその問題を保留にして先へ進むことにする。

大理石の床はやや足音を立てやすく、しかしそれは歌声に消えていく。ふと歩きながら目を横に向けると、あまり装飾の無い壁が目に残る。

ここは使用人達の通路であったのだろうか。そもそも王城の敷地に入った時の出入り口が裏門であり、また王城内部へ入る際に潜った扉も小さいものであったため、少なくとも位の高い者達が頻繁に通る通路ではないのかもしれない。

だが壁自体が素朴でも、そこに多くの絵画が飾られれば、それなりの賑やかさがあつた。

そのうちの一つは、海で漁をする男性の絵であつた。次の一つは麦穂を刈る人々の絵であり、三つ目は馬の世話をする平凡な少年の姿を描いたものであつた。

それ以外のものも全て、庶民の暮らしを絵画の世界に閉じ込めたものであり、国を守



る騎士や天使、戦争の様子、王族達の姿などは全くと言っていいほど存在しない。何を以て普通と言うかは難しいが、庭園にあつた像といい、彼等が興味を向けたモチーフは、王侯貴族としては奇抜であつたとすら言える。リングレイの平民達はそこに好感を持つたかもしれないが。

絵を眺めながら廊下をある程度進み、しかしその途中で気になつたところがあり足を止める。歌の聞こえる方角の角度が妙であつた。廊下の奥からではなく、頭上から聞こえるようになりつつある。

見上げればそこには灯りの点いたランタンではなく、ステンドグラスで作られた箱のようなものが天井から吊り下げられていた。それぞれの面に花柄の模様が描かれたその箱から歌声が出ているらしく、しかし箱は子供が両手で抱えられる程の大きさであるため、とても人間が入ることが出来るようなものではない。歌う生首でもあれば再現出来るかもしれないが、現実的な予想とは言い難い。

もう少し詳しく調べるべきかもしれないが、その箱は天井から吊り下げられている位置が高く、不死人が手を伸ばしたところで届きそうにはなかつた。なにかするのであれば、椅子が長い棒が必要である。

物を投げ付けられれば壊すことは出来るかもしれないが、あまりに正体が分からないため、取り返しの付かない手段は避けるべきだろう。よってステンドグラスの箱を調べる

のはひとまず諦め、廊下を進むことにする。

歌声は少しずつ遠ざかり、同じ色の床が続き、同じ色の壁が続き、同じように人々の生活が描かれた絵画が目に入り、そしてまた歌声が近くなる。

上に目を向けると、そこに先程と同じような歌うステンドグラスの箱が吊り下がっていた。何の目的で天井に設置されているのかは不明であるが、この箱は王城の到る所で見られるのかもしれない。

更に廊下を進むと、やがて道が扉で行き止まる。扉は二つ、正面と右手にあり、まず正面の扉は開かず、中から鍵が掛けられているようであった。そしてもう一方、右手の扉は触れれば簡単に開き、中に入ることが出来た。

## 第7章 王城 2

新たな部屋に踏み込み、中の様子を見る。部屋の灯りは食器の棚や調理器具、または釜戸の類を照らしており、これらの道具が集う場所があるとすれば、やはり厨房が妥当であるだろう。

またこの厨房にもステンドグラスの箱があるのか、相変わらず歌は不死人の耳に届き、しかしその音に混じって、部屋の奥から物音が鳴っている。

音のする方へ首を向けると、その時調理台の影から現れたのは、黒い質素な服を着た召使の亡者であった。その装いを見るに、おそらく女性であるその召使は、一度こちらに顔を向け、しかしすぐに手元に視線を落とすと、手に持った布切れで調理台を拭き始める。

よく見れば付近にもう一匹、床を磨くような仕草を繰り返す召使の亡者も居るようであったが、それも同じく不死人には興味を持たず、自分の仕事を続けている。

当然、欺瞞を疑うべきである。こちらがある程度部屋に踏み込み、進退が気軽に出来ない場所に来たところへ複数で襲撃などされれば堪ったものではない。

しかしながら、頭を使った行動を取るのは正気を残した者のみであり、亡者達がその

ように作戦を立てることはあまり現実味が無い懸念である。従つて彼女らが不死人を襲う可能性は低く、であれば今こそ攻撃の好機であるのか。

だが無抵抗な相手に剣を突き立てることの是非は置いておくとしても、こちらからの攻撃が契機となり、手痛い反撃を招くことは十分に考えられる。あまり近付かないようにして、手出しをせず先に進む方が良いかもしれない。

亡者達から一定の距離を保ちながら、調理場の奥にある扉へ移動する。目に映る物の殆どが美しく磨かれており、そして彼女らはきつと調理場以外でもそのように働き、この王城の景観を保っているのだろう。

そのまま召使の亡者達が騒ぎ出すこともなく、不死人は扉に辿り着き、鍵の掛かつていないそれを開けると、前方へ真っ直ぐ伸びる廊下に出る。

この廊下の内装は先程通つたものと似通っており、しかし位置が明らかに違うため別の廊下である。そして、廊下の先には三匹の亡者が居座つていた。

一体目の亡者は召使であり、彼女は廊下の半ばで大理石の床を熱心に磨き続け、その様子も含め調理場に居た者達との差異は見受けられない。

残り二匹が厄介であり、召使の奥に居るそれはどちらも騎士の亡者であった。両方もこちら側に背を向けており、廊下の先に身体を向けたまま立ち尽くしている。

出来れば片方だけでも騎士の亡者の不意を打ち、数を減らしておきたいものだが、そ

の手前に居る召使の亡者が、本人は無自覚であるだろうが、悩みの種であった。

召使の亡者を先に斬れば、その音で二匹の騎士に気付かれてしまい、不意は打てず、しかし召使の元を経由せずには騎士の亡者達の元へ行く事は出来ない。また廊下は一本道であり、途中に扉は無く、他の部屋を通って召使の亡者が居る地点を迂回することも不可能であった。

つまり騎士の亡者達への不意打ちを第一とするなら、召使の亡者に騒ぎ立てられることなくそのすぐ傍を通り抜けなければならぬが、よしんばそれを成し遂げたとして、騎士の片割れを背後から斬り捨て、しかしその次には残ったもう一匹の騎士と召使に前後を挟まれることも有り得る。とは言え、二匹の騎士の亡者を相手にするよりは遥かに楽だろう。

覚悟を決めなければならぬようであった。歌声の響く廊下で、不死人は一歩ずつゆつくりと足を動かし、足音が出ないような歩き方を見定めてから、実際に廊下の先に向かつて歩き出した。

一歩を踏み出すのに通常の十倍以上の時間を掛け、慎重に慎重を重ねて足を動かす。本当に些細な物音であれば歌声が消してくれるかもしれないが、綺麗に澄んだ声でもあるため、雑音は混ざらず露骨な違和感となるだろう。あまり期待し過ぎない方がよい。気を張りながら足を抜き刺しし、あと三步ほどで召使の真横になる距離にまで近付い

ていた。未だ亡者達に動きは無く、そろそろ召使が視線を落としている床の辺りに不死人の影が映るが、彼女はそれを目にしても床磨きに勤しんでいた。

とうとう召使の亡者の脇を通り抜ける。この亡者は不死人に気付いているかもしれないが、だとしても大きな音を立てたりはしなかったため、このまま行けば二匹の騎士の亡者のどちらかを背後から襲うことが出来る。

しかしここで油断したことにより、騎士の亡者達が振り返りでもすれば全て台無しになる。それまでしてきたのと同じように、決して気を抜かず隠密に足を運び、そしてようやく不死人は彼らの背後に忍び寄る事に成功した。

並び立つ騎士の亡者の右を選び、その背後に立つと、音も無くブロードソードを振る上げ、一撃で首を刎ねる。

崩れ落ちる一方の騎士を尻目に、不死人はもう一匹の方へ即座に斬りかかるが、敵の反応は素早く、こちらのブロードソードの軌跡は盾によって止められ、軽く弾き返されたためすぐに後退し、そして一度背後の気配を探る。

召使の亡者は近くで剣戟が始まっているにも関わらず、未だ床を磨き続けていた。無論それは不死人にとって好都合だが、そうまで自らの業務に没頭する姿は不気味である。

視線を前に戻し、視界の中心に騎士の亡者の姿を据える。敵の得物は盾と、それから

メイスであった。いずれも特徴的な造型ではなく、それだけを見れば通常通りの戦闘で問題は無さそうなものであった。

だがこれは、貴族街入り口を守護していた騎士と同じく、手足の長い異形の姿を取っており、であれば特殊な魔法を行使して然るべきと見る方が良いだろう。

「ぶえうっ」

呻き混じりの呼気を吐き出しながら騎士は踏み込み、メイスを振り上げ、それを塔のカイトシールドで受け止める。その一撃は弾き返すには重いため、不死人の反撃を許さず、騎士の亡者はそのまもう一度メイスを掲げ、盾に向かって叩き付けようとしていた。

しかし、重いということはそれだけ遅さを招くこともあり、まして目の前で力一杯振りかぶっているのであれば、避けられぬ道理が無い。不死人は騎士の攻撃を横に躲すと、同時にブロードソードで敵の脇腹を斬り裂く。

「げうっ」

こちらの剣は上手く盾の防御を掻い潜りはしたものの、与えた一撃は浅かったようだ。騎士の亡者は僅かに声を上げながら後ろにたたらを踏み、しかし追撃されないようメイスを横薙ぎに払う。

ここで強引に畳み掛けたい理由も無いため、不死人はそのメイスの牽制を前に後退

し、そうして敵との距離を取った瞬間、鈴の音が耳に届く。

不死騎士の不毛な戦場に似合わぬ、涼やかなその音色は、騎士の亡者の持つメイスから発せられたものであった。そしてその音が鳴った直後、騎士は床に片膝を着き、するとメイスから光が溢れ、異形の身体を優しく包み込む。

それは回復の効果を発揮し、瞬く間に亡者の脇腹の傷を癒すことで、両者の間に生まれてつあつたアドバンテージを潰してしまふ。しかしながら、今回は始めてその動作を目にしたために見送つたが、この術は発動に時間を要する上、治癒の最中は隙だらけである。次にも同じことをさせる理由はない。

祈るような姿勢から身体を起こした騎士の亡者に、今度はこちらから仕掛ける。脇腹目掛けてブロードソードを走らせ、しかしそれが敵の盾に防がれると、即座にメイスによる反撃が訪れる。

上から下へ、やや力が入り過ぎている一撃を、不死人は一歩分ほど身体を後ろに下げ回避し、そしてメイスが地面を叩くと同時、斜め前に踏み出し、騎士の亡者の胴に斬り込む。

「ぐっ」

騎士はまた呻く。若干相手の鎧に剣の先が阻まれたものの、こちらの斬撃は敵の肉を抉り取り、致命傷とまではいかずとも深い傷を与えていた。その後騎士の亡者は盾で裂



傷が出来たばかりの胸元を隠し、至近距離から対敵を追い払うべく、メイスを横薙ぎに払う。

だがその一連の行動は、前回負傷した際の反応と同じであり、従って次の動作も予想が可能であった。不死人は騎士が苦し紛れにメイスを振るった直後、それを回避して即踏み込み、今まさに鈴を鳴らし、片膝を着いて回復しようとする騎士の元へ一息に近付き、振り上げたブロードソードが煌く。

## 第7章 王城 3

しかし斬撃は敵に届かず、腹を突き破らんばかりの重さが掛かる。

その一点を中心として身体がくの字に折れ曲がり、そのまま不死人は吹き飛ばされ、廊下に落ちると頭のすぐ横で甲高い音が鳴る。どうやら、吹き飛ばされた身体は天井にまで届き、その際ステンドグラスの箱を引つ掛け、床に落として壊したらしい。

一瞬天地が逆しまになったかと思うほどの威力は、やはり騎士の亡者の行使した魔法によってもたらされた効果であり、それはおそらく、回復の術の際と同じ予備動作を端として発動したものであるようだ。

未だ魔法の余波と思われる、黒い霧の柱のようなものが騎士の周囲から吹き上がり、それを結界の守りとして騎士の亡者はもう一度鈴の音を鳴らし、今度こそ回復の術にて胸の傷を癒している様子であった。彼等には既に感情は無く、だがもし正気を残す人間であれば、不死人が完璧に自分の罠に掛かった際、内心でさぞ快哉を叫んだのだろう。

一方、不死人は騎士が回復をしている間に自身もまた雫石を取り出し、それを胸元で砕きながら身体を起こす。傷を癒しながら騎士の亡者に対して構えを取り、しかし不意に背後から迫る気配があり、振り向き様に直感の示す場所で塔のカイトシールドの防備

を展開する。

「ぎゃえつー」

あわや召使の亡者に押し倒される寸前にてそれを阻止する。防御した際、盾で顔面を打たれた召使は怯んで悲鳴を上げ、不死人はそこへすかさず一步踏み込み、ブロードソードを振り抜いて敵の胴を両断する。

本来は非戦闘要員であるためか、防具も何も身に着けていない召使の亡者はその一撃で斃れ、しかしその直後に再び背後に近付く者があつた。

勢い良く風切り音を鳴らして迫る騎士のメイスを盾で防ぎ、しかしこれもまた振り向きながらそうしたためか、姿勢が悪く防ぎきれず、塔のカイトシールドが不死人の手から弾き飛ばされる。

それは衝撃を伴わせたために連れられて身体がよろけ、そこへ騎士から続けざまのメイスの一撃が繰り出されるも、回避は出来ず、かと言って防ぐ事もままならず、己む無くブロードソードで敵のメイスを受ける。

ある程度メイスの勢いは減じたとは言え、武器の重量差や騎士の筋力も相まって、不死人に及んだ負傷は大きいものであつた。血飛沫が舞い、力が抜け落ちかける膝に、しかし力を込めて床を踏み締め、止めとばかりに打ち下された騎士の亡者の大振りの一撃を、身体の軸の向きを変えるだけのつもり、最小限の動きで躲す。

その無駄のない動きでも今は負担であったか、胸元から血が零れ、だが構わず、自分が今持てる最大の力を注ぐつもりでブロードソードを握り、騎士の亡者の胴に向けて渾身の一撃を振り抜いた。

鎧を避けて脇腹に直撃した剣は、背骨すら含めて殆ど亡者の腹を両断してみせていた。黒ずんだ血が夥しく溢れ、両者のそれが美しい大理石の床の上で混ざり合っている。

騎士の亡者は崩れ落ち、最早動くことは無かった。瀬戸際で勝利した不死人は、雫石を取り出し、それを胸元で砕いて治癒を始める。

思い返せば、戦いの最中、妙なタイミングでの乱入があった。あの召使の亡者は、何故唐突に襲い掛かってきたのだろうか。

落ちて着いてきたところで塔のカイトシルドを拾い、次に二匹の騎士の亡者の軀を漁り、双方から雫石を奪い取ると、ステンドグラスの箱が割れた辺りが目に留まる。

その周囲には砕け散ったステンドグラスの欠片の他、透明な液体が撒き散らされており、そしてその中心となっている地点に、鮮やかな紫色をした紐状の何かが置かれていた。

否、生物であった。ステンドグラスの中に居たと思しきそれは、身体中の至る所に小さな穴の開いた、海綿を基礎とする種であるらしく、またこの身体の中央には、人のそ

れと酷似したような唇があった。まさか、この海綿動物が声の主だとして、状況証拠のみで推論すればそうなるのかもしれないが、常識と照らし合わせて考えれば俄かには信じ難い。

本当にこの海綿動物が歌声の主であったのか、確かめる術は無いが、それは床に落ちたきり、蠢き、僅かに伸縮を繰り返すのみで他に動きを見せなかつたため、一先ずこの場で始末を付ける必要は無いようだ。放置し、先に進む事にする。

斃れた亡者達の身体をよけて、廊下の先へ向かつて歩く。それほど距離は無かつたため、廊下はすぐに終わり、正面に上へ続く階段と、その手前の左右に扉がそれぞれ一つずつ、不死人の目の前に現れる。

左の扉は閉ざされていた。どうやら反対側から荷物が大量に置かれている様相であるため、施錠されてはいないものの、扉は開きようがない状態であつた。

次のその逆側の、右手の扉を調べる。この扉はこちら側から門がされており、これを外すと扉は開くが、その向こうにあつた屋外の渡り廊下は見覚えのあるものであつた。どうやら西の渡り廊下の先にあつた、かつて内側から閉ざされていた扉が、今開いたこの扉であつたようだ。

その扉から出て行つてもそこは王城の外であるため、不死人は室内へと戻り、上へ向かう階段を登つていく。階段は途中で踊り場を挟み、折れ曲がつた先を更に登り終える

と、下の階よりもやや装飾に溢れた、王城二階の廊下へと辿り着いた。

階段から見て右に真つ直ぐ続く廊下を進めば、床や壁、或いは天井の、特に金色の美しい細工が目を引くが、しかし壁に掛けられた数々の絵画の題材は、相変わらず慎ましやかな民草を選んだものであり、また天井から吊り下げられたステンドグラスの箱も、王城一階のものと同じくらいの間隔で設置されているようであった。

やはり歌はそこから出ており、不死人はそれを聞きながら廊下の途中にある扉を一つ一つ調べながら歩き続けるも、扉は全て閉ざされ、少なくともこちらから開く可能性は無いようだ。放置し、先へ進む。

やがて突き当たりに差し掛かると、廊下は左に折れており、不死人はその曲がり角に近付き、耳を澄ませたところ、角の向こうから歌声に混じって複数の物音が出ているようであった。もう少し具体的に物音の正体を探るべく、曲がり角からゆつくりと頭だけを突き出し、先の様子を観察する。

すると床を清掃する召使の亡者が二匹、それから窓を拭く召使の亡者が二匹そこにおり、更にその奥にはロングソードを持った騎士の亡者が一匹、巡回するかのよう付近を歩き回っているようであった。

単純な合計ならそこに居る亡者は五匹だが、その内の四匹とは戦わずに済む可能性があり、しかしあまり期待し過ぎれば先程のような危機を招くことも有り得るだろうが、

それを承知の上でなら何かを試すのも良いだろう。その為には、方策を固め、固めた物の中から選ばなければならぬ。

一つ目、召使達の横を素通りし、騎士の亡者の不意を打つ。

簡潔であるという点は評価出来るが、しかし素通り出来たとして、騎士が動き回っているため、そもそも不意打ちを仕掛けるには不確定な要素が多く、高い成功率は見込めないだろう。

二つ目、敢えて騎士の亡者に姿を晒し、向こうから近付いてくるのを待つことで召使達との距離を離す。

召使の亡者達は正気を失って尚、勤労に没頭しているため、騎士の亡者のみの意識を引くことは比較的楽であり、これであれば少なくとも四と一とを別けることが出来るだろう。そこから先は騎士との一騎打ちとなるが、これについては十分に勝ち目がある。

不死人は二つ目の案で実行することに決め、ゆっくり曲がり角から出ると、巡回する騎士の亡者がこちらに目を向けるのを待った。

「んっ」

騎士が短く声を上げる。その眼窩からは赤味が漏れだしており、しかし虚ろであるため、目が合っているのかどうか、正確なところは分からなかった。

「ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほ。ほっ」

この上なく、悪意が込められていた。騎士の亡者は喉の奥で嗤うと、その場の上に向かつて右手を掲げ、するとすぐに短く断続的に続く破裂音が鳴り、彼の持つ剣の先から黒い塊が飛び出した。

ガラスが割れ、水が零れ、そして紫の海綿動物が床に撒かれる。何を思ったのか、騎士は天井から吊り下げられていたステンドグラスの箱を魔法で打ち落とし、そしてそれにより、廊下を包んでいた歌声がぱつたりと止む。

だがそれは、むしろ静寂の終わりであった。

「ふ、ふ、ふええああああ」

床を磨いていた召使の亡者が、困惑したように手で顔を覆いながら呻き、また窓を拭いていた召使の亡者は、手にしていた布巾をその場に捨て、間も無く、虚ろな眼が八つ、四人分、その全てが不死人に向けられる。



## 第7章 王城 4

「うああああつー！」

召使の亡者達は一斉に走り出し、応じて不死人もそこから逃げ出すが、その様子を騎士は何をするでもなくただ眺めていた。

一先ずは曲がり角にまで戻ってそれを壁とし、騎士の亡者の選択肢の一つである遠距離攻撃の魔法を無効化するべく射線を遮り、だがその一方で召使の亡者達は案外足が早く、既に至近距離にまで迫っていた。

おそらく装備の重量差に原因があり、何の用意も無く四匹もの亡者を同時に相手にするのは無謀だが、とは言え武器も所持していない召使達と足を比べても負ける見込みが高く、すぐに捕まってしまうだろう。

腹を括るより他に無く、不死人は振り返って召使の亡者達の方へ向くと、両手でブロードソードを強く握り締める。

もし今手にしているのがロングソードであれば、決して上手くはいかなかっただろう。しかし厚く広い幅の刀身を持つブロードソードならば、鎧を身に着けない亡者程度、纏めて斬り伏せるも不可能ではない。

劍を握った両腕を腰の横まで下げ、踏み込みながら大きく息を吸い込み、それを吐き出すと共にブロードソードを大きく横に薙ぐように振り抜く。刀身はまず先頭の二匹を一緒に両断し、続いて迫るもう二匹を、返す劍で同じように横に薙ぎ払い、それらの胴も両断してみせた。

瞬く間に四匹の亡者を斃し、だが肺の中の空気を使い切ったせいも、深い水の底に沈められているかのような息苦しささえ覚え、少しの間身動きさえ取れそうになかった。

そしてその弛緩した身体の、後頭部を狙った一撃にて強打されていた。一時的に大きく疲労したせいもあり、不死人は背後からのその攻撃によって勢い良く床に倒れ、顔を大理石に打ちつける。

脳が揺れ、霧散しかける意識を、だが辛うじて手繰り寄せると、何者かの気配がすぐ側まで来ていることに気付く。それは一匹の召使の亡者であり、倒れ込むこちらに向いて、拳を打ち込もうとしていた。

床の上を転がり、寸でのところで拳を避け、相手の姿を見る。その召使には負傷らしきものが無く、今斃したばかりの四匹のものとは別口であったようだ。一体どこから来たのか、それは不明であるが、ともあれすぐに対処する必要がある。

不死人は直ちに起き上がり、劍と盾とを構えて召使の亡者の方へ向き、しかし同時に、金属の音が耳に入る。廊下の曲がり角の向こうからのその音は、騎士の亡者が既に近距

離にまで入っていることを意味していた。

だからこそ惑う暇は無く、眼前の召使にブロードソードで斬りかかる。相手は元が兵士ですらなかったためか、こちらの攻撃に対して成す術はなく、胸元に大きな裂傷を負って崩れ落ち、そしてその様子を最後まで見る事なく振り返りながら、右から左へと胴を斬り裂くべく振るわれた騎士の剣を、塔のカイトシールドで受け止める。

異形故か、こちらの盾を押し込もうとする剣の圧力は凄まじく、押し返すどころかそのまま潰されかねなかったため、不死人は塔のカイトシールドの向きを調節し、盾の表面に敵の剣を滑らせるようにして力を受け流す。

そうして敵の剣がこちらの横をすり抜けたあと、しかし騎士の亡者は己の得物をすぐに引き戻し、先程と同じ横からの角度で振るう。

その横薙ぎの一閃を、機を見極めて盾を力強く叩き付けることにより、ロングソードは弾き返され、その使い手であった騎士の亡者にも衝撃が伝わり、堪らず体勢を崩すこととなった。

瞬間、左手で騎士の肩を掴み、右手でブロードソードを構えると、鎧の守っていない腹に突きを食らわす。剣は深々と騎士の亡者に突き刺さり、貫通したところで勢い良く引き抜くと、黒く濁った血潮を撒きながら、騎士はその場に倒れ込み、それきり動かなくなつた。

気付けば辺りは惨状を呈していた。床も壁も天井も、それまでは繊細な意匠が美しく、いずれも王城に相応しい景観の一助となっていたが、それが今や廊下は汚物で溢れ返っている。

ブロードソードの血を拭い、熱した身体を冷ますようにやや大袈裟に呼吸を繰り返して気を整えると、動かなくなつた亡者達の懐を漁り、雫石を手にする。次いで、周囲を観察していると、先程通つた廊下の奥で、扉が一つ開いているのを見付ける。

背後から襲つてきた一匹の召使の亡者は、何かを契機としてその扉の向こうから出現したのである。

そしてその契機とやらは既に明らかになつており、彼女ら召使が襲い掛かつてきた原因は、ステンドグラスが割れたことであつた。厳密に言えば、歌が聞こえなくなつたら、であるのかもしれない。歌があれば、召使達は平静を保つて仕事に全ての意識を傾けられるのだらう。

今後注意すべき点を知り得たところで、不死人は動かなくなつた亡者達を捨て置き、廊下の曲がり角の方へと歩き出した。

やがて召使達が仕事をしていた辺りにまで出ると、廊下は段々と幅が広くなりつつあつた。それは最早通路というよりは区画であり、しかし広間や部屋と呼ぶには区切りが曖昧な上、そういった場所につきものの調度品の類も置かれてはいない。

この幅広の廊下を不死人は真つ直ぐに歩き続け、すると行く手の右側に扉が開かれたままになっている部屋が現れる。

部屋の中は王城の常として金色の細工等の装飾が施されていたが、絵画等は見当たらず、代わりにいくつもの大きな姿鏡が仰々しく並んでおり、しかし更衣室かと思えば、服を仕舞うためのインテリアの姿は無かった。

さらにその部屋の奥には、不死人が今まで目にした中で最も豪華な扉があった。縦にも横にも長いその扉は、草花や鳥などのレリーフが一面に隙間無く掘りこまれており、美しく、それでいて見る者に穏やかな印象を与えるものであった。

そのような一品であったからか、開けようと動かす際は普段よりも慎重な力加減を心掛け、しかしそう簡単に事が運ぶ訳もなく、この扉には鍵が掛かっているため、今は閉ざされているようであった。

踵を返し、幅広の廊下にまで戻り、それを更に奥へと進む。するとそこから十も歩かないほど近くの左手に、半ばまで開いたままになっている木製の扉が現れる。

内部は廊下と違い、蠟燭の灯りが無いため暗がりとなっており、床に絨毯が敷かれていること、そしていくつか家具や棚が並び、そこに多くの本が置かれているらしいことだけが辛うじて見て取れた。

入り口にて一通りの観察を終えてから不死人は室内に入り込み、だが慎重に歩いたつ

もりがほんの数歩目で本か何かに躓き、その際に物音を出すと、それに反応してか、闇闇で赤い小さな光が二つ、こちらに差し向けられる。

それは異形である、騎士の亡者の眼光であった。

闇故に、敵が何の得物を選択しているのか分からず、そのような状態での戦闘は避けるべきだが、しかし美しく伸びる刀身が、翻った際に僅かに光を反射し、それがロングソードであることを教える。

程無くして亡者の騎士はその剣を構えながら、一步二歩と無遠慮で大股に歩き出し、三步目で強く踏み込むと不死人に強烈な突きを放った。

横方向へ回避するには部屋の幅が不足していた。従って塔のカイトシールドでその突きを受けると、だが受け止めきれないことは事前に覚悟していたため、あまり床を踏み締めず、相手の突きの威力に任せてそのまま後ろへ下がる。

こちらが油断するとなればこの瞬間なのだろう。しかし半端に距離を空ければ危険な手合いであることは既に承知しており、不死人は後退の直後、むしろその開いた距離で助走をつけて走り、十分に勢いをつけた上で塔のカイトシールドを正面に構え、騎士の斬撃を防ぎながらも体当たりで吹き飛ばす。

騎士の身体はいくつもの本を巻き込みながら転倒し、不死人はそこへ間髪入れずに詰め寄って止めを刺そうとするが、敵も然るもの、本を跳ね飛ばしながら即座に起き上が

り、ロングソードを両手で握る。

騎士の亡者は走りながら迫る敵対者を、その勢いを利用して首を刎ねるつもりなのか、高めの位置に剣を構え、横に振り抜くが、不死人はこの迎撃に応じ、頭を低くすることで交わしながら騎士の懐に潜り込み、ブロードソードで脇を挟み抜く。

その部分の肉がごっそりと消え失せ、騎士は反射的に傷口を手で塞ごうとするが、それは完全に悪手であり、大きな隙を晒す結果となっていた。

それを見逃す理由はなく、不死人は力任せに塔のカイトシールドを騎士に押し当てると、そのまま重さを掛けて相手を転倒させ、床と盾とで挟んで抑え込み、その上で横から潜らせたブロードソードで胴と思しき部分を刺し貫く。

騎士の亡者は段々と力を失い、間もなく完全に動きを止めていた。周囲には他に動くものはなく、血塗れになってしまった本が散乱するばかりであった。

騎士の亡者の懐を漁った後、改めて室内の様子を眺める。暗がりには、先程まで騎士が息を潜ませていたように殆どのものを覆い隠し、灯りでも持ち込まなければ探索のやりようがないが、しかし室内の最奥と思しき一角に、陽を差し込む窓があった。

それは光の輪郭を作り、そしてその内側には、古ぼけた木の机が一つ置かれている。使い込まれたものだろうか、味のある傷が散見され、また机の上には破れた羊皮紙が一枚、走り書きを乗せて佇んでいる。

## 第7章 王城 5

《多くを奪われ、心を失っていく我々の前で、彼女だけは気丈に振舞っていた。確かに、残された者達の為には、まだやらなければならぬことはある》

文字はその一行のみであった。羊皮紙を裏返す。

《夜が深まる度、隣室から呻きが聞こえる。私にはどうすることも出来ない。誰に話したとしても同じだろう。彼女のために出来ることは何も無い》

書かれている文字はそれで全てであった。前後が欠落しているのか、その意味するところを捉えられず、ただし日記のような趣があった。

不死人は手にした羊皮紙を戻そうとし、その際机の上に鍵が一つ置いてあるのを見付ける。どうやら元は羊皮紙の下に置かれていたものであるらしいその鍵は、草花と鳥の彫刻が掘り込まれた大きめのものであった。

鍵を懐に仕舞い、その部屋の中で特に目を引く物は調べ終えたため、他の場所へ移ることに決める。幅広の廊下にまで戻り、すると周囲が再び明るくなった。

そこから更に廊下の一番奥を目指して歩くと、その突き当たりに厚めの木で作られた扉を発見する。延焼すら防いでしまいそうな頑丈なそれに触れたところ、鍵は掛かって



おらず、開いた扉の中には下に続らせん状の階段が収まっていた。

この階段を降りると、上の階と同じような間取りの幅広の廊下が現れる。また階段から降りてすぐの右手には内側から門がされた扉が一つあり、解錠して開いたところ、そこは王城で最初に入った廊下へと繋がっていた。また一つ通行出来なかつた扉を反対側から開くことに成功したらしい。

だが今更そちらに用は無いため、不死人は幅広の廊下に戻り、周囲を歩いて調べるも、しかし目に入る扉の殆どは施錠されたままで強い衝撃を受けたのか、いずれも歪んでしまっており、開閉出来ない状態にあった。

その中でらせん階段への扉以外で無事なものは一つのみ残っており、幅広の廊下の丁度中央の左手にあるその鉄製の扉は、しかし動く気配はなく、鍵で閉ざされているようだ。鍵穴に先程拾った草花と鳥の鍵を使うも、大きさは合わず、また鍵穴の上には飛び上がる鳥の模様が刻まれていた。

その階では他の行く先も無くなったため、不死人はらせん階段へと戻ると、それを上がって二階の幅広の廊下に入り、次に姿鏡が並んでいた部屋の方へもう一度向かう。そして草花と鳥の彫刻が刻まれた大きめの鍵を取り出すと、それを豪華な扉の鍵穴に差し込み、回せば内部で鉄と鉄とが噛み合せて軽快な音を鳴らす。

解錠されたと思しき扉に触れ、物々しいが故に重いそれに力を込めて押していくと、

僅かずつではあるが扉同士に隙間が生まれ、そうして踏ん張り続け、何とか一人分が通れるだけの幅を確保し、そこから中へと入り込む。

広大な部屋であつた。それは千人ほどを収容しても尚、余裕があるような大きな広間であり、また三階や四階部分も吹き抜けになつてゐるため、屋内であるにも関わらず、そうとは考えられないほど広い空間を有していた。

床はやはり大理石であり、天井、柱や壁には美しい彫刻やらが刻まれ、大量に使われた蠟燭が広間を余すことなく照らし、隅の方までをも見渡すことが出来た。そして歌声はここでも止むことなく、壮大な景観の中で響き続けている。

おそらくこの場所は式典や祭事に使用されるものであり、またそのような用途に合わせて誂えたものか、広間の一番奥には見るからに壮麗を誇る椅子が一つ、何段か高くなつてゐる先に置かれていた。

付近には召使や騎士達の姿は見えず、しかし一応周囲を警戒しながら不死人はその壮麗な椅子の方へ歩き、やがて広間の中央にまでやつて来る頃、椅子の陰から人が現れる。

まるでその人物そのものが影であるかのように、闇色のドレスを纏い、頭部もまた同じ色の帽子と、そこから垂れたベールによつて顔まで覆われていた。召使の服に通じる装いであるようだが、それよりも凝つた意匠が見受けられ、彼女らよりも格の高さが窺える。

また、その黒い影のような女性は、手に何かの細長い棒を持っていた。まるで火かき棒のように先が少しだけ曲がっているが、火かき棒よりも少し長めである。武器には見えず、しかし道具にしても何の目的で使用するものなのかは茫然としている。

やがてその女、王城の侍従長エスメラルダは、靴の高い踵で床を鳴らしながら、こちらに向かつてゆっくりと歩き出し、歩きつつもドレスの裾から何かの液体を出し始める。透明な液体は床に大きく広がり、次にまたドレスの裾の内から紫の、紐状のものがいくつも落ちていく。

それはステンドグラスの箱の中で歌っていたものと同じ、海綿動物達であった。それを床に何十匹と落しながら、王城の侍従長は不死人に向かつて歩き続け、その距離を詰めるようにしている。

彼女の歩みは遅く、両者の間合いはまだ遠いものだが、しかし大理石の上の海綿動物達の数が増える一方であった。数十を越え、百を越え、数え上げるのが不可能な数に達し、そして紫の広がりが大きなものになっていくと、海綿動物達から生じたのか、徐々に黒い瘴気が溢れ出しつつあった。

王城の侍従長は時が経つにつれ、眷属を増やすことで空間を侵しながら、おぞましきもまた増していく。それがどれだけの規模と化するのか不明であり、飲み込まれなくなれば後退するべきかもしれないが、だが逃げ続ける一方であったために敵側の勢力に

よって室内を埋め尽くされる、などという事態は避けなければならない。

今のところ王城の侍従長は魔法を使おうとせず、海綿動物達に囲まれないよう立ち回りにさえ気を付けていれば直ちに危険は無い様子であったため、不死人はまず紫の群れの端が近付くのを待つ。

そしてブロードソードの間合いに入った瞬間、何か言いたげに唇を動かす海綿動物達を纏めて斬りつけるが、誰も悲鳴を上げず、ただほんの数匹が切断されただけに留まる。あまり効果は無いと見るべきか。

様子を見る為、再び距離を取るべく海綿動物達の前から後退しようとする、その気配を察してか、紫の群れの一部分が盛り上がり、そこから不死人に向かって黄緑の液体を飛ばす。

こちらの頭の高さにまで飛び上がったそれを反射的に躲し、事なきを得るが、黄緑の液体を被った床を見れば、そこは軽く溶け出しているようであった。酸か何かの特性を持ったものだったのだろうか。いずれにしろ、攻撃ではある。

そしてそれが切欠となったのか、後退するこちらに応じて蠢く海綿動物達は群れ全体で伸び縮みを始め、不死人の走る速度にまでは及ばないまでも、回り込み、そして追いつめようとするような動きを見せ始めた。

一方、王城の侍従長は未だ悠然とした足取りで不死人に向かって歩きながらも、海綿

動物の放出を続け、その様子には出し惜しむような気配は無く、また黒い瘴気も広間に堆積し始めている。

全てが手遅れになるまでどれだけの時間が残されているか、それは分からないが、気付いた時には差し迫った状況に陥っているのだろう。何か試すのであれば、早くに行動すべきであった。

まずは紫の海綿動物達の前に立ち、これらの攻撃を誘うため、不死人は前後に動いて見せる。すると予想通り彼等は黄緑の液体を吐き出したため、余裕を持ってこれを躲した後、尚もこちらへ追い縋ろうと群れの形を伸ばす海綿動物達の前で、移動速度を調節しながら後退を続ける。

そのうち群れの形は段々と長く伸び、その先端と王城の侍従長の間に長い距離が出来た時、不死人は走り出し、海綿動物達を迂回して守りが手薄になった侍従長に近付くと、黒いドレスに斬りかかる。

近付いた瞬間こそ手にした棒でこちらを迎え撃つ素振りを見せたものの、それを躲してブロードソードの斬撃を浴びせると、王城の侍従長は大きく怯んだため、不死人は立て続けに剣を振りかぶり、そのまま一方的に斬り続ける。

しかし、剣から伝わる手応えには違和感を覚えていた。人間を斬っているというより水を吸った多孔質の何か、まさに海綿動物そのものを叩いているような感触であり、ま

た出血も伴わず、何度斬り付けられようと怯むだけで倒れることはなく、悲鳴も上げなかった。

五回ほど斬り付けたところで、伸び切った部分の海綿動物達が戻りつつあるのを目にしたため、不死人は王城の侍従長の元を離れ、大きく距離を取ると、程無くして彼女を中心とした紫の群れが再び形成されていた。

攻撃自体は成功したが、試みは成功とはならなかったようだ。王城の侍従長には剣による物理攻撃の効果が乏しいと見られ、しかし手持ちの武器と言えればそれしか無いため、他の攻撃手段は無いに等しい。

敵本体への攻撃を続けるべきであるのか、甚だ疑問ではあったが、他に選択肢が無いため、止むを得ず、そして様子を見るつもりで、不死人は同じ戦法を繰り返すことに決める。

踵を鳴らしながら歩く王城の侍従長とは遠く距離を取りつつ、その周囲で蠕動を続ける海綿動物達を挑発するように目の前で動き回る。そうしてこちらに釣られ、群れの形が伸び始め、侍従長の周りの海綿動物達の層が薄くなつたのを認めると、その場を放り、本体へ向かって走り出す。

紫の群れを迂回し、王城の侍従長に近付くや否や、彼女はまるで家令としての厳かさを失っていないかのような、典雅な身振りによってこちらを打擲しようと手にした棒を

振るい、しかしそれは塔のカイトシールドで易々と弾かれ、間髪入れずに不死人は斬り込む。

その際の手応えはやはり奇妙なものではあったが、斬られる度に王城の侍従長は怯んだため、軟体動物達の群れが戻ってくる前にと、そのまま何度もブロードソードが翻り、彼女の黒いドレスは無残にも切り刻まれていく。

そして不意に、王城の侍従長は身体を大きく仰け反らせ、天を仰いだ。





たため、相手との距離は広がったようであった。起き上がり、前を見ると、海綿動物の群れによる巨大な塊は小康状態に入ったのか、あまり大きな変化を見せずにいた。

その一方で、高く吹き上がった瘴気は天井に当たって一度は勢いを無くし、ゆつくりと室内の壁を伝いながら落ちていくが、それが床の上で静かに停滞するようなことはなく、巨大な塊の周辺で巻き起こっているらしい風圧によって煽られ、広間の中で吹き荒ぶ。

舞い上がったては不死人の周りを荒れ狂う瘴気は、窓の光りを遮り、蠟燭の光りも隠し、そうして生まれた闇の中、海綿動物の塊が一度、胎動するかのように強く波打つ。

事実それは、何かの卵であったのかもしれない。紫の塊は内側から表面を突き破るようにして四肢を突き出すと、その部分の海綿動物が筋肉を作るように引き締まり、群れの間から黒い硬質な何かが覗き、それが爪のように生え揃う。

身体の姿勢はまるで犬のように変化し、だが犬よりも胴が長く、そして首が下に向かつて垂れ下る。その形姿であれば、自分より小さな者をさぞ屠り易いことだろう。

「死ね」「死ね」「死ね」「皆死ね」「全員死ね」「呪われろ」

おぞましい呪詛の囁きが耳に届く。見れば海綿動物達の表面の口が動き、各々が勝手に言葉を発しているようであった。

そして血が撒かれるような音が鳴り、巨体の顔に当たる部分の中央に縦に亀裂が入る

と、左右へ開き、薔薇のような鮮烈な赤を見せる。その部分の周りには等間隔で八本、牙のようなものが生えており、ということは、赤い部分は縦に裂けた口なのだろうか。

「死ね」「死ね」「死ね」「殺す」「皆殺し」「死ね」「死ね」「苦しめ」

海綿動物達は塊でありながら個体それぞれが嘔き、変化の最後に口の横に一对の目のようなものを作ると、その目玉は二重に赤と黒の瞳を宿して不死人を見据える。

「死ね」「殺す」「皆殺し」「許さない」「聞こえてるでしょう」「もうすぐよ」「もう終わり」

「ひ、ああああおおあああおつ、ああああああああああつ!!」

おそらくは変化する上で、己の姿を決める際には自由な選択肢を持つており、その中で彼女は、無意識に獣であることを選んだのだろう。全身の体表にある海綿動物の唇から怨嗟を呟きながら、王城の侍従長であり、獣と化したエスメラルダは吼え猛っていた。俄かに黒い瘴気が舞い上がり、王城の侍従長の巨体を覆い隠していく。

「煮えたぎる釜」「腐ったのこぎり」「罹患者に使ったナイフ」

姿を隠した王城の侍従長は、しかし止めることなく嘔きを不死人に聞かせ続け、それ故に大まかな位置の把握が可能となっていた。塔のカイトシールドを構え、瘴気を割って出て来るであろう相手待つ。

だが異変は、前方ではなく遙か後方で起こった。遠く、広間の端にて、腐り落ちた果

実が地面に叩き付けられるような音が同時に三つ、次いで四つ目、五つ目と連なる。

「釣り針はどう?」「火にくべた鉄」「あなたの友の亡骸を煎じて」

「死ね」「殺す」「皆殺し」

「呪つてやる」「死ね」「全員死ね」

囁き声の数が増えている気配があつた。元々、海綿動物が多数織り重なつて王城の侍従長と化しているため、それに伴つて声の出所が複数個所あるのは何ら不自然ではないが、しかし先刻こちらの背後で妙な物音がした後、囁きが発せられる場所が前方、後方、左右と大きく分散し、次第に不死人を囲むような位置取りになつていく。

「死ね」「殺してやる」「死ね」

「火薬と導火線」「やすりと塩で」「血の水槽に」

急激に声が近付きつつあつた直後、人影が二つ瘴気から抜け出し、不死人の前に姿を露にする。

「呪われろ」「死ね」「死ね」「死ね」「皆死ね」

それは召使の亡者ではあつた。しかし全身の四肢は捻じ曲がり、首や胴すら折れたまま、皮膚には数匹の海綿動物を張り付け、黒く腐つた血を流しながらこちらに向かつて歩いている。

いくら亡者であろうと、それは尋常な姿ではない。どう対応するべきか判断に迷い、

だがそうして対処するまでに時間を掛けることこそが敵の狙いであることも有り得る。ともあれその召使を分析するだけの要素は碌に存在せず、所詮は賭けであると断定すると、のろのろとこちらに近寄ろうとする亡者達へむしろ不死人から接近し、どちらもブロードソードで叩き斬る。

「二頭の牛と縄」「火の檻」「割れたガラスを混ぜ込むの！」

その声は、今斬ったばかりの召使亡者達が発していたものではなく、それよりも力強く響いた。すぐに声のした方へ向き直ると、直後その辺りの瘴気の中から獣と化した王城の侍従長が飛び出し、床の上を滑らせるように前足を振るう。

今更両者の体格差について考慮する必要は無く、その攻撃の防御が不可能であることは明白。不死人は後ろに飛び下がって敵の攻撃を回避し、するとこちらの肌の表面をなぞるかどうかの瀬戸際で王城の侍従長の前足が通り過ぎていく。

自身の攻撃が空振りに終わると、王城の侍従長はすぐさま瘴気の中に身を紛らせようとし、一方の不死人はその後ろ姿を敢えて見逃して様子を見る。本来であればここは王城の侍従長へ追い縋り、斬撃の一つでも与えようとして然るべき機であり、だからこそ敵が瘴気の奥から魔法の類でも使って迎え撃とうとしないか警戒してみたものの、遠距離の攻撃手段を持つてはいないのか、それらしい様子は見られず、そしてそれとはまた別にどこか遠くで肉を打ち付けるような音が響く。

それはおそらく、召使の亡者達が身投げし、大理石の床に叩き付けられる音なのだろう。この広間は吹き抜きの三階、四階から見降ろすことが可能であり、そこから落下することで不死人が居る場所にまでやって来ることが出来る。

エスメラルダが獣と化し、城内の至る場所に設置されたステンドグラスにまで異変が生じた為に、召使達がこの広間へと引き寄せられているのだろうか。だとすれば、彼女らは誰もこのようなことを望んではいなかった筈である。今この空間は悪夢なのだ。

「死ぬ」「殺す」「許せない」

両足の骨が折れ、歪な歩みで瘴気を抜ける二匹の召使の亡者を、接近から間もなく斬り伏せる。そして耳を澄まし、囁き声の、特に量の多いものに注意を払い、それらしい方向へ身体を向けると、その瞬間紫の巨体が高く飛び上がり、不死人の真上を通過する。まるでしなやかな王城の侍従長の動きであったが、それに反して上を通った際に撒き散らされた黄緑の液体は不潔そのものであった。床を溶かすそれを、危うく頭から被りそうになるところを横に避ける。

王城の侍従長は殆ど音も無く着地し、そのまま黒い瘴気の中へ進もうとするが、そこそは事前に危険性を測った機である。不死人は走って侍従長に近付くと、その右後ろ足、腿の辺りをブロードソードで斬り付ける。

傷は浅いが、一応の効果はあったのか、海綿動物が数匹、巨体から零れ落ち、だが王

城の侍従長はそれを気に留めるような素振りを見せず、そのまま瘴気の中へと入り、姿を消した。

## 第7章 王城 7

「死ぬ」「死ぬ」「死ぬ」「死ぬ」

高所からの落下により、碌に走ることもすら出来ない有様の召使達がまたこちらに迫ろうとしていた。それに対処しようと不死人は構えを取り、だが瘴気の中をぐるりと回り込むように囁き声が移動する気配を察知する。

一瞬の間が空いた後、やはり王城の侍従長が瘴気のカートンを裂いて飛び出し、召使の亡者達をも巻き込みながら、巨体そのものを武器にこちらへと突っ込む。

召使達は床と紫の巨体との間で引き千切られ、磨り潰されて飛び散り、だが不死人は身体を横に投げて敵の突進を躲すことに成功すると、しばらくも経たない内に勢いを失くし、停止して無防備を晒す王城の侍従長の横腹に取り付き、その肉を剣で深々と突き刺す。

まさしく会心の一撃であった筈が、だが不死人の身体は浮き上がり、つまりは吹き飛ばされ、無様に床の上を転げ回る。

大理石に剣を突き立てることで強引に回転を止め、すぐに顔を上げて相手の方を見るや、王城の侍従長は今まさに瘴気の中へと進み、闇に紛れようとしていたが、その一瞬

に横腹で腕か足のような、或いは枝のような細いものが突き出し、上下に動いていたのを目にする。敵の身体に剣を突き刺した瞬間、そこからあの腕のようなものが飛び出し、反撃したのだろうか。

「死んで」「殺したい」「死ぬ」

何ら確証は得られず、だがどの道考え込む時間は無い。胸元で雫石を砕きながら、囁き声のする方へ目を向け、瘴氣の向こうから召使の亡者が三匹這い出るのを視認すると、剣を構え、敵との間合いを計る。

「皮を剥ぐわ」「摘出する」「二つに別けて」「抜き取っていく」「反対側へ引つ張る」「指を押し込んで」

しかしその亡者達はこちらで倒すまでもなく、先程と同じように黒い瘴氣の中で囁き声が動き回ると、王城の侍従長が飛び出し、突進を仕掛ける。

治癒が完全ではなかったためか、僅かに身体の反応は遅れたものの、それでも後先を考えずに横に飛ぶことで突進の直撃は免れ、その後また敵が脇腹を無防備になっているのを認めると、急ぎそこへ駆付けながらブロードソードを握り締める。

しかしすぐには斬り込まず、海綿動物達が蠢く体表に対し、垂直ではなく斜めになるように立ち位置を調整し、上から下への斬撃を見舞い、すれば同じ轍を踏む事は避けられたか、綺麗に生まれた裂傷からは勢い良く何かが飛び出すが、今度はその何かによつ



て打たれずに済んだようだ。

無論その何かは例に漏れず海綿動物達によって形作られており、だが繊細さがあつた。しなやかで、細く、優美ですらある、女性の手そのものであつた。

その手は軽やかに動き、しかしこちらが近寄ろうとすると拳を握り、乱暴に振り回して攻撃の意を見せ、その間に王城の侍従長本体は動き出し、また黒い瘴気の中へと姿を隠す。

氣を付けていればあの自動的な反撃を貰わずに済むようだが、ただし女性の手は一度傷口から飛び出るとそのままになっているらしく、攻撃の回数を重ねればそれだけ多く増え、そして増え過ぎれば王城の侍従長そのものには近付くのが困難になってしまう恐れもあつた。

「死ぬ」「死ぬ」「本当に死ぬ」「早く死ぬ」「苦しんで死ぬ」

「流し込む」「押し付けて」「引き裂く」「少しずつ割る」「削っていく」「押し潰して」「かき回すのよ!」

憎悪の囁きが左右から不死人を責め立てる。右がより近く、そちらの方を見ていると召使の亡者が一匹、瘴気を抜け出てくるが、しかしその直後に召使の居る位置とは反対側から王城の侍従長が姿を現し、こちらを鋭く睨む。

「ひういういあういあああつ!」



れると、そこから次々に女性の手が生えて飛び出し、そして彼女が堪らず飛び起きる頃には、不死人はそこから距離を取り、黒い瘴気の中へ隠れようとする姿を見送る。

身体の各所から細い腕が伸びたその後ろ姿は今や左右非対称な奇形であり、それだけ手傷を与えたことをも意味するが、敵の攻撃はこれまで以上に苛烈さを増すのだろう。それが獣というものである。

「あ、ああああ、あ、あ、あ、ああ」

渦巻き、上下にうねる黒い瘴気の只中で、王城の侍従長は喉を鳴らしながら、草むらに伏せる捕食者のようにおそらくこちらを睨んでいた。焦れるような時を少しの間味わい、やがて糸が切れたように突然に周囲が静まり返ると、瘴気の一部が引き込まれていった。

「ひあああああああああああああああつー！」

それまでで一番に猛り狂った叫びであった。大音量のあまり、不死人の身体を吹き飛ばしかねないほどの圧が生じ、空気が震え、黒い瘴気は激しく舞い踊る。そしてこの声に応じてか、広間後方では肉塊の落下音が数回ほど響いていた。

「死ぬ」「ずっとずっと」「最後まで」

囁き声が増えると、やがて瘴気の中から召使の亡者が三匹、同時に姿を見せていた。それらは不死人の姿を見付けるとすぐに向き直り、歪に折れ曲がった身体で不自由そう

しながらこちらに向かつて歩き始める。

王城の侍従長は先程の叫びの後、何かをしようと言う素振りを見せず、それはおそれく厄介な展開の前兆ではあったが、しかし今の時点で最も間近に迫った脅威である亡者達に対処しなければならぬため、不死人は剣と盾を構える。

両手を振り上げて迫る一匹目の亡者との距離をこちらから踏み込んで潰し、胴に狙い定めて剣を深く難いで斃すと、次に並んで歩いてきた二匹の片方を蹴り飛ばす。それによつて得た僅かな時間の中で残ったもう一匹へ向き直り、肩から脇を通すように袈裟斬りにし、床の上に転倒していた最後の一匹に近付き、その首を切り取る。

遅れを取るなどあつてはならず、如何に素早く斃せるかが問題となる局面においてそれなりの成果を上げ、意識を王城の侍従長に戻すと、だがその気配はどこかへ失われていた。

舞い上がる瘴気の中の、その居所の手掛かりたる囁き声を探すべく、不死人は耳に意識を集中するも、しかしどうしてか今まで殆ど絶えることなく聞こえていたそれは止んでおり、闇だけが広間の中にあつた。

俄かに雨粒が一つ足元を濡らし、大理石を溶かす。

「ひああああおおおおおおおおおおおっ！」

人間の柀を遙かに越える重量が天井より落下する。一瞬前の叫び声で不死人は回避

行動を取り始めたものの、完全に避けることは叶わず、王城の侍従長の身体はどこかが当たったのか、落下の直後に強い衝撃に襲われ、横に弾き飛ばされる。

押し潰されなかつただけ遙かに良い結果であつたと言いつけるには、負つたダメージは大きいものであつた。散々に床の上を転げ回つた後に止まり、倒れ伏せながらも早急に治癒すべく懐の雫石に手を伸ばすと、だがそれを咎めるような視線に気付く。

瘴気突き破り、王城の侍従長の巨体が飛び掛る。そのままであれば轢き潰される以外に末路は無く、不死人は負傷により満足に動かない足は頼らずに、腕を使って床の上を飛び跳ね、紙一重で王城の侍従長の突進を回避する。

身体のすぐ横を紫の巨体が暴力的な速度で通過して行く中、不死人は無理に起き上がらず先に胸元で雫石を砕いて治癒を始め、両足に活力が戻つてから立ち上がり、敵との距離を取つて態勢の立て直しを試みる。

## 第7章 王城 8

「ひあああああつ！ ひいあああああつ！」

追撃があるかと思えば、王城の侍従長はこちらが居る位置とは全く別の場所で叫び声を上げ、前足によつてがむしやらに瘴気の中を叩いているようであった。彼女にしてみればその直前がこちらの息を止める絶好の機会であつたため、頭に血が上り、闇雲な攻撃をしているのではないだろうか。

雫石による治癒は完全ではなかったが、この機を逃すべきではないだろう。喚きながら床を叩き続ける王城の侍従長の横を回り込んだ上で、自身を黒い瘴気に紛れさせ、巨体の正面に来るように位置を取る。

そして荒々しい攻撃が落ち着いたとき、不死人は剣を上段に構えた姿勢のまま床を蹴るようにして走り出すと、王城の侍従長の真正面、縦に割れた口から覗く鮮やかな赤の肉の部分を狙い、そこを深く斬り付ける。

「げうっ！」

真つ赤な血が噴出し、獣の身体がよろける。その反応を見るに今の一撃が敵に効いたことは定かだが、その上斬つた際の手応えも今までと違い、肉がしっかりと詰っている

ような感触と音があり、また深い裂傷が生まれたにも関わらず、そこから女性の手が生えてくることもなかった。

正対して攻撃しなければならぬという危険を呑むことさえ出来るのであれば、この赤い口の部分が弱点であると言えるのか、彼女は今なお怯むような仕草を見せており、しかし流石にそれ以上の追撃を許すつもりは無いらしく、直に姿勢を取り戻すと、一度前足を引いてから上体を起こし、直後に身体全体を力強く床に叩き付ける。

「ひいあああああああああああうっ!!」

後ろに飛び退くことで叩き付け自体の直撃からは逃れたものの、その際の風圧と、巨体の肺活量に相応しい桁外れの叫声が合わさったものを至近距離で食らい、吹き荒ぶ風に成す術なく襲われ、その場に釘付けにされるが、しかしその脅威は凄まじい勢力の風のみならず、王城の侍従長の口から酸性の液体が飛び出ることにより、それが風に混じって不死人を打ち、身体の至る所に焼けるような負傷を与えていた。

この状況において、逆らわず、長く続く叫び声に押される形で一度退くのも一つの手。しかし、やや無謀だが、決定的な攻撃力を持たない相手のこの行動の最中にこそ罷り出るのも一つの手である。

風に負けず、飛び散る黄緑の液体に負けず、そして怨念籠る叫びにも負けず、押し返すつもりでその中を突き進み、王城の侍従長の口元目掛けて渾身の斬撃を放つ。

「ぐえうっー！」

大量の血液が撒き散らされ、彼女は大きくよろけながらたたらを踏んだ後、一步、二歩と後ろに下がり始め、そのまま後退するのかもしれない、三歩目で王城の侍従長は一旦止まり、大きく開いた口を不死人に差し向ける。

「ぐうわうっ!!」

短距離を一瞬で踏破し、王城の侍従長は鮮やかな赤い色の口内を剥き出しにしてこちらに食らい付こうとするが、寸前で後ろへ飛び退くことで辛くもその噛み付き攻撃を躲す事に成功し、だが危機を脱したつもりになるのも束の間、種はそれだけでは尽きていなかった。

「ああ、あ」

眼前で開かれた口の中に、数人の女性が生えていた。下半身は王城の侍従長の口内に埋まったまま、優美な姿で上半身を伸ばし、不死人の身体に手で触れ、そして優しく撫でる。

その姿は、いずれも血の赤で染まりきっていた。

「ずっとずっと」「いつまでも」「呪ってやる」

彼女たちの手も腕も肌の全ても、皮を剥がされ、肉を露にした人体そのものの赤さであつた。やがて不死人を掴む手に力が込められる。



「あああ」

吐息が耳朶に甘い感触を残す。

ブロードソードを両手で構え、それを上へ下へ、右へ左へ、力一杯振り回し、王城の侍従長の口から伸びる、赤い女性達を斬り裂いていく。

「決して終わらない」「全部あなたのせい」「もう誰も助からない」

彼女らは血飛沫を上げ、腕や首を落しながらも、最後まで呪詛を唱え続けていた。そしてその女性達が息絶えたように動かなくなると、徐々に王城の侍従長自身もその巨体を揺らし、震わせ、程無くしてふと糸が切れたように動かなくなり、床の上に倒れ込む。

紫の海綿動物達もまた、絡み合った部分がほつれ、そこから滲んだ真っ赤な血と黄緑の液体が混ざり合い、黒い水溜りとなって床に広がっていく。

苦しみを溜め込み、獣と化した彼女と、その配下にあつた者達の悪夢は、果たしてこれで終わったのだろうか。

力尽きた王城の侍従長の身体は、ドレスを纏っていた頃の面影など微塵も無く、死んだ海綿動物達が堆く積まれてそこにあるだけであつた。

やがて瘴気も薄れ、広間が明かりを得ようとし、そのように変遷していく周囲の様子を目にしながら、不死人は歩き出す。広間の中央にある、最も尊い者のみを使うことを許された、壮麗な椅子の元を目指して。

そうして段々と近付けばそれは背凭れや肘掛など、あらゆる部分において細かく丁寧な装飾が施されており、布の部分は触るまでもなくごく滑らかな素材が使われているのが見て取れるが、しかしそれ以上のことはなかった。

ただ、それだけのことであった。横から眺めても後ろに回り込んでみても、その椅子はただ尊いだけであつた。仕掛けが施されているようには見受けられず、不死人は試しにそこへ座つてはみたものの、何か変化が起こるといふようなことはない。

玉座を目指す。この旅における当初の目的は果たしたが、そこに意味はあつたのだろうか。

玉座から視線を移し、周囲を見ると、玉座から見て右方向へ直進した先の壁に、一面が金色で出来た扉があつた。広間や玉座の装飾に劣らず絢爛なものであり、この国の象徴なのか、草花と魚の模様が細かく描かれていた。

この扉に近付き、動かすと、やはり手入れは怠つていないのか、埃が舞うようなことはなく静かにそれは開き、室内の薄暗がりに出迎えられ、不死人はその中へと踏み込んでいく。

目が次第に慣れると、存外に広い部屋の中に数々の美しい調度品を見付け、またその中でも大きな天蓋の付いたベッドが目を引いた。ここは寝室であつたのだろうか。

窓は締め切られ、寂然とした空気が漂っていたが、しかし忽然と鉄が揺れ、軋むよう

な音がどこかで鳴る。それが発せられた方角と思しい部屋の隅の方に目をやると、鳥かごのような形状の、しかしそれよりも遙かに大きな檻がそこに据えられ、またこれの内側にはぼろきれに身を包み、薄汚れた茶色い長髪の女が一人、囚われて尚、鎖に縛りつけられていた。

「ああ。はっ、ははははは。はははは。はあ、ご苦勞なことね」

近付いた際の気配を感じ取ったのか、不死人が話し掛けもしない内に肩を揺らしてその女は嗤い、顔を上げる。卑しく唇を歪ませ、泥か灰にでも塗れ、惨めに汚れた顔は、しかし造型そのものには美しいような印象もあつた。

## 第7章 王城 9

「ダークソウル」

彼女は、はつきりとそう口にした。

「それを顕した強き不死は、目的が何であれ玉座を目指す。それが使命なのか、呪いなのかはともかく」

溜め込んだ笑いを、そこで彼女は解放した。下劣に、大声でひとしきりに不死人を嘲笑した後、泣き笑いの形相を浮かべながら、揺れ動いていた視線を今一度こちらに合わせる。

「でもね！ でも。この地では決して薪の王は生まれ無いわ。あなたも見たでしょう？ あそこにあつたのはただの人間の玉座。何の力も無い。そう、あなたはここに来るまでとてもとても頑張つたのかもしれないけれど、でもね、ずっと勘違いをしていたの。ここには最初から何も無いのよ。何も！」

女は一瞬だけ虚ろな目をどこか遠くへ向け、しかしすぐに笑みを取り戻すと、身体とそれを戒める鎖を揺らして笑い声を上げる。

「あつはっ、あはっはっはっはっはっ！ はあっ！ はああ、ごめんなさいね下品で。」

でもあまりにも下らなくて。お詫びという訳では無いけれど、そうね、その机の上に木箱があるでしょう？ それを開けてみて」

やや訝しがりながらも、女に言われた通り、付近の机の上に置かれていた木箱を手取るが、しかしその際、金物の音が鳴り、見ると木箱の下に何かの鍵が置かれていた。飛び上がる鳥の模様が刻まれたその鍵は、使うべき場所に心当たりがあった。鍵を懐に仕舞い、それから木箱を開く。

中に入っていたのは、空っぽの緑の瓶が一つと、中が空洞となつている植物の繊維の塊のようなものが一つ、たったそれだけであった。

「扱い方は分かるかしら？ それはきつと、不死の秘宝よ。ここまで来たせめてもの土産として持つていったらいいんじゃないかしら」

言われるが、先程の鍵と違い、こちらについて思い当たるものはなく、なんとはなしに植物の繊維の方を様々な角度から見詰める。すると意識がだんだんとぼやけ始め、やがて植物の繊維の塊が、懐かしい誰かの面影と重なり、次には遠い記憶の流入が不死人の身に起こった。

ソウルの業。他にも失っていた諸々の知識や名称など。しかし自身の生まれ故郷や、どれくらいの間この世界を彷徨っているのかまでは思い出すことが叶わず、また既に不死として長くあるため、痛覚や味覚、それから嗅覚がごく乏しいことを実感する。

「あら、早速いいことがあったみたいね？ でもそれも今更かしら、どうせまた何もかも忘れてしまうでしょうからね。さあ、もう用が無いならどこかに行つてくれないかしら。邪魔とまでは言わないけれど、このままここに居ても無意味だし、お互い気まずいでしょう？ じゃあ、お達者でね」

女は一方的に別れを告げると、全身から力を抜き、宙吊りのまま項垂れる。それが今の状態で出来る姿勢での休み方なのだろうか。随分と奇特な姿のように見えるが。

そのままそこを去つたとしても何ら問題は無いが、だがもし彼女がその如何にも辛いような姿勢から解放されることを望んでいるのであれば、というつもりで籠に触れようとする。だがその直前、こちらの意図を察したのか、女はまた顔を上げる。

「そこは開かないわ。お氣遣いは嬉しいけど。高潔な姉とは違つて、私にもはもう、この世界のどこにも味方が居ないの。だからこの籠から出てどこかへ行くつもりなんて無いのよ」

平坦な調子で彼女はそれだけを言うと、今度こそ身体を休めた。そうまで言われては敢えて籠を開く理由も無く、不死人は女の元を去り、そのまま寢室を後にすることにした。

## 第8章 1

## 第8章 中央広場Ⅱ 1

玉座の付近の篝火で休息した後、不死人は王城の侍従長エスメラルダと戦った謁見の間を通り抜け、控えの間に並ぶ姿鏡の前を横切ると、廊下から階段塔へ入り、その中にある螺旋階段を下って王城一階へと降りて行く。

そうして階段の先にある幅広の廊下に出ると、その付近にある先程は鍵が掛かっていたため通れなかった扉に近付き、王城の寝室にて手に入れたばかりの、飛び上がる鳥の模様が刻まれた鍵を取り出す。

それを鍵穴に差し込んで回せば、扉は解錠され、その向こうに緩やかな傾斜の階段が現れる。

五段程しかないこれを降りた先は屋外となっており、不死人は小さな庭園と、その中央にある小ぶりの噴水とそれを回り込むように作られた石畳の道を見付け、これの上を歩いて行く。

石畳の道は長くは続かず、程無くして辿り着いた終点には上がったままの跳ね橋が立ち塞がり、当然この状態で先へ進むことは不可能だが、しかし橋の根元にはレバーが設

置されており、調べるとまだ動く様子であったため、これに力を込めて可動させる。

錆びた金属部品が重厚でありながらも異様に高調子な音を発しつつ、跳ね橋は埃を上げながら動き始め、やがて徐々に橋が降りることで見えるようになってきた向こう岸の景色は、嘗て真つ青な肌の巨人と相對した場所、中央広場であった。

跳ね橋が完全に降りる。通行可能になったその場所を渡っていくと、その終わりに差し掛かったところで横合いから声を掛けられた。

「貴公、健在のようだな。あちらから来たということとは、見たんだな？ 玉座を」

久しぶりに見える、騎士らしき風貌の男がそこには居た。それは当然の再会なのだろう、彼が今寄りかかるアーチの下の壁は、彼と最初に出会った時にそうしていた壁と全く同じものであった。

「あの憎たらしい猫が言っていた通り、無駄足だっただろう？ この地には、薪の王との関わりを匂わせるようなものは本当に何も無いんだ。不死の使命とは無関係の地。それは真実なのだろうよ」

騎士らしき風貌の男は腕を組み、王城の方を見やる。

「しかし、玉座まで辿り着いた今ならもう知っているとかが、薪の王の玉座が無い、不死の使命が無い、滅んでいくだけの土地、と言う割にここは怪異で溢れ返っている。この中央広場に陣取っていた巨人もそうだが、何故あんなに正体の分からないような化



け物がのさばっているんだ。大体あれは何だ？　ゴレムか？　それともデーモンか？　単なる巨人の一種か？　いや、どれにも属さないだろう。それらとはあまりにかけ離れた外見だったからな」

男は不死人の目をじつと見詰め、力強い語り口を続ける。

「この地は、生きています。滅んでなどいないさ。おそらくまだ変化の途上だろう。それにより、不死の亡者達はこのリングレイを中心に世界へと波及しているらしい。これだけの異変があつて、この地に何も無い、なんてことが信じられるか？」

騎士らしき風貌の男は右手を出し、握手を求める格好を見せる。

「俺は探求の徒ノルベルト。この地の秘密を探っている。改めて貴公と協力関係を結びたい」

不死人は特に迷うことなく彼の手を取り、ここに僅かながらも結束が生まれる。

「心強いよ。ああ、そうだ、一つ重要なことを教えておく。このリングレイの地の秘密を探るためのキーワードは青ざめた血だ。特にこれを探るためなら、俺は如何なる協力も惜しまない。大方、溝の溜まり池の奥にあつた巨大な門の向こう側に秘匿されているのだろうが、あの頑丈な扉を通り抜ける方法が無くてな」

思い返すに、洞窟内へ続くであろうあの場所は、彼の言う通り固く閉ざされており、これを開くにあたっては何らかの工夫が必要であつた。

それを手掛かりに次にやるべき事が定まった不死人は、適当なところでノルベルトとの会話を切り上げ、彼に背を向ける。

「炎の導きのあらんことを、か」

定番の別れ言葉を口にしたノルベルトは、何故か言葉尻に自嘲を含ませていた。

彼の他にももう一度話をしなければならぬ人々を思い出し、だが会いに行くよりも先に中央広場の篝火でエスト瓶にエストを溜め、そしてソウルの業を己に向ける。

この先、益々困難を極めるであろう旅路に備えなければならず、通常の鍛錬によるものではない、人知を越え、神々を屠ることすら可能にするソウルの力によつて自身の能力を上げていく。

既にこの地における魔法の重要性については思い知つていたため、特に理力などに関連する能力を底上げし、だが今までに得たソウルの全ては使い果たさず、ある程度残して終わりとした。

篝火でやるべきことを全うすると、不死人は立ち上がり、次に鍛冶師マサイアスの元へと向かった。半壊した家屋の地下へ赴けば、彼は変わらず仕事に精を出している様子であり、こちらが近付くとその足音に気が付いたのか、眉根を寄せた顔を向けられる。

「お前か、まだ硬貨でしか支払わないつもりか？」

その言葉に対しては、口で答えるよりもそれが雄弁であったため、不死人は手のひら

にソウルを溜めると、その様子を彼に見せる。

「そう、そうだ。不死の旅に、それは欠かせん」

心なしか、僅かにその声は弾んでいた。自惚れかもしれないが、ソウルの業を忘れていた不死人の行く末をマサイアスは案じていた、などということは有り得るだろうか。

彼に武器や身に着けている防具の修理を頼み、引き換えに一定量のソウルを渡す。修理はすぐに行われ、それらは新品同様、とはいかないまでも、静かに輝きを取り戻していた。

他は特に購入したい品物も無かったため、彼の仕事を去ろうと挨拶を告げる。

「そうか、またな」

マサイアスは金槌を振り上げ、視線は落し、まるで不死人に関心の無い素振りを見せてながらそのように応えた。

鍛冶屋の次に向かったのは、こちらは本当に不死人そのものにあまり興味を持っていない、魔術師コネリーの元であった。彼は最初に見かけた時と同様に、使われなくなつて久しい住居の一つで、椅子に座り、机の上で何かを書いていた。

不死人は部屋の入り口からその背に声を掛けると、彼はすぐに反応を示す。

「ああ、君か。入るといい」

返ってきたのはやはり表層的な愛想のみを意識した言葉であり、まして彼はまだ椅子

に座ったまま、振り向こうとすらしていなかった。

やや礼を失する態度ではあるが、彼の気質は知っているのであればそれは今更というもの。不死人は机の方へ歩み寄りつつ懐から二冊の本を取り出すと、それをコネリーの肩越しに机の上に乗せる。

元は貴族街にて糸を紡ぐ老婆の持ち物であったその本は、どうやらコネリーの眼鏡に適うものであったようだ。双子のような表紙の本が視界に入ると、彼は目を大きく開き、また口の動きもそれに連動した。

「あつ、ああ！ そう、こういうのだよ！ 欲しかったのは！ 凄じやないか！」  
興奮する顔は、相好を崩す青年というよりは、単に笑顔の子供のようであった。

「ありがとう！ いやあ、これで、あ、え？」

しかし彼が本を取り、ページをいくつかめくるとその表情には陰りが差し、困惑の色を見せ始め、更に先を読むと驚愕すらしているようであった。

「闇術なのか、これが。なんとということだ」

その戸惑いは喜びの感情に勝るものであったのか、コネリーの顔から笑顔は見るとも無く消えている。

「私は、今までこの分野には触れた事が無い。おそらく業として習得することは出来るし、それを君に教える事だつて出来ると思う。しかし本質の理解は出来ない。第

一、闇術なんて噂の中にしか存在しないようなもので、それが実在して魔術書として形が整えられていること自体が不思議というか。意味が分からないというか」

そのままコネリーは本に視線を落しながら、唇に手を当て、独り言のような呟きを矢継ぎ早に重ねていく。だが、徐々に度を越して興奮を高めてしまっていることを本人も途中で気付いたのか、一度本を閉じ、深呼吸してから不死人を見詰める。

「約束だ。勿論これらの魔法を君がちゃんと使えるようにする。そういえば君、今ならきつと、大抵の魔法は使える筈だと思う。ああ、そうだ。そんな君に渡したい物があ  
る」

コネリーは椅子から立ち上がると、手近にあつた洋服筆筒の中から一振りの剣を取り出し、それをこちらに寄越した。

「それは魔術師のロングソード。普通、魔法というのは杖を使うものだが、どうやらこのリングレイで使われている魔法は剣技と一体になっている場合が多く、剣と杖を持ち替えるのはナンセンスらしい。故に魔術触媒としても単純に武器としても使える得物が必要で、それがその剣だ。君にあげよう」

鞘から剣を引き抜き、全体を眺める。やや細身の刀身や柄の部分などには装飾が皆無であり、ともすれば一見して普通のロングソードのようにも見えたが、しかし彼の言によればこれで詠唱を行うことにより魔法を発動できるらしい。

「それと、闇術というものはタリスマンや聖鈴を使用して発動するものも多く、この魔術書の片方はまさにそういう術について載っていたもので、魔術触媒で発動するものしか分からない僕がこちらまで持つていては無意味だから、少し惜しいけど君に返すことにするよ。誰か奇跡の術を扱える人にも渡すといいだろう」

不死人がその本を受け取ると、コネリーは身体の向きを変え、一度咳払いする。

「それじゃ、やろうか、魔法の講義」

不死人はソウルと引き換えに、魔術師コネリーから様々な魔法を学び、修める。何度か試したところ、魔法は譲り受けたロングソードで問題なく発動し、世辞だろうが、筋が良いとも言われる。

今までに手に入れたソウルを全て使い果たしたところで、不死人はコネリーと別れ、そして中央広場にて言葉を交わす必要性がある者達、その最後となる小さな白い猫へと顔を合わせに行く。

しかし、彼女の元を訪れ、話しかけたものの、小さな白い身体は机の上に横になったまま尻尾を左右に揺らすばかりで、特に不死人の方を見ようとしなかった。

元とは言えばこの小さな白い猫こそが玉座に行けと言い出したのであって、そこから帰還した者に対しよくも無関心でいられるものだ、そう憤ったとしても不自然ではないだろうが、しかし彼女は無意味である事を確かめに玉座に行け、という旨の発言しか

しておらず、真実それが無意味であることを知ったのなら、怒りをぶつけるのは筋違いなのだろうか。

「まだ頑張るのかい？　大変だねえ」

やっとものを言ったかと思えば、発した言葉はそれきり、続く事はなかった。まるで実りのない再会であったようだ。

## 第9章 1

## 第9章 礼拝堂 1

《リングレイの本当の秘密を封じた者は、礼拝堂に居る》

それが周壁内部の牢に閉じ籠もる男の言葉であった。信じるに値するかはさて置くとして、ノルベルトは溝の溜まり池の奥に秘密が隠されていると見当を付けているようだが、現状そこを塞ぐ門を通り抜ける手段は無く、他の手掛かりと言えば礼拝堂に関するこの言であり、それは門の状態とも符合する。

不死人は中央広場を後にし、溝の溜まり池の上を大きく跨ぐ跳ね橋を渡り、アリーナ入り口近辺を再び訪れる。そしてアリーナの牢舎が並ぶ方とは反対の方角を向くと、その先のどこか厳かな風情のある、木造の建物へ向かって歩いていく。

その建物は大きく別けて二つの棟が並ぶように建っていた。一つは質素ながらも宗教的な意味合いを持つ彫像などが置かれた二階建ての礼拝堂であり、もう一つは礼拝堂よりも奥に建ち、そして同じく二階建てではあるがそれよりも遥かに面積が広く、また暗い色を建築物であった。周壁内部の牢の中の男によれば、この暗い建物は病院であるらしい。



そこへ近付くにつれ足が雑草をよく踏むようになり、高く伸びた木も散見されたが、その割には周壁と太陽の位置関係が悪いのか、日当たりが極端に悪く、日中であるにも関わらずこの一画はまるで夜のように薄暗くなっていた。

やがて礼拝堂と思しき棟の正面に開いたままになっている玄関を見付け、そこから屋内に入ることが可能であるようだが、しかし一度外観を観察し、その全容を把握してきたかったため、中に踏み込むのは後回しとし、建物を一周することに決める。

歩きながら建物を眺めるも、壁はいずれも土気色の木の板で作られているため味気なく、変化に乏しい上、窓は全て内側から板が張られ、室内の様子を窺い知ることは出来なかった。

更に歩き回って周辺を調べると、礼拝堂に隣接する病院、その正面玄関らしきものが見付かる。不死人はこれに近付き調べてみるが、扉は開くことなく、どうやら内側から施錠されているようであった。

それ以降他に出入り口は見付からず、建物周辺の探索を終える。これ以上は室内に踏み込まなければ得られるものはないため、開いたままの礼拝堂の入り口に立ち、一先ずそこから中の様子を覗き込んだ。

室内はまた、肅然とした様相を呈しており、しかし本来であればそういった空気に合わない筈の、亡者らの姿があり、いずれも室内に並ぶ信徒席に座り込んでいた。脅威と

しては有象無象に分類される農民の格好をした亡者でしかないが、ただし数が六体と多く、万が一何かの拍子で一斉に彼らがこちらに敵意を向ければ、無事で済む保証はないだろう。

だが最初から敵愾心で以て相手を見据える必要があるかと言えば、この場合は微妙なところであつた。彼等は全て静かにして席に着いており、こちらから何かしなければ王城の召使のような例もあるため、戦鬪が発生せずに済む可能性もある。それ故不死人は足音がしないよう気を付けながら、信徒席の脇を歩き、農民の亡者達の横を通り抜けて行く。

「うおいつー！」

短いその怒声の直後、陶器の割れるような音が礼拝堂に響き、その出所たる信徒席の合間を通る道の上にて、花瓶か何かが碎け、欠片を撒いていた。

声を発したのは礼拝堂の上にある、吹き抜けの廊下部分から顔を出している一匹の亡者であるらしく、花瓶もおそらくそこから落したのだろう。その行動に何の意味があつたのかと言え、とても単純に、信徒席に座る亡者達の意識を呼び覚ますためであつたと予想される。

六匹の亡者達はそれぞれ顔を上げ、不死人を見付けると身体を起こし、椅子から立ち上がつて徐に動き出す。

「うえううう」

亡者達はまだこちらを睨むばかりであったが、いつかは駆け出し、不死人に群がるのは時間の問題と予想される。だが位置取りが悪く、現在不死人が居る場所からでは走って逃げたところで信徒席か亡者そのものに行く手を阻まれ、そしてその次には囲まれるだろう。

「うえあつー！」

一匹の掛け声を皮切りに、六匹の亡者達はとうとう走り出し、不死人に迫る。これで花瓶を投げた亡者の、思い描いた絵図面通りとなったか。

否や。元より備えも無しに、静かに通れば襲われない、という程度の憶測のみで、死地に踏み込むほど愚かではない。その場にて留まると、右手のロングソードに魔力的な奔流を滾らせ、それは一瞬にして剣の先を呑み込むと、溢れ出して青い光りが迸り、やがて実体のない大剣を形成する。

不死人はそれを横に大きく薙ぎ払い、するとソウルによって生じた青い大剣は迫り来る亡者達全ての胴を斬り裂き、そしてただその一幕のみにて眼前の敵はいずれも倒れ伏すこととなった。

これこそは魔術師コネリーより学んだばかりの魔法、ソウルの大剣である。剣という特性のため魔法であるにも関わらず遠距離の敵には届かないが、それと引き換えに威力

と、特に攻撃範囲に優れており、あのような手合いであれば纏めて葬れることは今試しただ通りである。

また、剣に重さも無いため攻撃後の隙があまり生まれず、不死人は六匹を斃した余韻に浸ることなく、上の階の吹き抜けの通路から顔を出している亡者にロングソードを向けると、ソウルの矢を放ってその頭部を貫く。

それを最後とし、礼拝堂入り口近辺の脅威は全て排除することに成功したようであった。ブロードソードと塔のカイトシールドのみを得物として戦っていた時とは段違いの殲滅速度である、が、所詮は農民の亡者であり、元々それほど強い手合いでもない。過信するべきではないのだろう。

ともあれ、静謐さを取り戻した礼拝堂内部を探索するべく、不死人は信徒席の間を歩き、奥の方へと向かう。

礼拝堂と言われるだけあって、室内には祭祀道具や信徒席の他に置かれているのは祭壇のみであり、必然として調べることが出来る場所も限られていた。

出入り口すら正面玄関と祭壇右横にある扉一つの他には無く、不死人は信徒席の周囲を軽く調べ終えると、その扉の方へ近付き、鍵の掛かっているそれを開く。

木製の扉の向こうには木製の階段があり、踏むと時折小さく弾ける様な音を鳴らすそれを一段ずつ登って上の階に至ると、信徒席の上を通っている吹き抜けの通路がそこに

あつた。特に敵の気配もせず、通路を歩いていくと、半ばには頭の碎けた亡者の軀があり、これは先程ソウルの矢で貫いたものであるのだろう。

亡者の横を通り抜け、礼拝堂正面玄関の真上の辺りまでやって来ると、その行き止まりで窓が一つ開いたままの状態となつていた。

不死人はその窓の縁を跨ぐと、貴族街の館でもそうしていたように、礼拝堂の屋根の上に登り、そこから周囲の様子を窺つたところ、屋根の上には梯子が一つ架かつており、それが伸びる先は礼拝堂とは別の棟、病院二階の開いた窓であつた。

梯子を伝い、病院内部へと踏み込む。

建物そのものが陽の当たらない場所にあり、その上窓の殆どに板が打ち付けられている為、室内は静まり返つた闇が支配し、亡者、というよりも怪異が潜むには打つて付けの空間であつた。

## 第9章 2

## 第9章 礼拝堂 2

そのような様相では無闇に探索をし、物音を立てて脅威となる者達を起こすような真似は憚られるが、実の所、具体的に何を探しにここへやってきたのかも定かでは無い。よつてある程度音に気を付ければ、あとは直感に従つて搜索を行ううしかないのだろう。不死人はまず入ってきた窓の近くから周囲の様子を窺うと、すぐ近くに下へ向かう階段があるのを見付ける。

暗い足元に注意しながらそれを降り、一階に至ると、そこから少し歩いた場所に正面玄関の裏側と思しき扉が見付かる。やはりこちら側から鍵が掛かっており、これを解除すると扉は開かれ、病院の正面玄関と屋外への道が確保された。

そして病院へ戻ろうと振り返ると、不死人は一人の男性と視線がぶつかることとなつた。

唐突に現れた訳ではなく、どうやら最初から階段横の受付の奥に居たようだが、不死人がその階段を降りた際にはその部分には死角になっていたようだ。男性は堅牢な柵に守られた、病院受付の奥で壁を背に寄り掛かり、静かにこちらを眺めるばかりだが、し

かし近付くと声を発した。

「新参か」

赤い儀礼の服を着た男性は、白髪だが若く、太い眉毛と唇が印象的であり、加えて精神な顔つきのため、眉目秀麗な人物と言いつつ切つたとして何ら違和感はなかつた。

腕を組むその姿は少しの愛想も見せず、また露骨に視線を外して語り出す。

「私は騎士、名前はクリステイアンだ。私はかつて、この病院の院長も兼ねる礼拝堂の神官長と共にあるものを封じたのだが、それは間違いだつたようだな。封じた際に使つた品を取り戻しに来たのだが、病院がこの有様ではとても中を調べられなかつた。はっきり言つて私が探しに行くのは無謀でしかなく、どうしようかと途方に暮れていたんだが、貴公、代わりに調べてきてくれないか」

彼の態度はやはり空々しいものであり、とても頼み事をしてとは思えないようなものであつた。ただどの道、元よりその目的で礼拝堂にまで赴いているため、ここで承服するような顔をしておけば恩の一つを売る形を取れるかもしれない。不死人は彼の言葉に頷いておく。

「やつてくれるか。では、健闘を祈る」

クリステイアンは助言の一つすら寄越さず、それきり会話を打ち切つた。こうも礼を失する態度を取り続けるのは、騎士という位に起因するものか、或いは単にあまり期待

されていないからなのだろうか。

そこに長居する理由も無いため、不死人はクリステイアンの下を離れ、一階受付前の辺りから廊下を眺める。

受付から見て左右に枝分かれしてその廊下はどこまでも伸びており、灯りも無いため行く先は黒く塗り潰され、どの程度の全長であるのか、現在の位置からでは見通すことが出来なかった。探索する上での手掛かりは皆無であり、廊下の右を進むのか、左を進むのか、または階段を戻すのか、どれを選ぶも自由であったため、不死人は特に根拠も無く廊下を右へ進むことにした。

数歩先の様子も知れない暗い廊下を歩いていく。右の壁に窓、左の壁に扉が向かい合っている、この組み合わせが一定間隔で廊下に並んでいるが、どちらも木の板が張られており、容易に開くようなものではない。

直進する以外の選択肢が無く、木の床を軋ませながら歩き、暗がりの隅に目を凝らすも、時折家具のようなものが置いてある程度で、廊下には何も目を引く物が無い。しばらくそのまま進んでいると、やがて正面に壁が見え、廊下は左に曲がっている様子であった。

曲がり角の向こうから亡者の気配がするようないくことも無く、顔だけを出して確認したところ、特に異常は見受けられない。角を曲がって再び廊下を進み始めると、しかしそ



こから十歩ほど歩いたところで不死人の足は止まる。

廊下の先に、何かが浮んでいるのを見付けたためであった。例によつて暗闇のせいでもよく見えず、その場から動かさずにより観察に意識を集中する。

そこに在つたものは、青い内臓であつた。色は違つておそろく人のものと思われ、肺があり、心臓があり、肝臓、腎臓、大腸小腸、おおよそ生命活動に必要な臓器一式が人体に収まっているときのように綺麗に纏まつており、そこより上の方に不死人をじつと見詰める目玉が二つ存在し、そしていづれも空中に浮んでいた。

互いに目が合っている状況ではあるが、浮ぶ内臓は特に何かしてくるようなことはなく、しかしそのまま時間が過ぎるかと思いきや、ふつと浮ぶ内臓がこちらに近づく。

咄嗟に魔術師のロングソードを構えるが、しかし浮ぶ内臓はほんの少しだけ不死人に近付いたのみでその場に留まり、少し経つとまた先程と同じように僅かにこちらとの距離を縮める。

その際、浮ぶ内臓は小さくだが上下に揺れている様子であつた。そのリズムはまるで人間が歩行する時のものと似ており、そのまま観察を続けていると、どうやら浮ぶ内臓は不死人に近付いている、というよりは、単に廊下をゆつくり歩いているらしいことが分かつた。

廊下の右側をまっすぐに移動しているため、このまま行けば浮ぶ内臓はこちらの真横

を通過するのだろう。明確な敵意は見られず、だが警戒を解く段階ではない。不死人は廊下の左の壁に張り付いて浮ぶ内臓を通り過ぎるのを待つと、長い時間は掛かったものの、彼はやはりこちらに何もせず、やがて互いの距離は離れていった。

害は無いと油断させておきながら、後になつて襲い掛かってくることも想定し、さらに時間を置いてその場で状況に異変が起こらないか待つてはみたものの、それから特に何かが起こるといふようなことは無く、段々と浮ぶ内臓の姿は廊下の奥へと消えて行く。

その正体が何であつたのか、現時点では考察する上での糸口など皆無に等しい。病院内を詳しく調べていけば分かることなのもかもしれないが、あれも亡者の一種なのだろうか。それにしても、重要なものが一つ足りなかつたが。

ともあれこちらから何かしなければ襲つてくることは無いらしい、ということだけを覚え、先を進む事にする。

廊下はどこかで物音がするようにはなく、空気の流れも停滞しているため、まるで止まつた時間の中を不死人だけが自由に動いているかのようであり、そのような奇妙な空間をそのままずっと進んでいると、それなりの距離を歩いたところで先程出会つたものとは別の浮ぶ内臓が廊下の先に現れる。

あまりにも動きが悠長に過ぎるため分かりにくいのが、浮ぶ内臓はやはり歩いているよ

うであつた。前のようにこのまま横を通り過ぎるのを待つのが安全だが、しかしそれではあまりに時間を浪費してしまうため、今度はこちらから脇を抜けれないか、試すことにする。

浮ぶ内臓は不死人の側から見て廊下の右側に寄つて進んでおり、その反対側となる左の壁の方には小さな机が置かれている為、通れる幅は若干細くなつてはいるが、それでも浮ぶ内臓との距離は十分にある。躊躇わず不死人は歩き出し、いよいよ浮ぶ内臓の真横に差し掛かると、その際足が何かを踏む。

## 第9章 3

## 第9章 礼拝堂 3

「ふわあああああああああああああつ！」

その大声は不死人の側で発せられたものであった。浮ぶ内臓が叫びか悲鳴か、形容し難い大きな声を響かせ、青い臓器を左右上下にくねらせている。あまりに大きい音であるため、これは早急に黙らせるべきであり、だが何かを実行するよりも前に不死人は腹部に強烈な一撃を受け、軽く吹き飛ばされて廊下に投げ出される。

攻撃はこちらの目には留まらなかった。単に相手の機敏な動きがそのような印象を持たせたのかもしれないが、しかしそれとは別の可能性を示唆する現象が不死人の目の前で起きている。

廊下の床、壁、天井、近くにあつた椅子などが打ち付けられ、拳ほどの大きさの穴をいくつも穿たれていた。その範囲は広く、単に浮ぶ内臓に透明な腕があり、それが暴れ回ったとしても到底及ぶような距離ではない上、破壊現象は複数の箇所と同時に起き、飛び散った木片などは忙しく宙を踊り、地に落ちる暇も無い。

つまり敵は、透明な長い触手のようなものを数本持ち、それで攻撃、というよりは振

り回して暴れているのだろう。

立ち上がり、魔術師のロングソードを構え、しかしその時どこか遠くで扉を乱暴に開くような音が鳴るのを不死人の耳が捉える。浮ぶ内臓が今尚叫び、また手当たり次第周囲を破壊して大きな音を出しているため、それに反応した何かがこちらに迫っていると思われるべきか。

敵の合流を避けるべく、不死人はまず浮ぶ内臓に早急な対処をしようとして、魔術師のロングソードの先を青い臓器に向け、詠唱してソウルの矢を放つ。

迸る青い光は浮ぶ内臓に命中し、だが魔法が効きにくいのか、敵が倒れるようなことは無く、そして廊下に反響する何者かの足音が段々と大きくなりつつあった。

急ぎ別のやり方での対応を要求される状況であり、不死人は魔術師のロングソードで詠唱を行うと、次に剣の腹で左手に持った盾を軽く叩き、魔力を付与する。塔のナイトシールドは一時的に特別な力を宿し、不死人はそれを前面に構え、浮ぶ内臓に強引に詰め寄った。

荒れ狂う不可視の攻撃は、しかし盾によって阻まれ、何ら衝撃を齎さず、不死人はそのまま浮ぶ内臓に迫ると、塔のナイトシールドの側面を滑らせるようにしてロングソードの突きを繰り出す。

「あっ」

銀の切っ先は浮ぶ内臓の中心を捉え、突き抜けると、呆けたような声を残して叫び声は止まり、暴れていた透明な触手も力を失ったのか、周囲への破壊が収まった。

闇の盾。貴族街入り口を守護していた異形の騎士、それが揮った術と同一のものである。魔術触媒によって発動し、通常の物理作用を無視しているかのような反発力を盾に付与する効果があるため、殆どの物理攻撃は防ぎ事が可能と思しく、また相手にぶつけることで姿勢を崩すような使い方も出来るが、物が触れてから発動する反発作用は効果時間がごく短いことに加え、詠唱と付与の時間もあるため、連続での使用は困難である。実際の戦いにおいてこれを使用するのは初となり、存外に上手く効果を発揮したが、しかし安堵する暇は無い。不死人は倒れた青い内臓から剣を引き抜くと、身体の後ろで巻く鋭い風切り音に向けて塔のカイトシールドを掲げる。

しかし振り向き様の姿勢では無理があつたか、それとも姿勢以前に敵の攻撃の威力が高かったのか、背後からの一撃は防ぐことさえ出来たものの、不死人は手にした盾ごと壁に向かつて吹き飛ばされ、背を強かに打ち付ける。

負傷は大きく、だが幸いにも足の機能に支障は無いため、すぐに起き上がってそこから離れ、エスト瓶で体力を回復させつつ、相手の姿を見定める。

太った身体。だが欲望に任せてただ肥えたのではなく、白い服の横から伸びる腕は筋肉質であり、その風体はアリーナの地下道に居た獄吏と近い。頭には白い帽子を被

り、そして垂直に枝分かれした形の柄の警棒を手に使っていた。

亡者特有の何も映さない虚ろな瞳で不死人を見据え、警棒を構える彼は医療に従事する者、より具体的にその役職を言うのであれば看護師なのだろうか。それらしい服装ではあるが、それにしては暴力的な佇まいである。

看護師の亡者は苛立たしげに床を踏み鳴らしながらこちらに近付きつつあり、しかし体格で負けているため、備えも無しにこの成り行きのまま正面から打ち合うは無謀である。不死人は牽制にソウルの矢を放とうと魔術師のロングソードを構えると、それと時を同じくして看護師の亡者は立ち止まり、聖鈴を取り出してそれを鳴らす。

透明感のある音色は何らかの術の前触れだが、それすら潰すつもりでロングソードの先を相手に向け、不死人は詠唱を行うが、放たれる筈の青い光は生まれず、手にした剣には紫色の光輪が纏わり付いていた。

魔法の発動を阻害すると思いき術によって逆に先を取られる形となり、一瞬だけ呆気に取られているとその瞬間に看護師の亡者はこちらとの距離を詰め、警棒を横に振るう。

脇腹を狙った打撃は、危うく直撃するところを塔のカイトシールドによって阻むも、防ぎきれずに押し負けそうになり、しかし急に盾に掛かった力が消えると、警棒を引き戻していた看護師の亡者はもう一度同じ角度からそれを横に振り抜く。

次に同じように盾で防げば弾かれるのは目に見えていた。不死人は警棒のその一撃は防がずに下がって躲し、その直後に避けるために下がった足で床を踏み締め、一気に踏み込んで魔術師のロングソードによる突きを放つ。

剣は敵に突き刺さり、だが当たり所が悪く、肩の肉によって止められると、空振りの状態から戻されてきた警棒にこちらの胸を強打される。

肋骨どころか背骨すら砕きかねない衝撃に襲われ、大きく吹き飛ばされて廊下を転がり、敵から少し離れた場所で止まる。今度こそ終わりかという程の威力が直撃し、だが辛うじて身体は動いたため、よろけながらも立ち上がり、エスト瓶の中身を飲んで体力を回復させる。



## 第9章 4

## 第9章 礼拝堂 4

一方で看護師の亡者はと言えば、聖鈴を鳴らして自身の周囲に光りを生み出し、それに包まれて傷を癒している様子であった。またその光は肩に出来た小さな傷が完全に塞がって尚溢れており、察するに継続的な治療を齎す奇跡であるのだろう。

なればこそこの効果が持続している内に仕掛けたいのだろう、看護師の亡者は仄かな光に身体を覆われたまま、こちらに向かって走り出しながら警棒を振り上げる。

盾で防御しては力負けし、半端な攻撃は通らず逆に危機を招き、機を見透かされれば魔法の発動は阻止される。それらの事項を念頭に置いた上で、不死人は上から下に振り下された警棒を避けるべく身体の軸を横にずらし、するとすぐに警棒は軌道を変え、攻撃を避けた身体を追おうとするが、それをさらに後ろに退がって躲すと、直後に再び刺突攻撃の構えを取り、同時に詠唱を始める。

警棒での一撃が空振りに終わった看護師の亡者は隙を晒し、それを逃さず不死人は魔術師のロングソードを突き出すと、剣の先は敵の脂肪によって阻まれ、浅い部分にまでしか達していないが、しかし詠唱が完了することによってそこに青い大きな刃が形成さ

れる。

如何に厚い肉であれ、劍が刺さった状態でソウルの大劍で貫かれては防ぎようもなく、看護師の亡者は腹を裂かれて血と臓物を噴出し、廊下を汚しながらそのまま床に倒れ伏した。

瞼を閉じ、息を整えながら今の戦いを振り返る。浮ぶ内臓にせよ、看護師の亡者の術にせよ、魔法を行使出来るようになった傍から、早速それを無効化されるとは、あまり想像しにくい事態であつた。手強く、かなりの傷を負わされたが、何でも頼り過ぎになるのは良くない、ということを教えられた敵であつた。

落ち着いたところで動かなくなつた看護師の亡者の懐を漁る。そこから雫石がいくつか見付かるが、いずれも小ぶりであり、エスト瓶がある今、嵩張る雫石を大量に持ち歩いたところで邪魔にしかならず、それは拾わずに捨て置くことにする。

次に浮ぶ内臓の方を詳しく調べるべく、それに手で触れようとすると、指先は内臓に届かず、その前にある透明な皮膚らしきものを触っていた。更に様々な部位を触れた結果、四肢や胴は透明ではあるものの、どうやら形は人と同様なものが付いており、即ちこの浮ぶ内臓というものは基本的に透明な人間であり、内臓だけが透けて見えているのだろう。

何故このような奇妙なものが存在しているのか、現時点では想像すら及ばないが、先

を進めばそれを知る手掛かりを得られるのかもしれない。立ち上がり、廊下を奥へと進み始める。

軋む床をしばらく歩いていると、程無くして左の壁に開けたままになっている扉が一つ見付かる。木の板は打ち付けられておらず、鍵はひしゃげており、またおおよその位置から推察するに、これは先程看護師の亡者が内側から強引に開けた扉であるのだろう。

室内を覗いたところ、やはりそこにも灯りは無く、最低限の寝具が置かれているのみである。それだけ見れば無味乾燥極まりなく、ただ窓は珍しく木の板が打ち付けられておらず、締め切ったままではあるが、木々の緑らしきものが曇ったガラスに朧気な輪郭を映し出し、それがこの部屋唯一の彩りとなっていた。

それ以上は調べる物も無いため、部屋を出て廊下へ戻る。探索するべく廊下を直進している、また曲がり角があり、それは左に曲がっているが、その先には廊下を塞ぐ鉄の扉があり、鍵穴の部分が破壊されてしまっていたため、通行することは出来ないようだ。

ただしその鉄の扉の近くには上の階へと向かう階段があるため、来た道に戻る必要は無く、不死人は大きく軋む音を鳴らすそれを登り、二階へと至る。

そこからの景色が一階と変わるようなことは無かった。病院内はどこへ行こうとそ

うなのか、窓も扉も殆どが封じられており、光は無く、またある意味でいちいち調べていく手間が省けている。

そのように代わり映えない有様では、左右に深く伸びる廊下のどちらを進むべきか、見当は付かず、だからこそあまり思案し過ぎるべきではないのかもしれない。不死人は左を選び、そちらを進むことにする。

暗然たる気配が蔓延る病院だが、今でも清掃されることがあるのか、黴などの繁殖は見られず、どちらかと言えば清潔な印象すらある廊下を直進していくと、俄かにそれは行き止まる。

不死人の眼前に現れたのは、突き当たりの壁でもなく、先程あったような開閉しない扉でもなく、まるで無秩序に、乱雑に山と積まれた大量のベッドであった。廊下に敷き詰ったそれは看護師の亡者が居た部屋の中にあつたものとは少し違い、側面に黒い皮製のベルトが取り付けられており、単に寝具として使う以外の用途を備えていた。

廊下の通行を妨げているが動かすには量が多く、運び出すための空間を確保することも難しいため、通り抜けることは不可能であつたが、この近くの扉が一つ開いており、まだ完全にここが行き止まりかどうかは分からなかつた。

扉を潜るとその部屋の中には窓から少し光が差し込み、僅かだが廊下よりは明るさがあるため、室内にいくつも並んだそれを不死人に見せていた。

樽の上部だけを切り取ったような形状の、桶のような、だがそれよりも一回り大きく、水槽と呼べるくらい直径のある容れ物であった。

水槽はいずれも水で満たされているが、この部屋にはこれの他に物が置かれておらず、炊事場や身体洗浄を行う場として使われるには適さないだろう。薄暗い部屋の中にある使途不明の水槽に、奇怪な印象を抱くのは当然であり、また水槽の水は黒く濁っているため、何が潜んでいるか分かったものではない。不死人はそれから出来るだけ距離を取り、ゆっくりと横を通り抜ける。

## 第9章 5

## 第9章 礼拝堂 5

「ふわああああああああああああつー！」

何かを踏んだ感触を覚えたときには既に叫び声上がり、次に水槽の一つが内側から弾け、浮ぶ内臓が出現する。相手が意図したことかどうかは分からないが、こちらが視認する事が出来る内臓部分だけを水槽に浸し、隠れていたか。

不死人は直ちに剣と盾を構えると詠唱を始め、塔のカイトシールドに闇の盾を付与するも、後ろの方でどこかの扉が力強く開け放たれた音を聞く。

慌てず、しかし大急ぎで不死人はカイトシールドで透明な触手を防ぎつつ浮ぶ内臓に接近すると、ロングソードでそれを斬り捨てざまに、直後足音のした背後に振り返った。

「ういーういー」

迫っていたのはやはり看護師の亡者であった。短く発した声と共に振り下ろされた警棒を躲すと、そこにあつた水槽が砕け、不潔な水が零れる。

その様子を見れば急襲を凌げたことに安堵している場合では無く、まだ他の浮ぶ内臓が水槽に潜んで居る可能性があり、あまりこの場で看護師の亡者を暴れさせるべきでは

ないことに考えが及ぶ。

だが闇の盾等を使ううえにも双方の距離が至近にあるため、詠唱するだけの時間を設けることが出来ず、また入ってきた扉は看護師の亡者が背にしており、通り抜けることは出来ないだろう。

進退極まる事態に陥りつつあるが、要は敵の注意を一瞬逸らしてさえしまえば、距離も時間も得ることが出来る。敵の動きに注視しながら要点に集中して思案するも、所持品に投げナイフや火炎壺はなく、役に立ちそうにない。代わりに投げ付けるものとして盾と剣が挙げられるが、これを手放してはその次の行動に支障が出る。

他に使えるようなものは無いが、室内を見回し、すると目に留まる物があつたが、更にそれを利用する為の手ごころな容器を探したところ、そう都合良く見付かる筈も無い。

看護師の亡者はいよいよこちらに向かつて歩き出す。あの警棒を振り回すまで時間の猶予は少なく、已む無く不死人は手近な水槽に駆け寄ると、口から汚水を吸い込み、振り返ってそれを吹き出し、敵の顔に浴びせ掛けた。

すると看護師の亡者は一瞬だけ目を瞑り、たつたそれだけではこちらから攻撃するための隙としてはあまりに少ないが、しかし脇を駆け抜けるための間としては十分であり、不死人はそのまま扉を潜ると廊下に逃れ、距離を確保してから立ち止まる。

そして魔術師のロングソードで詠唱を始め、塔のカイトシールドに闇の盾を付与する

と、その頃こちらを追つて廊下に出てきた看護師の亡者が到着し、手にした警棒を大きく横に薙ぎ払う。

敵は先に魔法を阻害する術を使うべきであった。そうしなかつたために警棒は闇の盾の反発力により、それを持った腕と肩ごと弾き飛ばされるようにして身体全体の姿勢を崩し、対敵の眼前にて無防備を晒す。そして不死人は抵抗のしようがない敵の首目掛けて、両手で持ったロングソードの斬撃を放った。

まるでそこに骨など入っていなかつたかのように、剣は看護師の亡者の首を切り離し、鮮血を噴き出す胴は床の上に崩れ落ちる。

魔術師のロングソードから軽く血を払う。次に水槽の水を含んだ口を洗いたいところではあるが、生憎と真水などは無く、だがそのままでは思いも寄らない病を患つてしまふのであつたため、唾を口内に溜め、吐き出す行為を繰り返す。

せめて不死が故に、味覚が死んでいることが幸いであつた。常人であればあの急場であつても無意識に忌避し、濁つた水を口に含むという発想には至らなかつたかもしれない。

五回ほど唾を吐き出したあと、不死人は水槽のある部屋にまで戻る。

一応脅威は取り除かれたが、先程懸念したようにまだ他に水槽に浸かつた浮ぶ内臓が居る可能性は捨て切れず、出来るだけ並ぶ水槽から距離を取り、部屋の奥へ向かつて歩



いていく。

そこにはまた扉があり、少し開いた隙間から向こうの様子を窺い、何者の気配も無い事を確認すると、あまり音を立てないよう気を付けながら開き、次の部屋に入る。

そこはあまり広くない個室の中央に、ベルト付きのベッドが一つ置かれているのみであつた。その上で何かが寝息を立てている、というようなこともなく、周囲は閑散としている。何を目的とした部屋なのだろうか。

このベッドの向こうにはまた新たに一つ扉があり、別の部屋に繋がっているそれに近づき、先程と同じように向こう側を一度警戒してから開いていくと、中に踏み込んだ不死人は、まるで月明かりのような、淡い光に出迎えられる。

その根源に目を向け、正体を確かめると、それは大きな窓から注ぐ、弱い陽光であつた。この部屋には他に低い長机や、ソファと、隅に小さな机とその上に花瓶が置かれているが、目を引くのはやはり窓であり、ガラスはよく磨かれているのか、向こう側を観察するにあたり十分な透明度を持つていた。

外には青々とした木が立ち並んでいる。周壁の影であるためか、薄暗くはあるものの特に不気味な様相とはならず、また窓から見る限り外の空間には広さに余裕があり、綺麗に手入れされた植物達が植えられたその場所は、中庭のような場所であるのかもしれない。

そして窓からの景色や、置かれた家具の佇まいから察するに、この部屋は訪れた者に穏やかな心地を与えるために作られたものであるのだろう。

医療など、せいぜいが瀉血であり、それより上等なものともなれば、施されるのは余程富のある者達のみである。よって平民達に出来ることは、心を癒すことだけとなり、だがそれとて、この施設は十分に贅沢である。

机の下、椅子の下にまで隈なく部屋を調べるも、特に有用と成り得るものを見付けることは叶わず、不死人は入ってきた扉とは反対側にあつたもう一つの扉に近付き、この部屋を後にする。

扉を開いた先に待っていたのは長く先の見えない廊下であり、それは今までに通つてきたものと何ら変わるところは無いが、右手にあるのはベルト付きのベッドが積み重ね、通行を不可能にしている場所であつた。要するに三つの部屋を通り抜けることにより、その地点を迂回することが出来たらしい。

不死人の身体は自然と左に向き、そのまま廊下をしばらく直進していると、やがて奥に壁が見え、先は左に折れていた。曲がり角に近付き、耳を澄ますも、向こうから物音がするようなことはなく、さらに首から上だけ突き出して見てみるや、すぐ近くで浮ぶ内臓が一匹、廊下を歩いている様子であつた。

こちらの方向に向かつて歩いているらしく、また青い臓器の前には銀色のトレイのよ

うなものが浮んでおり、それはつまり、浮ぶ内臓が透明な手でそれを持ち上げ、運んでいるということなのだろうか。

その行為の意味は不明だが、廊下の幅は十分にあるため、気を付けていれば浮ぶ内臓の横を通ることは出来るだろう。不死人は曲がり角から姿を出し、廊下の端を歩いていく。

浮ぶ内臓は、二つの目玉をこちらに向け、歩きながらじつと見詰め続けていた。その眼差しは奇異であり、また相手の特徴に鑑みれば、この状況は極めて気味の悪いものだが、特に何かしてくるような気配は無い。

そうして横を通り過ぎると、その瞬間に足の裏に透明な何かを踏んでしまうような感触を覚えるようなことも無く、両者は廊下をすれ違った。しかしそこで安堵し、大きく息をつくようなことはせず、もとい、出来る状況ではなかった。

銀のトレイを持った浮ぶ内臓とすれ違った直後、廊下の先に別の浮ぶ内臓の姿を見付けたためであった。今度のものは長い花瓶のようなものを青い臓器の前に浮かせ、つまりは持ち運んでいるらしい。

幸いにも道の幅を狭めるような物は廊下に無く、先程のように脇を抜けることは可能だろうが、あの浮ぶ内臓が暴れ出した場合、手にしているのが花瓶であるため、落として割れば余計に音を大きくし、遠くまで届かせるのだろうか。

まるで遠慮なく向けられる視線を不死人は半ば無視し、廊下の隅に寄って歩き始める。どのような状況に陥つたとしても柔軟に即応するため、敢えて剣と盾は構えず、両手を空けたままゆつくりと歩き続けていると、不意に横を通る花瓶の柄が目に入った。描かれているのは草の蔓か、或いは海底の生物だろうか。

そのように細心の注意を払って歩いた結果、無事に浮ぶ内臓の横を通り抜けることに成功し、だが廊下の先にはまたしても浮ぶ内臓が歩いてきた。この廊下では三匹目となるその浮かぶ内臓は陶器の皿を十枚近く重ね、どこかへ運んでいるようだ。落して割つた際、花瓶とどちらがより大きい音を生むのだろうか。

先の二体の横を通り抜けた際と同じように、廊下の壁に張り付くようにして歩きながら、今さらになつて床の上にも積もつていけばそれで透明な触手があるかどうか分かるのではないかと閃くが、どちらにせよ無い物ねだりである。

浮ぶ内臓の真横を通過する緊張の一瞬を越え、叫び声が上がることなく廊下をすれ違ふ。そしてまた出会つた次の浮ぶ内臓は、左右にバケツを下げて歩いてきた。

今度の持ち物は嫌がらせのように大きな音を出しそうな部類ではないが、そもそも暴れ出しさえしなければ何を持っていようと同じことである。左の壁に寄り添ってゆつくりと歩き、いよいよ浮ぶ内臓とすれ違ふかという箇所には差し掛かると、そこには木の板で封じられた扉があり、その部分は他の壁よりも内側に凹んでいるため、より距離を

離して浮ぶ内臓の横を通り抜けることが出来るようであった。

扉から少しだけ突き出たドアノブに引つ掛かつてしまわないよう気を付けながら、不死人はバケツを下げた浮ぶ内臓の横を、いくらか余裕を持って通り過ぎていく。

すると扉の向こうで、聖鈴の音が一つ鳴るのを耳が捉える。

不死人はほぼ条件反射で扉から飛び退き、その瞬間足が透明な何かを踏んでしまっていた。

## 第9章 6

## 第9章 礼拝堂 6

「ふわあああああああああああつ！」

気付いた時には手遅れであり、浮ぶ内臓は大きく叫び出していた。既に透明な触手を振り回し始めているらしく、周囲の床や壁が弾けるように壊れたため、そこから距離を取らなければならないが、しかしそうするより前に背後で乱暴に開け放たれた扉が不死人を突き飛ばし、前に押し出されると向かいから透明な触手に身体を殴打され、吹き飛ばされて廊下に転がる。

想定し得る限りの状況の中で、最悪の部類に近いものではないだろうか。大きな傷を負った不死人はすぐに立ち上がってエスト瓶を飲み、だが飲んでいる最中に看護師の亡者に接近され、腹に警棒の一撃を食らう。

あばら骨に守られていない部位に当たったため、柔らかな内臓へ伝わった衝撃は体内で大いに暴れ、思わずその場に崩れ落ちそうになるも、これを堪えて走り出し、看護師の亡者から離れる。

そして十分な距離を取ったことを確認してからもう一度エスト瓶を飲んで身体を治

癒し、同時に急いた気を落ち着けていく。

二対一、形勢不利であり、ここがリングレイの地でなければ、逃走が一番良い選択肢であったかもしれない。だが仮にこの地でそのようなことをすれば、逃げた先にどれほど恐ろしいものが待ち受けているか知れず、この敵につけ狙われたままであれば、前後を挟まれる形になりかねない。

よつてこの敵はここで撃破する。敵方は不死人の側から見て手前に看護師の亡者、その奥に浮ぶ内臓の順で並んでおり、浮ぶ内臓が今尚上げている叫びは新たにこの場へと何かを呼び込んでしまう懸念があるため、出来れば先に倒すべきだが、前を守る恰幅の良い身体は盾として働くには適している。

また二体に囲まれるような事態は避けるべきであり、であれば看護師の亡者と立ち回る際、回り込むような動き方も厳禁である。

あまり時間を掛けずに正面から看護師の亡者を倒さなくてはならず、こちらから仕掛けなければならぬが、牽制に魔法を使おうにも敵にはそれを封じる術があり、特にこのような距離では十分にその術を行使する時間があるため、試したところで無意味に終わるだろう。

小細工を弄すにも種は尽き、否応無く地力で挑まなければならぬ状況であれば、むしろ覚悟は決まるといふもの。不死人は集中力を高めながら、看護師の亡者ににじり

寄っていくと、太い腕が持つ警棒に注視し、その一瞬をもはや熱望する。

やがて互いの間合いに入り、看護師の亡者が動く。力一杯振り抜かれた警棒は廊下の暗鬱とした空気を裂きながらこちらの脇腹に迫るが、しかと機を見定めて薙ぎ払われた塔のカイトシールドはこれを打ち、振るわれてきた方向へと弾き返す。

その威力の凄まじさたるや、パリイした際、盾を持った手に痺れを覚えさせる程であったが、タイミングは合っていたため、相手は姿勢を崩していた。そして無防備となつた看護師の亡者の懐に飛び込むと、胴の中心に魔術師のロングソードを突き立て、力の限り押し込む。

深々と剣は肉を貫通し、その後すぐに不死人は看護師の亡者の重い身体を、触手を暴れさせる浮ぶ内臓の方へ向け、剣を抜きながら蹴り飛ばす。

既に動く力を失っていた看護師の亡者は透명한触手に打たれるも、その重量は押し返せなかったのか、浮ぶ内臓は叫び声を上げたまま脂肪と筋肉の塊に圧され、倒れて下敷きになる。

それを見た不死人は即座にそこへ駆け寄ると、さらに看護師の亡者の身体の上に乗って加重すると同時、その脇を滑らせた剣で青い臓器を貫く。

叫び声は止み、暴れていた触手も収まり、廊下に静けさが戻っていた。

始めに大きく負傷した今の戦いは、扉の向こう側から響いた鈴の音を発端としていた



が、あの音は看護師の亡者の持つ聖鈴のものであったのだろう。だが畏のつもりで鳴らしたのかどうかは定かではない。

実際そこにあつた扉の中を覗いてみると、奥の窓は開いたままになつており、そこから入つた風が聖鈴を揺らした可能性もあるのだろう。主は看護師の亡者であつたと思しいその部屋に踏み込むと、中にはベッドと机が一つずつしか置かれておらず、極めて質素な様相であつた。

さらにもう少し奥にまで進み、窓に近付いてそこから外を眺めると、中庭のようなそこは木々が鬱蒼としており、また窓の真横の壁には上に向かつて伸びる梯子が掛けられていた。

この梯子を登るのであれば、背を中庭の方に向ける事になり、そこに何かの脅威が身を伏せていた場合、無防備なところを襲われかねないが、かと言って現在の位置からでは中庭の詳しい様子を窺い知ることが不可能であつた。

止むを得ず、敵に狙われた場合は梯子から手を離して落下することも視野に入れ、不死人はそれを登っていく。すると結果的にはあるが、どうやら先の懸念は無用であつたらしく、無事にこの梯子を登り終え、足場を確保することに成功する。

病院の棟は二階建てであり、先程まで居たのが二階であつたため、それより上へ登つたのであれば、そこにあるのは階ではなく屋根であつた。古くなつてしまつているの

か、瓦はこちらが一步差し出す度に割れて散り、その欠片を屋根の外へと落とし、不死人はそれに視線を奪われるように追っていくと、目の中に中庭の様子が映る。

上から見ると分かることだが、この病院は廊下とそれに並ぶ部屋で中庭を四角く囲むように造られており、そして中庭の区画はかなり広い空間を有し、背丈の様々な木を並べていた。

周壁の影にある為周囲は暗く、だが中庭にはランタンの灯りがいくつも点在し、仄暗さがかえって幻想的で穏やかな雰囲気を引き出している。この中で休息したとして不安な心地になる者はあまり居ないだろう。

他に気に留まるものはないか、不死人は屋根の上を見回すと、少し歩いた先に登ってきたものとは別の梯子があるのを見付け、それを伝って行けば下の階の窓へと入ることが出来るだろう。

あるかどうかも知れない中庭の底からの視線を意識し、手早くその梯子を降りて窓の中に滑り込む。その際、その窓からも一つ梯子が伸びているのを目が捉える。屋根の上から見たときには分からなかったが、どうやらそれは中庭へ降りることが出来るものであった。

そちらを調べるのも決して吝かではなく、しかし先に今居る部屋の安全を確かなものとし、万が一の退路を確保した方が良いだろう。

暗がりばかりの室内を調べるため、不死人は奥へと歩み始め、すると突如としてベッドを覆っていたシーツが跳ね上がり、そこから浮ぶ内臓が現れる。

剣を握り、盾を構えるも、しかし相手は不死人のことを見詰めるばかりで、叫び声を上げることなく、暴れ出そうともしない。一体何が起こっているのか、状況が把握出来ないためこの場は冷静な観察が肝要であり、相手の姿に視線を走らせると、他の浮ぶ内臓に無い臓器がそこに浮かんでいることに気付く。

## 第9章 7

## 第9章 礼拝堂 7

「やあはじめまして」

語りかけてきたのは浮ぶ内臓なのだろうか。この場に第三者は見えないが、唇が不可視であるため、その認識で合っているかどうかは定かではない。

「気味が悪いかな？ 非道な実験を施されたと？ いやいや、我々はこれで心安らかに過ごせるようになったんだ。何せ長い時間存在するということは、それだけ狂う確率を増していく訳で、それなら理性も感情もある程度制限するべきなんだよ。そう、これからの時代、愚鈍は美德だ」

こちらが聞いているかどうかには構うような様子は見せず、それは一方的に喋り続けた。いた。

「まあこの身体じゃ今は外に出られないのが窮屈に感じるときもあるが、その問題もいずれ解決するよ」

浮ぶ内臓はその言葉を最後とし、目玉の後ろにある、光る虹色の細い線を走らせる臓器を自身から分離してベッドの上に置くと、やおら立ち上がり、部屋の扉を開けて廊下

へと去つて行つた。

ベッドの上で細い線を虹色に光らせる内臓。形状からして脳みそであるそれは本体から切り離されても発光し続け、内臓として生きている様子であつた。つまりこれがこの病院における具体的な治療方法であり、患者本人の話によればこれは全く狂つた行爲ではないそうだ。

その話の是非はさて置き浮ぶ内臓の後を追つてみると、彼はまだ廊下を出て間も無いため、扉から近い場所を歩いており、そしてその向こう側には、礼拝堂から病院へ入る際に通り返けた窓が見えていた。同じ場所に戻つてきたということなのだろう。

そちらを調べたところで今更見付かる物は無いため、不死人は部屋の中に引き返すと奥にまで歩き、窓を跨いで中庭へ伸びている梯子に足を掛け、それを下つていく。

降りた先は日陰で水気が多く、だが不浄な虫の気配は見られずその息吹を清涼なものとしており、また幽かな灯りが木々を照らし、或いは窓を映しては奥の闇を浮き上がらせていた。

虚像の園。深刻な心の傷を癒すには現実のおぞましい風景を遠ざける必要があり、そういう目的の為にと作られた場所を不死人は中心へ向かつて歩いていくと、不意に後ろの方で草木が揺れ、葉の擦れ合う音が出る。

そちらに顔を向け、しかしその直後には視線を向けた真反対の方向、つまり先程まで

前方であつた位置でも草の茂みで物音が鳴り、次いで左右両側で生木が少ししなるような音が響く。

最低でも四箇所。またはそれ以上に分散した場所にて同時に音が鳴り、だがどれだけ首を巡らせたところで、音が鳴つた場所には何者の姿も無い。木の陰にでも隠れているのであれば相手が見えないのも分かるが、そこに足首までの高さの草しかないような場所であつてもそれは同じであつた。

理に適わない現象ではあつたものの、思い当たるものが全く無いかと言えば浮ぶ内臓が拳がり、それがこの中庭に何体も存在し、それぞれが音を立てている可能性が考えられる。しかしながら、仮にその通りであつたとして、彼等の青い臓器すら目に入らないのは妙である。

いつしか、草の揺れる音は止まっていた。直前まで音を出していた位置から予想するに、不死人は四方を何かに囲まれている状態である。

また脈絡無く、背後から音が鳴る。だがこの音は先程と違い、何かが移動した際に草木から発するものではなく、水に浸けた長く鋭い刃物を、端から端まで一息に、且つ優しげに研いでいるかのような音であつた。

そして音の発した方角より飛来する、光の弾によつて胸を殴打される。高速であつたために回避が間に合わず、衝撃によつて肺の中の空気が無理矢理に喉と口を通つて外へ

追い出され、中庭の土の上に不死人は倒れる。

今のは魔法による攻撃なのだろうか。ソウルの矢のように一直線に飛ぶそれはとても鋭く、また威力もそれなりに高いものであった。すぐに起き上がり、一応追撃の気配が無いらしいことを確認し、エストを飲む。

雫石での回復と違い、エスト瓶は瞬く間に傷を治癒し、態勢を整えた不死人はもう一度、光弾が放たれた方向を見るも、やはりそこには何も無く、木々が佇んでいるだけであつた。だが透明な何かが存在しているのは明白であり、速やかにその正体を確かめなければならぬが、具体的な手段を考案するより先に再び不死人の周囲で草木が揺れ動く。中庭を何かが移動しているようだ。

後手であり、自身の身に起きている状況に対して傍観していれば、姿の見えない相手に一方的に斃り殺されるだろう。よってまだ碌に策も無いが、少しでも状況を変えなくては、不死人は草木の揺れた場所に近付き、その辺りを魔術師のロングソードで斬りかか

る。  
しかし手応えは無かつた。銀色の刀身は小さく風を起すのみに留まり、そして反撃があるかと思ひ、念の為塔のライトシールドを構えてみるが、衝撃が訪れるようなこともなく、やがて草木の揺れる音も止まる。

そうして生まれるのは無音の間であつたが、それが中庭の隅々にまで染み渡るかと思

えば、ここから少し距離のある方角より、長い刃物を研ぐような音が鳴る。反射的にそちらを向くが間に合わず、またしても光弾の餌食となり、不死人は仰向けに打ち倒された。

だが天を仰ぎ見たのは一瞬、不死人は跳ね起きると、エスト瓶で回復よりも先に魔術師のロングソードを構えて詠唱し、剣の先を中庭の端の方へ向け、ソウルの矢を放つ。

真つ直ぐに飛んでいく青い光は透明な何かに衝突し、しかし効果が無かつたのか、まるで阻まれたかのように霧散して終わる。魔法の効きにくい手合いなのだろうか。もしかすればこの特性は、魔法が盛んに使われている地ではさして珍しいものではないかもしれない。

ともあれこれ以上の攻撃を行う機ではない。ひとまず構えを解き、エストを飲んで身体の傷を癒していると、またどこかで葉が地面に沈み込む。そしてそれは不死人の周囲に集まるかのように移動し、まるで取り囲もうとしていた。

その時勘が何かを告げたのか、ふと上を見た瞬間、窓の黒さの上に重なることで僅かに鮮明になったその姿が目が捉える。頭上よりさらに高く、二階建ての病院の屋根すら越す程の高さの宙で、数本の虹色の細い線が光り、まるで脈動しているかのようであった。

偶然発見したこの光の線はすぐにどこかに消え失せ、だが思い返すに浮ぶ内臓の脳み



そで走っていたものと酷似しており、これも脳みそであるのかもしれない。しかし宙に浮いている場所が高過ぎることに加え、線の長さから推し量るに、人間の脳みその数十倍の堆積があると予測される。

つまりそれは、一匹の巨大生物である可能性の示唆であった。この透明な巨大生物は長い足を使って不死人の上を跨ぐように移動し、それ故に複数個所で同時に物音がしていたのだろう。それだけで敵の正体が判明したとは言い難いが、戦い方を選ぶ上では重要な手掛かりになり、だがそれ以上の思索に耽る暇は無かった。

刃物を研ぐような音が鳴る。間髪入れずに盾を構え、敵の遠距離攻撃を防ごうとするも、しかし光弾が襲い掛かったのは低い位置であり、塔のカイトシールドを抜けて足を打ち、地面へ転ばされる。

数度目になるが慣れず、対応の難しい攻撃であった。速く、またどこから撃ち出されるかが不明であるため、振り向いてから身構えては間に合わず、避けるにせよ防ぐにせよ、せめて敵の位置を把握しなければ成功し得ない。

起き上がり、残りが半分を切ったエストを飲んで傷を治し、態勢を整えると、その直後に草木の揺れる音を耳にする。どうやら透明な巨大生物が移動を開始したらしく、今度こそは見失うまいと宙に目を凝らし、すると虹色に光る細い線が見付かったためそれを目で追うと、光る線はこちらの頭上から中庭の隅の方へ向かい、本体の部分を下に降

ろしていた。

敵の攻撃が発生する位置は掴むことが出来ていた。故に次に光弾が撃たれても対応することは出来るが、それは消極的過ぎる選択だろう。相手がまだ自分の位置を知られていないという優位にあると思わせるには、光弾に対応する所を見せてはならず、だがそう何度も傷を負ってはいられないため、ここで仕掛けるべきであり、不死人は魔術師のロングソードを構える。

## 第9章 8

## 第9章 礼拝堂 8

魔法はあまり効果が無いことは既に分かっていた。故にやや無謀な感は否めないものの、走って透明な巨大生物が居ると思われる場所にまで距離を詰め、おおよその見当を付けた場所へ剣を振るう。

だがそれは石や鉄よりも硬いのではないかという程にロングソードの斬撃を拒み、甲高い音を立てながら跳ね返した。あくまで不可視ではあるが、傷を付けられる気配は微塵も無い。

またその際強い反動が身体を駆け巡り、一瞬だが硬直していると、そこへ豪快に空気をかき回して薙ぐような音が鳴り、直後不死人の身体は衝撃に襲われ、宙を舞って中庭の土の上に落ちる。

大きな負傷であった。これにより身体の自由が利かず、だが幸いにも追撃は無かったため、先に片膝立ちの状態にまで身体を起こし、それからエスト瓶を飲み、回復して立ち上がる、敵の次の行動に備えながらも今の一連の出来事を振り返る。

透明な巨大生物が物理攻撃に用いたのは、おそらく巨体を支える太い足か腕である。

攻撃の威力は高く、ただ太さの余り透明とは言え、それを振る際に空気を巻くような音が大きく出てしまうため、その点を利用すれば対処は可能になるかもしれない。それよりも問題は、本体への攻撃が効かなかった方だろう。

魔法も斬撃も芳しい効果を発揮せず、であれば弱点部分を見付けるなどの工夫が必要だが、いかんせん相手が透明なままではそれも難しい。まずは暴くことが先決となるか。

やがて草木が揺れ、透明な巨大生物が動き始めていた。先程は上から中庭の端へ動いたために、音のした方へ斬り付けてもそこは敵が足を抜き去った後となり、何ら手応えは無かった。だが今はその逆、中庭の端からこちらの頭上へ動いており、よって、音のした場所にはきつと太い透明な足があるのだろう。魔術師のロングソードを固く握り、それらしい部分を袈裟斬りにする。

すると剣は何かを斬り裂き、そこから透明な液が溢れ、それと同時に周囲の空気が僅かに上へ吸い込まれるような感覚があった。こちらの攻撃により、透明な巨大生物が怯んだのだろうか。

透明な液体は、不死人の身体にも付着し、特に剣や手は大量に浴びたためか、怪しげな光を反射していた。おそらくこの液体は透明な巨大生物の血液であり、つまり初めてこちらの攻撃が通用したことを意味し、ということは、先程剣による攻撃が弾かれたの

は、狙いを付けた場所が悪かった、ということになるのだろうか。

やがて草と草が擦れるような音が鳴り、透明な巨大生物は移動を始め、こちらの頭上から中庭の隅の方へと向かう。不死人はそれを追い掛け、透明な巨大生物が中庭の端で身体を降ろしたことを周辺の草の動きを見て確認すると、そこへ走り寄った。

軽はずみに近付いただけであれば、太く透明な腕か何かによつてその身は打たれていたのでろう。だが如何に敵の攻撃の範囲が広く、そして人の目に映らないものであったとして、迫り来るタイミングを渦巻く風が教えるのであれば、見切ることも決して不可能ではない。透明な巨大生物の攻撃を躲し、その直後に肉薄する。

次いで魔術師のロングソードの煌きを通った軌道は、脳を擁する敵の本体ではなく、直前に攻撃を繰り出した、透明な腕に沿ったものであった。不可視の血が零れ、その重みで周囲の草が垂れ下り、またこちらの攻撃に怯んだのか、草の一画がごそりと動いていた。

常であればここで畳み掛けるべきかもしれないが、やはり相手の動きが予測しにくいため手が出し辛く、その場で剣と盾を構えるに留まっていると、やがて辺りの草が騒ぎ出し、つまり透明な巨大生物が移動を開始していた。

本体を高く持ち上げ、透明な巨大生物はこちらの頭上を越して中庭の中央へ向かっていくらしく、不死人はそこへ追い縋ると剣を構え、移動中の隙を突くつもりで足の一本

があると思われる地点に寄り、そこへ斬撃を見舞った。

何も無い宙から、僅かに光を反射する液体が零れ落ちる。こちらの攻撃は成功し、だが直後に背後から風が起こったため、不死人は即座に前に向かって身を投げ出すと、ひと塊となった風圧は更に勢力を増し、中庭を大きく扇ぐ。

圧が収まり、周囲を見回したところ、近くにあった木が数本半ばから折れていた。どうやら透明な巨大生物は不死人の攻撃によって態勢を崩し、高所から倒れてきたのだろう。あと少しで重い本体の下敷きとなるところであった。

やがて透明な巨大生物は身を起こし、立ち上がるとうとする。その様な相手の動きを観察するには、これまでは揺れる草木と虹色に光る線の軌道のみが手掛かりとなっていた。だが再三に渡って攻撃され、血を撒き散らしたせいなのか、僅かな光が巨体を濡らした透明な液体を反射し、その輪郭を殆ど描き、ここに正体が暴かれる。

腕や足、というより、単なる太い触手が長く伸び、そしてそれが背負っているのは巨大な渦巻く殻。即ち、敵の正体は透明な巨大巻貝であった。

おそらく、こちらの斬撃も魔法も防いでみせたのは本体を守る貝の部分であったと思しい。見るからに殻は厚く、姿を暴いたとて破れるようなものではないが、反面露骨に弱点となる部分が存在していた。

透明な巨大巻貝は移動を続け、中庭の端へと向かう。その間に闇の盾を詠唱し、塔の

カイトシールドに付与し終えた不死人は、敵が下に降り立つや否や、無防備な風を装ってそこへ近付き、触手での殴打を引き出す。

すると誘いに乗った一本の触手が縦に大きくしなり、今にもこちらに振り下ろしそうな状態となった瞬間、不死人は駆け出し、一息で巨大巻貝の側面へと回り込む。明後日の方向へ打ち下ろされた触手を捨て置き、透明な巨大巻貝の口を正面として捉えると、そこへ魔術師のロングソードは突き刺さる。

「ぶええええええええっ！」

体内深くに剣の先を埋め込まれた透明な巨大巻貝は汚い悲鳴を上げ、次にこちらを殴り付けようと触手を振り回すも、不死人はそれを闇の盾で弾き返しながらロングソードの柄から手を離さず、稼いだ時間で詠唱を行う。

そしてそれが完了した瞬間、魔術師のロングソードは敵を貫いたままソウルの大剣を形成し、巨大巻貝を内側から斬り裂いた上、不死人はさらに剣を渾身の力で以て振り抜いた。

「ぶええっ」

最期、僅かに絞り出された悲鳴が中庭の薄闇へと消えていく。

本体の上半分を両断された巨大巻貝は触手を悄然と横たえ、体液が零れていく度に徐々に萎み、やがて何かが貝の内側に当たり、音を鳴らす。

透明な身体に一体どのようなようにして隠し持っていたのか、鉄で出来たこの楕円形の何かは青みがかった泥に汚れ、それは拭うことが出来なかつたが、形状から察するに何かの飾りであるようだ。

下の方には穴が空いており、中を覗き込んでみると、そこには螺旋状の溝があり、大きさは丁度、溝の溜まり池の門を開閉不可能にしている棒の先に取り付けるのに適しているように見える。

つまりこれを持っているということは、この透明な巨大巻貝は礼拝堂の神官長であったのだろうか。



## 第10章 1

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 1

透明な巨大巻貝へと変貌した礼拝堂の神官長は、鉄で出来た楕円形の飾りを残し、半ば溶けるように形状が崩れ、最早その面影は大きな殻にしか見られなかった。

彼が何故あのような異形と化したのか、その理由を知る手掛かりがあるとすれば不死人の手元にある青い泥で汚れた飾りと、それによって開く溝の溜まり池の扉に封じられたものののだろうか。

しかしこの飾りで本当に扉が開くかどうかはまだ定かではなく、これについては出来れば詳しい人物に確かめた方が良さだろう。不死人はそこにあつた篝火から身体を起こし、周囲を眺める。

中庭には出入り口が二つ存在する。一つは周壁と境を接するように走っている病院通路の横腹にある、大きめの両扉であり、調べてみるとこれは開いているようだ。だがそこへ向かうのは後回しにするとして、不死人はもう一つの出入り口である、中庭へ降りて来る際に使用した梯子まで戻り、それを登っていく。

そして病院二階の窓から室内に入ると、かつて喋る浮ぶ内臓が居た部屋を通り過ぎ、

廊下に出て階段を下に降り、そこから少し歩けば病院受付の中には変わらずに騎士クリステイアの姿があつた。

彼の方へ近付き、手にしたばかりである、泥に汚れた飾りを見せる。

「恐れ入った。本当に手に入れるとは。ならもう、それは持つて行つてくれ。そしてどうかこの地の呪いを解いて欲しい。頼む、私では到底力が及ばないんだ」

クリステイアはまた、あまり顔色を変えず、だが眼差しにはどこか悲哀の色のようなものがあつた。詳しい事情は分からずとも、幾ばくか心が残つていれば、それを見て想起するものはある。

不死人は静かに頷き、手の中にある泥に汚れた飾りを握り締めると、それを引き戻して大事に仕舞う。

「礼を言う。であれば私の代わりという訳ではないが、貴公にこれを渡しておこう」

受付の台の上に彼が置いたのは、一本の武器であつた。ロングソードよりやや長く、細身の柄の先には槌頭とその反対に鉤爪が付き、打撃を主な攻撃方法とするようだがあまり重くなく、持ち運びには便利である。また、柄の半ばに聖鈴らしきものが一つ取り付けられており、この部分にだけは小さな装飾が施されていた。

「これは聖職者のウォーハンマー。見ての通り打撃系の武器だが、同時に奇跡の触媒でもある。邪魔でなければ是非使つてやつてくれ」

一見して高価であることが分かり、だが高貴に肥えた者達が弄ぶような部類ではなく、希少な素材と、秘された業によつて生み出された品であった。これからの道中に連れて行くに不足は無く、不死人はその武器を手に取ると、背負うように背中のベルトで固定する。これであればいつでも武器を取り出し、持ち替えることが可能だろう。

「それと一つ、助言をしておこう」

クリステイアンは言葉の間隔を開ける。その間が置かれることにより、彼がどこか緊張しているような様子にあることが不死人へ伝わっていた。

「リングレイ王に気を付けろ。即位したばかりの頃は市井の者を娶るほど温厚で暢気な人物だったが、しかし始まりの戦争の後、連中にあの剣を贈られてからは、憎む全てを焼き尽くさんと、まるで災厄の如き力を振るうようになった」

その光景を目の当たりにしたことがあるのだろうか。一気に滑り出てきた言葉は、実感の籠もったものでもあった。

「彼はひたすらに強い。生半可なことでは勝てん。きつと、この先で出会うことになるだろう」

クリステイアンはそれ以上、言葉を重ねることはしなかった。

軽く挨拶を交わして彼と別れた後、不死人は今来たばかりの道を通つて中庭の篝火近くまで戻り、これの脇を抜けて未踏の病院通路へと続く大きめの両扉を開く。

中は今まで目にしたものと変わらない廊下であった。だが構造は一癖あり、両扉を開くとその真正面にはまた一枚扉が見付かり、それも施錠はされていないため開くと、その先は木造から石を固めたものへと変化し、そしてすぐ側にはリフトがあった。

リフトの上へ乗り、スイッチを起動する。最初は緩やかに、だが次第に速度を増しながらリフトは上昇し続け、程無くして終点に到着して止まると、目の前に内側から鍵が掛けられている扉が現れる。

鍵を外し、扉を開け、するとそこは、見覚えのある場所だった。そもそもリフトによって上昇した高さに鑑みれば、匹敵する全高を持つ構造物は周壁の他に無いが、更に具体的に現在地の座標を言うのであれば、ここは牢に閉じ籠もる男が居る場所の付近となる。

そこから少し歩き、牢の中を覗くと、男はまだ健在のまままで居るらしく、不死人は牢の柵を軽く叩いて彼の意識を向けると、手前に一冊の本を差し出した。それは貴族街で見付けた魔術書であり、コネリー曰く奇跡の触媒で発動する術が記されたものである。

牢の中の男はそれを見付けると、余計な口は開かずにはまず本を取り、その内容に目を通し始める。そしてしばらくが経つと顔を上げ、まるで何も映していないかのような瞳を不死人に見せる。

「かつての私であれば、激怒したであろうな。こんなふざけたものがあつて良いのか、

と。しかし今ならば分かる、奇跡も、この闇術も同じなのだ。ただ、人間性に縋ってその力を引き出そうとする術でしかない」

彼は語りながらも放心したような有様であったが、しかしすぐに心を取り戻し、今度は真つ直ぐに不死人を見据える。

「分かった。これを教えよう。やはり神は信じないが、だがこれがきつと我々の縁とさだめなのだ」

そうして、彼は奇跡と闇の物語を語り始め、不死人はこれまでに得たいくらかのソウルと引き換えに、奇跡触媒で使用できる術をいくつか修めることに成功した。

その後牢の中の男の前を去り、不死人はリフトの一つに乗ってスイツチを起動すると、周壁の下へ降り、中央広場へと至る。ここは礼拝堂に行く前に寄ったばかりであるため、特に用のある人物は居ないが、そういえばアトラングのルシンドの姿が見えないことに気付く。彼女は今も王城の玉座を目指しているのだろうか。

中央広場を横断し、不死人は溝の溜まり池へ下るための細い坂道へと入る。もしこの場所からまた溝の溜まり池を渡ろうとすれば、また長く毒の水の中を移動しなければならず、そしてそうしなければならぬ理由はない。この場所にまでやってきた目的は全く別のところにあった。

坂道の横にある狭い空間。老婆はやはりそこに座り、不死人を見ると少しだけ目を細

める。

「何か、入用なのかい？ 悪いけど、硬貨じゃもうなにも売ってやれんよ」

最初出会った時にはもう少し穏和な顔であったが、それが今はやや白けている理由は彼女が言った通りなのだろう。不死人は鍛冶師のマサイアスにしてみせたように、掌にソウルを少し乗せ、それを老婆の手前に差し向ける。

「そう、どれだけ私がお人好しだったか、分かったんだね」

聞こえは悪いが、灰色の頭巾を被った老婆の言い分は全面的に正しい。硬貨など渡されても彼女が得るものはなく、しかし同情してか、香草だけは売ってくれたのだから感謝しなければならぬ。勿論それはマサイアスにも言えることである。

「なら、前に硬貨で買った香草の分のソウルを払っておくれ。そうしたらまた物を売ってやろうじゃないか」

不死人は言われた通り、老婆が提示した量のソウルを渡し、引き換えに以前差し出した硬貨を返される。それから彼女の足元に敷いてある布の上に置かれたいくつかの七色石と毒消しの香草を数枚取り、代わりにソウルを支払った。

わざわざこの場所にまで買いに来た品の中で、一番重要なものは毒消しの香草であった。この先で確実に必要になるかは分からないが、これから向かう先が溝の溜まり池の終わりにある門を出発地点としており、内部にまで毒が及んでいることも考えられるた

め、ある程度備えておくべきだろう。

## 第10章 2

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 2

「沢山買つてくれたから、今度も色々教えようかねえ。アンタ、溝の溜まり池の先にあ  
る、洞窟を塞ぐ門の先にあるものが何なのか、知っているかい？」

そこへ向かうことを、この老婆は察していたのだろう。一言たりとも聞き逃さぬよう  
耳を澄まし、また皺だらけの口の動きにも注視する。

「そこにあるのは深い、とてつもなく深い牢。あまりに深く巨大で、きつと王城よりも  
広いその場所は、牢獄都市だなんて呼ばれているのさ。そして毒池と同じで、昔から  
あつた訳ではなく、ある時を境に生まれたそうだけど、一体どうやってそんなにも大き  
なものが地下に出来上がったのか、殆ど誰も知らない。私も知らないよ」

老婆は一度語りを止めると、次第に顔を陰らせる。

「そこに居る者達が罰を受ける事は当然の成り行きさ。アンタは彼等に入れ込まず、  
不死の使命である、闇へ挑むことだけに専念した方がいい。だけどね」

この瞬間、彼女の濁つた眼が得体の知れない力で不死人を捉えて離さず、よつて否応  
無く次の言葉が鼓膜から深くまで流れ込むこととなつた。



「あの門より奥は、踏み込む者の人間性を試すということを、アンタは覚悟しておかなくちやいけないよ。隠された地でする行いは、誰にも知られないのだから」

心無い選択をしていけば、それは己に返ってくる。それが言わんとしている所なのだろうが、老婆の話は門の奥に待ち受けるものの不吉さをも思わせるものであった。

老婆との取引を終えたのち、不死人は坂を上がり、一度中央広場にまで戻つてアリーナ方面へと直通する跳ね橋を渡ると、そこから礼拝堂にもアリーナにも向かわず、橋の付近にあつた細い道を通つて溝の溜まり池へ入る。

そうして溝の溜まり池の終点に聳える鉄の門の前へ行くと、その脇にある粗い鉄で造られた扉へ近付く。その隙間には未だ何かの棒が入り込んだまま、開閉の妨げとなつていた。

不死人は泥に汚れた楕円形の飾りを取り出し、これの穴の部分を扉から伸びる棒の先に被せ、右に回すと双方の螺旋状の溝が合致したらしく、二つの品は連結し一つとなる。そして飾りの部分をしっかりと握り、力一杯引くと、ついに棒は引き抜かれ、扉もまた開放される。

その一方、連結し、全容を露にしたそれは、おそらく錫杖の類であつた。だが飾り部分を含む、全体もまた青みがかつた泥に汚れており、拭い去る事も出来ないため、模様などの判別は困難であつたが、聖鈴が付いていることから奇跡の触媒と思しい。

嵩張るため錫杖はその辺りに捨て置くと、不死人は粗い鉄の扉に向かい、それを押す。扉は歪んでしまっているのか、重い異音を響かせながらも、しかし徐に開き、いよいよ牢獄都市と呼ばれる地へ踏み込む。

中は洞窟そのものの暗所であった。

だが至る所に松明の灯りが置かれており、削り出された岩の肌を照らしている。この壁は王城にあつたような大理石で造られたものに比べれば遙かに雑に切られていたが、少し視点を上げて周囲を遠くまで見た所、その削り出された範囲が尋常ではないものと知ることとなる。

それは巨大な空洞であつた。ピラミッドを逆さにしたような形で下へと階層が続いているため、この区画の大半は何も無い空間が占めており、また外縁部分の幅の広い道は四角形となつて一周し、その一辺の長さたるや王城の敷地の全長に匹敵する程である。

そして通路の端にまで寄り、空洞を見下ろすも、そこで咲く闇によつて底は覆われ、結局この場所の全容を知ることが叶わなかつた。老婆の言う通り、ここは途方も無く広大な地下空間なのだろう。

どうやら内部にまで毒の水は達しておらず、その点で苦勞することはないのでだろうが、こうも空間自体が広げれば歩くだけで一苦勞であり、もしも階層を一つ一つ降りて

いかなければならないとなれば、一体どれだけの時間を必要とするのだろうか。

闇雲に進むのは避けたいところであった。かと言って付近に親切な地図や道標が置かれていた訳も無く、道案内を頼めるような人も居ない。理解した上で不死人は諦め悪く周囲を見回し、何か無いか探していると、少し離れた地面に奇妙なものを見付ける。

地面から浮き上がり、仄かに白く光る文字。誰かの名前が書かれたものであるらしいこと以外に正体が分からず、不死人はこれに近付き、調べるために指で触れようとすると、途端に文字は薄くなり、程無くして消え失せる。

不可解な現象であったため迂闊に動けず、しばらくそのまましていると、何の前触れも無く文字の消えた辺りから真っ白な光に包まれたような人間がゆっくりと起き上がり、そしてその人物は不死人を見る。

彼の顔には見覚えがあった。出会ったのはアリーナの地下道であり、剣闘士の彼は縛りつけられ、それを不死人が助け出したのだ。彼は何かのジェスチャーでこちらに挨拶をしてみせると、グラディウスを鞘から抜き、警戒するように周囲を見回す。

この場所を探索する上で、助けとなるつもりなのだろうか。本当であれば心強いが、彼は今喋ることが出来ないらしく、不死人を助勢することによつて得る利を知ることが出来ない。

そのような状態では何を任せるにしても信用ならず、だがこの場所の探索は骨が折れ

ることが予想されることに加え、こちらには一度この剣闘士を助けた貸しがあり、彼の善意を深く疑う必要は無い。熟慮した結果、不死人は彼を頼むことに決める。

そういえばこの男性は縄の戒めを解かれたとき《仲間を助けに行く》と言っていたが、この牢獄都市に彼の仲間が居るのだろうか。牢獄都市は広大ではあるが、もし他に味方が見付かるのであればそれほど苦勞はせずに済むかもしれない。

暗がりで見生まれかけた光明。だがそれを踏み付け、躪り潰すような悪意の籠もった視線がどこからか生まれ、不死人と剣闘士に突き刺さる。

それはまるで背筋に大きな百足が飛び付いたかのような、はつきりとした悪寒を二人に与えた。どちらも周囲への警戒を強めることとなり、前後左右に首を巡らせ、或いはまさか上か、と見上げるも、流星にそこには水滴を垂らす暗然とした天井しかなく、悪意の元は見付からなかった。

しばしの間そのようにして周囲の気配を探るも、何者かによる襲撃は訪れず、であればこの場所を探索したいこちら側から区切りを付ける必要がある。不死人は剣闘士に合図し、先に進むことを伝えた。

まず向かう先は、牢獄都市入り口から見て右に伸びる通路である。先んじて剣闘士が進み、その後ろを不死人が付いて行く形を取る。

二人が歩く地面は、壁と同じく削り出された岩で出来ていた。また洞窟という場の特

性か、乾燥せず湿っており、それどころか水溜りが随所に見られる。苔などが繁殖するには適した環境であるため、足を滑らせ易くなっている箇所もあるかもしれない。

自然と歩みは遅々としたものになり、だが剣闘士と二人、通路を奥へ進めば確実に入り口は遠ざかり、もう間も無くで外からの光は途切れ、あとは各所に設けられた松明の灯りだけが頼りとなるだろう。無意識に陽光が惜しくなったか、不死人は一瞬背後に目を向け、松明の灯りを横切る影が壁に映るのを目撃する。

振り向きざまに盾を翳す。目視するよりも先に取ったその行動は功を奏し、敵対者が突き出した鋭利なナイフを防いでみせた。

音に反応した剣闘士がこちらを向き、それと同時に敵対者はナイフを引き戻し、後ろに飛んでこちらとの距離を取ると、その姿の全体を観察する余裕が生まれる。

足、腕、胸に着込んだ鎧は古く、リングレイの亡者兵士と同じ物を使っているようだが、しかし兜は一对の大きな牙が伸びた猪を模して作られたものであり、兵士が被るようなものではない。

また全身が血のような赤色に染まり、仄かに光っている。光の感触そのものは剣闘士の白い光と似通っているものの、彼等が纏い、滲み出す意志は対照的である。

悪意の敵対者。牙猪の戦士は、右手にナイフを持ち、腰にモーニングスターを下げ、背にパルチザンを担ぎ、左手に不死人と同じ塔のカイトシールドを携えていた。身に着け

ているものが多く、しかし先程見せた身のこなしは軽やかであり、鍊度か、或いは体幹に宿る力の桁は、常人の尺度で測るべきではないだろう。

観察を終え、間が残る。

異様なことであつた。敵は運悪く奇襲の機を失し、すればそこに残るのは二対一の状況であり、次の行動は逃走が定石だろう。だが牙猪の戦士はこちらを睨むような視線を送りながらナイフを仕舞い、パルチザンを構えると、信じ難いことに不死人へ向かつて走りながら突きを繰り出した。

やや強めの突きではあつたがそれでも人の膂力の内。不死人は塔のカイトシールドで難なくそれを防ぎ、その間に剣闘士は回り込むような軌道で駆ける。

明らかに背面を取ろうと動いている剣闘士に対応するかと思いきや、予想に反して牙猪の戦士は身体のを向きを変えないまま、二度目の突きを不死人に向かって放つ。鋭く、油断していれば膝を貫いていたかもしれない一撃は、しかしまたしてもこちらの塔のカイトシールドが阻み、そしてとうとう剣闘士は牙猪の戦士を背後から襲う。

## 第10章 3

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 3

血飛沫は飛ばなかった。彼等がまるで実体を持っていないかのような、光に包まれて  
いる存在だからだろうか、攻撃が届いたにも関わらず、不死人や亡者が傷付いた際によ  
うに血は零れることはなく、剣闘士がたたたらを踏む。

攻撃を届かせたのは牙猪の戦士であった。彼は一瞬で振り向きながら、その回転の勢  
いを乗せたパルチザンを振り、後背から迫る剣闘士の胸に浅い裂傷を作り出していた。

その技の早さは驚嘆に値するものであったが、生憎と不死が故に、そのように激しい  
心の起伏とは無縁の身の上である。よって身体の前後を入れ替えたことにより、今度は  
こちらに背を晒している敵対者へ、一瞬でも早く刃を届かせようと不死人はロングソー  
ドを振るう。

だが剣が届く直前、突如として視界を圧迫するように出現していた鈍色の光りは武器  
の穂先であり、やはり剣で斬り込むよりもパルチザンを返される方が早かったらしい。  
危うく顔面を切り付けられるところであったため不死人はのけぞるような姿勢となっ  
て回避行動を取り、自らの攻撃は中断せざるを得なくなる。

機を同じくして再び敵の背後が自分の前に巡ってきた剣闘士がグラディウスの一撃を与えようと前に踏み出すも、攻撃の意を起こすことで些細な隙を見せた彼の腹にパルチザンの柄の先が深く沈む。そのようにして牽制されたことにより、動きを止められた剣闘士は差し置かれ、牙猪の戦士はパルチザンを不死人に向けたまま、狙い定めた突きを打つ。

切っ先は盾を潜り抜け、不死人の右の脇腹を舐め上げる。突き刺さりこそしなかったものの、パルチザンという武器は刃の幅が広く、生まれた裂傷からは決して少なくない量の血が滴り落ち、すると右足から力が抜け、不死人は膝立ちのような状態となる。

無防備であり、これをフォロウするため剣闘士は牙猪の戦士を後ろから斬り付けようとするが、半身になった敵対者はグラディウスを左手の盾で食い止め、右手のパルチザンで不死人の頭部を突かんとする。

必死の思いで首を逸らすことによりなんとか致命傷は避けることが出来たが、パルチザンの切っ先は額の代わりに肩を強く穿ち、その際の衝撃により不死人は軽く吹き飛ばされ、地面に倒れる。

一時的に戦力として無力化されたこちらを他所に、牙猪の戦士と剣闘士は打ち合おうとしていた。あの敵と一対一で戦うなど、短時間であっても無謀であり、不死人は急ぎ復帰しようとエスト瓶に手を伸ばすが、しかし剣闘士は既に打ち合いに負けて蹴り飛ば



され、そうして余裕の生まれた敵対者は不死人の方へ向くと、まだ双方の間に距離があるにも関わらずパルチザンを構え、全身を弓としてそれを投げ放った。

対応するだけの時間は許されなかった。飛来したパルチザンは不死人の腹を深く貫き、痛覚は鈍くとも急速に全身の力が失われる感覚はあり、そして串刺しのままでは身動きが取れず、ここに追撃があるとすればそれは止めの一撃と化すだろう。

牙猪の戦士の、腰から下げられていたモーニングスターが主の右手に収まる。得物を変え、その強さで以て周囲を圧するような足取りでこちらに向かつて歩く敵対者は、やはり背後への注意は尋常ではなかった。後ろから音を立てずに接近した剣闘士にすぐに気が付き、グラディウスとモーニングスターの剣戟が始まる。

今度こそ復帰を急がなくては剣闘士も不死人もこの場に斃れる。痛みは鈍く、また体力の回復もエラストで行われるため躊躇いは余計と切り捨てると、腹を貫くパルチザンの柄を取り、それを強引に引き抜く。

血が零れ、臓物が裏返りながら溢れ出し、しかし構わずそのままの姿勢でエラスト瓶の中身を一気に喉に流し込むと、傷口が完全に塞がるのを待たずして立ち上がり、ロングソードを構えて詠唱を始める。

未だ剣闘士と剣を交えている牙猪の戦士の側面目掛けて放つは闇の玉。老人貴族の亡者や騎士の亡者が多用したものと同質であり、闇術の基礎に位置するこの術は、また

リングレイの怪異の先触れでもある。

短く断続的に続く破裂音が響くと、魔術師のロングソードの先から放たれた黒い玉は牙猪の戦士に迫り、あっさりと避けられてしまうが、剣闘士への助けとはなつたようだ。両者の間合いが開いた隙に不死人は剣闘士の下へ駆け寄り、隣に並ぶ。

絶えず戦いの音が響いていた牢獄都市の入り口に、しばらくぶりの静寂が戻る。

不死人と肩を並べる剣闘士は傷付いていた。致命傷こそ受けてはいないものの、右胸と左脇腹に一箇所ずつ、モーニングスターで打たれたのか凄惨な傷が出来ており、とても軽視して良いものではない。

翻つて牙猪の戦士は無傷。顧みるにこちら二人の攻撃は彼の身体を一度も傷付けておらず、そもそもが二対一ということもあり、異常なまでに卓越したブレイドアーツを持つた者であると言えるだろう。

しかしその一方で、優れた技と合致しない、不合理な敵の立ち回りが引つ掛かる。確かに、数の不利があるにも関わらず現状で優位にあるのは牙猪の戦士だが、まさか騎士の矜持も無かろうに、こうも堂々と姿を曝け出して戦うのは、最初に行つた不意打ちと矛盾する。

牙猪の戦士は襲撃者である。故に地形の把握は既に済んでいると見るべきであり、ならば最初の奇襲が不発に終わったとしてもこの場を離脱し、こちら側に先行して通路を

進み、影にでも潜んでいれば確実な有利を得ることが出来るだろう。

奥に進ませたくない理由があるのだろうか。

であればそれが突破口になる可能性はあるが、まさか無策のまま牙猪の戦士を無視して奥に走るだけでは余計に窮地に陥るが関の山。それならばこの要素は、すぐには働かさず頭の隅に置いておくに留めるべきか。

滲むような感覚で敵の攻撃の気配を掴む。これ以上考え込む時間は無く、不死人は魔術師のロングソードを腰の鞘に納め、背中のベルトに留めておいた聖職者のウオーハンマーを外し、それを構える。

やがて囲まれる懸念など意に介していないかのように、強気かつ無遠慮にこちらの間に合いに近付き、牙猪の戦士はモーニングスターを振りかぶる。しかしそのタイミングはやや早く、そのまま武器を振ったところでこちらに届くかどうか怪しい距離であり、なにもせず時を送るとやはりモーニングスターは不死人の目の前を通り過ぎていく。

得物を振り抜いた後の隙を牙猪の戦士は晒し、だが銀の兜の奥にある目には迷いが見られず、ここで攻撃してはならない、と直感が告げるも、それは剣闘士にとつては違つたようだ。彼はモーニングスターが空振った直後、すぐに詰め寄ってグラディウスを振り上げる。

牙猪の戦士は盾を構えず、回避すらしなかった。故に剣闘士はそのまま剣を敵対者の

頭部目掛けて打ち込み、しかし予想より銀の兜は厚く頑丈であったか、グラディウスは易々と弾き返され、同時に牙猪の戦士の方から更に間合いを殺し、剣闘士の足に自らの足を絡めて取り、捻ると地面に転倒させる。

背を強かに打ち付け地に転がった上、牙猪の戦士の足で動きを封じられた剣闘士が劣勢にあることは明らかであった。すぐに援護する必要があるが、不死人は聖職者のウォーハンマーを敵の側面へ薙ぎ、しかし魔術師のロングソードよりも重い一撃は牙猪の戦士の盾に容易く受け止められ、即座に反撃のモーニングスターがこちらに迫る。

それを塔のカイトシールドで受け止めようと前面に出して構えるも、盾の正面が敵からの攻撃の打点となる筈が、直前でモーニングスターの軌道を調整したのか、盾の上の方の縁を強く叩かれ、想定外の重さの掛かり方によって姿勢を崩しかける。

つんのめり、ふんばりが利かないその姿勢の状態に、牙猪の戦士の膝蹴りが打ち込まれる。身体の芯を叩き折るような衝撃が突き抜け、不死人の身体は吹き飛ばされるが、時間はそれなりに稼ぐことが出来たようだ。剣闘士は寝転がったまま剣を取り直し、敵対者の足首を狙って一閃する。

だが戦士としての直感なのか、それとも予見していたのか、牙猪の戦士は少し身体を引くだけで剣闘士からの攻撃を躲すと、彼の顔を蹴り上げ、怯んだところにモーニングスターの一撃を腹へ落とす。

やはり血が出ることはなかった。しかし剣闘士の負傷は明らかに甚大なものであり、追撃を止めさせるため、不死人は駆け出した勢いのままにウォーハンマーを左から右へ振り抜き、牙猪の戦士を強襲する。

風を巻き上げ異音を発し、聖職者のウォーハンマーは対敵に迫るも直撃とはならず、まるで簡単に回避されてしまったものの、その際牙猪の戦士が横に大きく飛んだことにより、腹に一撃を貰ったばかりの剣闘士の安全を確保するという目的は果たせた。

重い一撃であったのだろう、剣闘士はすぐに起き上がれる状態になく、不死人は前に踏み出し、協力者が回復するだけの時間を稼ぐべく牙猪の戦士に向かつていく。

聖職者のウォーハンマーは未だ真価を発揮していない。これを担ぐように構え、敵の様子を窺いながらにじり寄る。そして敵対者が間合いに入ると同時、全ての力を注ぐつもりで振り下ろし、高速の一撃を放った。

## 第10章 4

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 4

確かにそれは速い攻撃であつたため、相手は回避出来ず、しかし防衛を崩すには至らないばかりか、塔のカイトシールドで不死人の攻撃を受け止めた牙猪の戦士には、まだどこか余裕が見えた。

脇腹に鋭い衝撃が走る。それは予告なく訪れたものであり、見れば相手のモーニングスターが突き刺さり、肉を抉つてしまつていた。牙猪の戦士は左手の盾でこちらのウオーハンマーを防いだ上、右手のモーニングスターを打ち込んだきたらしいが、普通の人間では到底及ばないような持久力である。

衝撃に負け、不死人の身体がよろける。敵対者にしてみれば絶好の追撃の機会だが、そうさせまいと向こうから駆けてきた剣闘士がグラディウスで斬りかかり、その攻撃を牙猪の戦士は身体の向きを反転させながら塔のカイトシールドで受け止める。

この隙に不死人は地を踏み締め、なんとか態勢を立て直すと手から落ちかかっていたウオーハンマーを取り直し、こちらに右側面を向けたままである牙猪の戦士目掛けて振り抜く。

すると水中の魚がそうするくらいの軽やかさで牙猪の戦士は翻り、身体の向きを入れ替えながらその際の回転エネルギーを乗せた左手の盾で不死人の槌を大きく弾き返し、逆の手に持ったモーニングスターで剣闘士の肩の肉を抉り取る。

瞬間的に牙猪の戦士によって二人とも身体の動きを止められ、まず剣闘士が追撃として蹴りを入れられて吹き飛び、地面を転がっていくと、次に敵対者は不死人に向き、振りかざしたモーニングスターを頭目掛けて打ち降ろす。

盾でウォーハンマーを弾かれた直後は反動から身体が硬直していた。しかし相手が剣闘士に追撃した際の僅かな時間の内に余韻が消えていったため、瀬戸際で身体の制御を取り戻し、不死人は塔のカイトシールドで頭部を覆う。

だが左手に持った盾には何ら衝撃が来ることはなかった。何が起き、何をすべきなのかを理解するよりも前に牙猪の戦士のモーニングスターはカイトシールドの守りを潜ってこちらの腹を打ち、続けて下から掬いあげるように箇所へ打撃が打ち込まれ、出血しながら吹き飛ばされる。単純な陽動であったようだ。

その攻撃の威力に任せるまま遠くまで飛び、不死人は地面に身体を打ち付けて止まる。無防備を晒した状態となるが剣闘士が駆けていく音を耳にし、彼が入れ替わりに牙猪の戦士へ立ち向かうらしいため直ちに追撃される心配は無いと知る。

地に伏せ、エスト瓶で回復しながら思う。追い詰められている、と。

敵対者は比類なき技により、こちらを分散し、合流するまでの僅かな時間の内に傷を負わせ、助けに来た者と一時的に引く者とを代わる代わる一対一で相手取っている。現状、不死人と剣闘士は数の有利を生かせておらず、この調子が続けば負債は膨らみ続けるため、敗北か撤退を認めないのであれば戦術の転換が必要だろう。

地下空間に鈴の音が一つ鳴る。やや気位のある聖鈴の音色は聖職者のウォーハンマーから発せられたものであり、まだ完全に傷の癒えていない不死人は片膝立ちで祈るような姿勢のままこれを構えて詠唱を始めるも、その頃剣闘士がモーニングスターで打たれ、吹き飛ばされていく様子を視界の端で捉える。更に彼は地面を転げ回り、そしてグラディウスが手元を離れ、金属の甲高い音を立ててどこかへと飛んでいく。

惨たらしく傷付いた剣闘士の身体は、最早戦闘に堪えるものではない。阻む者の居なくなつた牙猪の戦士は駆け出し、あつという間にこちらの眼前にまで迫り、手にしたモーニングスターを振り上げようとしていた。

その瞬間、詠唱が完全なものとなる。不死人の足元から黒い水溜りのようなものが広がり、そこから黒い柱がいくつも吹き上がると術者の周囲で炎のように揺れていた。

それは周壁内部に籠もる、牢の中の男より学んだ、奇跡の媒体を通して発動する闇術の一つ、生命の残滓と呼ばれるものであった。詠唱の動作が奇跡による回復のそれと酷似しており、つまりこれは王城の騎士が用いた詐術の再現となる。



しかしこの地で使われる魔法の一通りは把握しているのだろうか、自らの傷を晒した不死人の罾を牙猪の戦士はまるで見透かしていたように攻撃する直前で足を止め、生命の残滓が生み出す黒い霧の柱に打たれることのないよう、そこから十分な距離を取っていた。どうやら時間経過によってこの術が終わるのをそのまま待つつもりであるらしい。

黒い霧の柱は未だ枯れず、不死人の周囲で踊っているがそれは長く続くものではない。これが消える前に次の策を講じなくてはならず、急ぎ聖職者のウオーハンマーを構えて詠唱を始めると、やがて生命の残滓が完全に失われると同時に、それは完了した。

こちらに向かつて歩き出そうとしていた牙猪の戦士の前で、力を纏った聖職者のウオーハンマーを地面に向かつて振り下ろす。

地面を叩いた槌頭は鈍い音を発すると共に光を漏らし、それは小さな白い文字となつて散りながら足元を駆け巡り、牙猪の戦士の身体を這い上がって動きを縛りつけていた。

一時的な平和。これもまた聖鈴で発動する術ではあるが、闇術には分類されず、牢の中の男が元々知っていた奇跡の一つである。自身を中心として五歩分程の半径の中の敵の動きを一瞬だけ止めることが可能であり、それは非常に強力な効果ではあるものの、難点が二つある。

一つは詠唱に時間を要することであり、もう一つは試していないため真偽の程は定かではないが、味方である剣闘士が近くに居る場合、彼の動きをも拘束してしまう可能性が存在したことであつた。このため、一時的な平和はこれまで使うことが出来ず、同じ理由で生命の残滓もまた使用を控えていた。

だが牙猪の戦士はこれもまた見抜いていたのか、動きを止められる直前に大きく飛び下がり、それによって生じた距離は想定外に長く、不死人は一息で攻撃を届かせることが叶わず、また今から詰め寄り斬りかかったとして間に合わないだろう。

初めて行使したその術を上手く扱えず、無為な結末しか引き寄せなかつたようにも見えたが、第三者にとつてはそうでもない。身体中を負傷しながらも全力で走る剣闘士は武器すら持たずに牙猪の戦士に飛び込み、まだ拘束の効果が残る相手の身体を両腕で抱え込むと、その後も勢いを衰えさせることなく走り続け、やがて両者は通路の横に外れて空中に放り出され、そのまま下の階へと落下していった。

彼等を追つて不死人は下の階層が見える通路の端にまで駆け寄り、降りずに上からそこを覗くと、姿があつたのは牙猪の戦士のみであつた。剣闘士はおらず、敵対者によつて更に下の階にでも突き落とされでもしたのだろうか。満身創痍の彼では抵抗しようもない。

一対一、上と下とで睨み合い、しかしそれは、鈍い大きな音で中断された。

巨大な鐘を叩くような音が牢獄都市全体に響き渡っていた。それに伴って、鐘の音にまるで共鳴するかのようになり、牢獄都市の至る場所で凄まじい数の亡者達の呻き声や泣き声、或いは悲痛な叫びらしきものが上がり、更にはこの巨大な地下空間のどこかから滝のように、豪快に水が流れ落ちるような音が鳴り始めると、亡者達の声は一層強まってくる。

どうやら水は牢獄都市の底の方の階から溜まりつつあり、程無くして水位は更に上昇し、やがて牙猪の戦士が居る階にまで及ぼうとしていた。彼が不意打ちを繰り返す戦法は取らず、牢獄都市入り口での戦闘に拘ったのは、これが理由であったのだろうか。そうだとするなら不死人の今居る場所は安全だが、敵対者の居る階は違う。

銀の兜の昏い二つの孔がこちらを見詰めていた。恨みがましいか、苛立たしげか、そのような態度を取ることもなく、彼は自然な動作で懐から黒い水晶を取り出す。そして片膝を折って祈るような姿勢で水晶に力を込めると、牙猪の戦士の身体は透明になり始め、水が上がって来る前には完全に消えていた。

恐ろしい敵であったが、これで完全に決別出来たのだろうか。この先でまた出会わないという確証は無く、だが備えるのは難しいだろう。二度とは見ないことを祈るのみである。

しばらくそのまま水位の上昇を観察していると、水は不死人が居る階のすぐ下にまで

上がったところで流れが止まり、淀み始めた。また先程まで騒がしかったこの地下空間は、今は妙に落ち着いた空気になっており、その原因は亡者達の声が全て途絶えているからなのだろう。彼等は皆、水の中に沈んでいるのだ。

このままでは牢獄都市を探索するにあたり、入り口と同じ階層しか立ち入ることしか出来ず、それより下の水で満たされた階へ行くのであれば、どうにかして水を抜くしかない。だがその手段を考えていた矢先、淀んでいた水は少しずつ動きを再開し、徐々に水位が下がり始めた。

## 第10章 5

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 5

水を入れたり抜いたりしたのには、一体何の意味があつたのだろうか。ともあれ先へ進むことが可能になつたらしいため、不死人は牢獄都市入り口から見て左右から広がる通路の、右を選んで進んでいくことにした。

しばらく真つ直ぐ歩き続け、しかし景色は代わり映えしやうもなく、特に目を引くものも無い。通路の右には濡れた岩肌があり、左には果てしなく下へ続く空洞と、今はそこから引きつつある水ばかりが目に入る。

更に進むと通路は直角に左へと折れているようではあつたが、その先には鉄の柵が設置されており、それ以上進む事は出来ない。柵には扉が付いているようだが、向こう側から施錠されているらしく、これが開くことはなかつた。引き返す以外に選択肢は無いが、このままなにもしなければ無駄足であるため、柵の隙間から向こう側を覗き込み、その様子を観察する。

亡者、なかどうかも分からない、遠くに人影が二つ、何か大きな棒のようなものが付いた装置の前に並んでいた。装置の正体は不明であり、人影もあまり細かい部分まで

は判別出来ず、どうやら彼等が黒い服を着て暗がりには佇んでいることもその一助となっているようだ。

現状で分かる範囲での観察を終え、不死人は踵を返す。来た道を戻り、そして牢獄都市入り口を通り過ぎ、そのまま直進していくと、先程と同じくらいの距離を歩き終えた頃、今度は通路が右へ直角に折れている場所に差し掛かる。

そこには道を塞いでいるようなものは置かれていなかった。曲がり角ではあるが、右に壁は無く広大な空間が存在するのみであるため特に直角に注意を払うこともなくそこを越え、さらに真つ直ぐ進んでいくと、程無くして通路の右端に下へ降りていく階段を見付ける。

迂闊に下の階へ行けば、急に上がってきた水に飲み込まれるのではないかという懸念があった。だが階段を降りずに通路を真つ直ぐ向かった先に目を凝らすと、どうやらそこにも鉄の柵が設置されており、先へ進むことは出来ないのだろう。従って、この階段を使う以外、先に進む道は無いということになる。

水に触れたばかりで湿った、やはり石を削りだして造られた階段を降りていく。するとほんの数段降りただけで、階段を含む、地面の様子がそれまで居た場所とは一変し、またその変化を感じ取ったのは視覚よりも足の裏の触覚が先であった。

地を踏み締める度、大小様々な凹凸がそこにあった。正体を確かめるべく足元を注視

すると、階段より下の地面にはフジツボの一種と思しき貝類が敷き詰っており、その他にもまるで人間の長い髪のような細い海草が群生していた。

つまりここに流れ込んで来る水はただの水ではなく、海水であるのだろう。この牢獄都市がどのような構造であれ、リングレイの北は海に面しており、そこから海水を入れる事は決して不可能ではない。

潮が運ぶその生物達が所狭しと並ぶ様は見た目が悪く、大抵の者が嫌悪感を催すだろうが、先を急ぐ不死人にとっては瑣末なこと。階段を降りて下の階に至り、周囲を観察する。

そこは一階と同じように右が空洞、左が壁の通路ではあったが、壁の側には一つ一つが狭く造られた牢が並んでおり、それは視線が闇によつて途切れない限りずっと続いているようであった。

やがて不死人は歩みを再開する。

水気の籠もった足音を立たせながら通路を道なりに進み続け、時折左に並ぶ牢の中で亡者達が咳き込み、吐き戻し、嘆く姿が目映る。海水に沈められたせいなのだろう、いずれも相当に苦しんでいる様子である。

そして阿鼻叫喚の牢が並ぶ先、通路の奥に牢の外に居る者の姿を不死人は見付ける。それは黒いローブを着用し、虜囚でない筈が何故かその上から鎖と錘を巻きつけ、また

熱心に牢の中で苦しむ亡者の姿を観察していた。

こちらに気が付いたのだらうか、それが振り返り、顔の正面が向く。濁った色の水晶のような目玉が二つ、顔面の八割を占める大きさのそれがまるで頭の上を見ているかのような向きで付いており、その下には細長い歯を並べ、笑みを浮かべるように端を吊り上げている小さな口が一つあった。

「ほう、ほうほうほう」

人としての原型を大きく損なつた怪異、牢獄都市の看守は不死人を見付けるや否や、大きな泡が水の底から湧きあがる際の音のような声で鳴き、右手に持つ草刈鎌の柄を長くしたような武器を軽く振り上げる。そしてそれを上で静止させたまま口元に泡を立て、その後振り下ろした武器の先は不死人に向いており、そこから黒い塊が飛び出す。老人貴族やロングソードを扱う王城の騎士、そして不死人も使う闇術である闇の玉と目の前で敵から飛び出した黒い塊は酷似していたが、それよりも痩せ細っており、飛ぶ速度も遅かった。見切つて避けるに何ら問題は無く、黒い塊が一定の距離に近付いてきた瞬間、横に飛んでやり過ぐす。

だが衝撃に見舞われ、吹き飛ばされた不死人は牢の一つに叩きつけられる。

その特性は予想に無いものであった。黒い塊はこちらが回避した直後、標的を追尾し、身体の側面に直撃したようだ。今回は牢に打ち付けられるだけで済んだが、仮に反



対側に避けていたとすれば空洞の側に吹き飛ばされ、底へ向かって落下していたらう。

牢の柵に手を置き、身体の姿勢を整えながらエスト瓶で傷を癒す。どうやら今の敵の魔法は旋回性が高いため回避が難しく、また防御するにしても闇術特有の重さがあり、下手をすれば盾ごと押し込まれかねない。

厄介な攻撃であり、このような手合いにはこちらも魔法を使用して対抗するべきだろう。

不死人は魔術師のロングソードを鞘に仕舞うと背中中のベルトに取り付けていた聖職者のウォーハンマーを取り、それを構えると詠唱を始め、完了するとウォーハンマーで塔のカイトシールドの縁を軽く叩いた。

魔力は塔のカイトシールドの表面を走り、飲み込んでいく。それを横目で確認すると、不死人は盾を構え、牢獄都市の看守に向かって走り出した。

「ははっ」

耳朶にまとわりつくような鳴き声を発しながら看守は口元で泡を立たせ、鎌の先をこちらに向けてと先程と同じようにそこから黒い塊が飛び出す。不死人はそれを避けようとはせず直進すると、衝突する直前で盾を前に出す。

衝突の瞬間、翳した塔のカイトシールドの、表面に広がっていた黒い煙のようなもの

が牢獄都市の看守によって撃ち出された闇を軽々と弾いていた。

これは歪曲の盾。闇の盾と同じような発動の仕方の術であり、防御した魔法を一度だけ弾くことが可能な、奇跡の触媒で行使する闇術である。

敵の魔法を不発にした不死人はここから一気に勝負を畳み掛けようと、さらに足を速めて牢獄都市の看守に接近を試みようとし、だがその瞬間敵はもう一度口元で泡を立たせ、鎌を振っていた。

敵の動作は黒い塊を飛ばす魔法の詠唱と思しく、それはあまりにも早過ぎた。非常に高性能の魔法であったため、続けて使えるようなものではないと踏み、突撃していたが、その予想はあっけなく裏切られる。この時点からではこちらも詠唱を始め、もう一度歪曲の盾を付与しようにも間に合わず、向こうの黒い塊が着弾する方が早いだろう。

ここに至っては腹を括る他にない。不死人は引かず、今にも詠唱を終える看守との間合いを詰めようと全力で走り、だが武器の殺傷圏内に敵が収まる前に黒い塊が放たれる。

回避は難しく、であれば防御しか選択肢が無いため、不死人は黒い塊を塔のカイトシールドで受け止めるが、予想を遥かに上回る重さは気力で堪えられるものではなく、成す術なく盾ごと吹き飛ばされてしまう。

これにより敵との距離がまた開き、しかしここに追撃される可能性もあるため、迅速

に起き上がって牢獄都市の看守を見据える。

「ぼぼぼぼぼつ、ぼぼぼぼつ、ぼぼぼつ」

嘲笑っているのだろうか。牢獄都市の看守は魔法を詠唱するような素振りを見せず、口元に泡を滴らせるばかりであり、不死人はこの僅かな時間を最大限活用するべく聖職者のウォーハンマーの聖鈴を鳴らして詠唱し、塔のカイトシールドの縁を叩いて歪曲の盾を用意する。

そして牢獄都市の看守に向かって一直線に駆け出すと、それに合わせて相手も詠唱を始め、フジツボの付着した武器をこちらに向ける。

この時点で既に先程こちらが仕掛けた時よりも距離は近く、やがて放たれた黒い塊を歪曲の盾を用いて弾き飛ばすと、残り七歩程詰めるだけでウォーハンマーは看守に届き、それは相手が再び黒い塊の魔法を撃つよりも早いだろう。

## 第10章 6

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 6

いよいよ互いの距離は至近となり、不死人は聖職者のウォーハンマーを振りかぶった。だがそれが威力を成して敵に命中する直前、牢獄都市の看守はそれまでの詠唱と違ひ、右手に持つ草刈鎌のような武器を軽く捻るような動作をしてみせると、ローブを着た胴の中心から瞬間的に黒い球体の膜が膨れ上がるように出現し、不死人の身体に触れると強い衝撃を齎した。

だが横方向へ吹き飛ぶのかと思えば、その術は上から下へ、頭部や肩、背中などに凄まじい重さを掛けるものであり、不死人は牢獄都市の看守から距離を取ることすら許さず、無防備な姿を晒してしまう。

「アハハ」

牢獄都市の看守が短く鳴き、気付けば不死人は草刈鎌のような武器で脇腹を刺されていた。そしてそれだけで終わらず、刺されたままの状態で引つ張り上げられ、次に引き倒され、地面を引き摺られてフジツボで身体を削られた後、少し遠くへ投げ捨てられる。尋常ではない出血量に意識が遠ざかっていた。鎌で刺された箇所よりも地面のフジ

ツボによって負った傷の方が深刻であり、広い範囲に渡って皮膚を引き千切られたため、夥しい血が失われつつある。

感覚の乏しい手でエスト瓶を掴み、完全に斃れる前に何とか中身を口に流し込んで緊急止めながら、今の一連のやり取りを反芻する。

敵が最後に使ってきた魔法は隠し玉として良い働きをしたが、対処が不可能という訳ではない。身体の中から形成される球体はそこまで大きいものではなく、いくら瞬間的に展開されるとは言え、事前に予測さえ出来ていれば回避は可能である。

やはりもう一方の魔法、黒い塊を飛ばす術こそ対処が難しく、先程は走り始めた際の距離が短かったため相手に接近することが叶ったが、今は遠く離れているため、ここから詰めるのであれば最低二回は黒い塊が向かってくることになる。

歪曲の盾で弾くには連射性能が高く、防御すると吹き飛ばされ、回避すると追尾される。欠点らしい部分は無く、強いて言うなら旋回能力の関係か、発射された後の飛翔する速度が遅めである点であり、これを利用して飛んでいる最中の黒い塊に何かを接触させれば無力化出来るかもしれないが、実現には当てる物体が必要とされ、不死人はそれを持ち合わせていない。

溢れる思考の中に決定的な要素は見付からず、だが不死人はその内のいくつかに閃きを見出す。回避、旋回能力、接触による無力化。これらの要素が想像の中で組み合わせ

り、ここに策が生まれる。

未だに余裕を見せ、追撃を仕掛けようとしないう牢獄都市の看守を横目に、不死人は聖職者のウォーハンマーで詠唱を行い、それが整うと敵に向き直り、歩き出す。

一步二歩と進む度に徐々に勢いが乗り、歩くほどの早さから小走りへ、そして看守が詠唱し、黒い塊が発射された瞬間、駆け出した不死人の速度は最高潮に達する。

黒い塊と不死人。互いへと向かっていく両者の距離は一気に縮まり、やがて激突するかという刹那、その段階にあつても防ぐ事も左右へ避けようとしなかつた不死人は、素早く前に飛びつつ転がった。

すると黒い塊は一度不死人の上を通過し、直後に標的を追尾しようとして下方へと曲がるものの、その先にあるのは地面であつた。フジツボと海草の床に衝突し、黒い塊は霧散する。

諸々を数値化出来ないため、実際に出来るかどうかは自身の感覚で判断しなければならなかつたが、試みは成功したようだ。追尾性能に優れるとは言え、旋回速度や旋回する際の角度に限界があれば、黒い塊は今のような回避行動を取られた場合曲がり切るこゝとが出来ないらしい。

正解の対処を見付け出した不死人は前転から勢いを殆ど殺さずに起き上がり、そのまま走つて牢獄都市の看守に迫る。敵は再び口元に泡を垂らし、鎌を振つて黒い塊を飛ば

すも、一度避け方を覚えてしまえば再現が難しいということではなく、もう一度前転して躲し、するとあと数歩でこちらの間に相手に相手が収まるという所まで接近することが出来ていた。

手首を捻って発動する魔法を警戒する必要は無かった。不死人は接近し切る直前にウオーハンマーで地面を叩くと、一時的な平和の効果を周囲に広げ、牢獄都市の看守の動きを封じていた。

それから詰め寄り、まず相手の態勢を完全に崩すべく聖職者のウオーハンマーを相手の足目掛けて振り抜き、後頭部から地面に落とす。そして間髪入れず、両手で握り締めたウオーハンマーを高く掲げると、直後に敵の顔面へと向かって振り下ろした。

「ぐびびっ」

それは鳴き声ではなく、内臓が粘膜が含んでいる体液が外に迸る音であった。牢獄都市の看守は見るからに大きなダメージを頭部に負い、しかし用心のため不死人はもう一度ウオーハンマーを振りかぶり、叩きつけた。

巨大な目玉が二つとも弾け、中に入っていた黄色い液状の何か撒き散らされると、フジツボに吸われて消えていく。異形の看守は、最早二度と動く事は無かった。

この看守も、元は人であったのだろうか。嘲笑う仕草などには人間の面影があったが、だとすれば何故このように異様な姿へと変わったのか。

単に変異を強要されたにしては、おそらくこの姿は海水が満ちて引くこの場所に適しており、虜囚とは立場の違いが明確にある。だが仮に病院に居た患者達のようにこれが同意の上での変異であつたとして、看守となるためだけに姿を変えたのだろうか。あまりに取り返しのない形態のように見受けられるが。

軀を検分したところで正体は分からず、だがそうして経過した時間が戦闘で猛つていた気を落ち着かせた。探索を再開しようと一步を踏み出し、しかしその時左の壁にある牢の一つで何か動き、物音が立つ。そちらに顔を向けたところ、亡者が一匹、牢の柵をやせ細つた両手で掴み、虚ろな目で不死人を見ていた。

「なあ、頼む、あんた」

彼の言葉は弱々しいものではあつたが、しつかりと言葉の体を成しており、それだけで正気を保っているといふと決めつけるのは早計だが、完全に失っている訳でも無いようだ。

「レバーを壊してくれ。溺れるのは、とてもくるしい。もう、いやなんだ」

海水で湿っているにも関わらず、その唇は乾いて割れ、そして震えていた。

「せめて、死ぬことさえ出来たなら、全て、夢の泡と消えるのに」

不死の人々の願ひは大抵が死ぬことだろうが、ここに閉じ込められた者達はそれを奪われた挙句、水死による想像を絶する苦痛と恐怖に延々と苛まれている。故に彼はなによりも優先して海水が入って来ることが無いようにして欲しい、という意味を込めてレ



バーとやらの破壊を懇願しているのだろう。

どちらにせよこの牢獄都市にまた水が注がれるようなことがあつてはこちらも溺れてしまうため、この亡者の言うレバーは破壊する必要がある。不死人は亡者に向けて了解の意を示す手振りをして見せると、牢の前から立ち去り、再び通路を歩き始めた。

そこからまっすぐ進んでいくと通路は右に折れており、そこを曲がってからまた道なりに進むと更に下へ降りるための階段を見付ける。牢獄都市入り口を一階とするなら、現在が地下一階、下に降りれば地下二階となる。牢獄都市の一番底まで、果たしてあとどれほどの階層があるのだろうか。

海草が折り重なることにより柔らかな感触を足に伝える階段を降りていくと、次第に周囲の明るさが失われつつあった。それもその筈で、一階より下は水が入るため松明等を設置出来ず、上からの灯りに頼る他無いため、そこから遠ざかれば暗くなつて当然だろう。

程無くして階段を全て降り、地下二階に到達すると、何か重い物を引き摺るような音が不死人の耳に届く。物音のする方へ首は向き、そして目はこちらに向かつて歩く一人の牢獄都市の看守の姿を捉えた。

## 第10章 7

第10章 牢獄都市 潮打ち 7

「おぼぼっ」

敵は既に不死人を発見していたようであった。口元から泡を溢れさせ、こちらの準備が整うより先に鎌を振り下ろし、黒い塊を放つ。

長く尾を引きながら黒い塊は不死人へ迫りつつあり、だがそれを避けること自体はさして困難ではない。決め兼ねているのはこれを躲した後のことで、現時点で既に黒い塊を放たれているため詠唱を行う暇が無く、前回の戦いで切り札にした、一時的な平和を接近してから浴びせる、という流れを作り出すことが出来ない。

しかしそうして逡巡している間にも時は流れており、黒い塊が至近となったため、不死人は地面を転がりこれを回避、そして前転から立ち上がりながら聖職者のウォーハンマーを握り締め、一時的な平和の詠唱を行おうかという矢先、牢獄都市の看守が先に詠唱を始め、口元が泡立つと黒い塊が発射される。

今の半端な距離のまま居た場合、牢獄都市の看守の詠唱は不死人の行使可能な術の詠唱にいずれも速度が勝っているため、魔法合戦とはならず、ただ一方的に攻撃される

ことになるだろう。そして飛んでくる黒い塊を必ず避けられるとは限らず、ごく些細なミスが窮地に繋がり易い状況でもある。

引くべきか出るべきか。どちらにせよ今の位置から移動しなければならず、よつて不死人はやや強引ではあるものの踏み込むことに決め、黒い塊を前転で回避した直後に駆け出し、牢獄都市の看守へ向かって行く。

敵が不死人の手の届く範囲に入り、いざ攻撃を仕掛けようとウォーハンマーを大きく振り上げ、だがその姿勢を取った直後に大股一步分の距離を後ろに飛ぶと、機を同じくして牢獄都市の看守は鎌を持った方の手首を軽く捻り、身体の中から黒い球体の膜を出現させた。

球体は触れた者による拘束効果を發揮するが、今回は被害者が居なかった。敵のカウンターを見切ること成功した不死人は、球体が完全に消失したのを見届けてから左足を軸に右足から踏み込み、体重を乗せた聖職者のウォーハンマーの一振りを看守の頭部目掛けて放った。

「アッー」

固めた呼吸を吐き出す音は、泡が噴き出す様子も相まっておぞましく、しかし翻る鎌の舞いはまるで人の剣術のように洗練されていた。煌きの鋭さとは裏腹にフジツボだらけの鈍い刃がウォーハンマーの一撃より何倍も早く不死人に迫り、胸元を浅く切り裂

いて攻撃の姿勢を潰す。

単純な攻撃速度で負けてしまっていた。血が胸から数滴落ち、軽くたたたらを踏んだ不死人は後ろに下がろうとするが、再び迫る牢獄都市の看守の武器がそれを許さなかった。

あたかも複雑な文字を一瞬で書くが如く、牢獄都市の看守は鎌で不死人の胸元を素早く何度も斬り付ける。描かれたそれぞれの裂傷は浅いものの、攻撃の回数が多いために溢れた血は多く、何とか後ろに下がって距離を取る頃には、瀕死に近い状態に陥っていた。

回復して仕切り直さなければ後が無い状態で戦うことになるため、この情勢では更なる後退が必定だが、その考えは急にこちらに向かつて駆け出しながら鎌を振り上げる看守を前にしては改めざるを得なかった。下がったところで危うい。

まだ新鮮な胸元の傷口を狙って牢獄都市の看守は鎌を振るい、その動作に呼吸を合わせて不死人は塔のカイトシールドを打ち当てる。腕に走った衝撃が身体にまで伝わり、一瞬全身が硬直するが、敵はこちら以上に武器を弾き返された反動で姿勢を崩していた。

聖職者のウォーハンマーが看守の腹を打ち抜く。これによって敵が身体を折り曲げると、不死人は下がってきた相手の頭部を左手で掴み、振り下ろしたウォーハンマーで

頭を殴って地面に押し倒した上、馬乗りになりながら両手で構え直した武器を、牢獄都市の看守の顔面に叩き付けた。

膿のような液体が大きな目玉から飛び散り、牢獄都市の看守は最後に痙攣したきり動かなくなる。

この敵は魔法に優れるばかりか、剣術の使い手としても長けており、一度はそれにしめてやられたが、二度目は見切ることが出来たようだ。エスト瓶で身体の傷を癒しながら戦いで帯びた熱を冷ましていく。

念のため他に敵が居ないか周囲を見回し、すると敵ではないがその場から見える牢の一つで亡者が鉄の棒に張り付き、こちらに笑みを向けながらじつと見詰めていた。狂っている、そう直感する。この地では無理からぬことだ。

「ああ、この世で一番暗い場所はどこだか、知っているかい？　夜の森？　それは朝を待てばいいだろう。洞窟の中？　火を持ち込めばなんとかなるさ。正解は海の底だよ。昼夜を通し、火を灯せず、海の底は永遠に暗いのさ」

暗喩と思しき亡者の言葉は具体的な意味を伴ってはいないのだろう。しかし偶然かもしれないが彼の言葉はこの地に蔓延る影を想起させるものであり、不死人はそれを迂遠な忠告の一つと捉え、返事はせずにその場を後にする。

地下二階に降りたばかりのこの場所は通路を前進しようとその逆を行こうと、両端に

柵が設置されているため探索出来る場所が限られていた。またこれまでのように下に降りるための階段も無いが、代わりにずっと上へ高く続く梯子が一つ、不死人のすぐ近くに架けられていた。

梯子に近付き、上を眺める。それは現在地である地下二階から始まり、地下一階を過ぎ、その上の一階すら通り越して上へ向かって伸びているらしい。他に行く道も無く、不死人はこの梯子に手足を乗せ、上へと登っていく。

一人分の体重が掛かった程度では金属製の梯子が揺れることはなかったが、海草とフジツボはここにも版図を広げているため、決して安全に使用出来るものではない。従って登るには時間を掛ける必要があり、だが幸いにして無防備な最中に敵がどこから出現することもなく長い梯子は終わる。

牢獄都市入り口と同じ階層よりも少し上となるこの場には、壁の横から生えているかのような木の板が数十枚と組み合わさることによって道が造られ、それは左右へ激しく曲がりくねりながらもどこかへ続いているようであった。

はじめに梯子から木の板の道へ移り、そこへ足を乗せて感触を確かめる。多湿な環境のせいか、木の板もそれを支える壁から伸びた鉄の支柱なども不死人の体重が乗ったとして埃が落ちることはなく、あまり音も鳴らないようだ。

思いがけず隠密に行動出来るのは僥倖であり、不死人は木の板で出来た道を進むべく

そこから一步を踏み出そうとすると、そのとき道の先の暗闇で耳に覚えのある音が微かに響く。鉄の鎖が絡み合い、或いは引き摺られるその物音は、つまりそこに牢獄都市の看守が居る証であつた。

この木の板で出来た道は狭い。こちらに向かつて飛んでくる黒い塊を避けるにしても、接近した際に瞬時に展開される黒い球体の膜を躲すにしても、また鎌の連撃に対処するにせよ、いずれに置いてても不利であつた。だが戻ろうにも引き返すには梯子を使わなければならず、今からこれを降りようものなら無防備なところを黒い塊で撃たれ、遠く下の地面に向かつて落下してしまふだろう。

「んぼぼぼぼっ」

不死人を発見した牢獄都市の看守は溺れる者のような声を発し、早速詠唱を始めたようだ。執拗に遠距離魔法を放つのがこの敵の特徴とは言え、こちらの準備が全く整っていない状態でもそうするのは流石に容赦が無い。

黒い塊が生まれ、こちらに向かつて伸びていた。これを不死人は前後には移動せずその場で待つてからタイミングを合わせ、木の板の上で前転してやり過ぐすと、すぐさま詠唱するために武器で構えてはみるが、牢獄都市の看守は既に次の詠唱を開始していた。この状態で詠唱の速度を競つては大差をつけて敗北し、次に迫る黒い塊は詠唱中の身に直撃することとなるだろう。

構えを解き、回避のための姿勢を取りつつ敵に勝つための算段を立て始める。

最たる問題は詠唱を行い、得物に付与を行う時間が無いことである。牢獄都市の看守は接近された際の迎撃にも優れているため、何らかの備えを携えてから挑まなければならないが、間断なく迫る黒い塊がそれを許さないだろう。確かに、向こうは乱発しているだけで勝てる見込みが高い。

最初に出会った看守のように、油断してこちらを嘲りでもすれば、その隙に詠唱の間を確保出来そうなものだが、この相手はそういった素振りを見せない。

時間を作りだせるか否か、この一点で勝敗は決する。飛来する黒い塊を躲しながら、より焦点を絞って思考を深めていく。



## 第10章 8

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 8

まずは前提を整える必要があった。相手が発射した黒い塊が標的に到達するまでの時間を仮に四拍として、こちらは四拍目に回避行動を取らなければならず、敵はそれほどほぼ同時に次の詠唱を開始する。これが連射の限界速度であり、また敵が詠唱に要する時間は一拍といったところだろうか。

それを例えば相手が魔法を放った一拍目の瞬間にそこその質量を持つ何かを投げ、黒い塊に当て、その空間で炸裂させることが出来れば余った時間である残り三拍と、そこで詠唱する為の一拍、更には次の黒い塊がこちらに到達するまでの四拍、合計で八拍の時間を稼ぐことが出来る筈である。

だがこれは以前にも検討し、断念した手段でもある。その理由は都合よく黒い塊に当てる物など所持してはおらず、それでも捻出すとなれば数少ない手持ちの荷物の中から選ばなくてはならなかったからだ。

一度目の前に集中し、飛来する黒い塊を避ける。それ自体は成功するが、前に転がる動作は狭い木の板で出来た道で行うには危険が大きく、ただそれだけで重大な失敗に繋

がる可能性が高いため、あまり回数を重ねるべきではない。腹を括るしかないのだらう。

次の黒い塊が迫りつつあり、不死人はこれを実行の機とすることに決める。ゆるゆると、しかし悪意を持って宙を飛ぶ黒い塊が直撃する前に前転して躲すと、それは追尾するべく縦方向に旋回し、曲がり切れずに木の板の床に衝突して霧散する。そしてすぐさま起き上がった不死人は構えを取り、牢獄都市の看守が放った次の黒い塊に向け、塔のカイトシールドを投げ付けた。

円盤さながらに回転して飛んでいく盾は見事に目標へ命中し、黒い塊はその場で威力を発揮してしまうことで無力化されるが、その際の衝撃を支える者は不在であり、矢のように吹き飛ばされた塔のカイトシールドは遙か遠く牢獄都市の空洞の闇へと消えていった。こうなれば最早回収は不可能だろう。

しかし思惑通り時間を稼ぐことは出来た。塔のカイトシールドを投げた直後から始めた詠唱は既に完了され、今や聖職者のウォーハンマーには奇跡の力が宿り、漲っている。不死人はそれを両手で構えたまま牢獄都市の看守に向かって木の板の道の上を走り出し、再び放たれた黒い塊を避けながらもあつという間に距離を詰める。

そしてこちらの攻撃を届かせるにはあと数歩不足しているか、という時に牢獄都市の看守が鎌を持った右手を捻ると胴の中心から黒い球体の膜が一瞬にして生じ、だがそれ

を警戒していない筈がない。不死人は球体から一步分だけ引いて回避した後、聖職者のウォーハンマーで木の板を叩いた。

光る小さな白い文字が辺りを忙しく這い回り、牢獄都市の看守を見付けてその身体へ登り、動きを封じる。一時的な平和の効果時間はほんの僅かな間だけだが、その瞬間の敵は完全に無防備。すぐさま相手の足を掬い上げて転倒させたウォーハンマーは、続けて下に落ちた頭部に目掛けて振り下される。

「びびびっ」

排泄する際のような音を立てて顔面は陥没。目玉も潰れ、牢獄都市の看守は斃れた。難所の突破を果たしたが、その代償として替えの無い物を差し出すこととなった。一息ついた不死人は諦め悪く周囲を見回すも、長い時を共にしてきた塔のカイトシールドはやはりどこにも見当たらず、階下を覆う底の見えない闇に飲み込まれたと考えるべきであるのだろう。

盾の搜索に見切りを付け、不死人は木の板の道を歩き出す。

連なる木の板はあまり揃ってはおらず、粗野な部分が目立つためあからさまに素人の手による造りであることを窺わせるが、道として進む上で問題となるような地点は無く、進んでいれば程無くして終点を迎える。

そこには下へ向かう梯子が架けられていた。下は牢獄都市入口と同じ階層であると

予想され、不死人は梯子に手を掛けようとすることも、だが不意に視界にそれが入り込んできたため、一旦その場に留まり、下に目を凝らす。

梯子を降りた先の付近には、牢獄都市の看守が二匹、大きな棒のようなものが付いた装置の前で並んで立ち留まっていた。看守二匹を同時に相手取るなど、普通の戦い方は勝算などありはせず、まして遠距離攻撃に優れる彼等を前にしては、勝つどころか逃げることもすらままならないだろう。

だが棒の付いた装置を詳しく観察すると、それはレバーのように可動する部類であると推測出来たため、懇願してきた亡者のこともあり、この場所は決して無視して良いものではなく、制圧しなくてはならないようだ。

では実際にどのようなようにして実行するかを検討しなければならないが、その上でこちらに大きく味方する要素が一つあり、それは二匹の牢獄都市の看守がいずれも頭上の不死人を発見出来ていないことであつた。

よつて攻撃方法は成功率の高い奇襲を選択することが可能であり、しかし梯子の先がある地点は看守らの視界に入るため、行儀良く降りてから背後に忍び寄り致命の一撃、という流れは実現不可となる。

落下攻撃で襲い、その一撃にて片割れを完全に屠ることが出来れば最上である。注意しなければならない点は、奇襲の後にはもう一方の敵との戦闘がすぐに控えており、そ

の際の備えを用意しなければならぬことだろう。

不死人は算段を立て終えると、右手に聖職者のウォーハンマーを、左手に魔術師のロングソードをそれぞれ持ち、ウォーハンマーの聖鈴を鳴らして詠唱、そこへ魔力を滾らせた。

そして一つ大きく息を吸い込み、梯子から足を外すことで身体は急速に落下、その勢いを助けとし、真下の看守の頭部へロングソードの刀身を深く埋め込む。剣は頭部を中央から貫き、レバーの左側に居たこの牢獄都市の看守は全身から力が抜けて地面に倒れた。

看守の一方を無力化することに成功したらしいが、それが完全なものであるかを確かめる前に横合いで泡が立つ音が鳴り、見ればレバーの右側に居た敵がこちらに向かつて黒い塊を放っていた。

それは予想通りの成り行きである上、時間の猶予もあれば空間も十分にあるため不死人は黒い塊を易々と躲しながら接近し、その際に発動した黒い球体の膜の魔法も下がって避けるとウォーハンマーで地面を叩く。

この時点で勝利はほぼ確実なものとなっていた。一時的な平和によって縛られ、身動きの取れなくなった牢獄都市の看守の頭に向かつて不死人は聖職者のウォーハンマーの鉤爪部分を打ち込みながら、左手のロングソードは自身の右脇腹にまるで隠すように

して構え、そしてウオーハンマーを手前に引いて敵の頭部を引き寄せると、それに合わせて振り抜かれた剣が首を捉えた。

巨大な目玉を二つ乗せる頭が高く舞い、地面に落ちて転がる一方で、泣き別れた胴は不死人に凭れかかっていた。

自身が不死であることに関し様々な危惧は抱かずにいられないが、この時は嗅覚があまり利いていないのは幸運であったのだろう。首を失った牢獄都市の看守の身体を肩で押して捨て、頭から被った体液を拭う。

それが終わった後、装置に向き直りこれを調べ始める。レバー上部には巨大な鐘が設置されており、おそらく牢獄都市への注水の際に鳴り響いたものと思しく、その点から見てもこの装置は海水の流入を制御するためのものと判断して間違いは無いだろう。

木で作られたレバーが誤って作動しないよう気を付けながら、根元部分へ聖職者のウオーハンマーを繰り返して打ち込む。木は割れ、補強する板金は押し曲がり、やがてレバーは砕けて折れ、取り去ることに成功する。その善悪にまでは関与出来ないが、これでもうこの巨大な牢獄で溺れる者は居なくなるのだろう。

一仕事を終えたあと、不死人は周囲を観察する。

この近くには通路や梯子とは別に扉が二つ存在した。一つは方角的に牢獄都市入りへと向かう扉であり、内側から掛かっていた鍵を解除し、それを開くと、やはり反対側

から一度来た場所であつたため、これにより入り口とこの付近を直接往来することが可能となつた。

もう一方の扉は破壊したばかりの装置の奥にあり、鍵の無いそれを開くと中にはリフトのようなものが設置されており、これに乗れば下まで楽に移動することが出来るのだらう。

リフトの上に乗し、スイッチを押す。それは不死人を乗せたままゆつくりと動き出し、牢獄都市の形に合わせてか、傾斜をつけながら下へと降りていく。

緩慢な動きであつたにしても、そこから下る距離は長いものであつた。リフトから顔を出して下を覗き込んでみても終着点が見通せぬほど道程は長く、自ずとこの牢獄都市の巨大さを悟る。

牢に閉じ込められた彼等は、一体何者であるのか。リングレイの民にしては、虜囚は異常な数に上り、この地の規模から推察するに、これだけの人々を収容すれば国のあらゆる機能が停止する可能性が高く、つまりこの考察は不自然である。溝の溜まり池や貴族街入り口に積まれていた大量の檻付きの馬車が何か関係しているのだろうか。

リフトに移動を任せるきりであるためか、思考は段々と深みに入り、だが不意に老婆の言葉を思い返して意識を引き上げる。曰く、あまり入れ込むな、である。

考えに区切りが付いたところでリフトもまた終わり、停止したそれを降りた先は牢獄

都市の底であつた。



## 第10章 9

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 9

牢獄都市は四角推台、ピラミッドの上部を底と並行に切った上で逆さにしたような形をしているため、下の階へ行くほど外縁部の全長が短くなり、最下層と一階とを比べれば平面としての面積には大きな差がある筈だが、実際にそれを目にしたところで牢獄都市の底は王城の庭園と同程度の規模であり、人間ほど小さい生物が違いを実感するのは難しい。

リフトから降り、そこからまっすぐに数歩進み、何とはなしに視線を下に落とす。

地面は壁と同じく、荒々しく削り出された岩肌が剥き出しになっていた。この広大な空洞を造り出す上で用いた道具は如何なるものであるのか、それを知ったとて別段得るものはないかもしれないが、あまりにも見当が付かなければ気掛かりにはなる。

想像を弄ぶだけでは糸口すら掴めはしないだろうと、その場に屈んで地面を軽く撫でた時、何故か脳裏に思い浮かぶものがあつた。

林檎、その齧られた跡。それがこの岩肌の有り様に近いものであつた。

視界の端に白い巨軀が入る。徐に顔を上げ、不死人が見たそれは、人間のような歯を

綺麗に並べる口を収縮または折り畳みながら常に動かし、また目が眼窩から存在していない白い生物であった。

牢獄都市の底にどこからともなく現れたこの怪異は、顔や口の形状だけを見れば中央広場に出現した真つ青な肌の巨人と酷似しているものの、あれ以上に人間とは掛け離れた形状をしており、得体の知れなさでは勝っている。

細く痩せ、あばらが浮ぶ胴から伸びる手足はまた細く、それぞれが牢獄都市の底から一つ上の階に届きそうな程の長さを有しており、そして四肢の数こそ人間と同じではあったが、付け根や膝などの関節部分はまるで逆向きであるため、底を四足で這う姿は哺乳類や爬虫類にすら似ず、どちらかと言えば蜘蛛のようであった。

「ぐつ、ぐつ、ぐもももももつ」

その生物の呼び名を選ぶのであれば営みに倣い、闇を削る者としよう。

響かせた声は牢獄都市の看守のものと似通っており、口元にはやはり薄汚い泡が纏わりついていた。この点は潮の満ち引きがあるこの場所に適応した者達に共通する特徴であるのかもしれない。

魔術師のロングソードを両手で構え、闇を削る者と対峙する。

現段階では戦闘の方針を定めるための情報が不足しており、また敵の口は高速で伸縮する構造と思しく、軽はずみに近付くような真似は避けるべきである。時間を消費する

ほどこちらが不利になる状況ということもないため、まずは相手を知ることが先決であり、そしてその為に行動を誘い出す揺さぶりを仕掛けるべきか。

始めに魔法を。不死人はロングソードで詠唱を行い、ソウルの矢を放つと、それは闇を削る者の頭部に命中、相手は少し怯むような仕草を見せ、命中した箇所には傷らしきものも生まれていた。

どのようにして無力化するのか、その期待をあつさりと言切られた形となった。あまり耐性がないのか、効果は十分に認められ、このまま魔法を撃ち続ければ斃せるのかもしれない。しかしながら、今後の展開が読めない以上、この敵に関する知見は拾えるだけ拾うべきであり、次に不死人は聖職者のウォーハンマーを構え、鈴を鳴らす。

そしてこの動作を隙と見たか、闇を削る者は俄かに走り出して不死人へと迫り、だが伸縮する口で喰らい付くより前に詠唱は完了していた。敵の攻撃を避けた直後、ウォーハンマーで地面を叩く。

岩と重厚な鉄とが打ち合って鈍い音を発した直後、そこから生まれた光る小さな白い文字は走り出し、標的たる白い巨軀の身体に這い上がるとその動きを止め、拘束の効果を齎していた。

それこそ図体の大きな手合いであれば力づくで振り解くと予想していたため、不死人にしては僅かに反応は遅れたものの、すぐに意識を切り替えれば敵は未だ隙を残してい

た。横腹に近付き、左手のロングソードで柔らかな表皮を斬り付ける。

赤い血が飛び散り、闇を削る者が少し姿勢を崩す。物理攻撃、魔法攻撃、そして特殊な魔法効果のいずれもが通用するのは想定外ではあったが、勿論それ自体は好都合である。このまま畳み掛けるべきかとロングソードを振り上げ、しかし不死人の頭上に影が降りる。

闇を削る者は自身の脇腹の辺りに居る小人を潰すべく、腕を大きく振り上げていた。だがその手の攻撃は見飽きるほどに対応したものであり、不死人は思い切り叩き落とされた腕の軌道を読む事に成功。回避しながら相手の胸元に潜り込み、視界から逃れる。攻撃が空振りに終わった闇を削る者は不死人の姿を見失い、その場で周囲に視線を巡らせるが、その時には既に魔術師のロングソードによる詠唱を完了させていた。ソウルによって生じた巨大な剣を上から下へ振り抜く。

意識外からの攻撃であったが故か、筋肉の緊張も無い身体は容易く青い大剣の侵入を許し、腹を大いに捌かれた闇を削る者は数歩よろけながら血と内臓を落とし始め、尚も後退しようとするが臓物を内側に留める術を持たずに失い続け、遂にはその場に蹲り、やがて息絶えた。

この生物がこの場のゲートキーパーを担っているのかと思えば、やや肩透かしな終幕ではあった。だが改まって己の状況を顧みるに、この牢獄都市に着いてからというも

の、もう長いこと篝火を目にしておらず、身体を休める暇も無かった。牙猪の戦士も牢獄都市の看守らも強敵であったためエストなど消耗は激しく、この辺りで休息することを考えるべきか。

だが探索するべく歩き始めようとした時、漠然とした気配がどこからか現れていた。数が一つ、三つ、六つと際限無く増え続け、いずれも不死人に視線を注いでいるらしく、その出所を辿って上の方を眺めると、牢獄都市の底よりも一つか二つ高い階層の通路に隠れ潜んでいたのか、そこから蛆が湧くが如く、闇を削る者達が溢れ出していた。

今や十匹もの数が揃った彼等は規律なくそれぞれが自由に行動しており、こちらを遠巻きに観察する者や、気ままに上の階と下の階の行き来を繰り返す者、或いは悠長な歩みで不死人に近付こうとする者など、様々であった。

この中で注目しなければならぬのは、逃げ場の無い戦いのリングと化した牢獄都市の底へ降りた二匹だろう。何をやるにせよ体格も数も勝る相手と相対するなら攻撃を止めるための手札が必要であり、不死人は急ぎ一時的な平和を用意すべく、聖職者のウオーハンマーで詠唱を行う。

これが完了すれば、次にこのごく不利な状況を具体的にどのようにして打開するかの絵図面を脳内に描かなければならないが、こちらににじり寄る二匹の闇を削る者達との距離はあまり離れておらず、これ以上放置するのは危険であった。前後左右に迫る影が



走りながら後ろ背に敵を見るや、この闇を削る者は先程のような猛突進という程の勢いで迫っている訳ではなく、何かすれば足が止まることが予想された。よつてある程度距離を稼ぐと不死人は急に立ち止まって振り返り、手早く放ったソウルの矢が闇を削る者の頭部に命中する。

顔面で炸裂した青い光は、目潰しの効果を發揮した。上手く敵の不意を打つことに成功した不死人はそこで発生した隙を逃さず敵の真下に潜り込み、二番煎じとなるがその場にてソウルの大剣を形成すると、それを上下に振り抜いて柔らかな腹を両断する。

白い肌に走った赤い線から真っ赤な腸が踊るように零れ落ち、続いて他の内臓も外側へと出ていく。先のもと同様、この闇を削る者もまた血と臓物に塗れながら倒れ、やがて動かなくなつた。

## 第10章 10

第10章 牢獄都市 潮打ち 10

「ぐもももつ」「ぐつ、ぶぶぶ」「ぶぼつ、ぶぼぼぼぼつ」

仲間の死を嘆いてか、好き放題に鳴いているだけか。否、おそらく意思疎通のためのやり取りであつた。上の階から更に二匹が底に降り、三匹となつて固まる闇を削る者達は声を上げ、そしてそれが徐々に収まつていくと、こちらを遠くから緩やかに囲むつもりなのか、左右に散つた上、隙を窺うような素振りを見せている。

それはこの生物が始めて見せた、明確な連携であつた。三匹が何かの合図の元、一斉に駆け出すようなことがあれば助かりようもないが、それでも危険を少しでも緩和できるのであれば、と、不死人は今や命綱と化した一時的な平和を用意すべく、聖職者のウォーハンマーで詠唱を行う。

その次には遅々とした歩みでこちらへ接近しようとしている彼等に牽制を仕掛けておくべきだろう。ソウルの矢よりも詠唱速度に劣るものの、衝撃が強いためより足止めの効果が高い闇の玉をロングソードから放ち、それは的大きさも相まつて次々に命中していた。



このままダメージを与え続け、有利な運びへと向かわせながら、ここで稼いだ時間で勝利への道筋を見極めたいところであった。

しかし一匹の闇を削る者が突如として横方向へと跳ね、思考する余裕が消える。何を思つてそうしたのかは不明だが、敵のこの行動によりこちらが攻撃を向けるべき方向が散り、途端に照準が忙しくなると、それを看破したのか、視野のほぼ限界の端に居た一匹の闇を削る者がこちらに向かって走り出す。

対応に遅れが出たため今から闇の玉を詠唱したのでは敵を止めるには間に合わず、だがこの一匹だけを足止めする為に一時的な平和を使つて良いものかどうか、一瞬迷つた後に温存するべきであると判断を下し、不死人は迫る闇を削る者を待ち構え、確と機を見計らつて横合いに身を投げ出す。

勢い良く走り抜ける白い巨躯とすれ違う。運良く敵の攻撃を回避することに成功し、だが振り返ればいつの間にも走り出していたのか、二匹の闇を削る者達が不死人に向かって突進し始めており、その距離は既に至近であった。

巨大な口が二つ並んで迫る光景は、取り合うようにして食い千切られる凄惨な結末を想像させ、しかし取り乱さずに済んでいるのは、やはり心が消えているからだろうか。不死人はあくまで冷静に、適切な範囲に全ての敵が入るのを待ち、そしていよいよ白い巨軀に噛み殺されるかという寸前に聖職者のウォーハンマーで地面を叩き、一時的な平

和で三匹全ての動きを止め、駆け出してその場から離脱する。

敵の集団から距離を取るべく走りながらも、ふと上を見上げる。底に降りず戦いに参加していない、他の闇を削る者達の様子を観察しようとしたための行動であったが、彼等の中に目が無いにも関わらず、じつとこちらを観察しているかのような個体を見付け、互いに数瞬間を向かい合わせた後、それはそこから跳躍し、牢獄都市の底に着地した。

今のは不死人の行動に非があつたと見るべきなのだろうか。であれば今後は同じ過ちを侵さないよう気を付ければ済む話だが、それとも単なる偶然か、或いは時間を掛け過ぎてしまったが故の成り行きなのだろうか。懸念すべきは後者だろう。

十分に距離を取つたのち不死人は立ち止まり、振り返るとそこには四体もの闇を削る者達が並んでいた。戦いのはじめ、二匹しか居なかつた時に素早く両方を無力化し、それが最低でも三匹の時にいずれか一匹でも倒しておかなければ、と今更ながらに思い返す。そうして早い段会で戦いの流れを有利に作っておかなければ、このように極めて挽回の難しい状況に陥り、勝つ目はごく少なくなるのだ。

聖職者のウォーハンマーの聖鈴を鳴らして詠唱を行い、一時的な平和を武器に付与しておく。しかし相手が四匹居る状態では、果たしてこの奇跡の術だけを恃みに危機を凌ぐことが出来るかどうかは限りなく怪しく、また仮に上手くやり過ぎしたとしてもこち

らから攻撃する余裕などそう生まれるものではないだろう。如何にしてこの状況を打破するか。

それは考え方一つ、作戦一つでどうにかなるようなものではないだろう。不死人は聖職者のウォーハンマーを右手に構えながら左手のロングソードで闇の玉を撃つことで四匹を牽制しつつ、何か利用出来るものは無いか、周囲をよく見渡す。

事実、この行動に最後の望みが懸かっていたのだろう。

だからだろうか。暗闇ばかりが満ちる牢獄都市の底の中心近くに見付けた地面に浮く白く光る文字は、不死人にとって絶対に手にすべき奇貨、縋るべき細い糸であり、真実それが何ものなのかなどとは考えず、何を置いてもそこへ辿り着かなければならないという、使命感にすら近い衝動に駆られることとなった。

不死人は何発かの闇の玉を敵集団に向けて見舞い、牽制してから白く光る文字の元へと駆ける。しかし見込みが甘かったのか、白い文字の元に辿り着く頃にはいつの間にか走り出していた一匹の闇を削る者が既に近くまで迫り、更にはその向こうから続いて二匹の闇を削る者達がこちらに向かって走り始めていた。

白い文字に触れるだけの時間の猶予は無く、不死人は先に到着した一匹の闇を削る者が横に難いだ腕を後ろに飛んで躲し、だがあまり下がりが過ぎずはその場に留まり、そうして後からやって来た二匹が到着し、計三匹が合流を果たした瞬間、地面を叩いた

ウオーハンマーは一時的な平和の効果を周囲に齎す。

三匹の闇を削る者は動きを止めた。不死人は今こそ白い文字に駆け寄ろうとし、だがその行く手を阻む者があつた。

「びびいつぶぶぶぶうーっ」

突如として三匹の影から顔を覗かせたのは、一時的な平和の効果が発動した後はこちらに寄つてきた一匹の闇を削る者。出現と共に口元に盛大に泡を立たせ、今までになく黄ばんだ色をしたそれを不死人に向かつて吹きかけていた。

奇襲ではあるが泡を吹き出す音が大きいため、それを聞きつけてすぐに回避行動を取つた不死人は直撃せずに済むが、これで事無きを得たかと言えば思わぬところで事態は悪化していた。

闇を削る者が噴き出した黄ばんだ泡。これが消えず、高く積まれた状態でその場に残っており、そして白く光る文字を全て覆い隠してしまつていた。

泡の正体が何であれ、敵に向かつて吹きつけている以上、触つてはならないことは明白である。白い文字に触れる機会を失つた不死人は、一旦そこから下がつて敵集団から距離を取ろうとするも、一時的な平和の拘束力は既に失われており、解放された三匹を合わせた四匹が近距離にて不死人を見据える。

ほぼ囲まれた形であり、牽制の魔法を撃とうとでもすれば反対方向から食らい付かれ

ると予測される上、詠唱に時間の掛かる一時的な平和を用意し始めるには遅過ぎる。  
問答無用の窮地へと落とし込まれていた。

白い巨躯の口から漏れた吐息が不死人の肌を撫でる。闇を削る者達は未だ大きな動きを見せていないものの、睨むというよりはまるで獲物を検分するかのようにそれぞれが不死人を眺めており、騒がしさからは遠いが、逃げるか攻撃かしようものなら彼等は即座に飛び掛るだろう。

故に不死人は静かに片膝を折る。奇跡を待つ者が如く、祈るような姿勢を取る様子はごく無防備であり、それを諦観と見たか、四匹の闇を削る者は一斉に大きな口を開く。

結果、奇跡は訪れず、代わりに闇が噴き出していた。術者を中心に下から突き上げた黒い霧の柱が闇を削る者達を襲い、中でも特に負傷が蓄積していた一匹が腹を強打され、絶命していたが、これは主目的ではない。

生命の残滓は未だ終わらず、舞い上がる柱は三匹の闇を削る者達を阻み、これによって守られた不死人は魔術師のロングソードによる詠唱を行う。そして飛んでいく闇の玉は堆く積まれた黄ばんだ泡に衝突すると、それを全て吹き飛ばしていた。

駆け出した不死人は滑り込むように地面の白く光る文字に触れる。文字はすぐに地面に吸い込まれるように消え、その場の安全を確保するべく闇の玉を次々と放つて闇を削る者達を牽制する不死人の横で、やがて白い光に包まれた人間が現れた。

古いリングレイの兵士の鎧に、パルチザンと塔のカイトシールド。腰にはモーニングスターを下げ、そして銀に光る牙猪の兜を被った人物であった。

そこに居たのは、かつて自分達が全く敵わなかった、非常に強力なダークレイスであった。もしこの戦士が助けとなるのであれば、これ以上に優れた戦力は他に無いと言いつける程に心強くはあるが、果たして信頼して良いかどうかは大いに疑わしい。

しかし躊躇いを覚える不死人を他所に、既に戦いの最中にあることを理解した牙猪の戦士は三匹の闇を削る者達と向き合い、塔のカイトシールドとパルチザンを構える。どうやらこちらが乗るか反るかを決めずとも状況は動くらしく、加えてそもそも急場であり、信じるに値するか否かを熟思する時間は無い。

よって不死人と牙猪の戦士は並び立つ。

対する闇を削る者達はこちらの隙を窺うようにして左右へと歩き回り、それによって段々と位置関係が変化していくと、最後には一匹の方と二匹の方に別れた。確実に相手を仕留める力量を持っているのはおそらく牙猪の戦士であり、不死人は彼が一对一で敵と戦う状況を作るべく、二匹の方の闇を削る者の方へと向く。

## 第10章 11

## 第10章 牢獄都市 潮打ち 11

まずは定石、左手のロングソードにて詠唱、闇の玉を交互に二匹の闇を削る者に当てて牽制をしていくと、こちらの意図を察した牙猪の戦士は全く迷わずに残った一匹の方へと走り出し、すぐに両者の距離は至近となる。

彼が実際にどのようなようにして戦うのか、参考になるものでもあれば、と観察したいところではあったが、そちらの方は最早不死人の視野の外にある為、それは叶わない。鳴り響く轟音から察するに中々の死闘ぶりではあるようだが、その間不死人は闇の玉を撃ち続ける事で二匹の闇を削る者を釘付けにしておく。

するとしばらくも経たない内に不死人の背後で体積の大きなものが倒れるような音が鳴り、振り返るとやはり牙猪の戦士が闇を削る者を一匹斃したらしく、白い巨躯の喉からパールザンを引き抜く様を目撃する。

間も無く牙猪の戦士は不死人の隣に戻り、次には特に合図も無くそれぞれが左右の敵へ、一匹ずつ別れて向き合う。不死人は右の敵へ、ある程度近付いてから足を止め、その場で魔術師のロングソードで詠唱、闇の玉を一つ放つとそれを追うように、或いは後

ろに隠れるようにして駆け出し、闇を削る者に近付いていく。

「ぐんっももももっ」

闇の玉は標的に命中し、しかし襲い来る衝撃を堪えてみせた闇を削る者は顔を一度上へ向けると、その姿勢のまま高い位置で頭を振り回し、数十にも及ぶ黄ばんだ泡を撒き散らした。

その内のいくつかが不死人へと飛来し、だが泡という性質上、宙を飛ぶ速度は緩慢であり、回避は容易い。落下する泡を蛇行して走ること避けつつ、姿勢の関係上、真下への注意が疎かとなっている闇を削る者の胸元へと潜り込む。

粘膜が覆う眼前の白い皮膚は僅かに脈動していた。不死人はこれを詠唱したソウルの大剣で突き刺し、その状態のまま柄を力一杯横に引き抜くと、胸を真一文字に引き裂かれた白い巨軀は大量に出血し、立ち所に四肢の支えを失い、その場に崩れ落ちる。

不死人はこれが完全に息絶えたことを確認し終えてから牙猪の戦士の方を見ると、彼は自分が相手取っている闇を削る者の背に乗って首を後ろからパルチザンで貫き、濃厚な血を一身に浴びていた。

ここまでに牢獄都市の底へ降りていた闇を削る者達は、一度これで全て片付けることが出来ていた。だがこれで敵が尽きた訳ではなく、まだ上の階に居座っていた他の闇を削る者達は一齐にこちらを向くと、その全てが階を跨いで下に降り始める。数は四匹と



多く、しかし今の不死人と牙猪の戦士であれば、相手にしてやれないことはないだろう。不死人は聖職者のウォーハンマーで聖鈴を鳴らす。敵はまだ上の階から降りている最中であり、ここを魔法で攻撃するのも良いが、それはあくまで遠距離攻撃であり、決定力に乏しい。であれば本格的な衝突が起こる前のこの時間の間に、いざという時の安全を確保するための備えとして一時的な平和を用意するべく詠唱し始めると、その横で牙猪の戦士は懐から茶色い小さな袋を取り出す。

更には右手の得物をパルチザンからモーニングスターへと持ち替え、それに茶色い袋の中にあつた金色の粉末らしきものまぶして纏わせると、彼の武器は爆ぜるような雷に溢れ、光り出した。どうやら何かの道具を用いて雷の属性を付与したらしい。

そうして二人の準備が整うと、四匹の闇を削る者もまた牢獄都市の底に並んでは各々歯を剥き出しにした口を伸縮させ、進撃の意を滲ませる。

この幕間はまた、静寂を伴っていた。地下深くにて両勢力は相対し、そしてこれが最後の区切りとなり、どちらかが滅ぶまでこのように息をつく暇はもう無いのだろうという予感があつた。

白く長い手足が地面を蹴る。

口火を切つたのは二匹の闇を削る者であつた。彼らはこちらに向かつて一直線に駆け出し、おそらく突進を当てるつもりであるのだろう。これを見た不死人は協力者の前

に罷り出ると二匹が十分な距離にまで近付くのを待ち、機を見て聖職者のウォーハンマーで地面を叩き一時的な平和を発動。吐き出された小さな文字は二匹の闇を削る者の動きを止め、不死人と牙猪の戦士はそれぞれ別の敵の下へと駆け寄る。

不死人は右の闇を削る者に近付く。正面を避けて側面に回り込み、あばらの目立つ脇腹を魔術師のロングソードで斬り付け、一方で牙猪の戦士は最短距離で左の闇を削る者に近寄ると、真正面からモーニングスターで頭を殴り付けていた。

出血の伴う打撃は見るからに威力が高く、一度味わった身としてもそれは保障出来る上、殴るたび武器が纏った雷光が敵の身体に流れ込んでいたため、このまま僅かな時間の内に敵を撲殺し切るのではないかと思えるほど豪快であった。

だがそこへ後から来た一匹が割り込む。不意に牙猪の戦士の横から現れたその闇を削る者は彼に向かって泡を吹き掛け、回避行動を取らせることで仲間への攻撃を中断させ、また時を同じくして一時的な平和の効果が切れたため、不死人が脇腹から斬り付けていた闇を削る者は反撃をしようと腕を大きく薙ぎ払った。

寸前で後ろに飛び退くことでこの攻撃を回避し、不死人はさらにその場から後退しようとするが、しかし背後から大きな影が落ちる。一体いつどのようにして回り込んだのか、一匹の闇を削る者は不死人の真後ろを取っており、それはふらりとこちらの頭上に自身の頭を移動させると、口から黄ばんだ泡を噴出させた。

咄嗟に前に飛び込み、流れ落ちる泡から逃れる。何とか回避に成功するが、無理な体勢での動作が祟り不死人はその場に転倒し、また目の前には脇腹にいくつかの赤い傷を抱えた白い巨軀があつた。

思えば、最初に突進を仕掛けた二匹にもう二匹が合流した形になり、この場には四匹が密集し、つまりは囲まれつつある状況だと言えるのだろう。しかしそれを理解するのは遅かつたのか、綺麗に歯の生え揃つた口が大きく開かれたまま、身動きの取れない不死人へと迫り来る。

食いつかれる間際、危機に陥り、走馬灯のように悠然と流れる時間の中で、不死人は闇を削る者の横顔に向かつて何か飛んできたのを確かに目にした。

それは小さな茶色い壺であつた。白い顔面に直撃すると炸裂して眩い光を放ち、同時に衝撃をも発するものであつたのか、こちらに迫つていた闇を削る者は怯み、不死人に向かつていた脅威は逸れる。

この戦いにおいて文明的な道具を扱う者が居るとすれば、それは不死人の他には牙猪の戦士しか居ないだろう。彼によつて十分な時間を得たため態勢を立て直すことには成功したが、しかし牙猪の戦士は未だ雷の力を貯えた壺を手当たり次第に敵の集団に向かつて投げており、四匹の闇を削る者達はいずれも足止めされていた。

味方が逃げる時間を稼ぐだけが目的であればこの行動に意味は無く、やがて遅まきに

彼の意図を察した不死人はその場にて片膝を着いて祈るような姿勢を取り、ウォーハンマーの聖鈴で詠唱を始める。

あくまで想像に過ぎないが、助けられたことには間違いは無くとも、牙猪の戦士はもう少し早い段階で不死人の危機に対応出来た筈である。それを遅らせることで不死人を囿とし、牙猪の戦士本人以外が知らぬ間に少し離れた場所に陣取る事で茶色い壺を全ての闇を削る者に浴びせられる位置を取ったのだろう。

やや危険な橋を無理矢理渡らせられたが、しかし不死人との距離を接したまま敵集団の動きを制した功績は大きい。詠唱が完了し、術者の周囲から溢れ出す生命の残滓は、四匹の闇を削る者を攻撃範囲に収めていた。

飛び出す黒い霧の柱たちがそれぞれ白い巨軀に襲い掛かる。

惨劇が始まってすぐ、特に弱っていた一匹が黒い霧の柱に打ちのめされると、当たり所が悪かったのか姿勢を崩し、そのまま力が抜けた身体は下から上に噴出する闇に散々弄ばれた後にどこかへと吹き飛んで行く。あれはもう、助からないだろう。

その傍ら、残る三匹は当然逃げ出そうとするが、壺を投げ続ける牙猪の戦士がそれを許さずにいた。炸裂する雷によって足止めされた闇を削る者達は生命の残滓に晒され、だが流石に品切れとなったか、途中で牙猪の戦士は壺を投げるのを止める。

生命の残滓もまた、間も無く終わる頃合だろう。不死人と牙猪の戦士は視線を交わし

た直後、一度敵から距離を取るべく、共にそこから背を向けて走り出した。

## 第10章 12

第10章 牢獄都市 潮打ち 12

その時、一筋の風が背後から通り抜けた。

牢獄都市のような密閉された空間では自然の風など感じようも無い。つまりそれはあからさまに不吉の予兆であり、だからこそ不死人は走ってその場からの離脱を試みるが、そのように意識を向けた時には既に転倒していた。

背後から何かの液体を浴びせられた直後の出来事であった。身体の背面、特に足の腿の辺りに焼けるような感覚があり、これが転倒の要因となったのだろう。周囲の岩や武器防具には異変が見られないことから、どうやらこの液体は生物の皮膚等に反応する毒の類であるらしく、不死人の身体の一部が爛れ、特に多くこの液を被った足には力が入らず、立ち上がることもすまななかつた。

片や三匹の闇を削る者達は遂に生命の残滓から解放されていた。それぞれが傷を負ってはいるものの攻撃力は残しており、しかし足を負傷し、格好の獲物たる不死人の距離をすぐには詰めようとはせず、うち一匹がいつの間にか高く積まれていた黄ばんだ泡の山の後ろに立つと、細く窄めた口で短く、勢良く息を吹き掛けた。

表面に血管のような黒い筋を浮ばせ、蠢かせるいくつもの黄ばんだ泡は吹き掛けられた息に乗って高く舞い上がる。そしてその中の特に大きい泡が一つ飛んでくると、避ける足も防ぐ盾も無い不死人に覆い被さろうとしていた。

それを頭から受ければいくら感覚の乏しい身とて、耐え難い苦痛に晒され、なによりエラストを用いても回復出来ないほど負傷する可能性があつた。だが事ここに至つては最早出来る事はない。不死人はせめて体内への侵入だけは避けようと、鼻や口を手で守り、身を強張らせながら泡が到来する瞬間を見詰めていた。

しかし不死人が次に目にしたものは、視界を上下に切り裂くような軌道で飛んでいく黒い円盤、否、塔のカイトシールドであつた。

牙猪の戦士が鋭く投擲したそれは空中の黄ばんだ泡を打ち破り、またしても助けられ格好になつた不死人はこの機を逃さず先にエラスト瓶を飲み、足の傷を回復させていくが、丁度その時一匹の闇を削る者がこちらに向かつて走り出した。

一の矢である泡による遠距離攻撃が失敗し、即座に二の矢たる突進を仕掛けるは、まるで知性とは無縁のような怪物としての外見にはそぐわない優れた判断であり、事実不死人の足は完治したものの、起き上がる為の一瞬の時間を消費するのは致命的な遅れとなりかねなかつた。

襲い来る白い巨軀に磨り潰されるのが先か、立ち上がり逃げ出すのが先か。タイミン

グは際どく、だが唐突に掴まれた手が上に引かれ、助け起こされたことによつて僅かに時間が短縮された。

「ぐもっ！」

鳴き声の直後、不死人と、それを助けた牙猪の戦士目掛けて闇を削る者は頭から突っ込み、しかしその際お互いの身体を弾くようにして左右に散り、両者共に無傷にて敵の突進をやり過ぐすと、二人の間に差し込んだ形で、突進が空振りに終わつたばかりの無防備な白い巨軀があつた。

牙猪の戦士はモーニングスターで、それに合わせて不死人は聖職者のウォーハンマーで、それぞれが闇を削る者の身体の側面を、同じ瞬間に殴打する。胴の白く薄い皮膚は両側の端から波打ち、それが中央で衝突すると行き場を失つた力は体内の臓器を破裂させ、闇を削る者は大量に咯血し、間も無く息絶える。

敵は残り二匹。だが遠く離れた位置に居る筈の闇を削る者の姿は一匹のみであり、もう一方の姿を探して首を巡らせると、上の階を移動してこちらの視線を逃れていたのか、白い巨軀が一つ、牙猪の戦士の背後に忍び寄っていた。

これに応じて真つ直ぐに構えた左手のロングソードから速度を重視したソウルの矢が放たれた時、既に牙猪の戦士への不信感は霧散し、より連帯しようという意識が生まれていたことを自覚する。青く迸る光は闇を削る者の頭部に直撃して牽制としての効



果を上げ、またこの一撃により牙猪の戦士も自身の背後に敵が迫っていたことに気付く。

彼は振り返り、敵の方を向くと横に薙ぎ払われた白く細長い腕の攻撃を掻い潜り、そのまま闇を削る者の胸元に滑り込むと両手でモーニングスターを振り上げ、渾身の力を込めて敵の頭部を殴打した。

頭蓋を砕かれでもしたのか、歯茎を剥き出しの口から鳴き声ではない、生木が割れるような音が漏れ出ると闇を削る者は倒れ伏すが、これをした牙猪の戦士は休む間も無く不死人に向かって走り出す。

その意味するところが一瞬分ならず、不死人は動かずにいたが、しかし横から近付きつつある足音が耳に入ると、まだ遠くに居ると認識していた闇を削る者がいつの間にか至近距離にまで来ていたことを理解した。

即座に敵の方へ向き、武器を構えるが、同時に牙猪の戦士は不死人との間に横たわる死体を駆け上がると、高さを得たその場から跳躍し、空中でモーニングスターの一撃を闇を削る者の頬に見舞う。

不死人に襲い掛かろうとしていた闇を削る者は勢いの乗った攻撃によって大きく怯んで隙を晒し、牙猪の戦士もまた勢い余って地面を転がる。そうして、三者の中で唯一無事な者が動き出す。

不死人は即座に闇を削る者の頭部付近にまで踏み込むと、最初に左手のロングソードの切っ先を敵の首深くに刺し込み、それで出来た裂傷に右手のウォーハンマーの槌頭を無理矢理ねじ込むと、力一杯両手を広げ、首の傷を引き裂く。

まるで水の入った桶をひっくり返したような血の失われ方であった。一瞬にして身体中の血液を損ない、立ちあがりようも無くなった闇を削る者は、地面に倒れたまま、最期の息すらせずに死に絶えることとなった。

合計十匹。ついに全ての闇を削る者達は斃れた。

やおら立ち上がった牙猪の戦士と目が合うが、何かを伝えようという気にはならなかった。それは出会った時に彼がダーククレイスであったからなのか、それとも伝えるまでもなかったからなのだろうか。

牙猪の戦士もまた、こちらを眺めるばかりで何かしようともせず、無言のまま時が過ぎていく。そして役目を終えたからか、彼の身体が薄く透け始め、やがて完全にその姿が掻き消えた。

もしもまた出会うことがあるのなら、その時はどのような関係でいるのだろうか。

協力者を見送った後、不死人は身体を休めるべく、白い死体が散乱する牢獄都市の底で篝火を探しに歩き始める。すると篝火ではないが、鈍く光るものが地面の上に置かれているのを見付ける。

近付いて見てみると、それは塔のカイトシールドであった。木の板の道の上で看守を倒す際に紛失したものがここまで落ちてきたのかと言えば、おそらくそうではないだろう。

何にせよ有用な物である。不死人は塔のカイトシールドを拾い上げると、それを左手に携えた。

## 第11章 1

## 第11章 牢獄都市 拷問館 1

牙猪の戦士が去ったあと、不死人は付近の篝火の前で腰を降ろし、身体を休めていた。揺れる炎を見詰める瞳の奥には消えかけた心しか無く、何も思い煩うこともない筈だったが、しかし捉えようのない懐かしさに襲われ、知らず、火に魅入られていた。

しばらくの間、意識と外界は隔絶していたが、やがてどこか遠くから投げかけられる声によって引き戻される。立ち上がり、声のする方へ歩いていくと、その牢の中に居たのは他の者と変わらない姿をした虜囚の一人であった。

「良かった、気付いてくれたんだな」

男の語り口調は明瞭としていた。外見こそ亡者と同じではあるが、意思疎通の正確性では他の者達よりも大いに期待出来るのだろう。或いは、それによって齎される情報の確度においても。

「私はテオドール、見ての通り今はただの囚人だが、ああ、いや、それはどうでもいいな。どうしても礼が言いたかったんだ。あんた、レバーを壊してくれたんだろう？ ありがとう、これで私達は溺れて苦しまずに済む」

感謝の言葉に対し、不死人は黙って頷きを返す。

「それで、なんだが。あんた、善人みたいだし、この先に行くなら、一つ頼みたいことがあるんだ。もちろん、あくまでついででいい。どうかな？」

内容を聞いていない状態では何も約束は出来ないが、それは相手も理解しているのだろう。あくまで聞く気があるかどうかの確認である。不死人は顎をしゃくり、彼に話を続けるよう促す。

「ありがとう。実は直接見たのでもないんだが、この先に、姫様が囚われてる筈なんだ。私達はともかくとして、争いに関与していかないどころか、王家で唯一反対の立場を取られていたあの方までずつとこの地に囚われたままにいるのはあまりにも不憫だ。出来れば、あんたの手で救い出してやって欲しい」

自分とて今の境遇に得心尽くではないだろうに、他者を案じるテオドールの目は真剣そのものであった。だが囚われの姫を助ける、という言葉の並びは薄ら寒く、第一に姫という立場の者がどのような人格であるかなど、王家に名を連ねる者の責務を前にして意味を成すのだろうか。

姫とやら自身がどのような判断を下すのか確証も無く、ともすればテオドールの心遣いは筋違いである可能性がある上、まして商人の老婆の警告のこともある。

不死人は返事を曖昧にしていると、しかしその様子に気付いていないのか、テオドール

ルは話を続ける。

「正直、私達だって、なんであんな無茶な侵攻をしたのか。いや、今更だよな。ああ、それよりもう一つ頼みがあつて。もしこの地で青い大剣を見つけたら姫様に渡して欲しい。それは王家の剣なんだ」

要約すると、伝説の剣を探し、それを使って囚われの姫を救えということになるのだろうか。この調子では、もしそれらを達成出来たら王位を約束する、とまで言い出しかねない。

「当たり前だが、あくまでついでもいい。出来ない事だつてあるだろうし、でも出来そうだったら頼む。なっ？ それくらいなの、軽い気持ちでいてくれていいからさ」

テオドールは自身の頼みを押し付けるように捲くし立て、しかしそれはこちらが明確な返事をせずに済む態度でもあつたため、不死人は特に何も返さずにその場を去つた。

そのまま牢獄都市の底の中心部分まで探索の足を伸ばすと、床の表面に、削りだした岩とは異なる素材で造られた一画を発見する。

黒い鉄のそれは円形であり、中央には大きなハンドルのようなものを取り付けられていた。酷く硬いものであつたが、しかし力を込めれば辛うじて動く気配があり、時間を掛けてハンドルを回していくと、やがて黒い鉄は蓋のように開く。

奥に現れたのは、赤い灯りに照らされた長い階段であつた。それまでここは牢獄都市

の底であると認識していたが、どうやらまだ下に階層が存在しているらしい。不死人は鉄の蓋を潜ると、ゆっくり階段を降りていく。

この赤い階段は横幅が広く、しかし途中何か物が置かれている訳でも無く、敵も隠れようが無い。よつて長い割に階段はすぐに終わり、その先には少し開いたままの状態にある大きな鉄格子の扉があつた。

扉を通り抜け、通路に足を踏み入れる。この区画は上の階のように削り出された岩が剥き出しになっているのではなく、煉瓦で壁が整えられているようだが、安物なのか、それらは赤を基調として時折白が混ざつてまだらになっている部分を見せている。杜撰な施工だったのだろうか。

そしてその壁により掛かるようにして、亡者が一匹、すぐ近くで座り込んでいた。あまり敵として見做すことが出来るような佇まいではなく、だが一応念のため剣と盾とを構えてその亡者に近付くと、砂利を踏む音でこちらに気付いたのか、枯れた顔が不死人に向き、憔悴したような笑みを見せる。

「正気の者のようだな。私は、ああ、ああ」

その亡者は話が出るものの意識は朦朧としているらしく、呻きながら徐々に視線が下がっていくが、不死人が待っているとやがて弱った喉から言葉をひり出し始めた。

「上から上手く逃げたつもりだったが、ここはもっと地獄だったよ。なあ、不死の戦士

よ、この先の闇へ浸かるのか？ それなら、光に気を付けるんだ。我々を害し、狂わせたのは光だった。そして、闇の中で求める光こそ、最も危険でおぞましい」

具体性に欠ける言葉ではあるが、これまでリングレイで出会った人々の言葉に鑑みれば、こういった心構えはよほどの地では重要なのだろう。そしてそれを語って以降、亡者はまるで事切れたように全身の力の支えを失い、動かなくなつた。

意識を切り替え、通路の奥に向き直る。少し歩いた先の正面には壁があり、その左右には互いが正面を向くようにして扉が取り付けられているが、順番にそれぞれに触れてみたところ、開くのは左の扉のみであつた。右の扉は開かず、向こう側から鍵が掛かつているのだろう。

不死人は左の扉の向こうへと歩き出し、赤い通路の中を進んでいく。





世界であつた。

まず一つ目の部屋には、人間の頭部を砕く為の拷問器具が置かれていた。

これは被害者の頭を上下二枚の鉄の台の上に挟んで固定し、その状態で上下の台の間にあるネジを締め、頭蓋を圧迫して砕く仕組みであるのだろう。部屋の中にはその道具がいくつか乱雑に放置されており、実際の被害者は居なかつたが、血の跡は散見された。

このような器具を用いた責苦は決して一般的ではなく、宗教的な熱氣の後押しでもない限りは大抵が違法である。存在が許されない器具であり、実際に使用するなど狂気の沙汰ではないが、しかし現実の業の凄惨さはそのような観点を超越していた。

歪んだフェイスガードの小さな隙間から、目玉、脳みそ、歯や舌などの肉が溢れ出ていた。

仕切りで作られた二つ目の部屋。そこには件の器具を使われ、力尽きた被害者が椅子に縛りつけられたままの状態で捨て置かれていた。彼は騎士であつたのか、濃紺のマントとフルプレートアーマーを着用しているが、他に兜をも被つたまま拷問器具によつて頭部を潰されたらしい。

まるでおぞましい姿であり、だが目を逸らさずにいると、この騎士の鎧がリングレイのものではないことに気付く。王城で出会つた異形の騎士とは形状からして全く別の物であり、同じくマントの色も差異があるが、様々な拷問を受けた鎧は至る所が損壊し

ているため、模様の判別などは難しく、辛うじてそれと分かるのは右胸の上辺りに白い塗料で描かれた竜のみであった。

他に何か知る手掛かりになるようなものが無いか一通り調べ、それを終わると不死人は騎士の元を離れ、通路を先へと進み、次の部屋の様子が目に入る。

三つ目の部屋にもまた、拷問器具らしきものがあつた。それは先のものと同じような仕組みの、ネジを締めることで間隔を狭くすることが可能な、二枚の厚い木の板が組み合わさつた器具であつたが、頭部よりも大きな部位への使用を想定しているのか、木の板は広く、そして大きな棘が付いており、おそらく身体を潰しながら穴を穿つためのものであるのだろう。

四つ目の部屋には人間を寝かせ、拘束する台が中央に置かれているだけだが、その横には大小様々な道具が散乱していた。それは例えばのこぎり、或いはやすりや太い針などであり、他の拷問器具に比べればいくらか穏やかではあるが、しかし部屋の隅に置かれた桶に目が留まる。

その桶は水で満たされており、だが水にしては表面が泡だつたまま、一向に消えようとしなない。その特徴から、おそらくこの水は海水であり、被害者の身体を道具で散々に切り刻んだ後に掛けて苦しめるためのものであるのだろう。

五つ目、六つ目、と、そのような壮絶な拷問の名残が通路を進む度、仕切りで作られ

た部屋の中に見付かり、また被害者の多くは騎士であつたのか、通路や部屋には血と臓物の他に、鎧の欠片らしきものも多く転がっていた。

「でえうっ！」

丁度七つ目の部屋の前を通り過ぎたとき、その声は耳に届く。声の主は通路の先に現れた虜囚の騎士であり、脚を失つた彼は、しかし腕だけを用了匍匐とは思えないような素早さで通路を走り、一方で不死人の対応は遅れる。

急いで武器を手にして騎士を待ち構え、だがその後ろから恰幅の良い男が現れると同時に鈴の音を鳴らし、おそらく逃げていた騎士は唐突に身体の動きを止める。

それは不死人にも覚えのある闇術であり、拘束の効果を持つものであつた。その男はアリーナの地下通路に現れた、獄吏と同じ装いをしており、それそのものであるのだらう。獄吏は動き出せない虜囚の騎士に背後から近付き、両手で持った聖鈴付きの棍棒で彼の頭を叩くと、それは弾けて肉と兜の欠片が周囲に飛び散り、騎士は動かなくなる。そして獄吏は叩き付けた棍棒を、絡みつく肉の感触を愉しむかのようにゆっくり虜囚の騎士の頭から引き剥がし、顔を上げ、不死人の方を見やる。

互いの姿を認めたと一瞬、両者は動きを止めた。

だが次には弾かれたように駆け出し、不死人は赤い煉瓦で出来た仕切りの壁に身を隠す。相手が遠距離魔法に秀でていることは既に承知していたため、視線を遮る必要があ

り、この行動によつて獄吏は一時的にこちらを攻撃出来なくなる。

ただし敵は接近した際の攻撃力が非常に高く、また拘束の闇術は壁越しにも効果を發揮する可能性があるため、この場で獄吏が近付いてくるのを待つだけにしてはならない。

それと不死人は一つ、実戦にて試しておきたいことがあつた。右手の得物を魔術師のロングソードから聖職者のウオーハンマーに持ち替え、聖鈴を鳴らして詠唱。それが完了次第ウオーハンマーで塔のカイトシールドの縁を軽く叩き、魔力を武器から盾へと流し込む。

そして壁から飛び出し、敵に姿を晒すと、こちらに向かつて歩きつつあつた獄吏は立ち止まり、まだ両者の距離が開いている状態で棍棒を振つて詠唱、その先をこちらに向けると途端に不死人の全身に重さが掛かつた。

貴族街で拾つた魔術書には記述の無い、未だ知らぬ闇術であつたそれは、対象となる者に闇術特有の重さを乗せ、身体の動きを大きく制限する効果があつた。発動が早く、距離の離れた相手にも使用出来るようだが、反面効果時間はごく短いものであるのだから。

故に現在の獄吏と不死人のように互いの距離が中途半端に開いた状態で行使したとして、走つて棍棒で殴りに来るには時が不足しており、従つて獄吏はこの状況において

は遠距離攻撃たる闇術以外、追撃の選択肢が無い。

固く閉じた唇から出る破裂音を大きくしたような音が通路に響く。これも闇術の特徴の一つであり、また前触れであるため、この直後に獄吏が回避行動の取れない不死人に對し棍棒の先から長く尾を引く黒い影を放ったのはごく当然の流れであった。

回避出来ないのであれば防ぐしかないが、ただでさえ敵の闇術によつて身体の動きを殆ど拘束されている上、それを差し引いても人の筋力では盾に掛かる闇術の重さを支えきれないだろう。

やがて高速で迫る敵の闇術の前に辛うじて不死人は盾を翳し、いよいよ衝突する瞬間を迎えると、だが長く尾を引く黒い影の方こそが軽々と弾かれていた。

実戦にて試しておきたいこと、とは、かつて魔術触媒によつて詠唱された看守の闇術を弾いた、不死人の持ち札の一つ、歪曲の盾が、奇跡の触媒で詠唱されたものも同様に制することが出来るか否か、であった。

結果、この問題は不死人にとつて最良の形で決着し、また時間経過により拘束の闇術の効果も切れたため即座に駆け出し、獄吏との間合いを一気に詰める。本来防御不可能な闇術を軽くあしらわれ戸惑っていたのか、獄吏の反応は鈍く、上から振り落とされる聖職者のウォーハンマーに對し何も出来ずにいた。

鉄と鉄とが打ち合う。剣であればともかく、打撃武器の直撃を受けてはいくら兜があ

ろうと脳震盪は免れず、しかし持ち前の気力で堪えたのか、獄吏は転倒はせず、その場に踏み止まり、至近にある不死人を引き剥がすべく棍棒をがむしやりに振り回した。

重い木で作られた棍棒をともに受けければ甚大な負傷となるだろうが、しかしいい加減な攻撃方法では不死人としても当たってやることは出来ず、引き下がって暴れる獄吏から逃れると、この間に武器を魔術師のロングソードに持ち替え、詠唱を始める。

それを終え、剣で盾の縁を叩いたタイミングで相手もようやく落ち着いたのか、獄吏は身体の正面を不死人に向けると、振り上げた棍棒で襲い掛かるが、これを迎え撃つのは闇の盾であった。棍棒は弾き返され、その衝撃により獄吏は致命的に無防備な姿を眼前の敵に晒す。

魔術師のロングソードが美しい銀の直線を宙に描き、しかし間もなくその煌きは腐敗したような醜い肉の中に飲み込まれていく。身体の芯を深々と貫かれた獄吏は一度強く痙攣して倒れたきり、動き出すことはなかった。

## 第11章 3

## 第11章 牢獄都市 拷問館 3

ロングソードから滴る血を拭い、息を整えていく。

この獄吏は扱う闇術もアリーナで出会ったものと同一であつた。であれば何故、この牢獄都市とアリーナという、離れた場所に同じ役職の者が存在したのだろうか。推測の手掛かりになるものがあるとすればここへ踏み込んだ形跡のある剣闘士の男の存在であり、リンググレイの剣闘士とはつまり、こうした牢獄から選出されたのかもしれない。

それ以上の事は考えが及ばず、また呼吸は既に落ち着いていた。不死人は先に進むべく、赤い煉瓦で造られた通路を再び歩き出す。

少し歩いただけでは早々周囲の景色は変わらず、狭くも暗くもないがどこことなく閉塞感のある通路は続き、その至るところに拷問器具の類が設置され、または転がっていた。やはりこの区画は拷問をするためのものなのだろうか。だとしても、地上で得たこの地の情勢からは、このような大規模な拷問の先にある目的を測ることが出来ないが、或いは、それが目的そのものなのだろうか。

やがて道が突き当たり、右へと曲がっていた。曲がり角の向こうは見通せず、またそ



ちらに向かおうとしたところ、多数の呻き声や何かを叩くような音が響いていたため、一度足が止まる。

不死人は重なり合う様々な音に意識を集中し、それぞれを解す。どうやらこちらに近付いている足音などの気配が無いことは確かなようだが、その上で更に慎重に曲がり角から身体を出し、奥の様子を観察する。

視線がまた通路を辿るのかと思えば、開けた部屋を一度彷徨い、そして中央に置かれた巨大な水車に捕らわれる。が、よく見ればそれもまた拷問器具の一種であった。

車輪のような形状のそれは表面部分に鉤爪の付いた鉄板が一周し、側面には車輪を回すための取っ手が付けられ、またその横には獄吏が一匹おり、何かの作業を行っている様子であった。

獄吏の太い腕は、何かを抱え込んでいた。持ち上げられ、そのまま運ばれようとする。ことで不死人の居る方角からも全体像が見えるようになったその何かは、縄らしきもので幾重にも木の板に巻き付けられたままもがく虜囚の騎士であり、よくよく周囲を見渡してみれば、そのような状態の者は他にも何体か付近の地面に置かれているようであった。

縛られた虜囚の騎士は、やがて巨大な車輪の下へと行き着く。鉤爪の付いた鉄板を接する状態で身体を縛る木の板ごと何かの装置嵌め込まれると、その場を離れた獄吏は次

に車輪の側面へと回り込み、取っ手を持つ手に力を込める。

「かきぎやっ！ あかかあっ！ あかかかかかかかかかかっ！」

騎士の絶叫と、鉄が削られていく音が室内に反響し、そこに居合わせただけの不死人すらを責める。虜囚の彼は木の板や鎧ごと車輪の表面に付いた鉤爪によって足の先から喰われ、血と肉と骨と鎧の欠片とが周囲に撒き散らされていた。

虜囚の騎士は苦しみの絶頂にあり、翻つて不死人は取っ手を回す獄吏の視界に入らないよう、部屋の間の方で少しずつ移動を開始していた。拷問の被害者を今すぐ助け出せる可能性に目を瞑れば、ここは奇襲の好機。この場に居る者達の中で確実に敵対的な態度を取るだろう獄吏の背後に回り込み、徐々に忍び寄っていく。

「あきぎやあああっ！」

突発的なその音声は、しかし獄吏のものでもなければ、車輪に削られていく拷問の被害者のものでもない。木の板に縛り付けられ、不死人の足元に置かれていた別の亡者による大声であり、それによって注意が向いた獄吏は振り返り、自身に危機が迫っていたことを悟る。

互いの視線がぶつかり合ったこの刹那、両者の間の距離は未だ半端なものであった。敵が闇術に優れる以上、その間合いは向こうにとって有利に働き、よって牽制しなくてはならず、不死人はすかさずロングソードで詠唱、闇の玉を飛ばし、命中したそれは獄

吏を一度大きくよろけさせる。

続いてもう一度魔術師のロングソードで詠唱を始め、今度は闇の盾を展開しようとするも、獄吏の立て直しの早さは全く慮外であった。不死人が剣の腹で塔のカイトシルドの縁を叩き、完成させた闇の盾を携えて走り出すと同時に、棍棒の聖鈴が鳴る。

深海を想起させる、獄吏の闇術。これによって身体全体に重さを掛けられた不死人は、物理攻撃にしか対応出来ない闇の盾を持ったまま、遠距離攻撃に晒される位置にて碌に身動きを取れない状況に陥る。

そうして響くのはやはり闇術の音であった。獄吏の先から長く尾を引く黒い影が飛び出し、成す術のない不死人の腹に直撃すると、形容し難い重さが押し掛かり、吹き飛ばされては壁に向かって弾かれ、赤い煉瓦に打たれてその場に崩れ落ちる。

誰が見ようと甚大なダメージを負っていることは確かであり、立ち上がらず、その場に倒れ伏せていれば、やがて獄吏は悠然とした足取りで不死人に近寄る。そして棍棒は止めの一撃を呉れようと、地面に転がる後頭部目掛けて力一杯振り落とされた。

だがその瞬間、不死人の身体が翻る。うつ伏せから仰向けへ、一瞬にして入れ替わった直後に差し出された左手には闇の盾を張った塔のカイトシルドが掲げられており、これに触れてしまった獄吏の棍棒は強く弾き返される。敵の遠距離攻撃を受ける際、例え傷を負っても闇の盾を温存するか否かの選択の結果の逆転であり、また強引なパ

リイは、獄吏に致命的な隙を作り出していた。

傷を押して飛び跳ねるように起きた不死人はすぐに剣で獄吏の首を刺し、そのまま貫こうとするが、しがみ付くものを探すかのように惑う太い腕はやがてロングソードに力を込めるための肩を見付け出し、力強く掴んで押し返そうとする。

もつれ合う身体は最初の勢いの分、不死人の側がやや優勢であったか、獄吏が背中から倒れ込み、上から剣を押し込むが、それでもまだ敵の抵抗は激しい。獄吏の腕が不死人を必死に掴んで引き剥がそうとし、しかし咳が口からではなく、喉の裂傷から溢れる血を伴って吐き出されるようになり、そうして生まれた血溜まりが大きくなる頃には、抵抗の意志も何もかもが肥満した身体から抜け落ちていた。

エスト瓶の中身を飲んで身体の傷を癒しつつ、獄吏の背後に忍び寄る最中に騒ぎ出した亡者を見る。

仮にも拷問をしようとしている者を倒そうとしている様子を見れば、こちらに協力的な姿勢を取るものだろうと考えるのが普通だろうが、しかし観察するにこの亡者は亡者らしく既に正気を失っているようであるため、不死人と目が合ったところでまだ騒ぎ続けるばかりであった。

気の短い者であれば斬り捨てただろうが、そうではない不死人は身体の傷も癒えたため探索を再開しようと歩き出し、だが背後で木が割れるような音が鳴り、反射的に振り

返る。見れば先程まで車輪の拷問器具によって身体を削られ、膝から下を失った虜囚の騎士が自身を戒めていた縄と木の板から抜け出し、腰の鞆から抜いたロングソードを手に何やら小さな声で呟き始めていた。

直感が働かなくとも、そのあからさまな詠唱を見れば間も無く危険が及ぶことは明白であり、不死人は車輪の陰に飛び込むと、一拍遅れて騎士の掲げたロングソードの先から白い塊が出現。光りながら宙に浮び、次の瞬間には炸裂して周囲に光の矢を乱発した。

言わずもがな魔法であったが、これは未だ目にした覚えのないものであり、浮遊する塊は継続的に矢を撃ち続け、そしてやけに強い輝きを放っていた。車輪の間から見るに、塊は結晶によって形作られており、それが余計に光を反射しているのだろう。

不死人は結晶の塊が攻撃を続ける間は車輪を盾に隠れて凌ぐことに決め、しかし魔法の矢が周囲に撒き散らされ、その際のガラスが砕けるような音が氾濫する室内のどこかで、また小さな呟きが紡がれているのを耳が捉える。

見ればまた、足を失くした虜囚の騎士がロングソードを構えていた。だが互いの間には巨大な車輪が横たわり、騎士から攻撃するにしても不死人からするにしてもこれが阻む事になる。敵が行おうとしているのは、魔法による何らかの付与か。

やがて詠唱が終わったのか、虜囚の騎士の持つロングソードが傾き、その先がこちら

を差す。これこそは直感であり、次に不死人が取った行動は、まだ結晶の塊が矢を乱発しているにも関わらず、車輪の陰から飛び出すことであり、するとその直後に騎士の持つ剣から輝く結晶を内部に孕む巨大なソウルの矢のような魔法が放たれ、先程まで盾にしていた車輪を貫き、その向こうの煉瓦に大きな穴を穿つ。

## 第11章 4

## 第11章 牢獄都市 拷問館 4

貫通能力を持つ、高威力の魔法。虜囚の騎士が放ったのはそのような術であった。着弾の跡からして、それ自体恐るべきものであり、警戒しなくてはならないが、これの脅威の本質は魔法同士の組み合わせ、即ち敵を遮蔽物へと追いやる浮ぶ結晶の塊の魔法との相性があまりにも優れている点であった。

二度とはさせてはならなかった。不死人はすぐに駆け出し、浮ぶ結晶の塊が吐き出す矢を塔のカイトシールドで受け、瞬く光に次々に襲われながらも、そこへうつ伏せになつてゐる虜囚の騎士の元に近付き、後ろに回り込むと同時に、鎧の間に魔術師のロングソードを滑り込ませ、柄に力を込めてそのまま敵の身体を刺し貫いた。

既に足から大量の血を失つていたせいにか、虜囚の騎士はあつけなく力尽きて動かなくなり、程無くして浮ぶ結晶の塊も消えていく。

剣を引き抜き、不死人は自身の身体をぎつと見回す。するとやはり、結晶の塊から放たれた矢が何発か盾を抜けたらしく、それらしい傷がいくつか見られるが、あまり大きなものではなく、むしろ術の見た目が派手やかであることに比べれば、威力は瑣末です

らある。

しかし宙に浮ぶ塊にせよ、その後の巨大な魔法の矢にせよ、それらが共通して持つ、結晶の混ざったような特性は未知であり、コネリーもそういつた魔法は扱っていないかった。

リングレイが抱えている謎は底知れない。果たしてこれ以上深くへと潜ったとして真実が得られるかどうかは定かではないが、いずれにせよ不死人には進む以外の選択肢が無い。周囲を見回し、他の木の板に巻き付けられた亡者らが手向かう様子がないことを確認した後、臓物が散乱する床の上を歩き始める。

その巨大な車輪の拷問器具がある部屋を通り抜けると、次には同じように広い部屋があり、中央には血肉のこびり付いた拷問器具が配置されていた。木の箱のような見た目のその横には取っ手が付いており、おそらくこれを回すことで箱の中に閉じ込めた犠牲者を押し潰す仕組みであるのだろう。

この付近には獄吏も虜囚の騎士も居ないため、不死人はその拷問器具の横を通り抜け、細くなっている通路へと向かう。

道の先に亡者らの気配は無く、不死人は直進するが、しばらく歩いていると右の壁に扉が見付かり、それはこちら側から施錠されていた。鍵を外し、扉を開いた先にあったものは、先刻話し掛けてきた、壁にもたれかかって力尽きている亡者の姿であった。ど



うやらここは一度来たことがある場所らしい。

そこへ行く意味はないため不死人は通路に戻り、また真つ直ぐに進み始めると、やがて下へ向かう階段を発見し、それを降りていく。

階段は踊り場で折り返す箇所を除けば物も置かれていないため見通しが良く、灯りもあるため特別警戒心を煽るような場所ではなかったが、しかし階段を降りた先に伸びる通路の方から奇妙な音が響き、それが不死人の意識を引き付ける。

正確に言えば、その音は通路の突き当たりを左に折れた先を出所としているものであった。音の性質を例えるなら、まるで古い家屋の家鳴りであり、木が小さく破裂し、或いは罅割れていくような印象を抱かせた。

「きゝあゝあゝあゝっ！ きゝひいいいっ！」

通路を前に二の足を踏んでいると、案の定、奥からの叫びが響く。その前にあった奇妙な音が拷問器具の出したものであったなら、被害者が居たとして何ら不思議ではなく、凄惨な光景が待ち受けているのは確実であり、またこの先では戦闘が予想され、不死人の足は益々踏み出すことを躊躇う。だがこの先の獄吏が今まさに拷問に熱中しているのであれば、今度こそ奇襲の好機となる可能性もある。

最初の一步を強く踏み出し、それさえ果たせば二歩三步と自然に続き、やがて通路を左に曲がった先にある扉に近付くと、それを開くべく取っ手に触れる。

「あぎやあつー！」

重い鉄製の扉は、暴力的に開放された。これに弾かれた不死人は態勢を直しながらも後ろに下がる一方、扉を開けた張本人たる虜囚の騎士は通路に転がり込むや否や勢い良く走り出し、塔のカイトシールドがそれを押さえる。

思いがけず力比べを強要されては心積もりや踏ん張りの足りない側が敗北するのが必然だが、しかし盾に掛かった力はどこか軽い。それがどうかとカイトシールドの横から相手を覗き見ると、突進している虜囚の騎士には両腕が肩から存在していなかった。これでは体重が不足し、突進の威力も減ってしまうのだろう。

それならばこのまま押し返せるかと手足に力を込めようとした矢先、急激に身体全体に重さが掛かり、それは虜囚の騎士も同じであつたらしく、共に動きが取れなくなる。間近にある血で汚れた鎧越しに見えるのは、醜く膨れた身体を見せる男、獄吏であつた。予想通り棍棒をこちらに向けており、つまりは一緒くたに闇術の拘束を受けているのだろう。次には再度棍棒を振り上げて聖鈴を鳴らし、無防備な者達に向け長く尾を引く黒い影を飛ばした。

身動きの取れない側はただその瞬間の訪れを待つ事になり、間も無く強い衝撃に見舞われ、不死人は虜囚の騎士共々通路に吹き飛ばされる。が、実の所そう不利な状況ではない。何故なら獄吏からの射線は間に立つ騎士が完全に塞ぐ形となつていたため、敵の

闇術が直撃したのはあくまで虜囚の騎士のみであり、不死人の負った被害は軽く煉瓦の壁に打ち付けられる程度の、ごく軽微なものであった。

やがて闇術の拘束も霧散し、不死人はこの機を逃さず駆け出すと、通路の曲がり角にまで戻って獄吏から姿を隠しながら、右手の武器を魔術媒体たるロングソードから奇跡媒体のウォーハンマーに持ち替え詠唱を始める。

用意したのは歪曲の盾であった。未だ距離が開いているこの状況では、近づく前に拘束の闇術を受け易く、その後には飛来する長く尾を引く黒い影への対応こそ重要視するべきだろう。そうして盾への付与が完了すると、不死人は曲がり角から飛び出し、通路に入り込んだ獄吏に向かって一直線に駆け出す。

走って接近を試みる不死人に対し、その場に立ち止まった獄吏は棍棒を振るい、しかし事前の予想に反してもたらされたのは拘束魔法ではなく、長く尾を引く黒い影を飛ばす闇術であった。敢えて歪曲の盾を使う理由も無く、不死人は駆けながら横に飛び上がるのと、一瞬だけ壁を走るようにして飛来する闇術を躲し、その後着地して獄吏との距離を詰め切る。

聖職者のウォーハンマーを振り上げつつ右足を踏み込み、しかし実際に攻撃を行う前に獄吏が横に振り抜く棍棒がこちらに届く見通しがあったため、これを攻撃圏内から一歩分退いて回避。棍棒が強く扇いだ風が顔面を押し、そして完全に通り過ぎた直後に再

度踏み込み、肩に担ぐ格好で構えていた武器を敵の頭部目掛けて叩き付ける。

鉄と兜が打ち鳴る、その筈が、土壇場で獄吏が身体を捻ったことにより、聖職者のウオーハンマーは敵の頭部ではなく左肩を潰し、それは致命傷には及ばない。とは言え負傷としては大きいものであったのか、獄吏の左腕は悄然として垂れ下り、最早使いものにならないだろう。

反撃として棍棒のひと振りが寄越されるが、それは右腕のみの力を含みとしており、見るからに軽い。不死人はこれを塔のカイトシールドで受け止めるとそのまま押し込むようにして左腕を前に突き出し、右手はウオーハンマーを捨てて腰の鞘からロングソードを引き抜き、盾の縁に切っ先を滑らせる。

剣は獄吏の胸に刺さり、また更に深く沈み、肺などを突き破った感触が手元に伝わるが、敵の往生際も悪く、酷く暴れ始める。このままでは予期せず負傷する可能性もあるため、不死人は剣を引き抜いて一度後退するも、それが最後の抵抗だったのか、獄吏はひと暴れしたあと段々と姿勢が傾き始める。

放つておいたところで、このまま力尽きるのだろうか。だが獄吏が持つのは奇跡の触媒を兼ねる棍棒であり、回復の術を行使する可能性もある。故に必ず止めを刺さなくてはならず、不死人は掲げた魔術師のロングソードで以て獄吏の胸を深く斬り付け、その裂傷から溢れ出した血が致死量を満たしたのか、重い身体が地面に横たわる。

ここに得られた平静が、欺瞞の元に成り立ってはいないか。不死人は念のため腕を失った虜囚の騎士の状態をよく観察するが、余程獄吏の闇術が効いたのか、彼もまた身動き一つせず地面に倒れ込んで果てており、杞憂は杞憂のままに終わる。

この騎士は匍匐していた者と同様、必死に獄吏の責苦から逃げようとしていたのだろう。それを邪魔立てしてしまったことについて思うところが無いでも無いが、それよりも意識が向くのは獄吏の闇術についてであった。今更だが、彼等が得意とする拘束の術は、逃走する虜囚らに対して行使することを本領としているのかもしれない。

## 第11章 5

## 第11章 牢獄都市 拷問館 5

ともあれ周囲に敵対する者の気配は無くなったため、不死人は聖職者のウォーハンマーを拾い上げてから動けなくなった獄吏の脇を抜け、通路の奥の新たな部屋へと進み出る。

通路よりも遙かに広い造りのその部屋は、しかし床中に折り重なる人肉や汚物が歩く足を柔らかに抱擁するため、むしろ通路よりも狭く、また中央には大型の拷問器具が置かれており、空間を圧迫する大きな要因となっていた。

その器具はレバーの付いた数本の丸太と、そこから伸びる四本の鎖を主としたものであった。おそらくは鎖を被害者の四肢に巻き付け、レバーを引くことでそれを限界以上に引き伸ばし、引き千切るための仕掛けであり、現にこの拷問器具の二本の鎖には鎧を着けたままの腕がそれぞれから吊り下がっていた。元の持ち主はすぐ近くで斃れている者の他には居ないだろう。

見るに惨たらしいその拷問器具の横を通り過ぎ、不死人は次の部屋へと入る。

扉も無く、区切りの曖昧な出入り口を通り抜けた先はまた大きな部屋ではあった。し

かしそこに設置されていた厚い木の板で作られた水槽は部屋の殆どを占めるほど巨大なため、決して広い部屋ではなく、実際に移動出来る場所はごく限られたものであった。

水槽に近付き、中を覗き込む。

不死人の首と同じ程の高さまである水槽は、赤黒い汚物を満杯に溜め込み、微かにたゆたう。面積の大きさを考えれば、想像を絶する内容量であり、これを拷問後に肉片を捨てる場として使っているのであれば、如何ほどの人体を必要とするのか、それもまた想像は及ばない。或いはこれをも拷問の一種で利用していたのなら、憐れな騎士達は仲間の臍物で溺れ苦しんだのだろう。

背徳極まりないものであったからか、無意識の働きで不死人の足は水槽から遠ざかり、そうなれば殊更近づく理由も無くなる筈であった。だがその場から部屋の中をよく見回したところ、水槽を挟んで向こう側に上へ向かう梯子が一つと、その脇に扉らしきものがあるのを見付け、そちらに行くにはどうやら壁と水槽との間の細い道を通り抜ける以外に選択肢が無く、再度赤黒い汚物と距離を接しなければならなかった。

人間として、または生物として根源的な嫌悪感を覚えるその細い道の上へ、不死人は一つずつ足を乗せ、時折立ち止まっては異変に備え、何も起こらないと見るやまた足を動かし、数歩分進んでから止まり、その繰り返しで道の半ばにまで至る。

その音に全身が強張り、出所を確かめるべく首が動くが、それらを同時に見ることは叶わなかった。汚物の水槽から飛び出した、四肢がいくらか欠けた虜囚の騎士。それが一匹ずつ通路の先と、通路の後ろに落ち、不死人の前後を挟んでいた。

どちらを先に対処すべきか、一瞬の逡巡で間が開いたのは命取りとなつたか、前方の虜囚の騎士が地面に寝転がったまま右手のロングソードを掲げて何かを呟き始め、しかし即座にそこへ駆け寄つた不死人は敵の剣を蹴り上げて放り捨てさせ、そのまま横に伏せる鎧の継ぎ目を狙つて魔術師のロングソードを突き立てる。

上から掛かつた力が伝わつた剣は存分に敵の身体を貫き、これが致命傷になつた虜囚の騎士は斃れたようだが、休む間も無く不死人は振り返つてもう一方の騎士と正対し、走り出そうとしたところでそれに気付き、意気が収まつていく。

その虜囚の騎士は千切れかかった片腕のみで水槽から這い出した際、全ての体力を使い果たしたのか、今は浅い呼吸に依じて胸を上下させる以外の動きを見せず、ただ汚物に塗れて横たわっているだけであつた。

憐憫を喚起する姿であり、また完全に脅威から除外出来る訳でも無い。故に不死人はその騎士の元に歩み寄ると、先程と同じく鎧の継ぎ目に剣の先を当て、一息に押し込んだ。

これが束の間とて、彼は苦痛から解放された。だがリングレイは不死を生む亡者の



地。ここに死の安らぎなどあろう筈も無く、この者達も再び動き出すのだろう。

やがて障害の無くなった水槽と壁との間の道を通り抜け、不死人は梯子と幅の広い扉のある場所にまで出る。

二つのうち目を引くのは梯子の方であった。奇妙な事に、上に向かって伸びるこの梯子の先にあるのは出入り口ではなく、天井の壁である。本当にただの壁であるならここに梯子を設ける意味は皆無だが、試しに梯子を登って天井を手で押したところ、そのこの壁の一部分が正方形の形に持ち上がり、やはり蓋であったそれは完全に開く。

蓋から上の階を覗くと、場所としては不死人に話し掛けてきた亡者が居た付近であり、これで退路に直通する道を拓いたことになるようだ。その後は梯子を降りて戻り、この横にあつた幅の広い鉄の扉の方を向く。

鍵の無い扉を開いた先にあつたものは、これまでと違って灯りの無い、地下空間の暗闇がそのまま横たわる通路であつた。

触れてはならぬもの、見てはならぬものがその奥に存在している。そのような予感を裏付ける証拠はこれまでに目撃した数々の凄惨な拷問の現場であり、疑うべくも無いが、それでも退く道は無い。

灯りに背を向けた不死人は、やがて一歩ずつ歩き出し、闇の中へと浸かつていく。

視界は黒く染まり、眼が映すものは多くない。壁や天井ともなればどのような様相で



肉の繊維が引き千切れ、骨が裂けて割れていくが、それは摂食行動ではなかったのだろう。そうして混ざり合つていく赤黒い者達は殆どが巨体の中には入らず、血と共に地面へと零れ落ちていった。

不意に土気色の巨体は動きを止める。そして徐に顔の正面を不死人の方へと向けるが、果たしてそれは本当に顔と言えるものであったのか。まず顔の下の部分は血肉で汚れてはいるものの、咀嚼していたはずの口が無く、目や鼻、耳などの部位も見受けられない。

目が暗闇に慣れたか、段々と見えるようになってきた身体の方もおかしい。膨れたような胸は首や頭部の区分が無く、そこから長く伸びている筈の腕は口と同様、何時の間にか消えており、自重を支える脚は木の根のようなものが大量に腰から下に生え、それぞれが自由に蠢いていた。

「ぶびいいいい、ぶびびびつ、ぎつ、ぎひいつ、ぎつつつひひひひひひひひひいつ！」  
怪異を体現したかのような形貌。まさに拷問館の主たるに相応しいその化け物は、不死人を見据えながら血液か涎かを垂らし、豚の啼き声のような汚らしい嗤いを響かせていた。

## 第11章 6

## 第11章 牢獄都市 拷問館 6

「ぎいっ！」

走り出した拷問館の主に合わせ、不死人は横合いに飛び出す。半端に距離が近かったためか、動き出した直後で速度の乗っていない突進を避けるのは容易なことであったが、しかしその認識が根底から間違っていたことをすぐに思い知る。

見送った拷問館の主の背はそのまま遠ざかり、やがて闇に紛れる。敵の最初の行動には攻撃の意図すら無く、その姿を見失う結果となり、こうなれば視力を頼りにして位置を探ることは叶わない。

不死人の意識は耳により集まっていた。水飛沫か、或いは血飛沫か。地面の上に張る液体を木の根のような足が跳ね上げる音を聞きつけてはそちらの方に身体を向け、敵の出方を待つ。

あのような形状の敵では如何なる手段にて攻撃を行うのか、全く見当も付かず、臨機応変且つ即座に対処しなければならぬと決意すれば身体は凝り固まり、故に遥か後方から水の音がした時、不死人は勢い良く振り返る。

迫り来る敵に目を瞠り、だがその先にあるのは闇のみであった。

「あああああつー！」

叫びは背後から轟いた。急ぎ振り返り、すれば視界を覆うのは細かな歯を一周並べた円形の巨大な口であり、それは棒立ちの好餌を飲み込もうと瞬く間に押し迫る。

横に身を投げ出し、円形の口の中に入り込むことは免れ、しかし巨体のどこかが当たった衝撃は強く、不死人は遠くまで吹き飛ばされていた。受身も取れずに転がり、しかし地面の凹凸を何とか掴んで身体を止めると、起き上がってエスト瓶を飲み、身体を治しておく。

回復は隙の多い動作であったが、拷問館の主は特に見向きもせず、多数の足を自在に動かしてまた闇の中へと去っていった。不死人は剣を構え直し、改めて警戒を強めつつも、思考は否応無く敵の不可解さに吸い込まれる。

まさしく悪夢に見る生物が備えていそうなあの丸い口は、恐らく不定形に近い性質を持つっていると予想され、そうでなければ胴の直径とほぼ同じ大きさのそれを隠す方法などありはしない。

また複数個所で同時に音がした件については、どのような手段を用いてそれを行ったのかはともかく、単なる陽動と見て問題無いだろう。勿論、闇を削る者達のように、この場に複数の敵が存在している可能性は否定出来ないが、それにしても気配が感じられ

ず、またあのような邪悪な意志を持つ者が多く居るとは考えにくい。

どちらにせよ先程の回避は危ういものであったため、続けていけば巨大な口に飲み込まれる公算が強く、敵が陽動に用いた手段を急ぎ看破しなくてはならないが、しかし複数個所で跳ね上がる液体の音がそれどころではないと不死人に告げる。

音は後方、そして左の方角を出所としていた。思わず飛び出しそうになる足を地に押し付け、そのまま僅かに機を先送りにすると、右方向の遠方より、群集が殺到するような乱雑な足音が響き、鼓膜を震わせる。

敢えて振り向くまでも無く、不死人は身体の向きを正面にしたまま前方に飛ぶ事で猛進する拷問館の主を躲し、だが遠ざかっていく筈の巨体はすぐそこで静止していた。

袋のような胴の細まった口の中から伸びる、白く乾いた一本の長い腕。これを地面に突き刺さして支えとした拷問館の主は突進の慣性を殺し、不死人との距離を近いものにしたまま急停止していた。

「ぎええええええいつ!」

次の瞬間には拷問館の主は叫びながら横方向に身体を振り抜き、その動きに連動した腕は地面と激しく摩擦しながら薙ぎ払われる。長い腕は当然攻撃範囲をも長大なものにしているため回避は間に合わず、咄嗟に盾を翳すも両者の体重差や臂力の差は大きく、防ぎ切れずに不死人は吹き飛ばされていた。







肋骨や背骨を剥き出しにした人体であった。

鎖の揺れるような音は一層激しくなり、広間の至る所で血をふんだんに含んだ人体が地面に落ちる音が鳴る。

不死人は走り出した。敵はつまり、肉塊などを投げるにあたって天井から吊り下がったような姿勢を取っており、また振り子のように動くことで勢いを増すことや、狙いを付けることは容易く、加えて言えばその状態からの落下攻撃の速度は地面から跳躍する工程を一つ省く分、それまでの突進等とは比較にならないほど高速の攻撃となる。

「ぎえあああああああつっ！」

振れるように凄烈な回転運動を加えながら拷問館の主が落ちる。土気色の肌が巻き上げる空気は暴風と化し、威力の凄惨さを窺わせたが、直前に走り出した判断が功を奏したか、直撃を避けた不死人は風に煽られるだけで済む。もしも誤った行動を取っていたら、高速で回る木の根のような足に掻き混ぜられながら巨体の重みで潰され、軀とすら分からない姿に成り果てていただろう。

そのまま走って距離を空けると、拷問館の主は運良く命脈を繋いだ獲物を一瞥して闇の中へと走り、この隙にと不死人の手は闇の盾を用意するべく詠唱の構えを取り、他方、脳は敵への対抗策を編み出すべくその働きを活発化し始めていた。

予測だが、敵の隠す種は到底出し尽くしたとは言えない。だが屍肉を用いたものも含

み、現状においては物理的な攻撃を主体としていることはほぼ確實であり、であればやはり闇の盾が高い効果を発揮しそうなものだが、問題はその使い所である。

いくら物理的な衝撃を自然の摂理を曲げるかのような反発力で迎え撃つとは言え、拷問館の主のような巨体の重量を利用した突進を押し留めるのは難しく、あまり成功の見込みは無い。しかし、それ以外の部位であれば或いは。

左右両方の方角にて、屍肉が地面を叩く。その際の音を聞きつけても動じずにいると、忙しい足音は正面から近付きつつあり、間も無く暗がりから突き抜けて現れる巨体を認めたため、不死人はその進路から外れるべく横へ大きく飛ぶ。

両者がすれ違う筈の刹那、拷問館の主は腕を地面に打ち込み、自身の巨体を急停止させる。そして口の中から腕を伸ばしたまま身体を横に振り抜き、突き立てられた爪が地面を深く抉りながら不死人に襲い掛かる。

## 第11章 7

## 第11章 牢獄都市 拷問館 7

「ギュー」

だが衝突すれば、闇の盾によつて腕の一撃を大きく弾き返され、拷問館の主は姿勢を崩した。

上手く作り出せた隙で不死人が的と定めたのは膨れ上がった胴の側面であつた。首などの区分が不明瞭な以上、狙いが大雑把なものとなるのは止むを得ないことと切り捨て、魔術師のロングソードを掲げたまま強く踏み込み、垂直に斬り付ける。

銀の剣が土気色の肌に食い込み、衝撃で丸い腫瘍を多く含んだような濃厚な血が吹き零れた。手傷を負つたということはこの攻撃が有効であつたと、そう理解したのも束の間、その認識と眼前で起きた現象との間に看過出来ない齟齬が生じていた。

垂直に斬り付けた筈が、水平方向に伸びた裂傷がそこには生まれていた。それも、一度しか斬りかかつていないにも関わらず、横方向に描かれた赤い傷口は幾条ともなり、並んだそれはまた僅かな時間の内に柔らかな動きで互いに吸い付き、元に戻っていく。そもそもが傷ですならいと見るべきか。

「ギョッ」

やがて姿勢を取り戻した拷問館の主はこちらに一度視線らしきものを寄越すも、仕切り直しを選んだのかその場から駆け出し、闇の方へと逃れる。

今しがたこちらから攻撃した際の感触等は理解し難く、今になって思い返したところでそれは同じであつた。効いているのかどうかは疑わしく、ただ闇の盾による防御が有効であることを確かめることが出来たのは収穫だと言えるだろう。

得物の選択は塔のカイトシールドと魔術師のロングソードにほぼ固定され、またこのように相手が潜んでいる間に闇の盾を用意するのも定石となり、実際に付与を行つていると拷問館の主が遠くから顔の先だけを不死人に見せる。

走り出そうとするような、急激な動きを見せる素振りも無くその場に留まる姿は却つて警戒心を煽るものであり、下手にこちらから動けず、間に長い距離を有したまま睨み合っている、唐突に巨体が膨らみ始めた。

その際、土気色の胴には一直線の細い筋が何百本と生まれ、向きを同じくして腰から走つていくそれらは細く窄められた口へと収束し、やがてその向きが獲物へと差す。

横方向へ回避行動を取り始めた不死人を、矢の如き勢いで噴き出された屍肉の激流が追う。出始めこそ躲すことには成功するものの、相手が液体に近い性質を持ったものでは避けようがなく、直撃すると理解した瞬間に己む無く闇の盾を翳し、身を固めた。



ら血が溢れていたが、出血とはならないのだろう。固形物混じりのそれは液化化した屍肉であり、同時に拷問館の主が体内に溜め込んでいる砲弾と予想されるため、これを失ったとて直接的なダメージとはならないが、しかし奪うことに成功すれば敵は遠距離攻撃を行うことが出来なくなる可能性があり、そうなれば状況は大きく変わる。

暫定的なものではないが、一応の戦闘の方針を固めた不死人は更に闇の玉を放とうとロングソードを構えるも、拷問館の主はそこから離脱しようと走り出していった。あの特徴的な形状をした足は安定性等が高いようだが、小回りが必要とされる動きを不得手とし、よって攻撃に転じる場合は一度相手から距離を離すことを理想とするのだろう。

そして盾を失った今、それをただ見送るのは後手に過ぎる。不死人は離れていく土気色の背を追って走り出し、だが早くも足の速度の違いによって引き離されつつあった。段々と闇に溶けていく拷問館の主の姿を目にしては一層足に活力を注いで駆けるしかなく、故に前方への注意が僅かに疎かになり、唐突に闇の先から現れた物への反応が遅れる。

それは地面から生える、極大の棒であった。あわや正面衝突するところまで身を捻って躲し、絡まりそうになる両足を落ち着けさせて通り過ぎる際、棒の根元に埋め込まれた機械部品が目に入る。レバーなのだろうか。

人の手では作動しそうにないその大きさも然ることながら、このような広間の中央に

設置されている点も不自然極まりないが、ここは急場であるためかかずらっている余裕など無く、不死人はそのまま走り続け、やがては減速し始めていた拷問館の主に追いつくことに成功する。

巨体の足は忙しく蠢いてはいるがまだ方向転換を終えていないらしく、無警戒な背の前に魔術師のロングソードにて詠唱を行い、闇の玉を放った。

防ぐ術が無ければ、避けようともしなかつた拷問館の主は闇術の重さに背面から打たれ、やや姿勢を傾けながらまだ液体になり切っていない、便のような血肉を吐き散らす。

その様子はそれまでの覇気を欠いており、また未だに旋回する気配も見られないためこのまま追い討ちを掛けようかと、魔術師のロングソードを構えた時、袋のような身体が上に向かって高く伸び、そして次の瞬間には頂点にあった口の部分が後ろに向かって垂れ下る。拷問館の主は瞬時にして前後の位置を入れ替えて地面を蹴り、一方で急激な動きに追従し損ねた不死人は巨体に刎ね飛ばされる。

幸いにして駆け出したばかりで威力が乗っていない段階での衝突であったからか、弾かれた際の衝撃はそれほど強いものではなく、エストで回復すればたちどころに身体機能の問題は解決したが、しかし拷問館の主は既に走り去り、今はもう闇の中に紛れてしまっているのだろう。

「きつつひい、つひひひつつー！」

勝利を確信したつもりなのか、遠くから差し向けられた声は残響し、宙を漂っては空になった不死人の左手を嘲笑う。相手の出方を待つしか無いこの状況において、塔の力イトシールドを失くし、闇の盾を展開出来ない状態は致命的な隙を生む可能性が高い。拷問館の主はそれをよく理解しているのだろう。

この不利を覆すためにと気を静め、潜者するも、もう間も無く敵の攻撃がやって来るという予感がある以上、あまり時間を割くことは出来ず、都合良く閃きが降りることもない。

ならば不死人が恃みにするのは地力、そして勘であり、虚ろな空間に耳を澄ませて巨体の気配を探りながら魔術師のロングソードを構え、詠唱を始める。

分の悪い賭けに挑む者は、勝負の瞬間まで心臓の音を高鳴らせ、落ち着かない心地でいたとして不思議ではなく、手の先が震えるのもままある光景だろう。

だが心を失った不死にとつてそれは無関係の要素であり、ごく正確な機と狙いで魔法は放たれた。闇の向こう、先程のレバーの横から僅かに姿を見せた拷問館の主に向かって闇の玉は真つ直ぐに飛翔し、そして巨体が膨れ上がり、自在に伸縮する円形の口が小さく窄められた瞬間に着弾する。

それは屍肉の激流を放つ直前であったのだろう。闇の玉によって口を塞がれ、飛び出す筈であった奔流は体内を駆け巡り、やがて行き場を失い暴れ回る屍肉に耐えられず、



拷問館の主は盛大に破裂した。

固形物混じりの血が降り注ぎ、木の根のような足はよろけながら数歩後ろに歩いて倒れていく。また白く長い腕は掴むものを探そうと宙を虚しく迷い、やがてその付近にあったレバーを見付け出し、巨大な棒は爪の長い掌の中に収まると倒れていく体重の支えとなる。しかし力が入りすぎたのか、レバーは徐々に倒れ、最後には地面の中に収まってしまっていた。

## 第11章 8

## 第11章 牢獄都市 拷問館 8

重厚な物体が噛み合う。おそらく不死人が居る広間よりも地下で起こったその出来事は振動を発し、それが徐々に円滑に駆動して小さなものになっていくと、辺りの空気が変化し始める。

血の雨が次第に落ち着き、暗闇に相応しい無言が沈殿し、この場を満たそうとしていた。

だがどこからか漂ってきた仄かな歌が、闇の沈黙の上に降りる。

あの侍従長の美しい歌声ではない。男女様々に幾人か重なった昏い歌声は天井から不死人の頭上へと注がれ、そして伝播するようにその発する範囲と人数を次第に増し、渦巻くように流れを深めていく。

「そう、まさに呪いと海に底は無く、こうまでしてさえ、遂に消えなかつた」

丈夫な喉が発した、雄偉な印象すら持たせるその言葉は、暗闇に棲む破裂した怪異が伝えたものであった。

袋のようであつた表皮は細かく裂けて数百にも及ぶ触手になり、それが花のように咲

くと、それまで中に収まっていた巨大な人影が露になった。触手に囲まれ、上半身のみに座すそれは、屍肉に塗れて黒ずんだ、しかし亡者特有の干乾びた肌をした長髪の男であつた。服などは纏わず、首から下げた金色をした十字のペンダントが一つ輝き、それを唯一の装飾としている。

異様に長い右手に比べ、身体の比率に準じた大きさの左手には黒い大剣らしきものを持ち、長髪の亡者はそれを軽く払うと、剣が描いた宙の亀裂から割つて出るようにして真つ黒な炎が生じ、上に昇つていく。

天上から吊り下がっていた巨大なシャンデリア。蠟など存在せず、そこに無数に突き刺された亡者の身体が炎に捕まつて燃え上がり、そうして生まれた光が彼の業を暴く。

鉄の管を身体中に刺され、或いは貫かれた亡者。不死故に未だに蠢きながらも、管から送り込まれた高温の蒸気によって歌う楽器となり、数百、数千を越して万の数にも上る彼等は天井や壁に夥しく薙き合うかのように埋め込まれていた。

昏い歌声は、段々と狂つたような調子のものへと変わつていく。そしてそれに包まれた彼は黒曜の大剣を胸の前で構えながら、それぞれ波打っていた腰の回りに広がる触手を静め、先を立たせて王冠のような形を取らせる。

「ならば皆苦しみ続けるが良い！ 永遠に！」

炎によつて形作られた巨大な十字の瞳。夕暮れの逆光のような鮮烈な色で揺らめく

それを背の後ろに浮ばせ、リングレイの王、ルドウィークが嘆きを大喝に込める。それこそが、この地の人々が時折見せた悲哀の感情の奥に秘められたものを剥き出しにした姿であり、凄絶な憎悪の化身である。

灯りによって所在が判明した塔のカイトシールドを拾い上げ、不死人は巍然たる風格で歩み出す王と対峙する。そこには先程までの獣のような様相が無く、突然飛び付かれるような雰囲気は感じられないが、姿勢を起こしたルドウィークの身長は増しており、体格の差は更に開いている。また剣を扱うのであれば側面へ近付いた際の反撃が素早いものになっていると予測されるため、あまり距離を詰められれば不利になる見込みが高い。よって不死人は魔術師のロングソードを構え、詠唱して闇の玉を飛ばし、敵の牽制を試みる。

何故その術を選んだのか、と問うのなら、この魔法が前の形態の時であれば大きな効果を発揮していたからだ、という回答になるのだろう。だがルドウィークが自身の顔前に翳した異様に巨大な右手の甲は、呆気なく闇の玉を受け止め、掻き消していた。

衝撃に対する耐性が高い可能性が脳裏を掠め、素早くソウルの矢を放つも、王の右手は甘い考えごとそれを霧散させる。前の形態の時から既に厄介なものであったが、ルドウィークの太く長い右腕は今や盾としての役目も果たしており、中途半端な攻撃では破れないどころか、牽制にすらなっていないかった。

歩みを止められなければ敵は近付く一方であり、やがて木の根のような足が俄かに騒ぎ出すと、次の対抗策を打ち出す前の不死人の上に巨大な影が重なる。

「イヤアツ！」

上から振り下された黒曜の大剣を真横に抜けて躲す。空振りになって地面を叩いた斬撃の速度は並みの程度であり、殊の外回避に苦労するものではなかったが、言い方を変えればそれは単に力任せの一撃とは違い、変化の余地を残している。

それこそが脅威であつた。不死人が回避行動を取つた直後、ルドウイクは既に左手を振り被つており、鏡面ばかりの黒い大剣は翻ることで炎からの灯りを鈍く乱反射させる。

「セアツ！ ラアツ！」

呼気と共に連続して繰り出された攻撃は、紛うことなき剣技であつた。右に飛び、左に飛び、回避直後の身体に無理を聞かせて大剣を潜り抜けるが、それは直撃こそしなくとも次に取れる選択肢を確実に削ぎ落とし、磨かれた剣理によつて不死人を追い詰めつつあつた。

「ヤアアツ！」

連撃の四つ目。横に大きく薙ぎ払われたルドウイクの剣を後退して逃れ、そのまま距離を取ろうと走り出す。しかしこれは悪手であり、この距離で背を見せては何らかの

追い打ちが予測されたが、とは言え近距離に居たままでは戦いが終わるまで敵の独壇場が続く可能性が濃厚であるため、ならば強引な離脱を図った代償を支払う方が安く済む。

そのような覚悟を胸にしたまま不死人は走り、そして走り終えて振り向く。

決して追撃の手段が無かった訳ではない。彼は王者だけが纏う肅然とした佇まいでその場に残り、不死人を静かに見据えていた。

先的一幕は小手調べか、或いは戯れの類であったか。事実、ルドウィークの右手が盾として活きている以上、押すも引くも向こうの思いのままであり、勝負を急ぐ必要が無い。であればあの防御をどうにか無力化したいものだが、不意に持ち上がった黒曜の刀身の上で黒い炎が踊り、滑っていく様子に目が奪われる。

「ラアツ！ ヤアツ！」

未だ両者の位置は隔絶しており、にも関わらず放たれたルドウィークの二つの斬撃は下から掬い上げるような軌道を描き、そこに取り残された黒い炎は形を残したまま不死人に向かって地面の上を走る。

「イヤアアツ！」

迫る二つの炎の柱をどのようにして避けるか判断するよりも前に、ルドウィークの大剣はもう一つ黒い炎の柱を走らせ、だがそれは不死人に向けられたものではなく、横の

壁の方へと放たれていた。

それは明らかに何らかの搦め手の前兆であると予想されるため、このタイミングでは敵から目を離してはならないが、しかし先行して走る二つの炎の勢いは凄まじい。已む無く不死人は一度眼前の状況に集中して迫り来る炎の柱を左右へ飛んで躲し、すると間髪入れずに視界外から空気を燃やす熱と音とが近付きつつあることを感知する。

現時点でごく至近のため回避は不可。従って塔のカイトシールドを前にしながら体の前後を反転させ、覆い被さろうとする炎の柱に対抗する。

だがそう出来たのはたった一瞬の間のみであった。闇術と同一の特性を持っているのか、黒い炎はまず重く、力で迎え撃つなど無謀の極みであり、結果不死人は盾ごと押し流されながら高熱に晒されることとなった。

身を焦がしながら認識を改める。黒い炎は、炎であって炎ではない。分類が難しいが、重さを伴う点も含め、自ら標的を追尾するという特徴も闇術に見られるものであり、そうでなければ意志の無い炎が壁を走って迂回して来る、などという芸当を成し遂げられる由もない。

予見可能なものでもないが、何かあると理解していたのならもう少し上手くないなせなかつたものか。それが出来なかつたために、炎が過ぎた後、そこに残った不死人の身体は、酷い熱傷を負ってしまっていた。

何時にも増して感覚の乏しい指でエスト瓶を掴み、中身を飲んで身体を治癒する。それは途轍もない効果を発揮して不死人を瞬時にして癒すが、回数は無限ではなく、そして今回費やしたエストの量は多い。余裕を見積もって戦うのであれば、これ以上の傷を負うようなことがあってはならない。

立て直しを終えた不死人はルドウイークが何かしようとする前に、急ぎ魔術師のロングソードを構え、詠唱し始める。ここで行うべきことは盾への付与だろう。黒い炎を防ぐのであれば用意するべきは歪曲の盾であり、しかし魔術媒体たるロングソードで付与出来る術は物理攻撃に対してのみ効果を発揮する闇の盾となる。

そしてその完了と機をほぼ同じくして、ルドウイークの持つ大剣から黒い炎が滲み出していた。



## 第11章 9

## 第11章 牢獄都市 拷問館 9

「ラッ！ セアッ！ ヤアアッ！」

黒い炎が連続して放たれ、柱となつて不死人に迫る。先の二つは左右に大きく別れた軌道で走り、最後の一つが寄り道せず、真つ直ぐに突き進むが、これらが標的に到達するタイミングは三つ同時となるらしい。おそらく先行する二つの炎で両翼を作つてこちらの逃げ場を無くしながら、同時にその進路を取らせることで長い距離を辿らせ、目標に達するまでの時間を調整しているようだ。

この場合前後左右への回避は当然不可になるとして、であれば斜めの方向に躲さなくてはならないが、斜め後ろに逃げれば黒い炎がより収束する為回避に要する空間を確保し辛くなり、従つて斜め前に踏み込む必要があつた。

そのような理由から黒い炎の柱の間を走り抜け、しかし前方に動くということはルドウイクに近付くことを意味し、彼もまた既に不死人の方へと詰め寄つていたのか、大剣を構えたまま待ち受けていた。

「グウッ！」

振り下ろされた黒曜の大剣の一閃を、だが闇の盾が拾い、武器を弾き返されたルドウイクは大きく怯んで隙を晒す。通常であればここでロングソードの一撃を見舞うところだが、巨体に対してそれはあまりに小さく細い。故に不死人は可能な限りの機敏さで詠唱を行い、形成されたソウルの大剣で上段から巨体の胴に斬り込む。

「クッー！」

しかし流石に詠唱で時を消費し過ぎたのか、ルドウイクの右手が青い大剣を食い留めていた。またその直後、反撃として黒曜の大剣が横に振り抜かれようとしたため、不死人はそこから飛び下がり、そのまま後退を試みる。

「イヤッ！ ラアッ！」

敵に背を向け走り出して間も無く、剣技の息遣いが耳に入る。他の攻撃であれば別だが、走る炎の柱は迂回して来る場合があるため、どのタイミングで避けるべきであるのか目視しなければ予測を立てることは難しく、不死人は振り返るしかない。即座にこれを実行した後、迫ってきていた二つの炎の柱を横方向に回避し、追撃が続かないと見るや、魔術師のロングソードで闇の盾を詠唱する。

「セイッ！ ヤアッ！ ラアアッ！」

黒い炎を帯びた斬撃が三つ、続けざまに繰り出される。それによって地の上をうねる炎の柱を生じ、それぞれが不死人目指して走り出す、それは前回の攻撃から間が空い

たものであったため、その時既に魔術師のロングソードは盾の縁を叩き、魔力の付与を為し終えていた。

剣技である以上、誤魔化しきれない呼吸、攻撃のペースというものが存在する。無論そういった要素を前提とした上で幻惑の術理を疑うのが剣戟における駆け引きではあるが、不死人が今、闇の盾を敵の攻撃の合間の絶妙な時間の内に付与し終えたということとは、ルドウイークの振るう剣技の呼吸をそれとなく掴み始めたことを意味するのだらう。

差し込んだ光明に後押しされるまま不死人は前に踏み出し、正面から迫る一つ目と二つ目の黒い炎を左右に避け、視界外となる右背面から壁を伝ってやって来る三つ目を前方に飛び込む事で躲し、そして闇の盾を携えたまま、ルドウイークとの距離を詰める。

「ムンツ！」

王は至近距離にまで来た対敵を、しかし剣の一振りにて迎えることはしなかった。大剣を掴んだ左手はより強く柄を握り締めながらそこに力を注ぎ込み、また異様なまでに広い掌が開かれた右手を自身の身体の前に翳し、それに阻まれた不死人は何も出来ず、黒曜の刀身が黒い炎に包まれていく様を目撃する。

「ルオオウツ！」

黒い炎を纏った大剣が、純粹な斬撃として上から打ち降ろされる。この状態の剣を闇

の盾で防ごうとすれば、高熱に晒されることになるだろう。不死人はこれを横に回避し、その次の瞬間には逆袈裟の型で下から上へ剣尖が斜めに掻き払われたため、半ば倒れるように姿勢を傾けながら潜り、直後には再度上から黒曜の輝きが襲い掛かり、右に躲すが剣はまた振り上げられては振り下ろされ、左に避けると同時、その動作を待ち構えていた大剣が横に薙ぎ払われる。

最早背後へと飛び退いたとして攻撃範囲から逃れることは叶わず、であれば踏み込む他に道は無い。不死人は前方に転がり込むようにしてルドウィークの剣の下を通り抜け、すると都合五回、立て続けに放たれた斬撃の舞いを凌いだ先に見たものは、高く聳える敵の側面であった。即座に詠唱された術がソウルの大剣を形成し、それを持った不死人が上段構えから斬りかかる。

「ヌツ！」

だが青い大剣はまたしても長い右手に阻まれていた。やはりこの術の場合詠唱に要する時間が長く、それで敵に生まれた隙を消費し切ってしまうのだろう。

「ヌオウツ！」

次には反撃の剣が一振り寄越され、しかしそれは既に黒い炎の加護を失っていた。敵にしてもそれは思わず振ってしまった一撃であったのだろう、ここに至るまで温存されていた闇の盾は漸く出番を得ると勢い良く大剣を弾き返す。そしてルドウィークに生

じた隙が確かなものと見ると、不死人はまた詠唱を行い、ソウルの大剣で上段より斬りかかる。

「グッ！」

実体の無い巨大な大剣は、盾の役目として働くルドウィークの右手によって防がれ、その肉深くまで食い込むのみに留まっていた。

無為な結末か。否、果たすかどうか、運命の岐路はこの先にある。

不死人は魔術師のロングソードはおろか、塔のカイトシールドからも手を離すとそれが地面に落ちるよりも早く背に担いだ聖職者のウオーハンマーの柄を両手で掴み、一瞬の内に渾身の力で以てルドウィークの右手を侵す剣を打った。

「アガアッ！ オオツ、オ、オオオオオオオ！」

骨が割れた音と、痛みに悶える声と、絶えず続く歌声とが交錯した。再三に渡って同じ箇所を同じ剣筋によって斬り付けられた右手は遂に屈し、槌の一撃を最後の一押しとして肘から先を切断されるに至った。

断面から黒ずんだ血を大量に零し、ルドウィークは覚束ない足取りで後退していく。その姿を他所に、不死人は塔のカイトシールドとロングソードを拾い上げ、守りを失った巨体に向けてソウルの矢を撃ち始める。

青い光弾が次々にルドウィークへと刺さり、またその痛みに怯んでか、彼は顔を背け

ながら退がる一方となる。ならばこの機会にこそ、敵の負傷を甚大なものにしようとする人は尚もソウルの矢を放ち続け、するとそれなりに距離が開いたところでルドウィークは突如、真正面を向く。

広間に溢れる歌が一定の音調に集約され、発狂したようにそれ一つを叫び、奏でる。それが恐ろしい攻撃の先触れであると悟った不死人は闇の玉を飛ばすが、その直撃による衝撃にもルドウィークは怯まず、左手に持った黒曜の大剣を身体の正中線に重ねるようにして構え、やがてそこから滲んだ黒い炎がさざめく。

「ウオオオオオオオウー！」

憎む全てを焼き尽くさんとする、災厄の黒い炎。王の下、嘗てないほど高められ、そして解放されたそれは大津波のような質量で暴れ狂い、抗いようのない濁流となつて不死人を飲み込んでいく。

剣闘士の男曰く、過去、この炎は彼の故郷を焼き払つたという。そのような術違いの暴力を前にしては塔のカイトシールドの防御など差し置かれた枯葉と大差無く、瞬時にしてそれを不死人の手から奪り取る。

鋼鉄のように重い炎は身体中を揉み込み、骨という骨を打つて割るか、潰して砕き、また憎悪そのものの熱が至る部位の筋を焦がして固め、内臓までをも炙つて炭に変えていった。

やがて潮が引くように炎は収まりを見せ、まるでそれに共振するかのように狂気の歌も高じた勢いを静めていくが、そのいずれも不死人は知覚出来ずにいた。

眼球は破裂したか、或いは瞼が溶け落ちて癒着したのか、視力は完全に奪われており、また耳なども含む身体の器官の殆どが焼き尽くされ、そのように五感を失くした状態では外界の様子など知る術がなかった。自身が身動きさえ出来ているかどうか、感覚が伝えるものではなく確証は得られないが、塔のカイトシールドの真裏にあつた左手は刹那の間のみではあるが防御の恩恵を受けることで比較的軽症で済み、辛うじて腰の辺りに仕舞われて居たエスト瓶を掴み、それを口に運んだ。

不死の秘宝たるエスト瓶による回復速度は尋常ではなく、焼死体も同然であつた身体は直ちに完治する。とは言え元々残りが少なかったことに加え、今回の負傷はあまりに大き過ぎたためか、エスト瓶の中身は枯渇し、篝火で休まない限りこれは唯の緑色の瓶である。

## 第11章 10

## 第11章 牢獄都市 拷問館 10

付近に散っていた得物を拾い集め、遠い距離はそのままにルドウィークと対峙する。

エストが尽きたという要素は当然不死人にとって不利に働くどころか、窮地の只中に立たされているときさえ言っても過言ではないが、手詰まりと言いつつ早計というものだろう。右手の盾を失ったルドウィークもまた後が無い状況に置かれており、であればどちらがより早く敵を傷付け、倒し切るかの競い合いとなる。

闇の盾を付与。それが終わり次第、動き始めた敵に牽制の役目を持たせたソウルの矢を放つ。迸る青い光は一直線に飛んだ後、敵の左手が持つ黒曜の大剣によつて打ち払われて終わるが、それをするとすることは無傷でいなせる反面、大剣の動きを封じられているに等しい。

これを機と見た不死人は更に何発かソウルの矢と闇の玉を混ぜ込んだ遠距離攻撃を続け、そしていつしかそれに紛れて走り出し、片腕を失くした関係上、相手の剣が届き辛い、右側面へと回り込んで接近する。

高さに差があるためロングソードによる攻撃では巨体の胴には届かず、狙うなら腰周



りを飾る触手の王冠か木の根のような足のどちらかとなるが、不死人がそのような逡巡の最中にある一方、この段になつてもまだルドウイークはこちらに振り向こうともせず  
にいた。やがて彼の掌の中で大剣が器用に翻り、逆手の持ち方になると、いよいよここ  
が死中であるという疑いが確信めいたものになる。

「ゼアアツ！」

不死人がそこから飛び退くと同時、瞬間的に黒い炎を宿した大剣の先でルドウイーク  
は地面を突き刺し、するとそれを中心として円形状の広範囲に亘つて下から炎が突き上  
げ、吹き荒ぶ。

危うくまた焼き尽くされるところであつたが事前に危機感を抱いたことが幸いし、だ  
が回避は出来たものの、そこからの出方を迷うことになる。

ルドウイークが反撃に用いた、自身の周囲で黒い炎を打ち上げる技は素早く、また攻  
撃範囲が広いため、こちらが接近した状態で攻撃の行動を取れば目算では回避不可であ  
る。であれば距離を離すべきか、という方向に一度思考が流れるが、敵には黒炎の濁流  
という決め手が存在し、現状これへの對抗手段は皆無であるため、間合いが遠くなるほ  
ど危険が高くなる。反撃に用いたあの技そのものを封じる事が出来るのであればそれ  
が最良であり、方法を実際に考え付かない事も無い訳でも無いが、実行するにあたりま  
さに火の中に飛び込むようなりスクを負わなければならず、エストの尽きた今、積極的

にそれをするべき、とはならないだろう。

やがてルドウイクが身体の向きを変え、両者は互いを正視する。間も無く衝突が起ころのは確実であり、不死人はこの半端な距離をどう扱うか、すぐにでも決めなければならなかった。

前進と後退、どちらを選んだとしても有利不利に確定せず、ならば円形状の範囲で炎を打ち上げるあの技を警戒しながら接近するべきか。あの技さえ除けば敵の旋回能力は第一形態の時の据え置きのためあまり優れてはおらず、まして右手を失った今、右側面に対する即応は遅れる。

そのような考えを経て、剣の柄を強く握り込んだ不死人はいよいよ踏み出そうとし、しかし勇猛さを先に発揮したのはルドウイクであった。

「カアアアアッ！」

黒い炎を纏い、振り下された黒曜の大剣が迫る。反撃の技があるため敵は待ちの構えで居続けるといふ憶測が災いし、反応が遅れた不死人は大剣の直撃だけは避けるものの、無理な態勢での回避行動が祟ったのか、危うく足がもつれそうになり、だがルドウイクに容赦などある筈も無い。

「レエアッ！ ラッ！ イヤッ！ ラアアアッ！」

黒い炎の守りが闇の盾での返し妨げとなっており、先と同じ軌道である上からの斬

撃を、いつそ側面に身を投げ出すようにして躲すことに成功するが、敵の激情は枯れるところを知らず、また上から降る黒曜の刀身に対して地を転がりながら回避し、間髪入れずに起き上がりながら四度目となる打ち下ろしの剣を潜り抜け、そして返す刃が下段から振り抜かれた頃には、不死人はルドウィークの右側面を完全に捉えていた。

「ハアツ、ヒツ、ハアアツ」

この折りに荒い息遣いが耳に入るのは何ら不思議なことではなかった。力を込めた斬撃を五度続けてともなればその後には間断が生じるのは自明の理であり、不死人はこの機に魔術師のロングソードを詠唱、速効性を重視してソウルの矢を放ち、長髪の横面に当てる。

「ギイツー！　ヌオウツー！」

効果はあれど、怯んだのは一瞬のみであった。ルドウィークは瞬く間に黒曜の大剣を順手から逆手に持ち替え、また黒い炎が刀身を包む。

まさかほぼ動きを止めずに反撃に移行するとは予想しておらず、そうして致命的な遅れを招いた結果、今更攻撃範囲外に逃れようとしたところで到底間に合うものではなく、ならば賭けを承知で踏み込むしか拓ける活路は無い。

不死人は駆け込みながら左腕を胸の方に引き寄せ、未だ闇の盾の付与を残す塔のカイトシールドを支える面積を増やすと、自身の肩と一体になったそれを強く固めながら黒

曜の大剣に向かって突進する。

剣が地面を刺すのが先か、盾がそれを制するのが先か。

「グワッ！」

これに勝利したのは不死人であった。地面を叩く直前の剣先は黒い炎を纏っていたため、衝突の際には炙られ、無傷とはならなかったが、それでも武器を大きく弾かれ、隙を晒すルドウイークがこれから負うものと比べれば採算は取れているだろう。

魔術師のロングソードに注がれた魔力が、青く巨大な大剣を形成する。それを上段に構えた不死人は、相手の肩口から斜めに胴を横断するように斬りかかり、ルドウイークの胸に大きな裂傷を作り出した。

「グワッ！ クッ」

堪らず、呻きながらこの場に背を向け、ルドウイークは走り出す。距離を遠いものにしてはならないため、不死人も即座にその後を追うものの、足の差は大きく、ルドウイークは最初こそふらついたような足運びではあったがそれが徐々に直ると速度の差は歴然としたものとなり、やがて引き離され始めていた。

分の悪い勝負であり、どの道追い付けないのであれば、と不死人はその場に留まり、魔術師のロングソードを詠唱、闇の盾を塔のカイトシールドに付与し、それと時を同じくしてルドウイークが身体の向きを反転させる。

「ヤアッ！ ラアッ！ ゼアアッ！」

振り返り様に黒曜の大剣が使い手から力を貰い受け、そして三つの黒い炎の柱が放たれる。それが空気を燃やしながら迫る様子は圧倒的であった威力を想起させるため、これを前にして油断など生まれるべくもないが、そうは言ってもこの攻撃に直面するのは数えて五回目となり、回避するのは容易となる筈であった。ルドウイークが左手に持った黒曜の大剣を身体の正中線に重ねるようにして構える様を見るまではの話だが。

王の切り札、黒炎の濁流がこの後に続くのであれば、いちいち走る黒い炎の柱の軌道を見極めてから避けるなどという行儀の良い真似などしてはいられない。不死人は走り出しながら背にある聖職者のウォーハンマーを捨て去り身体を軽量化し、まず右の壁に埋め込まれた歌う亡者の一部を焼きながらやって来る一つ目の黒い炎の柱を、自身と交差する瞬間に走り抜けることで凌ぎ、次に真正面から到来したものを回避する際にも出来るだけ斜め前に進路を取るようにして速度が落ちないように注意を払い、最後の炎は半端な角度で左からやってきたため、接触する直前に後ろに飛び退くことで躲すことに成功するが、その僅かな後退が命取りであったか。

「ルオオオオオオウー！」

咆哮と共に、ルドウイークの悪意が黒い炎の濁流となつて広間に流れ込む。洪水と海嘯がぶつかり合ったかのような氾濫はその熱量も然ることながら、空気が伝える衝撃や

音も尋常ではなく、近くに居ては鼓膜が痛む程であったが、大剣が振り下ろされる寸前にルドウイクの側面に逃げ込んでいた不死人にとつてはただそれだけのことである。

敵はその攻撃の範囲の広さが故に、標的の姿を見失っているのだろう。地面に黒い炎を流し続ける背はごく無防備であり、それを前に陣取っていた不死人はその場でソウルの大剣を詠唱。出来るだけ高い位置に狙いを定め、斬りかかった。

## 第11章 11

第11章 牢獄都市 拷問館 11

「ゴアッ！」

唸りを吐き出しながらルドウイークはよろけ、傷を負ったばかりの背を守るように身体の向きを入れ替えながら後ずさり、またそれに伴って黒い炎の濁流も途切れた。胴の前後や右手の断面から血を流す巨体は最早、満身創痕の見てくれではある。

「カアアアアアッ！」

だが黒曜の大剣に力を注ぎ込む様子に戦意の陰りはなく、リングレイの王としての風格は勿論、行き場の無い怨嗟も未だ漲り、燻っている。これに応じ、打倒せしめるとすれば、相応の覚悟が必要となるだろう。

ルドウイークは剣を振り振りながら、真正面より迫った。

「又オウッ！ ムンッ！ ラアッ！ ゼアッ！」

左から右方向に走る一振りを前転して潜り、その次に来る右下から左上への斬り上げには一度飛び退がって対応すると、相手はやや踏み込みながら左上にあった剣先をほぼ直下に打ち降ろしたためこれを左に躲し、主の昂ぶりが映った黒曜の刀身はまた上下に

迎る軌道で暴力的に叩き落とされ、不死人はそれを右に避ける。

「イヤアアアッ!」

特に気迫の込められた連撃の五発目、黒い炎を従えるこの一撃を、闇の盾が打ち返した。

「グオウッ!」

これは本来、闇の盾で迎えてはならない剣であった。何故ならまだ黒い炎が色濃く残っていたため、弾き返すのに成功したとしてその際には間違い無く熱傷を被ることとなり、実際不死人は左半身を存分に焼かれていた。

だが、だからこそルドウィークはその斬撃に必殺の意志を注ぎ、故に思いもよらない衝撃によって大剣を取り落とすことになり、また姿勢の崩し様はこれまでに無いほど無様であった。

焼け爛れたのは左側のみ。右手とその中に収まる魔術師のロングソードは無事であり、不死人はそれを構えて詠唱を始めると、隙を晒すルドウィークの前でソウルの大剣を作り上げ、先にあつた胸の裂傷に向け、全精力を懸けた突きを放った。

「オゴッ! オッ、グボッ、オオッ、オッ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

貫かれ、咯血し、青い大剣が穿った穴から血を噴出させ、リングレイの王は地に伏せる。王冠であつた腰周りの触手も萎え、背にしていた炎で作られた巨大な十字の瞳も霧



散すると、シャンデリアの火も弱まり、天井や壁に埋め込まれた亡者達の歌もまた、次第に掻き消えていった。

終幕である。しかしどこか後を引くのは、ルドウィークがその散り際に、恨み言の一つも無ければ、呪いをかけるような嘲笑も残さなかつたのが不自然であつたからだろうか。

それか、亡者である彼が今斃されたとして、いつしか蘇り、陰惨な舞台が再演されることを知っているからだろうか。

どちらであつても、不死人にとっては本来他人事だが、この悲劇の根幹にあるものは不死の呪いであり、無関係を決め込む事は出来ず、先に進むなら引き摺って往かなくてはならない。

だが一先ずは休息である。篝火と、先程投げ捨てた聖職者のウオーハンマーを探そうと焼け焦げた左半身を庇うようにして歩き出し、だがその二つの所在を突き止めるよりも前に不死人の目に留まつたものがあつた。

地面に置かれた、金色の十字のペンダント。ルドウィークが首から下げていたそれは、倒れた拍子にでも首から外れたのだろう。

巨大であつたルドウィークならともかくとして、不死人にとってペンダントは首から下げるにはあまりにも大きく、しかし近付いてよく観察したところ、これは厳密にはペ

ンダントではなく、金色の大剣の柄に鎖を付けただけのものであった。

何かの力を秘めているのか、大剣の柄は不思議と目を惹き付ける。魅了された訳でも無いが、明らかに普通の品ではないため、今後何かの役に立つやもしれないと、不死人はそれを拾い上げることにした。

## 第12章 1

## 第12章 牢獄都市 最奥部 1

暗い広間。不死人は篝火を前に身体を休めていた。

シャンデリアからは火が落ち、微かに通り抜ける風に混ざる音も無く、周囲は至って静穏そのものであった。だがこの部屋の闇が覆い隠しているものの正体を知っては気を落ち着けることも出来ず、不死人は早々に立ち上がり、先へ進むことに決める。

一度明るい状態を見た経験もあり、また暗がりとは言え空間全体の構造をぼんやりと把握出来る程度には目が慣れ、見当を付けた不死人はこの広間に足を踏み込んだ際に通った入り口から見て真正面となる方へ向かって歩き出した。

視線の先は漏れなく光りを拒む黒檀の色をしているため、聴覚もそうだが、特に足の裏の感覚が周辺の状況を知るための重要な手掛かりとなり、その結果足にばかり意識を捉えられることになるが、凹凸が伝わるものの多くは恐らく、人体由来の何かであった。

右足はやけに粘性の高い水溜りを踏み、左足が踏んだ膨らみは柔らかく、体重が乗って沈み込むにつれ小さな破碎音を発する。足を交互に差し出す度そのような出来事があつたが、真相を調べることなどせず、否応無く味わつた感触を出来るだけ無視しなが

ら歩き続け、だが不意に落ちた雫が遠くの地面で弾ける音が足元から昇って耳に入り、その奇妙さに歩みが止まる。

下を見れば、足が踏んでいた地面の一部には頑丈な鉄格子が嵌められており、隙間から見る限りどうやら向こう側はそれなりに高さのある空間となつていているようだ。鉄格子の面積が不足し、階下となるその場所の奥行き、横幅までは観察出来なかつたが、そこに立ち留まつているらしい白い人の姿を一つ見付ける。

血の汚れが無いその白さは、おそらく高貴な者だけが纏うドレスによるものなのだろう。距離があるためあまり詳しいことは分からなかつたが、裾の広がり方などを見るに、少なくとも形状においてはそういった部類の衣服のように見受けられた。

この人物が虜囚達の姫とやらであるのだろうか。この場からは確かめることが叶わず、助け出すにせよ放置するにせよ、もつと近くにまで行つてから判断を下すべきだろう。この光景を記憶の片隅に留め、不死人は歩みを再開する。

そうして辿り着いた壁には、小さな穴ぐらのような通路が開いていた。武器を振り回せば確実に壁に弾かれるほど狭いという点が足を踏み入れることを一度躊躇させ、しかし入つてさえしまえばその通路はほんの数歩分ですぐに終わり、拓けた空間に出るように見える。

不死人は自然と壁に手をつきながら穴の中に入り込み、進めば程無くして洞窟のよう

な様相の場所に降り立つこととなった。

この洞窟の始めには三叉の、金細工にも近い繊細な燭台が一つ置かれており、だが先を見通すに灯りは他に一切無い。まさかこのようにすぐに掻き消えたり、或いは破損したりしそうな火では持ち運ぶに不適切であり、よつてこの先に進むのであれば闇に飲まれる覚悟が必要であつた。

ただどちらにせよ、闇の中では光を避けるといふのは鉄則に等しく、そういった意味でも頼るべきではないのだろう。不死人は燭台から遠ざかろうとし、だがふと目に入つた自身の身体の一部に目が留まり、動きを止める。

気に掛かつたのは、身体に付着していた汚れであつた。真つ黒な墨のようなそれは暗がりでは発見が難しく、今まで見えなかつたのも別段おかしなことではないが、まず一つに具体的に何の汚れであるか判然とせず、次にいつ、どこで身体に付着したのかも不明である点などは不可解である。

「ぎゃあああああああああつ！ ああつ、うあああああああつ！」

「ああああつ！ ああつ！ ああああああああああつ！」

突然の叫びは洞窟の奥から響いたものであつた。亡者の絶叫にしては女性のような印象が強く残り、また複数人のものが重なつたように聞こえる。またここでも拷問が繰り広げられているのだろうか。

「ひつ、ひつ、ひつ、あ、ひ、ひ、ひ、ひ、ひひひ」

「うつ、ふふふ、ふふふふ」

しかし荒い呼吸音が笑い声のように変遷するのを聞けば、そのように単純なものではないと直感が告げる。襲撃の可能性を懸念して剣と盾を構え、すると闇の奥から真っ白な人の影が二つ、急に現れた。

まるで霧で作られたような人影は実体が定かではなく、だが確かな歩みで不死人の方へと近付きつつあり、如何なる対応に出るか、早急に判断を下さなければならなかった。対話可能かを見るか、迎撃に出るか。

そのように選択肢が浮き彫りになることで、対話などは相手から話し掛けてこないか、理性の宿る眼差しを見付けない限りは試すことすら危険で愚かしい、という結論に却って早く達することになった。魔術師のロングソードを構え、ソウルの矢を放って白い人影を迎え撃つ。

青い光は一直線に飛んで人影の頭部に命中し、そして通り抜けていた。魔法の無力化、と解釈するにはあまりに抵抗無くそれは突き抜け、まるで本当に実在しない霧か何かを攻撃したかのような印象を抱く。

「あつ、それはきつと、幻影じゃないかしら。よく見てみて」

流麗ながら、花が弾むかのような愛嬌のある音声俄かに漂う。状況に即した内容だ

がまるで場違いであり、油断を誘っているのではないのかと疑ったのも束の間、歩いてきた白い二つの人影は次第に透け始め、間も無く暗い背景との輪郭が完全に消滅していった。

その声の言ったことが真実であったのだろうか。念の為しばらくの間その場に留まり、周囲を警戒するが何も起こらず、次に不死人は先程の声が聞こえてきた場所に足を向ける。

その女性は、壁を削り貫き柵を嵌め込んで作られた牢の中で座り込んでいた。スカートの部分が長い服、おそらく元はそれなりに高価であったドレスを着ているあたり、かつて身分のある人物であったのかもしれないが、当然のように今は見る影も無く荒んだ身形をしている。

「あら、やっぱりあなたはここに始めて来た人なのね？ ええと、何から話したら良いのかしら」

愛想の良い口調には、どこか幼さが含まれていた。幼いまま、歳を重ねたのだろう。「ここは見ての通り牢獄だけど、時折奥から甘い香りが流れてくるの。その香りが、私達にかつての幸せな思い出を体験させるわ。けれど、目覚めた時には全てを失ったことを理解しながら暗いこの牢に引き戻されるの。その落差は本当に苦しくて、騎士達が羨ましいくらいよ。私の牢はまだ手前にあるから楽な方なのだけれどね」

精神的な拷問を強いる場所ということなのだろう。また、騎士達への責苦が行われていた場所と違い、この洞窟に居るだけで苦痛に苛まれるともなれば、今後の探索に支障が出るかもしれない。

「ところで、お願いがあるの。この牢獄の先へ行くなら、鍵を持ってきてくれないかしら。青ざめた血の池の向こうにそれはあるわ。この牢の隣にある扉を開ける為の鍵で、あのお方を助け出すには絶対に必要なの。どうか、お願いよ。勿論お礼はするわ」  
お礼とやらも、助け出す云々のことよりも、捨て置けない単語が彼女の話の中にあつた。

青ざめた血。探求の徒、ノルベルトが探しているものに相違無いだろう。彼によればリングレイの秘密を紐解くにはこれを求めることが重要であるらしく、この女性の言う鍵だとかは事のついでに解決すれば良い。

不死人は虜囚の女性に承諾の旨を伝える。

「ああっ！ ありがとう！ じゃあ今からちゃんとお礼の品は用意するから、あなたも頑張ってきてね！ 待ってるわ！」

女性の高揚ぶりようはやや狂態を呈している感があり、やはり狂ってしまったていると見るべきか。この有様では彼女の用意するお礼とやらに過度な期待を寄せるべきではなく、またそもそもが檻の中で準備出来る品などたかが知れている。



それはさて置き、不死人はまず彼女の居る檻の隣の扉に向き合つた。歪んだ鉄格子の扉は確かに鍵が掛かつており、開けることは出来ず、そして奥には下に向かつて昏い階段が伸びているようだ。

それを確認した後、洞窟の奥へ向かつて歩き始めた。そこから見える限り洞窟は一本道であり、迷うことはないだろうが、とにかく暗いため全体は茫洋としている。そうなれば足運びは慎重になるものだが、その要素が無くとも粘着質な何かが足の裏で潰れる感触もあつたため、どの道滑らないようにと歩みは遅々としたものになつていただろ  
う。

「おおあああああつ！ ああああつ！ あああああつ！」

「ひいっ！ ひいひいっ！ わあああああああつ！」

時折、左の壁に連なる牢から叫喚が木霊する。その仕組みを知つてゐるため身構える必要は特に無いが、あまりに突発的なため、思考と肉体の間で齟齬が生じ、結果身体はやはり一瞬強張る。それ自体は害が無くとも、集中と緩和の波が交互に襲つてくるこの場所では周囲に対する警戒が疎かになりやすく、それが重い憂慮として不死人の臓腑の底に静かに横たわつていた。

## 第12章 2

## 第12章 牢獄都市 最奥部 2

歩き続ける内、やがて先程白い人影が現れた箇所には差し掛かる。あの幻影は左の壁からの方から現れたと記憶しており、見てみると実際に壁と牢は左に曲がり、だが道が広がっているのか、右の方の壁は先程と同じく真つ直ぐ続いているようであった。不死人はひとまず直進することに決め、だが危うく足を踏み外しかけて身体のバランスを崩しながら背後へと後ずさる。

一体いつからそうであったのか、よく見ればそこに地面は存在せず、そこどころか右の壁そのものが消え、先にあるのは切り立った崖である。これも幻影の一つで、目を離れた隙にでも消失することで誘い込むつもりであったのだろうか。一度はそのような考えが頭を掠めるが、しかしさらに観察を深めると、その仕組みはもつと単純なものであった。

地面を軽く撫で、その指を見ると、先が黒く汚れていた。この洞窟は暗闇が全てを染めているが、さらに壁などをも塗料か何かによつて黒く塗り潰されているのだろう。もしこれを何者かが意図的に行つたのであれば、黒の上に黒を重ねるなど、執拗に過ぎる

ようにも思えるものの、実際には光をごく吸収してしまうこの汚れが発揮する効果は厄介かつ実用的であり、これがために先程不死人は遠近感を錯覚したのだろう。

とは言え、まさか侵入者を落下させるためだけにこのような仕掛けを施したとも考えにくい。何らかの理由で意図せずこうなったのか、或いは幸福な記憶から戻ってきた囚人達がより底の無い暗闇の中に居るように感じさせるためのものだろうか。

「ぎひいああつ！ あああああつ！ ぎゃああああああつ！」

虜囚の金切り声が牢から飛び出し、それを柵の前に無言で聳える黒い壁が受け止める。つまり、先の問いは後者が正解なのだろう。周囲の牢をよく見ればその前には必ず黒い壁があった。

そうまでして囚人達を苦しめる姿勢は過剰なものであるのかもしれないが、所詮は部外者、加えて不死人は所詮心を失った身であるため、閉口するしかない。実際的な注意事項だけを念頭に入れ、他は余計と断じることですの場に捨て去って歩き出そうとし、だが不意に目に飛び込んだ崖下の光がそれを思い留まらせた。

遙か遠い闇の底で、青、赤、白、黄色など、色とりどりの光が輝きを放っていた。流石に周囲を照らすほどの光量は無いらしく、その周囲の地形までは見通せなかったが、光そのものは黒によく映えるため、不死人の現在地よりもっと遠い場所からでもこれを発見することが出来る筈である。

正体は七色石だろうか。溝の溜まり池入り口の老婆なども取り扱っている、ごくありふれた道具の一つであり、あのように目印を付ける際には役立つが、簡単に砕けるため攻撃などでは使える物では無く、亡者などが用いるとは考えにくい。

即ち、あの光はそれを投げた者が付近に居る可能性を示しているのだろう。それが味方になれば良いが、牢獄都市の入り口で起こった戦いを思い返すに、その逆であることも有り得る。

しかし移動の際には現時点で最大に警戒しているため、これ以上は備える術も無く、この洞窟に潜む何者かのこととは頭の片隅に置き留める程度に捉えるべきだろう。不死人は気を新たに、今度こそ探索を再開した。

「ぎゃああああああああああつー！」

地面はやはり濡れているようであった。左の牢から劈く悲鳴が水溜りに小さくさざなみを立たせ、その存在を不死人に訴える。

「ひっ、ひいつ、ひひひっ、ひひひっ、ひひひっ！」

引き撃った笑い声がまた、閉ざされた牢の奥から這い出ていた。中を少し覗くと、虜囚の女が地面の一点を凝視しながら口の前で手を結び、凍て付く冷気に晒されているかのように震える歯を打ち鳴らしている。

洞窟内は、常にこういつた狂気が蔓延していた。虜囚達を苦しめるその甘い香りの効

能とやらはまだ不死人を襲ってはいないが、このまま進めばいつかは直面するのだろう。情報が不足しており、対策を立てられる段階ではなかったためこのように先へと進んでいるが、彼等の苦しみ方を見る度、それが少し早計であったのではないかという考えが脳裏に去来しては、拭って歩き続けていた。

やがて不死人は道が二股に別れているのを見て一旦足を止める。一方は右手に急に現れたまるで切り立った崖のような壁に沿って進む道であり、またこれを少し歩いた先には梯子が上に向かって架けられているため、そちらを行くのであればこの崖の上を越えるような進路を取ることになると予測される。

もう一方はこれまで同様左の壁に沿った、下に向かう坂道であった。傾斜がある以外には何ら特徴を見出せるものではない。

観察を終えれば次は思案の時間である。一見すればリスクが高い道は右の道となる。高低差があるため、落下の危険が常に付き纏い、また仮に高所での戦闘ともなればそれを利用した戦法を恐れる必要も出て来るだろう。

だが熟慮した結果、不死人が選んだのは右の道であった。転落する危険を呑んでもそうした理由は、左の道を進んだ場合、右の道の先にある崖の上に当たる部分を敵に陣取られればそこから一方的に攻撃されるという懸念がより勝る、という、高低差を意識した探索の定石に照らし合わせたためであった。

やや細まっている道に足を乗せ、滑らせることなく梯子の元まで運ぶ。この位置にまで来た頃には早くも左の道との間に決して低くない落差が生じており、先の方では更に坂が続いているため、崖の方からは一方的に真上から見下ろすような地形なのだろう。

まだ先のことは言え、そこから落ちればひとまりもないことは明白であり、不死人は落下しないよう今一度足元を確認しながらいざ梯子に手を伸ばし、だが気付いた時には宙に投げ出されていた。

地面に背を打ち付け、そして状況を把握する前に拳が到来する。

顎を打たれて脳を揺らし、胸を打たれて肺の空気を逃すが、三発目は許さず、割り込ませた塔のカイトシールドで防ぎ、相手がその縁を握り込んだ瞬間、こちらは手を離しながら背を地の上で滑らせ、盾を置き去りにその場を脱する。

馬乗りの状態から抜け出した直後、とにかく不死人は突如襲い掛かって来たその敵から距離を取ろうとし、だが長身瘦躯の黒い人影は一瞬で距離を詰めるとまた徒手にて殴打を繰り返す。剣の間合いよりも内側に密着された状態では腹を打たれるがままであり、当然魔術も剣術も使い物にならないが、武器はそれだけではない。背を後ろにしながら勢いをつけ、打撃を堪えながら相手の顔面に自らの額を打ち込む。

頭蓋に痛烈な衝撃が突き抜ける。その際の負債は攻撃した側とて意識が飛び掛ける程であったが、心の準備も無く受け止めた方が被害は甚大であったのか、相手はたたら

を踏み、大きくよろけていた。

そして瞬時にエスト瓶に手を伸ばしかけ、しかし途中でそれを止めると魔術師のロングソードの柄を両手で握る。この手合いには時間を与えるべきではないのだろう。不死人は自身の攻撃方法で最も素早く繰り出せる、単純な斬撃を敵に浴びせると、それによつて更に相手は更に怯んだため、間髪入れずに突きの一撃で畳み掛ける。

その一閃を、相手は一切声を漏らさずに胸で受け入れていた。直剣を深々と刺し入れ、すると距離が近くなったためか、また敵の拳が暴れ、不死人の喉を打つ。

痛みというよりは生理的な反射によつて思わずロングソードの柄から手を離し、だが今更掴み直そうとはせず、下がつて聖職者のウォーハンマーを取る。この素早い敵に対して、重さによつて打撃を与える武器が不向きであることは理解していたが、まさか無手を真似たところで匹敵する筈も無い。

ウォーハンマーを手に構えを取り、敵の出方を待ち、そしてそのまま時が流れると、やがて黒い影のようなそれは横倒しになって地に伏せる。

先のロングソードによる攻撃が効いたのだろうか。この敵は既に動きを止めているようだが、油断も容赦も不要である。聖職者のウォーハンマーを高く掲げ、振り落とす槌頭で頭部を砕いた。

## 第12章 3

## 第12章 牢獄都市 最奥部 3

これで差し当たりここでの危機は去ったようだ。周囲を見回し、他に潜む者が居ないことを確認してから塔のカイトシールドを探して拾い、エスト瓶で身体を治癒すると、次に腰を屈め、この襲撃者の姿に目を凝らす。

一目見た時には黒い人影としか認識できなかつたが、そうなる理由としてまず皮膚の黒さが挙げられる。まさに岩肌に溶け込むためのようなこの色合いでは発見は困難を極めると予想され、仮にこれと同じ敵がこの先の洞窟に潜んでいるのであれば、相手よりも先に姿を見付け出すことは有り得ないだろう。またそれとは対照的に腹は色素が抜け落ちたような白さをしており、擬態の際には伏せるような姿勢になると思われる。そういった体色もこの敵の特徴としては大きいものであつたが、視線が身体の上の方にまで行き着くと、それらは比較的瑣末な要素であつたと知ることになる。

まず奇妙であつたのは二つの目であつた。頭部が潰れかけているため定かではないが、どうにも目玉は両方とも顔の右側面に存在しているように見受けられる。ウオーハシマーの直撃を受けて目が飛び出した可能性も考え、一応左側面を見たものの、そちら



にはそもそも眼窩が無い。

また口と鼻の部分を覆うようにして節を持った太い管がそこから長く垂れ下っており、こちらに至っては口から飛び出した臓器とも思えず、全く想像がつかない代物であった。

総じて正体不明を極める敵であり、痩せた胴からして呼称を痩せぎすの亡者とするが、本当に亡者に分類される者なのかどうか、確かではなかった。

納得のいく結果を得られはしなかったが一通り痩せぎすの亡者の検分を終え、不死人は腰を上げてまた歩き出す。道戻って梯子の所にまで来ると、長いそれを伝って上にまで登り、崖の頂に至った。

そこからの眺めは、暗がりに適性がある眼を備えている訳でもないため、それまでと同じ黒一色であった。この洞窟の先を見通し、情報を収集出来れば幸いであったが、出来ないことにはすぐに見切りを付けた方が良いだろう。不死人は宛ても無く遠くの暗闇を彷徨っていた視線を足元の地面へと移し、程無くして登ってきたものとは別の、下に向かって架かる梯子を発見する。

崖の頂には他に続く道が無く、この梯子を降りていくべきなのだろう。一応梯子の下を見通して潜んでいる者が居ないか確かめ、それから足や手を掛け、登ってきた際と同じくらいの高さのそれをゆっくりと降りていく。

そうして面倒な事態に遭うことも無く梯子を降り、地を足に着けて周囲を観察するや否や、ふとその姿が目に入った瞬間には全身の血が活性化して滾り、身体は反射的に構えを取ろうとするが、何とか逸る気を抑え、音を立てずに済みます。

見付けたのは、梯子からそう遠くない場所です左右に揺れる、瘦せぎすの亡者の背中であつた。洞窟の道の途上で棒立ちになつてゐるようだが、彼の前には球状の岩が鎮座しており、これは人の背丈を遙かに越える巨大なものであつた。

それらが向いている方向は崖から見ても左方向であり、つまり先の別れ道で崖を登らずに左を進んでいた場合、待ち伏せによつて坂道に大岩が転がり込み、それで轢き潰される末路を辿つていたのでと思われる。道を選んだ際はこのような罠など予想しておらず、まさかこうも重要度の高い選択肢だとは捉えていなかったが、何にせよ拾つた幸運は最後まで活用したい。

日頃から出来るだけ物音を立てずに移動する習慣があつたため、梯子の昇降の音も瘦せぎすの亡者に聞き咎められることなく、その背は無防備なものであつた。故にここが奇襲の好機であり、それを無為なものにしないよう、不死人は細心の注意を払つて黒い背に忍び寄り、やがて銀の剣が一瞬煌いた後、敵の背を貫いた。

貫通して腹を内側から突き破つた瞬間には剣を引き抜き、崩れていく背に向け、更に肩口から降り下ろした斬撃が敵を斬り裂く。すると呆気なく瘦せぎすの亡者はその場



状を維持する以上の事は出来ず、剣を取るなど論外であった。しかしながらさうしている間にも首への圧迫は強まりつつあり、意識は弱まる一方にある。

最早形振り構う余裕など無かった。不死人はその場に蹲ると、陳謝する姿勢のように頭を深く垂れ、そして弾みを付けて地面に叩き付ける。

手加減などしようものなら敵に有利に働くことも懸念されたため、不死人は全力で繰り返し頭部を地面に打ち、またそれによつて身体に巻き付く敵は勿論、押し留めている自身の腕や顔にも大きなダメージを与えていく。

これを十ほど行つた頃、意識が途切れていたのか、いつの間にか不死人の身体の動きは止まっていたが、それは潰れかけた敵も同じであつた。しな垂れた身体を打ち捨て、ウオーハンマーで叩き潰し、止めを刺した。

その後、まだ衝撃で漠然とした感覚の中、エスト瓶を口に運んで中身を喉に流し込み、そうしながらもその生物の残骸に目をやる。

それは最初の瘦せぎすの亡者が顔から垂れさせていたものと同じであつた。よく見ればつい今しがた奇襲にて斃した亡者の方にはこれが無く、先が欠けたような形状の鼻と鋭い歯を並べた口を覗かせている。

これが意味するところは、彼らは寄生する者、される者の関係にある、ということになるのだろうか。それにしても寄生する側が妙に身体を曝け出しており、これでは外傷



いことなのだろう。左の壁にはやはり牢が続いており、通り抜ける風にこの虜囚達の声が溶け込み、まるで岩の冷たさそのものであつた空間に、人の業の生暖かさが加えられていた。

比率に偏りがあるのか、女性ばかりの虜囚らの目が全身に突き刺さるのを感じながら歩き続け、やがて差し掛かつた坂道の先に異変を認める。

下り道の先には、真つ白な群集が立ち尽くしていた。どれも人影、幻影らしく、靄で出来た身体には実体などありはしないが、道を埋め尽くすほどの数は計るのも容易ではなく、また視界を占拠されているため奇襲に対する備えの大きな妨げとなり、脅威として大きいものであつた。

道そのものについては横幅が膨らんでいる他、檻が両側の壁に並んでいる点が慣例から外れているが、その間には下から巨大な岩が突き上げて聳えて視線を遮っており、やはり鉄格子の正面は黒く塗り潰されているようだ。

当然この場における一番の問題は白い人影の群集だが、これを解決する策は無く、しかし一つ思い当たるものがあつた。可能な限り闇であろうとするこの洞窟での責苦は、ルドウィークがそうしていたような個別に与えられるものではなく、対象を選ばずに作用を起こす幻覚の類らしい。その内容は幸福であつた頃の夢だそうだが、果たして記憶を失つた不死人にそれが齎された際、引き出されるものは何であるのか。

それがこの白い幻影なのだろう。霞んだ記憶が呼び出す面影はやはり霞んでおり、喪失の恐怖は衰えている。これも失った心と引き換えに得た不死人の強みの一つだが、なんと後ろ向きな話であつた。

## 第12章 4

## 第12章 牢獄都市 最奥部 4

ともあれ幻影そのものは無害であると予測を立てれば、あとは視線が通らないという課題だけが残り、それならいつそ強行突破を試みるべきか。

僅かに洞窟を漂う光を水滴が絡め取るように内側に含みながら坂道を滑り、その様子を見て人心地ついた不死人も漸く重くなっていた足を抜き、歩き出した。

牢が多いため坂を下れば耳に入る虜囚らの嘆きなどは増える一方になり、それは当然の成り行きの筈であったが、それにしても声は多く、その内雑談の趣をしているものまでもが加わっていた。

声を潜め、或いは低く呟くような言葉の数々はどこか現実から剥離したような印象を持ち、虜囚のものとは異なる。そして不死人の身体が白い幻影の群集に分け入って行く、その声が牢の中からのものではなく、耳の傍で彼等が発したものであることを理解するに至った。

途切れがちで、不明瞭であり、決して言葉の形を悟らせないような声は、確かにどこか懐かしさを感じるものであった。ただ、やはり古い記憶を喚び醒ます契機とまではな



らず、完全なものとなって心に描かれることは二度と無いのだろう。それが不死の呪いであり、未来も過去も奪うと云われる所以である。

そういったあまり考え甲斐の無い諸々が、後頭部を襲った強い衝撃によつてどこかへと吹き飛んで行つた。それは危うく意識をも連れ去つてしまふところであつたが、これに堪えた不死人はいつの間にか地面に転倒していた身体を跳ねるようにして起こし、馬乗りになろうとする敵に向けてロングソードを一閃する。それが打撃を被つたばかりの脳が無意識に作り出した幻影とも知らずに。

空振つた剣は白い人影だけを裂き、直後に背面より二度目となる物理攻撃の直撃を受け、身体は吹き飛ばされて地面に転がり、また飛び起きる。そうしてやつと対面した顔は、やはり右側面にのみ二つの目玉を付けていた。

両者の間で白い人影が行き交う。瘦せぎすの亡者が追撃をしなければ間合いは離れたままであり、それは魔法の距離である。不死人はソウルの矢を放とうと魔術師のロングソードを構え、しかし詠唱する前に眼前まで滑り込んできた黒い影に腹部を殴られ、次いで下から顎を打ち抜かれる。

速度に優れる相手であるとは理解していたが、予想よりも素早い身のこなしに対応し損なつていた。瘦せぎすの亡者による拳打は頭蓋の内の脳を揺らし、おそらく昏倒を狙つたものであつたものの、ソウルの業によつて強化された体幹はどうかそれを抑

え、不死人は反り返っていた背を瞬時に引き戻してロングソードを右から左へ振り抜く。

だが懐にまで潜り込んでいた敵は、この時既にその場から離脱していた。こちらとしても今のは牽制の剣であったため、これ自体が大きな隙になることはないが、状況が一つ前に戻るだけならより不利になったことになる。

魔術師のロングソードを手元に戻した後は迂闊に動き出さず、身構えるのみに留め、するとまた絶妙な間合いで瘦せぎすの亡者は不死人を見据えていた。魔法にしる回復にしる、少しでも動きを見せれば敵は即座に飛び出し、その行動ごと制圧されるだろう。ならばこの時間が勝利への道筋を見付け出す最後の機会となる。

敵は地面を武器とする投げ技にしる、単純な格闘にしる、いずれの攻撃も無手にて行っている。従って速度はあれど運用しているエネルギーの桁は低く、本体の体重の軽さも相まって正面衝突には弱いと思われる。また、最初に遭遇した瘦せぎすの亡者がそうであったように、軽さ故に攻勢に熱中せざるを得ず、それが意外性のある状況への即応の遅さを招いていると予想される。

以上の二つを要点と絞り、不死人は負傷の残る身体で詠唱の構えを取り、すると即座に懐に潜り込もうとする黒い影に詠唱を捨てた剣を向け、だが上から打ち降ろされたその一撃は空振りに終わっていた。



に惨たらしい声が響き渡った。

「みいみいみいっー」

痩せぎすの亡者が倒れ、一方で太い管のような蠕虫はまだ生きているようだ。不死人は鳴き喚くそれを左手で掴んだまま横に翳し、自身の胸から遠ざけるようにして先にエスト瓶で身体の治癒を行い、その後腕ごと何度か壁に叩き付けることで弱らせ、その場に放り捨てると足で踏み、躪り潰した。

左手を端として全身に被った相手の体液を拭っていく。

やや危ない局面はあつたものの、敵が不得手とするところを見抜いたこの勝利には価値があり、その経験は再び痩せぎすの亡者が出てきた場合に役立つことだろう。戦いそのものはついてはそれで終わる話だが、他方彼等の性質に関する謎は深まるばかりである。

胸から刺し込んだ手が蠕虫の身体を掴んだということは、痩せぎすの亡者は体内深くにまでそれを受け入れていたということになる。その事實は、最初に遭遇した者の蠕虫が襲いかかって来なかった理由を明らかにするものであり、つまりその時の斬撃は内臓にまで達していたため、体内に居た方をも一纏めに斃していたということになる。

だが生物の寄生として、あの形はよくあるものなのだろうか。これについては納得し難かった。

身形を整えた後、塔のカイトシールドを拾い上げ、不死人は洞窟の奥に向かつてまた歩き出す。白い雑踏はまだ視界を埋め尽くす程に進路の上を横断しており、まるで気ままに歩き回る彼等を掻き分けて進むとも、絶える様子は無かったが、下り坂が終わり、俄かに現れた上り坂を進んで行くと少しずつ数が減り始め、道が平坦に戻る頃には一つ残らず消え失せていた。

虜囚の女性が言った通り、甘い香りとやらがあの幻覚を誘発するのであれば、それを構成する粒子の類は窪んだ場所に体積し易く、より症状を頻発させるか、強くするのだろうか。それがあの白い人影の密集地帯を作り出した仕組みと思われるが、それを知ったとして窪んだ場所を避けて通るには洞窟には分岐路の気配が無く、その知識はあまり活かすように無かった。

頭の中ではそうした考えが忙しく回り続け、それとは対照的に足は常に動き続けてはいてもなだらかな地面を退屈がっていた。無論、無意味に体力を消費するよりは良いが、どちらかと言えばその感覚は倦怠感ではなく、そろそろ何かあるだろうという予感の下に去来したものであり、そうした矢先、道の先にまた坂道が現れていた。

今度の上り坂の、それも随分な急勾配である。先程の予想が正しければこの地形では幻影によって視界が塞がれる恐れはないが、行く先では一旦両側の壁が無くなつており、元々の足場の不安定さから落下の危険が高い地点と言える。

そうならば慎重に振舞おうとするのが自然であり、まず不死人は周囲の闇に棲んでいる者が居ないか周囲をよく観察し始め、すると亡者などでは無いが妙な物を発見するこ  
ととなった。

## 第12章 5

## 第12章 牢獄都市 最奥部 5

黒い岩肌、黒い地面の中に見付けたのは、道から外れた場所から頭だけを覗かせている、二つの黒い突起物であつた。更に近付いて観察したところ、それは梯子の先であつたらしく、またそれが伸びている先には色とりどりの輝きが置かれていた。

正気を残した者が示した、何らかのメッセージ。気軽に向かうには梯子が長く、降りている最中に攻撃された場合の危険度が高い上、それでなくとも罨を疑えばきりがない。いつそ放置して先へ進むべきかと、結論が消極的な方向へと傾き、それに対して浮ぶ反論が順々に削除されていったが、最後に残つた一つは黙殺するには大き過ぎるものであつた。

ここはリングレイの深部である。道中の険しきから、このような場所にまで来る者は尋常の存在ではなく、握っている情報もそれに相応しく重要であると見込める。仮に敵対する者であつたとしてもそれは同じ事。襲撃を迎え撃つことになれば死闘に斃れることも有り得るが、打ち破れば拾えるものは大きいだろう。

少々楽観的かもしれないがそれを最終的な決定とし、不死人は梯子に乗り、一つずつ

それを降りていった。

材質の不明な梯子は体重のかかり具合によっては歪む割に、あまり音を発しなかった。だとしても聞き耳を立てる者にまで隠し通すのは無理があるため、少し降りては周辺に異変が無いか目を凝らし、その度、足の遥か下、まるでどこからか響く虜囚らの叫びを飲んで蠢くような闇に全ての知覚が奪われていた。

それは錯覚に近いものだったが、解釈次第では限りなく真実の至近にあり、大抵の者はこの光景に足を竦ませるものであるのだろう。流石にそうまではならないものの、不死人として動作は遅々としたものとなり、やつと下にまで到着した頃には、随分な時間が経ってしまっていた。

この狭い穴の底には一つ二つの幻影が通り過ぎる他、目に付くものと言えば光を放つ七色石と牢くらしいのものである。よって潜む場所などなく、その人物は鉄格子の中で堂々と姿を晒し、だがまるで悄然と休んでいた。

「見付けてくれたか」

牢の中で倒れるように体重の殆どを壁に預け、座り込んでいたのは一人きりの戦士であつた。革鎧や鉄の鎧、或いは鎖帷子などを複合的に着込み、その上に所々裂かれた赤いマントを纏うという、独特の風体をしている。

「私はもう、進めそうにない。だからこれを貴公に」



彼が差し出した手は牢の外まで伸びきらず、途中で開かれた掌から小さな何かが落ち、転がってきたそれを不死人が拾う。指が摘んでいたのは、表面の紋章が霞んだ、鈍色の指輪であった。輪の部分に鎖が通っており、ペンダントのように身に着けることが出来るらしい。

「私達は全く理解していなかった。不死にあることの恐ろしさは、記憶や心を失うことだけじゃない。その先には、もっと、想像も及ばないような昏いものたちが待っている。それを、この地に来て始めて知ったよ」

戦士は力無く天井を見上げていた。おそらく彼もまた、自ら牢に籠もる者である。彷徨える亡者となる前に。

「分かっているな？ 我々の使命を」

落ちてきた戦士の視線が不死人の両目を射抜く。それは彼が始めて見せた威圧感であり、また最後のものでもあったのだろう。

「青ざめた血の先に求めるんだ。その見かけは黒い泥のようだが、指などで薄く伸ばすと青白くなることからそういった名で呼ばれるらしい。特徴がそれであれば、すぐに分かる筈だ」

まるで血のような色の含み方をしている液体。即ち体液ではなく、それはあくまで呼び名でしかないのだろう。

他に何か知っていることがあれば聞き出したいところではあったが、戦士はまた力の支えを失い、壁に凭れた。すぐそこにあるのなら、あとは実際に見てみれば済む話でもある。ならば彼はもう休ませるべきか。

「済まないが、頼んだぞ」

そうして、彼の息は穏和なものへと変わっていく。その様を見届けた不死人は、受け取った指輪を首から下げた後、梯子に手を掛ける。互いの為にも、もう二度とここには来ることはないだろう。上に向かって登り始めた。

一度通ったからと言って上に着くまでに潜むものが居ないと決め付けることは危険だが、それでも降りの時よりは数段軽快な挙動で梯子を登り続け、休憩も挟まなかったからか、元の場所にまでは比較的早くに返ることが出来た。

角度の急な坂道を前に、一度足を止める。その場から観察し、瘦せぎすの亡者などが本当に潜んで居ないかを確認した後、不死人は一歩ずつ前進を始めた。

仮に上から物を転がし、侵入者を撃破しようとするならば、彼らは何を持ち出そうとするだろうか。先程の大岩などがあれば確実だが、この坂であれば空の木の樽でも大きさによっては充分危険であり、実際にそのようなことがあればこの場所では抵抗が難しく、実はいくら警戒しようとも無意味であったのかもしれない。敵が出現しないことを祈るばかりである。

歩き続ける内、やがてその懸念は一度不発となり、坂道は両側の壁と水平を取り戻していた。ただ、それは激しく起伏した地形同士の間生まれたくく僅かな緩衝の場に通じ、二手に別れた先の道には一方に下に向かう急な下りの通路があり、もう一方には急激な上り坂があった。

先に回避した罫のことを顧みれば、選ぶべきはやはり後者となる。不死人は右の上り坂の方を向き、真つ直ぐ伸びるそれを登り始めた。

先程と同様、上から何か転がり落ちてくるといふ可能性は危惧として未だに強くあったが、対応出来ないことについて繰り返し考察して足が遅くなるのであれば、敵にその好機を作らせ易くなるばかりであり、あまりに愚鈍に過ぎる。ならばいっそ多少足音が立つことについては止むを得ないこととし、歩く速度を早めると、道は忽然と消え、天井からの岩肌が壁と繋がり、また壁が地面と繋がり、不死人を覆っていた。

袋小路である。だがその場に何ら変わったものが無い、ということも無く、右の壁の方に一つ、低い位置に穴が掘られていた。

穴の先を覗き、そこから見えたのは野外のような、岩に塗られた黒い塗料が奥行きや広さを曖昧にしている空間であった。また、穴の真下には折り畳まれた梯子が設置されており、これを外して伸ばすと、先にあるのは見覚えのある地形、女性の虜囚と会話した場所であるように見受けられる。

今にして思えば、崖を登り降りした辺りから洞窟は右へと曲がり続けており、高低差はあれど、おそらく戦士の居た穴の周りを大きく迂回するようにして同じ場所にまで戻ってきたのだろう。

結果、この牢獄の入り口と直通する道を確保し、そうなればこの場には他に用が無い。不死人は坂を降り、道が枝分かれしていた場所にまで戻る。

そうして足を差し向けたのは、未だ踏み込んでいない、下に向かって降りる細い通路であった。閉所かつ通路は螺旋状になっているため見通しが悪く、また幻影の姿もあり、敵と遭遇する際には例え相手が道の只中でぼうっと立っているままでも唐突なものになるだろう。

それを防ぐ要素があるとすれば、通路の狭さ故に音が反響し易く、即ち伝わり易い点か。不死人は耳に意識を凝らしながら、少しずつ下りの通路を降りていった。

実際に入ってみると、その通路は螺旋状と言って間違つてはいないが、整然とした設計の下に造り込まれたものと比較するとまるで歪みが酷く、曲がる角度などは気紛れであった。巨大生物の、のた打ち回る腸の中を進むことがあれば、似たような感覚を得るかもしれない。

程無くして通路の出口まで到着すると、空間は急激に拓かれる。天井は高く、幅や奥行きは広大で、そしてなにより目を引くものは、全く波を立てずに静まり返つてそこに

在る、巨大な水溜りであった。

幻影が徘徊するその水辺に寄り、しゃがみ込んで掬い上げると、掌の上で薄く伸ばされていくそれは深い藍色から血を抜かれた生首のような青白さへと移り変わり、この変化の様子を見るに、ここにある池こそが青ざめた血であると見て間違いないだろう。

追い求めていたこの液体は、しかし触れただけではまだ正体を現さなかつた。直ちに害を撒き散らすようなものではないらしく、その点は検分する上で助けとなるが、何を以てリングレイの秘密とするのか、ここからまた探求しなければならぬのだろうか。

まだ情報が不足していると判断し、ひとまず不死人は立ち上がり、周囲をよく見回す。青ざめた血の池はこの空間の殆どを占めており、他に足場は無く、奥に行くなら水に浸かりながら歩く必要があつた。また、空間の中央では水底と天井の両方から岩肌がせり出して繋がっており、太い柱となつたそれは内部に牢を抱えて池の中州として屹立している。

何かあるとすればこの中洲の牢だろう。不死人はこれを目指し、青ざめた血の池の中へと足を入れて歩き始め、すると一歩目から大きな違和感を覚えることとなつた。

## 第12章 6

## 第12章 牢獄都市 最奥部 6

通常、水の中を歩こうとすれば足に抵抗が掛かり、歩みは遅くなるものだが、この青ざめた血の中においてはそれが全く無かった。重さを全く感じさせないのであれば、液体に見えるだけの全く別の何かであるのかと、試しに自身の頭髮の一部を切り取り、水に落としたところ、それは浮かび、仮説が打ち消される。

秘密となるだけあって、得体の知れない特性を抱えているようだ。そしてこの要素そのものは歩く上で不利に働くことはなく、むしろ通常通りの歩行速度を確保出来るため、普通の水の中を進むよりは危険の度合いが低い。それなりの距離があつた中州と対岸だが、そういった条件の下であれば、到着までの時間は大きく短縮されて当然であつた。

岩肌を足に乗せ、中洲に上がればそこは既に牢の目と鼻の先であつた。まるで円柱のような形のこの牢は鉄格子が等間隔で一周しており、隙間から中を覗き見るに下へ向かう階段があるようだが、肝心の出入り口が無い。稼動しそうなものは一つ、枝木を束ねたような彫刻の入った、厚い鉄の板があつたが、これも取っ手どころか鍵穴すら存在せ

ず、触れてみたところで動く気配は無い上、周囲に開閉装置らしきものも見当たらない。かかった。

無駄足であつたと断じるにはまだ早いだろう。ここを通るには何らかの仕掛けが必要であると思しく、それはこの場に留まつて調査を続けても解を得られず、ならば先に他の場所を見るべきか。

よくよく見れば中州を中間地点として、そこより奥の池の端にはもう一つの出入り口が存在しており、そこに手掛かりがあるかどうかはまだ分からないが、ひとまずの調査対象として定めるのも良いだろう。不死人は中州を降り、入ってきた通路を背にするような進路で歩き出し、あまり時も経ずにそこへと辿り着いた。

入り口を潜つて数歩、最初に出迎えたのは濃密な白い幻影達であつた。独り言か、呟きのような声を時折発する彼等はこの場では隙間無く密集しており、以前通つた坂の間の窪みに見た時よりも厚みが増している。粒子が停滞し易い場所に集中する、と仮説を立てていたが、それが全く的外れだつただのだろうか。或いは。

「おおお、おおお」

呻き声を聞き付け、即座に構えを取る。弱々しいそれはともすれば幻影の声と聞き紛うが、独特の枯れたような調子は不死の亡者にこそ覚えがあり、白い影の中に目を凝らしていると、そこに座り込んでいた者を見付ける。

それは農民の亡者であった。リングレイの周辺地域等に多く見られるものと同じような格好をしている彼は、足を広げて地べたにだらしなく座したまま、視線は宙を歩き来している。

リングレイの民に過ぎないこの亡者が牢獄都市に居る点も奇妙であったが、その動作や雰囲気も不審であり、これが他の者と同様、襲い掛かってくるとは考えにくい。試しに剣と盾を打ち鳴らして音を発し、或いは目の前に来て手を振ってみても、彼はやはり反応を示さなかった。

大方この農民は、夢に没頭しているのだろう。壁の方を見ると付近には牢が一切存在せず、虜囚の姿も無いことから、おそらくこの場所では甘い香りとやらが絶えず漂い、夢から現実へと引き戻されるといふことが無い。ならばそれは責苦にはならず、鎖にすら繋がれていない目の前の亡者が穏やかに過ごしているのも納得がいく。

ここで斃しておくべきか、という考えが一度脳裏を過ぎり、だが剣を納めて先へ進む。それが不毛な行為になると知っていたためであった。

次には老人貴族の亡者が目に留まった。彼が赤子にするように愛しげに撫でていたのは、遺骨の入った壺であった。

その次には王城の召使の姿があった。身体を一定の間隔で左右に揺り動かす彼女は、まるで心地良い音楽に身を任せているかのようであった。



兵士、騎士、看護師に獄吏でさえも、この通路を歩けばそこかしこに見付かり、また彼等は皆一様に夢に耽っている様子であった。おそらくは、彼等にとつてここはそういう溜まり場なのだろう。

不意に天井から雫が落ち、上から下に向かつていくそれが、脈絡も無く右から左へとゆつくり流れを変えていく。その現象は重力の法則を無視しており、だが観測した者の捉え方に異変が生じて起こったものであった。

横合いから脇腹に突き刺さった衝撃に吹き飛ばされ、地面を大きく転がったあと、壁に衝突して止まる。敵の奇襲は見事に成功し、大きなダメージを負った不死人はすぐに起き上がるも、目の前に広がる白い幻影の群れに視線を妨げられ、襲撃者の姿を捉えられずに居た。

ここから回復しようとしても手遅れだろう。確たる根拠は無いが、この敵、痩せぎすの亡者なのだろうが、今この瞬間にも標的が隙を見せるのを待つており、不死人に出来ることと言えば剣を構え、背中を岩肌貼り付けることで相手が姿を見せる方角を一定の角度内に収めようとするのみであった。

ただ、それもどれほどの効果を上げるのか、あまり期待出来たものではない。視界を遮る幻影達は眼前に居座っており、これでは敵の接近に気付いたとしても、剣も振れないような至近距離にて相対することになる。

幻影を打ち払うことが出来ればそれが一番良いが、具体的な手段の発想には至らず、他に索敵の手段が無いか検討するも、そもそも呼吸音も足音も聞かせない者が相手ではまず見付からないだろう。

有効な策は浮かばないまま時が流れ、いよいよ敵の再来が間近と見るや、不死人は徐に魔術師のロングソードを鞘に納め、塔のカイトシールドもまた静かに地面に置く。

そうして、痩せぎすの亡者は白い幻影を割りながら飛び出し、彼我の距離を一息に詰め、しかし詰め切るよりも一拍早いタイミングで不死人から両腕が伸びる。

死地においては、自ら踏み出すことで見出せる活路は多く、今回も不死人は敵の接近を感知した直後、自身も前に飛び込んで痩せぎすの亡者に滾っていた攻撃の意を崩し、密着した状態にてその身体のごくかを強引に掴み、そのまま力任せに放り投げた。

長身瘦軀は地面に打たれ、長く転がってまた幻影の中に消え、一方で不死人の右手の中には妙な感触が残っていた。見てみるとそれは亡者の顔から垂れていた筈の蠕虫であり、掴み所と投げ方の具合によつて取れたのか、まだ生きているらしく蠢いており、そして生かしておく理由は特に無い。

岩肌叩き付けて潰すと放り捨て、間を空けず、転がっていった痩せぎすの亡者の方に向き直る。

出来れば今の時間でエスト瓶による回復を行いたかったものだが、面倒事とは往々に

して当人の都合に関係なくやって来るものであり、今更失ったものを嘆いてもどうにもならない。同じ手が通用するかは限りなく怪しいが、不死人は無手にて敵を待ち構え、待ち構え続けて、待ち惚ける。

いつからか、痩せぎすの亡者の気配が消えて無くなっていた。それこそ罫を疑い、始めは周囲を警戒し続けるもやはり敵がやって来ることはなく、試しにエストで回復してもそれは同じであったため、塔のカイトシールドを拾い上げ、原因を探りに前に踏み出す。

すると数歩先にて、痩せぎすの亡者は右側に寄った両目を天井に向け、口は半開きのまま呆けたような顔をして座り込み、それは他の亡者と同じく、夢の中を泳ぐ者の表情であった。

今まで幻影の中でも平然と活動していた痩せぎすの亡者だったが、それが唐突にこの状態に陥つたのにはそれなりに理由が存在する筈であり、見当を付けるとすれば先程まで付着していた蠕虫だろう。あの生物を身体の中に入れ、特に気管を覆うことで甘い香りに染まった空気を濾過し、夢に翻弄されることを未然に防ぐ、といったところか。

怪異と化すことでその場に馴染もうとする者の先例は特に牢獄都市の入り口付近の看守が挙げられるが、この二者がとても引き返せないような身体の変異を受け入れたのは、ルドウイークや獄吏と同様、虜囚達が苦しむ様を間近で愉しむためであったのだら

うか。そのような疑いが強い。

魔術師のロングソードを構え、瘦せぎすの亡者の首に狙いを付ける。他の亡者ならともかく、この敵は幻影への耐性を付ける術を持っており、放置して進めば後背から襲われることも在り得る。無抵抗な者を、となれば抵抗もあるが、命とりとなる前に決着させなければならなかった。

やがて振り降ろされた剣が亡者の首を跳ね飛ばし、地面に落とされた黒い血溜まりが夕闇に生まれた影のように長く尾を引くと、その上を忘れてしまった誰かの面影が踏み付けて去っていった。

## 第12章 7

## 第12章 牢獄都市 最奥部 7

思いの外、心に僅かに残されたものが甘い香りの夢に疼いたらしいが、それ以上は思  
い出そうとしても無為である。不死人は瘦せぎすの亡者の身体に背を向け、洞窟の探索  
を再開した。

白い幻影も、夢見る亡者達も、奥を目指すにつれ増える一方であった。特に幻影の方  
はあまりに多数が重なるため、最早濃厚な霧と化しており、そうなれば時折亡者達とぶ  
つかることがあつたが、反応を返す者はおらず、不死人の足が止まることは殆ど無かつ  
た。

その内、ひときわ天井の高い区域にまで出ると、いよいよ幻影達は人の形を失くすほ  
ど重なり合い、濃霧に覆われた視線は半歩先の様子も見ることが出来ない有様となり、  
その結果自ずと両目は幻影の無い上の方へと逃れる。

目に飛び込んできたのは怪しげなうねりと、その滑らかな動きがよく引き立つ黄金の  
肌であった。

巨大な蛸。天井に張り付いたその怪物は不死人を見下ろしながら、岩肌を舐め回す

ように触手を動かし、また丸い筒のような部位から黒い霧を散布していた。これが甘い香りの元凶かつ、洞窟内の岩肌を黒く塗っているものの正体なのだろうが、それは巨大な生物の前に餌のように身を差し出してしまつてゐる時に云々すべき事柄ではない。急ぎ剣を構え、帯のような形の瞳を見据える。

後退か、牽制か。いずれにせよ発見が遅れた不死人は後手であり、その刹那は蝟の方こそ主導権を有していた筈であつた。だがそれを、巨大な怪生物は行使せず、過ぎていく刻を蠕動だけで消費する。

敵意は無いのだろうか。この金色の蝟が洞窟内の幻影の核であるなら、仮に斃せたとしても、夢の中から引きずり出された者達が一斉に襲い掛かつてくる可能性があるため、素通り出来るといふのであればそれに越したことはない。

試しに一步二歩とその場から歩き、蝟に異変が起こらないことを確認した後、天井の形状などから推察して首尾良く洞窟の奥へと逃れる。危うく先入観というものに操られ、余計な真似をするところであつた。

とにかく蝟の近くから立ち去り、濃霧の中を突つ切るようにして奥へと進むと、段差と、それを登るための梯子が架かっている場所が見付かる。段差の方には上の方に岩で造られた返しが付いており、それは何かの生物、乃至は蝟から放出されている甘い香りの侵入を防ぐ為の処置であると思われる。

不死人はこの梯子に手を乗せ、登っていくと、その先にはやはり幻影の姿があまり無く、更に奥へと進むと完全に途切れていた。

そして通路の先で、また別の者と目が合う。今度は蝟ではなく瘦せぎすの亡者との邂逅であり、それは戦いの始まりを意味しているが、彼は椅子に腰掛けたままの状態で右手を突き出し、不死人に対してまるで制止を呼びかけるかのような振る舞いを見せる。

出し抜けのその行動を前に身体の動きが自然と止まり、静観していると、また亡者は左手で顔から垂れ下る蠕虫を掴み、それを引つ張ることで粘膜同士の摩擦が起こって粘り気のある水音が口から零れ、分離された。

右側面に寄った両目が爛々として不死人を捉える。

「彼を害さなかつた貴公の判断は礼謝に値する。が、口先のみではそら寒い。ああ、待て、そこから近付くな。ここは混雑している」

発せられたばかりでは言葉の意味が不明であつたが、立ち止まったまましていると、耳の中に細やかに蠢く何かの音が入り込み、その出所を探つたところ、亡者の全身に目が向く。

それは数千にも及ぶような数の蠕虫の、身体の小ささからして幼体の群れであつた。見かけの上では瘦せぎすの亡者が貪られているかのような光景だが、共生のような関係であることと、彼の発言に鑑みれば、少なくともそれは無いと言える。

その姿も、生態も知らぬ者には酷くおぞましく見えるかもしれないがそれは偏見というものだろう。先程もそういった誤解で軽率な行動に出ようとしてしまったことを自省したばかりであり、ここでも惑わされてはならない。

亡者はやがて胸元から取り出した何かを投げ、こちらに寄越した。拾い上げたそれは鍵の形状をしており、おそらくは虜囚の女性が言っていたものではないだろうか。

「貴公らの企てを邪魔立てしようとは思わん。持つて行け。それと、帰りはこちらの通路を使え。今は大人しい彼等でも、何らかの諍いに発展する可能性はあるからな。無意味に彼等を傷付けて欲しくない」

瘦せぎすの亡者が示した方向を見ると、その岩肌には穴が開いており、先にはいくつか岩の段が続き、下にある腸のような螺旋階段の入り口付近に向かって降りていた。一つ一つの大きさがそれなりにあるため、降りることは容易いが、その逆、登るのは難しく、これは上からの一方通行の道である。

確かに、それを使えば夢に耽る亡者達の傍を通らずに済むが、彼がこうまで気を回すのは何か理由があるのだろうか。それとなく横目で瘦せぎすの亡者の表情を探り、するとそれが慥に触ったのか、彼は苛立ちを込めたような視線を返す。

「なんだ、まだ何かあるのか？ まさか、この現状に意見でもしようかと？ 幸福な夢に耽溺することの、一体何が悪い。例えそれが破滅を呼んだとしても、妄執に駆られた者



に比べれば、他者を巻き込まずに済むのだぞ」

怒りを買った、という程ではないが、彼は明らかに気分を害した様子であった。あまり長居すべきではないだろう。不死人は痩せぎすの亡者の方から顔を背けるようにして歩き出し、穴を通り抜けて岩の段を降りて行った。

次に螺旋状の階段を登り、急な坂道を上がり、梯子を一つ降りると、虜囚の女性が居る牢の前にまで戻る。中を覗き込んだところ、紙の束を抱えた彼女は壁に寄り掛かって座っていたが、すぐにこちらの気配に気付いて勢い良く立ち上がり、鉄格子の前にやって来る際にも小走りになっていた。

「あれは、あれは見付かったの?」

気の急ぐ彼女の前に、勿体付けずに鍵を差し出す。

「ああっ、きつとこれだわ! すごいのねあなた!」

その感激ぶりは大袈裟で、あまり騒ぐことを良しとしない側からすれば迷惑なものだったが、他者のためにこうも喜んでいえると思えば、多少大目に見るのが人情というものなのだろうか? あまり自信は無い。

「あつ、そうそう、ちゃんとお礼を用意しておいたわ」

鉄格子の隙間から差し出されたそれを受け取る。その紙の束は、手書きで何か記されているが内容が魔術に関するものであるらしく、有効活用するならコネリーの助けが必

要となるだろう。失くさないよう、大事に仕舞い込んだ。

「それじゃ、その鍵を使って、あの方をこの場所から連れ出して貰える？　どうか、お願いよ」

面倒事は避けたくもある反面、その人物が重要な何かを知っている可能性もあるため、無視することは出来なかった。不死人は彼女の言葉に頷くと、牢の隣にある扉に鍵を差し込み、解錠されたそれを押し開いていく。

中の階段を下り、踊り場で一度左に曲がって尚先に進んでいくと、間も無く辿り着いた部屋では緑色の気体のようなものが漂い、それが発光することで内部を仄かに照らし出していた。

その一助を得て見回したところ、洞窟を利用しただけのこの部屋は他の牢よりも格段に広いが、主はたった一人しか居ない。

白いドレスを身に纏うその女は、室内の中央にて鎖の戒めを受け、座り込んでいた。これこそが虜囚らの愁いを集める姿であり、救出を懇願された人物であると見て間違いないだろう。

不死人は早速そこへ近付こうと一步を踏み出し、だがその瞬間、鎖が引き千切られて周囲に激しく飛び散った。他ならぬ、その人物自身の手によって。

裾に垣間見えるは手甲、足甲。そして胸元には鎧。ごく薄く、華奢な部類ではあるが、

氷水に沈んだような色の戦装束をドレスの下に着込んでいたその貴人は、金にたなびく髪をしなやかに翻して振り向く。

長く繊細な睫は瞬かず、その奥にある冷厳な色をした瞳は確と敵を捉え、虜囚の姫、アンゼリークは歩き出す。

## 第12章 8

## 第12章 牢獄都市 最奥部 8

この成り行きに身に覚えは無く、脈絡がまるで不明であり、それこそ洗脳か幻影の類を疑うべきかもしれないが、何にせよ戦いである。

剣と盾とを手に不死人が身構え、対するアンゼリークは無手のまま風を撫ぜるように両手を左右に広げると、手が辿った宙に拳大の輝く塊が六つ、綺麗に並べられた。やけに強い輝きを放つそれはおそらく結晶、上の階の騎士達が用いたものと同じ性質を持っており、彼女はそれを従え、次に不死人に向けて右の手の平を向ける。

そうしてまるで前触れも無く、結晶を孕むソウルの槍が飛ぶ。不死人はこれを回避しようとして右へ走ったが、アンゼリークは左の手の平を翳すとそこから細く白い光の線を照射し、それになぞられた地面には結晶が湧き上がり、結晶の道が生まれていた。

自らそこへ飛び込んでしまいそうになったところを間一髪で留まり、引き返そうとした矢先、白いドレスの裾から覗く右手が白い光の線を放ち、また不死人の行く手に結晶の道を作り出すと、左右を塞がれ挟み込まれる形となる。

ならば後方のみが退路となるが、誘いに乗って素直に下がろうものなら何をしてくる

か分かったものではなく、一旦様子見を決めると、そこへまた新たな結晶の魔法、浮遊する結晶塊がアンゼリークによって作り出される。

ソウルの結晶槍と同じく、騎士が行使したものと同じ術であるこの魔法は周囲にソウルの矢を乱発するが、威力はあまり高いものではないため他の魔法との併用が基本なり、塔のカイトシールドで矢を防ぎながらそれを警戒しているとやはりアンゼリークはまた手を翳す。

放たれたのは、緩く宙を漂う、三つ連なる結晶塊であった。こちらは輝きを放つが矢を吐き出さず、また直撃などさせる気がないような軌道は避けることなど造作も無いが、別の狙いがあるのだろうかといつでも変事に対応出来るように注意していると、間も無く連なる結晶塊は甲高い音を発した。

その直後、結晶塊はいずれも勢い良く飛び出してソウルの結晶槍と化し、三つ連なつたまま不死人に迫る。過剰なまでの攻撃力を前にして回避以外の選択肢などある筈もなく、結晶の道に挟まれた範囲内で身体を左右に振って躲すと、三つ目を避けた瞬間を狙ったと思しきソウルの結晶槍がアンゼリークの右手から既に撃たれていた。

貫通能力を有するそれに直撃すれば盾の守りなど無意味に等しく、不死人は無理矢理に身体を捻って避けることに成功するが、何とかそれをやり遂げた先にはまた別の結晶槍が放たれていた。

避けようと身を翻し、するとその瞬間一方の結晶の道が散り始めている。おそらく時間経過で自壊すると予想され、これで退路が作られたと、そう認識したのは一瞬の間のみであり、アンゼリークは容赦無く失われ始めた結晶の道の上に白い光の線をなぞらせ、不死人の退路を奪わんとする。

だが最早付き合っではいられなかった。負傷を被ることは承知の上、盾を肩なども使つて強く固め、それを前面にして結晶の降り突き破ると、そのまま走り出し、アンゼリークから遠ざかる。

追撃は無く、敵との距離を確保することには成功したが、予想以上に結晶が足などを傷付けていたらしいため、すぐにエスト瓶を飲む。

白いドレスはまだ、結晶の燐光を浴びながら静かに佇んでいた。儂く、清美なその姿とは対照的に彼女の駆使する魔法は凄まじく、まず魔法触媒も詠唱も必要としないため瞬時に発現され、搦め手も持っている上、一つ一つが一撃必殺の威力であり、これらに晒されては全く息をつく暇も無い。

反撃の余地など皆無に等しく、遠距離にて魔法で対抗するような真似など全く現実的ではないため、接近することがこの敵と戦う上で重要な要素となるだろうが、開幕に展開された六つの結晶塊はまだ主の近くで控えていた。大方、迂闊に近付こうものならこの結晶塊が自動で標的を追尾し、反撃するものと見られる。

これを如何にして対処するべきか、そこまで考えが及ぶかどうかというところで、アンゼリークが再び手の平を不死人に見せた。出来れば歪曲の盾を用意するべきであったが、その猶予は既に無く、駆け出した直後に迫り来るソウルの結晶槍を前転して躲し、速度の減少を最小限に留めて走り続ける。

その一方で彼女はまた、不死人の行く先に連なるソウルの結晶塊を放っていた。遅々とした軌道で飛行し、だがこの魔法が変化を遂げるより前にアンゼリークから白い光の線が照射され、不死人の左脇に結晶の道を作り、逃げる方向を絞ってくる。

どこに意識を向けるべきか、一瞬拡散し、その後甲高い音が耳を劈くと連なるソウルの結晶槍が順に宙を走り、不死人はこれを右方向に避けようとするが、動きを見透かしていたアンゼリークは行く手にソウルの結晶槍を放っていた。

走り続ければ右の魔法に直撃し、止まってしまえば左の魔法に直撃する、というこの情勢下。不死人は身体の向きを半身にして魔法の間を通り抜けることに成功し、しかしそこに六つの追尾する結晶塊が反応していた。

それらは全く予告無く目標へと矢のように一直線に射出され、だが事前の予測の範疇にあつたためどうか姿勢を低く、滑り込むようにして凌ぎ、起き上がれば遂に虜囚の姫が近接距離となる。

伸ばされた右腕から顔を逸らし、至近で放たれたソウルの結晶槍を躲しながら白いド

レスの腹にロングソードを叩き込み、だが伝わる感触は芳しくない。また敵は怯んでおらず、続けて放たれた左腕からのソウルの結晶槍を避けながら、今度は上からの斬撃をアンゼリークに叩き込むと、ドレスの裾から覗いた手甲がこれを堅く受け止めた。

ぼんやりとした小さな光が視界の隅の方に入る。剣と鎧とが打ち合つて生じた火花かと一瞬思えたが、それは青く、そして姫の鎧そのものを彩っていた。

つまりは魔法効果。防御力の底上げであるらしく、これを前にしては剣程度の重量による打撃では取るに足らないのだろう。では一度引くか、という選択肢も尤もだが、振り返るに近付く際の危険は高く、その過程はあまり繰り返すべきではない。

よつて不死人は魔術師のロングソードを鞘に納め、胴に向かつて打ち込まれたソウルの結晶槍を身体の向きそのものを横にして回避すると、その勢いのまま身を翻して背の武器の柄を掴み、回転しながら聖職者のウォーハンマーを振り抜く。

「くっー」

それを腿の辺りに打ち込まれ、アンゼリークは始めて声を発し、僅かに姿勢を崩す。この機を逃さず、畳み掛けるべくもう一度、ウォーハンマーが今度は脇腹を狙うが、それを阻もうとするアンゼリークの右手は衝撃を支え切れず、威力を持った槌頭がドレスを打つ。

剣で破れない鎧などは、破らないまま打撃武器によつて内部へ攻撃する。この基本的



な心得の一つが成果を發揮し、ともすればこのまま叩きのめすことさえ出来るのかと、内心に抱いたそのような期待を自ら掻き消すと同時、アンゼリークの左の手の平の上に青い球体に乗っていることに気付く。

三つ目の連撃となる筈であつた動作を中断。後方に飛び退くと、彼女はそれを地面に落とした。

そして青い球体は炸裂し、眩い光と衝撃に見舞われ、盾で身を守りながら思わず瞼を閉じる。瞬間的な出来事であつたのか、その現象はすぐに終わり、目を開けて急ぎ敵の姿を探すと、アンゼリークは離れた場所にまで引き下がっていたようだ。今の術で仕切り直しを計つたということになる。

しかしそれは悪手である。この間に不死人は聖職者のウォーハンマーで歪曲の盾を詠唱し、塔のカイトシールドに付与させたため、攻防備えた状態となる。これで趨勢が傾く。

「ふっ」

その見通しを笑う小さな声が場に置かれた。出所は一つしかなく、アンゼリークは微笑を湛えながら追尾するソウルの結晶塊を六つ並べるが、構わずに不死人は走り出した。

迎え出て来たのはソウルの結晶槍。やはり詠唱も無しに唐突に放たれたこの必殺の

魔法を不死人は右に避け、続けざまに放たれた同じそれを左に避け、三つ目を右に避け、と忙しくなりながらも前進を続けていると、前方の宙に連なる結晶塊が浮んでいるのを見付ける。

先の結晶槍に紛れたのか、いつから誕生していたのか知れないため、その三つは槍に変化するまでの時間が読めず、目を離すのは危険だが、その時に敵の方から聞こえた音はソウルの結晶槍が放たれた際のものであり、迫り来るそれを回避するべく、左方向へと飛び込み、やり過ぎす。するとまるでその機を待っていたかのように連なる結晶塊が槍となって射出され、回避したばかりの身体を貫こうとしたため不死人は反射的に身を右方向へと投げ出して躲すが、その先の地面では白い光の線が結晶の道を作り出していた。

勢いの乗った身体は最早止めることは出来ず、ならばと塔のカイトシールドを前面にして結晶の道を強引に貫いて走り、直後に反応した六つの追尾する結晶塊の一斉掃射をも潜り抜け、二度目となるアンゼリークへの接近を果たす。

肩を狙ったウォーハンマーの打撃を白いドレスの下の手甲が二つがかりで受け止め、そうすれば負傷は抑えられたようだが、反撃の手が無くなり、追撃を許すことになる。不死人は槌頭を覆って次は横腹に狙いを定めて武器を薙ぎ払い、しかし今度の防御で使われたのは彼女の右腕のみであった。

先的一幕と同様に、それでは打撃の威力を受け止め切れず、不死人の武器の先は目標に届き、負傷を与えていたようだが、それと引き換えに得た時間でアンゼリークは左の手の平の上で青い球体を生み出し、直ちに地面へと落とした。

作用は理解していたため武器を下げて盾を構え、軸足に踏ん張りを利かせて突き抜ける魔法の衝撃に耐える。それが終われば閃光で埋め尽くされていた視界もまた回復し、細やかな結晶が漂う洞窟の景色の中に、遠く、白いドレスの姿を認めるが、そこに僅かな違和感を覚えた。

相手が近接距離を避けようとするのは何ら不思議ではなく、炸裂する青い球体の魔法によつて早々に引き離そうとしたことについても別段思うところは無いが、先の術を行使する前と後では決定的に違っているものが一つある。

## 第12章 9

## 第12章 牢獄都市 最奥部 9

アンゼリークが両手で握る、金色の大剣の柄。それは不死人が、斃れたルドウィークから回収したものであり、おそらく今の一瞬の内に奪われたのだろう。

「ふふ。そんなところに、あったのですね」

冷え切った岩の淵を通り抜けてきた風のような、透き通った声で愉しげに呟くと、彼女は両手で持った大剣の柄を胸の前に掲げる。またそれに伴って部屋の中に漂う緑の気体が勢い良く流れ始め、どこからか押し寄せて濃度を増し、アンゼリークの胸元に収束して内に暗黒を秘めた、昏い光となる。

「この地の全ての呪いに応える。それが私の、女王の義務」

狂気の月光が、青い大刃を作り出す。ここに継承が成され、エルミューロクの女王、アンゼリークが即位した。

彼女もまた、ルドウィークとは別の、ある意味で呪いの極致にあるのだろう。だからこそその呪いは磨き上げられ、昇華して宿した純粹な美しさは、無垢なる願いや祈りと全く同質のものであった。

やがてアンゼリークは疾走する。これまで遠距離攻撃を主体としてきた彼女のその行動は意外に過ぎるため不意を突かれた形となり、されるがままとなった不死人は瞬く間に近付かれ、月光の大剣が右から横に薙ぎ払われた。

回避するには時が不足しており、その刹那に塔のカイトシールドを構えるものの、青い大刃は盾越しに不死人の身体にダメージを与え、思い掛けず怯んだ所へもう一撃、左から横へ振り抜かれた剣によって負傷を被る。

この距離では敗北は必至である。敵の斬撃の衝撃から抜けた直後、不死人はその場から飛び下がり、そのまま距離を取りたいところではあるが相手から目を離すことも出来ず、身体の向きは変えずに後ろに向かって走り出したところ、案の定追撃の気配が俄かに漂う。

アンゼリークの剣尖は下に降ろされていた。その独特の構えと、そしてルドウィークとの戦闘経験から、それが特殊な技であることはすぐに理解の及ぶところとなった。だが。

「ふっー」

大剣が纏う青い月の光は主の斬撃に従って光波と化し、敵を引き裂こうと飛び出す。それはまさに光速の疾さで迫り、黒い炎の柱のようなものを予期していたため直撃しかけるが、勘任せに横に引いたところ運良く回避に成功し、しかしそれ一つで終わること

はなかつた。

「はっ！」

続けて放たれた二発目の光波は、一発目をいなした気の緩みが認識の僅かな遅れに繋がりが、躲せるものではなくなってしまうていた。塔のカイトシールドで受け止めるが、魔法による攻撃力を防御すること自体は出来てもダメージまでは防げずに負傷する。

最早満身創痍と言っても過言ではない程、負債が貯まり切ってしまうていた。早急な回復が必要であり、不死人はその場を脱しようと足を動かすも、アンゼリークの放ったソウルの結晶槍がそれを追う。

或いは、逃げ道を塞ぐ結晶の道に翻弄され、次々に振る結晶魔法をも回避し続け、やつと敵から十分に離れた場所にまで逃げてくると、エストを飲み身体を治癒し、一つ息を吐いて状況を見直す。

敵はこれまでと同様、豊富な遠距離攻撃を持つている。だが大剣を手にしている関係上、片手のみで発動するようになり、その理由から前よりは勢いに聊か落ち着きが見られ、この要素が逃げる不死人の助けとなったようだが、それでも魔法同士の立ち合いとなればまだ勝つ目は無い上、大剣の光波を遠距離攻撃に織り交ぜてくるようならむしろ脅威は増していると見るべきだろう。

しかしながら、真に畏れるべきは剣技である。月光の大剣は事実上防御不可能であ

り、尚且つ武器としての重量は軽めであるらしく、振りが速く回避が困難を極め、通常の剣術では対抗出来ない。

遠近両面において至強。ただ、どのように考えを巡らせようともアンゼリークは自ら剣の間合いを好むと予想されるため、ならば必要であるのは剣の戦いを制する要素である。では具体的にどういったものが挙げられるか。それを思案しなくてはならなかったが、飛来するソウルの結晶槍を見てはそれどころではなくなる。

一撃必殺の威力と速度を持つそれは、だが女王にとつては数ある牽制の一つに過ぎず、不死人は避ける際に右方向へと走ったが、先には結晶の道が敷かれて行き詰まる。そうなれば当然足止めざるを得なくなり、そしてその瞬間に走り込んで来た白いドレスの姿が瞳に映る。

上段から打ち降ろされた月光の大剣を辛うじて後ろに躲し、続けて横に振り抜かれた一撃からも後方へと逃れるも、三つ目の斬撃は踏み込んだ足が深く入っていたため、避けきれずに塔のカイトシールドを翳す。

苦し紛れの盾はやはり無力であり、青い大剣によつて身を裂かれるが、事はそれだけでは済まないだろう。このままでいれば続けて斬撃を浴びせられることは明白であり、しかしその場合回避も防御も適さず、であるなら第三の選択、聖職者のウオーハンマーを反撃として横に薙ぐが、それは虚しく空を切る。

いつの間にかそうしていたのか、アンゼリークはその場から距離を取っており、そして攻撃が空振りになった不死人へと差し向けられた月光の大剣は、一際強く光り、昏い光波を迸らせる。

防ぐことすらままならず光波の直撃を受け、しかし傷を追いながらも次の二つ目、三つ目の飛翔する月光の斬撃を回避し、敵から距離を取ろうと試みる。一方で女王は無慈悲にもソウルの結晶槍を放ち続けてきたため、極めて危険だが魔法で弄ばれている内に結晶の道で逃げ場を潰されるよりは、と相手に背を向け、音のみを頼りに追撃を躲し、それと並行して逃走も続ける。

そうしてやつとのもので魔法の届かない位置にまで来る頃には、五つものソウルの結晶槍の回避をやり遂げてみせていた。ただしこれは奇跡の間近にある出来事のため、次に同じことが起これば必ず失敗すると見て間違いはないだろう。

そのように内心で確認しながら、エスト瓶を飲み、心許ない残りを見詰める。

極めて劣勢であった。遠近に優れるならば何か弱点の一つでもあるのが道理、常識というものだろうが、女王の特殊な鎧は防御力と機動力を高い次元で両立させており、本人の剣術も相まって隙らしきものが見えてこない。それでなくとも火力の高さと速成は凄まじく、これに常人が匹敵することなど夢にも有り得ない。

では一体どこを突いて崩すべきであるのか。



不意に白いドレスが膨れる。それは彼女が腰を落としたことを意味していると理解した瞬間にはアンゼリークは疾駆し、一息で彼我の距離を詰めてきていた。その次には下からの斬り上げに襲われるが、何とか後方への回避には間に合い、しかし上から折り返してきた大剣が振り降ろされるとそれ自体の対応は成功するとも無理な回避行動の連続で身のこなしが怪しくなり、三つ目の斬撃はやはり長く踏み込まれ、間も無く回避不能の攻撃が訪れるだろう。

ある程度の負傷を差し出して防御をすれば致命傷には及ばず、だがそのようなことを繰り返せばエストの残りを削られるばかりか、いつまで経っても反撃出来ない。瞬間的にそうした考えが頭を巡った結果、不死人は危険を承知で踏み込み、アンゼリークの間合いを強引に潰すと、密着した状態となって盾で大剣の柄そのものを押さえ込む。するとどうか。アンゼリークの大剣は攻撃の半ばで止められていた。

直感的な行動であったため後付けの理由となるが、いくら攻撃力に優れ、また防御力に優れたとしても、それは所詮魔法の力を振り所としている。即ち身体そのものを力で抑え込むのであれば、単純な筋力の勝負に持ち込める。

不死人はそのまま塔のカイトシールドでアンゼリークの腕ごと月光の大剣を押し返すと、伸び切った胴に向け、聖職者のウォーハンマーを打ち込んだ。

「ぐっー！」

これの直撃は効果が大きかったのか、アンゼリークは露骨に呻きを漏らす。その割に姿勢はあまり崩れず、ウォーハンマーの追撃が来るよりも前に軽やかに引き下がると二つ光波を寄越した。

そして不死人がそれらを避け終えたときには、今回は彼女の方から距離を取ることになった。単に仕切り直しにただけではあるが、あの氣勢を削ぐことが出来たのは大きな成果であり、ここで得た時間を無為なものにはしないよう急ぎ右手の武器を持ち替えたと詠唱を行い、塔のカイトシールドに闇の盾を付与する。

## 第12章 10

## 第12章 牢獄都市 最奥部 10

次の剣の交わりでは、これを金色の柄にでも叩き込んでパリイを取る。そのつもりで機を窺っていると、程無くしてアンゼリークは三つの連なる結晶塊を宙に置いた。時間差で攻撃するその魔法が出たということはこれの前後に女王自身の手による攻撃があると思われ、まずは変化前のこの時間で敵の攻撃を待ち構えるも、アンゼリークはこの機を先送りにし、そのうち結晶塊が結晶槍と化して勢い良く飛び出すと、その後を白いドレスが追う。

連なる結晶槍を右へと避け、そこへ迫るアンゼリークは大剣を大きく振りかぶり、対する不死人は闇の盾を擁する左手を前に出す。

斯くして月光の大剣、その柄は弾かれ、女王は無防備を晒す。その筈が、アンゼリークは右手のみで大剣を空中で静止させており、左手は軽率に差し出された塔のカイトシールドに向けられ、そして白い光の線が照射された。

危険を察知した不死人が盾から手を離し、すると白い光の線を直撃したそれは瞬く間に結晶に飲み込まれていた。完全に狙いを読まれ、防御どころか回避すら間に合わない

状況へと陥り、そして月光の斬撃が襲い掛かる。

胸に縦方向の裂傷が生まれ、夥しい血と共に意識も流れかけ、だがここで堪えなければ止めの追撃が齎されるだろう。即座に軸足を踏み締めて姿勢を保ち、空になったばかりの左手で聖職者のウォーハンマーを掴むとそれを下段にあるアンゼリークの大剣の根元に向け、右手のロングソードもそれに倣うと交差させた両手の武器で月光の大剣の動きを一時的に抑え込む。

瞬きの無い、冷たい瞳の中に自身の顔が映る。仮にも貴人相手となれば気後れするのが普通の感性だろうが、心を失くした上、女王の民でなければリングレイの民ですらない不死人はそういった配慮など無縁であり、その態勢のまま頭突きを叩き込み、相手が怯んだと見るや、両の武器を両側面からドレスの中心目掛けて打ち込んだ。

「うぐっー」

魔法効果の防具があっても堪え難い衝撃であったのか、踵の高い足甲がたたらを踏むが、アンゼリークは尚も崩れずに飛び下がると、青く迸る斬撃を飛ばして牽制し、更に遠ざかっていった。不死人としても直ちに回復が必要な身体状況にあるため、光波をいなし後は結晶が散った塔のカイトシールドを拾い上げ、その場から引き下がる。

まずはエストを飲み、身体を整える。その次にはこの後に発生する衝突の備えをしななければならないが、先的一幕においてはアンゼリークに手の内を読まれ、それが負傷の

原因となつたため、あまり単純な企図は窮地を招くと考えるべきである。

しかしながら、女王は手傷を負つた関係かすぐにこちらに迫るような気配は無いものの、熟考するだけの時間の猶予は流石に残されておらず、複雑な策を短時間の内に練る、という時点で既に大きく矛盾している。またそうして出来上がる繊細なものは想定外の事態に陥つた場合の修正が追いつかない可能性が高く、そして剣技とはしばしば攻撃の質を急変させるためその危惧が現実になることは十分に在り得る。

而して、重視するべきは計画性ではなく、直面する状況への対応の幅の広さである、という結論が導き出された。

まずは聖鈴を鳴らし、右手の聖職者のウォーハンマーによつて歪曲の盾を詠唱するが、それを付与した塔のカイトシールドは背のベルトに固定し、左手には魔術師のロングソードを持つ。

そうしてアンゼリークに向かつて少しずつ歩き始め、その傍ら彼女は足を動かさず、留まつて連なる結晶塊を放ち、またそれを終えた左手を柄に戻ると、両手で握られた月光の大剣の先を敵対者に向け、突きの構えが取られる。

それ自体は剣技の一つのようにも見受けられるが、大剣の元には昏い月光が収束し、収まり切らずに滲み出しており、その趣はどこかルドウイークが決め手とした技の前兆と似通っていた。

故に不死人は迷わず駆け出し、間もなく射出された連なるソウルの結晶槍を最小限の、身体の軸を逸らして紙一重の躲し方をしながら走り続け、だが相對する女王は溜まり込んだ月光を解き放った。

突き出された月光の大剣はその先から青い奔流を放射し、それは滝の如く荒れ、流れ続けながらそこから逃れようとする不死人の姿を追う。

捉えられ、月光に没する。もう少し遠いようであればそのような結末となっていただろうが、既に距離が詰り過ぎていたため、奔流を放ち続ける剣の先をアンゼリークが手元で曲げるよりも早くにその懐への侵入を果たし、不死人は下から掬い上げるようにして武器を振るう。

狙いを付けた胴はごく無防備であり、しかし不死人は打ち込む筈のウォーハンマーと身体そのものの動きを急停止させると、地面に向けられていた彼女の左手から離れるべく飛び退がる。

その直後、月光の奔流が止むと同時に、差し置かれた左手から照射された白い光の線は両者の間に結晶の道を作り出していった。危うく陽動に乗るところであったことを思えば回避出来たのは幸いだ、距離は半端に開いてしまい、彼女の支配する空間が現出する。

結晶の道の守りを得たアンゼリークは月光の大剣を素早く地面に突き刺すと、間髪入

れずに右手でソウルの結晶槍を放ちながら、左手で連なるソウルの結晶塊を作り出し、右手で目を眩ませるための浮遊するソウルの結晶塊を宙に置き、左手から伸びた白い光の線で不死人の逃げ場を狭める結晶の道を生み、右手で狙い澄ましたソウルの結晶槍を放つ。

結晶の道によつて前進を拒絶された上、狂つたような連続した結晶魔法の回避のため左右へと激しく動かされ、直撃こそせずにいるもののスタミナが枯れ始め、またあまりに矢継ぎ早に行動を要求されては脳の働きも著しく制限を受け、成す術無くその場に釘付けにされる。

奇策による打破か、強引な撤退か、無謀な前進か。順に考えついた三つの提案を、しかし一蹴し、忍耐に己の命運を託して不死人は回避行動を続ける。

そしてアンゼリークが連続してソウルの結晶槍を放つた時、遂に両者の間に横たわっていた結晶の道が散り、この好機をものにしようと不死人は前に強く踏み出す。

だが、その機を待ち望んでいたのは、果たして一方のみであったのか。

迎え撃つ月光の一閃。その強烈な斬り上げを放つた大剣を間一髪のところまで後ろに躲すも、次の上段からの一撃はアンゼリークが必中の意志を込めて深く踏み込みながら繰り出そうとしていたため回避出来る可能性は皆無であり、止むを得ずロングソードとウォーハンマーの先で金色の柄を絡め取る。

力と力が対抗し合い、常であれば筋力に勝る不死人が優勢となる筈だが、散々に結晶魔法を回避した肉体は疲弊し切っており、あとほんの数瞬でもこの状態を続けていれば押し斬られるだろう。

吐息が唇を舐める程の距離で女王と見詰め合う。まさしく結晶のような鋭い美貌を飾る眼は凍て付いたような色をしており、揺れず、優位に奢るような心情も映しておらず、隙などは見出せそうにないが、それでも敗北が間近にある側は打って出るしかなかった。例え、勝ち目が少ないとしても。

月光の大剣を抑えていた両手の武器を下げ、斬撃を肩口から胸へと受け入れると、吹き出した血が彼女のドレスを汚していく様を目にする。出血量の多さに眩暈を覚えながら、しかし袈裟斬りの形に斬り抜けて不死人の左側面に流れた大剣の柄を、聖職者のウオーハンマーを捨てた右手が上から押さえて次の攻撃の手を鈍らせ、そのまま右足を軸に身体を瞬時にして回転させると、その運動力自体を攻撃力とした背からの強力な体当たりをアンゼリークに打ち込む。

「くっ！」

女王が衝撃に呻き、怯みを見せ、そして成し得たことはそれだけではない。背にした塔のカイトシールド、その表面に展開されていた歪曲の盾もまた不死人の動きに連動して敵の鎧に叩き込まれ、そこに張っていた防御力を向上させる魔法効果を一時的に打ち



消していた。

二度とは伸びない光の糸。確かにそれを見た不死人はもう一度身を翻し、その振り返り様に両手で握り締めた魔術師のロングソードを振り抜く。

「ぐあっ！」

そのたった一筋の剣は、アンゼリークの鎧を割り、胴をも深く斬り裂いていた。

女王は地面に突き立てた月光の大剣を支えとして膝を着き、だが徐々に身体が傾いていくと、やがて剣も彼女も地に伏せる。血で汚れたドレスはそれきり動かず、その上に輝く結晶の欠片たちが舞い散り、積もり始めていた。

## 第12章 11

## 第12章 牢獄都市 最奥部 11

何故このような結末となったのか。

気が触れた、という可能性はあるだろうが、それにしても彼女の意識は明瞭そのものであった。ならば別の原因、例えば、何者かに唆された、などということはありはしないだろうか。

ドレスの胸元から落ち、地面に転がっていたタリスマンを拾い上げる。枝木を束ねたような紋章のこれが、答えの一部であるのだろう。

この牢は広いが出入り口が一つしかないため、不死人はタリスマンを手に、来た道に戻って行った。

通路を進み、階段を登り、踊り場を挟んで尚も上がっていくと、間もなく出口が現れる。

「ねえ！ あなた！」

その扉を通り抜けてすぐ、予期していた場所から声が掛かる。無視を決め込むには関係し過ぎた間柄であり、不死人は振り返ると、牢の鉄格子を掴む虜囚の女に向く。

「あの方は？　一緒ではないの？」

花のような愛らしさを持つていた声にはあからさまな不安が現れ、震えていた。それが正解かどうかは分からなかったが、不死人は彼女に事の顛末を伝え、すると虜囚の女は驚き、落胆しながら、しばらくの間黙り込んで何かを考えている様子を見せる。

「ごめんなさい、そんなことになるなんて、私、思わなかったの。ごめんなさい」

やがて頭を深く垂れながら、虜囚の女は謝罪を繰り返す。後悔と戸惑いと、そして消沈が混ざり込んだその音声からして、彼女の人格は今まさに昏い変容を遂げようとしているように見えた。

「私では、なんでそうなったのか、全然分からないの。本当に、何にも、考え付かないわ」

やがて絞り出した言葉からはまるで彩度が抜け落ちており、またそれは亡者に相応しいものでもある。

「ただ一つ、思い当たるとすれば」

鉄格子を握る手の震えが止まる。

「月の光が、狂わせたの。私達の全てをそうしたように」

少なくとも、虜囚達にとってはそれが発端であるのだろう。責任の全てを押し付けようとしている訳でも無いらしいが、ただ確かに、女王の纏う美しさは人を狂気に導く類

のものであった。

その告白を最後に、彼女はその場に座り込み、呆けているような顔をしていた。それはあまり見詰め続けるべき姿ではなく、足早に牢の前を立ち去る。

そうして次に足を向けたのは、再び梯子や階段を経由した先にある、青ざめた血の池であった。特に用があるのはその中州の、円柱のような牢にある厚い鉄の板であり、枝を束ねたような彫刻の見えるそれに近付くと、不死人が何もしいままそれは自ら地面へと埋もれ、牢内部への入り口となる。

やはりアンゼリークが所持していたタリスマンがこれの開閉に関係していると見るべきだが、彼女が何故そのような物を手にしていたのか、その理由が明らかになることはないだろう。

不死人は牢の中へと入り、螺旋状の階段の前にまで進むと、先の暗くなつたそれを一つずつ降りていく。それが進むべき道であると確信し、そのつもりで何段か降りていくと、しかし階段の先に異変が現れる。

そこでは、青ざめた血が満杯になつて揺れていた。池の方から中州のここへと流れ込んでしまったのか、階段は青ざめた血によつて塞がれており、それ以上降りようとすれば全身が沈み込むことになる。

だが引き返すにはここで得たものは何も無く、仮にそうするにしてもせめてもう少し

この場所を調べるべきだろう。不死人は腰の辺りに青ざめた血が来るまで階段を降りると、そこから前屈みになり、足元などに何か落ちていないか手で探り始める。

すると不意に足元で何かが崩れ始め、そして次の瞬間には足が外れる。

足場である階段そのものが崩落し、青ざめた血の中に落ちていく。何かに掴まろうと腕を伸ばすも、手の平に収まるものは見付からず、深く、暗いその場所に、まるで際限無くどこまでも沈んでいった。

## 第13章 1

## 第13章 変態の祭祀場 1

極めて慮外の事態に陥っていた。

青ざめた血の中に沈み、浮き上がれなくなり、そうなれば息継ぎを堪え切れずに勝手に口が開いてしまったが、しかし不死人が溺れることはなかった。

当然肺の中は青ざめた血で満たされたものの、まるでそれが空気の代わりに働いていると言わんばかりに身体は正常に機能し、また池などは一見して黒い泥のようであった筈が、不死人の視界はよく透き通っており、その上液体の中であるにも関わらず身体の動きも重くならなかった。

明らかに通常の液体とは隔絶した特性を持っており、しかしリングレイの怪異の秘密と云われていることを思えば、一応の納得は出来るといふもの。不死人はこのまま進むことに決め、螺旋階段の崩落している一部を乗り越え、そこから更に長い距離を降りていくと、その先にある出口へと向かう。

そうして見たものは、赤と青、或いは紫の色が渦巻く空であった。

牢獄都市の階層を大まかに別けて三つ降りてここに至った訳だが、不死人が今見てい

る景色は屋外のそれであり、あまりに広大な空間は天井や壁などが見当たらず、降りてきた階段塔も天空に向かって伸びているようにしか見えない。

見上げた渦巻く空模様は刻々と変化し、それを背景にする巨大な岩々が、全く重力の法則を無視して空中に、或いは水中に浮び、迷い込み、一人丘に立ち尽くす不死人を見下ろしていた。何一つ取つても、常識では測れないものばかりである。理解など及びようもなく、だがそれこそが、怪異の真実に近付いている証である。

ともあれこの付近を調べるにはある程度の目処を付ける必要がある、まずはこの小高い丘から周囲を観察しようと、目や首を様々な方角へ向ける。

最初に注目したのは、ここへ降りるのに使った階段の側にある、同じく天に向かってどこまでも伸びる巨大な円筒であった。その根元には巨人すら出入りが可能なほど大きな扉が取り付けられており、また周囲にはバリスタの発射装置のようなものがいくつか乱雑に置かれているようだ。

近付いて調べたところ、扉はその大きさのために人の手で開閉出来る類ではなく、また下の方に取り付けられた人間が出入りするのに適した扉の方も内側から鍵が掛けられており、開くことはない。ただ、この扉の取っ手の上には小さな紋章が刻印されており、うねる水流を表現したかのような、しかし神秘を通り越して怪しげな印象のそれは、どこか見覚えのあるものであった。

だからと言つてその場では何もすることが出来ないため、不死人は巨大な円筒の前を離れ、次に巨大な鉄か何かの塊が大量に置かれている方向へと身体を向ける。

その鉄塊の諸々には、また巨大な鎖が付けられていた。半ば地面に埋まるようにして佇んでおり、それらは棄てられているような趣の、錨のように見受けられる。仮にこれを使う船舶があるとすれば、普通の大きさでは錨の重さに耐えられずに転覆するため、相応の巨大さが求められるのだろうが、果たしてその規模は空前絶後の巨大船舶、などという次元で済むのか、怪しいところである。

第一、その巨大な錨は屋外のように広いこの周辺の地面を埋め尽くすほど無数に存在しており、仮に製造過程で出た失敗作をここに廃棄したとしても異常な数であると言え、やはり単に船舶に使つたものではないのだろう。常識的な考えでは真相に触れることが叶わないのなら、とそこで思考を打ち切り、不死人の目は錨の群れの奥で聳える、何かの建物へと向けられる。

青みがかった灰色をしたその建造物は、だが遠目から見取れるのは、無数に窓が作られているらしい、ということのみであった。それ以上調べるのなら近くまで行く必要があり、また丘から見下ろす限りでは、地面に犇く錨は一本の道を作り出すかの如く空間を確保しており、それは方角的に建造物の方へと向いている。

ならば進むべきはそこであるのだろう。闇に挑む覚悟はとうに終えていたが、生と死



を超越したような命運に沈み込むかもしれないという想像は新たな決意を求め、それを飲み込んだ不死人は鉄の森の中へと入る。

一步踏み出し、二歩目を踏み出し、それらが乗り上げるものは、ただの砂である。歩く感触などからしてもそれはほぼ間違い無かったが、地面の砂自体に異変が無くとも、それが動く度に気泡が浮く、という様子を地上で見ることがは有り得ない。例えば息が出来たとしても、ゆらゆらと光っては天へと昇っていく泡が示す通り、ここはあくまで青ざめた血の中である。

この奇妙な特性について、当然のように考えが巡るが、それはさて置き差し迫った憂慮が一つあることに遅まきながら気付く。どこか遠くからでも、歩いている場所を特定され易くなってしまうのである。

ならば猿のように錨から突出した枝を伝って移動するべきか、と案が無い訳でも無いが、その際に多少の重量が錨に加われれば下敷きになっている地面から気泡が出る事は十分に考えられる上、むしろ普通に歩くよりも大量に出ることになれば目も当てられない。諦めて通常通りの歩き方をする他無く、そのようにして錨の間の道を進んでいくと、先の憂慮が現実のものになるうとしていた。

群がった錨の奥から、いくつかの気泡の列が上に向かって伸びていた。

数は四つ。四方から不死人へと近付きつつあり、この者達との戦闘は最早避けられな

い、と悟ったとき、潜めるような嗤い声が水を伝つて鼓膜に届く。或いは身体を掻くような音だろうか。それらから察するに、位置は既に近い。

正体の不明な敵と、それも複数を相手取つて戦う。昇つていく気泡を端とするこの戦鬪はこの上なく不利な状況下で始まろうとしているが、同じく敵が出した気泡によつてせめて早い段階で接近を察知出来たことについては、魔法の備えを用意する時間を得られただけ好条件である。

右手の武器を聖職者のウォーハンマーに持ち替え詠唱、武器そのものに付与を行い、それを完了させると、あとは動かさず、ただその機を待つ。そしていよいよ嗤い声が近付き、遂に四つの気配が錨の影から飛び出した瞬間、ウォーハンマーは地面を叩き、そこから白い小さな文字が飛び散る。

それらは地面を這い回り、結果として一時的な平和は全ての敵を捕らえていた。ならば即座に次の行動に移らなければならないが、その刹那、露になった彼等の姿は、不死人に僅かな躊躇いを覚えさせるに足る怪しげなものであった。

それは人に近い骨格を基礎とし、だが異様に長い腕の肘を上げ、そこから下を垂れされるといふ奇妙な姿勢のまま、大きく肥大した頭部の、ささくれたつた間にある瘤のような赤い眼球でこちらを見やっていた。

僅かに巻き付いている服の布などから、彼等がおそらく亡者の類であつたことはそれ

となく理解出来るが、それ以上の、例えばどのような意志の下の変態であるのかまでは見出すことは叶わず、またこの場でそうする必要は無い。

硬直したままの四匹のうち、まずは前面に居る一匹の頭部に狙いを定めてウォーハンマーを叩き込み、潰れたそれが赤い血を吹き零すと同時に武器をもう一度振りかぶり、横に居たもう一匹の肥大した頭部の亡者を殴り倒す。

そうして敵の半数を排除し、後背の二匹の方に振り向いたときには一時的な平和の効果は切れてしまっていた。動き出す敵の一方に塔のカイトシールドを投げ付け、それを相手が腕で防いでいる間にもう一方の亡者の方に詰め寄り、担いだような状態からの聖職者のウォーハンマーを振り抜き、上からの打撃を見舞う。

「かあつ」

喉に絡まった痰を吐き出すような掠れた声を発しながら、肥大した頭部の亡者は自身に向かつて下された槌の一撃を、上に掲げた長い腕を交差させて受け止めていた。攻撃の手が一つ不発に終わり、しかしそれを用いていたのは右手のみである。盾を捨てていた左手は既に鞘に仕舞われている魔術師のロングソードの柄に伸びており、そして不死人の腰から銀光が煌くと、腹を無防備にさせていた亡者は瞬く間にそこを深く貫かれた。

その亡者は音も無く崩れ落ち、腹に剣を残したまま地に倒れると、両手で握られ、身

体を旋回させながら振るわれた聖職者のウォーハンマーが向かってきた最後の肥大した頭部の亡者の横腹を襲う。牽制され、出遅れたことが気の焦りに繋がったか、防御を蔑ろにしていた亡者は打撃によって大いに怯み、またその隙を不死人は見逃さなかった。更に槌を打ち込み、倒れ、頭部が碎けて完全に動かなくなるまでそれを続ける。

その場の制圧を終え、だが常のように血を拭う必要は無かった。出血したときなどは大半が霧のように流れるため、そもそも付着すらせず、したとしても軽く払うだけで済むのだろう。

膝を折り、念の為此の亡者達の軀を漁る。しかし得られるものは何も無く、それでも何か手掛かりを求めるなら、彼等が手枷をしていないことくらいがそれに当たるのだろうか。虜囚ではなく、リングレイの民であるのなら、この変貌は礼拝堂の患者達同様、彼等に異存があつて起こったことではないのかもしれない。あくまで可能性の話ではないが。

## 第13章 2

## 第13章 変態の祭祀場 2

あまり当てにならない推論を捏ねることをそれまでとし、腰を上げ、建造物の方角を  
目指して歩き出す。やはり砂を踏む度にそこから小さな空気が出るが、相手も同じ条件  
であることが判明した今、必要以上に一方的な奇襲を警戒する意味は無く、歩みは幾ら  
か軽くなる。そして実際に亡者達の襲撃が無ければ、不死人が建造物の前に立つまでに  
それほどの時間は掛からなかった。

青みがかつた灰色をした、無数の窓を持つ建造物。その外見の持つ雰囲気の異様さも  
然ることながら、しかし近付いて観察すると、外壁に際立つて奇妙な点があることを発  
見する。

木の蔓だろうか。建造物を形作る壁の全てにはそのような模様が細かく巡っている  
ようだが、仮にそれを人の手で造ったとして、気の遠くなるようなその作業がどれだけ  
必要とされるのか。それに建築物への彫刻などには意味や祈りなどが込められている  
場合が多いが、この木の蔓か触手のような模様をひたすらに掘ることに誰が意味を見出  
せるのか。

早い話が、この建造物は人の手によるものではない、という疑いがあつた。例えば本  
当に蔓か何かにこの建造物の形を取らせ、それから石化させたと言われた方がまだ納得  
は出来る。それは人の世界では一笑に付されるような想像だろうが、リングレイでは違  
う。

ともあれ探索をするなら内部へ侵入することが望ましいが、建造物の周りには深く幅  
の広い堀が巡っており、その場から見た限りでは堀を渡る橋は一つきりであつた。罨な  
どに注意しながら少しずつ、上に反つて曲線を描いた美しい木製の橋を渡つていった。

青ざめた血に浸かつた当初からだ、やはり光源が少なくとも視線はよく通つた。内  
部に入つた不死人が目にしたのは、広く壁一面に並ぶ素朴ながら上質な本棚と、そこに  
敷き詰つた書籍の類であつた。

天井は無く、また建造物の中には碌に仕切りも無く、広大な室内を見通すことが可能  
であるため全体の構造を把握するのは極めて容易なことであり、ならばそう努めるため  
に立ち止まつて首を動かす。

まず建造物を上から見下ろすとすれば、正三角形に近い形をしているらしく、その壁  
の内側には視線が届く限り全てに本棚が並べられているように見える。そして室内の  
中央には庭木が整えられた中庭のような広大な三角形の区画があるが、これと不死人の  
居る本棚付近の廊下との間にはまた深い堀のような溝があるため、そちらへ行く事は出

来ない。

しかし左を見ると廊下を遮る柵の向こう側に中庭へ降りる橋が架かっているのを見付けたため、その柵にある扉に触れてみたところ、やはりそう簡単に開くことはなく、どうやら向こう側から施錠されているようだ。

遠目から見ると、中庭には石で出来た大きな机や、本棚付近の廊下には無い様々な柵、その上に乗る用途不明の器具などが置かれている。つまり探索の足はそこまで伸ばす必要があり、またそうするには大まかに別けて廊下三つを進み、三角形の建造物を一周しなくてはならないようだ。

移動距離は少々長くなるが、あまり敵が大量に潜む場所も無いことを思えばそれほど苦労も無いだろう。不死人は身体をその場から見て右に向け、本棚の前の廊下を歩き始めた。

建物の内部は下が砂でなくなったため、いくら歩こうとも気泡が上がる事は無くなっていた。では今踏んでいるそれは何なのか、という話になると、壁と同じ蔓の模様の石のような何か、と曖昧にしか回答は出来ない。そして本棚は真っ直ぐに伸びた廊下の先にどこまでも続いており、それが抱え込んである書物の数ともなれば、凡庸な頭では見当すら付けられないのだろう。

まどろみの夢の中のような景色を進み、真実ここが夢の中であるのではないのか、と

いう錯覚に陥り、或いは疑念に繋がれかけながら、歩き続けていた不死人はいつしか廊下の半分の辺りまで来ていた。

「ようこそ、不死の勇者よ」

唐突に、まるでこの建物内部の壁で反響し合う、位置の特定が難しいその声は、芯が通ったような、思慮の深さを窺わせる歳のいった男性のものであった。

「二つ、誤解しないで欲しいのは、我々はあくまで提供しただけであつて、争いを起こしたのではない、ということだ。彼等是我々から不穏なものを感じ取っていたようだが、それでも憎悪が勝つたのだ」

内容は弁明でしかないが、全く気後れしている雰囲気を見せない、淀みの無い口調は、また説明そのものにもよく慣れたような印象があつた。男の言葉はそこで終わり、不死人は周囲を見回すも、それを発した人影らしきものは見付からない。

一方的に観察されているのであればそれは警戒に値するが、一本道の廊下の上で取れる行動は先に進むか後に戻るかの二つに一つである。止むを得ず、ある程度の危険を呑み、不死人はまた廊下を歩き始めた。

先の声の主はどのような人物であつたのか。向こうから話し掛けてきたということはその内正体を見せるのかもしれないが、話の内容から察するに、単純に味方になるということはまず有り得ないと考えておくべきだろう。ならばある程度の彼の性質を推



し量っておくことはいざ対面した際の事を考えれば決して無駄ではない。

そのような考えをあまり凝り固めず、広く可能性を模索するようにして巡らせ、だが唐突に視界いっぱい白い幻影が現れたことで霧散する。

身構え、武器を握り締め、しかし幻影は遠ざかっていく。大方、実体の無いそれが不死人を後ろから走って追い越した形になったためにそのような登場の仕方になったのだらうが、幻影は廊下をいくらか進んだあと止まり、身体を右に向け、何を思ったのか、本棚の一つを足で蹴る。

といつても彼は所詮実体の無い身である。背の高いその本棚は微動だにせず、そこで立ったままであったが、しかし幻影はその本棚の方へと歩くと、吸い込まれるかのように消えていった。

白い幻影と言えば一つ上の階層での出来事が思い返されるが、今見たそれはより意志のようなものが明確に根付いているように見受けられた。そのため、無意味に影が踊っただけ、と捨て置くにはどうにも気掛かりとなり、不死人は白い幻影が蹴っていた本棚の前まで来ると、そこで一度立ち止まる。

一見して他のものと差が無い、何の変哲も無い本棚であった。しかしながら幻影と同じように蹴りを入れたところ、木製のそれは霧のように掻き消え、奥には人が一人入り込める程度の狭い空間が現れる。

そこでは一冊の本が壁に掘り込まれた棚の中に置かれていた。他の書物と違い秘匿されていたらしく、また黒い皮で装丁が作られており、ごく上質な素材であるのか、手触りも良い。だが例によつて中に書かれている内容の理解には及ばず、辛うじて分かるものがあるとすれば、奇跡の触媒を使用する人の絵図程度であつた。

これを渡すべき人物が居るとすれば、周壁内部の牢の中の男だろう。虜囚の女に渡された紙の束同様、これも荷物の方へと仕舞い込んだ。

それから探索を再開するべく足を動かし始めたが、その地点から少し歩けばすぐにつ目の廊下の終点に辿り着くこととなつた。詳細な数字までは不明だが、少なくとも直角よりも鋭い角度のその曲がり角では視線を遮るものはなく、続く廊下の先に異変は無い。

「初期の青ざめた血は、今のように入が呼吸出来るものではなかつた。水圧も強く、この時期は苦勞が多かつたものだ」

二つの目の廊下に踏み込んだ矢先、男の言葉がまた届く。重要な伝達事項、というよな趣旨ではなく、それはどこか雑談めいており、そしてそれだけを残したきり、声はまた止んでいた。

不死人はやや強めに足を踏み出し、男の言葉を半ば無視しているかのような素振りを見せつけて廊下を歩き出してはみるが、実際の所、それが自身の腹の中に何も残さない、

ということはずり得ない。リングレイの人々が異形に生まれ変わった理由がそれであるなら、この男は生物の特性を人に混ぜ込む術を持っていることになるが、おそらく目的は別にある。果てにあるもの、真実を知ったとき、理解は及ぶのだろうか。

程無くして廊下の中央に当たる部分にまでやって来ると、壁の一部分で本棚が取り払われている箇所がそこにあった。その一面は建物の外、堀の上に長く突き出したテラスのようになっており、屋外を一望出来るようだ。

どこまでも続く穏やかな丘陵だけを見れば長閑だが、所々の地面から木のように生えた巨大な錨や、暗く渦巻く空はやはり異様であり、まして宙に浮く岩まであれば決定的にその景色は異界である。元より癒す心などの持ち合わせも無いが、特にこの光景を見続けようという意志は起こらず、テラスから廊下側に戻ろうと踵を返すと、外壁に梯子が架けられているのを発見する。

見た所その梯子は上に向かって外壁を這っているようだが、あまり長くないそれは先の方で折れて破損していた。また仮に上に行く道があったとして、この建造物の内部で目指すべき場所には見当が付いており、そして行き方も廊下を真っ直ぐに進むだけで良い、ということ把握しているため、梯子に固執する意味も無いだろう。不死人はその場を離れ、また廊下を歩き始めた。

これも水中故だろうか。澱のようなものが時折宙で踊り、突き進む不死人からの水流

に押されてより瞬く。それを見るに、流石に人が泳げはしないようだが、いくらか軽い物であれば風に浮ぶように、ここでも浮かんでいるのだろう。ならば他にも浮ぶもの、それこそ本などがそうなってしまったとしてもあまり不思議ではないが、しかし水中に存在する、という時点で本そのものに何らかの対処を施していると見るべきか。

## 第13章 3

## 第13章 変態の祭祀場 3

右脇腹を刺される。

僅かな痛覚によつてそれを察知し、あまりに唐突なその攻撃の元を探そうと周囲に視線を向けるも、それらしい者の気配は無い。そもそも、腹を何かが突き抜けたことは確かであつたが、何がそうしたのかまではまだ理解に至つていなかった。

ならば次善の策として有効と思われるのは引くことであり、不死人はすかさずその場から飛び退くと、丁度その時地面に向けて幾条かの光が突き刺さつた。

光、という言い表し方はあやふやのようである、この場合は最も適している。虹色の光線は地面に突き刺さつたあとすぐに消えており、また運良く今の攻撃を目にすることが出来たため、その出所たる上の方へと首は向けられる。

この建造物には上の階も下の階も無く、見上げたとしてそこにあるのは虚空のみである。つまりそれらはまさに虚空に浮き、四つの内臓のような塊、青白い軟体動物達は、体の下部にある穴を拡大させながら不死人の方へと向ける。

やがて微かに刃物を研ぐような音が聞こえたかと思えば、次の瞬間には彼等から虹色

の光線が射出されていた。その数から、反撃を試みる余裕など無く、光線を避けながら後退し続け、本棚の影に身を押し込める。

エストで身体を治癒しながら想起するのは溝の溜まり池、そして礼拝堂であった。前者はかつてこの生物と遭遇した場所であったが、その折にはあのような攻撃方法は見せなかった。似てはいても別の生物である可能性がある、という観点は捨てるべきではないだろう。

後者はこの敵の攻撃方法たる虹色の光線と同じような特性の攻撃手段を持っていた者、神官長と遭遇した場所である。特に発射の際の音はよく似通っており、本体が軟体であることから同一の性質を持っていると判断しても良いかもしれないが、不死人が神官長と対峙した時には、あの攻撃手段そのものに対しては有効な対抗手段を閃く事は無かった。ただ、当時も奇跡の触媒を持っていれば結末はまた違った可能性もある。

本棚に身を隠しながら右手の武器を聖職者のウォーハンマーに持ち替え、聖鈴を鳴らして詠唱。歪曲の盾を用意しながら、得物をもう一度魔術師のロングソードに持ち直す。手間だが、相手が高い位置で浮いているため近接攻撃の間合いよりも遠く、ならば魔法による攻撃が妥当となる。無論、あの粘膜に包まれたような手合いは魔法への耐性を持つていたとしても何らおかしくは無いが、多少耐えたとして身体の質量そのものが小さく、相性の問題はそうまで大きくはならないだろう。また仮に効かなかったとすれ

ば、もう一度引つ込めば良いだけのこと。

そのまま待ち続け、そのうち本棚に突き刺さる虹色の光の勢いが陰りを見せると不死人はそこから飛び出し、ロングソードによってソウルの矢を詠唱しながら、前面にした盾で殺到する光線を防ぐ。

その意図そのものは成就していた。虹色の光線は全て塔のカイトシールドに集まり、だが歪曲の盾が光線に反応して効果を発動するも、槍の一突きのような強い衝撃は全く軽減されず、弾かれずに盾を押し込み、ソウルの矢を放つどころではなくなる。その瞬間、このままでいれば勢いに負ける、と認識した時には既に遅く、防御を暴かれるといくつかの光線が不死人の身体に突き刺さり、ダメージを受けながら本棚の影にまで駆け込んだ。

同じ場所と同じようにエストを飲むが、今度の負傷は前回より遥かに大きく、その原因は相手の攻撃の属性を見誤ったことにある。光線という特徴は魔法に近しく、しかしそれは外見のみであったのだろう。歪曲の盾では防げず、かと言って物理攻撃に抗する闇の盾で挑むのが正解、というのも疑わしい。

ならば実際に試そうと魔術師のロングソードで詠唱を行い、その効果を付与した盾を抱えて本棚から少し身体を出してみたところ、やはり光線が当たった際の衝撃は強く、闇の盾は発動しているものの相手の攻撃を無効化はしていなかった。

急いで本棚に身を隠し、また算段を立て始める。が、そうしようにも持ち札や材料が尽きていた。魔法でもなければ物理攻撃でも無い、理解し難い属性の攻撃は高い位置から、一方的に不死人へと向けられている。対抗するには、例えば相手が認識出来ないほどの遠い距離から攻撃することが出来ればそれが効果的かもしれないが、そうなるどころらの魔法もまた届かなくなるため、弓やクロスボウの類による狙撃を行わなければならない、しかしそれらは恐らく魔法に重きを置いているリングレイでは生産すらされていない。

向こうから追い詰めようとするような気配は見られないため、万事休すという程のことでもないが、今のところ手も足も出ない状況にあると言える。しかしながら、廊下は一本道であり、当初予定していた経路を辿って中庭に降りるのであれば、迂回は出来ず、この手も足も出ない中で、手か足かを出さなければならなかった。

本棚を盾にして頭を捻り、その結果、傷を負うことを覚悟し、力づくで走り抜けるというある意味で不死らしい案が唯一浮ぶが、頭を捻った割に頭の悪い行動である点はさて置くとしても、限りあるエスト瓶の中身を徒に消費するのは承服し難い。

そうして考えに考えを重ねた結果、不死人は一度本棚の影から出ると掃射される光線を避け、そうしながらも後退し、テラスの中へと転がり込んだ。

そこであれば青白い軟体動物達からの光線も届かず、落ち着きを払ってその場から首



を上に向け、もう一度良く観察してみるも、やはりその梯子は折れている。だが他に頼るものもなく、危険は承知の上で梯子に手を掛け、半ばまで登っていくと、そこから外壁部からほんの少しだけ突き出した縁の方へと足を移した。

そこから少しずつ足を動かし、不死人は外壁を伝って移動し始める。これは思いついたものの実行には躊躇いを覚えた案であり、その理由は何点かある。まず一つ目は足を滑らせた場合、建物の外縁部にある底の見えない堀の中に落ちるといふ点である。二つ目はあの青白い軟体動物達は宙を泳いでいたため、そこが壁より外であろうが彼等は好きなようにそうすることが可能であり、そうなった場合今度こそ逃げられないだろう。

ただ幸いにも地上でそうあるように強い風や強い水流が吹き抜けることもなく、苦も無く姿勢を保ったまま移動することが出来ており、いつの間にかそれなりの距離を稼いでいたようだ。とは言え身体の正面を壁とし、両手でそれを掴みながら移動していると背面の様子は見え、ましてそこに広がっているものが異界の空ともなれば何が起こったとしても不条理ではなく、気の抜けない状況は長く続く。

だがそういった懸念は現実のものとならず、慎重な足運びを必要とする縁の先に手頃な窓が現れたことでその移動方法は一区切りとなる。その窓から頭を出してみると、左手の先に見えるのは四匹の青白い軟体動物の姿であり、左右非対称に触手を伸縮させる彼等はこちらを認識していないらしく、光線を放つ事は無かった。

こうして敵の後背を取ったことを確信した不死人は、窓から本棚に降り、またそこから音を出さないように心掛けて廊下に着地すると、遂に問題となっていた地点の迂回に成功する。

このままこの場を去れば彼等は敵を取り逃がしたことに気付かず、不死人は探索を続けられる。またこの青白い軟体動物達を倒すこと自体には経験的にも実益的にも得られるものはない。

それでも四匹の内の一匹にソウルの矢を放ったのは、廊下の先から敵がやってきた際の退路を確保するためと、なにより万が一どこかで察知されたとき、反撃の態勢を整えられる確証がなかったためであった。魔術師のロングソードの先から放たれた青い光は内臓のように蠢くそれに命中し、弾けて真実内臓を曝け出すと、他の三匹も異変に気付き、身体の向きを変えようと宙を泳ぐ。

だがその動きは極めて緩慢なものであった。ロングソードはソウルの矢を容赦なく続けて放ち、青白い軟体動物が反撃を始め、虹色の光線が迸ったときには、その出所はたった一つになっていた。その数であれば防御に苦勞することはなく、不死人は一本の虹色の光線を盾で受け止めると、ロングソードを宙に向けて翳し、青い光にて返答した。脅威は取り除かれ、今度こそ煩わせるものはない。虚空で千切れたような軀を晒す青白い軟体動物達に背を向け、廊下の奥を目指して歩き始めた。

## 第13章 4

## 第13章 変態の祭祀場 4

テラスのあつた箇所が既に廊下の中央にあたり、そこから更に進んでいたために、あまり時を掛けずに廊下の終わりに近付いていた。曲がり角等には異変は無く、だが一つの予感を抱きながら三つ目の廊下に踏み込む。

「真に惨憺たるは人の心だ。王をはじめ、侍従長殿らは憎悪を手放せずに自ら巨獣となつたが、彼女の親類でもある公爵夫人などはそうならないことを選んだ。両者は苦しみとの向き合い方が違い、人々を導く方角もまた違ったのだ」

今一度耳にした男の声は、やはり告げるといふよりは単に話しかけているような調子であり、あまつさえいくらかの親しみすら込められているような趣がある。だが弁が立つ者が話しているものであれば、内容に關してはあまり真に受けるべきではないだろう。能書染みていると言えばそれまでもある。

男の言葉をそのように飲み込みながら不死人は廊下を歩き続け、するとふと見た奥の方に、たむろしている肥大した頭部の亡者の一団を発見する。

彼等は一様に廊下の床に視線を落とす、未だ不死人の姿を見付けてはいないようだ

が、その数は五匹と多く、正面切つて戦うのは例え奇跡、一時的平和の助けがあつても危険であり、またそれが万が一何らかの要因によつて効果を發揮しなかつた場合を考へるのであれば、術一つを恃みに挑むは間違ひである。

であれば何かもう一つ、策を講じておくべきだが、その前に青白い軟体動物達を屠つた際の経験からか、目に留まつたのは近くに置かれていた本棚の上の段の書物を取るための、移動式の階段であつた。肥大した頭部の亡者達は下ばかり見ているとは言へ、身体の向きそのものはこちらの方を指しており、不用意に近付けば察知される可能性がある。しかしこの階段を使用して本棚の上を行き来すれば、死角になるためその心配はまづ必要無いだろう。

方針が定まり、不死人は階段を登つて本棚に乗つてみたところ、特に物音が立つことも無いため、実行する上での問題は特に見当たらなかつた。よつてその場で聖職者のウォーハンマーで詠唱を行い、術を付与すると、身を屈めて本棚の上をゆつくりと歩き始める。

地上であれば埃でも積もつて然るべき場所柄であつたが、青ざめた血の中では清浄が保たれているらしい部分が多く、しかしそこから見下ろした住人達を見るに、その清浄さは所詮、怪異の先触れでしかない。どの頭も左右に揺れており、赤く輝く瞳が残像を描く。

それは奇妙な仕草であつたが、あまり見入るべきではないだろう。本棚から飛び降りながらも武器を振り被り、それで以て五匹の中心に着地しながら床を殴打する。

白い小さな文字たちは範囲内の全ての敵を捕らえ、動きを封じていたが、着地後すぐに武器を振り回し始めた不死人がわざわざそれを確認することはなかつた。右へ左へと忙しく動く聖職者のウォーハンマーは順々に肥大した頭部の亡者達を斃し、前の遭遇の際にはあつた躊躇が今は無いためか、五匹は一時的な平和の効果時間のうちに全て床に伏せることとなる。それは一方的な戦い、或いは狩猟に等しく、故に油断を呼び込んだか。

本棚の一つを突き破つて現れた長い腕に肩を掴まれ、引きずり込まれる。被さる諸々の本が視界を塞ぎ、そうなることで現在置かれていた状況の把握から遠ざかるが、やることは本質的に一つきりである。敵の腕の拘束から逃れようと身体を強く捻り、それ自体はあつさり成功し、だがその際、爪のような鋭い何かによつて肌の一部を抉られていた。

その後見付け出した地面に足を落ち着かせ、敵と相対すると同時、微かな、または潜めるような嘲笑を差し向けられる。肥大した頭部は他の亡者と同じく、だが口からは蟲の足のような何かが何本か生えており、また纏う黒く爛れたようなローブは魔術師のものらしく、やはり魔術触媒らしきものも手にしていた。

先程不死人に傷を負わせたのはその魔術触媒だろう。木の枝を纏めたようなそれは先の方がそれぞれ黒くなっており、そして尖っている。そのような杖で撫でられればまさに爪を立てるが如く表皮は裂かれるが、あまり深いものではなく、ならば傷そのものではなく、別の狙いがあると見るべきか。

そう意識したときには、腹の底から激痛が昇っていた。そこを中心にしてこめかみから足の指の先まで、全身の血管を無理矢理に引つ張るような感覚は毒のそれであり、急に荷物の中に仕舞い込んでいる毒消しの香草を口にしなければならぬが、今聞いたばかりの嘲笑はこの成り行きを予見してのことであるのだろう。

敵は魔術師。つまり香草を口に入れるか、或いは逃げるような素振りを見せればその隙を突く用意があり、またそれを待っただけのつもりも無いようだ。闇魔法特有の、固く閉ざした唇から無理に息を噴き出すような破裂音を耳にした後、射出されたのはその種の術の中でも最もオーソドックスな闇の玉であったが、扱うのが専門家であれば、同じものでも他の者より優れているのが道理というもの。

絶えず、連続して放たれる闇の玉の回避に専念する。左右へそうしなくてはならないために敵への接近は困難を極め、同様に退がることも難しい状況であるが、この身体は今も毒に蝕まれており、時間制限が付いている。

それも、全く長いものではない。ならば確かな勝ち筋を見出せずにはいようと覚悟を決

めて踏み出す他無く、不死人はそこから一つ目の闇の玉を躲しつつも右斜め前に飛び、二つ目も左斜め前に避けることで接近を続け、そして三つ目、高く掲げられた杖から飛沫のように弾ける闇の玉の一斉発射を床の上を前転して潜り抜けると、四つ目の詠唱を行っている最中に突き出した剣身が木の枝のような魔法触媒に絡む。

次には下に向かつて魔術師のロングソードは振り下ろされ、杖を割り、またそれを持つ魔術師の両腕をも両断し、だがそれでも尚、彼か彼女は一人愉しむような嗤い声を上げていた。腹を蹴って突き飛ばし、倒れたところを馬乗りになつて首を刎ねる。

それから毒消しの香草を口に含み、減りきつた体力をエストで戻しながら、また肥大した頭部の魔術師の軀から視点を上げ、周囲を見る。

そこは二つ目の廊下にもあつたような、外壁の外に張り出たテラスであつた。本棚によつて隠されていたらしいが、思えば一つ目の廊下ですら中央にこういつた空間があつたことから、今回の奇襲は事前に警戒しておくことが可能であつたのかもしれない。

とは言え過ぎたことである。不死人は馬乗りのままであつた身体の腰を上げ、するとその時、魔術師の懐から何かの鍵が転がり出る。手に取つてよく見てみたところ、鍵には紋章が入っており、うねる水流を表したような形をしたこの模様は青ざめた血の中に没した直後にも目にした覚えがあり、使い所については予想がつく。今のところは使う予定も無いものだが、全くその機会が訪れないとも限らないだろうとそれを所持品の中

に加え、それから改めて立ち上がり、廊下の奥に向けた足を一步踏み出す。

「君よ、かの貴婦人に相見ると良い」

足元から声が湧き上がる。

見れば先程ウオーハンマーで斃した筈の肥大した頭部の亡者の幾匹かが僅かに身体を痙攣させており、また潰れかけた赤い目も仄かに輝きを見せ、不死人の方へと向けられている。

「君の瞳にこびり付く曇った膜は、彼女の智勇に触れることで取り除かれるであろう」  
一応武器を構えてはいるものの、彼等が立ち上がる様子は無かった。速やかに止めを刺すべきか、と考えないでもないが、敵であれ貴重な証言となることも否めず、そのまま耳を傾ける。

「我等とて、それを経たものだ」

その言葉に籠もった追想には、歓びの色が滲んでいた。

そこで彼等は完全に動かなくなり、語りもまた終わる。どうやら繰り返し先入観や偏狭な考えを持たないよう求められているようだが、陶然とした様子を匂わせており、信用云々とは別の問題として、それは不可解であった。いずれにせよ、この先で不死人の到着を待っているのだろう。軀を跨ぎ、廊下を歩き始めた。

歩き続けるとやがて廊下も終わりが見え、そして一つ目の廊下との境界にある、柵と



扉に再び巡り合う。その内側から鍵を外して建物入り口との経路を確保すると、いよ  
いよ中庭に降りる階段に向き直り、それを下りていく。

## 第13章 5

## 第13章 変態の祭祀場 5

建造物の外観同様、その階段もまた青みがかった灰色をしており、表面の蔓のような模様も隙間なく張り巡らされている。しかし奇異なそれには既に慣れたもので、目を引くのはまず階段が跨ぐ底の見えない溝と、次には中庭の至る場所にある、奇妙な道具の数々であつた。

程無くしてそこに降り立った足は、芝生のような青々しくも短く整えられた植生を踏んでいた。それだけを見ればまさに庭のような趣であつたが、それが囲んでいるのは石棺のような形をした台と、それからその上に置かれた空の水槽、容器、針、鋭利な鋏、ナイフ、その他用途不明の様々な金属製の器具などであり、上と下とでまるで雰囲気がい違つていた。

これらの道具に似通つているものがあるとすれば、リングレイ王の支配が色濃い階層にあつたそれだが、拷問に用いられていたものとは比べものにならないほどそれらは美しく、対象者に余計な傷を与える事が無い。ただし、それにしてもあまりに丁寧な磨き挙げられているが。

不死人は周囲を見回し、多くの器具を視野に入れる。貴重な筈のそれらは全て整然と揃えて置かれており、また管理する者の姿も無い。場所の關係上、盜難に遭う可能性が少ないのかもしれないが、それでもこうして放置するのは無用心に過ぎ、まるでこれを使っていた者達の関心を失ったかのようである。例えば、全ての工程を終了したが故に。

「君は不幸にもおぞましい一面ばかりを見てきてしまったようだが、深海はまるで宇宙。美しさに息を呑むばかりだ。君にも是非堪能して欲しい。さあ、ジュリアス」

姿の見えない男がそうして促したあと、中庭の空に、巨大な影が落ちる。その輪郭は複雑さとは程遠く、また段々と降りて露になった身体もやはり単純な構造をしており、青白く、滑らかな身体には手足や目、鼻、口などはなく、ただ寸胴の長い本体が宙で舞うのみであった。

そのうち巨体は中庭に降りると、その胴を寝そべらせながら付近にあった台などを静かに押し倒して自身の空間を確保し、首をもたげる。

徴のジュリアス。迷える者達の標たる彼女は、不死人を屠ることを自らの義務と考えているのだろうか。人の形を失っては、最早窺い知ることは難しかった。

魔術師のロングソードを握り、詠唱してソウルの矢を飛ばす。自らの想像が及ばないような手合いを前にしては何よりも敵を知ることが重要であり、そうするためには安全

圏からの牽制が好ましい。青い光は両者の間に横たわる半端な距離を一息で走ると青白い肌を直撃し、だが傷跡などは作り出さずに掻き消えていた。

威力不足というより、おそらく相性の問題によつてそうなつたと見えるが、意外ということも無いだろう。であれば次に試すべきは近接攻撃となり、しかしその段取りを立てるよりも前、不意に敵の胴の表面が隆起し、次には細長い触手が飛び出していた。

やはり青みがかった白のそれは一直線に不死人に迫ろうとはせず、横に向かつて長く伸ばした後、先をしならせながら大きく薙ぎ払われる。質量はそれなりにあるため、直撃すれば大事に至るも、その攻撃は本体の動きと同様やや緩慢な部類であり、跳び下がって避けるに何ら支障は無かつた。

そのままもう少し距離を離してみると触手が追つてくる気配は無く、一息つく程度の時間が得られる。どうやら出せる長さの限度はあまり大したものではないらしく、そこから見るにあれに出来ることと言えばせいぜい迎撃程度だが、詐術の可能性はともかくとしてジュリアスが反応の鈍い触手のみに頼つてこの場に出て来たのなら、それはあまりに愚かしく、智勇の名折れである。

従つて何らかの手札を持つていると思しく、そのように考えていた矢先、彼女は身体の先端、おそらく頭部にあたる部位に開いた小さな穴を不死人に差し向け、そこから虹色の光が飛び出した。

その光線は一瞬にして迫り、不死人はジュリアスに変化があった時点で回避行動を始め、横に飛んでいたため辛くもそれを凌ぐことには成功するも、その際体の横を通り抜けた虹色の光の速度は凄まじく、視認してからの回避を成せるかどうか怪しいものであった。

光線の回避を何度も強要されるようであれば触手をそうする方が比較的難易度が低く、それだけでなくとも遠距離攻撃たる魔法は青白い肌への効果が薄いときている。となれば近接距離が妥当であり、不死人は青白い巨体に向かって駆け込むと伸びてきた触手の一撃から一度後方に飛び退き、それからまた走り出してジュリアスの懐に飛び込んだ。

柔らかな肌を打撃武器で叩いたとて、波打つばかりで大きな傷を与えることは出来ないだろう。故に握り締めた魔術師のロングソードは青白い肌に向かって叩き込まれ、しかしそれを肌の上で急に盛り上がった触手の塊が阻む。

完全に防御を目的としたものであるらしく、その塊がすぐに攻撃に転じることはなかったものの、刃は本体には届いておらず、裂かれた触手から透明な靄、体液が溢れていた。角度の問題からか、身体のすぐ下には光線を放つことができならしく、また攻撃に一応は効果があったと認められないこともないが、これを繰り返したとして致命傷には及ばないだろう。

何らかの工夫が必要ではあるものの、それを試行錯誤するには時が経ち過ぎていたら

しい。ジュリアスは反撃として触手の一振りを用意しており、そちらへの対応を優先しなければならなかった。長く伸びる青白いそれが振り抜かれる直前に後ろに下がり、しかし下がり過ぎればまた頭部からの光線に撃たれる可能性が高いため距離を見てある程度のところまで踏み止まると、そうして足を止めた瞬間にどこから降ってきた虹色の光線に左肩を貫かれていた。

その攻撃は左方向から、ジュリアスの頭部とは全く無関係な場所から齎されたものであり、急ぎそこから距離を取ろうと右方向へ動くと、しかし今度はそちらから水に浸した長い刃物を研ぐような音が鳴る。

これを聞き付けて即、前方に転がるのが功を奏したらしく、虹色の光線を避けてはいたが、直後に視線を周囲に、とりわけ上の方に巡らせてみれば、自身を囲む者達の姿が視界に入り、まだ全く安全からは程遠い状況に置かれていると知ることになる。いつからそこに居たのか、中庭の宙には何匹もの青白い軟体動物達が浮んでおり、または触手を広げ、泳いでいた。

体格の大きな差はあれど、似通った特徴は複数あるためおそらくこの生き物達はジュリアスの眷属にあたり、共通の敵たる不死人を追い詰めようとしていた。これに対しては、身を隠すような場所は無く、また仮にあったとしても彼女に容易く破壊されるため、正面から受けて立つ愚を実践しなければならなかった。

まずは虹色の光線が降る中を走り出し、ジュリアスの方へと再度近付くと彼女は伸ばした触手を右から大きく薙ぎ払い、不死人はそれを余裕を持って回避しつつも、視界の右上に浮ぶ青白い軟体動物から放たれた光線を塔のカイトシールドで防ぐと共にソウルの矢を返す。

その一匹はそれで弾け飛び、直後、引き戻されてきたジュリアスの触手が左から横薙ぎの一撃を寄越し、しかし味方が斃れた動揺もあるまいが、やや狙いが杜撰で高い位置になっていたそれを潜って躲す。それによつて以前よりも時間を多く稼ぐことに成功すると、はじめに左方向に居た軟体動物に向かってソウルの矢を飛ばしながら、それと同時にやってきた虹色の光線を身を振って避けつつ背後へ振り向き、忍び寄ろうとしていた一匹を不死人の魔法が貫く。

まだ敵の数に限りは見えぬ、出来れば触手の攻撃に対する備えとして闇の盾を用意しておきたかったが、この忙しい立ち回りの只中であつては、それは到底叶えられない願ひであつた。重く、上から打ち降ろされる触手は相手が横へ逃げることを見越していたのか、地に着くとそのまま横方向に長く振られ、回避する空間を失つた不死人は石棺等を破壊しながら押し寄せるそれから塔のカイトシールドで身体を守る。

流石に無傷とはならずとも、薙ぎ払いのように勢いがついていなかつた分、負傷は盾を支える肩を痛めた程度で済み、そのようにしてやり過ぎすとそのうち触手は本体に戻

るが、その時、死角となる左後方にて刃物を研ぐような音が鳴り響く。その音だけを頼りに盾を翳すと虹色の光はその中心に吸い込まれるかのように当たり、防ぐ事が出来た不死人はソウルの矢を撃つて青白い軟体動物を斃すとすぐにその場から飛び退き、それから一拍遅れて目の前を別の一匹から放たれた虹色の光線が通り過ぎていく。

敵は連続して光線を放つことは出来ないため、その青白い軟体動物に反撃するのであれば今が好機であり、だがそれを潰すつもりであるのか、ジュリアスからの触手が迫っていたため、回避に集中しなければならなかった。

が、先にもあつた通り、彼女は味方の援護等をする時には気が逸る性質であるらしい。塔のカイトシールドをその場に置き捨てると背で地面を擦るようにして、散漫に、高い位置を狙う触手の薙ぎ払いを潜り、またそうしながらも両手で強く握り締めた直剣を上段から斬り降ろすように振り抜き、すると狙いを過たず、深く斬り付けられた青白い触手は先の方を両断され、透明な体液を漏らしながら本体へと引き込まれていった。



## 第13章 6

## 第13章 変態の祭祀場 6

これで次の触手がやって来るまでには時間が開いたと見て良いだろう。不死人は塔のカイトシールドを拾うと先刻眼前にまで光線を届かせた軟体動物が再度放ったそれを防ぎ、またソウルの矢で応戦して斃すと次にはほぼ真上に等しい角度で降りて来ようとしていた一匹を魔法で迎え撃ち、更には左右にそれぞれ一匹ずつ宙に浮く青白い軟体動物達の下へ自ら出向き、屠っていくと、遂にはジュリアス以外の敵がこの中庭から消え失せていた。

また眷属達の増援があるとなれば、そうなる前のこの機にジュリアスへ傷を負わせなくては、防戦一方を続けることになる。そのような考えに至った不死人は駆け出し、だが異変の起こった青白い巨体を前に、その足は止まっていた。

暗く、底の見えない口を彼女は拡げ始めていた。その大きさは現時点で既に自身の胴の直径と同等にまでなっているが、拡大は尚も続いており、しかしそうして生まれる暗い穴は敵対者に向けられることはなく、やがて青白い身体を反らして天を仰ぐ。

このまま放っておけば何かが出来て来ることは明白であったが、かと言ってその訪れ

がいつになるのか不明であり、迂闊に手を出すことは躊躇われ、結果、棒立ちでそれを待つっていると、間も無く紫に渦巻く空が震え始め、より色を濃く、黒くなっていく。

ともすればそれは目の錯覚、幻覚であつたかもしれないが、ともあれ事実不死人は、空が段々と落ち、その距離が近くなることを実感していた。立ち込め、色の混ざる闇の雲海が近付いてくる様はその圧倒的な質量を思わせるが、突如としてそれを切り裂く一条の光が地上から放たれる。

ジュリアスの口から放たれたその光はそれまでに見た虹色のものではなく、光線ですらなく、燦然とした恒星であり、しかしそのようなものであると認識した次の瞬間には巨大な爆発を起こしていた。それはありとあらゆるものを真つ白に染めたが余波などはなく、すぐに視界は戻る。戻つた筈であつた。だがそれでも、今見ているものが夢か幻ではなく、本当にそこにあるものであるのか、否、この世のものであるのか、俄かに信じられなかった。

闇の中で無数に飛び散つた恒星、その欠片はそのまま空に留まり、狂おしく光り輝く星群となつて金や銀、赤、青、緑などの他にも鮮やかな色を放ち、見るに重苦しいだけの黒い空はそうした星界の導きを得ることで果ての無い世界を見せ、闇が本来持つ側面の一つを知らしめていた。

この輝きを見れば、万人が悟るのだろう。人とは、どうしようもなく光に心惹かれる

存在であるのだと。まして道を亡くし、闇に佇み、凍える者の誰が、この満天の星空を希望以外の何かであると疑えようか。

やがて空は天体そのものが回転するかのようになりはじめ、星々もそれに呼応して残光を描きながら動き出すと、活気づいた空の下、ジュリアスの身体に何本もの虹色の線が浮ぶ。一連の現象の意味が分からず、身構えるのみで動き出そうにも軽率にそうすることが出来ない不死人であったが、不意に目を奪われた流星に、直感が警鐘を鳴らした。

そうして走り出した背を、天から降り始めた星の一群が追う。煌きながら矢のように飛ぶそれらはまるで間断というものを知らずに次から次へと殺到し、休む間も無く逃げ回ることを強要されていたが、どれだけ走ったとてその休む間というものが見えて来ない。なにしろ夜空の星に限りが無いように、この青ざめた血の空に広がる星群もまた尽きる気配は無く、流星は降り止まぬ。

金の星群が中庭の地面に突き刺さる様子を尻目にして走るも、その後には銀の星々が走り始め、更に後方ではマゼンタの一群が震えており、それが出立の支度であるのだから。流石に獲物の移動先を狙うような術は持ち合わせていないのか、どうやら走り続けてさえいれば躲すことは出来るようだが、それでは反撃の機を作り出せずどこかで行き詰り、つまりはこの事態に対する策を立てねばならず、不死人は深緑色の星群を横に避けながら脳の働きの一部をそちらに回す。

星に追われながら、最初に思い付いたのはどうにか盾を得る方針である。例えばジュリアスの口から体内に侵入してしまえば彼女のふくよかな身体が星々を阻むが、これは本当にそれが口に類する器官であった場合、単に噛み砕かれて終わる見込みが高く、現実的ではない。ただ、考えの取っ掛かりとしては決して悪いものではなかった。

ジュリアスの身体はそれなりに体高があり、また星を擁する空は今低く、それらの角度の関係上、彼女の影に回り込むだけで流星を遮ることが可能となる。これに關して様々な懸念はあれど、ともかく一度試そうと青白い巨体に足を向け、するとその横腹から長い触手が伸び、近寄ろうとする不死人を迎え撃とうとしなりを効かせて薙ぎ払われる。

不死人はその一撃が下される前に距離を取り、そしてそこからの接近を断念する。彼女は自身の攻撃方法に対して相手がどのような反応を示すかは承知しているらしく、不用意に踏み込もうとすれば今そうしたように触手による牽制を行うのだろう。常であればこれの回避はとりたてて苦勞することもないが、降り続ける星をもとなれば難易度は跳ね上がる上、行く手を阻まれて袋小路を作られれば回避不可の状況に陥ることも十分に在り得る。

降り注ぐコバルトブルーの星群から逃げつつ、思考は方針の転換に勤しむ。

似たような策としてジュリアスの背の上に登ることによって星の攻撃に躊躇いを生

ませる、というものを一度は検討するが、尾の方から駆け上がることで触手の牽制を避けられたとして、彼女が星群を操っているのではなく、それらの動きが自律しているのであれば、軟体の不安定な足場によって足の動きに大きな支障が出ているところを星に貫かれるだろう。

それはとても実行に移せるようなものではないが、これ以上は思い付く案も無く、深みに嵌った考えは滞り、いつしか、到来する紫の色をした星の閃光を避けることだけに意識が向いていた。それは決して諦観ではないものの、考えても答えが得られないことを考え続けて足元に躓くようでは本末転倒であり、それならまずは今出来ることに全力を傾けようと、次にやってきた水色の星群から身を躲す。

その後ろに控えるは真鍮色の星。と、確認のためにふと夜空を見上げ、だがそこに明らかかな物足りなさ、喪失を覚えた。

具対的に言えば、星の数が見るからに減少していた。否応無く見る者を圧巻させる光景であったため、星群は無尽蔵のものであると決め付けていたが、実際には限りがあり、であればここは危険を冒して状況を変える必要は無く、むしろ維持することこそ肝要である。

そうと決めた不死人は走りながらその進路をややジュリアスの居る方に向け、エメラルドグリーン尾を引く星を躲しながらも触手による迎撃を引き出し、それもまた余裕

を見て回避するような、付かず離れずの立ち回りを続けることで虹色の光線が放たれることのないように心掛ける。

そうして赤い星々が降り始めると、遂に空は元の重い煙が立ち込めるようなものへと戻り、またそれを知ったジュリアスは大きく口を開き、上体を反らしていた。

彼女は再び恒星を空に放ち、星界を作り出すつもりであるのだろう。しかしそれを終えるまでには無防備に隙を晒し続けることになり、ここが正念場であると捉えた不死人は赤い星群から逃げつつも青白い巨体に近付き、やがて追い縋る星が全て地面に突き刺さって終わった時、固く握ったロングソードの突きが放たれる。

ジュリアスの横腹の、まるで軟弱な肌に突き立てられた鋭い剣先は深く飲み込まれ、だが裂傷などは生まれなかった。どれだけ柄に力を込めようと、青白い皮膚はその分奥へ押し込まれるのみに留まっており、切っ先はまだほんの小指の先ほどしか刺さってはいない。それならやり方を変えるべき、ではあるものの、魔法や槌による打撃が効かないとなれば現状この刺突攻撃が持ち得る手段の中で最も威力が高い。腕と、なにより足腰に全力を注ぎ込んでまだ敵を貫かんとするも、彼女はそれを意に介さず、今にも恒星を吐き出そうとしていた。

この場合、無難な行動は一時離脱であり、また星々を凌いだあと機を窺い、挑むが適切である。だがそれを理解して尚、不死人はまだ引かなかった。まるで根拠の無い、し

かし培つてきた直感に従つたその行動は何か確信めいたものに満ちており、全身に滾る力を剣の先へと集約させ、猛然として直剣を押し込み続ける。

そのしまいにはとうとうジュリアスは天空に向けて星々の母たる恒星を打ち上げ、と同時に不死人は突如として身体ごと大きく弾かれていた。

吹き飛ばされ、草の上を転がり、そして起き上がろうとした背の向こうで爆発が起こる。若い星々を湛えた天界は回り始め、流星の予兆たるそれを見た不死人は当然走り出そうとするも、それまで手に握られていたものがそこに無いことに気付く。

## 第13章 7

## 第13章 変態の祭祀場 7

魔術師のロングソードは、ジュリアスの肌に乗られていた。無謀な攻撃を敢行した結果、直剣は柄の部分まで青白い肌に刺さってはいたものの、その反動で弾んだ肌が持ち主だけを弾き飛ばしたようだ。

あの皮膚に対してはそれが唯一有効な武器であると思しく、回収しなければならぬが、それは地上の、只人の都合というもの。降り始めた星々がそれを汲まなければならぬ由などあろうか。

訪れる金の星群から逃げる不死人はまた、ジュリアスが首狩りの如く振り抜いた触手の薙ぎ払いをも屈んで凌ぎ、完全に剣を取り戻す機を逸してそこから走り去る。巨体から遠ざかり、降り注ぐ星を避けるため足を動かし続け、ならば得物を取り戻すのは一度諦め、後回しにするべきだろう。

先程そうしたように、襲い来る流星から逃げ続けて時を送ればまたジュリアスは隙を見せる可能性が高く、成功の確率も決して悪いものではない。とにかく危険を抑えて敵に時間を浪費させ、と、その見込みがどうにも甘いように思えてならないと勘が訴えた



とき、案の定彼女は次の手を打ってきていた。

自在に大きさを変える口を唯一の器官とした青白い頭部。そこに生まれた四つの突起が徐々に伸び始め、触覚と言えらるまでの大きさにまで至ると、銀星から逃げる不死人を揃って指した。そして宙を走る星が銀のものからマゼンタのものへと変わり始めた頃、青白い触覚から発せられた光は交わり、収束され、太い一本の光線となって虹色に輝きながら標的の移動先に狙いをつけて発射される。

先を予測して撃つ、ということ自体は今までにない脅威であり、しかしやや狙いは雑であったのか、直撃はせずになっていた。収束された光線は不死人の行く遙か先を撫でて線を引きしており、であれば警戒に値せず、そのまま真っ直ぐに走って横合いから迫る星から逃げようと判断を下した刹那、前方で地面が炸裂していた。

薄紫の硝煙を巻き上げたその小規模な爆発は、先的光線が撫でた地面の線を辿るようにして連なって起きていた。つまりは遅行性の遠距離攻撃であり、だがそうと解釈した次にはまたジュリアスから収束された光線が放たれ、不死人の走る先の地面を舐めていた。

そのまま突き進むような真似をすれば光線の爆発に晒されるが、左右どちらかに曲がれば星々の侵入角度と不死人の進路とが揃い、撃たれる見込みが高い。ならば引き返そうと、軸足を地面に突き刺すようにして踵を返し、だが動きの止まったその一瞬、深緑

の星によつて頬の肉を削られていた。

飛び散る肉片を置き去りにしてその場を脱したものの、極めて危うい場面であつたそれは今後も頻発することが予想され、看過出来ない問題となつていた。すぐに対処しなければならず、ではジュリアスに変化がある前にはそうであつたように、彼女の真下に近付くことで光線の及ぶ角度から逃れようと走り出すも、触手の一振りがそれを待ち構えていた。

後ろに引く以外に避ける道が無く、またその背をコバルトブルーの星群が捉えていた。直前に触手による攻撃の回避があつたためか、行動に僅かな遅れが生じ、横方向に躲しながらも背を削り取られる感触を覚える。

走り抜け、星から逃げるも、背中は既に多くの肉を失つて血を滴らせていた。寸前で身を振つたため直撃ではなく、掠つたような具合ではあつたものの負傷は大きいものであり、だがエストを飲むことすらままならない。今やるべきことは紫に変わつていく流星から逃げつつ、また伸びてきた触手の薙ぎ払いから距離を取ることであり、それが終わればまた水色、真鍮色、エメラルドグリーンなどの星々が旅立ちを待っている。

降り注ぎ、地に突き刺さるそれらを凌ぎながら近付かせまいとする触手からも距離を離し、だが離し過ぎれば収束する光線が不死人の逃げ場を徐々に奪い、その間にも血は失われつつあつた。時間が経過していくにつれ体力は減少を続け、回復するか傷を塞ぐ

だけの隙を得なければ、近い将来動くことすらままならなくなるだろう。だがまた星が不死人を追い立て、その時間を作らせなかった。

赤い閃光のようであったその星を視界の端に捉えた直後、その軌道に対して水平方向に走り出し、だが足の向ける方を徐々に変えていく。それは延々と強要される回避を継続する為、の行動ではなく、いつか失くした剣を再び手にする為である。

赤い星こそが最後であると、そう記憶していた通り空を星界たらしめる光は今や消え失せ、そこには暗雲が広がっており、ジュリアスはまた、その柔らかな身体を反らし始めていた。

この身体は、治癒が必要である。しかし本来迅速に行わなければならないそれを捨て置いてでも不死人は青白い巨体の下に駆け込み、するとやはり恒星を吐き出す直前であるこのタイムイングでは触手の迎撃がやって来ることは無く、その肌に突き刺さっていた魔術師のロングソードを両手で握る。

そうしてそこに込めるものは筋力ではなく、理力であった。滾る魔力を流し込まれ、詠唱を経て形を成し、青い大剣は生まれながらにして敵の内臓を切り裂き、そしてここからが剛力を試される時である。柄を握り込んだ腕に掛かる負荷は重いものであり、加えて背の肉が抉られ、出血しているため常よりも活力は衰えており、しかしここが勝敗の分れ目であると足に気迫を込め、力強く踏み出した。

ソウルの大剣は突き刺されたまま青白い巨体に沿って一直線に走り、それに伴って生まれる長い亀裂からは活きの良い内臓が大量に溢れ、飛び出していた。骨など無い軟体動物が中身を失ってしまえば姿勢を維持するものなどなく、ジュリアスは横に倒れていく。

また闇へ打ち上げられる筈であつた恒星は一度暗い口の中で仄かな灯りを見せ、だがそれも一時のこと。すぐに光は消えて無くなり、いつしか、彼女も息絶えていた。

## 第14章 1

## 第14章 1

内臓の大部分を失い、萎んだ彼女の姿は憐憫を誘うものであるのだろうが、動き出さずにいるなら不死人にとつては単なる巨大な汚物に過ぎない。それに背を向けると中庭の端に見付けた篝火に近付き、そこに腰を降ろした。

不死の抛り所たるその火で常のように身体を温め、そしてふと、それが妙に小さいことに気付く。見てくれではまるで燻っているかのようであり、ただし他のものと同様に不死人の身体に癒しを与えているため、瑣末なことと言えばそうなのかもしれない。

そうして十分に休んだ後、中庭の探索を開始するべく立ち上がるが、周りの荒れ様を見てからというもの、足の向かう先を決めかねていた。石棺のような台やその上などに置かれていた道具などは微のジュリアスト、彼女から放たれた星々によつて見る影も無く粉々に破壊されており、今更調べようもない。

建造物そのものの形に伴つてこの中庭もまた三角の図形をしており、その三つの角の隅の方まで足を伸ばすが目ぼしいものは見付からず、瓦礫の山しか瞳に映らなかつた。そのような事情からどこかに見落としが無いかが、同じ道の行き来を繰り返し、繰り返し

に繰り返した後、中庭と廊下とを隔てる底無し掘の下が目留まる。

それは建造物の外壁と同じような素材で造られた階段であった。幅はごく狭く、この中庭を頂く構造物に沿いながらずっと下へと続いており、そして先が闇に閉ざされているため、辿り着く先などは知れたものではない。

落下の危険もあり、軽々に探りに行くべきではないが、遠くから言葉を投げてきたあの男はおそらくこの先で待つており、ならばいつかは進まなければならぬのだろう。不死人は一つ息を吐いて覚悟を決めると階段に足を乗せ、降りはじめ、渦巻く空が遠ざかっていった。

青と赤が混ざり、紫にもなる空は真実の空ではないものの一応の明かりを齎しており、それを失くせば足元が覚束なくなる筈が、不思議とどれだけその階段を降りても自身の足を見失うことはなかった。それどころか、視界は妙に明瞭としており、闇に閉ざされた周囲と己の身体との境が見て取れる。

最早この場所は光の法則すらも人の世から剥離しているらしく、原因に考えを巡らせたとして、突き止めることは叶わないのだろう。そういうものであるのだと断じ、進む他無い。

階段から足を踏み外すことのないよう一段ずつゆっくりと降り、しばらくの間そのみを続け、しかしどうにも慎重に過ぎれば却って集中力を損なってしまうようなほど先

の道程は長い。また下を向かうそれは上から見て三角形の構造物の外縁に巻き付くように続いており、ただでさえ暗闇な上、曲がり角が行く先を死角に隠していた。

いつ終わるかも知れないそれを長時間に亘って降り続けるものの、階段に伴ってこれを支える三角形の構造物もまたどこまでも下に伸びており、まるで途方も無い。周囲の様子は変化に乏しく、ただ一つ、深度が増すほどに階段を支える構造物が徐々に黒ずみ、そしてこれが漆黒となった頃、ついに不死人は闇の底に降り立った。

それは何も無い空間であった。光も無く、地面も無く、ただ闇だけが際限なく広がっており、にも関わらず、自身の輪郭などははっきりとしている。

「人はいつか死ぬ」

やおら、言葉が投げられる。口調などは上でも耳にしたものと同じであったが、その時よりも明らかに互いの距離は近く、不死人は声のした方へと目を向けた。

「その甘い考えの上に成り立つ享樂は底を知らず、多くの不和を生み出す。ならばその、基本的なルールを変えてみてはどうか。それに、いつかは必ず向き合わなければならぬものなら、準備をしてから向き合うべきではないかね」

闇に浮ぶ、藍色のローブ。聖職者のような趣のそれを纏うのは、白く長い髭を生やした男であった。顔は皺が深く、老いているようだが背は真っ直ぐに伸びており、物腰に隙などは見受けられない。

「私としては、ここまでやってきた君は器に足ると考える。が、それに納得出来ない者も居るようだ。どうするかは、話し合つて決めるといい」

俄かに背筋が騒ぐ。

迫る気配に振り返り、しかしそのように意を起こした時には決していた。

身体、特に胸は刺し貫いた曲剣が不死人の動きを止めており、敵の姿を視認することすら不可である。反撃のためにはまずこの剣をどうにか抜かなければならないが、回し込まれ、肉を抉つていく凶刃は心臓すらも引き千切り、瞬く間に全身の活力を失つていく。

そのうち曲剣は引き抜かれ、倒れながらも追撃に備えようと意識を働かせるが、身体は動かず、敵もまたその必要を認めなかつたらしい。辛うじて首だけを曲げ、歩き去つていく後ろ背を目にする。

「話し合いは、無事済んだようだ」

輝きを失つた甲冑に、革のブーツなど、変則的なその装備の組み合わせには一人、心当たりがあつた。

探求の徒ノルベルトは藍色のローブの横に並び、そして不死人の意識はそこで途絶した。



## 第15章 1

## 第15章 漁港 1

人でさえあれば、死に際の慎ましやかな夢だったろうか。

天も地も無く、深い海に身体は漂い、求めることも貪ることも忘れれば、それはそれで一つの在り方なのだろう。そうなつてしまえばもう何も心配することなど無く、また皆がそうなることを不死人に望んでいるようだが、腕は無意識に伸び、何かを掴む。

まだ醒め切っていない眼に映つたそれは、故も知らぬ亡者の手であつた。雑多に網に収められた者達からはみ出た一つであり、水に浸かつて尚、乾いている。

否、それは海水である。網の中で身動きする亡者達同様、不死人も波に揺れており、だが装備の重量の關係から、今にもまた沈みそうな具合である。

そこにまた伸びる、一つの腕があつた。頭上から寄越され、粗暴に不死人の襟首を掴み、そして海から引き揚げた身体を岩の上に乗せる。片腕でそれを成し遂げるなど尋常な膂力ではなく、当然警戒を向けるものだが、そういつた意志に反して身体は全く動かなかつた。

ノルベルトの背後からの致命の一撃に斃れ、その後棄てられた身体が海中を巡つたの

か、その身は弱り切つてゐるためとても抵抗出来る状態に無く、しかし首の後ろを掴んでいた手は離され、その人物はどこかに向かつて歩いて行く。敵対する者でないのなら、と、まずは落ち着きを払うべく口内の海水を吐き出すなどして身を整え、次にゆつくりと起き上がり、付近に見付けた篝火の元へと足を向けた。

それは青ざめた血の中で見たものと同様、火があまりに小さく、容易に掻き消えてしまふようではあつたが、回復の効果は健在であるらしく、不死人の身体を万全のものへと戻した。それから自身が置かれてゐる状況をしようと周囲に視線を巡らせ、しかしそこに全く辻褄が合わず、理にそぐわない光景が広がつてゐることに気付く。

まず空は渦巻く紫色をしており、それは青ざめた血の中で見たものと同じであつたが、不死人が今立つてゐる場所は積まれた岩で造られた堤防の岬であり、そこから広がる海は真実、海そのものである。また遠景に王城があることからここは地上、野外であるようだが、太陽は歪んで映り、足元からは時折水泡が昇り、つまり見渡す限りのあらゆるものが、青ざめた血の中に没してゐた。

それとて、まだ景色がそうであるという程度の話である。不死人は遠く、水平線を眺め、だがそれは覆い隠されてゐた。果てのない筈の海は、溝の溜まり池であつたようにクラゲ達が浮んで舞いており、眼を揺らし、触手を宙に踊らせ、また離れた距離にあつてもそういつた仕草が見て取れるほど、一匹一匹が巨大である。

或いは既に手遅れなのだろう。今や雌伏の季節は終わり、怪異は潜むことをやめ、地上に溢れて全てを飲み込み、そして自分達のものへと変えようとしていた。

この景色はその到来が間近である証であり、不死人はそれを眺めながらしばらくの間、立ち尽くしていた。

「あんたは、奴らと戦うんだろう?」

しわがれたような声が横から掛かる。そこに居たのは、岩の上に座り込んだ一人の老人であった。精悍な身体つきの彼は、先程不死人を助け出した人物でもある。

「人の世界の側に立ってる。見てそうだと思ったから手を出したんだが、無駄だったか?」

呆然とした様に見えたのだろうか。まるで漁師の身なりをしたその老人は鼻で嗤うような音声で問いを投げ、だがそれに対しては首を横に振るしかない。出来るか出来ないかではなく、他に何も無いのだ。

「そうか。ああ、いや、あれを見て、驚かない方がどうかしてるというものか。それはそうだな」

漁師の老人は一人で納得しながら、座ったまま海の方へと顔を向ける。碌な景色ではないが。

「連中がこの国に来てからだ。ほら、そこにもあるだろう?」

彼が指し示したのは、岩の縁から吊り下げられ、また海に浸かった漁網であった。中には大きなクラゲばかりが絡まっており、しかしまさか、これを獲ることを生業としていたわけではあるまい。

「これが段々と増えていった。そのせいで漁が出来なくなつたんだが、極めつけがあの化け物共だ。あんな訳の分からないものが増えて、この先、どうなつてしまふんだか」  
死という結末が無いものとなつた上、異形の者達が海の向こうから訪れる。そしてどうにも彼等は参加を望む性質を持っているようだが、そこから先は人の身で想像の及ぶものではない。この逞しい老人とて、それを恐怖せずにはいられないのだろう。

「ただ、訳の分からないというのは、今更かもしれないがな。元々、海とは恐ろしいものだ」

足元の波間を見詰めながら、老人は呟く。

「漁では時折、海の深いところから揚げた網に、おぞましいものがかかる事がある。きつと海に底なんて無いから、だからあんなに、得体の知れないものが出る」

黒い海をずっと眺め、だが老人は不意に顔を上げる。その表情は強張つており、またそれを自覚してか、彼は自身の両頬を叩く。

「だからって俺じゃ何も出来ないから、あんたみたいなのに頼るしかないんだ。悪いとは思うけどな」

この漁師の老人がどのようなつもりであつても不死人は成すべきを成しに行くため、そのように謝意を見せる必要は無いのだが、このような事態にまでなつてしまつては身一つで出来ることなどたかか知れている。果たして彼の願つた通りになるかどうか、客観的に考えるなら極めて怪しいものであつた。

それから漁師の語りは途切れ、であればそろそろ行かなくてならないが、その前に一度周囲をよく観察する。

現在地は漁港の最も端にあたる東の岬の先であり、ここから王城方面へと戻るなら堤防か棧橋を渡つて西の端へと辿り着かなければならなかつた。そこは中央広場に隣接する居住区の付近となり、境にある出入り口を一度見た時は積まれた荷物などで閉ざされていたものの、別に扉の類がある可能性も捨て切れない。

「目に付くよな。あの船は」

添えるような一言であつた。しかし漁師の老人が想像した通りにはまだ意識は向いておらず、言われて始めて不死人はその大きな船舶に視線を向ける。

棧橋の一つに寄り添う、ガレー船。多数のオールを備え、また船首に衝角があることから海戦を想定したものであるようだが、無論それは漁港には相容れず、老人の言は尤もである。

「あんな船でこの海を渡るのは、さぞ苦勞したろうな。ああ、この辺りは荒れることが

あるからな、あの図体じゃ漕ぐのは向かないんだ。だからこの土地のものじゃないし、いや、いつここへ辿り着いたのか、もう忘れてしまったが、おそらくは王の帰還からずっと後のことだ」

その言葉を信じるなら、遠くで停泊しているあのガレー船は異国のものであり、本来であればこの地で起こった出来事とは無関係である可能性が高いと言えた。しかしながら、王の帰還、つまりエルミューロクの滅亡の後は既に怪異が始まっており、その者達はそれを知りながらリングレイにやって来た、ということも在り得る。青ざめた血を求めた者にしてやられた身としては、それは警戒すべき事項であった。

そうしてひとしきりその場からの観察を終え、出発の気配を漂わせると、漁師の老人は改めて不死人へと顔を向ける。

「飲まれるなよ。何にもな」

その言葉を背に受けながら、堤防を歩き始めた。

漁港には幅の広く、沖へ長く伸びる栈橋が三つ、向きを揃えて存在しており、だが今のところそれを渡る必要性は無い。不死人の歩く岩で積まれた堤防は真つ直ぐに陸地の方へと続いており、海中へ落下し易い橋へ行くよりはそちらへ向かった方が安全である上、そもそもこの岬と三つの栈橋は並行にそれぞれが伸びており、これらを繋ぐ道は無く、独立している。

棧橋へ行くこと自体に無理があり、例えばどうしてもガレー船の方へ行きたいのであればそこらの海に浮んで繋ぎ留められている漁の小船を渡らなければならぬが、それこそ落下の危険が高く、またそれを選ぶ理由も無い。

故にまずは安全な陸へ着こうと足を動かし続け、だが、思えば何故あの漁師の老人はこの堤防に留まっていたのか、その理由をすっかり聞かずにいたが、崩れ、陸地と分断された箇所を見て納得するに至る。

近付いて観察したところで問題は解決せず、崩れた箇所の距離は長く、跳躍しても届きはしないだろう。そこに居ても意味はないため踵を返す他なく、だがそうした折、背後で潜めるような嗤い声上がる。

## 第15章 2

## 第15章 漁港 2

振り向き、目に入ったのはこちらに向かつて走る肥大した頭部の亡者達であつた。先頭の一匹の後もう二匹が続き、さらにその後ろの方では堤防と棧橋との間にある小船から置き上がる者達の姿が二つある。

計五匹。それも、一時的な平和等の備えも無く、また行き止まりを背にした不利な情勢で戦わなければならなかつた。が、真に挑まなければならぬものを思うのなら、この程度で斃れることなどあつてはならない。

はじめに魔術師のロングソードを構え、詠唱の速いソウルの矢を飛ばし、先頭の一匹の出鼻を挫く。これによつてこの亡者の足は一瞬止まり、そこに後続の敵が追いつくと三匹が足並みを揃えて迫ることとなり、そうして彼等が不死人の元に辿り着くと同時にそれを迎える、ソウルの大剣が振り抜かれる。

その一閃は三匹を諸共に捉え、まず先のソウルの矢の直撃を受けていた肥大した頭部の亡者に致命傷を与え、またその直後に不死人はまだ怯んでいる右の二匹目に詰め寄りながらそれを斬り伏せ、その斬撃よりも少し遅れて飛んできた三匹目の敵の拳を横に躲



しながら、下段にあつた剣を勢い良く斬り上げ、胸を深く裂かれてこの亡者も斃れる。

理想的な流れによつて瞬く間に三匹を無力化し、しかしそこへ槌のような重い一撃が不死人の頭部に下されていた。脳を大きく揺らした強烈な打撃は両の拳を一つに固めて上から打ち下されたものであり、それは四匹目の肥大した頭部の亡者の接近を知らぬ間に許したがために命中し、失神させるに足る威力であつたが、そうなるにはやや狙いがずれていたらしい。その上敵は勢いを付け過ぎたのか、殴りつけた後には脇に抜けて数歩たたらを踏み、無防備にも背を晒している。

よつてその膝裏を軽く蹴り込み、亡者は仰向けに転倒して隙だらけの格好となるが、それは一度捨て置き、間近となつて五匹目の相手を先にしなければならぬようだ。駆ける勢いに乗つて長い腕が突き出され、槍の様相で迫るそれを、塔のカイトシールドが打ち払う。

致命の一撃。それを与えるのであれば、剣は突き立てるべきである。だが斬撃の構えを取つた不死人は眼前の亡者の腹を横に裂き、そしてまたその勢いを維持したまま身体と剣とを翻し、起き上がりつつあつた背後の敵にも横薙ぎの一撃を呉れ、更にまた反対回りの旋風によつて前後の亡者達にそれぞれ斬撃を浴びせる。

二匹は斃れ、そうなればこの場には最早、敵対する者の姿は皆無となつた。敵からの打撃による負傷をエラストで癒し、乱れた息を整えようとするが、水中の中でそれを意識

すれば、むしろあまり気分は落ち着かなかつた。

それでも一応は静穩を得ており、探索を再開しなくてはならないが、そうするにも目処が立っていない。一本道の堤防は断絶しているため道というものはこの場に存在しておらず、であれば立ち往生するしかないが、人の世界の余命が明確でない以上、消極的な選択を是とすることも出来なかつた。

よつて不死人は落下などの危険を承知の上、行く先をいくつか連なる小船の上とし、それを渡ることでもまずは一つ目の棧橋の上に乗ろうと決めると、寄り集まつて係留されたそれの方へと近付く。この上なく不安定な足場であつたが、肥大した頭部の亡者達がこのに隠れていたことから、重量による沈没の心配はあまりないだろうと、堤防から少し身を乗り出し、だが反射的にそれを引つ込めていた。生理的な拒絶があつたためである。

あまりに現実的ではない光景であつたが故に、もう一度小船の方、海の中を覗き込んでみたところ、先程と同様に視線を交わすことになつたそれは、巨大な金色の蝸の、横に長い瞳であつた。小船の真下に留まり、不死人の方をじつと見詰め、それ以上の何かを仕掛けようとはして来ない。

心を失つた不死であれば、あらゆる恐怖は障害と成り得ない。

それは所詮、空想に過ぎなかつた。仮にも生物であれば、根源的な恐怖には抗えず、足

腰は力の支えを失い、とても歩き出せるような状態ではない。それではなくとも、地の利があるどころか、完全に自らの行く末を相手の掌中に委ねる状態になるため、何の工夫も無くこの小船の上を渡ろうなどとは正気の沙汰ではない。

堤防の上で立ち止まり、長考を始めていた。討伐するか、何かを囮にするか、見付からないようにして渡るか。様々な案が出るものの、いずれも納得出来るものではなく、というのも結局は、刺激するべきではない、という点を重要視していたためであった。

攻撃するのは論外として、囮などをするために音や光を用いては実の所相手がどのような反応を返すか分からず、また身を隠す場合、それ自体が非常に困難な上、万が一見付かった時には相手からすれば急な遭遇と化す可能性が高く、驚いて思わず襲つてしまふ、という誰も望まない結末にすら成り得る。

第一、最初に互いを見た時にはその距離も近く、やろうと思えばあの蛸は一瞬にして触手を伸ばし、不死人を捕らえるなりが出来ていた筈である。その機会を見送った、ということ、相手にその気がない、と見做すことが出来るのではないだろうか。またこの仮説を裏付ける要素の一つとして、牢獄都市最奥部に棲むこれと同じような姿をした金の蛸のこともある。

特にそういつた観点から、何もせずただ渡る、という結論に達し、だがやはり足は動こうとしない。考えた結果の答えとは言え、正気の沙汰ではない、という最初に抱いた

印象が脳の裡から消える事は無く、不死人を迷わせ続けていた。出来るだけ客観的に見てどうなのか。本当に大丈夫なのか。そのような問答を繰り返していった。

もしも青ざめた空でなければ、陽が傾いたことだろう。それほど時間を思考に費やすも、出た判断は同じ、そのまま渡る、であった。まだどこか納得し難い部分もあったが、これ以上の検討は単に情けないだけである。

覚悟を決めて一歩、一つ目の小船の上に乗りに上げながら、蝸からの視線を全身に受ける。ロープで留められただけの覚束ない足場は徒に揺れはするものの、それを誘いと見なかつたらしく、金色の巨大軟体動物は他に動こうとはしなかつた。それを見届けた上でもう一歩、不死人は歩き始め、その後二歩、三歩と続く。

一先ずは予想通りに事が運び、されど蝸は、特に水棲生物の中では比類なき知能の持ち主であるという。そのような手合いであれば、例えば逃走がより困難な場所にまで獲物がやって来るまで待つ、というように企てることなどもあろうと思えば、到底安堵出来るものではなかつた。

次の小船に乗り移る。懸念は多くあれど、それをどんなに捏ね回したとして、この場では相手に全てを任せる以外、出来ることはない。そのように断じてまた小船を乗り移り、そこで見た光景にまた足が止まる。

海は紫に渦巻く空を映してそれと似たような色をしており、だが本来暗く静かである

うその中は、実際にはうねる輝きで騒がしいものとなっていた。海中を泳いで留まる、無数の巨大な蛸達によって。

小船を渡り始める前などは一匹だけのものであると認識していたが、それは下手な思い込みであつたらしく、彼等は皆一様に、不死人を凝視していた。予想していなかつた事態に直面しており、自然に堤防に戻る提案が浮ぶが、それを却下とした。どの道、攻撃も囷も隠密も良しとしない状況であるには変わらない。

不死人はまた小船の上を歩き、或いは乗り移つて栈橋を指し、だがそうして足を動かしながら海面から目を逸らしたところで、脳内では否応無く凄惨な結末の想像が駆け巡つていた。仮にこの大勢の中に、一匹でも腹を空かしたものが居れば、または虫の居所が悪いものが居れば。彼等の気が向けば、それがいつだろうと、餌は些細な小船ごと喰われるのである。

ただ、結果としてそれらが現実のものとなることは無かつた。計五つの小船の上を渡つた不死人はようやく一つ目の栈橋の上に到着し、足元もいくらか安定したものとなる。とは言えそれとて木の板で造られたものでしかなく、歩く度軋むことからそこまです丈夫であるようには見受けられず、また蛸達は相変わらず、海いっぱい蠢いていた。安全を確保したとは言い難く、やはりなるだけ早くに移動し、陸の上に辿り着くべきだろう。不死人は陸地から真つ直ぐ生える栈橋を歩き出した。

しかし実のところ、この栈橋から陸にまで上がれるかはまだ不明であった。直進すれば陸地の方角、というの間違いないものの、栈橋の上には小屋が一つ建っており、それが視線を遮っているため、先の様子が観察出来ずにいる。よつてまずは通り抜けることが可能か否か見定めなくてはならず、不死人はその小屋の前まで近付くと、一度立ち止まる。

## 第15章 3

## 第15章 漁港 3

漁師達が使ったものであるのか、正面の扉が開いた小屋の中には漁網が多く置かれており、他に浮きのような道具も散乱していた。それは特に気に掛かるようなものではなく、肝心の陸方面へと繋がる扉はその奥に存在しているため、不死人は網の上などを跨いでそこへ近付くも、これが開くような様子は無かった。閉ざされている、というより開き方を忘れてしまったかのように扉の金具は錆びて固まっており、通行は断念する他無い。

用の無くなった小屋を後にし、そしてまた行き先を決められず、棧橋に立ち尽くすこととなる。一本道の棧橋の上で、他に行けるとすれば沖の方角であり、そちらに進めばまた渡れそうな小船が浮いているが、その先には待つのはかのガレー船である。

二つ目の棧橋に移るにはその巨大な船の中を経由しなければならず、それは小船の上を渡るよりは遥かに危険は少ないように見えて、現実にはその逆であると直感が告げていた。

ただ、他に道が無いのも事実である。止むを得ず不死人は沖の方に向けて棧橋の上を

進み、ガレー船の方に近付いていくと、早速、まさしく面倒な事態が走つてやつて来ていた。

巨大なその船から降りては小船の上を飛び跳ねるようにして棧橋に渡り、向かつてくる三つの影があつた。頭が大きく、腕が長く、つまり彼等は肥大した頭部の亡者達である。大きな足音を立てながら走る様子は想像力というものが欠如している風であり、橋の下で泳ぐ者達を刺激しないものか危ぶむが、そう言っている場合でもないのだろう。

まだ距離がある内にと不死人は右手の得物をロングソードからウオーハンマーへと持ち替え詠唱、一時的な平和の用意を整え、迎え撃つ姿勢を取る。その備えさえあれば多少の数の不利があろうと敵を圧倒出来ると、これまでの経験からそれは間違い無いものと考え、しかし不意に起こつた背後での異変が、その驕りを露にした。

物音に振り返り、目にしたのは小屋の屋根から飛び降りる二匹の肥大した頭部の亡者達の姿であつた。この敵との遭遇は既に距離があまりに近く、即応しなければ危険であり、よつて出し惜しみ出来るような状況ではない。不死人は迫り来る彼らの眼前で聖職者のウオーハンマーを棧橋に打ち込み、そこから散つた小さな白い文字、一時的な平和が二つの異形を縛り付けると、間髪入れず、順に敵の頭部へ槌の打撃を浴びせていた。

そうして後ろの敵の制圧を終えれば、次には向き直つてガレー船の方からやつて来る三匹の方を相手取らなくてはならないが、今の一幕で時間を多く損なつており、その結



果、駆ける亡者達との距離は相当に近いものとなってしまっていた。

ここからまた一時的な平和を付与するだけの時間は存在せず、残された猶予は発動が早めの魔法の詠唱一つ分程、といったところか。先程のようにソウルの大剣によって迎撃することが出来ればそれが最善ではあるものの、彼等が到着するタイミングには誤差があり、その調整をしていれば時間を使い切ってしまう。ならば、どのようにして迎え撃つか、というよりも、どのようにして切り抜けるか、をより意識するべきか。

一瞬の内に方策を定めると、不死人は魔術師のロングソードを構え詠唱、その剣尖から闇の玉を放っていた。

この魔法の特筆すべきは、やはり衝撃力か。並ぶ三匹のうち、中央の一匹に闇の玉は直撃し、その威力は交差された長い腕に防御されて尚、敵の身体を大きく怯ませ、またその機を逃さず、不死人は飛び込んでいた。

闇の玉の詠唱の後、それを追うようにして駆け出した身体は十分勢い付いており、左右の亡者から寄越される、掴みの長い腕を潜り抜けながら塔のカイトシールドを前面にし、まだ怯みの抜けていない正面の敵に突撃を打ち当てる。鉄と肉とが衝突し、どこかの骨が陥没したような音が鳴ると共に、相手は衝撃を耐え切れずに仰向けに倒れ込み、そしてその上を飛び越え、不死人は包围を脱する。

抜かれた二匹はすぐに身体の向きを反転させるも、先に駆け出した方に分があつて当

然である上、やはり彼等は遠距離攻撃の手段を持つていないらしく、互いの距離は遠ざかっていく。

と言つても、所詮ここは棧橋の上でしかなく、先など知れたものである。沖の方に向かつて走つた不死人の前には海面が近付き、早々に肥大した頭部の亡者達に追い詰められる格好となり、しかし二と一とに別れた上、これだけ距離を稼げたのであればいくらでもやりようはある。

まずは牽制に闇の玉を放ち、それを二匹揃つて走つていた内の片割れに直撃させ、足を止める。その一方、残つたもう片方はそのまま走り続けており、程無くして不死人の距離が近くなると固めた拳を振り上げながら軋む木の棧橋を踏み込み、飛び掛る。

その大袈裟な動作は威力や速度はあれど、空中に身を置く小回りの利かない瞬間があり、不死人の一閃はそれを狙い、放たれたものであった。肥大した頭部の亡者の腹を斬りながら脇を通り過ぎ、前に踏み込むと出遅れた二匹目の拳を塔のカイトシールドで受けつつ、その縁の下から剣の先を忍ばせる。

そして亡者の身体を盾で圧して抑え込み、腹を一度刺して抜き、二度刺して抜き、三度刺しては抜き、しかし四度目は抜かずに剣を抉り、これまでの傷を一つに繋げていく。この時点で相手は大量に出血したため全身の力を失くしており、左手と盾は抑える必要の無くなったために翻ると、腹を横一文字に斬り破られて蹲つていた一匹目を海に叩き

込み、また同時に、腹を抉られていた方も棧橋に倒れ伏す。

ここでようやく闇の玉と盾との突撃を食らって転倒していた亡者が到着し、走り込みながら長い腕を横に薙ぎ払う。それを前転して潜り抜け、入れ違いになると敵よりも早く振り返り、無防備な背を深く斬り付けた。

背骨を割ったか。そのような手応えを感じ取つてすぐ、肥大した頭部の亡者は棧橋に両手と両膝をつく。

「私は君を許そうと思う」

それが良くない結果を招くことがあると理解していながら、振り翳した剣は亡者の一言に止まっていた。

「先にこれを言っておけば、気まずい思いをせずに済むというものだろうか？ いずれ皆が生まれ変わるのであれば、我々がこの先、また顔を合わせる機会はいくらでも、永遠にあるのだろうか。ふんっ。ふふふっ。ふっ、ふひいッ、げごッ！」

果実のような頭部を魔術師のロングソードが割り、また果実のような中身を晒していた。

元より期待もしていなかったが、亡者の言は不吉な予言の類であり、何の益にもならなかった。それどころか後味の悪さばかりが纏わりつき、不死人は早々にここから立ち去ろうと歩き出すが、しかしその直後、唐突に大きな飛沫が上がり、またその中であつ

た巨影に身体が仰け反る。

棧橋の間近で海面が割れ、潮を盛大に噴き上げたのは剣のように銀に鋭く輝く巨体であった。宙に大きく突き出し、だがそれはただ一瞬のこと。またすぐに海の中へと沈むと風が戻り、周囲は静穏そのものとなったが、それを見た者までがそのような心地になることなどは有り得ない。

一瞬の出来事の中、不死人の記憶に強く残っていたのは、銀の身体の先にあった、黒い大きな瞳であった。つまり今しがた顔を見せたのは魚であり、そしてこの生物もまた、タコやクラゲ同様、巨大な身体を持っているらしい。前例があるため今更それについて常識と照らし合わせる手間などは省くとして、あの魚は何故、跳ねたのだろうか。

脳裏を過ぎった考えに従い、周囲をよく見回したところ、海面で浮んでいる筈の肥大した頭部の亡者の軀が一つ、見当たらなかった。どうやら彼は、食べられてしまったようだ。

姿を見られながらも無事に小船を渡れたことから、海に棲む者達は意外に優しい気質の持ち主である可能性に僅かに期待を寄せていたが、それは今度一切、捨て去るべきだろう。ただ、だから何が出来るといふ話でもない。木で出来た棧橋など、あの巨体の衝突に堪えられるものではなく、不死人の命運は、未だ彼らの気紛れに委ねられている。

それから少し時間を置き、異変が起きないことを確かめてからようやくガレー船に向

けて歩き出し、程無くして經由するための小船の前に辿り着く。波に揺れてはいるものの、すぐに沈むような気配もないためその気になりさえすればこれを渡るなど造作もなく、だが見下ろせば海の下で黄金の肌が蠢いている。

帯のような瞳は小船の上に移ろうとする者の姿を捉えており、否応無く視線が絡み合うが、その巨大さのあまりまるで水面が盛り上がっているような錯覚が起こっていた。そうなるのは当然足が止まり、しかしどれだけ躊躇い、時を無為に送ったとして、進む以外に選択肢は無い。深く呼吸した後、枯葉のような小船を、やや弾みをつけて渡り、船首からガレー船の中へと転がり込んだ。

最初に目に飛び込んできたものは、細やかな模様であった。雨曝しに遭い、ほつれ、所々千切れながらも床に敷かれたその絨毯は豊かな草花を象ったような複雑な柄を残しており、そして同じ柄をリングレイでは目にしない。またその上にはいくつかの刀剣が捨て置かれており、これについても絨毯同様、この土地では一般的でない凝った装飾が柄などに施されていた。

漁師の老人が仄めかしていた通り、これはやはり、異国の船であるのだろう。ただ、このガレー船が奇異であることには違い無いが、特に船倉などを調べず、船から出てしまえばそれ以上のことはない。

不死人は船尾の方へと進み始め、だがそうして足早にここを去ろうと決めた裏では、

無意識にこういった事態に陥ることを直感していたのかもしれない。

## 第15章 4

## 第15章 漁港 4

背筋に、悪意の籠もった視線が刺さる。直感よりも遙かに明確なその感覚に振り返り、直後、船の縁から飛びあがった人影が、大剣を振り被りながら落下する。狙いは頭蓋を割ることか。危うくそのような末路を辿りかけるも横合いに飛んで躲し、そのまま距離を取って甲板の上に降り立った敵対者の姿を見定める。

片手で握られた大剣は鋸のような細かい歯を並べ、他方、その巨大さは、特に今の落下攻撃などであれば人体を真つ二つにすることすら容易いだろう。拷問にしろ処刑にしろ、どのような用途の下であれ作らせた者の残酷な嗜好が窺えるが、武器としては実用性の他にも重きを置いている部分があり、それは使い手についても同じ事が言える。

その兜は蛇の頭を精巧に模り、また鎧にも両肩から蛇の頭部を生やしたかのような意匠が施されていた。籠手と足甲に豪華な飾りを着け、またそれら全てに肌理細やかな鱗状の紋様が彫られており、血に染まったが如く赤い光を滲ませるダーククレイス、三頭蛇の魔人は、異形の相貌を不死人に差し向ける。

彼はおそらく、異国の王であったのだろう。本来戦いには不要である巧みな装飾はそ

の身分の面影であり、だが彼の持つ武器と、そしてこのリングレイに乗り込んでいることから、彼自身は地位に執着しておらず、それ以上のものを求めていると思われる。人智を越えた力か、それが齎す深みの愉楽か。

やがて大剣を振り上げ、力強く、且つまるで無思慮に三頭蛇の魔人が踏み込む。武器を上から下へ、または左右へと振り回し、薙ぐ風か、水流などに大きく煽られることから威力は高く、ましてそれを片手のみでやってのけているとなれば信じ難いほどの膂力の持ち主であるようだが、いずれの斬撃もやや間合いが遠いため、避けるに難しいものではない。

鈍色の一閃が二度、三度と放たれ、四度、五度と重なり、それを後ろに下がり続けていなす不死人に比べ、敵はスタミナを減少させる一方である。見戯に等しいやりとりを続けただけで勝利が見えはじめ、そこから察するにこの闇霊は異国の王本人ではなく、武器と鎧を拾っただけの何者かの可能性があり、それこそ嗜虐を味わいたいのでなければこれを長引かせる意味など無い。

六度目。三頭蛇の魔人が担いだ大剣は上段から大きな動きで振り下され、打ち込まれた木の床が割れながら刃を深く飲み込んでいた。

その明確な隙を、魔術師のロングソードが狙った。全く間を置かず、鋭く放たれた突きは三頭蛇の魔人に吸い込まれ、だが直撃の寸前で相手が肩を捻ることで剣はその上を



掠り、同時に、大量の木片を巻き上げながら残酷な大剣が斬り上げられる。

誘い込まれた形となり、不死人は身を振って大剣を躲そうとするものの、細かな歯によつて胸を軽く撫で上げられ、そこから吐き出された血が赤い靄を生む。

どうにも、一連の敵の動作はまやかしであつたらしい。三頭蛇の魔人はまるで猛者を気取る愚者を演じ、真実愚者であつた者が傷を負う結果となり、だが直撃とまではいかなかったことは幸いであつたか。飛び下がりに、エストを掴もうと手が動くも、それを期待する蛇の双眸に気付く。今隙を晒せば、確実にそこで終わる。

傷の放置も已む無しと判断し、得物を構えて敵と見合うと、三頭蛇の魔人もまた、こちらの出方を待っているようであつた。あのような芝居を打つたことを考えても、どちらかと言えば慎重に行動する部類であると見るべきか。

それ故に両者の足運びは横へ横へと向き、大きくは動き出さず、互いに睨み合つたままでは、不意に視界の端に影が映る。目線の動きなどから思考を読まれることのないように気に留めながらその影に意識を向けたところ、それは甲板に横たわる巨大なマスとと帆であつた。半ばから折れて落ちたらしく、上手くすればこの影に飛び込み、両者の間に隔てるものが置かれることになるが、そう上手く事が運ぶかどうか、やや疑問が残る。

しかしながら、ここで迷っている時間が長ければ長いほど企図が読まれる可能性は高

まり、出来るものも出来なくなる。決断した不死人は敵対者との睨み合いを放棄してマストの影に駆け込み、急ぎ詠唱を始め、それが完了すると直剣で盾の縁を軽く叩き、魔力を受け渡した。

その次には身体を回復するべきではあるが、既に闇の盾の付与だけで時間を多く割いており、これ以上は敵対者も大目に見られなかったらしい。大剣が帆を貫き、横に裂きながら身を隠していた不死人へと迫り、凶刃から逃れるべくそこから転がるようにして出ると、距離を取り、構えを整え敵を見据える。

闇の盾がある以上、また大剣で襲い掛かってきたのなら、それでほぼ勝敗は決する。しかしただの亡者ならいざ知らず、この三頭蛇の魔人が迂闊な真似をする筈も無く、浅い考えの下に張られた罠など現実のものとはならないだろうと踏んでいたところ、敵対者はやはり大剣は振らずに、代わりにその場に留まったまま自身の籠手を胸元に引き寄せ、表面を不死人に見せる。

鱗のような紋様が波打つ。その錯覚は、青みがかった暗い泥が籠手から染み出したことよって起つたものであり、またこの直後、泥は黒い霧のように広がり、あるいは風のような緩やかさで不死人に向かって流れ始めた。

その色合いからして闇術に類するようだが、移動速度はあまりに遅く、逃げ続けることもさして苦勞は無い。ただそれは、この術が単体で使用されるのであれば、という前

提が必要な話である。

再び籠手の表面に、青ざめた血によく似た泥が浮く。その直後、澱のようなソウルの塊が右の籠手から放たれ、左の籠手もそれに続く。順にゆるゆると飛んで不死人の方へ迫り、それは先の黒い霧と同様、魔法、とりわけ闇術の様相を呈しており、試しに身体を左右へ動かしてみると、やはり追尾する気配がある。

飛翔の速度が遅く、また牢獄都市の看守が用いたものほど執拗に追い駆けては来ないため、難なくその二つを回避し、だが三頭蛇の魔人はまだ、先程と同じ構えを取ったままであった。

澱のような塊は次々に放たれる。それを左右に、または潜り抜けて避け続けるものの、三頭蛇の魔人は闇術の行使を止めようとしない。その術自体が決定打とならずとも、速度の遅さがむしろ不死人を踊らせる時間を長引かせ、疲労を招き、なにより注意力の低下を招き、気付いた時には左半身が黒い霧に包まれていた。

いつから忍び寄っていたのか、生命に惹かれる黒い霧は触れた直後、皮膚に細かく、弾けるような感触を与えていた。それは霧となった人間性が引き起こしたごく些細な悲劇であり、微弱なダメージを与えているようではあるが、あまりに微弱に過ぎるため、これが負傷と呼べるものになるまでにはどれほどの時間を要することか。

ただ、複数の性質を持つている場合や組み合わせなどで豹変することも考えられるた

め、あまり身を晒し続けるべきでもないだろう。黒い霧から脱し、また敵対者が放ち続ける澱のようなソウルをも躲すべく、不死人は船上を駆ける。巨大な外見に違わずガレー船は内部も広く、よって逃げる先に事欠かかず、しかしずっと続けていれば動きを見切られるのも当然の成り行きであったか。

三頭蛇の魔人が不死人の行き先に狙いを定め、鋭い歯を並べた大剣が振り翳される。長い影を落とすほど巨大なそれを前にして、踏み込むことに逡巡しかけるが、事前の備えは怠っていない。やがて振り下された大剣の前に塔のカイトシールドを前に出し、闇の盾で迎え撃った。

戦いの流れをそのように脳内で捉え、それ故に現実との齟齬が生じ、理解が遅れる。凄まじい力を源とする大剣はカイトシールドを奥へと押し込み、続く一振りによって隙を晒した胴に裂傷を負わせていた。赤い靄が昇り、身体は怯み、意識は断絶しかけ、しかしこのままでいれば敵の追撃に斃れるは必定であり、傷を堪えて飛び退がり、距離を取る。

用意した筈の闇の盾が、何故そこに無かったのか。今回の失敗はそれに尽きる。事前にあつた異変としては黒い霧の件があり、あれが闇の盾に何らかの作用を齎したと考えられるが、今後これに留意する機会が果たしてあるのか。闇の盾を詠唱する時間がまた得られるとは思えず、敵が同じ罠を利用する愚を侵すとは期待出来ず、まして三頭蛇の

魔人の優位は最早、不死人への止めを検討する段階にある。

やがて籠手の鱗模様はまた、青みがかつた泥を滲ませていた。そして間断なく澱のよ  
うなソウルの塊を放ち、不死人を追い詰めていく。回復の隙など無く、大きな負傷を残  
したままの身体で右に避け、左に避け、潜り抜け、だがそうして時を重ねていればこの  
状況に光明が差すどころか、悪化の兆しが俄かに香る。

澱の塊が飛び交う最中、唐突に薙ぎ払われた大剣が不死人の肩を掠め、肉の一部を削  
り取っていた。その一振りは確かに早いものではあつたが、常であれば躲せないもので  
はなく、そうならなかつたのはやはり、負傷によつて足が鈍っていることや、敵の遠距  
離攻撃によつて翻弄されていることなどが影響しているのだろう。

最早勝利する術は無いと、断じる他ない。このダークレイスもまた牙猪の戦士と同様  
強力であり、不死人の手に余る。匹敵など夢にも見れたものではなく、ならばこの敵に  
対する方針を大きく転換するべきであり、少なくとも、船上で対峙するこの状況は速や  
かに変えなければならず、その為なら多少先の見通しが立っていないことなどには目を  
瞑るべきか。

迫る澱のようなソウルの塊を避けながら、位置取りを調整し始める。また演じている  
のでなければ三頭蛇の魔人は不死人のその行動の意図を察知しておらず、それを好機と  
読み、そして頃合を見計らうと船の縁から身を踊らせ、栈橋の上に着地した。

## 第15章 5

## 第15章 漁港 5

二本目となるこの棧橋には途中で道を遮るものが無く、一直線に陸へと続き、そこを目指して不死人は駆け出していた。追っ手がいることを思えば強引な行動ではあるものの、あの場に居れば敗北する以外の結末が存在しないため、未踏の場に入り込み、新たな策を見出す。

まさか共闘する者などは見付けられないだろうが、地形を利用した罠か、他には単に隠れ潜むか、そこまでいかなくとも、エストで身体を癒すことが出来れば挽回の足掛かりとなる。行った先で新たな敵が現れるか、単に行き止まりであれば望みは絶たれるが、それ以外であれば何かしら活路は拓けるだろう。

そういった算段を脳内に展開しながら走り続け、そして唐突に躓いていた。それは腿の裏に小型のククリが突き刺さったが故に起こったことであり、また投げた相手を誰何するまでもない。駆ける三頭蛇の魔人は既に近い距離にあるため、澱の塊の闇術にせよ、単純な斬撃にせよ、ここからまた背を見せて逃げつつ凌げるものではなく、不死人は迫り来る敵対者に向き直らなければならなかった。

両者の距離は瞬く間に縮み、程無くして訪れる衝突の瞬間、異形の鎧がすれ違い、そして脇を走り去っていく。

すつかり斬撃に対する構えを取っていたため一瞬呆けてしまい、しかし遅まきに敵対者の目論見を察した時には、互いの立ち位置は完全に入れ替わっていた。即ち三頭蛇の魔人が陸の側に陣取り、不死人が栈橋の上に残される。

一本道のこの木の橋の上から移動するには陸の方向以外にもガレー船と、それから三本目の栈橋へ続く小船があるものの、どちらも足場が不安定であるため敵の遠距離攻撃を凌ぎながら乗り移れるようなものではない。それは船上よりも逃げ場の狭い栈橋の上で敵の攻撃を受け続けなければならないことを意味しており、率直に言えばこの状況は詰んでいる。

月か、陰った太陽か。溶けたような黄色い謎の球体が渦巻く紫の雲の合間から覗き、その空に軋んだ栈橋から漏れ出た気泡が翻弄され、複雑な輝きを見せながら立ち昇っていく。

遊ばせる心など無い。ましてや、見たところで気を落ち着ける助けにすらならない風景だが、そのようなものであっても意識に流れ込んでしまうほど、頭の中は空であった。諦めの境地、ではなかったが、打開策というものの、その手掛かりすら何も思い描けていない。

やがて三頭蛇の魔人は陸地に背を向けながら、魔術触媒を兼ねる籠手の表面を不死人に見せ、魔法の詠唱を始めようとしていた。ならば、これで終わりだろう。それを事実と受け止め、しかし不死人は未だ目を強く見開き、最後の瞬間まで出来る限りのことをやってみせようと、剣と盾とを構え、そして飛沫が、棧橋を砕いた。

何の予兆も無く高々と潮が舞い上がり、またその中に、剣のような銀色の巨体が紛れていた。それはおそらく、海に棲む巨大な魚の一匹なのだろうが、この魚は何を考えたのか、棧橋の一部を砕きながら跳ね上がったらしく、だがまたすぐに海の中へと消えていった。行動の意図が不明のため迂闊な動きはすまいと足を固め、すると程無くして宙に散っていた木片と海水が落ち、露になった事実硬直が下から昇り、全身へと伝播する。

闇霊、三頭蛇の魔人の姿が無かった。隠れる場所の無い棧橋で、どこにも居ないのであればあとは海の中にしかその所在は有り得ないが、それにしても単に落下した訳ではないだろう。どうやら彼も、食べられてしまったようだ。

逃げるなり、何か行動を起こすべきなのか、留まるなり、何も起こさぬべきであるのか。次々に浮んでは沈む案を捉まえられず、突けば今にも尻餅をつくような震える足腰で、不死人はその場にずっと留まっていた。その時間の始めから、結局行き付く答えは堤防の上で迷っていた頃と同じ、と理解はしていても、あれほど強力なダークレイスが



一瞬にして消えて無くなったという理不尽さにはそう面と向かつていられるものではない。

そうして無益な、だが気を静めるのに必要な時間を潤沢に消費し、不死人は息を一つ大きく吐く。それからエストを飲んで傷を癒し、それで気を取り直したつもりになって歩き始める。だが。

棧橋の一部が三頭蛇の魔人と共に消失し、陸地への道が断たれた今、不死人がするべき三本目の棧橋へと続いている小船達を渡ることだが、いざその前にまで行くと、先程と全く同じ症状が身体に現れていた。

なにしろいくつか連なった小船の下には金のタコ達が脈動し、また銀の魚達がまるで飛び交う火花の如く素早く左右へ泳ぎ、そして頻繁に不死人に視線をやっている。あくまで心を失っているため、それを恐怖と形容するのが正しいかどうかは分からなかったが、なんと言いつい訳しようと結局足は竦んでおり、無理に渡ろうとすればつまらないミスによつて簡単に水没するだろう。

いつそ三頭蛇の魔人の手に掛かった方が。そのような考えまで転がり出る始末であつたが、それは単に恐怖に屈したが故の戯言ではない。亡者や敵対者によつて斃された方が不死者としてはありふれた死であり、そこで記憶や所持品、ソウルなどを失うとしてもまだ立ち上がることは叶うだろうが、魚達に食われる、となつてはそこから先が

どうなるのか、想像がつくものだろうか？ 気付いた時には怪異の仲間入り、ということも考えられる。

渡る、という答えが出ているにも関わらず、そうした堂々巡りの思案に暮れ、また時間を浪費していた。そしてその益体の無い思考が五順ほどした頃、ようやく決心が足の方にも伝わり、震えも落ち着きを見せていた。

一つ目の小船に移る。黄金の肌が小刻みに波打つ軟体動物達は、古代における海の怪物の象徴が如く、あの大きなガレー船ですら容易く飲み込めるほどに触手を広げながら漂い、だが自らの上に立つ者を眺めるばかりであった。

二つ目の小船に移る。その横などでは、タコ達と同程度の大きさの魚達が光を眩しく反射させながら泳ぎ、深い渦をすら起こしていた。この際喰われる云々は置いておくとして、しかしあの速度と質量はそれだけで人の手に負えない脅威であり、万が一小船に向き、気紛れに衝突すれば転覆するのみならず、その上に乗る不死人を引き裂いた後、海に落下して尚、彼等によって細かく千切れるまで轢かれ続けるだろう。

三つ目の小船に移る。そのような巨躯を持つ彼等だが、犇きながらも不思議とぶつかり合うことはなく、また時折見せる身体同士の隙間の奥には他の生物の姿があり、更にもその下にも巨大な怪異たちが蠢き、海の深さに際限は無い。

四つ目の小船に移る。僅かな揺れ。ほんの少しエラの勢いを強めるだけで小人の乗

る小船は逆さになるものだが、彼等はそのようなことはしなかった。昏い海の中で静かに待つばかりであり、ただ、ふと見た触手の蠕動は、引き込み、誘うような印象があった。

五つ目の小船に移る。海の者達はおそらく、本質的に悟っているのだろう。いずれは全てが、彼等の元へやって来ることを。

そのように下にばかり向いていた視線を、前に向けると短く跳躍し、三本目の栈橋の上に至る。先客は網に絡まり、死んで溶けたように形の崩れた無数のクラゲ達であり、それらが向ける濁った目玉は腐臭、病の媒介を思わせるため、自然とそこから身体が遠ざかる。それでなくとも足元では頻繁に巨大な生物達が横切っており、出来る限り早くここを立ち去ろうと不死人は歩き出し、橋の先端に向かう。

そうして遂に栈橋から陸地、岩で固められた護岸の上に移る。高い木製の柵が設置されているためまだそれより内側には入れないが、そこには不死の拠り所、篝火があった。腰を降ろし、燻つたような弱い火で身体を治癒しつつ、同時にエストの量も回復させる。出来れば心とはまた別にある、臓腑に刻み込まれた海に棲む怪異達への本能的な脅えをも時を掛けて癒し、そうまでしてこそ万全な状態であるのだろうが、篝火の側とは言えまだ海は近く、それこそ気は休まりようもない。不死人は早々に立ち上がってまた歩き出し、一本道の護岸を南に向かって進み始めた。

## 第15章 6

## 第15章 漁港 6

かつての人の営みの名残、先を行く轍は岩の道の上にとこまでも伸びており、これを辿れば出入り口の一つでも見付かりそうなものだ。と決めてかかつていたが、しばらく追いつけるとそれは唐突に右に折れ、柵の下へと消えてしまっていた。よくよく観察してみればその部分の柵は他とやや材質が異なり、まるで補強された跡のようになっていたが、それで思い返したのは東の居住区にある、閉ざされた扉であった。

どちらにせよ向こう側から荷物が積まれているため、この扉は開く術などないものだが、探索の大まかな方角がこちらで合っていることへの証のようにも見える。この漁港を去るための出入り口が付近にあることを期待しながら不死人は更に護岸の南を指して歩き、すると少し行つたところから景観に若干の変化が生まれていた。

その不穏は足元にあつた。道の脇に積まれたクラゲ達の死骸、その向こう側にある海面にそれまで不死人に常に付き纏つていた怪異達の影が無く、底の見えない昏く深い海だけがある。それが解放を意味するのならば良いが、何らかの先触れ、例えば小魚の群れが道を譲るようなものであるならば。

突如として、下からの強い振動が立ち昇る。荒く波打ち、護岸に碎かれてはまるで不  
死人を捕らえようと潮は高く跳ね上がり、それを見て思わず後退った直後、海原から更  
に巨大な飛沫が咲く。

そうして深いところからやって来たのは、護岸一帯と全長を同じくするような、途轍  
も無い巨躯のクラゲであった。金のタコ達ですら捕食対象と見えるほどのこの生物は、  
外周から突き出した節のある丸太のように太い足を護岸の上に乗せ、濁った目玉  
は不死人の方へと向いているが、瞼のような皮膚は半開きであり、それを見たところ  
意志の確認など出来ない。

前例に倣うのならあまり刺激せず、見逃されることのみを注力すべきだが、この怪異  
は不死人が何もせずとも足の一本を高く振り上げ、護岸に叩き付ける。攻撃と呼ぶには  
あまりに狙いが稚拙であり、予備動作も大きいことから避けるまでもなかったが、その  
次には眼前にまた別の足が突き立てられる。

直撃すれば頭から割り碎かれるほどの威力は不死人に余波を伝え、その感触から引き  
下がろうとするも、更に別の足が背の方で護岸に叩き付けられたためその場に留まり、  
だが頭上で長い影が起き上がったため、それが打ち下される前に前方へと飛び込む。や  
がて巨大クラゲは海に浮んだまま、回転しつつ何十もある足で次々に護岸を叩き、それ  
こそ狙いを付ける必要すらない。

出鱈目に振り下されるクラゲの足を避けるべく、不死人は揺れる岩の上を動き回り、凌ぎながら、巻き上がる微細な粒子を目にして一つの懸念が膨れつつあった。

この護岸は人の手によるものである。漁港を運営するためにと作られたものであり、間違つても怪異と戦う際のことなどが設計に盛り込まれる筈も無く、然るに、耐久性についてそれぞれ相応のものでしかない。

巨大クラゲが突き刺した足が岩の一部を穿り、海に掻き出していた。つまりこの足場の上で戦うのはごく不利であり、移動出来るならそうした方が良いものの、護岸の造りは全て同じであるため北の方に戻つたところで意味は無く、まさか木で出来た栈橋に移る訳にもいかない。この敵を斃すとして、早期に決着させなければ護岸を全て削られ、海中へと連れ込まれることになり、だが激しく打ち据える足の動きは大きく、容易に捉えられるようなものではない。

それどころか、巨大クラゲ本体のゆつたりとした回転そのものはずっと同じ速度ではあれど、足の動きにはまるで秩序が無く、乱雑であるため回避するだけで手一杯、詠唱の隙も無い。出来ることと言えば足の打撃の合間を縫つて、斬撃を一つずつ与えていくことか。

右手に見える足が打ち降ろされるのを待ち、それが岩を叩き、また持ち上がると同時に頭上から落とされた別の足から逃れつつ前に転がり込み、奥にある足の一本が未だ予

備動作に無いことを確認してからその下に入り、更にその向こうにある足が護岸を刺した瞬間、ロングソードの銀光が放たれる。

ただ一度の攻撃を試みるだけでいくつもの手間が必要であったが、しかしようやく届いた剣が返す感触は、まるで鉄を叩いたかのようであった。元よりこの種のクラゲの足は柔らかな胴と異なり、針金のように硬いため、溝の溜まり池ではこれに足を貫かれたことすらあつたが、それが巨大になれば最早、剣で斬りつけても傷一つ付いていない。

予備動作。頭上の足に貫かれる前にそこから飛び退き、また次々に迫る足を避けながら方策を検討し始め、だが早くも行き詰まり、護岸から転がり落ちる岩に自身の行く末が重なる。

巨大クラゲは不死人がそれまで目にしてきた生物の中でも特に身体の大きさに優れる対敵であり、単純な質量だけで言えば、アリーナの王ですら及ばない。故に体高があるためその時点で近接攻撃が届き辛い、そもそも回り続ける本体は海上にあり、そこから護岸に向けて硬い足を長く伸ばしている状態にあるため、足以外はどのようなと剣の間合いに入らない。

長い足がまた護岸に突き刺さり、岩の一面が音を立てて崩れ落ちる。時間に慈悲など無く、策を生み出せようが出せまいが終わりが迫り続けており、多少強引であれ何かの行動に出るべきである。或いはその、無謀を呑むという条件が取っ掛かりであつたか、

いつそどうにか海に浮ぶ巨大クラゲ本体の上に移ることは出来ないかと思案を始めるも、やはり体高があるためそう易々と叶うものでもない。

せめて詠唱の時間だけでも得られればやれることは増えるものの、その隙は見当たらず、と、そのように考えていたとき、まさに巨大クラゲは足を宙に置き、同時に身体の回転も徐々に収まり、そのうち停止していた。障害は一切無くなり、この時間にどのような魔法でも詠唱出来そうではあったが相手は怪異。この沈黙を不気味なものであると捉えていると、やがて円形の胴体は海水にやや沈み込む。

現状の高低差であれば敵の上に飛び移るのも不可能ではなく、ただ濁った目玉の視線は無視出来るようなものではなく、射抜かれたまま動き出せずにいると、やがて的との高さを合わせた巨大クラゲは身体の縁を虹色に発光させ、次いで目から一条の光線が放たれた。

それは横合いに飛んだ不死人がその直前まで居た護岸を薙ぎ、切り出された岩がごっそりと転げ落ち、海が泡立つ。貫通能力が特に強い、怪異達が放つ光線。おそらく万が一それに直撃すれば盾の防御など無きに等しく、一撃で消し飛ばされる見込みが高いためこの迎撃があつては本体に飛び移るところではない。その上足で打たれた時よりも護岸は大きく崩れており、残された時間は更に減少したと見るべきだろう。

その後、巨大クラゲはすぐに浮き上がって足を上げ、綻びが顕著な護岸を再び叩き始



める。不死人とてそれから逃げ回らなくてはならず、左から順に打ち降ろされる足の下を駆け抜け、或いは足と護岸の間を滑り込み、だがいつまでもそうしているだけでは、一向に打開策は生まれなかった。

唯一好機らしいものと言えばあの光線を放つ直前の瞬間だろうが、凄まじい勢いで迸る光の源の方へ飛び込もうとすれば直撃は必至であり、避けながら魔法を詠唱するのも難しい。

ただされるがまま、巨大クラゲの足から逃れようと飛び跳ね続け、護岸は崩れる一方にある。そのうち円形の胴はまた海に沈んで低くなり、それは光線の照準を合わせるために必要な動作であったが、この時にもまだ不死人は何の対策も見出せずにいたため、ただそれを避けることに意識を傾ける。

そして濁った目玉が指し示した虹色の軌跡は、しかし標的の居る場所よりも遙か右方向に一度留まり、それから護岸一帯を一気に薙ぎ払った。

それは徴のジュリアスが放ったものと同質であり、即ち、目標に命中してすぐ威力を発揮するものではなく、一拍置かれた後、なぞられた箇所から順に護岸の上で小爆発が起こる。不死人はその光線から引き退がり、だがいかんせん足場は狭く、柵に張り付きながら盾を翳し、巻き上がった薄紫の硝煙から身を守る。

衝撃に見舞われるもそれによる負傷は浅く、しかしエストで回復する内に巨大クラゲ

はまた高く浮き上がり、足を伸ばしては護岸を延々と叩き、それはおそらく、不死人が屈するまで続く。

両足は脆くなつた岩の上を駆け続け、頭では対抗策が巡り続け、だがそれらしい契機は訪れない。しばらくが経つとまた巨大クラゲが沈み、目玉から貫通性の光線が発射されるが、不死人はそれを避ける以上のことは出来ず、岩が海中に落ちていく様子をただ見詰めるばかりであつた。

## 第15章 7

## 第15章 漁港 7

時が差し迫っている。この際、巨大クラゲの上に飛び移れるのであればその後のことは全て後回しにするものとして、その助けになるものが無いか周囲を見回すものの、目に映るのはせいぜいクラゲの身体、足、渦巻く空と海、そして轍の残る護岸くらいのものであった。

轍。その異音は、密かに混ざり込んでいた。

車輪による跡は棧橋の方から一直線に護岸の上に描かれていたが、記憶を辿るにそれは封じられた扉の中へと消えたきり、不死人が今居るこの周囲には本来存在しなかった。ならば今日に留まるそれは巨大クラゲとの戦いの最中に生まれたものであり、そして粗暴に打ち込まれる太い足では残せるものではない。

これを皮切りにすべきことが見えてくると、丁度巨大クラゲは足の動きを止め、身を沈ませたの立つ場所、よりも右の方角にその瞳を向ける。その直後には虹色の怪光線が放たれ、同時に不死人は駆け出し、塔のカイトシルドを前面にしながら護岸の縁を蹴り、大きく跳躍していた。

これを愚かな選択と言う者が居たとして、反論の余地は無い。いくら護岸が削りに削られ、残り時間が僅かであったとしても賭けに出るには未だ確証が不足しており、その無謀な行動の代償として不死人は空中で虹色の光線の一薙ぎに遭い、だが貫かれず、小爆発が盾の表面で起きるのみであった。

貫通するものと小爆発を起こすもの。同じ光線であっても威力の現れ方が二種あり、前者は防御不可であつても、後者はそうではないらしく、事実それを受けた護岸は轍のような痕が残るのみに留まつている。その結果、不死人は光線の一部を受け止めながらも跳躍した身体は勢いを失わず、そのまま巨大クラゲの上に落ちる。

柔らかな足場は崩れかけの護岸よりも不安定であり、起き上がるにも一苦勞であつたが、クラゲの長い足のいくつかが持ち上がり、一度宙を指した後、自身に乗り上がった異物を追い始めたため、姿勢や格好がどうの、と言つている場合ではない。這う這うの体で駆け出し、円形の巨体の中心部を目指す。

それでもクラゲの足がやって来る方が遥かに早く、不死人は背後に落ちる影を頼りにそれを回避しながら走り続け、だがようやく辿り着いた場所には濁つた目玉が見えず、それは今まさに二枚の脛のような皮膚で完全に覆われようとしていた。

多くの生物にとって目玉とは弱点の部位でもあり、この巨大な生物を斃すならこのような場所に狙いを付けなければ途方も無く、是が非でも届かせなければならぬ。その

ように意志を硬くさせた不死人は振り絞った気力を足腰に込めて走り、最後には倒れ込む様にしながら、ロングソードを睨が閉じていく目玉に突き刺した。

剣の先が半透明の粘膜に刺さり、またそれに反応してか、巨大クラゲが強く痙攣を起し、だが刀身はそこで止まっていた。睨は遂に閉じて目玉を守り、そして魔術師のロングソードを横から挟み込み、不死人がそれ以上押し込もうと、全く動く気配を見せなかった。

千載一遇の機会を、と悔いが湧き上がると同時、背後では何本もの足が持ち上がり、瞼の方へと倒れ込もうとしていた。そのままではいれば砕かれ、肉片になって埃払いをするように海に棄てられるのが目に見えているが、巨大な足の質量は大きく、その上硬く、打ち降ろされるそれを止める術など皆無である。

故に不死人は突き立てられたままのロングソードに向き直ると、背負っていた聖職者のウォーハンマーを取り、両手で振り上げたそれを剣の上に打ち込む。

直後にまた地震、巨大クラゲの痙攣が起こる。鳴き声などは無いが痛みに悶えているらしく、それによつて足の動きも一時的に止まり、だがまたすぐに動き出そうとしていた。つまり手を休めてはならないのだろう。不死人は息を大きく吸い込んで力の限り槌を打ち込み、痙攣が起こつて直剣が深く刺さるとまた深く息をして得物を振り上げ、動作が反復する。

それは決して無意味な行動ではなかっただろう。実際、これによって危機は遠のき、だが段々と目玉に埋まっていくなかに柄の部分にまで達しようとしており、それ以上は上から打ち付けたところで、巨大クラゲに効果的な苦痛を与えることは期待出来なかった。何か別のやり方を考えなくてはならず、しかしウォーハンマーを振り上げ、やや体重が反っていた瞬間、足元がこれまでの痙攣とは比べ物にならないほど強く揺れ、不死人は転倒する。

危うく巨大クラゲの身体の方の端の方にまで転がりそうだったところを踏み止まり、聖職者のウォーハンマーを背に戻して空いた手でロングソードの柄を掴んで留まる。おそらく敵は本格的に不死人を自身の上から取り除こうと巨躯を激しく揺らしており、下手に身動きを取れないため収まるのを待とうと姿勢の維持を計るが、これを激しい動きであると感ずるのは小人の方のみであったか。

身体の真横に、長い足による打撃が打ち込まれていた。巨大クラゲは身体を揺らしながら、且つ足を使った攻撃を継続出来るらしく、ただ身体を支える剣を掴んだきり、手も足も出せない不死人とは対照的である。今の攻撃は運良く外れたものの、今後もそれが続くなどとは思えず、だが剣を打ち込む姿勢を取れず、また仮にそうなったとして、最早剣は殆どが埋まっており、それ以上は打ち込むだけの余地が無かった。

よって魔力は、不死人の詠唱によって剣に注ぎ込まれた。より効果的に攻撃するので

あればソウルの大剣などが望ましいが、今はとにかく時が惜しい局面。詠唱最速のソウルの矢が、瞼の奥で炸裂する。

直後、不死人に迫っていた足が外側に向かつて強く伸びる。それこそは効果の証であり、ならば反撃の隙を与えまいと不死人は連続してソウルの矢を詠唱し、その度に巨大クラゲは益々暴れ、無数の足が天を指し、踊り狂う。

そしてそれを十ほど繰り返し返すと突然クラゲの目は見開かれ、足は萎えて落ちるが、まだ勝利に浸る時間ではない。不死人は透明な粘液が溢れる目玉から直剣を引き抜くと、傾いていく巨体の上を駆け走り、端から跳躍して護岸の上に着地する。

一つの怪異が死ぬ。力尽きた巨大クラゲは海に沈みつつあり、だが遠くの方ではこの敵と同じ大きさ、姿形をした者達が海上を占領し、狩り尽くす事など、到底出来ることではない。

もう元には戻らないのだろうか。

## 第16章 1

## 第16章 中央広場Ⅲ 1

完全には水没せずに、半端な状態で海に浮ぶ死骸となった巨大クラゲの横を通り抜け、護岸の南端に辿り着いた不死人はそこに地下道への入り口を発見する。それは扉も窓も歪み、半壊しており、所々道を狭くはしていたものの、通行の妨げになるような箇所は無く、暗くなった足元に一応気を払いながら歩き続けると、程無くして鎖で吊るされたリフトがあり、そこが行き止まりであった。

その上に乗ってスイッチを押し、稼動したリフトで登った後、近くにあった扉の内鍵を外して潜り抜けると、そこは何度も通った場所、牢に閉じ籠もる男が居る付近であった。どうやら、漁港を経由して周壁の中に入り込んでいたらしい。

この様変わりした世界ではどうか、という懸念はあったが、牢に近付いてみたところ男は少なくとも姿形に変わりはないらしく、不死人は牢獄都市よりも下の階層で見付けた、黒い皮で装丁が作られた本を荷物の中から取り出し、鉄柵の内側に差し入れた。

それに気付いた男は一度不死人を見やるも、やはり何も言わずにまずは本を手に取る。項をめくる顔などは何を思わせる表情でもなかったが、目にはどこか瑞々しさがあ



り、それは出会った頃には見られないものであった。

「躊躇無く踏み込むのだな」

本に視線を落としたまま、男は空笑う。

「恐ろしくはなかったのか？ いや、愚問か。それに、所詮人は闇。それを知ってさえいれば、か」

まるでそこに篝火か、或いは昏い穴でも存在しているかのように、男は足元を見詰めたまま眩きを続ける。

「それは、あの闇の魔術書を渡されてから、ずっと考えていたことでもある。人間性とはどう付き合っていけば良いのか、恐ろしくともしがみ付くべきかと。結局、その問いについての何も答えは出なかったがな。ただおそらく、人の理性、感性、創造性、そして矛盾などはあまりに奥深く、それは海に似て底無しが故に暗く、よって人間性は闇なのだろう」

顔を上げた男の瞳には、何らかの意志が入り込んでいるように見受けられた。その正体までもをそう易々と計り知ることは出来なかったが、口の端を吊り上げただけの笑みは皮肉が込められながらも、どこか穏やかな印象があった。

「内容はまた伝えよう、ただし、引き返せるとは思わないよ」

その言葉に不死人が頷いた後、男は深い海の物語を語り始めた。そして一定量のソウ

ルと引き換えにいくつかの術を得たあと、中央広場へ降りる為のリフトへと足を向ける。

「闇に触れることが契機になるとは、聊か不穩ではあるが、私は、何かを取り戻せたのだと思う」

返事などはせず、リフトは降りていく。人によつては、男の言を下らぬ諧謔と笑うだろう。何故なら引き返せないと言つた本人もそれは同じことであり、やれることと言えばせいぜいが取り戻したものを抱え、忘れぬ内に死ぬことだろうが、それさえ世界が怪異に飲まれてしまった今では望めるものではない。それでも前向きに捉えるなら、まだ何かが間に合うかもしれないと、そのような希望が込められていたのだろうか。

間も無くりフトが下まで降りると、正面にある扉を開けて石畳の中央広場に出る。

「るう〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃うっ！」

「う〃お〃お〃お〃うっ！」

「るう〃お〃っ！」

「う〃お〃お〃お〃お〃お〃うっ！」

「るう〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃お〃うっ！」

いくつもの家屋が砕かれ、蹴り飛ばされ、昏迷の空の下、壮絶な咆哮が重なる。

真つ青な、青ざめた肌の巨人達。深い海に適応した形貌の彼等は、巨大な錨のような

武器を手にも中央広場へ入り込み、同じくそこに到着したばかりの不死人を見付ける。その巨軀は五つ。これを見ては最早、疑うべくもない。

この世界は今、終わろうとしていた。

「るう」お「うっ！」

先頭の一匹が駆け出すと同時に、不死人が手に取った得物は聖職者のウォーハンマーであった。この媒体で扱える術の殆どは詠唱に時間を要するものばかりであり、即応が求められるこの状況には不向きだが、それはこれまでの話。今しがた牢に閉じ籠もる元聖職者の男から得たものがあり、その中の一つを詠唱し始めると、それは瞬時にして黒い塊を飛び立たせ、敵に命中して氣勢を削いだ。

ソウルの共鳴。特に獄吏たちが多用する、奇跡の触媒によって行使する闇術であり、威力、衝撃力、詠唱速度、そして飛翔の速度に優れるこれは闇の玉の上位となる術と言える。

不死人はこれを敵集団へと連続で飛ばし、牽制とダメージの蓄積を狙う。が、少し強い程度の術を使えるようになったからと言って、青ざめた肌の巨人は五匹。押し留められるような暴威ではなく、嘲笑うかのように彼らの口が伸縮し、歪むと錨を前に翳しながら、ソウルの共鳴を防ぎつつ一斉に走り出した。

「っ」あ「あ」あ「あ」お「っ！」

唾液を撒き散らしながら叫び、青ざめた肌の巨人達は飛び掛る。剥き出しのピンクの歯茎たちが視界を押し潰さんと迫るその刹那はまさしく悪夢であり、しかし立ち向かう不死人はそこへ向けて駆け、互いの距離が消失した瞬間に股下に滑り込むと足の横や石畳を粉碎する錨の側を通り抜けながらそのまま走り続け、背後に抜けて敵集団との距離を取る。

間一髪、命脈を保ち、だがそれは意味のあることだったのだろうか。彼らのごく単純かつ圧倒的な暴力の前では策や立ち回りに工夫を凝らした所で踏み潰されるのが目に見えており、またこの場からの逃走を計ろうにも相手の方が早く、首尾良く狭い家屋に逃げ込んだとして穿り返されるだけだろう。

それでも不死人は隙を見ては詠唱し、ソウルの共鳴による攻撃の手を休めなかったが、周壁の正門の方に五匹一箇所に集まり、その場に押し留まっている青ざめた肌の巨人達はやはり錨を防御に使っているため負傷は無く、直に敗北がやって来る、という命運に綻びなどは見出せなかった。

そしてまた、巨人達の口が歪む。一様に錨の先を石畳に深く打ち込み、足を踏み締めたかと思うと次には得物を持ったままの腕を力一杯振り抜き、その瞬間勢い良く覆った地面から無数の石塊が生まれ、不死人に向けて飛び散った。

回避など、それが可能な空間はこの中央広場のどこにも存在しなかった。足を固めて



ず、どうにか瓦礫から抜け出すか、それか先にエストで身体を治癒させようとするも、現実に出来ることは皆無であり、許されることと言えば祈ることか、呪うことくらいのものであろうか。

## 第16章 2

## 第16章 中央広場Ⅲ 2

「うおおおおおおおつー！」

勇壮な響きは、巨人達の向こうからやってきたものであった。その喊声に振り向いたのは五匹のうち四匹。端に居た一匹は右足の膝から下を斬り飛ばされ、仰向けに倒れた直後、首を刎ねられていた。

これを成したのは特大剣、ツヴァイヘンダー。持ち主はかつて不死人がリングレイに着いたばかりの頃に出会った、丸みを帯びた甲冑の騎士であった。

「カタリナの騎士、ジークドルフ！ 助太刀するぞ！ 掛かって来い化け物ども！」  
いくら不意打ちであったと言え、巨人の足や首を一撃で両断するなど人外の膂力であり、おそらくソウルの業を身体能力の向上に注いだ彼は青ざめた肌の巨人達によって脅威と見做され、またよく通る大声によって注目を集めていた。両者は間合いを保つたまま対峙し、そしてその間に不死人は弾みをつけて左手を持ち上げ、遂にエストを飲むと瓦礫を跳ね除け、立ち上がる。

敵はまだ、あの騎士に向かって攻撃を仕掛けてはいなかった。仲間の一匹が瞬く間に

斃されたためか、青ざめた肌の巨人達は慎重な足取りでジークドルフとの距離を詰めようとにじり寄り、だがその行動は大きな遅れを呼び、無防備な背を、ソウルの共鳴が襲う。

高速で飛行する黒い塊が青ざめた肌の上で弾け、強い衝撃を齎し、それは致命傷にまでは到底及ばないまでも、攻撃を受けることによつて不死人が復帰したことを彼等に気付かせた。次には前後の攻撃対象のどちらを向くべきか迷いを見せ、だがそれをすぐに決着させると三匹が振り返り、残り一匹が騎士の方を向いたままだった。数を偏らせることで一方を足止めし、もう一方を迅速に始末する腹積もりなのだろう。

ならば不死人の役目は味方を信じ、耐えることである。右手の武器を聖職者のウォーハンマーから持ち替え、魔術師のロングソードを構えて詠唱。剣の腹で塔のカイトシールドの縁を叩き、闇の盾を付与した後、牽制の闇の玉を放つていく。

また敵が石塊の砲弾を撃つてくれば、とは考えないこともなかった。しかし数が三匹にまで減った上、物理攻撃に強い闇の盾があれば凌げるとまでは言い切れずとも、騙しでどうか時間を稼ぐ。そのつもりで三匹に向かって魔法を撃ち続け、だが一匹が不意に走り始め、距離を大きく詰める。

一見して直接攻撃を仕掛けるようにでいて、掬い上げの錨は遠く、そして先が地面を深く抉っていた。青ざめた肌の巨人は接近しながらの石塊による攻撃を狙うらしく、これ



に対して不死人は斜め前に長く突出し、振り上げる錨と飛散する石塊の射角から逃れる。そうすることで闇の盾を使わずに敵の攻撃をやり過すことに成功し、だが遠くから、巨大な影が飛び上がった。

「るう」お」あ」っ！」

跳躍しながら、今度こそ直に殴りかかってきた二匹目の錨に対して身を横に投げ出して躲した直後、間髪入れずに三匹目の跳躍攻撃が訪れる。武器を振り振りながら青ざめた肌の巨人は宙を飛び、それに合わせて不死人は前に駆け出し、下を潜り抜けるも、敵はここで息をつかせるつもりはないだろうと即座に振り返り、だが三匹は動きを止め、不死人ではない、どこか遠くの方に顔を向けていた。

目の無い彼等に見るといふ言葉は当て嵌まらないだろうが、とにかく意識を向けていたのは、騎士とその足止めを引き受けていた一匹の巨人の方角であった。否、そこにいると言えるのは今や騎士のみであり、青ざめた肌の巨人は崩れ落ち、石畳の上で軀を横たえている。

「はっ、はっ、はあーっ！ 見たか化け物ども！ 今更命乞いしても容赦はせんぞ！」

三対二。数の差が埋まりつつあり、見え始めた勝利の兆しにジークドルフの意気は高揚しているようだが、それとは対称的に青ざめた肌の巨人達に動揺する様子などは見られず、三匹は速やかに二と一とに別れると、二の方を騎士の方へと差し向ける。

役割が入れ替わり、不死人は対峙する一匹との戦いを早期に収めなければならず、そして危険を冒してまで大して縁の無い己への助力をした彼に、全力を以て応えるべきである。遠ざかっていく二匹を尻目に眼前の敵を見据えて剣と盾を構え、しかし自身の内部で高まっていく戦意とは裏腹に、構えるだけに留まり、機を待ち続ける。

やがて青ざめた肌の巨人が錨を地面に突き刺し、走り出した瞬間に不死人もまた石畳の上を疾駆。迫り来る超重量、掬い上げの鉄塊に闇の盾を湛えた塔のカイトシールドを打ち当て、弾き返した。

「ごうっ！」

呻きながら巨軀が大きく怯み、晒した無防備の前で不死人は魔法を詠唱。形成されたソウルの大剣を上に向けて大きく薙ぐと、青ざめた肌の巨人は胸元を大きく斬り裂かれた。たたらを踏み、後退しながら傷を手で覆い隠すものの、そのあまりの大きさに血はとめどなく溢れ出し、視界を阻害するほどの濃い靄になると遂に膝から崩れた。

二対二。数の有利不利が消失。押し留める者が不在となった今、不死人は二匹を相手取っているジークドルフの元へと駆け付け、片方の巨人が背後に迫った危機を察知して振り返るがそれは既に手遅れであった。顔に向けて囀の闇の玉を放ち、敵がそれを錨で防ぐと同時に詠唱、青く巨大な大剣が注意の疎かになった足元を浚う。

「おおおおおおおうっ！」

轟いた怒号はツヴァイヘンダーの一撃と共に放たれ、それを受けた巨人の片割れは片足を両断されていた。それは不死人のソウルの大剣の攻撃とほぼ同時に、乃至はそれによつて相手の注意が逸れた瞬間に行われたことであり、双方の巨人はぶつかり合い、手足や錨が絡まりながら仰向けに倒れていく。

そしてその下では、二人の不死の戦士が敵の首元が近付いてくるのを待ち受けていた。不死人は落ちてきた喉を魔術師のロングソードで一閃、斬り破つて致命量の出血をさせ、ジークドルフは豪快に、上段から特大剣を叩き込み、敵の頭部を斬り飛ばした。

そうして青ざめた肌の巨人達は殲滅され、それは始めの苦戦を思い返せば信じられないようなことではあったが、匹敵したことそのものについて驚くよりは、これを実現せしめて当然の実力を持った屈強なこの騎士が居合わせた幸運こそ、嘯み締めておくべきか。

「ああ、何故ここに居るのか、か。確かに一度は去つたが、今世界に波及していく怪異はこの地から、ああ、いや、待て」

大方の予想通りの話であつたため、それが折れることについては何も問題はなかつたが、そうなる理由については問題しか無い。警戒心を露にするジークドルフの両目は空を向いており、不死人もそれに倣うと、遠く、礼拝堂の上辺りの方角に暗雲の塊が立ち込めていた。

## 第16章 3

## 第16章 中央広場Ⅲ 3

それは黒く、だが褐色がかったような色をして蠢いており、単なる闇ではない。そして緩やかに飛び続けて中央広場の上空にまでやって来ると、その中から地上を覗き込む、黒く、巨大な顔を見付ける。大きめの目玉や顎、鋭く並んだ牙などは邪悪な面構えではあれど普遍的な魚類のそれであり、やがて巨大なその魚は滑り出るように暗雲から抜け、その全体が露になる。

黒い部分は顔周辺のみであつたらしく、蛇のように長い胴は半透明であり、しかしもう一度顔の方に目を向けると、それ以外の全てが些事であつたことに気付く。魚類の顔の、そのまた上にも顔の上半分が乗っており、太い眉と、白髪に覚えがあつた。

そちらの部分にはまだ正気が残っているのか、哀れなクリステイアンは心底戸惑っているかのように忙しく両の眼を動かし、そのうち不死人とジークドルフの姿を見付けると、何度も眉根を寄せ上げ、助けを訴える。

「これは。元より逃げるつもりもなかつたが」

捨て置くことは出来ない。言外のそれに同意を示すまでもなく、不死人は武器を構

え、騎士もまたツヴァイヘンダーを握り直す。

一方、哀れなクリステイアンは暗雲の下、青ざめた血の中を悠々と泳ぎ、回遊していた。互いの距離がこれでは近接攻撃どころか魔法すら届くか疑わしいものであったが、この敵はおそらく二人に仕向けられた者。自ら行動に出る理由があり、待ち続けていると突如として顔を不死人の方へ向け、激しく身体を波打たせては急激に加速した。

大きく開かれた顎は勿論のこと、長い舌の上にさえも鋭い歯が隙間無く伸びており、喰らいつかれるにせよ飲み込まれるにせよ、敵の思い通りとなつては助かる見込みは無い。凄まじい勢いで迫る巨大質量を持った深海魚の顔面は比類無き威圧を見せ、不死人はこれを十分な距離にまで引き付けた後、急に横合いに飛び、躲す。

クリステイアンは摩擦する地面を削りながら石塊の飛沫を上げ、だが突進は外して脇を通過していく。またその際、至近距離にて半透明の身体を見ることになった不死人の目に奇妙なものが留まり、それは人間と同じ大きさ、色形の手と足であったが、枯葉のように千切れそうに巨大な胴に結びついていてだけで、彼自身の役に立つとは思えなかった。

哀れなクリステイアンはそのまま上昇し、一旦は遠くまで泳ぐものの、宙で身を踊らせるかと反転して再度加速し、今度はジークドルフの方へと狙いを定めていた。騎士の鎧は大きく、丸く、まるで太っているように見えるためどうにも鈍重な印象が残り、この

ままでは突進を凌ぐことが出来るかどうか疑問ではあったものの、不死人はまだ何の用意もしておらず、今からでは援護が間に合いそうに無い。

「フツ」

しかししいぎ衝突の瞬間が訪れると、カタリナの騎士は機敏に動き、どころか余裕を込めた微笑をその直前に置き、クリステイアンの突進を躲してみせていた。人を見かけで判断すれば大事に至ることがある、とは、最近では三頭蛇の魔人で痛感した不死人であつたが、それにしてもジョークドルフの素早さはまるでちぐはぐであつた。

ともあれ、まだ相手が本来の速度を見せていない可能性は残つてはいるものの、一先ずあの突進は対応が可能なものであると判断し、であればそろそろ反撃を、と思い始めた頃、それは起こつた。

「ひきいいいいいいっ！　　いいいいいいっ！」

頭上を回遊していたクリステイアンの鳴き声であつた。鳥類のようなそれが広く空に響き渡ると、褐色がかつた暗雲が呼応し、一層蠢き、そして何かを降らし始める。

「むむっ！　貴公、避ける！」

言われるよりも前に不死人は動き出し、落下する何かの塊を注視するが、暗雲は広範囲であり、そして数も多い。まさに雨を遮るかのように二人は頭を守りながら広場を走りまわり、やがて地上に落ちたそれが何であるのか、その正体が判明する。

褐色がかつたその色味は、腐敗が故のものであった。腐ったその塊、人の胴ほどに膨れ上がった魚達は、しかし生きているらしく身を震わせ、また半ばまではみ出した目玉が不死人を見詰める。

次の瞬間、魚は破裂していた。内部から大量の黄色い粘液を撒き散らし、咄嗟のことに避け切れず、右手の先にそれが付着する。

「うおっ！」

同じような目に遭ったのか、ジークドルフから当惑の声上がる。見れば鎧の関節の一部が固まってしまっているらしく、不死人の方も右手の指などが強い粘性で動きが阻害されており、幸いにもそれは拭えば取れる程度のものであったが、危機が迫った場合には致命的な遅れに繋がるだろう。

二人は家屋の影に隠れるなどして破裂する魚の雨をやり過ぎ、それが止むのを見計らって広場に戻ると、だがそうして下にはばかり意識を取られていたからか、いつの間にか哀れなクリスティアンの姿を見失ってしまった。

敵が姿を消した、ということとは奇襲を恐れるべきであり、だがあの巨体では隠れる場所など限られている。暗雲、腐った魚の群れにしかその居場所は無く、そのままにいると敵はやはりそこから滑り落ち、またゆったりとした動きで泳ぎ始めていた。

突進を警戒していつでも動きだせるよう身を屈め、しかしそうしたの是不死人だけ。

ジークドルフはどこか呆けたように棒立ちのまま、揺らめく黒い巨体を眺めていた。

「うーむ、何か変ではないか？」

呟きを向けられ、だがすぐには答えられなかった。確かに、今のクリステイアンは若干低い位置を泳いでおり、そこから突進したところであまり速度は得られそうにないが、それは明確な差異と言う程のことでもなく、ならばこの騎士は他の要素に違和感を見たのだろうか。しかし結果的には二人ともにそれを明確に出来ず、すると巨大な魚の顔が段々と地上を向き、その半透明な体内で無数の影が激しく舞う。

それこそが今までに無い何かであると、気付いたのも束の間。顎を大きく開いた哀れなクリステイアンは、身体の内溜め込んでいた魚達を勢い良く放出する。

「うおっ、おおおおうっ！」

腐った魚達はその生涯の最期をただの濁流として利用され、だが従属する者としては本懐なのだろうか。次々に殺到するそれから逃れようと騎士と二手に別れて走り出したが、どうも狙われたのは不死人であつたらしい。散々に引っくり返された石畳を乗り越えながら駆ける最中、延々と背の方で魚達が弾ける音が響き、せめてこれの役割が逆であれば魔法でクリステイアンを牽制出来ようものだと考えるものの、あれだけの筋力を誇るジークドルフにまでそれを期待するのは酷というもの。文句一つ漏らさず、走り続けた。



暗雲は無尽蔵のように見えたが、流石に一度に胎に収める分には限りがあったのか、魚の濁流は勢いに少し衰えを見せ始めるとそこからすぐに止まった。不死人もまた立ち止まって振り返ると、中央広場は茶の肉片と黄色い粘液で埋め尽くされ、汚れている、というより占領、浸食されている、と言った方が適切だろうか。

「すつ、すまん。何も出来なかった。ガツ、ガハハハハ、ハ」

この丸い鎧は、叩けばさぞ良い音が出るに違い無い。唐突に去来した妄念を拭い去り、哀れなクリステイアンに向き直る。敵はまた頭上を旋回しており、こちらの隙を探しているか、様子を窺っているため、対策を講じるならこの時間にすべきだろう。

思い返せば、この怪異は多彩な攻撃手段を持っているらしいが、いずれも決定力に欠けており、腐った魚の体液で動きを止め、突進などで止めを刺すという流れを実現するにはもう少し命中の精度が必要である。つまりここまでで相手の手札が殆ど出ているなら地上に居る二人がやるべきは諸々の攻撃を耐え続け、痺れを切らした敵が突進を仕掛けた際に、これを迎え撃つことである。

そのように出した結論はこれ以上無く理解し易いものであり、またジークドルフの氣質とも合っている。この案を選択するとして敵を迎えるつもりとなり、だが手札が尽きていたのなら、という前提は甘く、それについてももう少し掘り下げるべきだったろうか。

## 第16章 4

## 第16章 中央広場Ⅲ 4

身体を真つ直ぐにして泳ぐクリステイアンに異変が現れていた。何をする訳でもなく宙に停滞し、しかし微かに身を震わせ始めたかと思うとその動きは徐々に大きく、くねらせる程になり、そしてその胴から何かが剥がれる。

数十枚にも及ぶそれは胴と同じく半透明かつ、輪郭からして楕円形であるらしく、抵抗を受けてゆらゆらと落ちていく様は水中ならでの出来事であったが、次の瞬間には水中どころか、この異界と化した世界にさえ存在しないような強い光が生まれ、不死人と騎士を刺した。

「はぐっ！」

物理的な負傷は無い。だがそうであっても何ら不思議ではないというほどの圧力に騎士は呻き声を上げ、不死人は塔のカイトシールドで身を守ろうとし、だが翳した直後にふつとそれは消え失せ、今度は二人の周囲で泡のような虹色の光球が無数に生まれては弾けを繰り返していた。

どこからでも生まれてどこへともなく消えていく光たちはまた酷く歪み、捻れ、半ば

から絞られ、或いは刺すように一直線に走つてその形を自在に変え続け、そしてその後ろにある景色までも巻き込んでいた。遠くに聳える王城の尖塔も、渦巻く紫の空も、近くにある家屋でさえ掻き混ぜられ、目に映る一切が正常な形をしていない。

人の理の外にある、異次元の空間が生まれていた。

「なっ、なんだこれはっ！ 攪乱かつ?!」

ジークドルフはおそらく正しい。これはクリステイアンが撒いた鱗が生み出している光景であり、実際に異次元となつた訳ではなく、よくよく足元を確かめてみればそこは瓦礫こそあれ、基本的には平坦である。影響が及ぶのは今のところ視覚のみであり、そしてこれを仕掛けてきたのが敵であるなら、あの魚の目玉はこれを見分ける能を持っている。

脇腹の左が微かに引き攣れる。ともすれば錯覚のような曖昧なその感覚を信じて右方向に身体を投げ出し、するとその直後、不死人の側を哀れなクリステイアンが通り抜けていく。地面を扶えるようにして勢い良く泳ぎ、その後撒き上げた瓦礫諸共、巨体は虹色の光の泡の中へと消えていく。

懸念していたことであつた。鱗が生み出した光の狂宴、強力な攪乱の最中であつてはクリステイアンの位置が掴めず、どのような攻撃をどこからやって来るつもりであるのかまるで見当がつかない。先の突進は迫る圧力か何かを感知して躲せたものの、それで

さえ確かな感覚による行動であつたとは言ひ難く、他の攻撃方法になつた場合、回避の難度は跳ね上がると見るべきである。

「ひきいいいいいいっ！　　いいいいいいっ！」

鳴き声が劈き、暗雲の内側が揺れる。反撃の隙を与えないつもりか、先の突進から間を置かずにクリステイアンは次の行動を取り、一方の不死人達はまだ何の対策の手掛かりも見出せずに追い立てられるしかなかった。やがて降り始める腐敗した魚の肉をどうにか避けながら走り、しかしそれを凌ぐための家屋は踊り狂う光によつて歪められるため所在が判然とせず、またどれだけ時が経つても落ちた鱗から発生している光が絶える心配は無い。

「ぐむっ！　　ぶおあっ！」

結果、時折二人は魚の直撃を受け、一時的に身体の動きを止められてはその効果を齎す魚の内臓液を拭い去り、を繰り返していた。魚の雨を落とす位置は無作為であるらしく、足を止めても破裂する魚自体が集中することはなかったが、クリステイアン本体がこの隙を見逃す訳も無い。

「むっ！？」

ジークドルフが何かを探知していた。が、彼の全身は今、黄色い粘液に包まれており、このまま身動きが取れないようではただの標的と化すが、それとは対照的に不死人の身

体は今ほ自由であり、よって魔術師のロングソードに魔力が流れ込む。

間に合うかどうか、正しいかどうかは定かではなく、だが短く詠唱され、放たれたソウルのはきは宙を走り、丸みを帯びた甲冑、その足に直撃していた。

「むおおっ！」

粘液が剥がれ、足が自由になったジークドルフが石畳を転がり、鎧の内部で奇妙な反響の仕方をした音が転がり出たその直後、彼の側をクリステイアンの突進が通過していく。足を自由にするため足を攻撃し、万が一使いものにならなくなれば本末転倒であったが、流石の頑強さ、或いは鎧の優れた防御性能、といったところだろうか。見るに滑稽な造型だが。

「た、助かったぞ貴公、この借りは必ず」

言葉の後半は、殺到する魚の群れに押し流された。胎に溜め込んだ魚を一気に放出したのだろう、クリステイアンの砲は不死人に直撃し、全身は茶褐色の肉片と黄色の液体に塗れながらどこかへと連れて行かれ、そしてその勢いは強く、抵抗出来るものではない。辛うじて片手で地面を探り、天の方へと目を向けるも、そこにあるのは歪む光と空間であり、己の位置は勿論、距離が離れてしまったためにジークドルフの居場所も不明であった。

程無くして後頭部を強かに打ち付けながらどこかに止まり、腐敗した魚の波も引いて



も難しく、何より反撃が届かないため、騎士の言う通り、この先何度も同じような危機を乗り越えなければならず、そして何度も乗り越えられるとは限らない。

やおら、背筋に悪寒が走る。迫り来るクリステイアンの突進を躲し、遠ざかっていく魚の背が激しく屈折する光に覆われる様子を見ながら、また途切れた思考を再び繋ぎ合わせていく。

解の手掛かりは既に見えている。それは即ち音であり、これを味方にする事が出来れば、と考えるも、哀れなクリステイアンは泳ぐ際に音を立てることなどなく、位置を掴む手掛かりとはならない。ならば音が出るものを半透明の胴にでも打ち込めればと、所持品を漁ったところで音を出すに適したものは聖職者のウオーハンマーとそれに付随する聖鈴しか持ち合わせが無く、これを敵の身体に突き刺すには鉤爪の部分が短いため、とても実行に移せそうもない。

「うおあつー！」

ジークドルフが驚きの声を上げながらも、敵の突進を凌いでいた。それを見て味方との協力によって何か音を出す工夫を出来ないものかという方向に考えが移るものの、いつそのあの騎士をクリステイアンに丸呑みさせ、鎧を常に叩かせることで腹の中から音を出させるという危険且つ残酷極まりない案しか出ず、仮にそれが最善の選択であったとして、申し出るにはまだ親密さが足りていないだろう。

ジークドルフと協力して状況を打開する、という方向性ではそこで行き詰まり、だが果たして、この戦いの場に味方は一人しか居ないだろうか。それが閃きとなつて不死人を突き動かし、右手の武器を聖職者のウォーハンマーに持ち替えると、周囲の気配に意識を凝らす。

そのやり方で察知出来る範囲はあまりに短く、出来ることと言えば突進を紙一重で躲すことだけであつたが、この企図を成就させるにはそれで十分であつた。瞼を閉じて騒ぐ光を意識野から排し、かつての大气と同じように遍在する青ざめた血の流れを全身の肌で感じ取る。

首筋に視線。些細な針を突き立てられているかのようなその感覚に、振り返らず、身体の向きはそのままにして横合いに身を投げ出し、同時に右手を翳す。すると予想通り現れた哀れなクリステイアンは突進を当てられずにまた通り過ぎ、無限に反射する光の中へと消えていった。



## 第16章 5

## 第16章 中央広場Ⅲ 5

この後にまた、敵は好きな場所から好きな方法によつて攻撃を仕掛け、それはこれまで通り一方的なものになる。

「むっ!？」

そのルールを壊したのはたった一つの鈴の音であつた。体内に腐つた魚を溜め込み、それを遠距離攻撃として一気に吐き出したクリステイアンであつたが、その標的となつたジークドルフは直前に走り出しており、それも魚の群れに対してほぼ直角の方向であるため、直撃を躲せているようであつた。

鈴の音がまた鳴り続けている。それは聖職者のウオーハンマーによつて出ているものだが、その拍子は人の手を介したものであり、つまりは先程これを受け取つた哀れなクリステイアンの、人としての意志がまだ残っているらしい人間の形に留まっている手が握り、振ることで鳴っているものであつた。

戦いの流れがはつきりと変わっていた。だが魚の知能がどれ程のものであるかなど分からず、時間を掛け過ぎれば種が割れてしまう可能性もあり、よつてここからは一気

に片を付けるべきだろう。

同じ事を考えたのか、腐った魚の砲が止み、追いつてられることが無くなったジークドルフは鈴の音がする方へと向き、また特大剣を構える。不死人はその後方に立つと、魔術師のロングソードをいつでも詠唱出来るように構え、すると二人の間で打ち合わせする間も無く、乱れる鈴の音が近付いていた。

これ、という機は無い。頃合を見て詠唱を始め、音を頼りに敵の突進に先んじて闇の玉を放ち、直撃。その衝撃によつて迫る巨体の速度が減じることなくとも、芯が揺れ動く。

「うおおおおおおおおおっ！」

正面から、しかし敵の頭部の側面を捉えたツヴァイヘンダーの一撃は巨体の勢いを完全に狂わせていた。クリステイアンは一度僅かに浮き上がったかと思うと不死人の後方にて地面の中に潜り込もうとするかの如く転倒し、家屋や石塊を押し流しながら徐々に勢いを失くしていく。

その一方、剣を介して衝突の際の衝撃の全てを受けたジークドルフは大いに吹き飛ばされ、瓦礫の山にでも消えたか、その姿はどこにも見当たらず、また探している場合ではない。不死人は駆け出し、まだ横たわったままのクリステイアンに近付くと、その半透明で如何にも柔らかな腹に向け、直剣の突きを見舞った。

銀色の刀身が埋もれていく程、それを押し出そうとする透明な血や筋の動きなどが活発になり、しかしこの千載一遇の好機にて全力を發揮しない理由など無い。力づくでロングソードを限界まで突き刺すと、今度はそれを横方向へと長く動かし、半透明な腹を斬り破った。

色の定まっていない内臓が溢れ出し、またそれに反応してか、クリステイアンが身を振らせる。その動きは強く、死の際に反射的な動きを見せたにしては勢いが余っており、その内巨軀が起き上がると、また泳ぎだそうという意志を見せる。

ここで行かせれば、進退窮まったこの敵に捨て身の攻撃の準備を整えさせることになる。そのような考えは、しかし焦りばかりを生んで具体的にどのような行動に出るべきかの解答を導き出せず、やがて半透明の胴が宙を浮き、黒い頭部が歪曲する光の方を指す。

それと時を同じくして、指の上に、蛇が這うかのような感触があった。すぐさま下を見たところ、地面に置いた左手の上を這っていたのは蛇ではなく半透明な紐状の内臓の一部であり、それはクリステイアンの腹から垂れ下がったものである。

文字通り、それが手掛かりであった。不死人はその紐状の内臓を左手で掴み上げ、剣を握ったままの右手を振り被ると半透明の内臓とその下にある地面を深く貫き、また両手で柄の頭を持ちながら、上から体重を掛けて押さえ込む。

やがて哀れなクリステイアンは勢いをつけて泳ぎ出したが、内臓の端には楔が打ち込まれており、そこから中身が引き出されていく。剣を抑える両手に振動が伝わり、その度に次々に内臓が零れ落ちて半透明の胸がみるみる痩せ細り、そして最後には碌に抵抗も見せず、力を失った巨体は羽根が沈むようにゆっくりと地面の上に横たわった。

敢えて止めを呉れる必要は無かった。クリステイアンの下の両目は虚ろに濁り、上の両目は陰の取れていく太い眉に伴い、穏やかに閉ざされていった。ただ一時と言えど、彼は死に抱かれ、不死人はその身体へと近付くと、再び彼の手から聖職者のウオーハンマーを受け取る。

それから少し経つと周囲で狂ったように踊っていた光たちも落ち着きを見せ始め、異次元から徐々に元の中央広場の景色が戻りつつあったが、凄惨な戦いの爪痕は深く、到る所の家屋が見るも無残に粉碎され、石畳については無事と呼べるものがほぼ見当たらなかった。

「見事だった」

身を整えたジークドルフが隣に並び、クリステイアンの横顔を眺める。

「私は、この地の者達がどのような因果にあるのか、詳しくは知らん。ただ、この者がどんなに大きな咎を背負っていたとして、死ねずに永遠にこのままにいるが罰なら、それはおかしい。釣り合わないだろうと思う」

クリスティアンはリングレイの者であり、これが罰の類であるのかは不明であったが、本質的にジークドルフの言は正論であると言えるだろう。尤も、世界が変わってしまつた現在では「人としての」という注釈を付けなくてはならない。「人としての」価値観にそぐわないという者達が、大勢を占めるのだから。

「なんであれ、解放出来たようであつた。だが、ああ、流石に疲れたな」

肩や首を回し、骨を鳴らしながらジークドリフは瓦礫に寄り掛かり、座り込む。

「すまんが、先に行つてくれんか？　なあに、少しすれば」

そこで唐突に言葉が途切れ、騎士は深く項垂れた。まさか事切れたか、と様子を窺うと、彼は大きな軀を掻き、船を漕ぎ始めた。

何か脳の障害を疑うほどの速度で寝入つたため、念の為出血の跡が無いかどうかだけ確認したが、一応無事であるらしい。この後のことやら、礼やらを伝えるべきではあるものの、少し揺すつた程度では彼は起きる気配は無く、また他の脅威が近くにある訳でもなかつたため、不死人は騎士を放置して歩き始めた。

この中央広場に来れば、尋ねるべき者達は最低でも三人居る。

その内の一人目、魔術師コネリーが使つていた家屋へと足を運ぶと、相変わらず机に向かい続ける背を見付ける。開いたままのドアをノックしつづ彼のすぐ後ろまでやつて来ると、その背を越して机の上に、牢獄都市の最奥部にて虜囚の女から受け取つた手

書きの魔術書を置く。

位置の關係上、コネリーの表情は見えず、だが深く息を吸い込む音ははつきりと耳に残る。

「やはり、だから彼等は狂ったのか」

結晶の魔術。エルミューロクが奉じ、追求したもののようだが、何故それが狂気を喚ぶのか、具体的などころは不死人には分からず、しかしこの魔術師には何か思い当たるものがあるのだろうか。

「勿論、必要だろうから教えるさ。でももう、私はこれまでだな」

今度は、長く息を吐き出す音が埃だらけの部屋に置かれた。溜息だろう。

「これで、良かったのかもしれない。追い続け、先ばかりを見てきた私だったけれど、これからはもう少し、周りのことも見てみるよ。うん、この土地の呪いに触れてしまつては、ね」

ましてや、その果てがこの惨状である。恐れを抱くのは当然だろう。不死人は彼の選択を是とも非とも言わず、ただいくつかの結晶魔術をソウルと引き換えに修めた。

去り際。一度振り返ってみたところ、魔術師コネリーはまだ机に向かったまま、だが背凭れに身を預け、天井を眺めていた。

## 第16章 6

## 第16章 中央広場Ⅲ 6

次に訪れたのは、最早瓦礫ばかりとなつた家屋の地下にある、マサイアスの仕事場であつた。赤熱した炉はまだ生きて地下への入り口を照らしており、だが金槌の音は絶えているため、安否を確かめようと足早に階段を降りたところ、彼は椅子に腰掛けていただけで、特に変わったような印象は無かつた。

「お前か。あれから随分と経つたな」

視線が合うと、抱いたばかりの印象が移り変わった。目に力が無く、憔悴に近い状態であり、また老いたようにも見える。

「見てきたんだらう？ 俺達の業を。そうだ、この後に及んで無関係など言い逃れをするつもりはない。俺だつて、皆が帰つてくるかもしれないと聞いて、道具を振るい、馬車なんかを作つたりもしたさ。だがそれが全く間に合わず、持つて行つた馬車である糞畜生共を奴等の国から連れ去るとなつた時、反対などしなかつた。そんな気持ちは微塵も起き無かつた。今でも抑え切れない。今でも皆のことが忘れられない。自分で自分を呪つてしていると理解しているのに、ふと気を抜くと叫び出しそうになる。だが」

ゆらりと立ち上がり、金槌を握り締めた彼は階段の先にある、渦巻く空模様を見詰める。

「後悔している。だから、やるべきことはやろうと思う」

言い終えると、彼は身体を仕事場に向け、金槌を振るい始める。心ある者であればその背に何か声を掛けるか、或いは心があるからこそそつとしておくべきなのかもしれない。いずれにせよ不死人には無縁なことであり、疲弊した武器防具の修理だけを依頼する。

そうして装いを新たにすると、次に向かったのは小さな白い猫の元であった。前回の経験から、彼女にはあまり過度な期待を寄せるべきではないことを理解しており、何となれば会いに行く必要性は無いかもしれない。そのつもりで青い屋根の民家に入ると、彼女はやはり机の上に寝そべったままどこか明後日の方を向き、視線を寄越そうとはしなかった。

「ふん？ 私に何か用かい？ 今更もう、何をしても手遅れだと思いがねえ」

まるで気だるげに声を発しながら目線を流し、だがそれが不死人の方へ向くと、彼女の瞳孔が丸く開かれ、また急に身体を起こしていた。

「あんた、それ、その首から下げているものは、奪ったのかい？ いや、違うか。譲り受けた、か？ 何の値打ちも無いからね。あんた、それを少し貸してご覧よ」



どうやら小さな白い猫が言っているのは、牢獄都市の最奥部、暗い穴の底で赤いマン  
トの戦士から託された霞んだ指輪のことであるらしい。特に理由も無く輪の部分に通  
された鎖を首から下げていたものであり、仮にここで奪われたとしても実害らしきもの  
を実感するということはないだろう。彼女の言う通りに、それを首から外して机の上  
に置く。

「ああ、そうか。無念だったろう。あれは心の強い者だったけれど、或いはだからこそ  
だったか」

小さな白い猫は呟きながら右の前足を差し出し、それを指輪の表面に置くごくゆっ  
くりとした動きで往復させる。

「ほら、返すよ」

小さな足を引つ込めた後には指輪が残り、しかし色合いが少し違っているように見受  
けられた。取り上げて詳細に観察したところ、これまで霞んでいた模様が明らかになっ  
ており、それは遠吠えする犬、否、狼だろうか。

「人間とは関わりが無いところで、昔から何かと縁があるものなのさ」

気が付けば、彼女は佇まいを直していた。綺麗に机の上に座り、そして真つ直ぐに不  
死人を見詰めている。

「かつて偉大なる王に遣える騎士が一人、深淵を封じたそうだが、その時に用いた大量

の水は結果として眠りを守る断絶として働き、闇はそこで静かに生きさらばえた。そしてそれはこの地でも同じ。連中の青い泥は火が陰らずとも火を遮り、不死と怪異を産み落としてゐる」

それはこの旅の始まりにあつた齟齬でもある。火に陰りあれば不死が溢れる、とは、多くの伝承にあり、それが為に玉座がどうの、という話になつてしまつていた。ただ、それを調べに王城に辿り着いたことが悪いとはならないが。

「どこに根があるのか、その目で見えてきたんだらう？ それを絶てばいい。当然、容易いことではないがね。それと、これを持つて行くといい」

そう言うとき小さな白い猫は机から飛び降り、部屋の隅にあつた壺の一つを横に倒し、その中から金属製の何かが落ちる。拾い上げるとそれは円形の大きな飾りの付いた、だが根元から剣身の折れた大剣の柄であつた。

「そんな形でも神々の残した秘宝のようなものさ。武器としては使えないが、あの男が万が一にも失われてはならないと地下に潜る前にわざわざここに預けに来たほど、深淵に対して大きな効果を持つてゐる。使うのは最後の最後だけにしな」

即ちこれの所持が半端な所で敵に知られるような事態は避け、切り札として用いるということか。それ相応の力を秘めてゐるとして、しかし絶大な力を持った剣に呪われた者達を見てきた身としては、これを持みにすることにはやや抵抗があつた。

「最後に助言だ。この世界では薪の王ばかりが英雄のように語られ、闇との戦いに身を投じる者のことは語られないものさ。それは闇との戦いを語る事が闇そのものを語ることに同義であるが故にという理由があるが、私に言わせれば闇を打ち倒すことの方がよほど過酷で、何より道標が無い。人とは闇の中に身を置き、取り残されれば、闇に浸かろうとするか、光に縋るかのどちらかに寄り、するとたちまち気が触れてしまう」

その言葉は、不死人の記憶から様々な実体験を引き揚げ、耳の内側にこびり付く絶叫までもが想起される。

「光と闇。絶望と希望。そんなものに、あんたは関わっちゃならない。心の在り処、意志の拠り所に迷わないよう、己を灰と思え。灰の戦士として、闇に挑むんだ」

## 第17章 1

## 第17章 アリーナII 1

小さな白い猫の話は、最後の方になるとまるで託宣めいていた。しかしどんな内容であれ、以前までの膠も無い態度からすれば大きな変化であり、またそうなるに至った原因は不死人が地下からあの指輪を持ち帰ったことにある。つまり流石の彼女も藁をも縋る気持ちであったのかもしれない。

不死人はその後篝火で身体を休め、中央広場から出ると溝の溜まり池の上に架かる橋を渡り、そこからアリーナの牢舎の前にまで赴いていた。以前に通った際の梯子や鉄格子の扉などは解錠された状態であり、そのまま通行出来るようであったが、空の向こうから漂う雑多なざわめきに一度足を止め、耳を澄ませる。

数多くの声が重なったそれは人々から発せられた、ということとは万が一にも無いだろう。良くて正気を失った亡者達のものであり、だが今のこの世界ではそれすらすつかり見掛けることはなく、つまりは怪異の類と思しい。明確に敵対する者達が大勢となつて待ち構えているとなれば正面切つて進む愚を避けるべきであったが、また長い地下牢獄都市を降り、その最中に延々と刺客を贈られるよりはこの歓待を受ける方が双方にとつ

て話が早く済むだろう。不死人は二つの牢舎を通り抜けると地下道に入り、その正面にある門を開けて円形闘技場へ出る。

喝采か、歓声か。今にもその様なもので場が沸き返りそんな光景がそこにはあつた。広大な観客席には様々な者達が轟き合い、その大部分は頭部の膨れ上がった亡者達であつたが、注目すべきは虜囚の騎士や老人貴族の亡者など、かつてこの上なく互いを憎み合つた者同士が混ざり合つていた点である。リングレイの人々も、エルミューロクの虜囚達も、皆一様に天に向かつて手を伸ばしたような格好のまま、円形闘技場を見下ろしている。

そして不死人の歩く先、円形闘技場の中央ではいつかのように、鎮座する小高い何かの影があつた。

「おおーっ！ おおおーっ！ おおおーっ！」

俄かに呻きのような声が強まり、観客席の上で重い響きを残す。するとそれに応えるように、重厚な鉄が互いを長く掻き合うような音を立てながら、その巨大な影が起き上がった。

おそらく元は紺碧であつたのだろう。だが今やそれは裏返つたまま血に黒く汚れ、こびり付いた肉には筋の繊維が千切れて出来た肉芽が群生し、またその表面では細長い虫達が蠢き、未だ食い荒らし続けている。

場所柄からして、明らかに見覚えのあるその厚い甲殻は砕け散って多数に分かれ、そしてそれで全身を覆い、身を守る鎧とするのは、黒く太った巨大な芋虫であった。かつて殻の内側に潜むだけであった寄生虫。その内の一匹は成長を遂げ、中から食い破り、元の宿主たるアリーナの王の面影と言えるものは引き摺られる手足や頭部の断片のみであった。

「周りを見てご覧なさい」

恍惚とした声が上がら降る。見上げると、小高い丘のような凶体の怪虫の上には一人人影があり、それは赤黒く豪華なドレスを纏っているようだが、距離が離れているためそれ以上のことは見て取れなかった。

「あなたは一人、取り残されるつもりなのかしら？ 折角彼にさえ比肩し得るようなソウルの器の持ち主なのにね」

言葉の端々や態度に酒に浸かったような虚栄心が滲んでいたが、隠すつもりもないのだろう。観客席に詰め寄せた人々の視線を浴びているからか、自身の優位を確信しているからか。

「ふふふつ。王の器としては彼の方が遥かに上だけど。それに私、あなたが嫌いよ。だからそうして、拒み続けてくれると嬉しいわ」

観衆の呻きが高まり、調子を合わせ、重苦しい賛美歌になっていく。そしてそれを受

けたドレスの女は巨大な怪虫の上で手を翳し、その途端長い刃物を研ぐような音が響いた。

不死人は弾かれるように横に飛び、その残影を虹色の怪光線が薙ぎ払う。聞き慣れた音に身体が良く反応したからか、直撃を免れることに成功し、ドレスの女が発した攻撃の跡を見ると、どうやらそれは貫通性のものであったらしく付近の地面には深い溝が刻み込まれていた。それどころか、敵の光線は観客席にまで及んで多数の被害者を出し、だが亡者達は逃げ出そうというような素振りは見せない。そうまでして歌い続ける彼等の胸の裡には、どのような意志が宿っているのだろうか。

破裂音が鳴り渡る。ドレスの女は闇術によつて形成した黒い塊を五つ、一度自分の回りに並べ、次にはわざわざ指で標的を示すと、それは緩やかに飛び始める。おそらくは追尾能力と、攻撃力に優れた術である。またその見通しが正しいのであれば、と予測した先から彼女は手を翳し、まだ五つの黒い塊が届いていないにも関わらず、怪光線の予備動作を取っていた。

遅延を利用した、間隙を埋めた攻撃である。これを見た不死人は即座に敵とは逆方向に駆け出し、距離を取ることで怪光線の命中精度を下げようとし、するとその試みが功を奏したか、迫り来る虹色の光は歪むような軌道で行く先を薙ぐ。

と、その刹那、虹色の線に撫でられた地面が光を孕んでいた。つまり敵は全く狙いを

過たず、不死人の行く手を小爆発を起こす光線で阻み、そして背後に迫っているのは五つの黒い塊である。退路は無く、だがそれならば突き進むのみである。

瞬時にして身を翻し、後背で地面が小爆発を起こすと同時、仮初めの意思を与え、放たれた五つの黒い塊に向かって踏み込む。そして激突の寸前にその下に滑り込むと、執拗に目標を追おうとする五つの意思は、だが不死人の急激な動きに追従し切れず、地面に当たって最期を迎えていた。

追尾する闇術に対してはこれか遮蔽物を利用する方法が最適であるという答えが出ており、実践したところ今回も上手く凌げたようだが、そのような些細な勝利を噛み締めている場合ではない。ドレスの女は再び手を前に出して怪光線を放ち、上からの一方的なその攻撃は避ける以外の選択肢が無かった。

足元の地面を深く激しく抉る光線が過ぎ去り、遠くの観客席の方にまで伸びる。この隙であれば敵への接近はそう難しいものではなく、だがドレスの女は巨大な怪虫の上に乗っているため、近付いたとしてもすぐに接近戦に移れるという訳ではない。甲殻と虫だらけの肌を登らなくてはならず、それはやってみるまでもなく不可であるという限りなく確信に近いものがありはしたものの、それで得られる情報も一つや二つ、転がっている可能性もある。

怪虫に対して並行に走っていた足の向きを急に変え、唐突な挙動によつてその巨体へ



と近付き、だが芋虫は身体を激しくのたうち回らせる。その動きは明らかに不死人を遠ざけようとするものであり、圧倒的な質量差のある物体の運動を前にしてはしがみつくどころか、それ以上の接近もままならず、加えて、甲殻の隙間から数匹、人の腕の太さほどもある黒い虫が顔を覗かせており、それもまた人の接近に対する反応なのだろう。

「ふん」

上からの冷笑は、速やかに闇術の詠唱の音で掻き消された。ドレスの女は絶対の守りを得た上で遠距離攻撃を続けるらしく、不死人は五つの黒い塊に身を追われながらも急ぎその場から離れようと駆け出し、だが再び小爆発を起こす光線が逃げる先を潰しに掛かっていた。

虹色の光から身を引き、追尾する闇術を潜り抜け、だが二度目となれば僅かながら見付ける間が存在し、魔術師のロングソードが青白く光る。その詠唱はごく短く、しかし威力は至強。槍のような身体に多数の輝きを含んで飛翔するそれは亡国の狂気の象徴、ソウルの結晶槍である。

手書きの魔術書をコネリーに渡すことによつて習得した魔法であり、強い貫通能力を有するこれであれば鎧を貫き、怪虫本体に負傷を、と脳内で描いた絵図は、だが紺碧が挫く。あの甲殻は厚く、だがおそらくそれだけではない。深い海に属するがために生来、魔術に対する強い耐性を持つており、最高威力のそれですら無効化したのだと考え

られる。

「ふっ。ふっふっふっ」

ドレスの女が両の手を突き出していた。またその顔は遠目からも見て取れるほど、はつきりと喜悦に歪んでおり、だが確かに、今の全く成す術を得られていない不死人はさぞ嗜虐心を擲る獲物であることだろう。

右手から放たれた貫通性の怪光線が円形闘技場を走り、左手がそれに続く。また観客席までもが大いに巻き込まれ、アリーナ全域は阿鼻叫喚の地獄と化していたが、駆ける不死人はまだ健在であり、否、おそらく健在でいさせられている。彼女の攻撃は適当と言うよりもあまり狙いを付けておらず、優位を笠に着て相手を苦しめることに熱中しているようであった。

## 第17章 2

## 第17章 アリーナII 2

亡者達ばかりが虹色の光によって両断され、吹き飛ばされ、だがそうして飛び散る肉片は何故か沈まず、青ざめた血に漂う。やがて光線が収まりを見せ始めた頃には円形闘技場の上には膨大な数の赤黒い骨肉、内臓が浮き、それでも尚残つた者達は決して歌声を止めようとはしなかった。

旧時代の者にとつてはあまりに倒錯的なその光景を、だが切り裂こうとソウルの結晶槍が飛び、怪虫の上に居るドレスの女を襲う。が、聊か苦し紛れに過ぎたろうか。彼女は何ということも無い風に必殺の魔法を片手で掻き消し、次には両手を胸の前で結ぶ。

そして紡がれる詠唱は、女の口から発せられたものとは思えないほどに低い音声であつた。或いは亡者達の一部が詠唱を被せているのか、まるで呪詛を溜め込もうとするそれは長く、不死人はその発動を阻止しようとソウルの矢からソウルの結晶槍、闇の玉などを次々にドレスの女に差し向けるも、それに応じて上体を起こした怪虫の鎧が全ての攻撃を防いでみせていた。

「お、おおーっ！」

枯れた喉を、棘の混入した吐瀉物が逆流する。そのような想像を働かせる声がドレスの女から噴き出すと同時に、天に向かって掲げられた両手からは黒い波紋が広がり、それがアリーナの上を薄く覆うと辺りを浮いていた肉片が降り、炸裂し始めていた。

黒く空間を歪ませるような爆発に次々に見舞われ、これを塔のカイトシールドで防ぎ、走り抜けながらも思い返すのは老人貴族の亡者が用いた術である。味方の軀を利用する点や作用が同質であり、だがこちらの方が効果範囲の規模が大きい。完全に回避するのは至難であり、不意に背で爆発が起こったかと思えば、押し出された先でも肉片が待ち受けている。胸の右前面を突き抜けるような衝撃によって身体全体が回転し、そこへ足元でまた肉が弾け、不死人は軽く宙に浮く。

そうまで打ちのめされてもまだ、容赦はされなかった。腹の上で起こった爆発によってくの字に折れた身体は速度を持ち、地面の上に強く叩き付けられる。

ドレスの女は今、笑みを浮かべていることだろう。それは無論のこと、卑猥に彩られており、またそうさせたのは不死人の無力である。一つに怪虫への接近、二つに紺碧の甲殻を破って怪虫そのものへの攻撃、三つに遠距離攻撃にて怪虫の上に乗る女へ直接攻撃と、挑戦した全てには不可の結果が出ており、となれば他に手の出しようがない。

エストを飲み、治癒した身体を引き起こす。武器を構え、しかしこの先の見通しが立たない。先の三つの内、目があるとすればそれは二つ目、怪虫を何とか黙らせることだ

が、肝心の甲殻を剥がす手段というものの持ち合わせが無い。物理攻撃はあれがアリーナの王であつた頃からはじき返し、貫通性の魔法すら耐え、とすれば他に思い当たるものとして文明の徒たる人が扱う基礎的な属性、火が挙げられるが、それは青ざめた血に浸かつたこの世界で攻撃に使えるほどの威力を保つたままにいるのだろうか。

思案の成果を出せぬまま、ドレスの女がまた片手を翳すのを目にする。そして回避を繰り返すうちに、いつかは怪光線か、闇術か、或いは炸裂する屍肉に捕まり、不死人は果てるのだろうか。

「せつー やあああーつー！」

赫々とした割に、どこか凜とした印象の残る声は、しかし空に轟き渡る雷鳴と共にやってきたものであつた。直後、怪虫の横腹が落雷を受け、巨大な身体が波打つ。

その一撃を術的に言い表すなら、雷の大槍だろうか。橙の光は長い槍となつて煌々と輝き、そしてその使い手は、痩せた甲冑を着込んだ女性騎士であつた。アトラングのルシнда。フェイスガードの開いた兜から見える横顔は、やはりまだ穏やかさを残しており、戦士として成熟し切つていないようにも見える。

だがそれは見てくれのみの問題である。ルシндаの放つた雷の大槍に怪虫は強く反応しており、その痙攣は今尚収まつてはいない。そこから思うに、かつて牙猪の戦士が闇を削る者達との戦いで用いたように、雷の力は水を棲家とする彼等には弱点に当たる

属性であるのかもしれない。

「やあぁーっ！　せあぁーっ！」

女性騎士は攻撃の手を緩めなかった。二発目、三発目と雷の大槍を怪虫に振る舞い、そうなればドレスの女にとつて面白くない状況が生まれるが、不死人として呆けるのみに留まる理由は無い。赤黒いドレスの裾から伸びる手がルシンダの方へと向けられた直後、その手は闇の玉を打ち消すのに用いられた。

雷が円形闘技場の中央で太陽が落ちたかのような光を作り出す一方、不死人は彼女に向けられる悪意を牽制すべく、構えた魔術師のロングソードの先から闇の玉を飛ばし続ける。一方的な形勢はここに逆転し、程無くして怪虫は痙攣すら起こさなくなり、巨軀は息絶えたように動かなくなった。

「お久しぶりです。お元気でいらっしやるようで良かったです。あ、私のことは覚えてますか？」

すぐ隣にまでやってきた彼女には一度視線を投げながら頷いて見せ、そして間を置かずに正面へと向き直る。戦いはまだ終わっておらず、隙を見せてはならない。それを理解してか、ルシンダもまた怪虫の上の方へと意識を向け、そこから自分達を眺め降ろす者の眼差しに気付く。

「貴女、自分が何を足蹴にしているのか、理解しているの？」

純粋な敵意のみではない。憤りを含めた言葉には、しかし微笑しか返されなかった。  
「下種め」

ドレスの女はそれも聞き流しながら自身の足元たる怪虫の肌に手を置き、直後、巨大なその身体が破裂したように盛大に血飛沫を上げた。青ざめた血が赤く濁り、だがその女はなぜか返り血を浴びず、手は劍の柄らしきものを掴んでいた。

「ふうっ」

艶のある声と共に一息に怪虫の体内から劍身が引き抜かれ、しかしその有り様に一度目を疑う。全長はドレスの女の身の丈を越し、重さは体重の数倍はありそうなものだが、彼女はそれを軽々と持ち、大方闇術による助けを得てのことであろう。また折れて砕け散ったものを無理矢理繋ぎ止めたかのような劍身は歪な形状をしており、輝きの色合いも妙であった。

やがてドレスの女は遂に怪虫の上から離れると、水に沈むかの如くゆつくりと地面に降り立つ。かつて虜囚であった頃のみずぼらしい姿など面影も無く、整った顔立ちに引いた藍の紅は歪み、艶やかな笑みの美女は金の髪を揺らし、だがその手にある劍はおぞましい。親指ほどの大きさの、刃のような鋭さを持つ貝が群生する劍身は、砕けたそれぞれが赤味の筋繊維のようなもので繋がれており、それもまた生物である。深海の大劍は、彼女によってその場でゆつくりと振られ、すると劍身の貝達から白い霧のようなも

のが零れ始めた。

その白い霧、微小な生物たちは素早い動きで宙を泳ぎ、しかし不死人やルシンダには目もくれない。その辺りに散らばる亡者達の肉片を見付け、内部へと潜り込んでいった。

「失敗しても、生まれ変わればいいの」

呟きと同時に、足元から様々に声が湧き立つ。男の太い嗚咽と、女の甲高い絶叫と、老人の啜り泣きとが混じり合い、だがそれらはいずれも段々と笑い声へと変わり、そして肉片そのものにも変化が起きる。細かく泡立ち、膨張と破裂を繰り返しては裏返し、膨れ上がった真つ白な目玉が周囲をぐるりと見渡す。

亡者達は再誕を遂げ、体積の半分以上を紐状の生物に食られているかのような姿となり、宙に浮いて寄り添い、塊となるか、地上にて群れを成していた。

「この地の全ての呪いを祝福する」

赤黒いドレスが舞い上がる。

「それが私の、王妃の望みよ！」

卑しき后、アリーアナの高らかな宣言の下、生まれ変わったばかりの亡者達が不死人とルシンダに向けて前進を始めた。



## 第17章 3

## 第17章 アリーナII 3

その数は百の桁すら凌ぎ、打ち寄せる姿は軍勢と呼ぶに相応しい威容を見せるが、ソウルの大剣がこれに即座の応戦を見せていた。横に長く振るわれた青い剣は先頭集団を薙ぎ払い、勢いを押し留めた一瞬、不死人のすぐ後ろから奇跡の術が発動される。

聖鈴の音が無かったからか、それは予期せぬものではあったが、位置からして術者が女性騎士であり、ならば不利に働くことはないという確信はあった。事実、彼女の唱えた奇跡、緩やかな平和の歩みは殆どの再誕の亡者達の歩みを遅いものへと変え、雪崩れ込まれて終わるしかなかった二人の命脈を繋ぎ、しかしまだ完全に繋ぐには至っていない。

今の一時は術によって安全を確保しており、その効果時間が終われば圧殺されるが、かと言ってこれ以上緩やかな平和の歩みを恃みにするは愚策である。この術は使用者たるルシンダと、そして不死人の歩みをも遅くしてしまうため、この状態は遠距離攻撃に対して無防備であり、従って別の手段によって軍勢を牽制しなくてはならなかった。

魔術師のロングソードに魔力が集まる。その量は平均的な術のそれよりやや上とい

う程度であり、そして脳裏に描くそれは不死人によつて華を失つた女から齎されたものである。輝きながら回転する氷のような、浮遊するソウルの結晶塊は宙に撃ち出された後、次々に矢を吐き出しながらその場に停滞し、また二つ目、三つ目の結晶塊がその後について再誕の亡者達を攻撃し続ける。

その矢が当たつたとして、決して致命傷には及ぶものではなく、だが程無くして緩やかな平和の歩みの効果も途切れても、敵は前進を躊躇つていた。均衡が生まれ、どうか勝負の形になつたと言える。

「私は上を！」

その声が場を通り抜けると雷鳴が轟き、槍となつたそれが宙で塊を形成する亡者達に突き刺さり、四散させる。その際にはやはり鈴の音らしきものは無く、一度盗み見るように観察してみたところ、彼女の手には聖鈴ではなく布きれのようなものが握られており、またそれは白を基調に赤を差したものであつた。

布きれは彼女が詠唱する度に雷の大槍を織り、投げ込まれては亡者達の塊を端から撃破し、それを見る限り一先ず上方からの敵は任せてしまつても問題は無いだろう。不死人は浮遊するソウルの結晶塊を絶やさないう気を持ちながら、緩やかに躡り寄りつつあつた地上を歩く敵集団に向けてソウルの大剣を薙ぎ払い、だが既に注意は眼前で両断され、斃れていく者達へは向けられていない。やがて彷徨つていた視線は赤黒い群れ

の奥にそれと同じ色合いをしたドレスを見付ける。

アリーア又は深海の大剣を左右へと振っていた。その動きは祈禱のように、まるで世俗の者には理解出来ぬ礼を払っているかのようだが、しかし剣から零れる白い霧は怪異である。広く蠢き、肉片となった者達を次から次へと作り直し、生まれ変わりを助けて戦場へと戻す。またそれに要する時間はごく短く、不死人とルシンダが亡者達を崩すよりも彼等がその数を増やす方が早いため、これを中断せしめることが可能であれば、そうしない理由は無い。

未だ剣の動きを止めぬアリーアと不死人との間には多くの亡者達があり、射線は完全に遮られていたが、それは問題にはならない。短い詠唱の後、魔術師のロングソードが放ったソウルの結晶槍は最前列に居た再誕の亡者を貫き、その後ろの者も貫き、更にその後ろの者も、と勢いを全く衰えずに飛翔し、しかしそれがいざ迫ると、王妃は豪奢なドレスの広がった裾を細くしながら横方向への瞬発的な回避を見せる。

貫通する魔法と言っても命中までにはそれなりに距離がある上、斃れていく亡者達によつて軌道が読まれてしまえば届かなくとも当然か。今度は軍勢に向けてソウルの結晶槍を放ち、その詠唱が響かせた奥行きのある音を耳にしながら次に繋げようと思考が向きを変え、しかしそれよりも一層下の意識では耳が拾い上げた違和感が徐々に輪郭を露に成していく。今の詠唱の音は奥行きがある、というよりも、重なっていたのではあ

るまいか。

横に飛び退こうとした直後、青白い輝きを含む光が迫る。それは足止めされている再誕の亡者達を向こうから貫きながら飛び出し、不死人は胸を撃ち抜かれて臓物を晒すところを、無理にでも身体を動かして左肩を貫かれるに留める。それでも負った被害は甚大であり、左腕は機能せず、その上ここぞとばかりに亡者達は歩みを進めて迫っていた。

「やあつー！」

その一拍の間を埋めるため、ルシンダは宙に投げける筈であつた雷の一つを地上へと向けて炸裂させ、そしてそれは不死人が崩れかけた態勢を取り戻すに十分な時間を稼いでいた。詠唱し、構えたロングソードを振り抜き、ソウルの大剣によつて数十もの亡者達を斬り伏せる。

その後は浮遊するソウルの結晶塊を継ぎ足して牽制を厚くすると、一度剣を足元の地面に突き刺し、離れたその手でエスト瓶を掴み、身体を治癒する。その最中、攻撃が訪れることはないかと気を張り、特に詠唱の音を拾えないかと耳に神経が集う。

先の負傷はソウルの結晶槍によるものである。まるで自身が放つた術を跳ね返されたかのようなあつたが、詠唱の音のタイミングや、そして彼女の出自から推察するに、それは事実ではない。おそらくは闇術も、深い海の術も后にとつては受け取つたばかりのものであり、むしろ漸く本領を見せたということになるのだろう。先程の不死人からの

攻撃に対し、意趣返しをしたつもりであったのだろうか。

だがそれが元でアリーアヌが決定的な好機を逃したのであれば、まだ戯れや侮りがあったことを喜ぶべきか。態勢が整うと剣を握り直して出現している浮遊するソウルの結晶塊の数を確認し、不死人はまたソウルの結晶槍を亡者達の戦列に投げ込む。軍勢は尽きず、肉の群れは斃れ伏す側から沸騰したように肉体を再構成して立ち上がり、また王妃の急襲への警戒にも留意しなければならなかったため、ルシンダ共々敵に押されつつあった。

そのような時、二人の助けとなるものが唐突に訪れた。差し込んだ白い光の線が亡者達の奥から現れ、それはうねるような軌道を描きながら軍勢の間を走り、結晶を散らす。

「くっー」

舌打ちでなかったところを見るに、やはり彼女は清廉な性質であるらしい。ルシンダと、そして不死人は左右に身体を飛ばし、迫り来る王妃の結晶魔術、白竜の息を回避する。その攻撃は再誕の亡者達も多く巻き込んだものであったが、しかし二人の窮状を慮り、本当に助けるために送り出されたものではない。そこに生まれた結晶の道は円を描くような軌道で足場を狭くしており、またこの直後、遠方より水に沈めた長い刃物を一息に研ぐような、独特のあの音が響いた。

闇に輝く、虹色の光線が王妃の掌より生まれる。撫でた地面から小爆発を起こし、自

らの臣下達を吹き飛ばしながら二人に迫ったため、これに対応するべく左右に散開するようにしてそれぞれ回避行動を取るが、どうやらアリーアヌが向ける敵意には偏りがあるらしい。怪光線はまず不死人の後方を断ち、前方を断ち、そして左右を固まった結晶の道によって阻まれているともなれば、逃げ道は無かった。己む無く塔のカイトシールドを前面に構え、その表面で虹色の光を受けて小爆発の衝撃を抑える。

それedyouやく光線は過ぎ去り、不死人は盾の端から顔を覗かせると、待つていたのはまた虹色の光であった。衝撃で足を鈍らせることが目的であったか、それでなくともまだ先程の小爆発やら結晶の道やらが収まっておらず、かと言ってあと数瞬後には直撃するであろうそれは、詰めの一撃である。選択の余地などほぼ無く、カイトシールドで身を守りながら結晶の方に飛び込み、どうにか怪光線を躲す。

やはり貫通型であったのか、亡者達を縦に両断しながら怪光線は通り抜け、その一方でダメージを負い、しかし命脈を繋ぎ止めてみせた不死人は散つていく結晶の中でエストを飲む。

あまりに防戦一方である。再誕の亡者達は敵から味方からと続々と屠られていくものすぐに再生しており、未だ底は見えず、そしてこれを打ち破らなければアリーアヌへ攻撃を届かせることは難しい。また王妃は多くの場合、亡者達の奥におり、彼女にその気が無くとも位置の特定は困難を極め、再誕を促す、深海の大剣を左右に振る動作の

阻害も現実には不可能である。

傷の塞がりを確認し、魔術師のロングソードを構える。策はまだ打ち立てずとも、眼前の敵は前進を続けており、悠長なこととはしてられない。またあのは小休止なのか、一時的に攻撃が止んでおり、この機に不死人は詠唱。再度いくつかの浮遊するソウルの結晶塊を宙に出し、それが吐く矢が亡者の大群を牽制している中、自身はまずソウルの大剣を横に振り抜き、敵の前列を斬り崩し、次いで放つていく結晶槍が横列から順に削り取っていく。

「やあああつー！」

雷の音は耳を劈くものだが、ルシンダの声にはそれにも勝る気迫が込められていた。空に浮いて押し寄せる亡者達を近付く者から順に落とし、しかしそれがどれだけ見事な勇姿であれ、やはり防戦一方であることには変わらず、状況は推移しない。少なくとも良い方向には。